『The vampire Apocalypse』(ヴァンパイア黙示録)

天野陽堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『Ｔｈｅ　ｖａｍｐｉｒｅ　Ａｐｏｃａｌｙｐｓｅ』（ヴァンパイア黙示録）

【Ｎコード】
Ｎ０５９４Ｚ

【作者名】
天野陽堂

【あらすじ】
ー世の中には、コイツだけは怒らせちゃならねえって奴が何人かいる。
自分に余程の自信が無いのなら、喧嘩を売っちゃならねえ、肩をぶつけるのもいけねえ、目だって合わせちゃいけねえって奴だ。
そう言う奴の一人がこの俺、御子神恭也さんだーー。
最初は、ただのガキ同士の喧嘩の筈だった……。
ワガママで狂暴、大の女好きの主人公“御子神恭也”は、

ある喧嘩を切っ掛けにヴァンパイアとの闘争に身を投じていく事になる。

この国の闇に暗躍するヴァンパイアに対し、これを迎え撃つ政府直轄の極秘組織と密教の総本山である高野山が暗闘を繰り返すなか、事態は政府や人間社会全体を揺るがす大事件へと発展して行く。

この国と、人間社会の存続を根底から揺るがす『真の神宝』とは。

序盤の軽いノリから、章を重ねる毎にハードな内容になっていきます。

序章（前書き）

登場人物一覧

登場人物が増えてきたので、ここで登場人物の紹介をしておきます。（ただしネタバレを少なくする為に、ここで紹介する登場人物は最小限に止めています。今後新たな登場人物が増えた場合、定期的に加筆・修正を行います）

【御子神恭也側】

◎御子神恭也（主人公）

都立城北高校三年生。満十七歳。

バイトで、ＢＡＲ『ヘブンズ・ドア』のバーテンと近所のキャバクラやラウンジ等飲み屋の用心棒をしている。

性格　：凶暴・ワガママ・大の女好き

趣味　：パチンコ・パチスロ。

かなりのヘビースモーカー。

自由をこよなく愛し（ただのワガママ）街中の不良達から、“金髪の悪魔”と恐れられる街で最強の不良。

ある喧嘩を切っ掛けにヴァンパイアとの抗争に巻き込まれて行く事になるのだが、ある意味それは偶然などではなく、“必然”であった。

◎李周礼（仙道士）

御子神恭也の養父。

日本、台湾のみならず、中国武林からも“武神”と呼ばれる程の中国拳法の達人であると同時に、ヴァンパイア達にもその名を知られた稀代の仙道士。

『内調』の佐々木や久保と旧知の仲たが、謎が多い人物。

◎当麻獣吾（獣人）
　獣人族の生き残り。
　李に会う為に岐阜の山奥から出てきた。
　ある事件により、ヴァンパイアを憎んでいる。

◎森下陽子（大家の娘）
　恭也が、唯一頭の上がらない女友達。
　父親の影響で幼い頃から武術を学び、並みの不良では束になっても敵わない程の腕前。
　何かと独り暮らしの恭也の面倒を看ては喧嘩している。

◎森下勇三（大家）
　陽子の父親。
　李とも旧知の仲で、“玄心流”と言う武術の道場を営む傍ら、恭也のアパートの大家でもある。
　恭也の事情を色々と知っているらしい。

◎黒田鉄二（親友）
　街最強の暴走族『ブラッディ・クロス』のリーダーで、男の名前すら覚えない恭也の、唯一にして無二の親友。
　恭也に劣らぬ強者で、喧嘩は強いが儀に厚く仲間思い。
　以前ヤクザとのトラブルで恭也に助けられ、それを今でも感謝している。

【『内調』＆amp;『C・V・U』】
◎佐々木一茂（『内調』の主任）
　エリート集団である『内調』の中でも、唯一『C・V・U』の実働部隊からの叩き上げで、戦闘のプロフェッショナル。
　李とは、旧知の仲。
　部下や上司の久保からの信頼が厚い。

『内調』の主任と言う立場でありながら現場主義者で、肝心の情報管理や調査の仕事は殆ど部下達に任せている。

◎久保敏臣（『内調』の室長）
『内調』を統轄する責任者。
政府・各省庁・　主だった民間企業にも太いパイプを持つやり手。
李とも旧知の仲で、エリート組ではない佐々木を主任に抜擢するなど、佐々木に絶大な信頼を寄せている。

◎水野清彦
『内調』の副主任で、生粋のエリート組。
情報処理能力に長けている。

◎杉本
『C・V・U』の現場捜査官
不破の先輩で優秀な捜査官。

◎不破
『C・V・U』の現場捜査官
杉本と共に優秀な捜査官。

【高野山】
◎慈海（阿闍梨）
高野山で阿闍梨の位を持つ老僧。
李とは旧知の仲らしい。

◎円角（高野山三儀天）
高野山でも“三儀天”と呼ばれる特殊な役職を就く若者。
他にも大角・小角と言う仲間がいるらしい。

慈海や座主の命により、真の天叢雲剣の探索の為に御山を降りる事になる。

【夜の眷族】

（ヴァンパイア）

◎闇御前（貴族）

この国に住む全ての夜の眷族の頭目。

古来よりこの国の闇に暗躍し、現在でも政財界や裏社会に絶大な権力を有する老人。

◎宇月光牙（貴族）

闇御前の実の息子。

ヴァンパイアのダミー企業であり、絶大な資金源でもある『帝都グループ』の実質的支配者。

慇懃な物言いで冷酷非情な性格を持つ。

◎夜叉姫（貴族）

闇御前の実の娘にして、光牙の姉。

美しく妖艶な美貌の持ち主。

闇御前の命により八十年の永き眠りから目覚める。

◎柳生十兵衛三厳（生成り）

ＴＶの時代劇や映画・小説等でも有名な伝説の剣豪。

ヴァンパイアとなり現在まで生き続け、闇御前のボディーガード兼約定を破った同族を狩る特務部隊の隊長を務める。

◎ショウ（屍鬼）

本名：飯沼彰二

闇御前が、政府と定めた約定を破り、晶子や村田をその牙に掛ける。

◎斎賀
光牙に支える謎の男。

◎藤巻
光牙に使えるファミリア（使い魔）の一人。
人間ではあるが、頭が切れ光牙のブレインの一人である。
年齢的にははまだ若いのだが、光牙の第一秘書と言う『帝都グループ』の中でもかなり高い地位に居ると思われる。

【その他】
◎高木晶子
ライブの帰りにヴァンパイアであるショウ（飯沼彰二）に血を吸われヴァンパイアと化す。
陽子の同級生で、恭也とも知り合いの仲。

◎村田浩平
恭也との喧嘩に敗れ、その後通り掛かったショウと晶子に血を吸われヴァンパイアと化す。

◎シゲ
本名：宮内茂
恭也や鉄二と同級生で、鉄二率いる『ブラッディ・クロス』の特攻隊長。

◎マスター
恭也が、バイトしていたＢＡＲ『ヘブンズ・ドア』のマスター。

設定資料

◎【内調】

『内閣情報調査室対吸血鬼特務分室』の略称。

内閣府直属の超極秘の特務機関で、便宜上『内閣情報室』に属してはいるが、命令系統も職務も全く異なる別組織。

霞ヶ関の総理府ビルの地下にある対ヴァンパイア専門の情報機関で、下部組織である『C・V・U』を統轄し、命令・情報の供与・管理等を主な任務としている。

職員の大半がエリート組で、コンピューターや情報管理・調査のエキスパートである。

また、時にヴァンパイアの存在を秘匿する為に、世間に対し情報操作なども行う。

◎【C・V・U】

『カウンター・ヴァンパイア・ユニット』の略称で、防衛省の市ヶ谷駐屯地の中に本拠地を置いている。

『内調』の下部組織で、捜査班・実働部隊・科学検査局・情報部等の部局に別れており、その存在は市ヶ谷（防衛省）の関係者には公然の秘密となっているが、詳細を知る者は上層部の中でもほんの一握りの人間しか知らない極秘の部署。

捜査班は警視庁から、実働部隊は自衛隊の各部隊からと、その特異な性質上他の省庁から優秀な人間だけを極秘に引き抜いた職員ばかりで構成されている。

◎【夜の眷族（ヴァンパイア）】

闇御前を頂点とするピラミッド型で構成される独自の社会を形成している。

不死に近い肉体と異常な再生能力を持ち、スピードもパワーも人間とは桁違いの能力を有する。

ただし生命活動を維持する為にも、再生能力を使う為にも、

“渇き”と称される吸血衝動を抑える事は出来ない。
“渇き”が生じた場合、麻薬中毒患者の禁断症状の何十倍とも言われる強烈な苦痛に苛まれ、理性を失い悪鬼と化すだけでなく症状が進めば死に至る事もある。
貴族・生成り・屍鬼等の種類によって弱点に多少の違いはあるが、基本的に心臓を完全に破壊されるか、脳を破壊されれば確実に死亡する。

【貴族】：生まれながらにしての生粋のヴァンパイア（純粋種）。
太陽の下でも活動可能で、不死に近い肉体と異常な再生能力を有し、更に人間とは掛け離れたスピードやパワー、そして特殊な能力を持っている。
ただし、肉体的には少しずつ老いて行く為に百年づつ眠りに付くのが慣わしとなっている。
脳を破壊されると死亡する点は他のヴァンパイアと同じたが、心臓を破壊されても完全破壊でなければ復活する事が出来る。

【生成り】：人間を呪術等の特殊な方法で転生させたヴァンパイア。
貴族と同じく太陽の下でも活動可能で、ほぼ貴族と同じ能力を持っているが、特殊能力に関しては貴族より遥かに劣る。
その数は、貴族程ではないが非常に少なく、夜の眷族の中でも幹部や重鎮クラスに属している。

【屍鬼】：ヴァンパイアによって生き血を吸われ、死に至る直前にヴァンパイアの血を飲む事でヴァンパイアに転生した者。
貴族や生成りと違い、既に死人である為に一応不老不死だが、貴族や生成りと違い太陽の陽光に当たると、全身焼け爛れて死んでしまう弱点を持つ。
また人間離れしたスピードやパワーを有しているが、貴族や生成りより遥かに劣り、特殊能力も『誘眼（チャーム）』しか持っていない。

映画や小説等に出てくる一般的なヴァンパイアは、この屍鬼がモデルになっていると思われる。

◎その他

【餓鬼】：通称ゾンビ。

ヴァンパイアによって生き血を吸われた際、ヴァンパイアの血を飲まなかった事で屍鬼に成る事が出来ず、そのまま死に至った人間は魂を呪われ、ヴァンパイアウィルスにより動く死体……、即ちゾンビと化してしまう。

身体が腐り果てて活動出来なくなる迄の間、“喰う”と言う本能のままにさ迷い、人間を見付けては襲い、喰らい続ける。

意思もなく動きも鈍いと言う欠点を持つが、脳や脊椎を破壊されない限り活動し続ける事が出来る。

ゾンビに喰われたり、噛まれた者は、全てゾンビと化してしまう為に、ねずみ算式にその数を増やして行く。

【ファミリア】：使い魔

使い魔と呼称されているが、実際にはヴァンパイアに支える人間の総称である。

悪魔崇拝者・ヴァンパイア崇拝者等が、将来ヴァンパイアに成りたいが為にヴァンパイアに支え、自らの血を供与したり、支えるヴァンパイアの為に身の回りの世話や運転手、他にも殺人・破壊及び工作活動・スパイ・証拠や死体の隠滅や破棄等、様々な非合法活動を行う。

【帝都グループ】

本来の総帥は闇御前なのだが、現在では息子の光牙が実質的に支配している日本でも有数の巨大コンツェルン。

様々な業種の企業を傘下に持ち、政財界だけではなく、裏社会にも太いパイプを持ち、絶大な権力と豊富な資金源を有し、日

本の闇を支配していると言っても過言ではない。
その莫大な資金と権力は、この国のヴァンパイアの活動の基礎となっている。

序章

序章

1

茹だる様な夜であった。

空は、分厚い雲に覆われて星一つ見えず、街の灯りは不気味さを一層際立たせるかの様に夜空を照らし上げている。

濃く湿った濃密な闇が、まるで物質化しているかの如く街にズシリと重く圧し掛かっていた。

幸い雨はまだ降り出していないが、一滴でも零れ落ちたが最後、堰を切った様に降り出す事はこの雲を見れば誰の目にも明らかだった。

街を……、

ビルの間を……、

そして人と人の間を……、

生暖く湿った風が、まるで濡れた舌で舐めるかの如く纏わり付きながら流れて行く。

七月の初旬……。

梅雨の只中ともなれば毎年同じ様なものだろうが、この日はやけに重苦しく、また禍々しく感じられた。

二十三時三十分……。

深夜と呼ぶには些か早い時刻だ。

通りには未だ人が溢れ返っている。

家路を急ぎ、赤ら顔でタクシーを待つサラリーマンやＯＬ達。

酔っ払って道に座り込む若い女。

上司への不満を声高に叫ぶ千鳥足の中年男達。

派手な化粧に露出度の高い服を纏い、ナンパされるのを待つ中高生と思しき少女達。

ビルの陰や細い路地裏で、違法なドラッグを売り捌く外国人。

他にも、喧嘩・売春・恐喝・窃盗・そして殺人……。

何でも“アリ”だ。

危険と快楽はいつも隣り合わせで、次の瞬間には自分がその犠牲者になるやも知れぬ現実を、人々はその日の快楽に酔いしれ、平和を貪る事で忘れてしまっている……。

「ねえっ、仕事は何してるの？」

少女は、自らの細い腕を男の腕に絡めながら上目遣いに訊ねた。

ブラウンに染められた髪が、緩やかな曲線を描きながら肩の上で柔らかに揺れ、派手な化粧に隠されてはいるがその化粧の下にはまだ十代の幼さが見て取れる。

総レースの白いキャミソールに股上の浅いブーツカットのジーンズを穿き、ピンクのリボンを飾ったカゴ風のバックを肩に掛け、男に寄り添う様に歩いていた。

好奇心旺盛な二重瞼の大きな瞳が、ビルの照明に照らされてきらきらと輝いて見える。

「ねえ、聞いてるの？」

少し怒った様にもう一度聞いた。

「ああ、聞いてるよ」

男は、ぼそりと呟く様に答えた。

少しダボついた黒い長袖のシャツのボタンを胸の辺りまで外し、腿にピッタリと張り付く様な細身で光沢のある黒い皮のパンツを穿いている。

足には、これまた黒い皮のショートブーツを履いていた。

全身黒ずくめだ。

全身に黒色を纏っている為か、露出している男の顔や胸が異様な程白く見える。

いや、最早白いと言うより青白くすら見えた。

実際に、うっすらと血管まで浮いて見える程だ。

だが、ひ弱さはまるで感じさせなかった。

細面で頬骨が少し浮き出た顔はむしろ精悍さを湛え、シャツの間から覗く白い胸も決して分厚くは無いが、無駄な贅肉が一切無く引き締まっている。

この白い肌を一枚剥いだそこには、獰猛な獣が牙を覗かせる様な、そんな野性味すら感じさせた。

肩まである長い黒髪は、一歩間違えば蓬髪にも見えるが、それがこの男の野性味に色を添えている。

一重で切れ長の瞳は鋭くも流麗なラインを描き、薄い唇はまるで口紅を塗った様に紅い。

かなりの美男子であった。

歳は二十歳を幾らか過ぎた頃であろうか、しかし若く見えるその風貌の裏には、何所か歳に似合わぬ老獪なものを感じさせた。

名前は“ショウ“と言うらしい。

苗字は知らない。

本名かどうかも分からない。

無論何歳で、仕事は何をしているのか、何所に住んでいるのかな

ど全く分からない。

何故なら、この男とは今知り合ったばかりなのだ。

少女の名は高木晶子。

晶子は、都内に住む私立の女子高校の三年生だ。

最近ハマって追っ駆けをしているインディーズバンドが、今宵ライブハウスでライブをやっていたのでそれを観に行った帰りにナンパされたのだ。

一緒に観に来る筈だった友達は、彼氏の誘いを断りきれずドタキャンされてしまった。

友達はそのバンドの然程ファンでもなかった為に、最初から一人でも観に行く覚悟はあった。

長いアンコールの後ライブが終わり、一人地下鉄に乗って自分の住んでいるこの街まで帰って来たのだ。

駅を出てどす黒く澱んだ空を見上げた瞬間、後ろからふと声を掛けられた。

驚いて振り返ると、この男＝ショウがクールな顔に涼しげな笑みを浮かべながら立っていたのである。

晶子は、一見お嬢様風で顔も可愛く、スタイルも良い為に実際モテたし、遊びに行くとよくナンパもされた。

だが晶子は、同年代の男がどうしても子供に見えてしまう為好きになれなかった。

別に見た目ほど大人しい訳ではない。

男は勿論知っていたし、少しファザコンの気がある晶子は、ライブへ行くチケット代や服を買う為に趣味と実益を兼ねて自分の父親程の年齢の男性に“売り“、即ち援交をした事すらある。

無論罪悪感はあった。

親には勿論、親友にさえ“売り“の事は内緒にしていた。

そう言った意味で、ショウは晶子の対象にはならない筈であった。

しかし目の前に立つこの男は、自分の周りにいる男達とは明らかにどこか違っていた。

どこがどうと言葉には表せないが、どこかが……、いや根本的に何かが違うのだ。

顔立ちは丹精で美しく、この蒸し暑い季節に黒尽くめ服装は少々異様ではあったが、この男の持っている雰囲気に妙に合っていた。

服装の趣味を除けば、今流行のイケメンである事には違いない。

しかも、見た目の年齢に似合わぬ風格の様なものさえ感じさせる。

実際にはナンパされているのだが、この男にナンパと言う行為はどこか似つかわしくないように感じられた。

いつもなら“ツン”と鼻を鳴らして無視をするか、一言で軽く蹴散らす所だが、晶子は男の雰囲気に飲まれ少し戸惑いの表情を見せた。

「なあ、良い店知ってるんだけどこれから行かないか？」

ショウは、照れる事無く晶子の目を真っ直ぐ見据えて言った。

ショウのクールな瞳の奥に妖しい光が揺れている。

晶子は、頭の芯が熱くなるのを感じた。

鼓動が早鐘の様に鳴っている。

晶子は、脈打つ鼓動がショウに聞かれるのじゃないかと左胸を庇う様に押さえた。

ショウは、そんな晶子を見透かした顔で唇の端を吊り上げると、右手で優しく晶子の髪に触れた。

流れる仕草で左肩にゆっくりと手を置き、次の瞬間そのまま静かに晶子の背中へ腕を回すと、いきなり晶子の身体を力強く引き寄せた。

驚いた晶子の顔がショウに近付く。

抵抗する間も無かった。

あまりに大胆で、しかも一瞬の出来事だった為に面食らったせい

もあるが、何より抵抗する気持ちがどこかに喪失していたのだ。

ショウは、晶子の身体を引き寄せながら自らの顔も晶子の顔へと近付けた。

「素晴らしいトコへ連れてってやるよ……」

晶子の耳元へ唇を近付けると、甘い声で囁いた。

晶子の全身を熱い血が駆け巡った。

ショウの逞しい腕の中で、晶子は“ブルッ”と身震いをした。

鼓動が更に早まり、秘部が少し潤みを帯びている。

これまでナンパは幾度と無く経験したが、こんなナンパのされ方は初めてであった。

会話も……、いや、声を掛けられてまだ返事すらしていないのだ。

それなのにこの早すぎる展開は一体……？

「あっ、ああ……あの……」

震える声で必死に言葉を搾り出そうとしたが、一向に言葉が出ない。

「心配しなくていいよ。とても素晴らしい所だからね……」

ショウは、尚も甘い声で殊更優しく囁いた。

「わ……、分かったわ。ど、何所へでも連れてって……」

晶子は、ショウの腕の中で何とか搾り出す様に言った。

ショウは、引き寄せた身体を引き離し、再び晶子の瞳を探る様にじっと見つめた。

そして何かを確認した様に今度は下卑た笑み浮かべた。

「じゃあ行こうか……」

そう言うとショウは、勝手に街へと歩み出した。

晶子は、慌ててショウの後を追った。

ショウの横に並ぶと、晶子は歩く速度をショウに合わせた。

ショウの歩みは意外に早く、付いて行くのに精一杯だ。

ーー私、どうしちゃったんだろう?

一瞬微かな思いが頭を過ぎったが、すぐに頭に靄が掛かった様になり、その思いは忘却の彼方へと霧散して行った。

「ねえ、名前は何て言うの?」

晶子は、ショウのクールな横顔を見つめて言った。

「……ショウ……」

ショウは、ぼそりと呟く様に答えた。

「へぇ〜、ショウって言うんだ…」

晶子は、自分に少し戸惑いを覚えええながらも、ショウの腕に自らの腕を絡めて行った。

二人は、未だ騒がしい夜の街を寄り添う様に歩いた。

晶子が問い掛け、ショウがぼそりと答える。

このスタイルは終始変わらなかった。

その間、何度もこの風変わりなナンパや初めて味わうこの理解不能な感情、更には自分からナンパを仕掛けてきたのに、一向に自分から会話をしようとしないショウと名乗るこの男の態度に迷いや疑問が生じたが、その度に考える傍からその思いは霧散して行く。

どうも思考が続かなくなっているようだ。

そうこうしている間に、気が付いたら騒がしかった街の喧騒を抜け、ひっそり閑散としたオフィス街に出ていた。

先程までの駅前の繁華街とは違い、こんな時間では人通りも殆ど無い。

車はそれなりに走ってはいるが、どの車も先を急ぎ通り過ぎるだけだ。

通りには無論街灯が点いているが、駅前の繁華街と違ってネオンも無く、ビルの照明やオフィスの明かりもこの時間では既に消えてしまっている。

月明かりさえ無い空のどす黒さも手伝ってか、時折通る車が無ければさながらゴーストタウンと見紛う程だ。

晶子は、一瞬不安を感じた。

ショウは、そんな晶子を他所に広い通りから横の路地へと歩を進めて行く。

腕を組んでいる為、晶子は引かれる様にショウに付いて行くしかなかった。

今歩いて来た大通りから一つ裏の路地に入った瞬間、晶子は“ハッ”と我に返った。

ーーこの通りは良く知っている……。

ーーこの路地の先の小さな印刷工場は、父が長年勤めている工場だ。

ーーこんな場所に、この時間開いている店など一件も無い筈だ……。

次の瞬間、頭の中を覆っていた霧が徐々に晴れて行った。

ーー何故私こんな所に……、何故この人と腕なんか組んで……、何故今まで何も変に思わなかったんだろう……、何故……。

次々と正常な思考が戻ってくる。

晶子の心に、大きな不安が頭を擡げてきた。

頭の中を覆った霧を超える不安を、リアルに感じ始めたからだ。

「ここって……、わ、私、一体どうして……」

晶子は明らかな恐怖と戸惑いの色を浮かべ、不安に身を震わせながらゆっくりショウから離れた。

「あ～あ、もう我に返っちゃったのか。やっぱ俺の『誘眼』（チャーム）じゃこんなモノか～」

ショウは、悪戯が見付かった子供の眼で、唇を下品に歪めながら言った。

もうクールだったショウの面影はどこにも無い。

晶子は、イヤイヤをする子供の様に首を左右に振り、怯えた表情で一歩、また一歩と後ずさった。

ショウは、晶子のそれに合わせる様にゆっくりと歩み寄って来る。

晶子の目前まで迫った時、ショウの瞳が再び血の色に妖しく光った。

その紅い瞳を見た瞬間、晶子は意識がふっと遠のくのを感じた。

全身の力が抜け膝が折れる。

晶子は、その場に崩れ落ちそうになった。

ショウは、直ぐ様抱き止める様に晶子の身体を支え、晶子の耳元へ唇を寄せた。

「良い娘だ。これから素晴らしい世界へ連れて行ってあげるよ……」

ショウは、意識が朦朧としている晶子に優しく囁いた。

そしてぐったりとしている晶子を横から支える様に抱き抱えると、灯りの消えた雑居ビルの陰へと連れ込んだ。

もう抵抗する力も大声で叫ぶ力も出ない。

朦朧とする意識の中で、晶子は必死に助けを呼んだ。

ーー誰か……、誰か助けて……。

ーーな……何をするの……、助け……て……。

ーーお……願……い、止め……て……。お……父さん……、お……母……さ……ん……。

だが思いは声にならなかった。

意識がどんどん薄れて行く。

晶子の瞳から一滴、また一滴と涙が頬を伝った。

「くくく、その恐怖に怯え泣いた顔も可愛いね……。でも泣かなく

て良いんだよ。君はこれから素晴らしい世界の住人になれるんだ。永遠にその若さのままでいられるんだよ」

ショウは、下卑た笑みを浮かべながら晶子の耳元で囁くと、ゆっくりと晶子に覆い被さって行った。

晶子の身体がショウの背中で見えなくなる。

ショウは、覆い被さる様に晶子を抱き締めると、晶子の頬を濡らす涙をその紅い舌でべろりと舐め取り、そのまま晶子の首筋へ顔を持って行った。

抱き締めた左手で晶子の首筋を触り、脈打つ血管をその指で確かめると、“ぐびり”と喉を鳴らし顔を近付けながら大きく口を開けた。

見ると、開いた口の中に鋭く伸びた犬歯が覗いている。

ショウは、晶子の首筋に鋭く伸びた犬歯を迷う事無く“ずぶり”と突き立てた。

晶子の首筋に鋭い痛みが走った。

ショウの腕の中で晶子の身体が“びくん”と跳ねる。

晶子の身体は小刻みに震えた。

ショウは、身動きが取れぬ様震える晶子の身体を強く抱き締め、首筋から溢れ出る血をゴクゴクと喉を鳴らして飲んだ。

ショウの黒い影の向こうに、薄っすらと滲むように見えていた街灯の灯りが、更にぼんやりと霞み暗闇に包まれていった。

晶子の意識は暗黒に落ちた……。

その瞬間、今起こっている惨状を隠すかの様に、息を止めていた雨が堰を切った様に音を立てて激しく降り始めた。

2

2

“ドサッ！”

音を立て、男は冷たいアスファルトに転がった。

握っていた鉄パイプを地面に転がし、苦悶の表情を浮かべながら両手で腹を押さえのた打ち回っている。

鉄パイプなんか振り上げて、腹をガラ空きにしたまま無防備に突っ込んで来やがるからだ。

鳩尾にひと蹴り、綺麗に入れてやった。

男は、リバースした物を吐き出しながら苦しそうに呻いている。

まだ十六・七歳の金髪のガキだ。

ド派手な金髪に黒のタンクトップ。

それにブカブカの迷彩パンツ。

ギャング気取りのクソガキ……。

あんまりゲエゲエ煩ぇから、手で押さえている腹へ構わずもう四・五発蹴りをぶち込んでやった。

金髪のガキは、そのまま失神して動かなくなった。

ーーへっ、ざまあみろ！

奴のゲロが付いた靴の裏を、既に動かないガキの服にグリグリと擦り付けて綺麗に拭いてやる。

俺の靴に汚ねぇゲロなんか付けやがるからだ。

後ろにいるこのガキの仲間にも一応注意を払ったが、どいつもコイツもビビってちっとも掛かっちゃ来ねえ。

馬鹿な奴等だ、せっかくチャンスを作ってやってるのによ……。

これがヤクザかその道のプロなら、今がチャンスとばかり全員で一斉に飛び掛かって来るトコロだ。

まあ俺も一応は注意を払ってるから、むざむざ殺られるようなマヌケはしねえけどよ。

俺は、後ろでビビってるガキ共へ余裕の態度でゆっくりと振り返ると、わざと唇の端を吊り上げて不敵な笑みを作ってやった。

ガキ共が“びくん”と身体を震わす。

完全に俺の強さに呑まれてる様だ。

俺は、腹の中で笑った。

倒れているのが三人、まだ無事に立ってるのが三人。

倒れている一人は失神してぴくりとも動かねぇ。

後の二人は意識こそあるが、完全に戦意を喪失して鼻や顔押さえたまま起き上がってすら来ねぇ。

ーー全部で六人。

馬鹿なガキ共だ。

弱ぇ癖に、たった六人でこの俺様に喧嘩なんか売ってくるからだ。

コッチは、テメェ等なんかに拘っている暇は無えって言うのによ。

俺は、立って構えるのがやっとの腰抜け共に向かって、ゆっくりと足を踏み出した。

両手をだらりと横に垂らし、全身の力を抜いている。

いわゆる自然体ってやつだ。

この状況で自然体でいられるって言うのは、これでなかなか出来る事じゃねえんだぜ。

なんせ三人はぶっ倒したが、まだ三人残ってるんだからよ。

しかもその三人全員が道具を呑んでやがる。

ギラギラと銀色に光る安物のバタフライナイフを構えている奴、黒い艶消しの三段式特殊警棒を震える手で力一杯握り絞めている奴、あとそいつらの後ろで滑り止めの白いテーピングを巻いた鉄パイプ

を握り偉そうにしているマヌケが一人。

そのマヌケの身長は、百九十センチを超えていた。

体重も百キロ近くはあるだろう。

ちょっとした岩の様だ。

コイツがこのガキ共の頭だ。

丸坊主の頭に妙に日焼けした黒い顔。

分厚い唇に、骨張ったデカイ獅子鼻の下から顎に架けて、短い泥棒髭を生やしている。

オマケにこの薄暗い中でもサングラスを外さねえ。

ー黒人か、コイツ？

着ている物も、上は黒地に白い梵字（確か不動明王のカーンだった気がするが……）のプリントが施されたTシャツに、シルバーの八面喜平のネックレスをぶら下げ、下はバギータイプのブラックジーンズを腰穿きに穿いている。

日焼けした腕には、トライバルの刺青と黒のリストバンド。

指には殴られたらさぞ痛そうな、ごついシルバーのリングを幾つも着けてやがる。

こう言う奴に限って、アソコはデカくても包茎って奴が多いんだ

よな。

そう言えば、俺達がここに着いた時『テメェ、“百夜鬼”の溝口の事、まさか忘れちゃいねえよなあ！』とか何とか、訳の分からん事を抜かしてやがったよなあ……。

ーーう～ん……、ダメだ！　全く思い出せね～？

だいたい俺は、男の顔や名前なんて最初から覚える気なんか全く無ぇし、どうせ以前ぶっ飛ばした奴なんだろうが、そんな奴はごまんといるからいちいち覚えてなんかいられねえ。

俺の灰色の脳味噌は、女の顔と名前、後はそれぞれの性感帯と好みの体位を覚える事にしか使わねえ事にしてんだからよ。

だいたい今から『キャンディ』の明美ちゃんとデートだって言うのに、余計な手間を掛けさせやがって。

『キャンディ』は、駅の西側出口を出て二百メートル程離れた大通り沿いの雑居ビルの二階にあるキャバクラで、明美ちゃんはその店のＮｏ．１だ。

ここからなら歩いて五分、走れば二分も掛からない程の距離だ。

ここは駅から少し離れた陸橋の下で、頭上には国道が線路を跨ぐ形で走っている。

午前零時……。

時間が時間なので、最終電車が出た今となっては通る電車も殆ど無いが、頭上の国道では多くの乗用車やタクシー、更には中・長距離のトラックが、けたたましい地響きを立てながら通過し、さながら恐竜が群れをなしてヒップ・ホップでも踊っているかの様だ。

交通量そのものは、昼間に比べると随分少ないが、思い切り走れる分だけ騒音と地響きは更に激しさを増していた。

今居る通路など、コンクリートの壁が頭上の騒音を倍増させ、この場に居るだけで神経がイライラしてきやがる。

更には、カラースプレーでキャンパスにされたコンクリートの壁に備え付けられた照明の不規則な明滅が、俺のイライラに追い討ちを掛ける。

今夜、俺はいつもより早くバイトを終え、店を跳ねた明美ちゃんと飯を喰いに行く約束をしていたのだ。

飯を喰った後のデザートは、明美ちゃんの柔らかなバスト九十センチのオッパイと、蜜たっぷりのジューシーな○ッシーだ。

俺のバイト先は、駅の西側出口から明美ちゃんの『キャンディ』とは丁度逆方向の、古びた雑居ビルの地下にある『ヘブンズ・ドア』と言う薄暗く小ぢんまりとしたＢＡＲだ。

その店で俺はバーテンをしていた。

もっともマスター公認でもう一つ別のバイトもしているが、その話はまた後にする。

店は、いつも常連客ばかりで暇なので、好きな時間に何時でも抜けられるし上がるのも自由だ。

今夜は、明美ちゃんと午前零時十五分に待ち合わせをしていた為、いつもより少し早い二十三時四十分で上がった。

待ち合わせの時間を考えれば午前零時に上がれば十分だったのだが、いつも通り常連客が酔っ払って煩くなってきたから、後はマスターに任せて早々と退散した。

白のカッターシャツに黒のスラックスといった店での制服からお洒落な私服に着替え、待ち合わせの時間にはまだ幾分早いが、俺は酔っ払った常連客やマスターからの冷やかしを背に、二十三時四十五分頃に店を出た。

ビルを出た所でお気に入りのセブンスターを咥え、別の店の女の子からプレゼントされたＳＴ・デュポンのギャツビーで火を点けると、大きく紫煙を吸い込み深夜の通りを待ち合わせしている駅の側のコンビニに向かって歩き出した。

明美ちゃんを待つ間、今日発売の雑誌を立ち読みするには丁度良い待ち時間だ。

駅の繁華街は、こんな時間でもまだ賑っている。

空はどんよりと曇り、今にも雨が降り出しそうな程分厚い雲に覆われていた。

蒸し暑くて堪んねえ。

ー店から傘をパクって来れば良かったかな？

そう思った直後、俺の後ろから耳障りな男の濁声が響いた。

「御子神恭也だな？」

女の声なら喜んで振り向くところだが、男の濁声じゃ振り向く気にもなりゃしねえ。

無視して行き過ぎようとすると、俺の目の前にストリート系ファッションに身を包んだギャング気取りの見慣れねえ金髪のガキが、横手から三人飛び出して来て俺の行く手に立ち塞がった。

手には、鉄パイプやら何んやら物騒な道具を持ってやがる。

そのガキ共を見て、俺は吸い込んだ紫煙と共に大きな溜息をついた。

「オイ、テメエ、御子神恭也だろ！　コッチを向け！」

再び後から濁声が掛かる。

「いえ、人違いです」

俺は素知らぬ顔ですっ呆けた。

こんな奴らからのナンパは、昔から面倒事と相場が決まっている。

俺は、他人の振りをする事で徹底的に無視を決め込み、そのまま

シカトして行き過ぎようとした。

すると目の前に立ち塞がっている三人のクソガキが、間合いを詰めるように一歩前へと踏み出してきやがった。

見ると手にはやけにギラつく安物のバタフライナイフを握り、俺の腹へ尖った切っ先を向けている。

染めムラが出来て斑の様になった茶髪のガキがニヤリと笑った。

あとの二人のガキ共も、ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべて笑ってやがる。

この時点で俺の怒りは頂点に達していた。

今起こっている状況が分かっているかの様に、今しがた俺の名前を呼んだ後ろの男が、更に声を掛けてきた。

「諦めてコッチを向きな！　そうしねえとテメエの腹ァ～抉るぞ！」

最後の『抉るぞ！』に妙な迫力を込めた濁声には、勝ち誇った愉悦の色が滲んでいた。

ーーあ～面倒臭ぇ。

大きな溜息と共に、仕方なく俺は後を振り返った。

振り返るとそこにも、また頭の悪そうな三人組が、思い思いの武器を手にヘラヘラとこちらを見ながら下卑た笑みを浮かべている。

ーーケッ、ムカつくクソガキ共だ。

両隣のアホヅラなガキを従えるかの様に、出来損ないの黒人みたいな野郎が偉そうにふんぞり返り俺を見下した眼で笑っている。

あのムカつく濁声の主はコイツの様だ。

ーー殺す！次に会ったらコイツだけは絶対に殺ス！。だが今はデートの方が大事だ。

俺は、怒りに逸る気持ちをぐっと抑えた。

「ケッ、テメエが噂の御子神恭也か。何だその髪の色は？　派手な色に染めやがって」

黒人もどきが、自分のハゲを棚に上げて言う。

「羨ましいか？　このハゲ！」

俺は吐き捨てる様に言った。

「この状況でイイ根性してるな。多少はデキルって噂だが、自信満々ってとこか？」

明らかに俺を小馬鹿にしてやがる。

たった六人のくせに、どうやら既に俺に勝った気でいるようだ。

「ああ強いな。かなり強えぇぞ！」

俺のふてぶてしさに、黒人もどきの両脇に居並ぶアホガキが戸惑いの色を浮かべた。

「ケッ、本当に自信満々だな。まあ良い。その生意気な態度でいられるのも今の内だ。俺達と一緒に来てもらおうか！」

俺は、わざと大袈裟に首を横に振った。

「悪いな、今から可愛い可愛いＮｏ．１のキャバ嬢とデートなんだ」

俺はにやけた顔で言った。

「キャバ嬢とデートだと？　なら尚更一緒に来て貰おうか」

黒人もどき言葉に呼応するかの様に、背中にナイフの刃先が当たった。

チクリとした痛みが背中に走る。

これにはさすがの俺も怒りで頭に血が昇ったが、この状況では奴の言う事に従う他はない。

「仕方ねえなあ……、何所へでも付き合ってやるよ」

俺は、仕方なく奴の申し出を受けた。

時計を見たら、まだ明美ちゃんとの待ち合わせにはまだ少し時間がある。

店を早く出たのが幸いしたようだ。

それにこんな奴ら五分もあれば十分だ。

雑誌が読めないのはちぃと残念だが、考えようでは丁度良い暇潰しにもなる。

その代わりコイツらをギッタンギタン（俺も古いな……）にしてやれば良い事だ。

俺とギャングを気取ったアホガキの六人は、そのまま駅の方へ向かって歩き出した。

俺を中心にして、歪な六角形で囲む様に歩いて行く。

俺が逃げない様にとの配慮だろうが、逃げるどころか一刻も早くコイツらをぶちのめしたくてウズウズしてるのは俺の方だってぇのによ……。

時々隣のガキに向かって下から抉り込む様に“ガン”を飛ばしてやるが、ビビっているのか眼を合わそうともしねえ。

俺が反対側の奴に“ガン”をくれて遊んでいる時や、前を向いている時にチラっとこちらを見ている様だが、俺が視線を合わせようとすると、ふっと眼を逸らしやがる。

ーーコイツ面白過ぎる。

「おい後藤、ビビッてんじゃねえ！相手は一人なんだぞ！」

後ろの黒人もどきの声が飛ぶ！

「お、俺、ビビってなんか……」

ーーバ～カ、完全にビビッてんじゃねえか。

通行人達は、俺達を右へ左へと避けながら通り過ぎて行く。

どいつもこいつも俺達と目を合わせない様にしているが、チラッと見る眼には俺への憐憫の色を浮かべている。

俺を憐れむ位ならコイツらの無事を祈ってやれって～のに！

通りを流れる車の切れ目を待って俺達は通りを横切ると、駅の横手を走る陸橋の下の細い側道へと入って行った。

側道は駅前の通りとは違い街灯も少なく、通りの明るさに慣れた眼にはかなり暗く感じられる。

側道を少し歩くと、陸橋の下を潜る道路の入口が見えた。

先頭を歩いていた奴らが、陸橋の下を潜る道路へと入って行く。

俺や後続の奴らもその後に続いた。

陸橋の下を潜る道路は、片側一車線の両側通行で、両脇には一段高くなったお粗末な歩道が設けてある。

コンクリート剥き出しの壁はさながら不良達のキャンパスになっていて、色とりどりのカラースプレーで文字や絵が一面に描かれていた。

これが結構アートしているから大したモンだ。

アートの描かれた両側の壁には、等間隔で横並びに蛍光灯が設置されているが、ある物は割られ、ある物は切れ掛かって不規則な明滅を繰り返すのみで、まともに光っているのは全体の三分の二にも満たない。

その為に中は薄暗く不気味な感じだ。

髑髏をモチーフにしたアートが描かれた丁度上の蛍光灯が不規則に明滅している為、髑髏が俺達を見て不気味に笑っている様に見える。

六人のガキ共は、車道の中腹で俺をぐるりと取り囲む様に立ち止まった。

分かってはいたが、これではまさに袋の鼠だ。

とは言え、本当に追い込まれてるのは奴らなんだけどな……。

俺が後ろを振り返ると、黒人もどきは俺を凶暴な眼差しで見詰めていた。

「テメェ！『百夜鬼』の溝口の事、まさか忘れちゃいねえよなあ！」

黒人もどきは怒りを露わに叫んだ。

「誰だそいつは？」

「テメェ、覚えてねーのか？」

「ぜ～んぜん覚えが無ぇなあ」

「恍けてんじゃねえぞ、この野郎！」

黒人もどきが怒鳴った。

恍けるなと言われても、俺は男の名前なんていちいち覚えちゃいねえって言うのに……。

「先週駅の側の『マルキ』ってパチンコ屋で、スロットに負けた腹癒せでテメエがぶっ飛ばした相手だろうが！」

ーーう～ん、そう言えばそんな事もあった様な無かった様な……。

俺は首を傾げた。

だが次の瞬間、ぱっと記憶が閃いた。

「あぁ思い出した！」

でもあの時は、確か俺がスロットに負けてイライラしてる時に、奴らの方から因縁を付けてきた様な気がするんだが……。

「溝口と俺は中学ん時からのツレでな、奴はテメエにやられて今でも病院のベッドに縛り付けられているぜ！」

黒人もどきの黒い顔が、怒気で更にどす黒く染まっている。

「それはそんな時に俺に喧嘩を吹っ掛けてくるその溝ナンとかって

奴が悪いんだろう」

「溝口だ！」

黒人もどきが声を荒げる。

「まあ何でも良いや。俺は忙しいんだ。やるなら早く始めようぜ！」

俺は、合図の代わりに腰を少し落として構えてやった。

ガキ共の間に緊張が走る。

奴らは、俺を囲む様に陣形を作ると、手に持っていた得物を構えた。

3

3

「死ね、御子神ーっ！」

自然体で迫る俺に向かって、ナイフを腰溜めに構えた斑模様の茶髪のガキが、弾かれた様に突っ込んで来やがった。

こう言う臆病な奴程、恐怖に冷静さを失って遮二無二突っ込んで来るんだよな。

まるで猛牛だぜ。

俺は、さながら闘牛士の様に体捌きで横へひらりとかわすと、足を一本だけその場に残してやった。

“ズドドドーン！”

俺の残した足に引っ掛かった猛牛は、そのままの勢いで前につんのめり見事に顔から地面へスライディングした。

ーーお～痛そう。

俺は胸の前で十字を切った。

ナイフを握っていた為に受身が取れず、アスファルトに顔から突っ込んだ茶髪のガキは、顔を団らに擦り剥いて、鼻から太い筋の血を垂れ流していた。

俺は、無様なガキのケツを後ろから思い切り蹴り上げた。

“ギャイン！”

茶髪のガキは、犬の様に無様な悲鳴を上げると、今一度地面でバウンドした。

じんわりとケツに赤黒い染みが広がって行く。

どうやら肛門にまともに蹴りが入ってしまった為、運悪く肛門が裂けてしまったらしい。

ーーこりや当分用を足す時に苦労しそうだな。

自分でした事を棚に上げて、俺はこのガキの用を足す風景を少し想像してしまった。

ーーお～気持ち悪ぃ。

あと残るは二人……。

その時、俺のズボンの後ろポケットに押し込んであった携帯電話から、ディープ・パープルの名曲、『スモーク・オン・ザ・ウォーター』のイントロ部分が聞こえてきた。

バイブの振動が、ケツに障って妙に気持ち悪い。

奴らは着信音に“びくん”と反応した。

あからさまに警戒心を浮かべている。

俺も奴らを警戒しながら携帯電話を取り出すと、青白く光る小さ

なサブ画面に表示された送信相手を確認した。

名前は『キャンディ明美』と表示されている。

思わず俺は喧嘩の最中である事も忘れ、急いで電話に出た。

「もしもし、明美ちゃんか？」

『もしも～し、恭ちゃん？』

明美ちゃんの澄んではいるが、少し間の抜けた声が耳元に響く。

「あれ、もう待ち合わせの時間か？」

俺は答えながらふと腕時計を見た。

時間はまだ午前零時五分を過ぎた所だ。

「どうした？　もう着いたのか？」

俺は明美ちゃんと電話で話しながら、奴らの方をチラっと見た。

奴らは、俺達が電話を終わるのをご丁寧にも待ってくれているらしい。

ーーつくづくシロウトな奴。

そう思った瞬間、明美ちゃんの申し訳なさそうな声が聞こえた。

『ごめ～ん、大事なお客さんがアフター付き合えって煩くて。店長

も行かなきゃ駄目だって言うから、また今度にしてくれる？　この穴埋めは私の“アナ”でして良いからさ』

明美ちゃんはいつもの甘えた声で言った。

“アナ”の部分が妙に生々しく聞こえる。

俺はガッカリして肩が落ちた。

「ああ、仕方ないな……。俺も今取り込み中だし、また今度“アナ”埋めしてくれれば良いよ」

俺も“アナ”を強調した。

『うん、じゃあまた今度ね！　好きよ、恭ちゃん。“チュッ”』

「俺も好きだよ……って、明美ちゃん？　もしもし、もしも～し！」

明美ちゃんはチュウの余韻を残したまま、俺の返事も待たずに早々と電話を切ってしまった。

俺は大きな溜息と共に携帯電話を折り畳むと、そのままま た後ろポケットに仕舞い込んだ。

「ギャハハハハ！」

俺達の会話を最後まで注意深く聞いていたクソガキ共が、いきなり大声で笑い出した。

最初にぶっ飛ばされて戦意を無くしていた筈の二人も、今は声を

出して笑っている。

ただ失神して地面に蹲っている金髪のガキと、ケツを血塗れにして地面でのた打ち回っている茶髪のガキだけはそれ所じゃないらしい。

「ふ、振られてやがる！　残念だったな、この色男が！　ギャハハハハ！」

“ブチン！”

俺の頭の太い血管が、音を立ててぶち切れた！

血管が切れるなど無論比喩だが、実際リアルに俺の耳に響いた気がした。

俺の白金の髪が逆立つ！

怒髪天を突くとはまさにこの事だ。

全身にアドレナリンが駆け巡った。

髪だけじゃなく、全身の毛と言う毛が総毛立った感じだ。

俺は人を小馬鹿にするのは大好きだが、自分が馬鹿にされるのだきゃあ我慢ならねえ！

「テメエら、ぶっ殺す！」

俺は怒りに身を任せ、残った二人へと突っ込んだ。

黒人もどきとは別のもう一人のガキが、正面から突っ込んで来る俺の頭部へと打ち下ろすべく、艶消しの三段特殊警棒を振り上げた。

「コノーッ！」

絶妙のタイミングで特殊警棒が振り下ろされる。

俺は左腕で頭部を庇うと、勢いを殺さず頭から奴の腹目掛けて突っ込んだ。

奴の特殊警棒が頭上に迫る。

しかし俺の勢いは止まらない。

俺は、振り下ろされる奴の特殊警棒を凌駕するスピードで突っ込んだ。

俺の方が一足早い。

奴の特殊警棒は、懐深く入り込んだ俺に打撃点を外され、威力を無くして俺の腰に辺りをしたたかに打っただけだった。

こんなもの痛い内にも入らない。

次の瞬間、俺の頭部が奴の腹にめり込んだ。

奴は身体をくの字に折り曲げ、そのままコンクリートの壁へと背中が激突した。

“ぐえっ”

奴は、肺に溜まった空気を一気に吐き出した。

俺は奴の腹から頭を抜く様に身体を離すと、くの字に曲がって行く奴の背中に鋭い肘を思い切り打ち下ろした。

奴の手から特殊警棒が放れ、音を立てて地面に転がる。

次の瞬間、背中に肘をぶち込まれて逆エビに反った無防備な奴の頭を両手で抱え込み、そのまま奴の髪の毛を掴んで頭を押し下げると、同時に下から膝をカウンター気味に蹴り上げた。

“グジャッ”

鼻骨の折れる嫌な音を立て、俺の膝が奴の顔にめり込んだ。

反動で跳ね上がる奴の頭を再び力で押さえ込み、二発・三発と連続で膝をカチ上げる。

“ドカッ”

次の瞬間、背中に激痛が走った。

思わず俺は奴の頭を放し仰け反った。

手を放すと、奴は背中を壁に擦り付けてそのままズルズルと地面に崩れ落ちた。

俺が、背中の痛みを堪え咄嗟に後ろを振り向くと、黒人もどきが

今一度鉄パイプを振り被る所だった。

振り向いた瞬間、俺とサングラスに覆われた黒人もどきの目が合った。

それに弾かれた様に、黒人もどきが俺の頭部目掛けて鉄パイプを振り下ろす。

俺は、間一髪でそれを横に躱した。

振り下ろされた鉄パイプの先が地面に当たり乾いた音を立てる。

ーーあんなのをまともに喰らったら、俺様の頭蓋骨が陥没しちまうじゃねーーか！

獣並の反射神経を持つ俺だからこそかわせた様なものだ。

それ程の威力とスピードを今の一撃は持っていた。

俺は、かわし様に横手から奴の顔面へ右ストレートを放った。

“ボグッ！”

俺の右ストレートは奴の左頬を捉えたが、体勢が不十分だった為威力が半減している。

だが例え威力が半減しても、俺のパンチはボクシングの日本ランカー並の威力がある。

普通ならかなりのダメージを与えている筈だ。

しかし奴は、一瞬“ぐらっ”としただけで耐えやがった。

岩の様なごつい身体と、丸太の様な太い首に衝撃を吸収されてしまったらしい。

外れかけて傾いたサングラスの上から、奴の血走った目がこちらを“ギロリ”と睨む。

「ガァーッ！」

奴は雄叫びを上げながら、先が地面に当たっていた鉄パイプを斜め下から俺の胴を薙ぐ様に振り払ってきた。

俺が一歩下がってそれを躱す。

俺の胴のあった辺りを、鉄パイプが“ブン”と唸りを上げて通り過ぎた。

奴の体勢が横に流れた瞬間を狙って俺は一歩前へ踏み出すと、奴の膝に目掛けて鋭い踵を放った。

ー一斧刃脚。

中国拳法の技だ。

膝は鍛える事の出来ない幾つかの急所の一つである。

“グジャ！”

俺の踵が奴の膝頭にモロに当たった。

「ぐえっ！」

奴は膝を抱え地面に転がった。

鉄パイプを振る為に踏ん張っていた為骨折には至っていないだろうが、もう立つ事も出来ない筈だ。

ー一勝負は着いた。

そう思った瞬間、驚く事に奴が立ち上がったのだ。

痛む膝を庇い、ふら付きながらも震える手で鉄パイプを構えようとする。

ー一大した根性だ。

俺は、この黒人もどきを少し見直した。

「ま、まだだ……、まだ終わっちゃいねえぞこの野郎……」

震える声で凄んでみせる。

「ふん、大した根性じゃないか。名前くらい憶えておいてやるから言ってみろよ。何て言うんだ？」

俺は顎を杓った。

「む、村田だ。成田西高の村田だ……」

「ふ〜ん、成田西ねえ。あの辺じゃ一番の不良校じゃねえか。で、テメエは村田ってんだな、憶えといてやるから感謝しな！」

そう言うと、俺は奴の左頬に会心の右ストレートをぶち込んでやった。

モロに俺のパンチを喰らった奴は、後ろへ吹っ飛んで地面に突っ伏すと、そのままぴくりとも動かなくなった。

「う、うわ〜っ！　む、村田さんがやられたー！」

黒人もどき＝村田が倒されると、最初にやられた二人組が慌ててその場を逃げ去った。

「あ〜あ、冷てえガキ共だな」

俺は一人呟くと、地面に転がっている村田達四人を見下ろした。

三人は意識を失っているが、茶髪のガキはまだケツを押さえて呻いている。

見ると、俺のドルチェのデニムも膝の辺りがさっきの奴の鼻血で赤く濡れていた。

「チッ、堪んねえなあ……」

俺は大きな溜息を一つ吐くと、転がっている奴らを後にして、通路の出口へとゆっくり歩き出した。

外へ出ると、どす黒く澱んだ雨雲は更に不気味さを増していた。

シャツが汗で身体にへばり付いて気持ち悪い。

俺はポケットから煙草を取り出すと、動いた為折れ曲がったセブンスターを一本咥え、風で火が消えない様に手で風防を作りながらデュポンのライターで火を点けた。

湿った空気と共に大きく紫煙を吸い込み、ゆっくりと濃密な夜に吐き出した。

俺が歩き出すのを待っていたかの様に、雨がぽつりと降り出した。

次の瞬間、雨が堰を切った様に激しく降り出す。

時間は、既に深夜の零時二十分に差掛かろうとしていた。

俺は身体を屈めながら、急いで雨の街へと駆け出して行った。

4

4

「くっそー！　御子神の野郎、次は絶対にぶっ殺してやる……」

滝の様な土砂降りの雨の中、村田は痛む膝を庇う様にふらつきながら歩いていた。

蹴られた膝が激しく痛み、歩く事すらままならない。

全身が雨ですぶ濡れだ。

黒いTシャツは肌に張り付き、デニムのパンツは濡れてゴワゴワになっている。

スニーカーの中にも雨水が入り、重たい足取りを更に重くしていた。

村田は、さながら幽鬼の様に夜の街を彷徨い歩いていた。

御子神恭也に倒され、気が付いたら午前二時近くになっていた。

最初は六人居た筈だが、二人は行方をくらまし目が覚めたら四人だけになっていた。

村田は意識の無い二人を何とか揺り起こすと、ズボンの尻に赤黒い染みを作ってぐったりとしている茶髪の男＝後藤に声を掛け、自分が意識を失った後の顛末を聞いた。

どうやら浅野と渡辺の二人は、御子神恭也にビビって逃げ出し、御子神自身もそのまま出て行ったらしい。

三十分以上は気を失っていた様だ。

村田は痛む膝を堪え何とか起き上がると、意識を取り戻した二人に後藤を抱え上げるように言った。

後藤はもう自分の力で歩く事すら出来ないらしい。

肩を貸すよう二人に命じ、村田は激しい雨の降る外へと出た。

ずぶ濡れになりながら駅前の通りまで出ると、村田は彼等と別れた。

彼等は村田を心配したが、村田は一人になりたかった。

村田は、二人に後藤を家まで送るよう命じると一人雨の街を歩いて行った。

無論タクシーで帰ると言う選択もあったが、今はこの雨の中に身を置きたかったのだ。

飛礫の様な雨が村田の顔を激しく叩く。

喧嘩に負けた悔しさ、膝の激しい痛み、二人とは言え仲間に見捨てられた悲しみ、そして初めて喧嘩で不様にも気絶させられた屈辱……。

これらの痛みを次に復讐する時の糧とする為、今は雨に打たれていたかったのだ。

あれ程賑っていた駅前の通りは、この雨のせいで人通りも無くなり、道路に溜まった雨水を蹴る様に高い水飛沫を上げ車が走り去るのみであった。

村田は、ふらつきながら痛めた足を引摺る様にして歩いた。

本来ならかなり蒸し暑い筈なのに、雨に体温を奪われ身体中の感覚が鈍くなっている。

どの位歩いただろうか……。

村田は駅前の繁華街を抜け、いつの間にかオフィスビルの建ち並ぶオフィス街へと差し掛かっていた。

この時間のオフィス街は、人があまり歩いていないのは当然だが、この雨のせいで犬や猫一匹すら通らない。

実際、車ももう殆ど通らなくなっていた。

身体が冷え、思考も徐々に虚ろとなり、足の痛みが既に耐えられなくなってきた頃、家に帰ろうとも思ったが既にタクシー一台見付ける事が出来なかった。

村田は、近くにあったオフィスビルのシャッターの降りた入口の軒先で雨宿りした。

こんなにびしょ濡れの状態で今更雨宿りでもないのだが、もう歩く事が出来なかったのだ。

雨は、以前激しく降り続いている。

村田は、閉じたシャッターの前に座り込み、熱が出て来たのか凍える身体でしばらく雨宿りをした。

凍える身体、痛む膝、止む事のない雨……。

村田は途方に暮れた。

そうしている内に、村田は溝口がベッドの上で言った言葉を思い出していた。

『……村田……、お前は強い。それはこの俺が一番良く知っている。だが奴は、御子神恭也だけは手を出すな……。奴は化け物だ……』

そう言った時の、奴の心配そうな顔が頭に浮かんだ。

溝口の言った事は本当だった。

奴は……、御子神恭也は、とても自分達の手に負えるような相手では無かった。

あの獣の様な反射神経とずば抜けた運動神経……。

そして何よりあの速くて的確な重いパンチと蹴り。

更に異常な程打たれ強い強靭な肉体。

どれをとっても桁が違う。

溝口が言うように、奴はまさしく化け物だった。

また、今までどれ程の修羅場を潜り抜けて来たのか、あの喧嘩慣れした何者も恐れない気概。

そして余裕……。

今夜、自分達がこの程度の怪我で済んだのは僥倖だった。

いや、御子神恭也がこの程度で済ませたのだ。

更に言えば、自分達は六人掛りで、しかも道具まで使って、御子神恭也を本気にさせる事すら出来なかったのだ。

実力が違い過ぎる。

昨日まで御子神恭也の噂は色々と聞いていた。

でもその全てが嘘では無いにせよ、誇張されたものだと思っていた。

しかし噂は本当だった。

いやそれ以上だったのだ。

だが奴への憎しみはある。

この屈辱を晴らさない訳には行かない。

だが、もうどうやっても勝てる見込みが無かった。

銃でもあれば別だが、それでさえ絶対に勝てるとの自信が持てなかった……。

瞼が重い……。

少し睡魔が襲って来た様だ。

「どうかしましたか？」

その時、ふと横から声が掛かった。

村田は驚いて跳ね起きた。

膝の痛みも忘れて中腰になっている。

驚きと不安を隠せないまま、凍り付いた表情で村田は今しがた声のした方に目をやった。

声の主は、村田のすぐ横に居た。

横とは言ってもビルの軒下には入らず、降りしきる雨の中に立っている。

街灯のみの薄明かりと、激しく降る雨に遮られて顔の細部や表情までは良く見てとる事が出来ないが、人影は全部で二つあった。

一つは今自分に声を掛けてきた男のものだ。

背が高く痩せた男の様だ。

全身ずぶ濡れで、黒いシャツと黒いパンツが身体に張り付いている。

ブーツまで黒かった。

全身黒ずくめだ。

黒く長い髪が顔に張り付き表情は全く読めない。

ただ血の様に紅い唇が印象的だった。

もう一つの影は、この男の少し後ろで寄り添う様に立っている。

小柄で、着ている服装からも女だと判断出来る。

しかも若い女だ。

年齢は定かではないが、この女も男同様にこの雨の中傘も刺さず全身がびしょ濡れだった。

「どうかしましたか？」

ひどく丁寧な物言いで、再び男が言った。

「いや、別に……、放っておいてくれ！」

村田は、答えるのも面倒臭そうに言い放った。

「ははん、喧嘩をしたんだね。それで負けた……」

男が言った。

その瞬間、村田の身体を熱い血が駆け巡った。

青褪めていた顔が真実を言い当てられた恥辱と怒りで紅く染まる。

「な、なんだって言うんだ？　何故喧嘩したと分かる？」

村田は声を荒げて言った。

男は、村田の気迫を涼しげに受け流した。

村田の気迫が、降りしきる雨に流されて行く様だ。

その時村田は、自分自身の声が妙にくぐもっている事に気が付いた。

そっと手で頬を触る。

御子神恭也に殴られた左頬が、異常な程腫れ上がっていた。

膝の痛みや怒り、そして降りしきるこの雨に打たれていた為に今まで気が付かなかっただけなのだ。

雨が気持ち良く感じたのも、殴られた頬がかなりの熱を帯びていたからに違いない。

これでは、この男で無くても一目で喧嘩したのだと分かってしまうに違いなかった。

更にこんなボロボロの状態では、嘘でも喧嘩に勝ったとは口に出来ない。

「煩せーよ、怪我しねえ内にとっとと何処かへ行っちまいな」

村田は、この不思議なカップルを追い払う様に手を前後に振った。

「そうか……、俺ならばお前の力になってやれるかとも思ったのだが残念だな」

黒ずくめの男はさも残念そうに言った。

「力になんかなって貰わなくて良いんだよ。だいたいオメエは誰なんだよ？　それにオメエみたいな奴じゃあの野郎には手も足も出ねえよ。だからさっさと行っちまいな！」

「へぇ、そんなに強い相手なんだ。なら尚更俺の力を借りた方が良いと思うんだけどな……」

黒ずくめの男は、村田の表情をチラッと伺った。

「お前がそんなに強いとでも言うのか？　それに何故見ず知らずの俺に力を貸す理由があるんだ？」

村田は、ほっそりとしたその男を明らかに訝しんだ。

確かにほっそりとした見掛けのわりに、濡れたシャツが張り付き輪郭の露になった身体付きを見れば、決してひ弱な印象は無い。

だが体格的には自分の方が明らかに優っているし、そんな自分でさえ、いや各々が得物まで用意したにも拘らず、僅かな時間で六人もの男達が御子神恭也一人にやられたのだ。

しかもこの男とは初対面の筈だ。

自分に力を貸す理由が無い。

村田が訝しむのも当然と言えた。

「疑ってるな？　それもまあ当然か……」

男は、村田が訝しむのがさも当然であるかの様に、村田の疑いの眼差しをさらりと受け流した。

「だが俺が手を貸すと言うのは、俺が直接と言う訳じゃない。俺がお前を強くしてやると言っているんだ」

村田の表情に更なる疑心暗鬼の色が浮かぶ。

「俺を強くだって？　あ、あんた、格闘技か何かのコーチでもしているのか？」

村田の言い方がいつからか“オマエ”から“あんた”に変わっていた。

「格闘技……？　あんな子供の稚技など問題にもならないよ。そんな事じゃない。君と言う人間そのものが強く進化するんだよ」

「お、俺そのもの……が……進化するだと？」

「そうだ。お前の喧嘩相手なんか全く問題にならない。いや、もうお前に勝てる相手なんか何処にも居なくなるんだ！　言わば超人になるんだよ」

「超人……？　俺が？」

男の言う事はあまりに突拍子も無い話だった。

「そうだ、超人だ。そうなればもう恐い物も何も無い。警察もヤクザも何も恐い物は無くなるんだ。そしてお前は、自分の思う通り、欲望のまま生きれば良い。憎い奴は殺せば良いし、金は好きなだけ盗めば良い。女だって犯せば良いんだ。何でも思うがままだぞ」

男は、次第に語気を強め酔った様に語った。

村田もいつの間にか男の紡ぎ出す言葉に酔っていた。

「た、頼む！　俺をその超人にしてくれ！」

村田は軒下から這い出て、ずぶ濡れの男の足に縋り付き懇願した。

雨に打たれて自分でも分からないが、涙ぐんでさえいたかも知れない。

「くくく、良いだろう。でもそれには条件……、いや一つ試練があるんだがそれでも良いのか？」

濡れて張り付いた髪の毛の隙間から、男の目が妖しく光った。

「どんな条件でも、どんな試練でも受ける！　だから頼む！」

村田は何度も頭を下げ、男の皮パンの裾を揺さぶり懇願した。

「で、条件とは何だ？　試練とは何をすれば良い？」

「なあに、簡単な事さ」

「簡単な事……？」

「そうだ。この娘は今喉が乾いている。だからお前の血を少し分けてくれればそれで良いんだ」

男はさらりと言い放つと、後ろで寄り添う様に立っていた女に前へ出る様促した。

女が男の横に並んだ。

この女、意識が朦朧としているのか、まるで死人の様だ。

「血……、俺の血……？　お、お前らいったい何者だ？」

男はニヤリと笑った。

その紅い上唇の下に長く鋭く伸びた二本の犬歯が覗く。

「きゅ、吸血鬼……」

村田の顔が恐怖に歪んだ。

村田は、怯えた表情で男の側から離れると、尻から擦る様に濡れ

た地面を後ずさった。

「吸血鬼と言う呼び方は気に入らないな。長生種（メトセラ）とか夜の眷属。せめてヴァンパイアぐらいは言って欲しいものだ」

「ヴァ、ヴァ、ヴァンパイア……」

村田は震える声を絞り出す様に言った。

「そう……俺はヴァンパイアだ。そしてこの娘も今しがた我々の眷属に仲間入りした。本来ならお前等人間は、ただの俺達の餌になるところだが、血を吸っただけではゾンビになってしまうし、殺すとなると死体を始末するのも面倒だ。だからお前は特別に我々の眷属に加えてやろうと言っているのだ。さあどうする？」

男は血の色に紅く目を光らせて言った。

口許には不気味な笑みを浮かべている。

長く伸びた犬歯の為、笑った口許が奇妙に歪んでいた。

「ほ、本当に俺の血を吸うだけじゃないんだな？　　本当に俺もヴァンパイアにしてくれるんだな？」

「心配するな。俺は嘘は言わん。今しがたこの娘をヴァンパイアにしたばかりなんだが、久しぶりの生き血だったからつい少しばかり余計に血を飲み過ぎてしまってね……。とりあえず俺の血でヴァンパイアには成れたんだが、既に渇きの兆候が出てしまっているんだ。だから今血が必要なんだよ」

見ると女は、激しく降り続く雨の中濡れた髪が顔に張り付き、男

同様表情までは読み取る事が出来ないが、髪の毛の間から覗く瞳は遠くを見て焦点があって無い。

顔は死人の様に青白く、半開きの口許からは伸び掛けの犬歯が覗き、大量の涎が雨と混ざり糸を引いている。

村田は、少し逡巡したのちに覚悟を決めた。

例えそれがヴァンパイアであろうとも、男の言った『超人』と言う言葉に強烈に引かれたのだ。

金も女も全て自分の思い通りに手に入れる事が出来る存在……。

そして警察もヤクザも恐れなくて良い……。

あの御子神恭也さえも……。

「俺をヴァンパイアに……、夜の眷属にしてくれ！　頼む……」

村田は頭を下げた。

男は頷いた。

「分かった。今日からお前は我々の仲間だ。無敵で不死身の存在となるのだ」

そう言うと、男は雨の中地面に平伏している村田に近付き、膝を折って屈み込むと村田の肩に両手を掛けた。

その瞬間、村田は恐怖で身体を“びくん”と震わせた。

「恐がらなくて良い。すぐに済む」

男は殊更優しい声で言った。

村田が必死に頷く。

「なあに、痛いのは最初だけだ。ただこの娘は先程ヴァンパイアに成ったばかりでＤＮＡの変化が安定していないうえ血を飲むのも初めてだ。だから俺が最初にお前の首筋に牙を立て導いてやらねばならん」

そう言うと、男は村田の肩に添えていた手で、震えながら平伏す村田の身体を起こした。

しゃがんだ姿勢で正面から村田の身体を抱くと、その太い首に腕を回した。

村田の震えは一向に止まらない。

歯がガチガチと音を立てる。

男は首に巻き付けた指で村田の動脈の位置を探った。

そして目的の物を探り当てると、そのまま抱き締める様に身体を被せて行った。

再び村田の身体が“びくん”と震えた。

それを押さえ込む様に男が腕に力を込める。

薄れゆく意識の中で、村田は男の肩越しに立ちすくむ女を見た。

女は、飢えた獣の目で村田達二人を見下ろしている。

女の青白く細い喉が“ぐびり”と動くのが見えた。

そして雨は、更に激しさを増していった。

第一章1：御子神恭也

第一章
『御子神恭也』
1

世の中には、コイツだけは怒らせちゃならねえって奴が何人かいる。

自分に余程の自信が無いのなら、喧嘩を売っちゃならねえ、肩をぶつけるのもいけねえ、目だって合わせちゃいけねえって奴だ。

そう言う奴の一人がこの俺、御子神恭也さんだ。

年齢は十八歳、都立城北高校の三年だ。

血液型は検査も、献血もした事無いから知らねえ。

身長は一八三センチ・体重は七十三キロ。

無駄な贅肉は一切無い。

しかもジムで鍛えた見せ掛けだけの不完全な筋肉じゃなく、完全に実戦型のナチュラルで、黒人のアスリート並みのバネを秘めた上質な筋肉だ。

細胞一つ一つにたっぷり酸素を含んでるからスタミナも申し分ねえ。

この街の不良共は、俺の機嫌の悪い時は目も合わせやしねえ。

たまに他所の街の馬鹿共が俺に挑戦してくる事もあるが、俺の噂を聞いて絶対一人じゃ来ねえし、わんさか道具を用意して来る事が多い。

最近は俺の名前も広まってそんな馬鹿もかなり減ったが、それでもまだ挑戦してくる馬鹿がたまにいる。

つい一昨日の夜もそんな馬鹿に喧嘩を売られたばかりだ。

最も、そんな奴らはケツの毛が焦げる程ヤキを入れてやるけどな。

俺は、喧嘩なんかしてる程暇じゃ無えって言ってるのに全く迷惑な話だ。

俺の大切な青春は女の為だけにあるって言うのに、何で誰も分かっちゃくれねえんだ？

確かに喧嘩も嫌いじゃないが、俺の場合喧嘩はあくまでビジネスなんだよ。

どう言うビジネスかって？

俺は、住んでいるアパートの側の『ヘブンズ・ドア』って言うＢＡＲでバーテンのアルバイトをしているが、そこのマスター公認で用心棒（バウンサー）のバイトもしている。

『ヘブンズ・ドア』の用心棒じゃないぜ。

この街のクラブやラウンジ、それにスナックや居酒屋なんかが俺

の客だ。

最近はキャバクラの客も出来た。

風俗店はさすがにヤクザの仕切りだから俺の入り込む余地は無えが、今契約している店だけでも五件や十件じゃ利かねえ。

つまり俺は、この腕っぷしを買われて、幾つかの店の出張用心棒を引き受けているって言う訳だ。

謝礼は、ブチのめした相手にもよるが、これが結構美味しい金額になるんだよ。

それに店の女の子やママにはモテまくりだしな。

なんせ俺のファンクラブまであるくらいなんだからよ。

最近は暴対法のせいでオマワリの暴力団への締め付けが厳しいらしく、奴らも昔みたいに大っぴらに用心棒なんかやってられないらしい。

店の方だって、揉め事が有ろうが無かろうが、毎月決まったみかじめ料を払うのも馬鹿らしいってもんだ。

だからこの俺の出番って訳だ。

俺ならバイトでやってるだけだから、必要な時にだけ呼んで謝礼を払えばそれで良い。

俺は俺で結構金になるし、仮に傷害事件になっても未成年だから

刑務所へ行く事も無い。

最もこのバイトでオマワリの世話になった事は一度も無いけどな。

店側の人間は誰も通報しないからオマワリも来ねえし、来ても捕まるのはいつまでもダラダラ喧嘩している馬鹿だけで、俺はメチャクチャ強えぇからオマワリが来る前にはしっかりカタが着いている。

だから急いで逃げるなんて恰好悪いマネもした事が無え。

実際ヤバイのはオマワリよりヤクザなんだが、今では何となく住み分けが出来ていて揉める事も殆ど無い。

最近は店を出してもみかじめ料を払いたがらない経営者が多くなり、そう言った店にオシボリを卸したり、守り料と称してみかじめ料を請求するとすぐにオマワリを呼ぶからそうそう無茶も出来ないそうだ。

これも一昔前に施行された暴力団新法や最近施行された暴対法の影響だろう。

まったくヤクザにとっては住みにくい世の中になったもんだよな。

最もオマワリとは別に、ヤクザにはヤクザなりの事情ってモンがあるらしい。

この街は、今まで二つの組が微妙なバランスを取りながら何とか上手くやってきたんだが、最近関西系の広域暴力団の或る組が関東に進出してきたらしく、この街を以前から縄張りにしていた組は何処もピリピリしているらしい。

現に街のあちこちで喧嘩や銃撃事件が起こって血なまぐさい事になっている。

オマワリも躍起になっているから、些細な事で逮捕者なんか出してる場合じゃない。

今の法律じゃ下手すると上（組長や幹部クラス）まで引っ張られる（逮捕）事になりかねねえからホント大変な時代だよな。

縄張りは守らなきゃならないが無茶も出来ねえ。

だから俺みたいな奴でも見逃して貰えるって寸法だ。

だがその裏には、向こうも上手く俺を利用しようって腹があるんだろうけどな。

それに、以前或る事件でヤクザと揉めた事があって、その組は潰れちまったがそれ以来その組の上の組織とは友好関係を結んでるし、その一件以降他の組も俺の事は暗黙の了解になっているらしい。

まあ本音は、俺みたいなガキと揉めたって損するばかりで一円の得にもならないから、俺と揉めるのを避けてるって感じだが、俺にとっては有り難い話だ。

だけどおかげで組関係に知り合いが出来ちまって、あちこちの組から誘われるんで実際困ったもんだよ。

俺は組織って言うのが嫌いだからなあ。

俺は幾ら凄い組織でも、どんな美味しい待遇でも飼い犬になるつもりは無え。

俺はあくまで自由な一匹狼で居たいんだ。

中坊の頃は群れてる奴らを見るとどうしても我慢出来ずに、自分から良く喧嘩を吹っ掛けたモンだ。

まあ、あの頃は俺も若かったからなあ……。

そう言えば昔こんな事も……って、んん？　俺は誰と話してるんだ？

これは……“夢”なのか？

“……”

ーー……何だ？　何か聞こえてくる様な。

“……ヤ……”

ーー何だ、誰かが俺を呼んでいる様だが。

“キ……ヤーー”

“ドドドドド”

ーー何か俺に凄い危険が迫ってる気がする。

“ドンドン”

激しいノックの音が部屋に響く。

ーーヤバイ、奴だ！　奴がそこまで来ている。

「恭也、入るよ！」

“バタン！”

「恭也、起きろー、いったい何時まで寝てるんだ！」

ーーヤバイ、早く、早く起きろ俺ーー。

“ズカズカズカ”

“ドガッ！”

耳を劈くいつもの怒鳴り声が部屋の中に轟き、凄まじい衝撃が俺の頭部を直撃した。

「ギャーッ！」

俺はけたたましい悲鳴を上げ、あまりの激痛にベッドから転げ落ちた。

痛みで脈打つ頭を押さえながら、涙ぐむ目を何とか見開いた。

丁度目の前には、ほっそりとしながらも、筋肉の程良く引き締まった健康的な白い足が見える。

無論見覚えのある足だ。

俺は、その白い足を舐める様に上へと見上げた。

俺の視線が膝を通過し、ステッチの入った紺色のスカートの中に入ろうとした時……、

“ドガッ”

再び凄まじい衝撃が俺の頭部を襲った。

“！”

今度は悲鳴すら出せなかった。

俺は、再び頭を抱え込んでその場に蹲った。

「こんな時間まで寝てた癖に、私の下着を覗こうなんて何考えてんのよ！　このスケベ！」

俺の安眠を妨げ、俺の寝込みを襲撃した犯人が声を荒げて怒鳴った。

「痛てーっ、何しやがんだ！」

俺は頭部を擦りながら、襲撃した犯人の顔を片目で見上げた。

「何しやがんだじゃ無いでしょ、いったい今何時だと思ってんのよ！」

見慣れたいつもの怒り顔がそこにあった。

“陽子だ！”

ー森下陽子。

俺の住んでいるアパートの隣に住む大家の一人娘だ。

通ってる高校は違うが、俺と同じ高三だ。

少し茶色いショートカットに引き締まった小顔。

長い睫毛と二重瞼の大きな瞳が、今は怒りで吊り上っている。

通った鼻筋の下にあるぷっくらとした唇も、目同様怒りで歪んでいる。

背は一六四センチ、体重は知らねえ。

スッキリとしたスレンダーな肢体で、服を着ていれば綺麗な顔立ちな事もあって雑誌のモデルにだって見える。

しかし服を脱げば、そこには恐らく見事に鍛え上げられた腹筋が見えるに違いない。

陽子の家は、親父さんが空手の道場を営んでいて陽子も幼い頃から空手を習っている。

親父さんの流派は、古流の流れを汲む実戦的な流派と、それに柔術の技を取り入れた親父さんのオリジナルらしい。

名前は玄神流と言う。

な～んか胡散臭いネーミングだろ？

だがコレがなかなか強え～んだ。

何と言っても最初の家賃を決める決闘で、十五歳だったとは言えこの俺様が手も足も出ずにコテンパンにヤラレたんだから相当なモンだ。

以前住んで居た横浜では、当時路地裏の猫でも俺の名前を知らない奴は居ないって程の有名人だったのによ。

今でも月に一回、翌月の家賃を賭けて勝負するが、二回に一回勝てれば良いトコだ。

この街の不良共は俺を化け物呼ばわりするが、この親父の方が余程化け物だぜ。

そんな親父に幼い頃から空手を習い続けていたんだ、この陽子が化け物みたいに強いのも頷ける。

俺は別として、そこらの不良じゃ何人束になって掛かっても勝てねえだろうな。

その陽子の踵落しを二発も喰らったんだ。

効くに決まってる。

俺の超合金頭だから死なずに済んだようなモンだ。

他の奴なら目が覚めるどころかそのまま永眠しちまうぜ。

「……ったく、ちょっとは手加減しろよ」

「なに言ってんの！　あんたこのくらいしなきゃ起きないじゃない！」

「バカ、普通なら死んでるぞ」

「あんたがこの位で死ぬ訳無いじゃない」

「くっそ～、言いたい事言いやがって」

「言いたい事って、あんたがしっかりしないから言いたい事は山ほど有るのよ。でも可哀想だからこうして言いたい事も言わず面倒看て上げてるんじゃない。少しは感謝しなさいよ」

陽子は両手を腰に当て仁王立ちで言った。

ーーくっそ～っ。

俺はこの陽子が苦手だ。

こいつは同い年の癖にいつも年上ぶって俺の世話を焼いてくる。

無論感謝はしているが、俺に対する態度と言葉使いだきゃ我慢出来ねえ。

とは言え口喧嘩じゃ絶対に勝ち目が無え。

かと言って俺はフェミニストだから女は殴れねえし。

本当にこの凶暴女だけには手を焼くぜ。

「そんな事より今何時だと思ってんのよ、もう夕方の四時よ！　帰りに道で黒田君に会ったらあんたがまた学校に来てないって聞いたから、急いで飛んで来たのよ！」

ーーチッ、鉄二のお喋りが。

俺は心の中で舌打ちをした。

ーー黒田鉄二。

俺の同級生で、数少ない親友と呼んで言い男だ。

奴はこの街最大最強の暴走族『ブラッディ・クロス』の頭で、俺程じゃないが喧嘩も馬鹿強くて義理人情も厚い良い男だ。

だが幾らこの陽子とも親しいとは言え、コイツが聞けばどんな反応するか分かってるだろうにベラベラと俺の事を話すとは何て奴だ！

ーー明日会ったら絶対ぶん殴ってやる。

「あんた、何考えてるのよ！　駄目よ、黒田君を殴ろうなんて考えてたら！」

ーーこいつは超能力者か？

「あんたの考えている事ぐらいお見通しなんだからね。黒田君、あんたに何度も電話したけど何の連絡も無いって心配してたわよ」

ーーしまった！　昨夜『ラバルブル』のミドリちゃんと飲みに行って、携帯をマナーモードにしてたのをすっかり忘れてた。

俺はベッドの下に転がっていた携帯を即座に拾い上げると、徐に開いて画面を見た。

「ゲッ！」

俺は無様な声を上げた。

何と二十六件もの着信と、十八件に及ぶメールが入っている。

着信履歴を見ると、鉄二の野郎から七回と鉄二の所のシゲから三回、『キャンディ』の明美ちゃんから二回、ギャング『ブラックムーン』の頭をやってる工藤の奴から一回、昨夜のミドリちゃんから一回、ゲッ、担任の沢田から八回も入ってやがる。

その他には、ラウンジ『桜』の舞ちゃんと居酒屋『肴ＹＡ』のバイトの久美ちゃんが一回づつ。

後は非通知か……。

メールも何件かパチンコ屋からのメールと、後は着歴と似た様なメンバーからのものだ。

俺は、あまり掛からない非通知の着歴にふと引っ掛かるものを感じたが、それ以上深くは考えなかった。

「あんた、ダブりそうだって話じゃない。恥ずかしいよダブったら」

陽子の説教はまだ続いていた。

「放っとけよ！　お前にゃ関係無いだろ！」

「あんた毎晩何やってんのよ！　いつもバイト、バイトって言って毎晩帰りが遅いし！」

陽子は俺の本当のバイトを知らない。

ーーもしバレたら踵落としじゃ済まないだろうな。

ーーそれに夜の御乱行がバレたら……。

俺は恐怖に“ブルッ”と身震いした。

想像するだけで恐ろしい。

「ちょっと！　あんた人の話聞いてるの！」

恐るべき想像の世界に入り掛けていた俺を、陽子の怒鳴り声が現実に引き戻した。

「うん？　あ、ああ。聞いてるよ」

俺は、額に嫌な汗を掻きながら慌てて返事を返した。

「ちょっと、しっかりしてよね！　で、今夜もバイトなの？」

「ああ、バイトだ……」

「もう何やってるのか知らないけど、今夜から早く帰って明日からはちゃんと学校行きなさいよ！」

「ハイ、ハイ、分かったよ。もうそんなに怒鳴るなよ」

俺は辟易した顔で言った。

「ハイは一回で良いの！　私だって怒鳴りたくて言ってんじゃないのよ！　全くあんたときたら……」

「だから分かったって！　今からシャワー浴びるんだから、出てってくんねえかな？」

そう言って陽子の説教を遮ると、俺は徐にトランクスをずり下げた。

「ぎゃあ、なっ、何見せてんのよ！　　この変態！」

トランクスを下ろして剥き出しになった俺のやんごとないシロモノを見て、陽子は赤くなった顔を押さえ悲鳴を上げながら俺の部屋を飛び出して行った。

ー毎度の事だが、陽子を追い出すにはこの手に限るな。

俺は、“やれやれ”と言った感じでそのままバスルームに入った。

「シャワーを浴びて着替えたらバイトに行かなきゃな……」

俺は、目覚ましの熱いシャワーを頭から浴びながら独り呟いた。

窓の外は、今夜起こる事を暗示するかの様な分厚い雨雲に覆われ、まだ夕方の筈なのに不気味な程暗かった。

2

2

ー！痛ってぇ～。

陽子に蹴られた頭がまだ疼きやがる。

本当にあの凶暴女だきゃあ。

俺は独り毒づくと、恨めしげに空を仰いだ。

分厚い雨雲が層になって空一面覆ってやがる。

おかげでまだ夕方の六時半なのに、何なんだこの暗さは。

無論夜の暗さとは全く異なるが、ただの物理的な明と暗では無く、もっと異質な闇がこの街を覆っているかの様だ。

また雨が降りそうだな……。

全く今年の梅雨は、雨ばっかで嫌んなるぜ。

確か梅雨入り前の長期予報では、今年は空梅雨だなんて言ってなかったか？

だから天気予報なんて当てにならねえんだよ。

これじゃいくらポジティブなこの俺でも、こんな天気ばかりじゃ気が滅入って愚痴っぽくなっていけねえ。

オマケにこの蒸し暑さだ。

暑いったらありゃしねえ。

俺は、独り毒づきながら重い雨雲の下を歩いていた。

この時間ともなると、駅前の通りは帰宅ラッシュで歩道も車道もかなり混雑している。

この時間帯では、まだ着飾ったＯＬの姿が目立つ様だ。

皆颯爽と歩いちゃいるが、信号待ちで立ち止まるとまるで申し合わせた様に、皆手にしたハンカチでバタバタ扇いでいる。

信号が変わり一斉に歩き出すが、まるでフラミンゴの群れが一斉に行進してるかの様だ。

平和な風景……。

家路へ急いでいるのか、それとも何処かお洒落な街へでも遊びに行くのか？

はたまた彼氏と一発ヤリに行くのか？

全く羨ましい限りだ。

俺はこれから地下の穴倉でバイトだって言うのによ。

俺は、店へ行く前に駅の側のコンビニで晩飯を買うべく、店のあ

るビルを通り越して駅へと向かっていた。

別に急ぐ気も無い俺がプラプラとゆっくり歩いていると、ＯＬやサラリーマン達が俺を後ろから足速に追い抜いて行く。

ＯＬはともかく、サラリーマンの連中は、俺を追い抜く時に間違ってもぶつかったりしないよう気を付けている様だ。

相手がギャングやチーマー気取りのガキならともかく、カタギのサラリーマン相手じゃいくら俺でも少しぶつかったくらいで因縁付けたりしねえってのに、全く草食動物って奴は臆病なもんだ。

まっ、それが奴らの習性なんだろうけどな。

俺は、身長が一八三センチあるから周りを見ても頭一つ高い。

しかも頭はド派手な白に近い金髪で、短めにカットされちゃいるが、ワックスでわざと立たせている。

顎の尖ったシャープな顔と、整えた細い眉毛。

目は二重だが切れ長でクールさを漂わせている。

筋の通った高い鼻と少し薄い唇。

一応これでもイケメンのつもりだ。

身体は、鍛え上げられた肉体を仕事用の白いドレスシャツで覆い、下はタックが入ってゆとりのある白のパンツと、パイソンの皮で出来た先の尖った靴を履いている。

シャツのボタンは胸まで外し、プラチナの喜平ネックレスと筋肉の盛り上がった胸を外気に晒したままだ。

シルバーは好きなんだが、何故かどうも肌に合わねえ。

俺のシルクの肌はデリケートだからな。

駅が間近に見えて来た頃、心臓に悪い様なバカでかいバイクのエンジン音が後ろから聞こえて来た。

ハーレダビドソンのＸＬＨ８８３カスタムだ。

いかにも運転し辛そうなドラッグバーハンドルで、殆どのパーツが艶消しのブラックで統一されている。

聞き覚えのある音に後ろを振り返ると、このクソ暑いのに黒いライダースの上下に身を包み、視界が悪くなる様な黒いサングラスをした鉄二の姿があった。

ーーこの馬鹿は暑いって事を知らねえのか？

見ているだけで暑苦しさが倍になる。

鉄二は、俺に並び掛けると歩道のガードレールの切れ目から、バイクを歩道に乗り上げて止まった。

「よう恭也！」

鉄二は、バイクのスタンドを立てて降りると、黒い艶消しの半へ

ルを脱ぎながら俺に声を掛けた。

「おう！」

俺達は互いの拳を合わせ、いつもの通り挨拶を交わした。

「恭也、また学校サボりやがって！　何度も電話したんだぞ！」

鉄二が言った。

「るせえ、テメエこそ陽子なんかにチクリやがって！　お陰でエラい目に遭ったんだぞ！」

「チクルなんて人聞きの悪い事言うなよ、お前が電話に出ねえから悪いんだろうが。お前このままじゃマジでダブるぞ！」

「別にダブったらそん時ゃ辞めるだけさ。卒業しなくても働くトコくらい見付かるだろうしな」

俺は煙草を取り出しながら言った。

「で、電話にも出ず、学校も休んで何やってたんだ？」

「ああ寝てた」

鉄二が“ガクッ”と肩を落とした。

「寝てただぁ？」

「ああ、オマケに携帯マナーモードにしてたの忘れててよ。ガハハ

ハ」

「ガハハハじゃねえぞ！　　ったく。ヤクザの野郎がえらい剣幕で怒ってたぞ！」

鉄二が、ライダースのジャケットからショートホープを取り出しながら言った。

ここで言うヤクザとは、担任の沢田の事だ。

沢田は、日体大の空手部の出身とかで、身体もゴツイ上に恐ろしく力が強い。

おまけに目付きが悪い上に、怒ると巻き舌で怒鳴る癖があるので、俺達の間では“ヤクザ”と呼ばれているのだ。

鉄二は、ジッポで自分の煙草に火を点け、そのまま俺に火を翳した。

俺は、顔を近付け咥えた煙草に火を点けた。

「ああ、今日アイツから何度も電話があったよ」

俺は、紫煙を吐き出しながら言った。

鉄二が、困った様に苦笑いを浮かべる。

「そう言えばお前、一昨日の夜誰かに絡まれなかったか？」

鉄二が言った。

「一昨日？　……そう言えば……、何とかって奴に喧嘩を売られたな……」

「何とかって、本当に男の名前は憶えない奴だな。一体どんな頭の構造してやがんだ？」

「ふん、俺は女しか興味が無ぇんだよ」

俺は鼻を鳴らした。

「自慢する事か？　まあそんな事はさて置いて、お前に喧嘩を売った相手ってのは成田西の村田って奴じゃなかったか？」

鉄二は、急に真顔で言った。

「むらた、ムラタ……。そうだ！　そう言えば確かに成田西の村田だとか言ってたな！」

「やっぱりそうか……」

それを聞いた鉄二の顔が更に険しくなった。

「おい、それが一体何だって言うんだ？」

「ああ……。ところで、お前の所に今日岩が来なかったか？」

「岩が？　寝てたから来たどうか良く分からねえが、俺が喧嘩した事がバレたのか？」

鉄二は頭を振った。

岩とは、少年課の刑事で俺達が苦手とするオッサンだ。

本名は岩田三郎。

通称＝岩（ガン）だ。

岩の様に角ばった顔で、しかも性格まで岩の様に頑固だからそのまんまだ。

名は体を表すと言うが、性格まで表してるのはコイツだけだろう。

歳はもう五十近い筈だ。

その癖、柔道や空手・剣道と武術は何でも御座れの武闘派で、この街の不良共にとっては恐怖の対象だ。

若い頃はキソウ（機動捜査隊）で鳴らしていたらしい。

まあ煩いオヤジだが、義理人情にも厚いし、俺達にとっては第二の父親って感じだ。

恥ずかしくて、絶対に面と向かって本人には言えねえけどな……。

「いや、喧嘩がどうこうと言う問題じゃ無いらしい。岩からお前の居場所を聞かれた時に聞いたんだが、その村田って奴がお前と喧嘩した夜からどうやら行方不明らしいんだ」

「行方不明？　まだ二日じゃねえか。それがどうして行方不明になるんだ？　中坊の女でも二日ぐらい家に帰らないなんて今時珍しくもないぜ」

俺は大袈裟に頭を振った。

だが鉄二の表情に変わりは無い。

「お前と喧嘩した時、村田は足に怪我を負ったそうだな。村田の仲間がそう言ってたそうだ」

「ああ、俺が膝に蹴りを入れてやったからな。でもそれがどうしたって言うんだ？」

「岩の話だと、あの夜奴は、お前にやられて怪我した仲間と別れ、そのまま消息が掴めないらしいんだ。で、ここからが問題なんだが、駅から少し行ったオフィス街にある四菱証券の玄関先で、大量の血痕が見付かったらしい」

「血痕？」

俺は、眉を寄せて怪訝そうに復唱した。

「そうだ。あの夜は雨が降っていて、かなりの血は流れてしまったそうだが、それでも軒下のシャッターやコンクリートにはかなりの血痕が付着していたらしい」

「それが村田のだと……？」

「ああ。タクシーの運転手が、足を引き摺りながらオフィス街へ歩く村田の姿を目撃してるし、その少し前に村田達に囲まれて駅の方に向かったお前を、何人かの人間が目撃しているんだ」

「だからって、それと俺に何の関係があるってんだ？　その血痕が村田の血だと決まった訳じゃないだろうに」

「いや、血液型は村田の血液型と一致したらしい。それに警察は現場近くの目撃証言の線から追って行って、どうやら村田に辿り着いた様だ」

「そうしたら村田は、俺と喧嘩した後、どこか怪我をしたまま行方不明になったってたって訳か……」

「そうだ。血液型も同じだしな……」

鉄二が、苦々しい表情で呟く様に言った。

俺は、下を向き少し考え込んだ。

膝の痛みに耐えながら立ち上がった村田の姿が頭を過ぎる。

いつの間にか、持っていた煙草が燃えて短くなっていた。

俺は煙草を地面に落とすと、靴で踏み躙る様に消した。

「それで何度も電話をくれたのか？」

「ああ、少し心配だったし、お前に早く知らせておこうと思ってな」

そう言って、鉄二も短くなった煙草を踏み消した。

「まあ岩もお前を疑ってる訳じゃ無いみたいだが、色々と情報が欲しいんだろう」

「でも事件なら何で岩が動くんだ？　岩は少年課で、事件なら捜査一課か何かが動く筈だろう」

「そりゃまだどんな事件かも分からないし、村田もお前も一応学生だ。それに岩はあの事件以来お前の事を心配してるからな……」

自分で“事件”と言った瞬間、鉄二の表情が暗く沈んだ。

「お前まだ気にしてるのか？　あの事件はもう済んだ事だし、それこそ岩のお陰で俺も鑑別所へ行かずに済んだんだ。あの事はもう忘れろよ」

「ああ……」

鉄二は力無く頷いた。

「それによ、あの一件以来アッチ筋とのパイプも出来たし、そのお陰でもう一つのバイトもやり易くなったしな」

俺はわざと明るく言った。

「用心棒のか？」

鉄二が聞いた。

「ああ、以前はヤクザからも目を付けられてたしトラブルもあったけど、今じゃ何所の組連中も見て見ぬフリさ。お陰で仕事も楽なモンだ」

「だが俺のせいでお前まで巻き込んで、しかもお前の命を危険に晒したんだ。決して償い切れるモンじゃ無ぇ……」

鉄二の言葉には、苦渋の響きが漂っていた。

「償う？　馬鹿かオメエ！？　償うも何も、お前が俺を巻き込んだんじゃなくて、俺が自分から首を突っ込んだんじゃねえか。お前が気にするような事はどこにも無えぜ」

「だが……」

鉄二の苦い表情は変わらない。

「オメエも族の頭張ってる割には、いつまでもぐじぐじとクドイ奴だなぁ。硬派ぶって毎日センズリばっか掻いてるからそうやって暗くなんだよ。俺みたいにチンポの乾く暇も無えぐらいにコーマンしてみろ！　世の中黄色く見えて明るくなれるぜ！」

俺の話が聞こえたのか、目が点になったＯＬが含み笑いをしながら横を通り過ぎる。

「ば、馬鹿！　こんな場所でデケェ声でセンズリだのコーマンだの言うんじゃねえ！　それに俺は毎日なんてして無えぞ！」

鉄二は、顔を赤らめ慌てて怒鳴った。

「ふん、どうだかな。テメエがセンズリ専門だって事は、道端の石っコロでも知ってるぜ」

「道端の石っコロが知るわきゃねえだろう！」

そう言うと、俺と鉄二は互いの顔を見合わせて笑った。

「ま、とにかく村田って奴とは確かに喧嘩したけど、その後の件と俺は関係無えし、岩が来たらそう言っておくよ」

「ああ、そうだな」

鉄二も明るさを取り戻していた。

「じゃ、俺はこれからコンビ二で飯でも買ってそれからバイトだから。お前はどうするんだ?」

俺が尋ねると、鉄二は腕時計に目をやった。

「俺はこれからナオ達と待ち合わせだ。実は昨夜からシゲと連絡が取れなくてな」

シゲとは本名を宮内茂と言い、この鉄二が率いる『ブラッディ・クロス』の特隊長（特攻隊長）で、クラスは違うが俺や鉄二の同級生だ。

「シゲとも連絡が取れないのか?」

俺は慌てて聞いた。

「ああ……」

「シゲなら昼間何回か電話あったぜ!」

俺は、携帯の着信履歴を思い出して言った。

「本当か？　　それでシゲは何て言ってた？」

「さあな、おれは寝ていて電話に出れなかったからな」

「使えない奴だな全く」

鉄二は呆れた。

「煩ぇなあ！　　マナーモードにしてたから仕方ねえだろ！」

「まあ良いさ。お前に電話があったのなら安心だ。それにこの件とは関係無いだろうしな。どうせお前と一緒でいい加減な奴だから、ナンパでもした女と何処かで遊んでいて電話に気付かないか、マナーモードにして寝てるんだろう」

「俺と一緒は余分だ。でもまあシゲなら大丈夫だろう。それよりわざわざ知らせてくれてありがとな！」

俺は、そう言うと手を上げてポーズした。

「ああ良いさ。お前もバイト頑張れよ！　それと、明日は学校に来いよ」

鉄二も手を上げてそれに答える。

俺は、鉄二に背を向け駅の側のコンビニへと歩き始めた。

しばらくして、鉄二がバイクのエンジンに火を入れる音がした。

けたたましいエンジン音が街中に響く。

鉄二は、俺の横を通り過ぎる瞬間さっと左手を上げて挨拶をすると、そのまま派手なエンジン音を轟かせ風の様に薄暗い通りを走り去って行った。

俺は再び煙草に火を点け、既に見えなくなっている鉄二の背中を見詰めていた。

3

3

薄暗い部屋であった。

灯された一本の蝋燭の明かりが、“ぼうっ”とその周りを不気味に照らしている。

部屋の隅まで明かりが届かない為に細部まで見て取る事は出来ないが、何かの事務所である事は間違いない様だ。

たぶん廃墟になったビルの一室だろう。

床には資料や何やらの紙屑が乱雑に散らばり、放置された事務用の机や椅子が不規則に置かれている。

電気は来ていないらしい。

この部屋……と言うより、このビル自体もう何ヶ月も、もしかしたら一年以上使われていないかも知れなかった。

物陰や壁の隅で、何かが動く気配がする。

恐らくはネズミか何かだろう。

そんな中、男は綿の飛び出した事務用の椅子に座り、一人携帯で電話を掛けていた。

何度目かの呼び出し音が、携帯電話の受話用のスピーカーから聞

こえてくる。

男は携帯電話を耳に当て、相手が出るのを辛抱強く待った。

今日既に何度も繰り返した行為だ。

こうして今日一日中何度もコールしたのだが、その都度相手が電話に出る事は無かった。

しかもこの携帯に変えてからは、非通知にしてある為に相手からコールして来る事は無い。

だから何度でも自分から掛ける。

非通知にするには理由があった。

今後の事を考えると、電話番号を残して足が付く愚を避けたかったからだ。

なかなか出ない。

ー非通知を警戒しているのか？

そんな疑念が頭を過ぎり、電話を切ろうとした瞬間、突然相手が電話に出た。

『もしもし……』

電話に出た相手の、探る様な不審に満ちた声が聞こえる。

電話に出た相手は若い男の様だ。

突然相手が電話に出て驚いたのか、また何か含むものがあってわざと黙って様子を伺っているのか、電話を掛けた男は数瞬間を置いた。

『テメエ誰だ！』

電話に出た方の男は、苛立たしげに声を荒げた。

「くくくく……。そうカリカリするな」

電話を掛けた男は、嫌らしく笑いながら、しゃがれた濁声でさも楽しそうに言った。

『何だと！』

電話に出た男は更に声を荒げた。

「俺の声を忘れたか？」

濁声が言う。

『何だと、俺がテメエに聞いてるんだ！　くだらねえ事言ってないでさっさと名前を言いやがれ！』

「くくくく……御子神、忘れたのかこの声を……。まあ残念だが仕方がない。それなら教えてやる。俺の名は村田……、一昨日の晩、貴様にやられた成田西の村田だよ！」

電話の向こう側から、電話に出た男＝恭也の驚く気配が伝わってきた。

実際、恭也は驚いていた。

夕方親友の鉄二から、村田の失踪とビルに残った血痕の話を聞かされ、つい先程少年課の岩が捜査一課の刑事と共にバイト中のこの店に来て、あの夜の事をあれこれ聞いていったばかりだったのだ。

岩のおかげで、署に引っ張られなかっただけでも幸いだった。

その時、血痕の残ったビルの状況や、村田を目撃したタクシーの運転手の話を詳しく聞いている。

血は、雨に流された為に流れ出た全体の量は不明だが、致死量では無くとも重症の筈だと言う事だった。

その直後、本人の村田から、しかもどうやってこの携帯の番号を知ったのか、恭也の携帯に直接掛かってきたのだ。

恭也は、驚かずに居られなかった。

『て、テメエ、何処に居る？　何の用だ？　何で俺の番号を知ってるんだ？』

恭也は矢継ぎ早に質問を浴びせた。

「オイオイ、そういっぺんに聞かれても答えられないだろう。それより大事な用があって電話したんだ」

村田はイラつく恭也とは逆に、何所か余裕な素振りで言った。

『テメエ、今自分がどう言う状況になってるか分かってんのか！』

「状況？　　何の事だ？」

村田は、今置かれている自分の状況が全く分かってないらしい。

『テメエ、さっき俺のバイト先に刑事がやって来て、あの夜の事やテメエとの事を色々聞いて行きやがったんだぞ！』

「……」

村田は、少し驚き一瞬息を飲んだ。

「刑事が俺を……」

『ああそうだ！　テメエの血痕が四菱ビルのシャッターや何かに大量に付いてたらしくてな、それで事件の可能性を考慮して調べていたら、テメエが一昨日の夜から行方不明だって言うじゃないか。だから刑事が必死にお前を探しているんだよ！』

恭也は吐き捨てる様に言った。

「なる程な……。だから家や後藤達からさんざん電話が掛って来てたのか…。くくくく……」

村田は、さも面白そうに含み笑いをした。

『テメエ、何がおかしい！』

受話器の向こう側で恭也が怒鳴る！

「そんな事になってるとは知らなかったが、俺はピンピンしてるよ。むしろ前より調子良いくらいだ」

『テメエいったい何の用だ！　俺はバイト中なんだ、用が無いなら切るぞ！』

「まあそう焦るな。貴様、宮内って言う奴を知っているだろう……」

村田はぞろりと言った。

『宮内だと？　なんでテメエがシゲの事を知ってるんだ？』

恭也は少し狼狽した。

悪い予感が頭を過る。

「宮内と言う奴は俺が預かっている」

恭也の予感は的中した。

『何だと！　それでシゲは無事なのか？』

「さあな、無事かどうかは自分の目で確かめたらどうだ？」

そう言って、村田は煙草を取り出し咥えると、髑髏の飾りの着いたジッポライターで火を点けた。

そして煙草の煙をわざと携帯の通話口に吹きかける。

恭也の耳に、ライターの着火音と“ゴオォッ”と言う息を吐く音が届いた。

『この前、六人掛かりで俺一人に負けた癖してやけに余裕じゃねえか！　今度はシゲを人質か？』

恭也は、声を荒げ怒鳴った。

「人質？　まあそう取るのならそれでも良いさ。俺はあくまで貴様の携帯の番号が知りたかっただけなんだがな」

『そんな事の為にシゲをサラったのか！？』

「そんなに大きな声を出さなくても聞こえてるぜ、俺は耳が良いんだ。それにまあ貴様を誘き出す餌も欲しかったんでな」

村田は、そう言うとまだ長いままで火の点いた煙草を、長い舌に押し付け“ジュッ”と消した。

『まさか昼間のシゲからの電話もテメエだったのか？』

「昼間の？　ああ、そうだよ。俺がその宮内って奴の携帯から掛けたんだ。だがその携帯も、持ち主同様充電が切れて使い物にならなくなっちまったからな、その後は仕方なく俺の携帯で掛けてたんだよ」

『テメエ、シゲを電話に出せ！　無事かどうか話をさせろ！』

「嫌だね」

『何だと！』

「くくくく……馬鹿か貴様は。俺は別に身代金目当ての誘拐犯じゃないんだぜ。宮内を電話に出すも出さないも俺の勝手だ。貴様が宮内を取り返したいかどうかが問題なだけだ。そうだろ？　御子神……」

村田はあくまで余裕の態度を崩さない。

『シゲが無事かどうかを確認しねぇ事にはテメエの言う事に従うつもりは無え！』

「ならば宮内がどうなっても良いんだな？　俺はどちらでも良いんだぜ。貴様が来ないなら、宮内が無事に朝日を拝む事は金輪際出来なくなるだけだ。そしてまた俺は、次の餌を見付けて来れば良いだけの事だしな」

『……』

電話の向こう側で恭也は押し黙った。

恭也の怒りと悔しさが、携帯電話を通して伝わってくる。

“ギリリ”と歯軋りする音でさえ聞こえて来そうであった。

『……分かった。で、どうすれば良い？』

恭也は搾り出す様に言った。

堪え切れぬ怒りが、一言一言に込められている。

「くくくく、それで良い。時間は今夜二時、場所は先日貴様と殺りあった場所だ」

『陸橋の下だな？』

「そうだ。この前と同じ場所に深夜二時までに来い。必ず一人で来るんだぞ。あとこの事は誰にも知らせるんじゃねぇ！」

『分かってる。テメエらぶっ殺すぐらい俺独りで十分だ』

「くくく、相変わらず威勢が良いな。じゃあ待ってるぜ」

『テメエ、シゲを無事に連れ……』

恭也が電話の向こうで叫ぶのを最後まで聞かず、村田は早々と電話を切ってしまった。

村田は、携帯を折り畳みズボンのポケットに仕舞った。

短くなった蝋燭の最後の瞬きが、村田や周りの机や椅子の影を不気味に揺らしている。

その瞬間、蝋燭の火が出し抜けに消えた。

辺りは一瞬にして闇に閉ざされた。

一片の明かりも無い。

“……”

その時、村田のすぐ後ろで急に人の気配がした。

闇が人の形に凝り固まった様である。

真っ暗な為に姿は全く見えないが、その気配は二つあった。

「上手く行った様だな……」

闇の一つが喋った。

若い男の声だ。

「ああ、それもこれも皆あんた達のおかげだ」

村田は振り向きもせず、今声を掛けた闇に答えた。

「感謝するのはまだ早い。その御子神とか言う奴を始末してからの話だ」

闇が言った。

「……」

もう一つの闇が、“御子神”の名を聞いた瞬間、押黙ったまま息を呑んだ。

村田も、今御子神の名を口にした闇も、その事に気付いたがあえて何も言わなかった。

静寂が、闇を一層重くしている。

その無明の闇の中で、村田は密かに笑った。

4

4

「ここか……」

老人はぽつりと呟いた。

オフィス街のとあるビルの前だ。

このビルは、先日失踪した村田と言う少年が、消息を絶つ前最後に雨宿りしたと思われる四菱証券ビルの前である。

シャッターや地面に付着していたと言う血痕は既に綺麗に洗い流されており、最早特別変わった点は見受けられない。

老人はビルの前にぽつりと独り佇んでいた。

背は小柄で、一五五センチあるかどうかと言った所だ。

少し痩せた顔は、深い皺と白い髭で上下半々に覆われている。

白く目尻まで垂れ下がる様に伸びた眉毛の下には、少し窪んだ優しげな目が見て取れる。

鼻の下から口全体を覆った白く長い髭は、もみあげから生えている髭と繋がり、胸の辺りまで伸びていた。

その真っ白で伸び放題の髭を、胸の辺りで紐で結び束ねている。

髪も真っ白で、もう何年も床屋に行って無いのだろう。

伸びたままの髪をオールバックにして、後ろで無造作に束ねている。

しかしこの老人には、この髪型が不思議と良く似合っていた。

笑えば如何にも好好爺と言った感じだ。

歳に似合わぬ引き締まった身体を紺色の甚平で包み、足には草履を履いているが不思議とだらしなさを感じさせない。

この老人の身体に、何処か“シャン”としたものを感じるからだろうか？

風格……、そう言っても良いかも知れなかった。

老人は、黒色の布で出来た巾着袋を、腰まで届く長さの紐で肩から斜め掛けている。

身体の割には大きめの袋で、目一杯物が入れられているのかたっぷりと下に垂れ下がっていた。

背中には、六十センチ程の筒の両端を紐で縛り、それを襷掛けにして胸の所で結んでいる。

何処か時代錯誤な雰囲気を感じさせる不思議な老人であった。

老人は、顔を上げ大きく闇を吸い込むとゆっくりと辺りに目を配った。

辺りは、生き物と化した様な禍々しい闇が重く漂っていた。

濃密な湿度を内包した闇は、同じく濃密な湿度を持った肉食獣の吐息の様な風で、深く呼吸をしている。

風自体が粘り気を帯びているかの様だ。

「はてさて、時間が経っておる上に雨も降ったみたいじゃから、果たして間に合うかのう……」

そう独り呟くと、老人はビルの軒下にゆっくりと屈み込み、下げていた巾着袋から、約直径二十センチ程の八角形をした薄い箱の様な物を取り出した。

八卦鏡である。

八卦鏡は、八角形の中心部に鏡を埋め込んだ物で、邪気を反射させて化殺（軽減）、あるいは良い気を集中させて吉を増す目的で使用される風水等の仙具である。

種類は凸面鏡、凹面鏡、平面鏡等それぞれ配した三種類のものが一般的で、鏡が無く八卦記号だけのものを貴節鏡・羅経鏡と呼ぶ物もある。

この八卦鏡は凹面鏡の様だ。

通常八卦鏡には、鏡の周囲に八角形を象る様に八卦が施されている。

八卦とは、『はっけ』と言い（易の専門家達は『はっか』と呼ぶらしい）、古代中国の帝王・伏羲が考案したと伝えられる易の一つで、まず対（太極）となる物を陰と陽の両儀に分け、それぞれに陰（柔）と、陽（剛）をー と言った爻と呼ばれる記号で表し、その両儀を老陽・少陽・少陰・老陰の四つに分割した物を四象と言って、爻を二つ組み合わせた記号で表している。

そしてそれら四象を更に八分割した物を、爻を三つ組み合わせた記号 一三爻で表し、

乾ーケン（天・父）

兌ーダ　（沢・少女）

離ーリ　（火・次女）

震ーシン（雷・長男）

巽ーソン（風・長女）

坎ーカン（水・次男）

艮ーゴン（山・少年）

坤ーコン（地・母）

とそれぞれに名前と意味を付け、八卦と呼んだ。

それら八卦の記号＝三爻を八角形に配し、その中心に鏡を埋め込

んだ物が八卦鏡なのである。

ただしこの老人の持っている八卦鏡は、通常の物と少し違っていた。

形式としては帰蔵図（殷王朝で用いられた易で、他には周易の先天図と、夏の易の連山図がある）で、それぞれの三爻の下に五を除く一から八までの漢数字が書かれている。

いわゆる魔方陣だ。

魔方陣とは、縦・横・斜めのいずれの列の数字を足してもその合計が同じになると言った物で、この場合河図洛書に関る数字を、それぞれの卦に配し配列させた魔方陣となっていた。

そこまでは普通の八卦鏡とさほど変わらないが、中心の五の部分は鏡となっており、水銀を塗った底の部分には漢数字の五と、それを囲む様に邪・魔・魍・幽・鬼・怨・蠱・呪の八文字が八角形に朱墨で記されていた。

まるで邪気を化殺するのでは無く、むしろ吸収して増幅しようとしているかの様だ。

老人は、その奇妙な八卦鏡を取り出すと、同じ袋の中から、長方形の短冊の様な黄色い紙と、尖端が丸く胴の部分が筒になった小さな筆入れを一緒に取り出した。

八卦鏡をビルの軒下の地面に置いた後、取り出した紙を左手に持ち、右手には筆入れから口を使って器用に取り出した細筆を握っている。

筆の毛先には既に朱墨が付いているらしく、筆先から紅い墨が地面に滴り落ちていた。

老人は滴り落ちる朱墨を気にも止めず、左手に持った黄色い紙に何やらすらすらと書き始めた。

一目見ただけでは、まるで象形文字と漢字を組み合わせた様な文字が見えるだけで、いったい何を書いているのかまでは判別出来ない。

しかし、老人の動きに澱みや躊躇は全く無かった。

老人は何やら紙に書き終えると、その紙を血痕が残っていたとされる地面へ置き、その上に先程の八卦鏡を乗せた。

そして中指と人差し指を立てた左手を口元に当て、何やら口の中でボソボソと唱え始めた。

どうやら老人は、何かの呪を唱えているらしい。

老人の額から大量の汗が滴り落ちる。

この急激な発汗は、大気の温度や湿度によるものだけでは無いらしい。

老人の顔が険しくなり、深い皺が更に深みを増している。

同時に呪を唱える老人の声が高まり、次第に激しさを増して行く。

それと同調する様に、老人を包む周囲の闇が更に濃くなった様に見えた。

いや、実際に濃くなっている。

まるで紙の上に置かれた八卦鏡の凹面鏡に、闇が吸い寄せられているかの様だ。

そして吸い寄せられ八卦鏡に吸収し切れない闇が、老人の周囲に蟠っているのだ。

老人の姿が闇に霞んで見える。

老人の姿が闇に覆われ見えなくなろうとした瞬間、老人の唱えていた呪が止んだ。

それと同時に、老人を覆っていた闇も一瞬に霧散した。

今では老人の姿がはっきりと見て取れる。

老人は、玉の様な汗を掻き肩で大きく息をしていた。

足元を見ると、地面に置かれていた八卦鏡と、その下に敷かれていた紙にも著しい変化が起こっていた。

何と、八卦鏡の真ん中に埋め込まれた凹面鏡が、まるで焦げた様に黒く変色し底に書かれていた文字も全く見えなくなっている。

しかも、八卦鏡自体もどす黒い煤に覆われた様に、あちこちが黒く汚れていた。

そして八卦鏡の下に敷かれた紙も、先程までの黄色とは打って変わって凹面鏡と同様に真っ黒に変色していた。

しかも煤けているのではなく、まるで墨汁をぶちまけた様に完全な黒色に変色しているのだ。

「やれやれ、何とか間に合った様じゃの」

老人は、黒く汚れた八卦鏡を袋から取り出した白い和紙で包むと、もう一度袋へ仕舞い直した。

そして黒く変色した紙を拾い上げると、そのまま腰を伸ばして立ち上がった。

「ふう、歳は取るもんじゃないのう……」

老人はそう呟くと、紙を持ってない方の手でポンポンと腰を叩いた。

「まあこれなら何とかなるじゃろう」

老人は、手に持った黒い紙を見詰め、懐から徐に携帯電話を取り出すと、慣れた手付きで携帯のアドレスを開き何処かへ電話を掛け始めた。

少しコールした後、相手が電話に出た。

『もしもし……』

この深夜に関らず、電話の相手は予想外に早く出た。

電話の声は男の様だ。

しかも四十代位で落ち着きのある低いバリトンだ。

「おう佐々木君か、夜分に悪いのう。起きておった様じゃな？」

『これも仕事なので当然です。こちらこそ老師にご無理を言って申し訳ありません。しかしこんな時間にいったいどうされたのですか？』

佐々木と呼ばれた男が老人に尋ねた。

「うむ、お前さんとの話では明日の筈じゃったが、もうかなり時間が経っておる上に、これ以上この場所を人が歩いた後では間に合うものも間に合わなくなるでのう」

『えっ！　ではもう既に現場におられるのですか？　では私も直ぐ駆け付けます！』

電話の男＝佐々木は驚き電話の向こうで慌てて叫んだ。

「良い良い、儂が勝手に来ただけの事じゃ。お前さんが気にする事は無い」

老人は優しく言った。

『しかし老師……』

佐々木は言い縋った。

「大丈夫じゃよ。それにおかげでどうやら間に合った様じゃ」

老人はそう言うと、手に持った先程の黒い紙を見詰めた。

『では反応が出たんですね！』

佐々木が興奮して言った。

「ああ、だいぶ弱くなっておるが何とかなったわい。じゃがもう一日早ければもっとはっきり出たのにのう」

『申し訳ありません。ですが情報がなかなかこちらに回って来ないもので……』

佐々木のバリトンが弱々しく響いた。

「仕方ないわい。お役所仕事は縦割りじゃからのう」

老人は、少し意地の悪い言い方をした。

『本当に申し訳ありません。我々の課は部外秘になっている為所轄の情報がなかなか回って来ないのです。今回も私個人が私的に老師にお願いしたくらいですので……』

「分かっておる、分かっておるて。お前さんがあんまり申し訳なさそうに言うものじゃから、儂がつい意地悪で言うたまでの事じゃ。いや、儂こそ済まなかった」

老人は、電話越しに申し訳なさそうに頭を掻いた。

『で、これから老師はどうされるおつもりですか？』

佐々木は気を取り直して言った。

「うむ、儂はこれからこ奴の居場所を探す。このまま放って置いたら何時また犠牲者が出るとも限らんからのう」

『危険です！　奴が今何処で、しかも何匹居るのか分かったもんじゃありません。どうしてもこれから行かれると言われるのであれば、私も同行します！』

佐々木は、言葉遣いは丁寧でも否定を許さぬ強い口調で言った。

「大丈夫じゃよ。恐らくこ奴は貴族ではあるまい。儂一人で十分じゃ。それに危険となれば、儂一人くらいどうとでも逃げ出せるしな。儂ももう歳じゃ、無茶はせぬよ」

老人は言った。

『ならば尚更……』

「本当に大丈夫じゃよ。それに来るとしても出動記録はどうするのじゃ？　儂に頼む位じゃから、まだこの件は上が奴らの仕業じゃと認識しておらぬのであろう」

『ですが、私の方から勝手にお願いしておいて、老師だけを危険な目に合わせる事は出来ません！』

佐々木が強い口調で言い縋る。

「心配するでない。これでもかつては武神と呼ばれた男じゃ。歳は取っても奴らの一匹や二匹、どうと言う事は無い。それともお前さんは儂の腕が鈍ったとでも言うのかね？」

『分かりました。老師が今尚最強の武術家であり最高の仙道士である事は認めます。ですがくれぐれもお気を付け下さい。何かあれば直ぐ連絡を下さい。いつでも出動準備は整えておきます』

「うむ、何かあれば連絡しよう。結果は明日、飯でも馳走になりながら報告するとしようか」

老人はぬけぬけと言った。

『分かりました。ご連絡お待ちしております。ですがくれぐれもお気を付け下さい』

「分かったよ。まったく心配性じゃなあお前さんも。では明日連絡するよ」

そう言って老人は電話を切った。

老人は、再び携帯電話を懐に仕舞い込むと、手に持っていた黒い紙を開いた手の平に乗せ変えた。

そしてまた呪を口の中で唱える。

すると黒い紙がひとりでに動き出し、見る見る内に一羽の黒い烏に姿を変えた。

烏にしてはかなり小さめではあるが、その姿形、羽毛の色艶までどう見ても生きた烏だった。

傍から見れば何かの冗談か手品にしか見えない。

紙から変じた黒い烏は、老人の呪によって更に命を吹き込まれた様に、老人の掌の上でバタバタとその小さい羽をバタつかせた。

老人が手を上に押し上げると、その反動で烏が勢い良く夜空へ舞い上がった。

烏は、意図的に駅の方角へと羽ばたいて行く。

老人は急ぎ烏の後を追った。

老人の行く手には、暗く不気味な雲が広がっていた。

5

5

俺は、深夜の街を歩いていた。

約束の午前二時まで後五分程だ。

バイトを定時より三十分早い午前一時半に上がり、ゆっくりと着替えを済ませて店を出た。

外は相変わらずの蒸し風呂状態で、いつ雨が降り出してもおかしくない空模様だった。

ーーそう言えば、この前奴と喧嘩した夜もこんな感じの夜だったな。

俺は、どす黒い雨雲に覆われた夜空を見上げて思った。

喧嘩をしに行く前にこんな気分になるのは初めてだ。

何か不安とも名状し難い何かが、この夜空を覆う不気味な雨雲の様に心の表層を覆っていた。

何かが心に引っ掛かってやがる。

先日俺と喧嘩した後、四菱ビルの前で大量の血痕を残したまま今も行方不明だと聞かされていた村田からの突然の電話。

奴は、俺の番号を知らない筈なのに直接俺の携帯に電話を掛けて来た。

奴が言うには、シゲを人質にとっていて、俺の携帯の番号はシゲの携帯のアドレスで知ったと言っていた。

シゲは大丈夫だろうか？

シゲのゴリラ顔が頭に浮かぶ。

またそれとは別に、一昨日六人掛りで、しかも道具まで用意して俺にぶっ飛ばされた男とは思えぬ、電話での村田の余裕に満ちた話し振り……。

あの後村田に何があったのか？

奴が負っていたとされる怪我はいったいどうなったのか？

警察が動く程の出血だったのだ。

生半可な傷である筈が無い。

なのに村田の口調からは、そんな怪我を負っている様子は全く感じられなかった。

ではあの血痕は村田のでは無かったのか？

それにまだ二日しか経っていないが、あの時俺に蹴られて痛めた筈の膝はもう治ったのか？

いつもなら喧嘩相手の事で悩んだり考え込んだりする俺じゃ無えんだが、さっきから第六感としか言いようの無い何かが、俺の中で

警報を鳴らしてやがる。

こう言う時の俺の勘は良く当たるんだよな。

俺は、イラついて目の前にあった某ローン会社の看板を思い切り蹴飛ばした。

“ドガッ！”

ガードレールに紐で括り付けられていたトタンの看板は、派手な音とともに“べこり”と大きく凹んだ。

近くに居た何人かの酔っ払いや女達が、ビビった顔つきで遠巻きから俺の様子を伺っている。

俺は、“ふん”と鼻を鳴らし交通量の減った大通りを横切ると、一昨日と同じ様に陸橋下の細い側道へと入って行った。

ー何だか悪い予感がどんどん膨らんで行きやがる。

陸橋の下の側道は、先日と変わらぬ薄暗さで不気味な事この上無い。

細い側道を少し歩くと、目的地の入口が見えて来た。

コンクリートで囲まれた入口は、まるで魔物が口を開けている様に見える。

俺は悪い予感を振り払い、躊躇する事無くそのままトンネルの中へと入って行った。

相変わらずトンネルの中は薄暗く、壁の照明が不規則な明滅を繰り返してやがる。

トンネルの中は外に比べて更に蒸し暑かった。

空気が澱んでいる。

獣の臓器の中にでも居るかの様だ。

見ると、トンネルの壁や地面のあちこちには、一昨日の喧嘩の名残りとも言うべき赤黒い染みが点々と残っていた。

トンネルの中程辺り、明滅する照明の不規則な灯りに照らされて、仁王立ちする村田の巨体が見えた。

村田は、たった独りで何の武器も持たず、一昨日と同じ黒のTシャツとバキータイプのブラックジーンズと言う格好で腕組みをして立っていた。

着替えをしていない為か、Tシャツやジーンズはかなり汚れて見える。

ーーやはりコイツに何かあったのは間違いない様だ。

黒人の様な大きな目が俺を“ギロリ”と睨んだ。

あの晩俺にサングラスを壊された為、奴の血走った双眸が見えている。

何かが村田の中で変わっていた。

全体的に薄汚れてはいるが、雰囲気は全くの別人だ。

禍々しい程の“凄み”が備わっている。

たった二日で人はこうも変われるものなのだろうか？

俺は、村田の変貌振りに少し驚いていた。

「良く来たな御子神！　待っていたぞ」

村田の濁声がトンネルの中に響く。

俺は嵌めていた腕時計をチラリと見た。

いつもの俺は、男との約束を守る気なんてさらさらねえんだが、

時計の針は奇しくも丁度午前二時を指していた。

第二章1：覚醒

第二章

『覚醒』

1

「テメエ、シゲはどうした？」

俺は、村田に向かって叫んだ。

このトンネルの中には、どう見ても俺と村田の二人しかいない。

「テメエ、シゲをサラったって電話で言ってやがったが、シゲは今何処にいる！」

俺は、余裕な態度の村田を睨み付け、暴風の様な殺気と共に叫んだ。

触れただけで火傷しそうな程の殺気だ。

しかし村田は、憎悪に満ちた顔で、俺の殺気を正面から受け止めやがった。

俺と村田の間に激しい殺気がうねる。

気を感じる事に長けた人間であれば、凄まじい殺気が俺達の間で激しくぶつかり渦を巻くのが見えたかも知れねえ。

「あのガキの事か……。余程気になるとみえるな？」

村田が、ふてぶてしい態度で言いやがった。

「当たり前だ！　俺達の事はあいつには関係ないだろう。シゲは今何所に居る？」

「くくく……、見ての通りここには居ない。奴の居所が知りたかったら腕ずくで聞くんだな」

村田の余裕は変わらない。

「腕ずくだと？　テメエ、この前俺に負けたくせにエラく余裕じゃねえか？」

「ああそうだ。だがさっきも言っただろう、今の俺はこの前の俺とは違うと……。でもまあ良い。お前が俺に勝ったら奴の居場所を教えてやる」

「俺が勝てたらだと！　テメエ如きが俺様に勝てるとでも思ってやがるのか？」

「そうだ、お前はここで惨めにくたばるんだ」

「テメエ！」

俺の怒りが頂点に達した！

爆風の様な殺気を纏い、俺は全身のバネを一気に開放し村田に躍り掛かった。

肉食獣のスピードで村田に迫る。

俺は、着いた左足に力を込め、上半身の勢いはそのままで腰を回転させると、稲妻の様なローキックを村田の左足を目掛けて放った。

普通ならこの一発で勝負が着いてしまう程の蹴りだ。

だが、必殺のローキックが空を切った。

受けられたんじゃねえ。

躱されたのだ。

俺の蹴りは、村田の左足があった場所に虚しく弧を描いただけであった。

俺は驚愕した。

しかし次の瞬間、俺の背中を戦慄が駆け抜けた。

俺は、蹴りをかわされた不安定な姿勢のまま、咄嗟に身を投げ出す様に前へと転がった。

頭のあった辺りを、凄まじいパンチが音を立てて通り過ぎる。

髪が焦げそうなパンチだ。

実際に、髪の毛が何本か引き千切られた。

俺様の獣の様な反射神経だから何とか躱せた様なモンだ。

だがそのお陰で、姿勢で無理に転がった為に旨く受身を取る事が出来ず、固いアスファルトの地面で肩と背中を強打してしまった。

肩と背中に鋭い痛みが走る。

しかし痛みを気にしている暇なんか無え。

すぐ様身体を起こして膝立ちの姿勢で振り返ると、目前に村田の丸太の様な脚が迫っていた。

ーーヤベエ！

咄嗟に身体を丸め、両腕で顔や胸をガードする。

そこにバットのフルスイングで殴られた様な衝撃が走った。

俺は、両腕でガードした姿勢のまま、コンクリートの壁まで吹き飛ばされた。

“ゲフッ！”

音を立てて背中からコンクリートにぶつかり、一瞬息が止まる。

俺は、次の攻撃に備え再び痺れる腕で顔をガードすると、壁に背を預けたままよろよろと立ち上がった。

鼻から大きく息を吸い込み、何とか呼吸を回復しようと努める。

だが、予想に反して次の攻撃は無かった。

村田の野郎が、余裕の態度で俺を見下して笑ってやがる。

見た目や印象だけではなかった。

ここに居る村田は本当に別人の様だった。

俺のローキックを受けたのならまだしも、あそこまで完璧に躱すなど素人技じゃ考えられねえ。

あの時村田は、俺の放ったローキックを人間とは思えぬ反射神経とスピードで、身体ごと横に移動して躱しやがったのだ。

俺も相手の攻撃を体捌きでかわす事ぐらいは出来るが、それは相手の攻撃が大振りだったり、動きが読めていて初めて可能な事だ。

だが俺が放ったローキックは、K―1選手でも躱す事は困難な筈だ。

しかもローキック自体、躱す事が非常に困難な技だ。

無論、蹴りを放つ瞬間目と肩でフェイントもしっかり掛けている。

だが村田の野郎は躱しやがった。

しかも、その後村田の放ったパンチや蹴りもトンでもねえ威力だった。

まともに喰らってれば、如何にタフが売り物の俺様と言えど、勝負は一瞬で着いていたかも知れねえ。

「よく躱したな。さすが御子神恭也と言ったところか……」

喘ぐ俺を見下したまま、村田は余裕の表情で言った。

ーーヤバイ、コイツはヤバイぜ。

俺は思った。

だが今は、この与えられたチャンスを有効に使う他無え。

何故村田が、短期間でこれ程化け物じた強さを身に付けたのか訳が分かんねえが、現実は現実だ。

それよりも奴は今己の力に酔い、勝ち誇って余裕を見せている。

ならばこのチャンスに呼吸を整え、受けたダメージをチェックする事が肝要だ。

ーー頭は……大丈夫だ。

ーー呼吸も整って来ている。

ーー腕はかなり痛むが、折れてはいない。

ーー肩も背中も打撲程度だ。

ーー脚のふら付きも治まって来ている。

直撃の無かったのが幸いだった。

これも獣並みの反射神経の賜物だ。

だが今ひとつ時間稼ぎをして、相手の隙を伺うに越した事は無え。

「おいテメエ、凄えーじゃねえか。一昨日とはエラい違いだぜ。一体何があったのか勿体振らずに教えろよ」

俺は、両腕のガードを崩さず、油断無く村田の気配を伺いながら訊いた。

「お前が知る必要は無い。……が、もうすぐお前は死ぬんだ。冥途の土産に教えてやろう。俺はなあ、最強の生き物になったんだよ！」

「最強の生き物だと？」

「そうだ！　俺は夜の眷属、ヴァンパイアになったんだ」

村田の勝ち誇った声が、トンネル中に響いた。

黒い顔に喜悦の色を浮かべている。

「ヴァンパイアだと？　テメエ気でも狂ったのか？」

「くくく、信じられぬのも無理はないな……。では見るが良い！」

そう言うと、村田はTシャツの襟を引き下げて首を横に伸ばす様に回らせた。

見ると、太い首筋に完治した傷跡の様な痣があり、その部分の肉

が異様に盛り上がっている。

しかも盛り上がった肉の中心には、確かに映画で見た様な二個の穴を穿った傷跡が見て取れた。

「これで分かったか？」

村田が言った。

俺は、あまりの驚きに一瞬攻撃する隙を見逃してしまった。

「……」

「くくくく、怖くて言葉も出ないか？　そりゃそうだろうな。俺は何と言っても最強の生物へと進化したんだからな！」

村田はさも満足そうに笑った。

「へえ、凄げえじゃねえか！」

村田が、下卑た高笑いをして俺から目を離した一瞬を、今度は俺も見逃さなかった。

俺は、渾身のバネを込め村田へと大きく一歩踏み込んだ。

村田が恭也の動きに気付いた瞬間、俺は村田の目の前で左手を開いた。

「喰らえこのクソバカ！」

村田が俺の手に気を取られた隙を狙って、村田の股間を下から思い切り蹴り上げる！

“グジャ！”

鈍い音を立て、村田の睾丸が潰れた！

「オゲゲゲェ！」

村田が、大きな目を更に見開いて悶絶した。

眼球が飛び出そうな程に目を見開いている。

黒い顔が更にどす黒く鬱血していた。

「ざまあ見ろってんだ、この馬鹿！」

思わず俺は叫んだ。

完璧な攻撃だった。

慢心した村田が、気を緩めて俺から視線を反らせた一瞬を突いたのだ。

しかも、俺の動きに反応して視線が戻る所へ、左手を拡げる事で視界を奪い、同時に拡げた左手に意識を向けさせる完璧なフェイントだ。

更に、意識を上に集中させておいて股間への必殺の蹴りを放つ。

これでは、幾らヴァンパイアと言えど生物学的に男であれば効かない筈が無え。

村田は、両手で股間を押さえ膝を折った。

あまりの激痛に呼吸も満足に出来ないらしい。

村田の股間に赤黒い染みが広がって行く。

だが俺は、攻撃の手を休めなかった。

膝が折れて少し低くなった村田の顔を、左右から挟む様に両手で叩いた。

“パン！”

軽い音を立て、俺の平手が村田の両耳を塞ぐ形で当たった！

村田の身体が弓反りにのけ反る！

俺は手のひらを僅かに窪ませ、そこに溜めた空気ごと村田の両耳を叩いたのだ。

村田の鼓膜が破れた！

ーーチャンスだ！

ーー今殺らなきゃ後が無え。

「まだだテメエ！」

俺はそう叫ぶと、開いた両手を拳に握り変え、凄まじい勢いで連突きを放った。

ー－水月。

ー－檀中。

ー－咽喉。

ー－顎。

ー－人中。

まず水月には左正拳突きを、檀中には右手中指を突出して折り曲げた中指一本拳を、咽喉には左の中指一本拳を、更に顎には手首の甲の部分を使った右孤拳で下から打ち上げ、そのまま右手人差し指で一本拳を作ると、鼻と口の真ん中にある人中を突いた。

空手の正中五段突きとは全く違うが、必殺の正中線への連撃だ。

“ズズーン”

村田は悲鳴を上げる事も出来ず、そのまま前のめりに倒れ込んだ。

手足がひくひくと痙攣している。

さすがのヴァンパイアでも、急所まで変化する訳では無いようだ。

例え対人間用の技でも有効であるに違いなかった。

俺の全身に、歓喜が駆け抜けた。

だが俺は、最後の止どめを刺すべく倒れている村田の後頭部へ更に鋭い蹴りを放った。

“！”

しかし俺の踵は、村田の後頭部には当たらなかった。

踵が村田の後頭部を踏み抜く寸前、村田のごつい手が足を掴み取っていたのだ。

今度は、俺の全身を戦慄が走った！

村田は、俺の足を握ったまま、ゆっくりと身体を起こした。

凄まじい力が、足を完全にロックしている。

まるで万力の様な力だ！

「テメエ、離せこの馬鹿！」

俺はそう叫ぶと、今足を掴んでいる左手の肩と腕の付け根の部分を、もう一方の足で思い切り蹴った！

この部分をピンポイントで蹴られると、一瞬腕の力が抜ける。

村田が足を離した。

俺は、蹴った勢いそのままに後ろへ飛んで村田との間合いを取った。

着地した瞬間、村田に握られた足首に痛みが走る！

どうやら手を離す瞬間、村田は足首を捻って捻挫させた様だ。

村田は、まるで幽鬼の様に満身創痍の身体でゆっくりと立ち上がった。

黒い顔は更にどす黒く歪み、口や耳から血を垂れ流している。

喉も、今の攻撃で喉仏を潰され青黒く内出血していた。

肩で大きく息をするが、満足に酸素を取り込む事が出来ないらしい。

股間はブラックジーンズの為多少分かり難いが、それでも明らかにその部分に赤黒い染みが広がっていた。

村田は、俺の蹴りで痺れた左手腕をだらりと垂らし、足腰を震わせながら憎悪の目で恭也を睨み付けきやがる。

ーー何て奴だ。

これには流石の俺も舌を巻いた。

今の連撃は完璧だった。

人間であれば、当然死に至る程の攻撃だった筈だ。

しかし村田は、ダメージこそ受けたものの、反撃をして今また立ち上がって来たのだ。

ーーったく何て野郎だ……。

村田は何か話そうとしたが、喉を潰された為声が出ないらしい。

“パチ、パチ、パチ”

その時、トンネル内に惚けた拍手の音が響いた。

“！”

驚いて視線を向けると、俺達が入って来たのとは反対側の出入口に、二つの人影が立っていた。

一人は男、もう一人は女の様だ。

今拍手をしたのはどうやら男の方らしい。

「素晴らしい。たかが人間にしては見事なものだ」

男は言った。

黒いシャツに黒の皮パン。

ーーこの野郎も全身黒ずくめか？

ーー村田の仲間か？

俺の身体に更なる緊張が走った。

鼓膜が破られ音の聞こえない村田は、表情を強張らせたままその黒ずくめの男を見ている。

二人（二匹？）の男女は、トンネルの中をゆっくりと歩いて俺達に近付いて来る。

だがその時、歩み寄る女の顔を俺ははっきりと見た！

「しょ、晶子じゃねえか！」

俺は、あまりの驚きでその場に凍り付いた。

2

2

「しょ、晶子じゃねえか！？」

俺は、驚きのあまりその場で固まってしまった。

「恭也……くん……」

晶子は、気まずそうに目を伏せた。

「ふうん、やっぱり知り合いだったんだな」

黒ずくめの男はニヤニヤと笑って言った。

「誰だ？　テメエ」

俺は、男を睨み付ける。

「俺の名はショウ……」

黒ずくめの男が言った。

「さっき村田が君に電話をしてから、どうも晶子の様子がおかしいとは思っていたんだが、全く世間は狭いものだな」

ショウは、隣りで気まずそうに目を伏せている晶子の方へちらりと目を向けた。

「晶子、どうしてお前がここに……」

俺が話し掛けても、晶子は目を伏せたまま合わそうとしない。

「お前、こいつらの仲間なのか？」

「わ、私……」

晶子は言い淀んだ。

「言い難いなら俺が言ってやろう。そうだ、この女は、我々夜の眷属の一員になったのだ。もう貴様ごとき下等な人間の仲間では無い！」

俺は怒りに震えた。

「テメエーッ！　テメエが晶子やこの村田をヴァンパイアに変えたのか？」

「その通りだ」

「何故、何故だ！　何故晶子を！」

俺は、激しく首を振って叫んだ。

晶子の表情が更に沈む。

「愚かな事を聞く……。生きる為だよ。お前達人間が、他の生き物を食べるのに理由があるか？我々ヴァンパイアも飢え、渇く。だか

ら血を飲む。当然じゃないか」

「くっ……」

俺は言葉に詰まった。

「だいたいこの村田は、自分から懇願したのだよ。ヴァンパイアにしてくれと。何故だか分かるか？」

満身創痍の村田に目をやると、耳が聞こえないのに拘らず、村田は憎悪の籠った視線を俺に向けていた。

「お前に復讐する為だよ」

ショウは言った。

「なっ……、馬鹿な……」

俺は、一言洩らすのが精一杯だった。

「この晶子は違うが、村田は自分の意思で我々の眷属となったのだ。そんな事より、御子神恭也だったかな？　一つ聞きたい事がある」

「何だ？」

「たかが人間の分際で、例え成りたてとは言え、ヴァンパイアとなった村田をここまで追い込むとは、貴様まさかハンターか？」

「ハンター？　何の事だ？」

「そうか、ハンターでは無いのか……。ならば尚更素晴らしい。どうだ？　お前も我々の仲間にならないか？」

「何だと！　俺にテメエらの様なヴァンパイアに成れって言うのか？」

「どうだ？　その強さが更に増すんだぞ。それにその若さのまま永遠に生きられるのだ。悪い話ではあるまい」

「馬鹿言え、俺は別にこれ以上強くならなくたって構わねえし、永遠の命なんてまっぴらゴメンだ。それに、何より俺は、仲間だとか誰かとつるむってのは大嫌いなんだよ！」

「愚かな……。我々の眷属の一員となれば、警察もヤクザも誰も恐れる事無く、何でも好きな事が出来るのだぞ！」

「余計なお世話だ！　それに俺は別に何んも怖えモンなんて無えし、今のままで十分自由だ。それに……、それにテメエだけは許さねえ！」

俺は、再び気を練った。

ショウは、涼しい顔で俺の気を受け流していやがる。

「全く馬鹿な奴だ。せっかくのチャンスを……。お前が仲間になると言うなら、そこの村田を処分してやっても良いと思ったんだがな……」

ショウはさらりと言って退けた。

その表情には毛程の感情も無え。

晶子は息を飲んだ。

だが村田には何も聞こえていない。

「テメエ、村田は使い捨てか？」

「くくく、その男はこの晶子の渇きを潤す為に我々の眷属に誘ったのだ。本当はただ血を貰うだけでも良かったんだが、餌が暴れると初めての晶子には少々大変だからな……。それに、血を吸った後でゾンビになられても後々面倒だからヴァンパイアにしてやっただけの事。代わりに良い駒が手に入るのなら、余計な駒は捨てるに限る」

ショウは、冷徹そのものに言った。

「じゃあ晶子も使い捨てか！？」

思わず俺は叫んだ！

晶子の身体が“びくん”と震える。

晶子は、恐る恐るショウの顔を見上げた。

ショウの表情は変わらない。

「大丈夫だよ。晶子は村田とは違う。俺はお前を使い捨て何んかにはしないよ」

ショウは感情の無い顔で言った。

本心が分からない。

晶子は喜んで良いのか悪いのか分からず、引き吊った笑みを浮かべた。

晶子は、ヴァンパイアに成ってしまった。

もう後戻りは出来ない。

幾らショウが自分をヴァンパイアにした憎い男であっても、もう縋って生きて行く他に選択肢は無い。

晶子はそれを自覚している筈だ。

無言の晶子の表情から、俺にもその気持ちが痛い程分かった。

「テメエだけは許さねえぞ！」

俺は、煮えたぎる憎悪を、吐き出す様に叫んだ。

「そう熱くなるな。俺を拒否した以上、お前はもう不要な存在だ。口封じの為にもお前には今ここで死んで貰う。俺が処分してやっても良いのだが、お前は村田の獲物だからな」

そう言うとショウは、隣りに立つ晶子を肘で突ついた。

晶子は、“ハッ”として手に持っていたカゴ風のバックから、何やら化学の実験で使う試験管の様なガラスの瓶を二本取り出した。

どうやら本物の試験管にコルクの栓がしてあるらしい。

見ると、透明な瓶の中にはどろりとした赤黒い液体が入っていた。

それを見た瞬間、俺はそれが何であるのかすぐに理解した。

血だ！

何の生き物の血かは見ただけでは分からないが、相手はヴァンパイアだ。

それが人間の血であろう事は聞くまでもなかった。

ショウは、村田に視線を送った。

村田はフラつく身体をコンクリートの壁に預け、耳こそ聞こえないがショウや晶子をじっと見詰めていた。

その村田に歓喜の表情が浮かぶ。

ショウは、村田と視線を合わせ何やらアイコンタクトを取ると、晶子から受け取った二本の試験管を一本づつ投げた。

村田は、フラつきながらも何とか二本共無事にキャッチした。

村田は、徐に試験管のコルクを抜き取り、自らの血で紅く染まった口を大きく開けると、試験管の中のドロリとした液体を一気に流し込んだ。

あっと言う間に二本の試験管が空になった　。

「テメエ……、いったい何を……」

俺は、ショウと村田を交互に見詰めた。

「見ていれば分かる……」

ショウが言った。

見ると、村田に変化が生じていた。

村田の全身が震えている。

最初は小刻みに、そして徐々に震えが大きくなって行く。

村田の目が裏返った。

裏返った白目が、血の色で紅く染まって行く。

その間にも、村田の震えはピークを迎えていた。

身体が一回り大きくなった様だ。

ただでさえも瘤の様な筋肉が、今ははち切れそうな程張っているのが見ているだけで分かる。

次の瞬間、潰した筈の喉が、“ぼこっ”と膨れ上がった。

再生した喉仏が上下に動く。

「グルルル……」

何と、喉を潰されて声を出せなかった筈の村田が、飢えた獣の様に喉を鳴らした。

何と言う再生能力だ……。

「グオーッ！」

村田が吠えた。

コンクリートの壁がビリビリと震える。

トンでもねえ殺気だ。

こんな気は、今まで感じた事が無え。

村田は、その膨れ上がった身体を歓喜に震わせた。

大きく開いた口から、二本の長く伸びた犬歯が見て取れる。

口の端には泡を溜めていた。

不意に、裏返っていた目が元に戻る。

白目の部分を紅く充血させたまま、不気味に小さくなった黒目が、“ギロリ”と俺を睨んだ。

村田の眼は憎悪に満ちていた。

どうやら完全に復活しちまった様だ。

いや、パワーも妖気も先程より圧倒的に増している。

恐らく再生した喉仏と同じ様に、蹴り潰された睾丸も、破られた鼓膜も再生しているに違いねえ。

「ミ～コ～ガ～ミーッ」

村田が唸る様に言った。

「どうだい？　気分は……」

ショウが声を掛けた。

「あっ、ああ……助かったぜ……」

村田は口許に付いた泡を太い腕で拭うと、罰の悪そうな表情でショウに視線を向けた。

「村田……、幾らその男が想像異常に強いとは言え、たかが人間に…不様だぞ！」

ショウは冷酷な色を浮かべて言い放った。

「す、すまない……。少し油断しただけだ。今度は、今度は必ず殺すから……」

村田は少し怯えながら言った。

「ならさっさと始末しろよ。今度は油断するなよ」

ショウが強い口調で戟を飛ばす。

「分かってます」

村田は短くそう応えると、再び俺に視線を戻した。

「御子神～、さっきは油断したが、今度はそうは行かないぜ！」

村田は少し腰を落とした。

「まっ、待て！　そいつは、そのショウって奴はお前の事を……」

「殺す！」

先程ショウが言った事を村田に伝えようとしたが、村田は最後まで聞かなかった。

村田は、凄まじい形相で俺に襲い掛かってきた。

「チィィィッ！」

俺も、咄嗟に腰を落とし身構えた。

しかし復活した村田のスピードは、俺の想像を超えていた。

村田が駆け寄り様に鋭いパンチを放つ！

ー躱せねえ！

村田のパンチを躱せぬと判断した俺は、反射的に両腕を交差し顔面をガードした。

村田のパンチがガードした腕に当たる！

爆発した様なショックが腕に響いた！

“ビキィッ”

前にしていた方の腕にヒビが入って様だ。

ただ振り回す様に放ったパンチだったが、ヴァンパイアのスピードと威力は想像を超えていた。

更に村田は、ガードしているにも構わず、再びパンチを繰り出してきやがった。

“バキィィッ”

ヒビの入った腕が嫌な音を立てる！

ーーチッ、折れたか……。

俺は、ガードした腕ごと後ろに弾け飛んだ。

村田が、一気に間合いを詰め、下からボディブローを突き上げた。

必死でブロックしようとしたが、村田のパンチの方が速い！

折れた腕のせいで、思うように反応出来ねえ！

「グエェェッ」

村田のパンチが腹部に突き刺さった！

俺は“くの字”身体を折り曲げ、赤い吐瀉物を地面に撒き散らした。

ーー肋骨をやられたか……。

村田が拳を引き抜くと、俺の身体は支えを失って地面に倒れそうになった。

しかし、村田はそれを許さなかった。

倒れる寸前に、俺の頭をまるで猛禽類の様に鷲掴みにして、そのまま自分の顔の位置まで持ち上げた。

顔には、満足そうな笑みの色を浮かべてやがる。

「惨めだなあ、御子神。あの自信満々な態度はどうした？　ええっ、何とか言ってみろよ」

村田が、勝ち誇るように言った。

“今だ！”

俺は、村田の一瞬の隙を突いて、指で奴の右目を抉って

やった！

「ギャーッ！」

村田は、凄まじい絶叫を上げた。

俺の頭から手を離し、右目を手で押さえ苦痛に呻いている。

俺は、その場に崩れ落ちた。

今が千載一遇のチャンスなんだろうが、もう反撃する力なんて残っちゃいねえ。

ただ地面で身体を折り曲げたまま、苦痛に呻く事しか出来なかった。

「貴様ー！」

怒り狂った村田の叫び声が聞こえたが、もう見上げる事すら出来ねえ。

すると突然、目の前に村田のデカイブーツの先が迫ってきた。

“ゴフッ！”

鋭い蹴りを喰らい、俺はサッカーボールの様に蹴り飛ばされ壁に激突した。

“　！”

あまりの衝撃と激痛に声も出ない。

村田は、狂った様に何度も蹴った。

今度は、壁がある為に吹き飛ぶ事も無い。

何度も蹴られ、俺の身体が壁にめり込んで行く。

ーーくっ……そう……。

意識が遠退いていく……。

ーーこりゃあ死ぬ……かな……。

俺は、薄れていく意識の中で、死を覚悟した。

「もう止めてー！」

その時、晶子が悲鳴に近い叫び声が聞こえた。

力を振り絞って目を開けると、晶子が狂った様に蹴り続ける村田の身体に飛び付いた。

「晶子！」

ショウが叫んだ。

しかし晶子は止めない。

「もう、もう止めて！」

晶子は泣き叫びながら村田にしがみついていた。

「離せー！」

村田は、しがみつく晶子を力づくで引き離した。

「オンナー！　邪魔をするなー！」

村田は、バックハンドで晶子の頬を殴った。

殴られた晶子が向こう側の壁に激突する。

「しょ……晶……子……」

俺は、必死で晶子の名前を呼んだが、最早蚊の鳴く様なか細い声しか出せなかった。

「馬鹿なオンナが……」

村田は“ぼそり”と呟くと、再び俺に向き直った。

「何だあ？　御子神……。あの女はお前のオンナなのか？」

村田は下卑た笑みを浮かべた。

そして俺の襟首を“むんず”と掴むと、腕力だけで俺の身体を持ち上げた。

「そろそろ終わりにしてやるぜ。貴様の心臓を掴み出して、心臓から直接生血を吸ってやる。そうすりゃあ貴様をゾンビにしなくて済むからな……」

村田は、そう言うと空いている手で手刀の形を取った。

いつの間にか爪が長く伸びている。

「死ねー御子神ー！」

激しい怒声と共に、村田は俺の心臓目掛けて手刀を打ち込んだ。

ーーもう指一本動かねえ……。

ーーここまでか……。

流石の俺も死を覚悟した。

次の瞬間、何かが俺に激しくぶつかった！

かなりの衝撃だったが、俺には何が起きたのか理解出来ねえ。

俺は、跳ね飛ばされた勢いで地面に叩き付けられながらも、必死で目を見開いた。

俺の胸に突き刺さる筈だった村田の爪は、別の物を貫いていたのだ。

“！？”

村田の爪は、何と晶子の胸の、丁度心臓の辺りを貫いていた。

“ゲフッ”

晶子が大量の血を吐き出す。

晶子の背中から、指先を揃えた村田の爪が、晶子の血肉を絡めながら外へ飛び出していた。

“グァハッ”

再び晶子は大量の血を吐き出した。

「村田ーっ！」

ショウが大声で怒鳴ったが、今となっては遅きに失した。

晶子は、俺の身体が刺し貫かれる寸前、横から俺に体当りを食らわせ、自ら身代りになったのだ。

村田は、慌てて晶子の身体から手を引き抜いた。

晶子の身体が音を立てて地面に崩れ落ちる。

「し、晶子……、な……何故……だ……」

俺は、消え入る様な声を無理矢理絞り出した。

「ご……ごめん……なさい……、恭……也……くん……」

晶子も、消え入る様な声で息絶え絶えに応える。

晶子の目からは透明な涙が溢れ出ていた。

涙が地面に零れ落ちて黒い染みを作る。

「しよ、晶子……」

「本当……に……、ご……めん……なさ……い。恭也くん……に伝えて……おく……事が……ある……の……」

「も、もう喋るな……、喋らなくて良い……」

俺も必死で声を絞り出した。

「良い……の。私……は……、もう……ダメ……。貴方の……友……達の……」

「シゲ？　……シゲの事か……？」

「そう……、貴……方の……友……達は……、し、死んだ……わ……。殺……して……、血を……飲んだの。さっ……き、村田……が……飲ん……だ血も……彼……の血よ……。私も……飲んだ……わ……。本当……に……、本当に……ごめんな……さい……」

晶子の瞳に更に涙が溢れる。

晶子の瞳は、既に焦点を結んでいなかった。

「晶……子……、シゲ……」

俺の頬を温かい物が伝った。

「わ、私……、人……として……、も……もっと……生き……た……かっ……た。お父……さん、お……母……さん、ごめん……な……さい……。陽……子、貴……女にも……う……いち度、会いた……かっ……た。恭……也……くん、陽……子は……貴方の……事……を……」

晶子は最後まで言葉を言い終える事無く、そのまま息を引き取った。

“ドクン”

「しょ、晶……子……」

俺は、血の涙を流し泣いていた。

嗚咽する力すらもう残っては無えが、溢れ出る涙だけは止まらなかった。

しかしそれと同時に、俺の全身を激しい怒りが全身を貫いた。

まるで感情が爆発したみてえだ。

“ドクン”

村田は、後悔の表情も見せず、地面に横たわる俺に歩み寄った。

「御子神、女なんかに守られやがって……」

村田は、蔑んだ目で俺を見下げると、再び下から思い切り蹴り上げた。

「グアッ！」

俺は、そのまま頭から壁に激突した。

頭が割れて、夥しい量の血が噴水の様に吹き出すのを感じた。

“ドクン”

ーーこれで俺も終りか……。

俺は、遠のく意識の中でそう思った。

“ドクン”

だが不思議と悲しくなかった。

ただ怒りと憎しみだけが、心の中で激しく渦を巻いていた。

“ドクン”

その時、何故か陽子の顔がふと浮かんだ。

陽子はいつもの怒った顔で俺を睨んでいる。

“ドクン”

ーーくそーっ、こんな死ぬ間際にまでアイツの顔を思い出すなんて……。

“ドクン！”

“！？”

ーー何だこの鼓動は？

“ドクン！　ドクン！”

消えゆく意識とは反対に、俺の心臓は力強く鼓動を打ち始めた。

“ドッドッドッドッドッ……”

身体が熱い。

全身が燃える様だ。

それと同時に、負った傷や骨折、破裂した内蔵、そう言ったものの痛みとは別に、かつて経験した事の無い痛みが全身を襲った。

ーー何なんだこの痛みは？

痛みがピークに達した。

“！！“

ーーー……。

あまりの激痛に、俺の意識は完全にブラックアウトした。

3

「馬鹿な女だ……」

3

ショウは独り呟いた。

ショウの足下には、もう息絶えて動かぬ晶子の遺体が仰向けに転がっている。

涙に濡れた顔は、死してなおも悲しみを讃え、生きていた時とはまた違う美しさだった。

晶子の胸にはぽっかりと大きな穴が空き、大量の血が地面を濡らしている。

ショウは、相変わらずの涼し気な顔で、無表情のまま晶子の遺体を見下ろしていた。

一方村田は、ショウに背中を向ける形で、恐らくもう死んでいるであろう恭也の遺体の前に立っていた。

村田は、恭也や晶子の返り血と自らの血で、全身を赤黒く“ぐっしょり”と濡らしていた。

恭也に潰された右目からも、大量の出血の跡が残っている。

口の周りを覆う髭も、血がべっとりと付着して固まっていた。

ヴァンパイアの能力で出血はすぐにも止まり、痛みももう感じないが、さすがのヴァンパイアも潰された眼球までは簡単に再生はしない様だ。

村田は、あの『金色の悪魔』と誰もが……、ヤクザさえ恐れたあの御子神恭也を自らの手で殺したと言う満足感に酔っていた。

最強の生物へと転身した優越感。

これからはヤクザも警察も恐れる事なく、金も女も、人の生死すら全て自由に出来る事への喜びと期待。

そして人を殺す事への快感が、村田の心に酩酊感をもたらしていた。

「終わったな……。どうだ？　今の気分は……」

ショウはぼそりと言った。

「満足だよ。こんな能力が自分の物だなんて、今でも信じられないぐらいだ……」

そう言うと、村田はショウへと振り返った。

そこには、晶子の遺体の前で無表情に立つショウの姿があった。

村田は、少し息を飲んだ。

「しょ、ショウ……。お、俺……」

村田は、ショウの表情を見て声を詰まらせた。

「気にするな。晶子は自分から飛び出して死んだんだ。お前のせいじゃない」

「す、すまない……。ほ、ホントいきなりだったから……」

「気にするなと言っているだろう。この女は我々の眷属の一員となれたのに、人間であった頃を忘れられなかった愚かな女だ。最初から我々の眷属となる資格が無かったのだ」

ショウは冷たく言い放った。

「……でも、あんたはこの女の事を……」

「好きだったとでも言いたいのか？　この俺が餌である人間を……？　ふん、笑わせるな。以前俺が獲物をハントした時、たまたま見掛けて少し気に入っただけの事。良いか村田、我々に取って人間は餌だ。くだらん感傷を持つ必要は無い。そして気に入った女がいたら犯せ！　そして血を飲め！　ただそれだけの事だ。我らの眷属に加えるのは気が向いた時だけで良いのだ。俺にとってこの女も気が向いただけの存在だった。だから気にするな」

「……分かったよ……」

村田は頷いた。

「おい、それより今の内にその男の血を飲んでおけ。その後すぐ死

体を始末しないと厄介な事になるからな」

「ああ。じゃああんたが先に……」

「俺は良い、男の血は口に合わん。お前は目に怪我を負って大量の血を失っている。“渇き”が出る前に血を補給しておくのだ」

ショウが言うと、村田は頷いて再び恭也の方へ振り返った。

その時、村田の表情が固まった。

何と、既に死んでいる筈の恭也の身体が小刻みに震えているのだ。

つい先程まではぴくりとも動いていなかった筈なのに、いったいこれはどうした事なのか？

それに恭也は、村田の攻撃で内蔵は破裂し、他の臓器にも折れた肋骨が刺さり、頭蓋骨も割れている筈だ。

そして何より出血量が多い。

普通であれば、絶対に死んでる筈である。

「どうした？」

その場で凍り付いた様に固まっている村田を見て、不審に思ったショウが背後から声を掛けた。

「しよ、ショウ……。み、見てくれ！」

村田は、ショウにもこの状況が見える様に横へ少し身体を動かし、声を震わせて言った。

幾らヴァンパイアになったとは言え、つい先日まで人間だった村田は、人間がこの様な状況で死ぬ様を見た事が無い。

村田は、この理解不能な状況に驚きを隠せなかった。

ショウは、村田の足下に横たわる恭也へと目をやった。

見れば確かに小刻みに震えている。

死ぬ直前の痙攣に見えなくも無いが、完全に動きを停止した後痙攣するなど未だかって見た事が無かった。

それに恭也が受けた打撃は、どれ一つ取っても通常であれば確実に死に至る程のダメージだった筈だ。

人間は脆い。

身体に受けたダメージだけで簡単にショック死する。

その意味では、今夜この男は何度死んだか分からない程だ。

あれだけの村田の攻撃を受け、死際の晶子と僅かでも会話をした恭也の生命力は驚愕に値した。

ショウは、人間がどれ程のダメージや痛みを感じれば死ぬか、またどれだけの血液を失えば死ぬかを今迄の経験上良く知っ

ている。

だがこの恭也の生命力は、ショウの知識や経験の範疇を超えていた。

「村田、奴が生きているなら早く血を吸ってトドメを刺せ」

ショウは村田に命じた。

見る見る内に恭也の痙攣が激しくなる。

しかも凄まじい勢いで恭也の気の内圧が高まり、彼の肉体から溢れ出していた。

いや、気と言うには禍々し過ぎる。

これは既に妖気だ。

村田も何か感じてはいるみたいだが、気の質や量までは分からない。

多少気を見分ける能力を持っているショウは、この不可解な現象に戸惑い後ず去った。

「まだ生きてるとはしぶとい野郎だ！」

そう言うと、村田は地面で震える恭也へと手を伸ばした。

その瞬間、恭也の目が“カッ”と開いた。

真っ赤に充血した目が村田を“ギロリ”と睨む。

次の瞬間、恭也の手が村田の手を握った。

村田は驚愕した。

咄嗟に手を振りほどこうとしたが、恭也の握力は村田のそれを超えていた。

しかもこの手は先程村田のパンチで折れた方の腕だ。

村田は、必死で恭也の手を振りほどこうと暴れ、恭也の顔や身体をもう一方の手で殴った。

しかし手が離れるどころか、幾ら殴ってもビクともしない。

無言のまま、瞬きもせぬ目が村田を睨み続けている。

真っ直ぐ村田を見てはいるのだが、何処と無く焦点が合って無い。

視線に魂が籠っていないのだ。

睨むと言うよりは、禍々しい瞳で見詰める、と言う表現の方が正しいかも知れない。

すると、恭也はゆっくりと身体を起こし始めた。

依然村田の手は握ったままだ。

もう村田は殴る事を止めていた。

あまりの不気味さに凍り付いている。

凍り付く村田を他所に、恭也はゆらりと立ち上がった。

状況を目の当たりにしているショウは、完全に困惑していた。

今の恭也は、ヴァンパイアの血を得た人間が転身する時の状態そのものだ。

しかし恭也はヴァンパイアの血を飲んでいない。

傷口から村田や晶子の血が入ったとも考えられなくもないが、その程度の量であれば転身する事などまずあり得ない。

人間がヴァンパイアに転身する時には必ず死が先に訪れる。

人間は、ヴァンパイアに血を吸われた後、まだ息のある内にヴァンパイアの血を飲む。

その後死と言う過程を経て、人間はヴァンパイアに転身するのだ。

それが転身へのプロセスである。

しかしこの恭也はそのプロセスを全く経ていない。

そして何より奇妙なのは、恭也は村田の執拗な攻撃により肉体を完全に破壊されていた筈だ。

それなのに、今の恭也は見る限り全身に負った傷や怪我が治っている。

全身に張り付いた血はあくまで付着しているだけで、今では何処からも出血していない。

頭蓋骨が割れた箇所もここからでは見て取る事が出来ないが、恐らくもう出血してはいないだろう。

いや、既に傷口が塞がりかけているのかも知れない。

ヴァンパイアに転身して十年を越えるショウでさえ、血も飲まずにこれ程の再生を果たす事は不可能に近い。

いや、ショウに限らず、転身した全てのヴァンパイアにはこれ程の能力は備わっていないのだ。

「き、貴族……」

ショウは、呻く様に声を絞り出した。

その時！

「グォォーッ！」

恭也が凄まじい雄叫びを上げた。

大きく開いた口には、長く伸びた二本の犬歯が見て取れる。

全身から吹き出る禍々しい妖気が、肉眼でも見える様だ。

村田はパニックを起こしていた。

恭也の髪の毛が全て逆立っている。

村田は、恐怖のあまり空いている方の手でパンチを繰り出した。

だが、その拳が恭也の顔面に触れる事は無かった。

村田のパンチは、恭也の手によって掴み捕られていたのだ。

これにより、村田の両手は完全に封じられた。

“グシャ！”

“グシャ！”

「ギャーッ！」

村田は大きな悲鳴を上げた。

見ると村田の両手が、恭也の手により握り潰されているのだ！

村田の両手は、恭也の手の中で血を噴き出し、肉は潰され、折れた骨が皮フや肉を破って飛び出している。

まさしく文字通り潰されていた。

「ギャァァーッ！」

村田は狂った様に叫びながら、右脚で恭也の股間を下から蹴り上げた。

“！！”

しかし、村田の蹴りが恭也の股間を捉える事は無かった。

何と恭也は、蹴り上がる寸前の村田の右脚を、左足の裏で上から押さえる様に止めてしまっているのだ。

何と言う反射神経、そして脚力であろうか？

村田の蹴りは、潰された手の痛みに耐え兼ねて目茶苦茶に放ったものではあるが、それ故に恭也の注意が上に向いている今、タイミング的にも視角的にも完全に意表を突いていた筈だ。

しかし恭也は、村田の僅かな動きの変化を見逃さず、村田の動きに完全に反応したのだ。

脅威の反射神経と呼ぶ他は無い。

更には、下から蹴り上げる脚を寸時で上から押さえ込むには、倍以上の脚力が要求される。

しかし恭也はそれを難なくこなしたのだ。

完全に村田の身体能力を凌駕している。

村田はあまりの恐怖に声を失った。

黒い顔が恐怖に青ざめ、醜く歪んでいる。

逆に恭也の表情に変化は無かった。

無表情のまま、血の色をした瞳で村田を見詰めるだけである。

丁度ボクサー等の格闘家が、意識が飛んでいるに拘らず、その闘争本能のみで闘い続ける時の顔に良く似ていた。

いや原因は違えど、確かに今の恭也は意識を無くしていた。

恭也は握り潰した村田の手を放すと、村田が晶子にした様に、鋭い手刀を村田の腹部へ突き入れた。

“グボッ！”

村田は夥しい量の血を口から吐き出した。

恭也の腕は、村田の腹部を貫通し、血肉を絡めながら背中から飛び出している。

村田は目茶苦茶にもがいた。

ヴァンパイアである村田は、その強い生命力故にこれ程の怪我を負っても一瞬では死ぬ事が出来ない。

幾ら激痛にのたうち、死ぬ程の苦痛を感じようと、身体中

の血が流れ切ってしまわない内は容易に死ぬ事が出来ないのだ。

先程晶子が死んだのは、運悪く村田の手刀が晶子の心臓を突き破ったからである。

心臓はヴァンパイアに取っても最大の急所の一つだ。

心臓を破壊されると身体中に血液を循環させる事が出来なくなり、幾ら再生力の強いヴァンパイアでも心臓が再生する前に死に至ってしまう。

だが幸か不幸か、今村田が突き破られたのは腹部だ。

死ねない村田は、血へどをまき散らしながら未だ悶え苦しんでいる。

既に恭也の顔は、村田の吐き出した血に塗れ紅く染まっていた。

凄まじい形相だ。

悪鬼としか見えない。

恭也はもがき暴れる村田の髪をもう一方の手で掴むと、首を支点に回転させる様に勢い良く横から下へと引き下ろした。

“ゴキッ！”

乾いた音を立てて、村田の首の骨が一気にへし折られた。

首の骨を折られた村田の頭部は、皮だけでくっついているかの様に、顎を上にして不気味な角度に垂れ下がっている。

目は完全に裏返り、開いた口からは長い舌が飛び出していた。

村田の身体が激しく痙攣する。

その痙攣が止まるのを最後に、村田は全ての動きを停止した。

村田は完全に死んでいた。

恭也が腕を引き抜くと、村田の身体は湿った音を立てて地面に崩れ落ちた。

後には、血に塗れた恭也が幽鬼の様に立ち尽くしている。

ショウは、恭也を凝視した。

“シャーッ！”

恭也は、ショウを睨み付け獣の唸り声を上げた。

その悪鬼の形相に、ショウは“ビクッ”と身震いした。

ヴァンパイアのショウでさえ、今の恭也は悍ましい悪鬼にしか見えない。

恭也は、今にも飛び掛かろうとする獣の様に身体を低く身構えた。

通常の意識が飛び、殺戮の権化と化している。

ショウも覚悟を決め、腰を落として身構えた。

ショウの爪が“ニュ～ッ”と伸びる。

閉じた口からは、二本の犬歯がその尖端を覗かせていた。

“シャーッ！”

ショウも、獣の如く荒々しい呼気を吐き出した。

二匹の獣は対峙した。

しかし次の瞬間、恭也の目が“ぐるん”と裏返った。

急激に妖気が萎んで行く。

一瞬“グラッ”と身体が揺れ、その直後電池が切れた様にその場にどうっと倒れ込んだ。

ショウは、一瞬何が起こったのか理解出来なかった。

今にも開始のゴングが鳴ろうとしたその時、いきなり対戦相手がダウンしてしまったのだ。

地面に倒れ痙攣を続ける恭也を見て、ショウは何が起こったのかやっと理解した。

恭也が何故ヴァンパイアに転身したかの理由は分からないが、少なくとも身体の血液を失い過ぎたのだ。

通常であれば先に“渇き”の症状となって現れる筈が、“渇き”で済む以上の血液を一気に失ってしまったのだ。

最も“渇き”の症状が現れたとしても、ここには餌となる人間が居ない。

恐らく先程は、丁度意識の無い状態で転身を果たし、ただその憎悪と闘争本能のみで闘っていたらしい。

何故意識を失ったままあの様に的確で凄まじい攻防が出来たのかは疑問だが、とにかく必要以上の失血が今の状態を招いている事には違いなかった。

「ふ、驚かせてくれる……」

そう呟くと、ショウは慎重な足取りで倒れている恭也に歩み寄った。

俯せに倒れている恭也の背中は、緩やかに上下している。

やはり生きてはいる様だ。

後頭部から頭頂部へ掛けて見ると、やはり壁にぶつけて割れた部分の出血は止まり、既に傷は癒着を始めていた。

「これ程の能力……。やはり貴族なのか……？　しかし、どうして貴族が人間として生活しているのだ？」

ショウは、腑に落ちぬ顔で首を傾げた。

その時、ふと何かが頭を過った。

ーーんん？　この男の名は確か御子神恭也。

ショウはその名前に聞き覚えがあった。

以前仲間から、裏切り者の貴族の話を聞いた事がある……。

その名が確か“御子神”だった様な……。

ショウは思いを巡らせた。

しかしどちらにしても結論は一つだ！

ーーこの男は危険だ。殺すなら今をおいて他には無い。

ショウは決心すると、恭也にトドメを刺すべく再び手に気を込めた。

手の爪が長く伸びる。

ーー幾ら貴族とは言え、頭を粉砕して心臓を抉り出せば確実に死ぬ。

ーーそしてこの男の血を飲めば、俺は更なる能力を手にする事が出来る。

ショウは下卑た笑みを浮かべ、ベロリと舌なめずりをした。

ショウは、横たわる恭也の脇に膝立ちの姿勢で腰を落とすと、長く爪の伸びた手を揃え恭也の頭部目掛けて突き立てようとした。

“ビシッ”

その瞬間、ショウの腕に鋭い痛みが走った。

「ギャッ！」

ショウは、驚いて短い悲鳴を上げた。

今まさに恭也に突き立てようと振り上げた手の甲に、まるで銃弾を撃ち込まれた様な穴が空き微かな煙を上げている。

「誰だ！？」

ショウは痛む手を押さえながら、今攻撃を受けた方へと視線を走らせた！

見ると、恭也が入って来たトンネルの入口を背にして、小柄な人影がぽつりと立っていた。

4

4

老人は、夜の街を走っていた。

ただ闇雲に走っている訳では無い。

老人の行く手上空には、一羽の黒い鳥が飛んでる。

その姿形や羽毛の色から烏である事には違いないが、その大きさはほんの雀程しかない。

その烏は、後を追う老人が呪術により造り出した『式神』なのである。

この式神は、自らの気と同調する宿主の元へ向かって飛んでいるのだ。

つまり老人は、宿主を探す為に式神を放ったのである。

烏はどんどん駅に近付くと、駅の脇を走る国道の陸橋へと転進した。

老人も見失わない様に方向を変える。

老人のスピードは尋常ではない。

この時間、通行人が殆どいないとは言え、このスピードで走るなど老人に出来る事ではない。

しかも追っている相手は、小さいとは言え空を翔ぶ烏なのである。

時々見失いそうになると、老人はその場に止まって呪を唱えた。

するとその烏も電柱に止まるなどして、老人が追い着くのを待っている。

そして老人が追い着くとまた翔び立つのだ。

それを繰り返して、老人はようやく陸橋の下に辿り着いた。

老人は息を切らしていた。

その時、凄まじい妖気を感じた。

妖気は二つあった。

禍々しい妖気が、まるで洪水の様に溢れ出している。

妖気は、老人の位置から少し離れた陸橋下のトンネルから流れ出ていた。

「むう、これ程の妖気は…」

老人はそう呟くと、下げていた袋から何やら道具を取り出した。

それは、鈍く銀色に光る金属の棒であった。

長さニ十センチ程の細い棒で、両端が鋭く尖り真ん中に指を入れる輪っかが付いている。

ー一暗器。

中国武術で使われる隠し武器だ。

突く・切る・投げると様々な用途に使える便利な武器である。

しかし使いこなすにはかなりの熟連度が必要だ。

もう一つの手には、銀色の小さな金属製の玉を幾つか握り込んでいた。

老人は暗器に指を通して握り込むと、暗いトンネルへ向けて慎重に近付いて行った。

トンネルを目の前にした時、二つの膨れ上がった妖気の内、片方の妖気がまるで膨らんだ風船が一気に萎むかの様に出し抜けに小さくなった。

それに呼応するかの様に、もう一つの妖気も次第に小さくなって行く。

「いったい、何が起きておるのじゃ?」

老人は、慎重な面持ちでトンネルの中を覗いた。

トンネルの中は薄暗い為、全てを明確には見て取る事は出来ないが、人影が三つ倒れており、ただ一つ立っていた人影が、俯せに倒れている人影の脇に腰を落として手を振り上げる瞬間であった。

不規則に明滅する灯りで、振り上げた手に伸びる長い爪が映し出された。

「い、イカン！」

老人は、咄嗟にトンネル内へ躍り込むと、握っていた銀色の金属球を親指で弾いた。

弾かれた金属球は、見事に振り上げた男の手に直撃した。

「ギャッ！」

男は短い悲鳴を上げた。

ー一指弾。

今この老人が使った技の名前だ。

中国拳法などで使われる技の一つである。

通常は金属球だが、他にも石等の小さな物を指で弾いて的に命中させる技だ。

これもかなりの熟練度を要し、達人ともなればこの老人の様に銃弾程の威力を発揮する。

どうやらこの老人は、呪術だけでなく中国拳法の達人でもある様だ。

確か自分の事を“武神”……、そう呼んでいた。

男は、金属球が当たった手を痛そうに押さえ呻いた。

「誰だ！」

男が叫んだ。

突風の様な妖気が老人に叩き付ける。

しかし老人は、何も感じないかの様にさらりとそれを受け流した。

「ほう、やはり吸血鬼だったかよ」

老人は言った。

老人の顔には、緊張も気負った様子も全く見られない。

完全な自然体だ。

やはり不思議な老人である。

男＝ショウは老人に向かって立ち上がった。

しかしいつもの涼し気な表情とは違い、今は痛みに顔を歪

めている。

先程老人の指弾を受けた手には、青黒い血管が幾筋も浮かび上がり、不気味な模様を作っていた。

ショウは、醜く浮き出た血管が手から腕に達する前に、自らの手首をもう一方の長く伸びた爪で大きく、そして深く一気に切り裂いた。

青黒く浮き出た血管の切り口から、夥しい量の血が噴き出している。

そして傷付けた手首をもう一方の手で掴むと、躊躇する間も無く一息に捩じ切った。

「グオォッ！」

ショウの顔が、凄まじい激痛で更に大きく歪む。

噛み締めた犬歯が下唇を突き破り、唇からも幾筋かの血が流れ出た。

「ほほう、やるのう。幾ら吸血鬼でも、自ら手を引き千切るのはなかなか出来るものでは無いて」

ショウは、手首を千切り取った腕から大量の血を迸らせ、青ざめた顔で老人を睨んだ。

血は幾ら手で押さえも次々と溢れ出してくる。

気が狂う程の激痛を堪えてる為か、凄まじいまでの形相だ。

「銀弾を使うとは、貴様ハンターか？」

ショウは、先程恭也にしたのと同じ質問を老人に投げ掛けた。

「ほほほ、わしはハンター等では無いが、まあ似た様なものじゃな」

老人は不敵な笑みを浮かべた。

「それよりお主、これは仲間割れかの？」

老人は辺りの惨状に目を配って言った。

胸や腹に穴を空けて死んでいる男女二人の死体の顔には、吸血鬼の証しである二本の長い犬歯が見て取れる。

この二つの死体がヴァンパイアである事は間違いなかった。

だがその傷を見る限り、とても人間がやったとは思えない。

もう一つの横たわる人影は、俯せに倒れている為に顔を見る事が出来なかった。

ただ緩やかに背中が上下している所を見ると、どうやら生きてはいる様だ。

最も、目の前の男が殺そうとしている所へ指弾を放ったのだ。

生きていて当然だ。

しかし倒れている男が、人間かどうかまでは定かでは無かった。

「お主を殺す前に、ここで何があったのか説明して貰おうか」

老人はぞろりと言った。

有無を言わせぬ口調である。

ショウは何とかこの場から逃げる方法を考えたが、この状況では逃げる術が見当たらない。

しかもこの傷である。

血はその内止まるだろうが、片腕だけでこの不思議な老人に勝てるかどうか分からない。

更にこの出血であれば、間もなく“渇き”が襲って来る筈だ。

最早絶体絶命であった。

老人は、脅すかの様にわざと暗器を構えて見せた。

「ぐうっ……」

ショウは喉を鳴らした。

老人が前に一歩踏み出す。

「んん……」

その時、ショウの後ろで気を失っていた恭也が小さく唸り声を上げた。

僅かに身体が動き、伏せていた顔がこちらを向く。

「きょ、恭也か！？」

恭也の顔が見えた瞬間、それまで冷静だった老人はあまり大声で叫んだ！

一瞬老人の気が恭也へと流れる。

ーー今だ！

老人の気が流れた虚を突いて、ショウは恭也の身体に飛び付いた。

あまりの驚きと、意表を突いたショウの動きに戸惑い、老人はショウに千載一遇のチャンスを与えてしまった。

「むう！」

老人は声を詰まらせた。

「くくく、まさか知り合いだったとはな。つくづく世間とは狭いものらしい」

そう言ってショウは不敵に笑った。

老人は、再び銀の金属球に親指を当てた。

「動くな！」

ショウは大声で老人の動きを制した。

再び伸びた長い爪が、恭也の首筋にぴたりと当てられている。

「動くなよジジイ。少しでも動けばこの男の首を切り落とす！」

ショウは伸びた爪の尖端を、浅く恭也の首に潜り込ませた。

恭也の首筋から僅かに血が流れ出る。

それを見て老人は動きを止めた。

「そうだ。では持っている武器を捨てろ。おかしなマネはするなよ」

老人は手を上に挙げると、握っていた手を開き持っていた武器を捨てた。

暗器や金属球が甲高い音を立てて地面に零れ落ちる。

「ジジイ、お前にとってこの男は余程大事なようだな。だがこの男はヴァンパイアだ。しかも貴族だぞ。お前はそれを知っているのか？」

ショウが言った。

老人は、答える代わりに息を飲んだ。

ーーついに恐れていた事が起こってしまった。

ーーついにこの日が、こんな形で……。

老人は唇を強く噛んだ。

「ジジイ、この男を殺されたくなければ、両手を上げてゆっくりとこちらへ来い」

ショウは言った。

立場は完全に逆転している。

ショウは勝ち誇った笑みを浮かべていた。

老人は黙ったまま、言われた通り手を上げてゆっくりとショウに近付いた。

「くくく、馬鹿なジジイだ。　っ、な、何だと！」

ショウの身体を衝撃が走った。

ショウの身体が大きく震えだす。

「くっ、こんな時に……」

ショウは呻いた。

声が少し枯れている。

“渇き”が来たのだ。

手首から流れた大量の出血により、“渇き”の速度が早まったのだ。

老人はその隙を逃さず地面を力強く蹴ると、“渇き”に喘ぐショウへと一気に躍りかかった。

「チィィィィ！」

ショウは全身のバネでその場から跳び退いた。

ショウは、数メートル離れた場所に片手と両足を使い着地した。

さすがに凄まじい身体能力だ。

つい今までショウが居た場所には、飛び掛かり様に鋭い蹴りを放った老人が立っていた。

老人は次の攻撃に移る為に腰を落とし構えた。

左手を前に差し出して気を練り始める。

「そこまでだジジイ！」

ショウは、残った手を前に開いて老人を制した。

「その男は出血多量で死にかけている。幾ら貴族でも全身の殆どの血が流れ出てしまえば助からないからな。だから取引だ。今俺と闘えば、幾らハンターのお前でも勝負が着くまでには時間が掛る。それでは勝負が着く前にその男は確実に死ぬだろう。だが今すぐ手当をすれば助かる見込みがある。どうだ？」

ショウは襲い来る“渇き”の衝動を堪えつつ、何とか冷静さを装って言った。

「どうかな？“渇き”が始まり、しかも手首を失った吸血鬼一匹……。始末するのに時間が掛かるとも思えぬが……、まあ今夜の所は見逃してやろう。さあ何処へなりと逃げるがよい」

老人が言った。

それを聞いたショウは、老人に顔を向けたままゆっくり後退してトンネルの出入口に近付くと、一気にトンネルの外へと駆け出した。

老人は、ショウの後ろ姿を見送った。

「恭也……、お前……」

老人は未だ俯せに倒れている恭也を見下ろして、ぽつりと呟いた。

そして袋の中から携帯電話を取り出すと、アドレスのマ行を表示して、目的の番号に電話した。

こんな時間である為になかなか相手に繋がらない。

何十回目かのコールで相手がやっと電話に出た。

『もしもし……』

電話に出た相手はさも眠たそうに答えた。

睡眠を妨げられた為に声も掠れ、しかも不機嫌な様子だ。

「もしもし、こんな時間に起こしてすまんのう。儂じゃ、李じゃ……」

老人は言った。

すると、電話の向こう側で驚く様な反応があった。

『どうしました老師、こんな時間に……』

相手の男は、急にしっかりとした口調を取り戻し言った。

どうやら電話を掛けて来たのがこの老人だと知って、一気に目が覚めたらしい。

「本当にすまんのう。実は恭也の事なんじゃが……」

『……恭也君が、どうかしたのですか?』

男は、言葉の上では質問の型を取っているが、心の何処かに思い

当たる節がある様な言い方で老人に尋ねた。

「うむ、ついに恐れていた時が来た様じゃ……」

老人は、言葉の語尾を濁らせた。

『ではいよいよ……』

男も悟った様に、同じく語尾を濁らせる。

「うむ、今近くにおるのじゃが、その恭也が大変な事になっておってな、『内調』にも連絡をせねばならんのじゃが恭也を渡す訳にも行かん。じゃからすまぬが車で迎えに来てはくれぬか？」

『分かりました。で、場所は何処なのです？』

「すまぬ。場所は……」

老人はこの場所と状況のあらましを説明した。

『分かりました。そこならすぐ側なので五分もあれば伺えます』

男は言った。

「あとすまぬが、来る時に輸血用のパックを二～三袋持って来て欲しいのじゃ」

男は、輸血用のパックと聞いて“ゴクリ”と息を飲んだ。

『分かりました。急いで早坂に連絡を取り、病院で血液パックを受

け取ってから伺いますので少し待っていて下さい』

男はてきぱきと答えると、早々と電話を切った。

「間に合えば良いのじゃが……」

老人は横たわる恭也を見下ろして言った。

トンネルの外へ目を向けると、いつの間にか外は雨が降り出したらしく、雨音がトンネルの中にまで響いていた。

5

5

トンネルの中を、何人もの人間が忙しそうに行き来していた。

既に明け方の四時を回っている。

外は相変わらず雨が降っているが、暗いなりにも少しづつ夜が明け始めていた。

湿度は高く、相変わらず蒸し暑い。

トンネルの外にはパトランプを回転させた覆面パトカーが一台と、派手なメッキパーツを台無しにして、全て艶消しの黒一色に塗られたハマーH3が二台、同様に艶消しの黒色に塗り込められた護送用のバスが一台、更にはあまり見た事の無いまるで装甲車を思わせる黒い大型の特殊車輌が三台の計七台が止まっている。

覆面パトカーを除く全ての車輌には、白文字で『C・V・U』と描かれてあった。

トンネルから少し離れた駅前の通りでは、この雨の中制服の警官が立ち入り禁止の黄色いテープを貼りまくり、一般の車や通行人を足止めしている。

この時間では、野次馬もさすがにまだ数える程しか出ていない。

トンネルの両側二ヵ所の出入口には、アメリカの対テロ部隊やS

ＷＡＴが着る様な市街戦用の黒い戦闘服に身を包み、Ｈ＆Ｋ・ＭＰ５のサブマシンガンを肩から下げた二名づつの計四名が、出入口の両端に立って警護している。

それら隊員の黒いヘルメットや防弾ベストにも、白文字で『Ｃ・Ｖ・Ｕ』と描かれていた。

その他には、出入口で警護している隊員と同じ戦闘服の男達数人と、白いビニール素材で出来た対ウィルス用の化学防護服を頭からすっぽり被った者達数人が、忙しそうにトンネルの中を動き回っている。

晶子と村田の遺体は、現場での検証と硝酸銀注入等の再生防止処置を終え、今は遺体袋に入れられていた。

だが、恭也の姿は何処にも見当たらなかった。

部隊が到着する前に、恭也の身柄は別の場所に運んだのである。

電話で頼んだ男が、恭也の身柄を別の場所に運んだ後で老人がこの部隊に連絡を入れたのだ。

部隊は、到着次第様々な機械や薬品を用いての検査や検証を行い、老人にも詳細な事情聴取を行った。

老人は、恭也の事以外はある程度正直に語ったが、どうしても恭也の事を隠すには矛盾が生じる為に、作り話を交えて説明する他無かった。

最も詳しい事の顛末は、老人自身も見ていないので、殆どは何も分からないままであったが……。

逃亡したヴァンパイア＝ショウは、この部隊とは別の部隊が捜索に当たる事となったが、時間の経った今となっては見付からぬ公算が大だった。

「よし、後はここを洗浄及び消毒して総員引き上げるぞ！」

戦闘服や化学防護服を着た者達の中で、数少ないスーツ姿の一人が、大声で指示を出した。

低いバリトンがトンネル内に響き渡る。

男は、四十代の初めと言った所だろうか。

この蒸し暑い中でも黒いダブルのスーツをピシッと着込み、アイロンがキチッと当たった白のカッターシャツに小紋の入った黒いネクタイをしている。

髪は短く角刈りにし、エラの張った四角い顔をしていた。

浅黒い肌に、細く剃刀の様な一重瞼の目と、頬から顎に掛けて伸びる長い古傷が、この男の武骨さを物語っていた。

どう見ても尋常な職業には見えない。

異様に迫力を持つた男だった。

どうやらこの男が部隊のリーダーのようで、先程から隊員

達の報告を受けたり指示を出したりしている。

老人の事情聴取をしたのもこの男だ。

老人は、この厳つい男の隣りに立っていた。

男の身長は一八十センチ近くあり、老人とはかなりの身長差がある。

体格も立派で、分厚く鍛え上げられた筋肉を有している事は、スーツの上からでも明らかだった。

隙の無い所作はこの男の常であるらしく、かなり武術を修練した独特のものだ。

また、いつもそうした危険や緊張の中に身を置いている証しなのだろう。

「今夜は本当にありがとうございました。私の勝手なお願いから老師をこんな目に合わせてしまい……。何とお詫びして良いやら……」

男は、大きな身体に似合わず申し訳無さそうに深く頭を下げた。

「いや、気にせずとも良いて……。だいたい儂が勝手にした事じゃ。それに何より、吸血鬼を一匹取り逃がし、申し訳無いのは儂の方じゃよ」

老人が言った。

「いえ、そんな事はありません。しかし老師程の方が取り逃がすなど、そのヴァンパイアはかなりの手練ですな」

「いやもうそれだけ儂が歳を取ったと言う事じゃよ。年寄りの冷や水とはこの事じゃの……ファッハハハ」

「またそんな事をおっしゃる。ヴァンパイア一匹処理するのに、我々なら完全武装した三個分隊は必要なのですよ。それをたったお一人で、しかも銃火器も無く奴らと対等に渡り合えるのは、世界広しと言えど御山の三儀天か老師位のものです」

「御山か……、そう言えば久しく顔を出しておらんのう……」

老人は、遠い目をして呟く様に言った。

「そう言えば、先日慈海阿闍梨様が、三儀天の円角殿と共に、本部にお見えになってましたよ」

「ほう、慈海が……」

「はい、近くまで所用で来たからと……。その時に老師の事を話してみえました」

「何じゃ？　また儂の悪口でも言っておったのじゃろう？」

「いえそんな……。ただ最近御山に顔も出さぬと嘆いておられました」

「ふん、自分も会いに来ぬ癖に良く言うわ！　じゃが他には何か言うておらなんだか？」

「さすがは老師、相変わらず勘が鋭いですな。実は或る件で老師お話ししたい事があると仰せでした」

男は、急に声のトーンを落とし、真面目な顔付きで言った。

「何じゃ？　慈海が儂にわざわざ話があるとは……？」

老人も、先程までの笑顔とは違い神妙な面持ちで言った。

「最近、ヴァンパイア達の統制が弛んでいるのはご存知ですよね……」

「ああ知っておる。それはお前さんも危惧しておったでは無いか」

「はい。ですがどうやらそれとは別に、何やら近々奴らに大きな動きがあるらしいとの事で……」

「何じゃと？　大きな動きとな！　それは具体的にどう言った物だと慈海は言うておったのじゃ？」

「さあ？　私にはそこまで詳しくはお話になりませんでした。ただ、この国を根底から揺るがす事になるやも知れぬと……」

「むう……。今は想像も付かぬが、そこまで言うからには余程の事なのじゃろう……。しかしお前さんにも内容を話さぬとはいったい……？」

「阿闍梨様は事の真偽と詳細が分かり次第、我々は勿論総理にも話さねばならぬとおっしゃっておいでした」

「ふむ。それで儂に話があると言うのじゃな？」

「はい」

「分かった。ならば近い内に御山へ出向くとしよう」

「宜しくお願いします」

男は頭を下げた。

二人が話してる間にも、トンネル内の洗浄と消毒の作業は終わりを迎えていた。

壁や地面に残された夥しい量の血痕も特殊な洗浄剤で洗い流され、防護服の男達が数人係りでホースになった噴霧器を使い、霧状の消毒液をそこらじゅうに撒いている。

トンネル内に、鼻を突く様な消毒液とニンニクの香りが広がった。

かなり醜悪な匂いだ。

これは抗ヴァンパイアウィルス用の特殊消毒液で、中性だが強力な殺菌作用を持つ消毒液に、少量の硝酸銀とニンニクの成分、更には人間には無害な特殊ウィルスを化合した消毒液なのである。

見れば、いつの間にか晶子と村田の遺体もトンネル内から運び出されて、装甲車に似た大型の特殊車輛に収納されていた。

この特殊車輛は、ヴァンパイアの生死を問わず安全にヴァンパイアの移送する為に設計された車輛らしい。

「老師はこれからどうされるおつもりですか？　もし宜しければ我々と車にご同乗戴き、その後少し早いですがご一緒に朝食でも……」

男は言った。

しかし老人は首を横に振った。

「いや、この近くに知人がおってのう。今夜はそこに厄介になる約束をしておったから、こんな時間じゃが行ってみるわい」

老人は嘘を言った。

「こんな時間に大丈夫なのですか？」

「儂と同じジジイじゃから朝は早いんじゃよ」

「分かりました。ではそこまでお送りしましょう」

「いや、それも結構。ここから歩いてもすぐじゃし、コンビニで買い物もして行きたいからの！」

「そうですか。では雨も降っていますのでくれぐれもお気を付け下さい。今夜は本当にありがとうございました。事後の報告は追って致しますので、またご連絡致します」

そう言って男は再び頭を下げた。

すると防護服の男が、計った様に男の下に駆け寄り、作業の終了を報告した。

男は頷くと、右手を高く上げて合図した。

「撤収！」

男が叫ぶと、防護服や戦闘服の隊員が足早にトンネル内を出てそれぞれの車に乗車した。

男は老人に再度深々と頭を下げ、艶消しの黒いハマーに乗り込んだ。

各車共けたたましいエンジン音を轟かせて、雨の中を走り去って行った。

老人は、一人トンネル内に残された。

エンジン音が徐々に遠ざかり、トンネル内には雨音のみが届いてくる。

「さて……、儂も行こうかの……」

老人は溜め息混じりにそう洩らすと、雨の降る外へとゆっくり歩き出した。

第三章1：宿命

第三章

『宿命』

1

薄暗い部屋だった。

和室である。

明かり取りの窓一つ無い部屋には二つの燭台が置かれ、その燈明のみが室内を薄暗く揺らめき照らし出していた。

変わった部屋ではあるが、見れば茶室の赴きがある。

今はもう深夜では無く、外は既に夜が明け始めている筈だ。

しかし窓の無いこの部屋には、時間さえも止まっているかの様な静寂に満ち、ただ湯の沸く音のみが聞こえていた。

部屋のほぼ中央には小さな囲炉裏が設けられており、囲炉裏の上には小振りの南部鉄瓶が火に炙られていた。

鉄瓶の中の湯は既に沸いている様で、白い湯気がゆらゆらと立ち上ぼっている。

床の間の壁には、高価な水墨画の掛け軸が掛けられ、床には見事な一輪挿しが飾られていた。

その床の間の両側に燭台が置かれている。

部屋には二つの人影があった。

一人は床の間に背を向けて座っており、その人影と囲炉裏を挟む形で　もう一つの人影が対峙して座っている。

二人とも正座をしていた。

床の間を背にしているのは老人の様だ。

座っている為かかなり小さく見える。

実際立ち上がっても、一五十センチあるか無いかであろう。

しかしピンと伸びた背筋は、とても老人とは思えない。

背中に針金でも入っているかの様だ。

漆黒の着物を着ている。

顔は深い皺に覆われ、目や口も皺と見分けが付かなかった。

顔で判る部分は鼻だけだ。

しかしその鼻でさえ低く潰れ、顔の模様の一つと化していた。

頭には髪の毛が一本も生えておらず、頭皮にまで深い皺が刻まれていた。

かなりの高齢であるには違いないが、見ただけではいったい何歳なのか推察する事は不可能だ。

正座する老人の前には高価な茶器が置かれていた。

その老人とは逆に、対峙している男はまだ若く、二十代後半か三十代前半であろう。

この男も背筋をピンと伸ばし、姿勢良く正座していた。

男は、黒のダブルのスーツに身を包んでいた。

濃いグレーのシャツに黒のネクタイを締め、靴下までも黒かった。

一見細身に見えなくも無いが、実際はかなり引き締まって鍛え上げられた肉体を有しているのが分かる。

細面の顔は色白で、皮膚の血管までうっすら見えそうな程だ。

黒く少し長めの髪はきっちり櫛が入り、整髪料でオールバックにぴっしりと纏められていた。

綺麗にカットされた細い眉毛の下に、切れる様な目が見て取れる。

まるで薄い剃刀の様な目だ。

高い鼻の下には血の色をした薄い唇があり、何処か冷酷な印象を受ける顔立ちであった。

この男の前にも見事な茶碗が置かれ、中には立てたばかりの抹茶が、こんもりとした肌理の細かい泡を見せている。

目の前の老人が立てたお茶だ。

この老人、かなりの腕前であるらしい。

ただ、男はまだお茶に手を付けていない。

「冷めない内に飲みなさい」

老人がそろりと言った。

歳の割にははっきりとした話し方だ。

撥音にも濁りが無い。

「はい……」

男はそう言うと、茶碗を両手で持ち、手のひらの上で三回回してからきっちり三口半で飲み干した。

その後、懐から取り出した和紙で飲んだ部分を拭き取ると、今度は二回半回して畳の上にそっと置いた。

「結構なお手前でした……」

男は、そう言うと畳に置いた茶碗をすっと前に差し出した。

「フォッ、フォッ、フォッ。世辞は良い」

老人は、昔の特撮ヒーロー物に登場する悪役の宇宙人の様な笑い声で笑った。

顔も笑ってはいるのだろうが、見た目には皺の模様が少し変化しただけにしか見えない。

「昨日の昼間、『内閣情報調査室』の久保から電話がありました……」

老人が言った。

「はい」

男が答える。

目は真っ直ぐ老人を見据えていた。

視線に振れが無い。

「最近、成り上がりの者達が色々と悪さをしている様ですね……」

「……」

「この大切な時期に、下の者への統制が甘いのでは無いですか？」

老人の目が、皺の中から“ギロリ”と男を睨んだ。

「申し訳ありません。キツくは言ってはいるのですが、例の物の探

索に主だった者を割いている上、更に例のハンターの捜索にも人員を割いておりますれば、どうしても下の者への監視が緩くなりまして……」

「言い訳は結構です。今は僅かな綻びも許されません。政府や坊主共の介入を許さぬ為にも、例え小さな口実も作ってはならないのです」

老人はぴしゃりと言い放った。

「はい……」

しかし、男は動じる事無く、真っ直ぐに老人を見据えている。

「それでハンター方の捜索はどうなりました？」

「はい、以前捜索は続けておりますが、何しろ得体の知れぬ相手なので、何処の何者なのか皆目……」

男が言った。

「久保の方でも見当が付かないと言っていましたが、嘘を言っているとも思えません。恐らくそのハンターは人間ではありませんよ」

「はい、私もそう思います。たかが人間に我々夜の眷属を、あの様な殺し方が出来る筈もありません」

「では、いったいどの様な者であれば、我が眷属をあの様に殺せるのだと思いますか？」

老人は、男の瞳の奥を覗く様に言った。

「分かりません。殺された者の死骸から判断するに、以前であれば獣人共を真っ先に疑うところですが、既に獣人族は絶滅しています。となれば下の者の中に裏切り者がいるか、又はあちらからの刺客かと……」

男も老人の表情を伺う様に、老人の皺の様な瞳を覗き込んだ。

老人は皺の様な瞳を閉じ、胸の前で腕組みをして思案を巡らせた。

しばし沈黙が流れた。

数瞬の後、老人は考えが纏まったのかふと目を開いた。

「光牙、今は眠りに付いている貴族は何名いますか？」

老人は唐突に男へ質問を投げ掛けた。

「はい、十二名です」

男＝光牙は逡巡する間もなく即座に答えた。

「では半数を起こしなさい」

「は、半数も目覚めさせるのですか？」

この時初めて光牙の顔に動揺の色が走った。

「構いません。人選はお前に任せます」

「しかし半数も起こすとなりますと、共に眠りに着いている下僕共

も起こさねばなりません。そうなると保存用の血液が足らなくなる恐れがありますが……」

「仕方ありません。それは厚労省の戸部に私から話しておきましょう。今は何よりも例の物の探索とハンターの始末が急務です」

「畏まりました」

光牙は深々と頭を下げた。

「で、昨今悪さをしていると言う愚か者は如何致しましょう?」

光牙が問うた。

「処分しなさい」

老人はぴしゃりと言い放った。

「畏まりました。では誰か手の者に殺らせましょう」

「いや、始末する者は既に呼んであります。それよりも早くする事です。今は一刻を争います」

「承知しました。しかし残りの二つ、いったい何処にあるのでしょうか。結局世間で言われている場所には形代しか存在しておりませんし、更に全て揃えるとなると……」

光牙は言葉を濁した。

「分かっています。残る二つの内一つはだいたい見当が付いていま

す。しかしどちらにせよ急がねばなりません。あちらに放ってある密偵の話しでは、奴等本気の様ですからね……」

老人は窓の無い土壁を睨み、遠い目で言った。

「『内調』は我々の計画に何か気付いている様なのですか？」

「恐らく奴らは気付き始めていますよ。ただ何が起ころうとしているのかまでは、まだ分からないでしょうが……。しかし政府や高野の愚か者共が、真の目的も知らず邪魔をするようであれば……」

「戦ですね……」

「そうです。この時代、表立った戦はもう無理でしょうからさしずめ暗闘……と言う事になりますか……。まあそれもまた楽しですが……」

老人は小さな身体を揺すり、くくくと低く笑った。

「光牙、長生きはするものです……」

“ブーッ”

その時、この和室にそぐわぬ電子音が鳴った。

老人は、床の間の隅に置かれた電話のスピーカーフォンのスイッチを押した。

「御前様、柳生様がおいでです」

スピーカーフォンから女性の声が流れる。

「分かった。通しなさい」

御前と呼ばれた老人は、スピーカーフォンのスイッチを切った。

「では、私はこれで……」

そう言うと、光牙は立ち上がろうと腰を上げた。

「まあもう少しゆるりとして行きなさい」

老人が制した。

「しかし……、奴と私はあの一件以来……」

光牙が、さも言いにくそうに言った。

「分かっています。ですがあ奴も終わった事だと納得しています。今は大事の前なのですよ。互いの蟠りを無くしておくのも大切な事です……」

老人がそう言うと、光牙はしぶしぶ座り直した。

その時、閉まっている襖の向こう側で人の気配がした。

「御免……。柳生十兵衛三厳、お召しにより参上致しました」

襖の向こう側から、低い男の声が響いた。

2

2

俺は夢を見ていた。

逃げても逃げても後ろから得体の知れぬ何かが追って来る夢だ。

この怖い物など一切無い筈の俺が、いったい何にビビってるのかは分からないが、とにかく何か恐ろしい物が後ろから迫って来る。

勇気を振り絞って後ろを振り向いても、見えるのは赤黒い霧とその中心にある漆黒の闇だけだ。

俺は逃げた。

不様にも大声を張り上げ、必死で逃げた。

辺りも霧に包まれていて、何処をどう走っているのか見当も付かないが、とにかく必死で逃げた。

すると、目の前の霧が出し抜けに晴れた。

そこは崖であった。

底の深さは全く分からない。

いや、底など無いのかも知れなかった。

落ちれば助からないと言うより、際限無く永遠に落ち続ける闇だと思えた。

奈落……。

そう、この崖の下はまさしく奈落の底であった。

俺は崖の一歩手前で踏み止どまってはいるが、既に後ろには先程の赤黒い霧がすぐそこまで迫っていた。

俺は迷った。

そして最後の勇気を振り絞り、赤黒い霧の中心部を凝視した。

霧の中心部の深い闇の中に、最初はぼんやりと、そして次第にはっきりと蠢く者達の姿が見て取れた。

腹部に大きい穴を空け、顔が上下奇妙な形に折れ曲がった村田の顔……。

同じく胸に大穴を空け、口や眼から血を垂れ流して迫り来る晶子の姿……。

口許から長い犬歯を覗かせ、長く伸びた爪を鈍く光らせて迫るショウの悪鬼の様な姿……。

全身を血塗れにして、幽鬼の様に迫るシゲの姿……。

そして皆誰もが口々に『痛い……』、『死にたくない……』

、『恭也、貴様も来い……』、『死ね……』等と悲痛な叫び声を上げている。

更には、シゲや晶子を救えなかった俺を責める鉄二や陽子の姿まで見えた。

俺は発狂しそうだった。

赤黒い霧がすぐ目の前まで迫り、村田や晶子達の手が俺の身体に触れようとした瞬間、俺は奈落の闇へと飛び下りた。

何処までも、何処までも際限無く落ちて行く。

俺は思った。

やはりこの闇は奈落だったのだと……。

そしてもう引き返す事は出来ないのだと……。

俺は、後戻り出来ぬ闇をいつまでも落ちて行った。

3

3

“ガバッ！”

俺は、目が覚めてベッドから飛び起きた。

ベッドの上で上半身を起こし、ゼイゼイと肩で息をしている。

全身が汗でびっしょりだ。

辺りをキョロキョロと見渡すと、いつもの見慣れた風景だった……。

寝心地に違和感の無いベッド。

見慣れた白い壁紙。

焦げ穴の空いたグレイのカーペット。

趣味が悪いといつも陽子に怒られる、厚手の遮光カーテン。

馴染みのガラステーブルの上には、吸い殻で満タンになったクルスタルの灰皿とお気に入りのセブンスター、更にＳＴデュポンのギャッビーが無造作に置かれ、自慢のバカラのロックグラスと飲みかけのジム・ビームが並んでいた。

ー間違いない、俺の部屋だ。

俺は、一瞬訳が分からず、停止した思考を蘇らせようと頭を振った。

「痛っ！」

頭の芯がズキズキと痛みやがる。

俺は、思わず痛む頭を押さえた。

ーーどうなってるんだ？

頭には、幾重にも包帯が巻かれ、何も着ていない上半身にも白い包帯が幾重にも巻かれていた。

ーー俺は……、

俺は、必死で記憶の糸を辿った。

ーーシゲが人質になって……、

ーー村田と……、

ーー晶子が……。

“！”

突如記憶が鮮明になった。

「ヴァ、ヴァンパイアだ！　奴等がヴァンパイアに！」

思わず俺は、大声で叫んでしまった。

その時、部屋の扉がふいに開いた。

廊下の天井に設けられた白熱電球の黄色い光が、開いた扉から差し込んで来る。

「おう、目が覚めた様じゃの」

懐かしい声が室内に響いた。

見ると、久々に見る顔がそこにあった。

深い皺と白い髭で上下半々に覆われた優しげな顔。

後ろで無造作に束ねた真っ白な髪。

相変わらずの甚平姿。

「ジ、ジジイ……。な、何でここに……？」

俺は、驚きのあまり声が詰まった。

「ジジイと呼ぶなと言うておるじろう！」

“ゴン！”

爺は、ズカズカと足早にベッドへ歩み寄ると、ベッドの上で上半身を起こして固まっている俺の頭へ、強烈な拳骨の一撃お見舞いし

やがった。

「痛てっ！」

あまりの痛さに思わず頭を抱えた。

「ふん、たまに会えば相も変わらず口の悪い奴よ」

爺は鼻を鳴らした。

爺は、今しがた入って来た扉へ戻り、壁に備えられた電気のスイッチを押した。

暗かった室内を、蛍光灯の白い光が眩く照らす。

俺は、眩しさに一瞬目が眩んだ。

「コラ、爺！　いきなり眩しいだろうが！」

“ゴン！”

「ジジイと呼ぶなと言うておろうが！」

爺は、再び俺の頭を拳骨で殴った。

俺は、眩しさと拳骨の痛みで涙目になった目をゆっくりと開いた。

先程よりは眩しさを感じない。

次の瞬間、俺は急な違和感に襲われた。

そう言えば、さっき目覚めた時、部屋の中は真っ暗だった筈だ。

現に蛍光灯は今は点けられたばかりで、窓は遮光カーテンでしっかり覆われている。

つまり俺は、真っ暗な闇の中であるに拘らず、部屋の中の様子がまるで明かりの下の様に見えたのだ。

いや、実際には正常に見えた訳じゃ無え。

以前テレビで見た、暗い場所を高感度の暗視カメラで撮影した時の白黒の映像に似た見え方だった気がする。

俺は、自分の身体に対して異様な不安を覚えた。

それと同時に、あの恐ろしかった夢の内容と晶子やシゲ、村田やショウの顔が次々と浮かんだ。

「おい爺、何で俺がここに居る？　いったい何がどうなってるんだ？」

俺は、今にも爺に噛み付かんばかりに訊ねた。

「まあ待て！　　まったくジジイと呼ぶなと言っておろうが……。　順追って話してやるから大人しくせい」

爺は、今にも飛び掛かろうとする俺を、言い聞かせる様に

宥めた。

「お前が何を聞きたいのか良く分かっておる。じゃが儂にも聞きたい事が山程ある……」

「でもまずは俺の質問に答えろ。とりあえず何で俺がここに居るんだ！？」

「そうじゃな……。まずお前をここに運んだのは隣りの勇三殿じゃ」

「陽子のオヤジが？　　でもどうして　陽子のオヤジが俺を……」

「儂が頼んだのじゃ」

「爺が……？」

「うむ、三日前のあの晩、儂はあの場所に偶然居合わせての……」

「何だと！　三日前って、あれからもう三日も経っているのか？」

再び俺は、爺に飛び掛からんばかりに大声で叫んだ。

「まったくお前は大きい声で……。そうじゃよ。お前は三日間意識不明だったのじゃ」

「三日も……」

俺は、言葉を失った。

「あの晩、儂は偶然……、とは少し違うが、とにかくあの場所へ行

った。そうしたらお前が倒れておったのじゃ」

「俺が倒れて……。じゃあ、その時他には誰も居なかったのか？」

「おった……。儂が駆け付けた時、お前は奴等に殺される所だったのじゃ」

脳裏に、村田やショウの顔が浮かぶ。

「奴ら……。爺はアイツらが誰だか知ってるのか？」

俺は、爺に訊ねた。

「うむ……。あ、いや……、奴らが誰かと言うのであれば無論知らぬが、何者かと言う事であれば知っておる」

「……ヴァンパイア……」

俺は、独り呟く様に言った。

無意識で、村田にやられた腕や腹にそっと手を当てる。

「そうじゃ。お前も見たのじゃろう。奴らは確かに吸血鬼じゃ」

「やはり……」

一瞬夢であればと願ったのだが、俺の期待は、脆くもあっさりと裏切られた。

ーーやはりあれは現実で、シゲや晶子も死んだのか……。

俺は、シーツの端を強く握り締め、血が出る程に唇を強く噛んだ。

そんな俺を、爺が現実に引き戻した。

「あの場所で何があった？　何故奴らが二匹も死んでおったのじゃ？」

「二匹……、死んだ？」

俺は耳を疑った。

「違うのか？　儂が着いた時には、既に二匹の吸血鬼は死んでおり、残った一匹がお前を殺そうとしておったのじゃぞ！」

俺の脳裏に、死んで行く晶子の顔が浮かぶ。

ーーその内の一人は、間違なく晶子だ。

ーーだが二匹と言うのであれば、村田かショウのどちらかが死んだ事になる。

「死んでたのはどんな奴だった？」

「うむ。一匹は若い女の吸血鬼で、心臓に大穴を空けて死んでおった。もう一匹は色の黒い髭面の吸血鬼で、そ奴も腹に大穴を空け首の骨を折られて死んでおったわ」

ーー村田だ！

ーー間違いない。

ーーそう言えば夢の中の村田も、腹に大きな穴を空けて、内臓を垂らしながら顔を上下逆さまにして追い掛けて来た。

だが不思議な事に、村田が死んだ時の記憶も無ければ、何故死んだのかも分からない。

ーーショウとか言う奴が殺ったのだろうか？

しかしそれならば、何故記憶に無い筈の村田の死に様が、夢の中に出て来たのが分からない。

俺の頭に次々と疑問が浮かんだ。

「じゃあ後の奴はどうなったんだ？」

「儂が駆け付けた時、そ奴は倒れておるお前を今にも殺そうとしておったのでな、儂が指弾を手に打ち込んでやったら、自ら手首を引き千切って逃げよったわ」

「爺が奴を？」

「ああ、銀の球を打ち込んでやったのでな」

爺は、甚平のポケットから銀の球を取り出して見せた。

「おい爺、オメエ何モンだ？　昔から何かあるとは思っていたが……」

俺は、かねがね思っていた疑問を口にした。

「その話は長くなるのでな、おいおいゆっくりと話してやろう。じゃが今は、それよりあの夜の事じゃ」

爺は、俺の疑念をさらりと受け流しやがった。

質問をはぐらかされた感は否めなかったが、聞きたい事は山程ある。

「ああそうだな。じゃあその後どうなったんだ？　あの状態ならマスコミや警察が大変だったんじゃねえのか？」

「いや、警察もマスコミも一切動いてはおらん」

「何だって！　警察もマスコミも動いてないだと！」

「そうじゃ。儂は吸血鬼を取り逃がした後すぐに勇三殿に電話を入れ、意識の無いお前を車でここまで運んで貰ったのじゃ」

「……」

「そして勇三殿がお前を乗せて居なくなった後、儂は知り合いの専門家に連絡して、現場の検証と復帰の作業を依頼したのじゃ」

「知り合いの専門家？」

「そうじゃ。この国のみならず、世界中の何処の国にも対吸血鬼専門の公的機関が存在する」

「なんだって！　じゃあ国は、奴らの存在を以前から知ってたって言うのか？」

「無論じゃ。更には奴等と休戦協定を結び、“互いの種の存続を脅かす事無かれ”と約定にも謳っておる」

「そんな……、奴らとそんな協定だなんて……。奴らは人間の血を吸うんだぞ！」

頭に、“人間は餌だ！”と言い放ったショウの顔が浮かぶ。

「確かに奴らは人間の血を吸う。実際に近年までは人を襲い血を吸うておった。じゃが今では、奴らは保存用の血液や血清を摂取する事で、人を襲わなくても良いようになっておる」

「保存用の血液だって？」

「そうじゃ。病院で使う輸血用のパックがあるじゃろう、あれなんかもその一部じゃ。それに良く駅前等でやっておる献血も、一部は奴らの餌となるのよ」

「そんな、じゃあ政府も病院もグルって事か？」

「グルと言うより今在る血液銀行の内の幾つかは、奴ら自身が経営しておるわい」

「な……」

思わず俺は、絶句した。

「じゃあ、何で奴は人間を……、晶子やシゲや、村田を襲った？何故奴は、俺達を餌だなんて言いやがったんだ？」

「時にはそう言う輩も出て来る」

「そ、そんな……」

「人間にも犯罪を犯す輩がおるじゃろう。罪の無い人を己の快楽の為に犯したり殺したりする阿呆が。それと同じじゃよ。可哀想じゃその者達は犯罪に巻き込まれた被害者と同じなのじゃ……」

爺の言葉には、悲痛な響きが込められていた。

「じゃあ……、じゃあ奴らは、そんな事の為に死んだって言うのかよ！」

「じゃからそう言った吸血鬼専門の機関があるのじゃよ。機関名は『内閣調査室・対吸血鬼特別分室』……。政府直属の特務機関じゃよ。彼らはそう言った協定を破る吸血鬼を始末し、人間の命と協定を守るのが任務じゃ。それにもしも吸血鬼の存在が世間に明るみに出れば、世間は大パニックになる。じゃから奴らの存在の痕跡を消すのも彼等の仕事なのじゃよ」

「じゃあ死んだ晶子や村田はどうなったんだよ！」

「残念じゃが……、一生行方不明と言う事になるかのう…」

爺はぼそりと言った。

「な……っ」

「あの二匹の吸血鬼は、あの晩再生や復活を阻止する吸血鬼専用の薬剤を注射され、『C・V・U』の処理施設に運ばれた」

「『C・V・U』？」

「そうじゃ、『対吸血鬼特別分室』が管理する実働部隊じゃよ。そこの処理施設に運ばれた後、検死解剖の後処分されるのじゃ」

「処分てのはつまり焼くと言う事か？」

「そうじゃ。焼却処分するのじゃ」

「じゃあ家族はどうなる？　何も知らずに行方不明のままって事になるのか？」

「無論じゃ。家族や友人・知人にも一切事実は報せぬ。例え捜索願が警察で受理されておっても、警察への報告も一切されない。無論マスコミにもじゃ。じゃから吸血鬼の存在や事件の事は一切表には出ないのじゃよ」

「そんな……」

「しかもじゃ、お前自身もあの夜の出来事は一切他言してはならぬ。分かったな！」

爺は、強い口調で言った。

「……」

「それにな、お前があそこに居た事は『内調』の人間も知らぬ。知っておるのは儂と勇三殿だけじゃ。儂がお前を守る為、『内調』へ連絡する前にわざわざ勇三殿を呼んだのじゃ。勇三殿もその辺の事は心得ておる。じゃからお前も、何があってもこの事を他言してはならぬ。良いな！」

爺が言った。

「じゃあ……シゲはどうなる？」

「シゲ？」

「ああ、俺の友達だ」

「何と！　まだ犠牲者がおったのか？」

「奴らが殺して血を吸ったと言っていた……」

「分かった。それは儂から『内調』の知人に連絡をしておこう。じゃがあれから何の報告も無い所を見ると、死体は奴らが何処かへ隠してもう見付からぬやも知れん……」

爺の声が、遠くなった気がした。

ーーすまん、すまん。

ーー晶子、すまん。

ーーシゲ、すまん。

ーー村田、最初俺と喧嘩したばかりに……すまん。

ーー誰も救えなかった……。

ーー鉄二、すまねぇ。俺のせいでシゲが死んじまった。

ーー陽子、すまねぇ。俺を庇って晶子が死んじまった。

ーーすまん、皆すまん。

気付いたら俺は、涙を流していた。

そして自分を呪った。

やり場の無い怒りと悲しみが、涙となって流れ落ちる。

俺は、不覚にも嗚咽を洩らしてしまった。

血が出る程唇を強く噛み締め、シーツが破れる程強く握り締めた。

しばらくの間、俺が泣いているのを黙って見ていた爺は、優しく俺の肩に手を置いた。

「残念じゃがそれが現実なのじゃよ」

俺は、力無く爺の顔を見た。

「……なあ爺、それなら奴はどうなる？　このおとしまえはどう付けるんだ？」

俺は、怒りに震える声で訊ねた。

「あの逃げた吸血鬼か？　それは『内調』の捜索隊が見付け出しそれなりの処分をするじゃろう。実際奴等も捜索に協力するじゃろうから、見付かるのは時間の問題よ」

「奴ら？　誰だよ」

「吸血鬼共の組織じゃよ。奴らも我々人間と無駄な争いをしたくないのじゃ。じゃからそう言った跳ねっ返りの阿呆は自分達で処分するか、『内調』に引き渡す事になっておる」

それを聞いた俺は、拳を強く握った。

拳の色が白くなる程強く握り締めた為、掌に爪が食い込んでいる。

ーー奴が、奴のせいで晶子もシゲも村田もあんな事に……。

ーー奴だけは俺の手でぶっ殺してやる！

俺の全身を、凄まじい殺気が駆け抜けた。

「恭也……、気持ちは分からんでも無いが、儂が偶然にもあそこにおらなんだらお前は既に死んでおったのじゃ。命があっただけでも幸いと思い、奴と殺り合おうなどと考えるでない」

爺は、俺の気持ちを察してか、俺に諭す様に言った。

「うるせえ！　分かったような事言ってんじゃねえ！　奴は、奴だけは俺の手で殺らねえと気が済まねえんだよ！」

俺は、大声で怒鳴った。

「恭也、お前奴らといったい何があったのじゃ？」

爺が訊ねた。

「最初から事の一部始終を話してはくれぬか、恭也よ……」

俺は、力無くコクンと頷いた。

俺は全てを、この数日間に起こった全ての事を爺に語った。

ー一午前四時。

窓に張ってある漆黒の遮光カーテンの隙間から、僅かに朝日が差し込み初めていた。

4

4

俺は、長い話をジジイに語った。

そもそもの始まりである、最初の夜の村田達との喧嘩の事……。

その二日後に親友の鉄二から聞いた事……。

その夜、少年課の岩や捜索一課の刑事に事情聴取をされ、その時に聞かされた事……。

村田からの電話……。

シゲが人質になっていた事……。

呼び出されて向かった待ち合わせの場所に、村田だけでは無く、晶子やショウが居た事……。

高木晶子は隣りの陽子と同級生で、しかも親友であった事……。

奴らが自らをヴァンパイアと名乗り、瀕死の村田が試験管に入った血を飲んで復活した事……。

その血がさらわれた同級生のシゲの血で、シゲはもう奴らに殺されていた事……。

復活した村田に俺が殺されそうになった時、晶子が自らを犠牲にして俺を庇って死んだ事……。

その後村田にメチャクチャにやられた事……。

その時身体が熱くなり、心臓が爆発しそうになりそのまま意識が失くなった事……。

そうして目覚めたらこのベッドに寝ていた事……。

俺は怒り、嘆き、悲しみに暮れそうになりながら事の一部始終を、そして見ていた夢の内容まで全てを爺に語って聞かせた。

爺は頷き、時には相槌を打ちながらも、黙って俺の話を最後まで聞いていた。

話下手の俺の説明でどの位正確に伝わったのかは疑問だが、とにかく俺は全ての説明を終えた。

爺は俺の話の腰を折る事無く、この普通じゃ信じられねえ様な話を最後までじっくりと聞いていた。

もっともこの爺は、最初からヴァンパイアの存在を知ってやがったのだから、俺の話に違和感が無くても当然かも知れなかった。

こんな話を他の奴にしたら、あっと言う間に病院送りだろう。

だがこの爺は、ヴァンパイアの存在を知っていたばかりで無く、

奴らと政府の関係や、対ヴァンパイア用の特殊機関の事まで知っていやがった。

小さい頃から知っちゃいるが、本当に得体の知れねえ爺だ。

この爺、名前は“李　周礼”と言う。

年齢は七十歳を超えている筈だ。

職業は自称“仙人”で、いかがわしい事この上無い。

俺は両親を物心付く前に亡くし、赤ん坊の頃からこの爺に育てられた。

俺の死んだ親父とこの爺は親友だったらしく、俺をこの爺に託して親父は死んだらしい。

それ以来中学を卒業するまでの十五年間、この爺が俺を育ててくれたのだが、この爺の事は知らない事だらけだった。

もっとも爺の事なんて知りたいと思った事も無いが、それにしても知らない事が多過ぎた。

このインチキ仙人は、その道……中国武林では超が付く程の有名人で、“武神”とか“武王”とか呼ばれて今では一部伝説にもなってる人物らしい。

俺に言わせればただのスケベで女たらしのクソジジイにしか見えないのだが、世間ではそう言う事になっている様だ。

だが事の真偽は別として、この爺が化物並に強いのは本当である。

実際、さっき爺からあのショウを追っ払ったと聞いても、さほど不思議には思わなかった。

この妖怪ジジイなら、余裕であのショウとも渡り合えるだろう。

もともと爺は台湾の出身で、仙道の盛んだった当時の台湾でかなり厳しい修行を積み、様々な仙術や呪術、そして優れた武術を幾つか学んだらしい。

その後武術修行の為に中国本土へ渡り、放浪を続ける中で様々な中国拳法を吸収し、命を掛けて闘った事も幾度となくあるらしい。

そして長い間中国で仙道と拳法の修行に明け暮れ、ついに自らの技『八卦宝拳』を生み出したらしい。

どうやら様々な拳法を学び功夫を磨いて行く中で、無駄な物が全て取り払われ八つの宝が残ったんだそうだ。

それを一連の套路として完全させたのが『八卦宝拳』だと言ってやがった。

その後四十歳を過ぎた頃に日本に来たらしく、今でも横浜に住んでいる。

しかもこの爺、俺と居る時は散々の貧乏暮らしだったのだ

が、実は何と世界マネーに強い影響力を持つと言われる華僑に対し絶大な影響力や権力を持っているらしく、本人は煩わしいとか言って自由気ままにやっていたが、俺がまだ一緒に住んでいた頃、華僑のお偉いさんが良く尋ねて来たのを今でも覚えている。

オマケに中国の黒社会の奴らにも顔が利くらしく、全くロクでも無え爺だ。

まあ群れるのが嫌いな所だけは俺と気が合うんだがな。

俺は、物心付いた頃からこの爺に厳しく拳法を学ばされた。

それこそ“毎日毎日”だ。

何かの歌の歌詞みてえだが、小さい頃は本当に修行三昧の毎日だった。

そして中学に入って俺は、段々と拳法の修行をサボる様になり、中学を卒業したのを切っ掛けに住み慣れた横浜を離れ、俺は独りこの東京に出て来たって訳だ。

今住んでいるこのアパートは、ここの大家である森下勇三、つまり陽子の親父が爺と昔からの知り合いで、ここならば独り暮らしをしても良いとのお許しでこの部屋に住む事になったのである。

爺と会うのは、俺が以前ヤクザと揉めて警察に捕まり、俺の身柄を引き受けに来た時以来だから実に九ヵ月振りと言う事になる。

昔から俺が喧嘩をするとメチャクチャど突かれて、罰とし

て死ぬ程基礎鍛練をさせられたものだが、その時ばかりは何故か褒めてくれた。

俺が、友達の為に命を張ったからだと言っていた。

今はそれとは全く事情は違うのだが、何故か今朝の爺もひどく優しく感じた。

爺は俺の話を聞き終わると、瞑っていた目をゆっくりと開いた。

組んでいた腕を解き、膝の上に手を置く。

「恭也、身体は大丈夫か……？」

爺は、エラく神妙な面持ちで言った。

「あ、ああ……。大丈夫だ……」

俺は答えた。

こんな真顔の爺は初めてだ。

爺は、ゆっくり腰を挙げると更に真剣な表情を見せた。

「ならば一緒に来い」

そう言うと爺は、そそくさと部屋を出て行った。

俺はベッドから起き上がり、ベッドの脇に蟠っていた白の

Tシャツに袖を通すと、同じく脱いだままの状態で放置されていたジーンズにも足を通した。

ボサボサの髪を手櫛で後ろに撫で付け、煙草とライターをジーンズのポケットに押し込むと、そのまま部屋を出ようとした。

ドアノブに手を掛け捻ろうとした瞬間、俺は頭を過った不安の為にドアの前で立ち尽くしてしまった。

ーーもし俺がヴァンパイアにされていたら。

映画で見たヴァンパイアは、太陽の光を浴びただけで燃えて死んでしまった。

俺は思わず自分の両首筋を慎重に触った。

噛まれた痕は無いようだ。

確かショウの話しでは、奴らの血を飲まない限りヴァンパイアにならないらしい。

しかも噛まれただけではゾンビになると言う話だったが、どう考えても今の俺はゾンビではない。

俺は息を深く吸い込み、意を決してドアノブをゆっくりと回した。

扉を開くと、部屋の中にも眩い朝日が入り込んで来る。

廊下は、窓から差し込む朝日で光が溢れていた。

一瞬固まったがどうやら大丈夫の様だ。

廊下の先には、ジジイがぽつんと立っていた。

「何をまごまごしておる。早よう来い！」

爺は、人の心配を他所にいけしゃあしゃあと吐かしやがった。

ーーくっそ～。

心配した自分が恥ずかしくなった。

爺はくるりと背を向けて草履を引っ掛けると、アパートの玄関を開けて勝手に部屋を出て行ってしまった。

俺はすぐさま後を追った。

このアパートは、隣りの大家の住居と道場を挟む形で建てられており、二階建築三十年のボロアパートだ。

俺の部屋は二階の角部屋で、部屋を出るとすぐに階段がある。

今では珍しい鉄で出来た階段で、鉄骨に鉄板を渡して組上げ、丸い鉄パイプの手摺を付けただけのお粗末な代物だ。

“カンカン”と甲高い音を立てながら爺が階段を降りて行く。

俺も続いて階段を降りた。

見ると爺は隣りの道場へと歩いて行く。

アパートと道場は金網で仕切られているだけで、金網に設けられた出入口から道場へは幾らでも自由に出入り出来る。

不用心な事この上無いが、この金の無さそうな道場や住居に忍び込む馬鹿も居ないだろうし、ましてや曲りなりにも格闘技の道場に入る泥棒も居ないだろう。

道場は、瓦葺きで白い土壁の昔ながらの造りだ。

かなり古い建物だが、何十年前に建てられたかは見当も付かない。

爺は道場の玄関に辿り着くと、懐からデカい鍵を取り出して、道場の入口に取り付けられていた昔懐かしい南京錠の鍵穴へと差し込んだ。

「おいおい爺、勝手に良いのかよ!」

俺は慌てて後ろから爺を止めた。

「心配無い。勇三殿にはちゃんと断っておるし、この鍵も勇三殿から預かった物じゃ」

爺は平然と言いやがった。

鍵を回すと、“ガチャン”と金属の乾いた音を立てて南京錠の錠が外れた。

外れた南京錠を抜き取ると、木で出来た引戸を徐に開けた。

明かり取りの窓が設けられた道場内は、思ったより明るかった。

擦り切れた畳が辺り一面に敷き詰められ、正面には大きな和紙に墨で書いた書が掛けられている。

その横には立派な神棚が備えられていた。

爺は道場に上がる前に一礼をし、草履をきちんと揃えて脱ぐと、素足で道場の中程まで進んだ。

「お前も上がれ！」

爺が言った。

俺は一礼もせず履いて来たサンダルを乱雑に脱ぎ捨てると、裸足でズカズカと道場に上がった。

「全く不作法な奴じゃ」

爺は悪態を付いた。

「扉を閉めておけよ」

爺が言った。

先程まで珍しく優しいと思っていたが、今ではエラい変わり様だ。

ガキの頃爺にシゴかれていた時の事を思い出す。

こんな道場に来るくらいだから、久しぶりだとか何とか吐かして、俺に稽古の一つもさせようと言う腹だろう。

俺はふて腐れて扉をぴしゃりと閉めた。

「恭也、今からお前と仕合う……」

ジジイは真顔で言った。

「仕合うだと？」

意外な爺からの申し出に俺は驚いた。

爺の言う“仕合う”とは、真剣勝負をすると言う意味だ。

あんなヴァンパイアと互角以上に渡り合える妖怪ジジイと真剣勝負なんかしたら、命が幾つ有っても足りやしねえ。

しかし爺の表情は真剣だ。

何か思い詰めた物さえ感じる。

俺の背中にぞくりと冷たい物が走った。

爺は既に気を練り始めている。

ーーやばい、爺は本気だ！

俺は悟った。

「良いか恭也。儂は本気で行く。お前の功夫が儂より劣っておればお前は死ぬ。じゃからお前も儂を殺す気で来い。良いな」

爺は真剣な面持ちで“ぞろり”と言い放った。

「ちょ、ちょっと待て！　そんな事急に言われても訳が分かんねえだろうが！　とにかく訳を……」

俺が言い終わらぬ内に、爺は一歩踏み出した。

「問答無用……！」

そう言うと、爺は俺に向かってゆっくりと歩き出した。

5

5

爺は一直線に向かって来た。

ゆっくりとした足取りで、しかし確実に間合いを詰めて来る。

あくまで自然体を保ち、正中線も振れる事が無い。

両手をだらりと左右に垂らし、見事な程余分な力が抜けている。

どんな相手に対しても、またどの様な動きや技に対してもより素早く反応し、また最小限の動きで相手を屠り去る事を目的とした歩法だ。

間合いに入るまで自分からは決して仕掛けず、相手の動きに完全に合わせ“後の先”を取る。

“後の先”とは、相手から先に攻撃をさせて、その攻撃が当たる前に自分の攻撃を相手に当てる事である。

言葉で言うのは簡単だが、実際に行うのは至難の業だ。

“後の先”を取るには、単なる動態視力や反射神経の良さ等の“見切り”や、繰り出す技の速さだけで出来る物では無い。

無論それらは最重要のファクターではあるが、余程各下の相手でない限り、幾ら達人でもそれだけではせいぜい相討ちが限度である。

“後の先”を取るには、相手の微妙な動きや筋肉の変化、そして何より気の変化を事前に察知し、相手がいつ、どの様に、何処へ攻撃を仕掛けて来るか等の“起こり”を予測出来なければならない。

それらの“起こり”を読めてこそ、“見切り”（動態視力や反射神経）や技の速さが生かされるのであり、この三つが合わさってこそ相手からの攻撃を受けるより先に、自分の攻撃を当てる事が可能となるのだ。

先天的な才能に加え、厳しい修練と数知れぬ実戦を繰り返して来た者だけがそれを可能にする。

無論爺もその一人だ。

更に付け加えるならば、この正中線を整えた自然体と言うのは、言い換えれば隙が全く無いと言う事であり、相手に攻撃のオプションを限定させる事が出来る。

この事は“起こり”を読むのにも、“見切り”をするにも有効だ。

しかも攻撃をすると言う事は、即ち必ず何処かに隙が生じると言う事である。

相手に先に攻撃を仕掛けさせる事で相手に隙が生じれば、後の先を取った時に自らの攻撃を確実にヒットさせる事に繋がる。

まあとにかく厄介な事だ。

爺は、更に間合いをゆっくりと詰めて来た。

幾ら上下・左右にゆさぶりを掛けてみても、爺が乗って来なけりゃ話にもならない。

横や上へ跳んでも結局は攻撃を仕掛ける際に“後の先”を取られる。

かと言って何もしなければ、爺の間合いに入った瞬間先に攻撃を食らってしまう。

これでは八方塞がりだ。

ーークソッ！

どんどん爺が近付いて来やがった。

爺の体内に凄まじい量の気が充ち満ちているのがハッキリと伝わって来る。

爺が後一歩・二歩踏み出せば、そこは既に爺の間合いだ。

ーーくっそ～こうなったらヤケクソだ！

俺はそう決心し、今にも右正拳の直突きを爺の胸目掛けて繰り出そうとした瞬間、予想もしなかった事が起こった。

爺が目の前から消えたのだ！

俺の拳が虚しく空を切る。

爺は、俺が拳を繰り出した瞬間、自ら横へ跳んだのだ。

“起こり”を見られたのだ。

あまりのタイミングの良さに、俺は間抜けにも右正拳を繰り出してしまい、むざむざ右側に隙を作ってしまった。

俺は慌てて爺の動きを目で追った。

爺は二メートル程横へ跳び、左足が畳に着いた瞬間、その足で畳を強く蹴ると今度は俺に向かって飛び込んで来た。

ーー何と言うバネをしてやがるんだ！

余程強靭な足腰で無ければ、こうも見事な方向転換は出来るものじゃない。

普通なら横へ跳んだ勢いを殺せず、左足が着いた瞬間バランスを崩すか、この無理な動きで足首を捻挫するかどちらかである。

しかし爺は見事にそれをやってのけた。

しかも、爺は俺に向かって跳んだ瞬間、手に持っていた物を投げ放っていたのだ。

爺が投げた物が、俺の顔目掛けて一直線に飛来する。

“針だ！”

爺は、俺に向かって跳ぶ瞬間に、得意の針を俺の顔目掛けて放ったのだ。

針の後を追う様に、爺が俺目掛けて低い位置から一直線に向かって来る。

針を躱せば爺の思うツボだ。

しかし躱さなければ針が顔に刺さり、痛みで隙が生じた所をやはり爺に攻撃される。

「チィィィ！」

俺は、正拳突きで捻った身体を戻しながら、突き出したままだった右腕を引き戻し、そのまま肘を中心に腕を回転させて、飛んで来る針を右腕で横から払い飛ばした。

次の瞬間、爺は既に俺の懐深く飛び込んでいた。

針を払った為に、俺の身体は爺に対して正面に開いてしまっている。

ーーヤバい！　これでは全身がガラ空きで隙だらけだ！

爺は目前で畳を強く蹴ると、低い態勢から一気に伸び上がって来た。

右手を拡げ、俺の腹目掛けて突き出して来る。

ーーやばい！　発剄が来る！

“ぞくり”

俺の背筋を冷たいものが走り抜けた。

発剄は爺の得意技の一つだ。

全身に溜めた気を、相手の身体に触れた瞬間一気に打ち出す技である。

こんなのを食らった日には、到底無事で済む筈が無い。

俺は、上げていた右肘を伸びて来る爺の右手に向けて空かさず打ち下ろした。

しかし爺の方が0コンマ数秒速い。

ーークソッ！

俺は、咄嗟に腹に気を集中させた。

“ズドン！”

俺の腹部に爺の掌が触れた瞬間、爺の発剄が炸裂した。

腹部に凄まじい衝撃が走る！

まるで腹が爆発した様だ！

発剄を食らった瞬間、爺の右手首を俺の肘が捉えたのだが、その効果を確認する事無く、俺の身体は後ろへ飛ばされた！

二メートル程飛ばされたが、足を畳に擦り着け踏ん張る事で何とか踏み止どまった。

足の裏が摩擦で火傷しそうだ。

全身が痺れ、身体の自由が利かない。

内臓が口から飛び出したかと思う程の衝撃だった。

実際に、今も内臓が踊り狂っている様だ。

堪らず俺は胃液を吐いた。

酸っぱい香りが口中に広がる。

吐いた胃液には少し血が混ざっていた。

俺は、痺れる手で口を拭った。

見ればやはり拭った手にも赤いものが付着している。

俺は、フラつく身体や定まらない腰、笑いの止まらぬ膝を意思の力だけで奮い立たし、ともすればヘタリ込みそうな自分を何とか踏み止どまらせた。

俺は、口から息をゆっくりと吐き出しながら、足を前後に少し開いて腰を落とした。

手の震えを堪え、左手はゆるりと開いたまま前へ突き出し、同じ様にゆるりと開いた右手も軽く前に出して構えた。

その間も、爺の発剄で崩れた気のバランスを必死に調整する。

ー一小周天。

仙道で用いられる気を整える呼吸法だ。

鼻からゆっくりと息を吸い、吸い込んだ空気を気と共に身体の中を循環させ、今度は口からゆっくりと息を吐く。

これにより、それぞれのチャクラを回して気を練るのだ。

チャクラ＝サンスクリット語で「車輪」を意味し、ヨーガや仙道で良く用いられる、頭頂部から尾底骨までの間に存在すると七つ気の集中する場所の事だ。

サハスラーラ　（頭頂部）

アジュニャー　（眉間）

ヴィシュダ　（喉）

アナーハタ　（胸部）

マニプーラ　（腹部）

スヴァーディシュターナ　（陰部）

ムーラーダーラ　（会陰）

光る蓮華や回転する輪としてイメージされ、その一つ一つを気の力で回すのだ。

チャクラを回転させながら、呼吸に合わせて下から上へゆっくりと気を上げ、またゆっくりと気を下ろす。

これを繰り返す事で乱れた気を整え、気を練り増幅させるのだ。

俺は小周天を行いながらも、爺の様子を注意深く伺った。

爺は、さっきまで俺の立っていた場所に立ち、俺の肘が当たった右手首を左手で押さえていた。

皺と髭に覆われた顔が僅かに苦痛で歪んでいる。

それ程の打撃だとは思えなかったのだが、意外にダメージを与えたのだろうか？

いや、あの程度で爺にダメージを与えられたとは考え難い。

ー芝居か？

だいたいいつもスケベな事以外は、何考えてるのか分からない爺だが、今日の爺は分からない事だらけだ。

久しぶりに会って、珍しく優しいかと思ったら急に仕合えと言い出すし、挙句の果てに自分は俺を殺す気だから、俺にも爺を殺す気で闘えなんて言いやがる。

冗談かと思えば針は顔目掛けて投げるわ、本気で発剄は打ち込み

やがるわ、いったい何がどうなってやがるんだ？

爺に殺される程の理由なんて……、ダメだ！　あり過ぎてどれなんだか分かんねえ。

「もう、気は整ったのか？」

爺がいきなり声を掛けて来た。

腕はまだ押さえたままだ。

「爺！　どう言うつもりなんだテメエ！」

俺は怒鳴った。

「お前を殺すと言うたじゃろう。もう忘れたのか？」

爺はしらっと言って退けた。

「だから何で俺が爺に殺されなきゃならねえんだ？」

「そんな理由など知らぬままで良い。それよりお前も本気を出さねば本当に死ぬぞ！」

ーーくっそ～。

理由は分からねえが、やっぱり本気で殺す気か？……。

「分かったよ爺……。じゃあ俺も本気で行くぜ！　本当に死んじまっても俺を恨んで化けて出るんじゃねえぞ！」

「フォッホホホ、お前みたいなヒヨッコが、儂に勝つつもりでおるとは片腹痛いわ。どちらにしても死ぬのはお前じゃ！」

言い終わった瞬間、爺の気が爆発的に膨れ上がった。

まさしく気の爆風だ。

ーーチッ、売り言葉に買い言葉でついあんな事言っちまったが、あんな化け物爺にどうやって勝ちゃ良いんだ？

俺は、どう攻めるか迷ったが、最早覚悟は決まった。

ーーどの道迷ったって答えなんか見付かる訳ゃねえ。なら何も考えず攻めて攻めて攻めまくるだけだ！

小周天により俺の体内にも気が充満した。

「行くぞ、ジジイー！」

俺は、爺目掛けて一直線に走った。

間合いに入ったらとにかくひたすら殴り蹴る！

ただそれだけだ！

爺は、押さえていた腕を放し即座に身構えた。

すぐに俺の間合いに入った。

爺の顔目掛けて勢い良く突きを放つ！

ーー左フックだ！

爺はスウェーで軽く躱す。

ーー当然だ。

放った左腕を戻す瞬間に、腰を捻りながら今度は右フックを繰り出す。

これも左拳でガードされた。

ーーだがまだまだだ。

俺は爺の腹を目掛けて、抉る様にボディーブローを放った。

“ゴン！？”

爺の腹に俺の拳がめり込む筈……だった。

しかしめり込む筈の拳は、まるで岩でも叩いた様に完全に表面で止まっている。

逆に、俺の拳に鈍い痛みが走った。

ーー硬気功。

中国拳法で言われる所の気功の一種で、体内に気を充満させる事により身体の筋肉を鉄や岩の様に硬くする技だ。

更にこの爺の硬気功は、刀や槍を通さぬばかりか、銃弾すら受け止める事が出来るらしい。

俺は驚愕した。

話には聞いていたが、これでは本当に鉄か岩を叩いているかの様だ。

ーーだがここで引いて堪るかよ！

俺は痛む拳を無視して、爺に数知れぬ突きや蹴りを放った。

爺は顔を両腕でガードし、腹部は晒したまま腰を落として踏ん張っている。

俺は、マシンガンの様な攻撃を容赦無く爺に浴びせ掛けた。

顔

水月

腿

脇腹

顔

腰……

ストレート

ボディーブロー

ローキック

フック

ハイキック

ミドルキック……

様々な技を織り交ぜながら、左右・正面・上下と休む事無く打ち続ける。

これにはさすがの爺も反撃する余裕が無い。

更に俺は攻撃の回転を上げた。

何故か今日はすこぶる調子が良い。

身体が思う様に、いやそれ以上に動いてくれる。

自分でも信じられない程であった。

見ると爺の顔に変化が生じていた。

最初は無表情に俺の攻撃を凌いでいたが、今では僅かに苦痛の色が浮かんでいる。

さしもの硬気功も、この嵐の様な攻撃の前には全てを防ぎ切る事は出来ないらしい。

ー一勝機！

俺は歓喜に胸を躍らせた。

俺の頭に作戦が閃いた！

攻撃を全て腹部に集中させる。

爺の顔が更に険しくなった。

体勢はそのままだが、爺の脚がじりじりと後退を始めた。

俺は、爺の頭を両手で押さえ、力ずくで押し下げた。

爺が俺の手を払い除ける。

それと同時に下から右膝を蹴り上げ、腹部への膝蹴りと見せかけて、上げた膝を支点にそこから爪先を蹴り上げた。

爺が堪らず後ろへ逃げる。

爺の白い髭を数本引き千切って、俺の右脚が空を切った。

その瞬間、後ろへ逃げた筈の爺が前に踏み出して来た。

ー一掛かったな。

俺はほくそ笑んだ。

前に踏み出して来る爺の頭部に目掛けて、俺は振り上げた脚をそのまま下に落とした。

踵落としだ！

幾ら硬気功でも脳天への一撃には耐えられまい。

俺の踵が爺の頭を捉えようとしたその時、爺は更に一歩踏み込んで打撃点を外すと、落ちて来る俺の脹脛を痛めた筈の右掌で下から突き上げた。

脚に強烈な衝撃が走る！

落とした俺の脚が、再び上へ跳ね上がった。

爺の野郎、踏み込みを深くして俺の踵落としを外したばかりか、痛めた筈の左手で、俺の脹脛に下から発剄を打ち込みやがったのだ。

俺は、一気にバランスを崩し回転する様に後ろへのけ反った。

左足が僅かに浮く！

爺は、その隙に更に踏み込んで俺の喉に手を添えると、そのまま前に突き出した。

俺の身体が反転して宙に浮く！

畳に後頭部が叩き付けられる瞬間、俺は両手を頭に回し咄嗟に後頭部をカバーした。

両手にガードされた後頭部が畳に叩き付けられる。

手でカバーしていなければ、確実に脳震盪を起こしていただろう。

その瞬間にも、爺の顔が間近に迫る。

依然手は喉を掴んだままだ！

爺の手に力が籠る。

ーーやばい！　この態勢で発剄を打つつもりか！？

「ケヤァァァーッ！」

俺は、倒れ様に思い切り腰を曲げ、左足を爺の後頭部目掛けて蹴り放った。

“ダメか！？“　と思った瞬間、意外にも俺の足の方が速かった。

俺の蹴りに気付いた爺は、発剄を打つ事無く身体を投げ出す様に前へ跳び、畳の上を転がった。

俺は空かさず飛び起きた。

見ると、既に爺も立ち上がっている。

爺は肩で息をしていた。

無限の体力を持った妖怪ジジイが肩で息をするとは、硬気功や発剄でかなりの体力や気を消耗したに違いない。

それに、俺の嵐の様な攻撃でダメージも蓄積されている筈だ。

ーー今がチャンスだ！

俺は再び爺に飛び掛かった。

一気に間合いを詰める。

駆け寄り様、俺は爺の顔目掛けて鋭い右ストレートを放った。

爺が右腕で払う。

俺の身体が流れた。

爺は体捌きで俺の右ストレートを横へ躱すと、同時に俺の腕をなぞる様に受けた右手首を横に回転させ、そのまま腕を掴み後ろへ引いたのだ。

パンチを放った勢いと、爺に腕を引かれた勢いで、俺の身体はバランスを崩した。

ーー化剄。

中国拳法で用いられる技で、相手の力に逆らわず、体捌きと同時に手や腕を使い、相手の力を受け流す事で相手の攻撃を無力化し、

更には相手のバランスさえ崩してしまう技である。

有名な所では、太極拳に『纏絲勁』と呼ばれる技があるらしい。

爺から見て俺の右側がガラ空きになる。

“ズドン！”

その瞬間、爺の左肘が俺の右脇腹に突き刺さった。

ー一頂心肘。

八極拳の技だ。

俺の身体が“くの字”に折れる。

俺は爺の手を振り解き、激痛に悶えながら後ろへと逃げた。

爺が追って来る。

俺は牽制の為、右のジャブを爺に向けて放った。

爺が顔を振って避ける。

ー一くうっ、何て反射神経してやがるんだ！

爺は俺の懐に深く入り込むと、畳を“ズン”と強く踏み鳴らした。

震脚！

間髪をおかず爺の右肩が激しく俺に激突する。

ーー鉄山靠だ。

俺は、勢い良く後ろへと吹っ飛ばされた。

踏ん張る事も出来ず、勢い良く畳に激突する。

激痛に息が詰まった。

俺は畳の上で悶取りを打った。

爺は、畳を蹴って宙高く飛んだ。

片足を畳み、もう片方の足をピンと伸ばし、俺目掛けて落下して来る。

落下する重力を利用して、全体重を掛けて俺の腹部を踏み抜く気だ。

俺は、咄嗟に身を捩って間一髪それを躱した。

凄まじい地響きを立て、爺が俺のすぐ脇の畳を踏み抜く。

身を捩って躱さなければ、内臓破裂で死んでいたかも知れない。

俺は頭に血が上った。

畳の上を転がって爺から間合いを取ると、まだ痛む脇腹を堪えて立ち上がった。

既に爺は間合いを詰めて来ている。

爺が、再び懐から針を取り出そうとするのが見えた。

俺は針を抜かせまいと爺目掛けて鋭い足刀蹴りを放った。

幾ら爺でもこのタイミングでは躱しようが無い。

しかし次の瞬間、爺は宙に跳んで蹴りを躱した。

しかも驚くべき事に、宙に跳んだ爺が、蹴り出した俺の脚の上に立っているではないか。

見事と言う他無い絶妙なバランスで、僅かな面積しかない俺の脚の上に立っているのである。

しかも何故か重さを感じない。

ー軽身功か。

俺は初めて見たが、まったく凄まじい技である。

これも内気功の一種で、気の力で自らの身体や体重を、木の葉の様に身軽なものにしてしまうのだ。

俺は舌を巻いた。

俺が脚を引っ込めようとした瞬間、爺は俺の長い脚を素早く駆け下りて来た。

爺は俺の太腿まで一気に駆け下りると、俺の顔面へ鋭いローキックを放った。

爺の蹴りが俺の顔面を捉える。

俺は首が捩じ切れる程の衝撃を受け、そのまま後ろへ吹っ飛んだ。

俺の意識は、一瞬でブラックアウトした。

6

6

恭也は畳に転がっていた。

完全に意識を失い、目も白目を剥いている。

李老人の蹴りをモロ顔面に喰らったのだ。

通常であれば首の骨が折れる。

死んでいてもおかしくなかった。

それ程の蹴りだったのだ。

だが死んではいない。

天井を向いている恭也の胸が、緩やかに上下しているのが分かる。

凄まじく強靭な肉体の持ち主であった。

李は、何故か次の攻撃を加え様とはせず、恭也から距離を取った。

そして、先日使った物と同じ黄色い長方形の紙を懐から何枚か取り出した。

短冊を大きくした様な紙には、既に朱墨で何か書かれている。

やはり先日と同じ様に漢字と何かの模様の様な物が書かれている

のだ。

符咒に使用する咒符である。

李は気を失っている恭也を、何か探る様に注意深く見詰めた。

“む！”

李は何かを感じ取ると、手に持っていた咒符を懐から取り出した針で、均等な間隔を空けて円を描く様に一枚づつ畳に刺し止めて行った。

咒符は全部で八枚あった。

見れば円と言うより正八角形の形をしている。

李は咒符で作った八角形に背を向けた。

李が静かに目を閉じる。

目で見るのでは無く、何かを感じ取ろうとしている様だ。

次の瞬間、恭也から禍々しい気が立ち上ぼって来た。

これは既に妖気だ！

膨れ上がった気が、建物を揺らしている様な錯覚さえ起こす程の妖気である。

「むう……。やっと現れおったか……」

李は“ぼそり”と呟き瞼を開いた。

李の後ろでは、恭也の妖気に反応した呪符が、バタバタと乾いた音を立てている。

恭也はゆっくりと起き上がった。

白目を剥いていた筈の瞳は赤く充血し、口許からは長く伸びた犬歯が二本顔を覗かせていた。

金髪と言うより、むしろ白色に近い髪が全て逆立っている。

顔にも幾筋かの血管が浮き出ていた。

“シャーッ！”

恭也は獣が相手を威嚇する様な呼気を吐いた。

オドロオドロしい妖気が、恭也の全身から立ち上ぼっている。

李の目には、恭也の背景が歪んで見える程の凄まじい妖気であった。

李は懐から数本の針を取り出すと、それらを手に持って身構えた。

「こい、恭也！」

李も気を整えた。

全身の気を練り直し、細胞の一つ一つにまで気を充満させる。

李の身体が一回り大きくなった様に見えた。

「ガアッ！」

いきなり恭也が飛び掛かった。

たった一蹴りで、四メートル程もあった間合いを一気に詰めて来る。

恭也は飛び掛かり様、李の顔目掛けて鋭く伸びた爪を振るった。

「むう！」

李は後ろに身を引く事で間一髪でこれを躱すと、空かさず手に持っていた針を構えた。

恭也は、李の目の前で獣の様に手足を使い畳に着地した。

李が、眼下の恭也目掛けて針を投げる。

“ギィン”

李が投げた針を、恭也は伸びた爪で払った。

両手足を使い畳を蹴ると、再び恭也は李に襲い掛かった。

凄まじい跳躍力で宙を飛んで来る恭也に対し、李は逃げる所か、逆に前へ踏み出した。

低い姿勢で畳の上を転がると、宙にいる恭也へ再び針を投げ放つ。

「ギャッ！」

低い悲鳴を上げ、恭也は宙でバランスを崩し畳に激突した。

恭也が畳の上を転がる。

李も針を投げた後、そのまま畳を転がり恭也との間を取った。

恭也が立ち上がる。

だが身体が思う様に動かないのか、ギクシャクとした動きで立ち上がった。

見ると、恭也の左脚の太股と左肩の腕の付け根、更には左胸の丁度心臓の辺りに長い針が打ち込まれている。

李が、先程投げ放った針だ。

恭也は、三本の針を全て抜き取った。

その針を李に向かって投げ付ける。

李は、身体を横に引いて難なく針を躱した。

「ほう、少しは効いておるかよ」

李は呟いた。

先程投げた針には、先端に薬が塗られていた。

李自身が調合した仙薬で、身体を麻痺させる効能を持っている。

一種の麻酔だ。

しかも李は、あの体勢で恭也の経絡のツボに打ち込んだのである。

今の恭也が化け物であるなら、この李も常人ではなかった。

針は抜いたものの、経絡に針を打ち込まれ、しかも李の仙薬で身体の一部が麻痺した状態の恭也は、未だに少しフラ付いている。

「虎でも三本打たれれば昏倒する仙薬ぞ、良くも立っておられるものだ……」

李は驚嘆していた。

「だがその効き目も、いったい何時まで続くことやら?」

李は誰にとも無くそう呟くと、恭也に向けて足早に迫った。

未だフラ付いている恭也は動きに精彩が無い。

それでも恭也は、向かって来る李の頭部目掛けて鋭い右の爪を振るった。

だが、李の踏み込みの方が早い。

李は振り下ろされる腕を左横へ躱すと、恭也の右足の親指と人差

し指の間を踵で踏み抜いた。

「ガァーッ！」

恭也はけたたましい悲鳴を上げた。

足の甲の親指と人差し指の間にはツボがあり、そのツボを李は踵で踏み抜いたのだ。

しかもその一撃で、恭也の右足の骨は蹴り砕かれた。

恭也はあまりの痛みに激怒し、先程振った右腕を横に払った。

李が頭を振ってそれを躱す。

恭也の爪が李の頭部のあった場所を薙いだ。

李の耳に空気を切り裂く鋭い音が届く。

空かさず李はガラ空きになった恭也の懐に飛び込むと、“ズン！”と強く震脚を踏み鳴らした。

それと同時に、恭也の腹部に右の衝捶（拳を縦にした突き）を打ち込み、打った拳を上に上げそのまま突き上げる様に頂心肘（肘打ち）を恭也の水月に“ズドン”と深く突き入れた。

ー一八極拳の猛虎硬爬山である。

恭也の身体が“くの字”に曲がった。

“ゴフッ”

恭也は口から血を吐き出した。

しかし恭也は、驚異的な闘争本能で李に掴み掛かる。

李の身体がすっと沈んだ。

恭也の両爪が空を切る。

李の身体が、一瞬畳に吸い込まれたかの様に見えた。

李は、畳に屈み込む様に両手を着いて右脚を伸ばすと、もう片方の左足を軸にして伸ばした右脚を回転させた。

前掃腿＝蟷螂拳などの様々な中国拳法で用いられる足払いの技である。

両足を李に払われた恭也は、そのまま後ろへと吹っ飛んだ！

畳に背中から落ちる。

見れば李と恭也の位置がは入れ替わっていた。

今では、倒れている恭也が、先程李が畳に針で止めた咒符に背を向けている。

恭也は満身創痍の状態で再び立ち上がった。

「ギギギギ……」

恭也の口から獣の呻き声が漏れる。

しかし李も満身創痍であった。

先程の恭也との闘いで、左手首にはヒビが入り、全身には数知れぬ打撲を負っていた。

「ウォォォォン！」

恭也は、獣の雄叫びを上げた。

李は懐から取り出した棒状の暗器を、恭也の左足へと投げ放った。

李に右足の甲を折られ、左足に重心を掛けて立っていた恭也には、投げられた暗器を躱す事が出来ない筈であった。

しかし、恭也は左足一本で後ろに跳ぶ事でそれを躱した。

畳に暗器が深々と突き刺さる。

恭也は、咒符で描かれた八角形のすぐ手前に左足のみで着地した。

だが着地と同時にバランスを崩す。

左脚がまだ痺れているのだ。

恭也はヨロめいた。

その間にも、李は既に恭也との間合いを詰めている。

恭也は指を揃え、長く伸びた爪で手刀を李の顔目掛けて突き出した。

李は、頭を下げて手刀を躱す。

李の白い髪が数本引き千切られた。

李は低い姿勢から一気に全身のバネを使って伸び上がると、恭也の顎へ鋭い掌底突きを思い切り突き上げた。

恭也の足が畳から浮き上がる。

更に李は、間髪をおかず再び強く震脚を鳴らすと、恭也の腹部に鋭い発剄を放った。

足が畳から浮いていた為に恭也の身体は踏ん張りが利かず、そのまま後ろへ吹き飛んだ。

再び恭也は背中から畳に激突した。

恭也が落ちた場所は、既に八角形の内側であった。

李は、恭也が八角形の内側に入った事を確認すると、右手の人差し指と中指を二本立てて口許に持っていった。

李が、口の中で何やら呪文を唱える。

「ウギャーッ！」

恭也は、断末魔の様な叫び声を上げた。

頭を手で覆いもがき苦しんでいる。

口の両端からは泡を吹いていた。

呪符には邪・妖・魔を禁じる呪が書かれており、それを八角形に配置する事で八卦八門の結界を張り、更に禁呪を唱える事で恭也の内にある吸血鬼としての魔の因子に直接攻撃を仕掛けているのだ。

李の目的は、最初からこれであった。

恭也の体内に眠る、封印されていた吸血鬼の因子がどこまで覚醒しているのかを確め、もしそれが本当に覚醒しているのであれば、再びそれを封印する為の術を施す。

これにより、恭也を再び人間として生きて行ける様にする事こそ、李の養父としての責任であり亡き恭也の父親との約束だったのだ。

李の唱える呪文が大きくなる。

李も額から凄まじい量の汗をかいていた。

「ギャーッ」

恭也が更にもがき苦しんだ。

しかし次の瞬間、禁呪により小さく萎む筈であった恭也の妖気が、急激に膨れ上がった。

「何と！」

李は驚愕に目を剥くと、膨れ上がる妖気を力ずくで押さえ込むべく更に大きく呪を唱え出した。

こうなると、恭也の妖気と李の呪力との力比べである。

だが恭也の妖気はどんどん膨れ上がって行った。

八角形の結界の中は恭也の妖気で満ち溢れ、今にも結界が破られそうな勢いだ。

しかも禁呪で苦しんでいた筈の恭也が、逆に苦しむ所か余裕の笑みさえ浮かべている。

畳に刺してあった呪符が、まるで陸に上げられた魚の如く激しくのた打った。

“ボウッ”

二つの巨大な気の摩擦で、呪符に書かれていた朱墨の文字が急に炎を上げる。

八枚とも同時に燃え上がった。

その瞬間、張られていた結界も霧の様に消失した。

「何と……」

李は茫然とした。

今まで何匹もの吸血鬼と闘ったが、この結界を破られたのも初めてなら、禁呪を破られたのも初めてだった。

しかもあれ程のダメージを受けておきながら、結界を破る程の力をまだ残していたとはとても信じられない。

「化け物……」

李は恐怖した。

こんな恐怖を感じたのは、初めて吸血鬼と闘った時以来だった。

恭也は、唇の端を吊り上げてニヤリと笑った。

どうやら李が負わせた傷や骨折した骨も、その殆どが治ってしまったらしい。

何度も発剄を食らい、深いダメージを負った筈の内臓も、恐らくはかなり回復している事だろう。

貴族ならではの復元力だ。

しかし血を飲む事も無く、気の力のみでこれ程の再生・復元を果すとは、例え貴族と言えど驚愕に値した。

しかも禁呪の結界の中でである。

恭也は、今まで李が闘った全ての吸血鬼の中でも、最強クラスの

吸血鬼であった。

恭也は不気味な笑みを浮かべたまま、ジリジリと李に歩み寄る。

李は死を覚悟した。

ー一儂の命と引換にしてでも恭也を人間に戻す。

李は心の中で固く誓った。

李は再び腰を落として構えると、全身にありったけの気を巡らした。

恭也との間合いが詰まる。

恭也は、爪を使って凄まじい連撃を仕掛けて来た。

李は、顔や頭部を腕で庇い、腰を落としてその場に踏ん張った。

恭也の鋭く伸びた爪は、浅く李の表面を傷付けただけだった。

李は再び硬気功を使っていた。

身体を鉄の様に固くして、恭也に隙が出来るのを伺っているのだ。

しかし恭也の攻撃は治まる所か、更に激しさを増して行く。

今の李の状態では、吸血鬼と化した恭也のスピードに付いて行ける筈が無い。

そう判断しての硬気功であった。

だが李の目論みは外れた。

李の着ていた甚平は脆くも切り裂かれ、皮膚の傷も既に表面だけでは無く、肉までも抉られ、削ぎ取られて行った。

気が揺らぎ、硬気功の力が弱まっているのだ。

李の全身が血で覆われた。

白かった髪や髭も血で真っ赤に染まっている。

その時、恭也が李の血に反応した。

恭也の喉が“ゴクリ”と音を立てる。

恭也は李に噛み付こうと、大きな口を開けて首筋に顔を寄せた。

ーー今だ!

李は、ボロボロになった甚平の懐から呪符を一枚抜き取ると、恭也の開いた口へ手刀と共に突き入れた。

恭也の犬歯で手の甲が裂ける。

李は手の痛みを堪え、呪符を喉まで押し込んだ。

恭也は激しくもがいた。

李に喉まで手を突っ込まれて呼吸が出来ないのだ。

しかも顎が外れている。

激痛と激しい嘔吐反応で、恭也の赤く染まった瞳に涙が溢れた。

李は呪符を恭也の喉深く押し込むと、突き入れた手刀をさっと引き抜いた。

李の手は、恭也の血と唾液に塗れていた。

恭也が堪らず口を押さえる。

しかし、押さえた手の隙間から夥しい量の血が溢れ出た。

李は血塗れの手で最後の呪符を抜き取ると、自らの血を糊替わりにして、苦しむ恭也の額へと張り付けた。

空かさず李が呪文を唱える。

恭也が再び身悶え始めた。

顎が外れ、大きく開いた口からダラダラと血の混じった涎を垂らし、苦痛に満ちた表情で畳の上を転げ回る。

何度も額に手をやり呪符を剥そうとするが、呪の掛かった呪符はどうしても剥れないらしい。

しかも一枚は恭也が体内に飲み込んでしまっているのだ。

恭也の動きが次第に緩慢になって行った。

全身をひくひくと痙攣させている。

目の充血も治まり掛けていた。

あれ程禍々しかった妖気も、今ではかなり萎んで来ている。

その時、李が激しく嘔吐した。

長時間の緊張と闘いによる極度の疲労、更には無数に受けた打撲や傷による激しい苦痛で、身体に限界が来ていたのだ。

だが何よりも、恭也の口に手刀を突き入れた際に受けた、手の甲の傷口から入った恭也のヴァンパイアウィルスが、李の身体を徐々に侵蝕し始めたのである。

李がただの人間だったならば、これ程の苦痛を味わう事無くゾンビと化していたであろう。

しかし李は、以前より吸血鬼と闘う為に毎日仙薬と共に呪符を丸め丸薬にした物を飲み、ヴァンパイアウィルスに対して強い抵抗力を付けていたのだ。

その為身体が強い拒否反応を起こし、ゾンビ化しない変わりに激しい苦痛となって現れたのである。

李はもがき苦しんだ。

心臓が不整脈を起こし締め付けられる様に激しく痛む。

激痛に苦しむ李とは反対に、恭也は苦しむのを止めていた。

額に張られた咒符が剥れ落ちている。

ゆっくり起き上がる恭也の目は、再び血の色に充血していた。

自分で嵌めたのか、外された顎は元に戻り、口許には長い犬歯が伸びている。

再び、恭也の全身に禍々しい妖気が戻った。

恭也は憎悪の目を李に向けると、鋭く伸びた爪で襲い掛かった。

恭也は、李の両肩を両手で押さえ付けた。

伸びた爪が李の肩に食い込む。

李は激しい痛みにのけ反った。

李の首が露わになる。

恭也は、李の首に長い牙を突き立て様と顔を近付けた。

肩を爪で押さえられ、しかも全身を犯す激しい苦痛の為に、李はもう指一本動かす事も出来なかった。

李の顔に血生臭い息が掛かる。

李は、顔を背けると同時に自らの死を覚悟した。

「すまぬ、恭介……」

李はそう呟いて目を閉じた。

李の首に今にも鋭い牙を立てようとした瞬間、恭也に異変が起きた。

「だ……め……だ……。お……俺は、……何……を……」

恭也の目に正気が戻った。

禍々しい妖気が、嘘の様に消失して行く。

震える手を李の肩から放した。

その時、道場の扉が音を立てて開いた。

「老師！　恭也くん！　大丈夫か?」

扉を開いた男が、二人に向かって大声で叫んだ。

長かった死闘は、ようやく終わりを迎えた。

第四章1：吸血鬼

第四章
『吸血鬼』
1

佐々木は、焦り苛立っていた。

一昨日の明け方、李から通報のあった事件の首謀者と思しき逃走中のヴァンパイアが、未だ発見されていないのである。

李の話によると、そのヴァンパイアは手首を引き千切りかなりの深手を負っているらしい。

しかもその時点で失血による為か、既に“渇き”の兆候が出ていたと言うのだ。

ヴァンパイアの“渇き”は人間のそれとは比べ物にならぬ程激しく、死と直結する強烈なものだ。

例えるなら、麻薬中毒患者の禁断症状を何倍……いや何十倍にも強烈にしたものだと以前聞かされた事がある。

その状態では、正常な意識が完全に飛んでしまい、死の苦しみを味わいながら血を求める、本能剥き出しの凶暴な悪鬼と化してしまうのだ。

あれから今日で三日……、未だ発見の報せが無いのは、極めて危険な事態であった。

しかし佐々木を更に苛立たせたのは、つい二時間程前に受けた『C・V・U』の科学検査班からの報告であった。

現在の時間……午前八時三十三分

地下にあるこの分室には太陽光が一切射さないが、地上では太陽が燦々と射している事だろう。

普段なら無事に夜が明けた事を喜び、大きく伸びでもして帰宅の準備を始める所なのだが、今はとてもそんな気分になれない。

日勤の者以外は既に勤務を終える時間だが、まだ誰も帰宅の準備を始めていない。

ここ『内閣情報調査室対吸血鬼特務分室』は、日勤・準夜勤・夜勤の三交替制だが、主に夜勤が通常の勤務時間で、基本的には夜間の勤務に重きを置かれている。

通常この部署には、常時十名程が詰めているだけで、実際に吸血鬼の調査・捜査・戦闘・処理等の実働を行う『C・V・U』、つまり『カウンター・ヴァンパイア・ユニット』は、防衛省の市ヶ谷駐屯地の中に本拠地を置いている。

ここは『C・V・U』を統轄し、管理運営する為の部署なのである。

いわゆるエリート組で、業務の内容も半分はデスクワークがメインだ。

日本中の人間・ヴァンパイアを問わず、あらゆるデーターが納め

られた膨大な量のデーターベースを持ち、『C・V・U』を情報面からサポートし、現場の隊員に指示を出すのが主な任務である。

殆どの者が防衛大卒で、現場からの叩上げは片手程もいない。

しかし佐々木は、数少ない叩上げ組の一人で、室長の久保の強い推薦で入室したのである。

無論そう言った意味では、現在の佐々木の地位は叩き上げ組の中でも異例中の異例と言えた。

この分室は、霞ヶ関の総理府ビルの地下にあり、表向きは『内閣情報調査室・国内部門特務分室』となっている。

機密性を保つ為エレベターが別になっており、一般職員が使用するエレベターや階段を使うだけでは、この分室には辿り着く事すら出来ない。

セキュリティーも万全で、入室にはＩＤカード及びパスワード入力と、虹彩認証による本人確認と、サーモグラフィーと紫外線を使用してのヴァンパイア検査をパスする必要がある。

コンクリートや鉄骨が剥き出しの無機質で無粋な室内は、パソコンの画面が見やすく、しかもスタッフの集中力を高める為に照明を少し暗めに調整してあり、各セクション毎に配置を分けられたデスクで、皆パソコンのモニターと向き合い作業を行っている。

ここの主任である佐々木は、スタッフが仕事するメインフロアから少し階段を上がった、ロフト式でガラス張りの中二階にオフィスを構えていた。

ここは、各セクションでの作業の進行状態や、人の動き等が一望出来る様に設えてある。

最も、佐々木自身は未だ現場主義を貫き通しており、事件が起きるとすぐ現場に出てしまう為、そう言った時このオフィスは、副主任の水野が佐々木の代理を果たしている。

水野は、佐々木と違い防衛大卒のエリート組で、佐々木程の経験や人望は無いが、沈着冷静で佐々木の不在時においても的確な指示が出せる事から、部下達は勿論、佐々木からの信頼も厚い人物だ。

歳は四十一歳で、身体は中肉中背と言ったあまりにも普通で特徴の少ない男だが、銀色の細いフレームの下の瞳は知的な色を讃え、如何にも出来る中間管理職と言った顔立ちだ。

今は佐々木が在室している為、水野は下のメインフロアにある自分のデスクに座っていた。

佐々木は、苛立たしげに何十本目かの煙草に火を点けた。

昨日の夕方ここに出勤してから、いったい何十本吸ったのか数え切れない。

クリスタルで大振りの灰皿は、長いままで揉消された吸殻が山の様になっている。

最近はどこも禁煙・節煙で、この部署もご多分に漏れず喫煙用の狭いブース以外では禁煙なのだが、今はそんなまどろっこしい事をしていられる気分では無い。

高感度の火災報知器が誤作動しない様にスイッチを切ってある為、ガラスで仕切られた室内には濛々たる紫煙が充満していた。

再び新しい煙草に火を点け、二・三回吹かした所でまだ長いままの煙草を苛立たしげに揉消した時、ふいにデスクの上の電話が鳴った。

内線のボタンを押してスピーカーフォンにすると、電話のスピーカーから聞き慣れた女性の声が響いた。

『佐々木主任、室長がお呼びです』

スピーカーからはいつもの聞き慣れた声が流れた。

「分かった、すぐ行く……」

佐々木は、そう答えると早々とスイッチを切ってしまった。

いつもの定時報告だ。

室長の久保は、佐々木を含む他のスタッフとは勤務時間が異なっている。

久保は、朝８時半から夜までの完全な日勤で、事件が無い限り夜勤専門の佐々木とは交代制を取っているのだ。

無論それは責任者不在を避ける為の処置ではあるが、別の意味で久保は他のスタッフと仕事の内容が全く違うからである。

言わば久保の仕事は、“政治”だ。

各省庁のトップクラスと政府の中枢の者以外はは、その存在すら知らされていない極秘の特務機関と言う性質上、何をするにしても様々な弊害が付纏う。

更には、各省庁の

縦割り行政

縄張り主義

利権構造

秘密主義

等々が弊害に拍車を掛けている。

そう言った政治的な問題を処理するのが、室長の主な仕事なのである。

室長が日勤なのはその為だ。

スピーカーフォンのスイッチを切ると、佐々木は急ぎ自分のオフィスを出た。

音を立てて階段を降りる。

苛立ちが足の運びに現れている為か、足音に驚いたスタッフが一様に佐々木へ視線を送る。

そんなスタッフの視線を気にする素振りさえ見せず、階段を降りた佐々木は、メインフロアの自動ドアから少し明るめ通路へ出ると、短い通路の奥にある久保のオフィスへと足早に向かった。

佐々木はガラス製の自動ドアを抜け、受付の前に立った。

受付のフロアはさほど広くなく、自動ドアを入った右手に受付用のカウンターがあるだけだ。

照明もメインフロアに比べれば明るいが、やはり日光の射さない地下では薄暗い印象を拭えない。

「おはようございます」

天板に天然木の突板を贅沢にあしらった、ダークトーンのローカウンターの後ろに座っていた秘書の青木早苗が、如才なく挨拶をした。

青木早苗は国立大学卒業の才女で、秘書としても有能な女性だ。

年齢は二十五歳。

ブラウンの髪をいつも巻き髪風に上で束ね、細い眉毛に二重だが切れ長の瞳、高く通った鼻、ぷっくらとした唇に艶かな紅いルージュ。

モデルの様に長身ですらりとしたボディに、黒地に白の細いストライプの入ったブランド物のスーツを纏っている。

このまますぐにでもモデルで食べて行ける程美しい。

頭脳も明晰で、知的で落ち着いた話し方をし、口も固く、この様な職場の秘書としては最適な女性であった。

「あ、ああ。おはよう」

佐々木は少し毒を抜かれた様に挨拶を返した。

早苗の美しさと落ち着いた物腰には、先程までの苛立ちを一瞬忘れさせる物がある。

早苗は、カウンターの上の電話で久保に内線を入れた。

「室長、佐々木主任がお見えです」

電話の受話器越しに承諾の返事があったのだろう、“はい”と返事を返して丁寧に受話器を置くと、早苗は楚々とした動作でカウンターを回り込み、久保のオフィスのドアの前に立った。

早苗は“トントン”とドアをノックし、

「失礼します」

と言ってオフィスのドアを開けた。

佐々木が後に続く。

「失礼します」

張りのある低いバリトンで佐々木は一礼すると、頭を下げたまま

の早苗に小声で礼を言い、オフィスに入って行った。

久保のオフィスはかなり広く、扉を入った正面には如何にも贅を凝らした応接セットが“でん”と置かれ、その奥に久保のデスクがある。

応接セット同様天然木を贅沢にあしらったデスクはきちんと整頓され、ファイルされた書類が少しと黒いノートパソコン、後は葉巻用の灰皿と銀のアンティークな卓上ライターが品良く並んでいるだけであった。

久保はなかなかの綺麗好きであるらしい。

久保は、そのデスクに納まり佐々木を見詰めていた。

「おはようございます」

佐々木は再び頭を下げた。

「おはよう」

野太い声が返って来た。

久保は、五十半ばで恰幅の良い紳士だ。

白髪が混った髪をきっちりオールバックに固め、頬の肉は少し弛んだが銀縁メガネの奥には、今でも知的で鋭い眼光が覗いている。

濃紺のダブルのスーツをきっちりと着込み、隙の無い印象を与える男であった。

「掛けたまえ」

久保は手に持っていた葉巻を灰皿に置き、手を目の前の応接セットに翳し佐々木に座る様促した。

「いえ、結構です」

佐々木はそう答えると、応接セットを回り込みデスクの前に立ちはだかった。

「何か苛ついてるな？」

久保は、佐々木の目を見詰めたまま言った。

「いえ、苛ついてなどおりません」

憮然とした表情で佐々木が答えた。

「そう言えば例のヴァンパイアは見つかったかね」

「いえ、発見の報せはまだ入っておりません」

「ううむ、今朝で三日目か……気掛かりだな」

「はい。新たな被害が出なければ良いのですが……」

佐々木は伏せ目がちに答えた。

「今日で三日目ともなれば、被害を避けるのは無理だな。だが最小

限には止どめねばならぬ」

久保も覚悟を吐き出す様に、苦渋に満ちた表情で言った。

「あと、二時間程前に『C・V・U』の科学検査班から報告がありました」

「うむ、例の死亡したニ匹のヴァンパイアの件だな」

「はい。それが……」

佐々木は口篭った。

「どうした？　君にしてはエラく歯切れが悪いじゃないか」

「はい。実は……」

佐々木が話しかけた時、ドアをノックする音が聞こえた。

「入りたまえ」

久保がドアへ視線を送り言った。

佐々木も後ろを振り返る。

すると、“失礼します”とドアの向こうから声が掛かり、早苗が入って来た。

手には朱塗の盆が乗っている。

盆の上には、湯気の立ったコーヒーカップが二客乗せられていた。

「コーヒーをお持ちしました。どちらに置けば宜しいでしょうか？」

早苗はわざと尋ねた。

立ったままの佐々木を気遣っての事だ。

「ああ、二客共テーブルに置いてくれ」

そう言うと、久保はデスクの椅子から立ち上がった。

「君も座りたまえ。青木君がせっかくコーヒーを煎れてくれたのだ」

早苗の心遣いが分かる久保は、そう言って佐々木をテーブルに促した。

「ありがとうございます」

そう言って、佐々木も応接セットのソファに腰を下ろした。

本革張りのソファに大きな身体が沈み込む。

何とも言えぬ座り心地だ。

早苗は、二人が座り終えるのを待ち、慣れた手つきでそれぞれの前にカップを置くと、一礼してその場を離れた。

小さく“失礼します”と声を掛け、オフィスを後にする。

久保は、早速コーヒーを一口飲んだ。

「冷めない内に君も飲みたまえ」

「頂きます……」

そう言って佐々木もコーヒーを口にした。

鼻腔と口腔内に煎れたてのコーヒーの豊かな香りが広がる。

久保は、持っていた葉巻をゆったりとくゆらせた。

久保は無類の愛煙家で、特にキューバ産の葉巻が好物だ。

この分室のトップ二人がコレでは、禁煙や節煙もあったものではない。

「君もやるかね？」

久保は、テーブルの上のシガーケースの蓋を開いた。

スペイン杉を使って作られた高級なヒュミドールだ。

中にはちゃんと湿度計や加湿器も完備されている。

葉巻は、キューバ産の最高級品コイーバだ。

「ありがとうございます。ですが私はこちらで……」

そう言ってスーツの内ポケットから、お気に入りのキングサイズのロングピースと銀製のジッポライターを取り出した。

佐々木も葉巻はやるのだが、スパスパ吸いたい時は自分の吸い慣れた煙草に限る。

「相変わらずピースだな……」

久保は、にこやかな笑顔で言った。

佐々木も笑みを返しロングピースに火を点けた。

佐々木は、大きく紫煙を吸い込みゆっくりと吐き出すと、再び真面目な顔付きになった。

「さあ、続きを聞こうか」

久保もにこやかな表情から真顔に戻して言った。

「はい。死亡したヴァンパイアの身元や、逃走したヴァンパイアの身元が判明しました」

「うむ。それで？」

佐々木はスーツの内ポケットから黒い手帳を取り出すと、パラパラとページを捲った。

「とりあえずは電話に拠る報告でしたので、正式な報告書は後ほど提出しますが、死亡した二匹の内一匹は村田浩平十七歳で、都立成田西高等学校の三年です。五日前から行方不明で、報告によると、行方不明となった夜に村田浩平の物と思しき大量の血痕が発見され、所轄が事件性を考慮し捜査を始めていた様です。そして二匹目は、高木晶子……。私立聖華女子高等学校の三年で、村田と同じく十七

歳です」

「十七歳か……。まだ若いな……」

久保が呟いた。

感慨にふける久保を他所に、佐々木は先を続けた。

「高木晶子も五日前から行方不明で、所轄の方へ家族から捜索願が出ています。死因は二匹とも争いによるもので、村田浩平は何者かによって首の骨を折られ、頸椎の破損が死亡原因だそうです。腹部に負った傷は、鋭く先の尖った太い棒の様な凶器に因るもらしいのですが、ヴァンパイアの再生能力から見て致命傷には至らなかったようです。高木晶子も似た様な凶器で心臓を突破られ、心臓が再生する前に失血死した模様です」

「心臓と脳は奴等の最大の弱点だからな」

「はい。心臓は奴等の最大の弱点なので、僅かな傷であれば再生も可能だったのでしょうが、あれ程酷い損傷を負えば再生は無理だったのでしょう」

「で、二匹は誰に殺されたのかね？」

「高木晶子の場合は、死んだ村田浩平の手に付着した血液から、殺害した犯人は村田と断定されました」

「仲間割れか？」

「その様です。村田の死因も腹部の傷の類似性から見て恐らくヴァ

ンパイアの手に因る物だとは思うのですが、誰が殺ったのかはまだ判明しておりません」

「ならば李老師からの報告にあった、逃亡したヴァンパイアが犯人と言う事になるか……」

「恐らくは……」

「逃走したヴァンパイアは李老師の指弾で負傷し、自らの手首を引き千切って逃亡したのだったな。地面には大量の血痕と銀に因り腐乱した手首が残されていたと聞いていたが……」

「はい、その通りです」

「ならば残された手首の指紋や、採取した血痕のＤＮＡから、逃亡したヴァンパイアの身元は分かったんじゃないのか？」

「奴らから提供されている登録データーと、指紋やＤＮＡ鑑定によるデーターを照合した所、飯沼彰二と言う男がヒットしました」

「飯沼彰二……。聞かぬ名だな……」

久保は首を傾げた。

「飯沼彰二は、今から二十年前に転身した第三種ヴァンパイアで、当時は二十二歳だったそうです。李周礼老師から聞いていた人相とも一致しますし、まず間違い無いでしょう」

「それで捜査状況はどうなっている？」

「はい。『Ｃ・Ｖ・Ｕ』の現場捜査班が、現場から半径を広げなが

らローラーを展開しています。しかし……」

「三日経っても発見出来ずか……」

久保の表情が曇った。

「二時間前の報告の後、飯沼彰二の顔写真を捜索員全員に配り、総力を挙げてもう一度現場付近からの捜索をやり直す様指示してあります」

「分かった。しかし君が苛ついていたのはそれが原因なのかね？」

久保が不思議そうに尋ねた。

佐々木は表情を暗くした。

「実はもう一つ報告が……」

佐々木の表情がら更に深刻な物になった。

「あの夜残された夥しい血痕と、殺された村田と言うヴァンパイアの着衣に付着した毛髪や血液から、前述の三匹とは別の生物が、あの時刻・あの現場に居合わせた可能性が出て来たのです」

「生物？　おかしな言い方をするじゃないか。いったいどう言う事なのかね？」

久保は眉間に皺を寄せた。

「それが、残された毛髪や血痕を詳しく鑑定した結果、その生物は今までに見た事の無い特殊なＤＮＡを有してるとの事なのです」

「特殊なＤＮＡ？」

「そうです。様々な鑑定・検査を行った結果、その生物は全く未知の生物で、驚くべき事にヴァンパイアと、日本では既に絶滅した筈の獣人双方の特徴を合わせ持った、特異な遺伝子を有してたたと言うのです」

「獣人だと！？　馬鹿な！　獣人族は確か十八年前に絶滅した筈だぞ！　しかも我が国のみならず、世界中いつの時代を通しても、ヴァンパイアと獣人の混血が存在したなどと言う話は聞いた事も無い。君も知っているだろう、互いに別の生き物であるヴァンパイアと獣人の間には子供が出来ぬ事を！」

「はい。ですが鑑定に間違いは無いそうです。私も、以前獣人族が生存していた頃に、獣人の血を吸ったヴァンパイアのＤＮＡが、ウイルスか何かで突然変異を起こしたのではないかと言ったのですが、この生物は後天的なウイルスに因る変異などでは無く、先天的にヴァンパイアのＤＮＡと、獣人のＤＮＡを持った未知の生物だとの言うのが科学検査班の見解です」

「いったいどんな姿をした生物なんだ……？」

「ヴァンパイアも獣人もヒト型の生物だと言う観点から見れば、当然ヒト型である事は間違い無でしょう。実際、科学検査班も未知の生物はヒト型、しかも性別はオスだと言っております。もしこれが事実なら、我々の知らない未知の生物が、野放しの状態で街を徘徊している事になります」

「ううむ……、これは非常に由々しき事態だぞ……」

久保は更に険しい表情で腕を組んだ。

「はい。逃亡中の飯沼彰二の行方もそうですが、この生物が今何処でどうしているのかが　問題です」

佐々木も不安気に視線を落とした。

「しかしその様な化物が、今まで誰にも見つかる事無く潜伏していながら、これと言った被害も報告されていないと言うのは解せんな……」

久保も目を伏せ思案を巡らせた。

「ですが毎年増え続ける行方不明者の数を考えれば、その中にその生物の被害者がいても不思議ではありません」

「もしかしたらその生物が、奴らの言っていたハンターかも知れんな……」

「ハンター……ですか……？」

佐々木は目を細めた。

「うむ、昨日も君に話したが、奴らの話では最近奴らを相手に狩りをしている者がいるらしい。最も奴らは我々を疑っている様だったが……」

「その可能性は十分に考えられますね。しかし例えそうだとしても、いったい何が目的で……？」

「それは分からん。だいたい奴ら自身も情報を持っていない様だった。それで、君はこれからどうしたら良いと思うのかね？」

久保が視線を戻して言った。

「はい、とりあえず飯沼彰二の方は現場捜査官を総動員して捜査範囲を広げ、一刻も早い確保又は処理をします。未知の生物の方は、それが今室長の言われたハンターかどうかは別としても、科学検査班による更に詳しいＤＮＡ鑑定を急がせ、それとは別に現場での聞き込みや、死亡した二匹のヴァンパイアの線から所轄にも情報提供と協力を仰ぎ、急ぎ正体の特定するよう捜査を始めます。室長には所轄への根回しをお願いします。あと今後の為にも、この生物の呼称が必要だと思うのですが、ヴァンパイアと獣人の混血と言う事もあり『魔獣』と言うのはどうでしょうか？」

「そうだな。いずれにせよ呼び名は必要だろう。君の提案を採用して今後は『魔獣』と呼ぶ事にしよう。私は所轄や関係省庁には急ぎ手を打っておく。君は李老師にも再度あの夜の事を確認した方が良いな」

「はい、今日にでも老師には連絡を取ってみます。では、私はこれからの捜査方針を指示して来ますのでこれで……」

そう言うと佐々木はおもむろに席を立った。

「うむ、頼んだぞ」

久保も力を込めた視線で佐々木を見上げ言った。

「報告書と操作方針は書類にて後ほど提出致します。では、失礼します」

そう言って佐々木は一礼すると、久保のオフィスを後にした。

「貴族と獣人族の混血、そしてハンターか……」

オフィスに一人残った久保は、ソファに深くもたれると、葉巻の煙と共に低く言葉を漏らした。

2

2

ーーあれは何だったのだろう……？

ーー俺は爺を殺そうとしていた。

ーー最初は、爺が俺を殺そうとしていた筈なのに、気付いたら俺が爺を殺そうとしていて……。

ーーいや違う。

ーー俺は爺を殺そうとしてたんじゃ無い…。俺は爺の血を……、

ーー血を吸おうとしていたんだ。

ーーそれで陽子の親父が入って来て……。

“ ！！ ”

俺は、“ ガバッ ”と身体を起こした。

全身に痛みが走る。

ーー痛って～。

俺は痛みに顔を歪めた。

「目が覚めた様だな」

不意に後ろから声が掛かった。

驚いて振り向くと、陽子の親父が、俺の方を向いて座っていた。

白いTシャツにジーンズと言った出で立ちで、畳の上に座布団も引かず直接胡座を掻いて座っている。

辺りを見回すと、そこは道場の中だった。

俺は、道場の畳に直接敷かれた薄い蒲団の上に、上半身を起こした状態で座っていた。

隣には、爺が同じ様な煎餅蒲団の上で、今も寝息を立てている。

俺も爺も全身包帯だらけだ。

俺はともかく、爺は本物のミイラの様にぐるぐる巻きにされていた。

白い包帯に赤い血が滲んでいる。

それも一ヵ所では無い。

何ヵ所も、いや何十ヵ所にも及んでいた。

白い髪や髭にも、拭き取り切れなかった血が所々こびり着いている。

どうやら顔に付着した血だけは綺麗に拭い取った様で、傷を負った箇所に幾つもの絆創膏が張られていた。

静かな寝息を立ててはいるが、まさに満身創痍と言った感じである。

「……オッサン、俺……」

言い掛けて、俺は言葉に詰まった。

何と言えば良いのか分からない。

陽子の親父は優しげな眼差しで俺を見ると、こくりと黙って頷いた。

浅黒く日焼けした肌に短く刈った髪、デカイ割には平坦な顔、小作りな目・鼻・口は何処となく以前K－1の選手で今はレフリーや芸能活動をしている某有名人に良く似ている。

陽子は間違い無くお袋さん似だ。

どうら俺や爺が気を失っている間に、陽子の親父が手当をしてくれたらしい。

周囲を見渡すと、道場の所々は俺や爺の血でだいぶ汚れていた。

畳は擦り切れ、穴まで空いている。

更には何かを燃やした様な焦げ跡まで付いていた。

「オッサン……すまねえ……」

俺はどう言って良いか分からぬまま口を開いた。

「気にするな。それより身体は大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。コレありがとう……な」

俺は、身体に巻かれた包帯を差して言った。

「何だ？　神妙な声を出して気持ち悪いな」

そう言われて、俺は照れ隠しに頭を掻いた。

「俺……爺を殺そうとして……」

そう言って俺は、爺に視線を落とした。

「だから気にするなと言っているだろう。老師も覚悟の上の事だ」

陽子の親父はきっぱりと言った。

「でも俺はヴァンパイ……」

「もう何も言うな。お前の言いたい事は分かっている。でもそれは老師が目を覚ましたら老師に直接聞く方が良い。それよりも今は休む事だ」

陽子の親父は、俺の言葉を途中で制した。

だがそれは、暗黙に俺の問いに対する明確な答えとなった。

「そうか……。夢だったらとは思ったけど、やはり俺は……」

「貴族じゃよ……」

俺の言葉を遮る様に、いきなり爺が口を開いた。

「爺！　起きてたのか？」

「老師！」

俺達は同時に声を上げた。

「うむ。今し方起きたばかりじゃがな……」

そう言うと、爺は包帯だらけの身体を無理に起こそうとした。

「あっつつ……」

身体を起こそうとした爺が、途中で呻き声を上げた。

「爺っ！」

「老師！　無理はいけません。今は休んでいて下さい！」

陽子の親父は、爺の身体に手を回し諫める様に大声を上げた。

「いやいや、大丈夫じゃ……。それよりこの阿呆に話がある。身体を起こすのを手伝ってはくれぬか？」

そう言って爺は、尚も身体を起こそうとした。

「いけません老師。恭也君との話ならいつでも出来ます。今は御身体を……」

諫める陽子の親父を、爺は手を上げて制した。

「大丈夫じゃよ。それに今大丈夫じゃないのはこの阿呆の方よ」

爺は、そう言って俺に顎をしゃくった。

「……」

俺には返す言葉が出て来なかった。

「阿呆と言われて儂に一言も言い返して来ぬとは、やはりこ奴は大丈夫ではないわ。勇三殿、頼む……」

爺は、満身創痍の身体で頭を下げた。

陽子の親父は、不承不承で爺を抱える様に抱き起こした。

身体を起こすと爺は辺りを見回した。

「勇三殿、本当に申し訳無かった。いつもこの阿呆の事で世話になっておる上に、大切な道場をこんな風にしてしもうた……。ましてや儂ら二人の手当まで……。いや本当に申し訳無い」

そう言って、爺は深々と頭を下げた。

「老師、何水臭い事を……。それに他ならぬ恭也君の事……、どう

か頭をお上げ下さい」

爺は陽子の親父に促され、ゆっくりと面を上げた。

「なあ爺、さっき“キゾク”って言ったよな。何なんだよその“キゾク”ってのは」

爺と陽子の親父とのやり取りを黙って見ていた俺は、やっと口を開いた。

「『貴族』とはのう、吸血鬼として生まれ落ちた者の事よ」

「生まれた時から吸血鬼だっただと？」

「そうじゃ、お前は生まれた時からの吸血鬼よ」

「そ、そんな……」

俺は再び言葉を失った。

「ショックなのは分かる。じゃがそれが冷徹な事実じゃ」

「だ、だがよ、俺は生まれてこの方血なんか飲んだ事も飲みたいと思った事も無えし、それに昼間だって起きてるし、太陽に当たっても燃えたりしねえじゃねえか！」

「じゃがお前は紛れもなく吸血鬼じゃ。それはもうお前自身も分かっておろうが……」

爺は、きっぱりと言い放った。

「だ、だがよう……」

もう自分でも気が付いている。

だが信じたく無いだけだ。

ーー悪鬼の様な村田の顔。

ーー晶子の死に顔。

ーー関係無いのにさらわれ血を吸われたシゲの無念。

ーーその原因を作ったショウへの憎しみ。

そう言った思いが、自分もショウと同じ化物だと言う現実を突き付けられても、受け入れる事を拒んでしまうのだ。

「お前が今まで血を飲まずにおられたのも、飲みたいと思わなんだのも、全てはお前自身が吸血鬼として覚醒しておらなんだからじゃ」

「覚醒だと？」

「そうじゃ。赤児のお前をお前の父親から託された時、お前が吸血鬼として覚醒せぬ様、儂が呪を凝らしたのじゃよ」

「呪って……、じゃあ俺に今まで呪を掛けていやがったのか！」

「そうじゃ。赤児じゃったお前の額と胸の位置に、目には見えぬ様呪を彫込んだのよ」

「じゃあ風呂に入った時に浮き出る赤い痣みてえなモンは、俺が赤ん坊だった頃に爺が彫った呪の刺青の痕だって言うのか？」

「その通りじゃ。だからこそお前は覚醒もせず、今日まで人として生きて来られたのじゃ」

「でもそれなら、何で今頃になってヴァンパイアに成っちまったんだ？」

「考えられる理由は三つある……。一つはお前が歳を取り、呪の効力が落ちて来た事。二つ目は、先日の吸血鬼との闘いで頭に酷い怪我を負ったじゃろう。その時多量の吸血鬼の血を浴びておる筈じゃ。その己の出血と吸血鬼の血を浴びた事で、呪そのものが消え掛かっておるのやも知れぬ。更に三つ目は、お前が命の危険に晒された為、お前の生存本能が、お前の中に眠る吸血鬼としての血を呼び覚ましたのかも知れん。たぶん恐らくは、偶然にもこれら三つの条件が、全て同時に重なったからであろうよ」

「俺が先日たまたまヴァンパイアと殺り合ったから、今まで眠っていた俺の中のヴァンパイアが目を覚ましたって訳か……。で、でもよう、今現在でも俺は太陽の光に当たっているけど、別に何とも無いぜ！　昔映画で観たヴァンパイアは、太陽の光に当たると燃えちまってた筈だぞ！」

「それは先程も言うたが、お前が『貴族』だからじゃよ」

「貴族……」

「そうじゃ、吸血鬼と一口に言ってもその成り立ちや能力には幾つ

かの種類がある」

「種類？」

「そうじゃ。そもそも吸血鬼には三種類おってな、お前の様に生まれつき吸血鬼の者を『貴族』、人として生まれ、後に儀式などを用いて転身した者を『生成り』、奴らに噛まれて転身した者を『屍鬼』と呼んでおる。もっとも『内調』では第一種・第二種・第三種などと呼んでおるがの。それで『貴族』と言う種類の吸血鬼は、日の光を浴びても燃えもせねば、死にもせんのじゃよ。『生成り』も同じじゃ。じゃが『屍鬼』だけはそうは行かん。日の光を浴びればその皮膚は焼け爛れ、長時間浴び続ければ死に至る。恐らく映画や小説等に出てくる吸血鬼は、この『屍鬼』がモデルになっておるのじゃろう」

「でも俺がその『貴族』ってヴァンパイアだと言う証拠は何なんだ？」

「それはお前の親父が『生成り』だったからよ」

「俺の親父だと！」

俺は思わず身を乗り出した。

「まあ待て、お前の気持ちは分からんでもないが、そう焦るな」

爺は、俺をいなす様に言った。

陽子の親父は、俺達の会話を黙したまま聞いている。

「お前の親父の恭介は、元々は人間だったそうじゃ。あまり過去の事を話したがらぬ男じゃったから詳しくは聞かなんだが、八百年以上は生きていると言うておった」

「八百年……」

「儂は日本の歴史には疎いが、確か今で言う平安か鎌倉とか言う時代だった筈じゃ。その頃に何故か理由は知らぬが、恭介は自分の意思で生きたまま吸血鬼に転身したそうじゃ。儀式を用いての」

「だから『生成り』か……」

「そうじゃ。儀式の内容は吸血鬼の中でも一部の『貴族』しか知らぬらしいが、儀式により吸血鬼となった『生成り』は、その成り立ちと呼び方が違うだけで、殆ど『貴族』と変わらぬ特殊な能力を身に付ける事が出来たらしい」

「特殊な能力？」

「まあ良く言う超能力と言う奴じゃ。恭介は強い念動力を持っておってな、『貴族』には他にもテレパシーや千里眼、発火能力なんて物を使う輩もおる。じゃが能力には個体差があり、齢を重ねる毎にその能力も増して行くそうじゃ」

「そんな……、親父がヴァンパイアだったなんて……。じゃお袋はどうなんだ？　やっぱりお袋もヴァンパイアだったのか？」

「分からぬ。ただ吸血鬼で生殖能力を持った者は『貴族』と『生成り』だけじゃ。しかも人間との間には極めて子は出来難いと聞いておるから、恐らくお前のお袋さんも『貴族』か『生成り』だったの

じゃろう」

「でも、死んだ親父と親友だった爺がなんでお袋の事を知らないんだ？」

「当時、恭介とは久しく会うておらなんでのう、久しぶりに恭介が儂を訪ねて来た時には、既にお前を抱いておった。そしてお前を儂に預け出て行ったのが、奴を見た最後となったのじゃよ」

「じゃあお袋は……」

「会うた事が無い。その時恭介は死んだと言うておったが……」

爺が声を詰まらせた。

「なあ爺、何で親父は爺に赤ん坊だった俺を預けたんだ？　それに親父やお袋が死んだのは事故何かじゃないんだろ？　本当は何で死んだんだよ？」

「恭介は奴らに殺されたんじゃよ」

爺はぞろりと言った。

「殺された……。じゃあお袋は？　奴らって誰だよ！」

俺は、両手で爺の肩を大きく揺すった。

俺の強く握った部分の包帯が血で滲む。

俺は慌てて手を放した。

「すまねえ……」

だが爺は痛みに顔を少し歪めただけで、まるで痛みを受け入れ堪えるかの様に、声一つ発しなかった。

「お前のお袋さんが何故死んだのかは知らぬ。じゃが恐らくは恭介と同じく奴らに殺されたのじゃろう」

「奴らって……まさか……？」

「そうじゃ、吸血鬼どもじゃよ」

「だ、だって……、親父やお袋はヴァンパイアだったんだろう？じゃあ何で親父達が奴らに殺されなきゃならねえんだ？」

「最後に会うた時、恭介は奴らに追われておったのじゃ」

「追われてた……」

「そうじゃ。恭介は吸血鬼どもに追われておった」

「おい、何故親父は仲間のヴァンパイアに追われていたんだ？　いったい親父は何をしたって言うんだ？」

「今朝お前に政府と吸血鬼の関係は話したであろう。犯罪を犯す吸血鬼を処理する機関が『内閣情報調査室対吸血鬼特務分室』であり『C・V・U』だと。その時こうも言った筈じゃ、吸血鬼にもそう言った輩を処分または捕えて『内調』に引き渡す組織があると。それをしておったのがお前の親父“御子神恭介”よ！」

「親父が……」

「恭介は、約定を破って人間を襲う吸血鬼を捕らえ処分する仕事をしておったのじゃ」

「じゃあ仲間を裏切っていたのは親父だと言うのか！」

俺は声を荒げた。

「いや、組織は約定を守る為に、奴ら自身で作った物じゃ。じゃから恭介が裏切った訳ではない」

「それじゃあ何故親父は奴らに追われて殺されなきゃならなかったんだ？」

「最後に会うた時に、今この国で何か途轍も無く大きな事が動き出そうとしている。だから自分はそれを阻止せねばならぬと言うておった」

「途轍も無い事って何だよ」

「いや、それは分からぬ。恭介はそれ以上語らなかったのでな」

「だから追われていたのか」

「恐らくはそうじゃ。そして儂にお前を託して出て行った次の日、恭介は遺体で発見された」

「奴らが……、ヴァンパイアが殺したんだな……」

「うむ。恭介は、奴らの中でも五本の指に入る程の手練れでな、その恭介が殺られたのじゃ、余程の相手だったのじゃろう。その後、『内調』も捜査したのじゃが、奴らの方から恭介が約定を破り人間を襲った為処断したと通報があってのう、そこで捜査は打ち切りとなったのじゃ」

「それで納得したのかよ、それまで親父はその『内調』とか言う奴らに協力してたんだろうが！」

「政治じゃよ……」

「政治？」

「そうじゃ、奴らは時の総理大臣にも強い影響力を持っておってな、幾ら約定を守る仕事をしていた恭介とは言え、たかが吸血鬼一匹……。例え殺された所で政治家にとっては保身や金の方が大切と言う事じゃ……」

「そんな……、じゃあ親父やお袋は奴らや政治家に殺された様なモンじゃねえか！」

「その通りじゃよ。じゃが儂も『内調』の連中も、その後色々と探ってはみたが、恭介の言うておった事実は何も浮かんでは来なんだ。何も証拠が出て来なければそれ以上の捜査は出来ぬよ」

「親父やお袋は犬死だったって事か……」

「そうでは無い。じゃが奴らが何を企んでいたのかは今尚不明のままじゃ……」

そう言って爺は黙り込んでしまった。

俺もあまりの話しにもう言葉も出なかった。

陽子の親父は、恐らく全てを知っていたのだろう。

黙ったまま拳を強く握っている。

しばらくの間辺りを沈黙が漂った。

「話はもうこれ位にしましょう。老師も、恭也君も少し休んだ方が良い」

それまで口を閉ざしていた陽子の親父がいきなり口を開いた。

「そうじゃな、そうさせて貰おうかのう」

爺が言った。

俺はまだ気持ちに整理が着かず、口を開く事が出来なかった。

「恭也……まだ完全でないとは言え、お前の中に目覚めつつある吸血鬼の血は、既に儂の呪では抑え切れぬ程の力を持っておるようじゃ。このままではいつか本当の目覚めの時が来るじゃろう。じゃがそうならぬよう儂も今後の方策を含めどうしたら良いか考えておく。じゃから今は勇三殿の言うとおり少し休むが良い」

爺は、優しく俺に言った。

「ああ……」

俺は虚ろに返事を返した。

陽は、既に中空に射し掛かろうとしていた。

3

3

そこは異様な部屋であった。

まるで、蜂の巣の様な造りの部屋だ。

蜂の巣を思わせる六角形の横穴が、規則正しくハニカム構造を構成し、出入口を除く三方向の壁を全て埋め尽している。

かなり広い部屋で、部屋と言うよりは最早何かのホールと呼んだ方が良いかも知れなかった。

それぞれ壁の横幅は二十メートル以上もあり、床は正方形の形をしている。

天井までの高さも八メートル以上はあるだろう。

その証拠に、六角形の横穴は壁一枚に対して縦に五個、横に十個と規則正しく設けられていた。

それが三方向の壁全てにあるのだから、横穴の数は全部で百五十個と言う事になる。

六角形の横穴は透明な硬質ガラスで蓋をされており、その中には四角い棺の様な物が見て取れる。

地下である為に、太陽の光がこのホールには入る事は一切無い。

天井の照明以外は明かりが無い為に、全体的に薄暗く寒々とした印象を受けるホールであった。

床は、真っ白で染み一つ無い大きな正方形のタイルが敷き詰められている。

ガラス張りの横穴以外は全て真っ白に塗り潰され、無機質で生命の温もりを全く感じさせないホールであった。

まるで映画か何かで見る様な、未来の病院にある、地下の霊安室と言った趣だ。

男は、その広いホールの中央に立っていた。

だだっ広いホールの中央には、まるで演説や講演をする時に壇上で使用する演説台の様な形状をした、金属製の台が設えてあり、男はその台の前に立っていた。

総金属製の台は鈍い銀色を放ち、台の上には何かのスイッチやキーボードの類いがずらりと並び、三枚のモニターは縦横九分割され、それぞれに別の映像を映し出していた。

一見すると、何かの操作パネルの様に見える。

男はそれらのスイッチやキーボードを手際良く操作していた。

男の後ろにも、二人の男が添う様に立っている。

三人の男達は、いずれも黒いダブルのスーツに身を包んでいた。

演説台に似た操作パネルの前で実際に機械の操作をしているのは、つい数時間前まで、茶室で“御前”と呼ばれる老人と話をしていた男＝宇月光牙である。

光牙は、先程までと同じ黒のダブルのスーツに身を包み、濃いグレーのシャツに黒のネクタイを締めていた。

細面で色白な顔は無表情で、一見しただけでは何を考えているのか全く読む事が出来ない。

ただ剃刀の様な鋭い目を、手元のキーボードやモニターに向けていた。

光牙の後ろに立つ二人は、色の黒いレイバンのサングラスを掛け光牙と同じく黒いダブルのスーツを纏い、白のシャツに黒のネクタイを締めている。

まるで喪服だ。

しかし男達の纏っている気は、葬儀の様な湿っぽい物とは全く別の、物々しくも暴力的な物であった。

光牙の背後を守る様に立つその姿は、恐らく光牙のボディガードか何かであろう。

「本当に半数も目覚めさせて宜しいのですか？」

後ろに立つボディガードの一人が言った。

「仕方ありません。御前の御命令です。それに今の状況では人手不

足は否めませんからね」

光牙は後ろを振り向く事無く、キーボードを操作しモニターに視線を走らせながら答えた。

光牙がキーボードを叩く度に、九分割された三枚のモニターの画面が切替わり、壁に設けられた横穴の中を次々と映し出して行く。

横穴の中はかなり暗い為に高感度カメラの映像となっており、横穴の中に納められた棺が、モノクロの映像で映し出されていた。

棺の蓋にはどれも凝った装飾が施されており、蓋の中央には箱の様な機械が取り付けられている。

その箱型の機械には何本もの透明なチューブが繋がれており、そのチューブの中を何か黒くドロリとした液体が流れていた。

「今は便利になったものです。以前は山の様に積み重ねられた棺を一つづつ手で降ろし作業をしていたのですが、今ではボタン一つで全てが行えるのですから、文明とは大した物です」

言葉とは裏腹に、光牙の表情には嘲笑する様な笑みが浮かんだ。

後ろに立つ男達は表情を変える事無く、黙したまま後ろ手を組んで立ち尽くしていた。

「そう言えば、お前達は我が眷属となって何年経ちましたか？」

光牙が言った。

目は以前モニターに向けられている。

「東京オリンピックの頃でしたので、もう四十二年を過ぎました」

後ろに立つ左側の男が答えた。

「南部、お前はどうですか？」

「は！　　今年で六十五年になります」

南部と呼ばれた右側の男は、姿勢を正して答えた。

「そうでしたね。あれはまだ太平洋戦争の直中でしたね。早いものです。あれからもう六十五年になりますか……」

光牙はモニターから目を放し、遠くを見る様に目を細めた。

「光牙様は、今年で何歳におなりなのですか？」

左側の男が尋ねた。

「もう忘れました。ただ私が物心付いた頃、この国は馬鹿な人間達が互いの覇を争って戦をしていた時代でしたからねえ。今では戦国時代などと呼ばれていますが……」

光牙は、当時を懐かしむ様に言った。

光牙が再び目をモニターに移すと、モニターの一画面に映し出されている棺の蓋に設けられた、箱の様な機械の上部に備えられたランプが白い光を放った。

「おう、姉上のお目覚めだ」

光牙は、嬉しそうに目を輝かせた。

後ろに立つ男達は、緊張に“ぐびり”と生唾を飲み込んだ。

「用心しなさい……。私と違って姉上はとても気性の激しいお方ですからね」

光牙は、後ろの二人に振り返って言った。

「さあ、もうすぐですよ」

光牙が言った瞬間、モニターに映し出された棺の蓋が、“ゴトリ”と僅かに動いた。

他の画面に映し出された幾つかの棺も、次々と蓋が動き出した。

見ると、最初にランプの点った棺には『夜叉姫』と名が記されてあった。

4

4

目が覚めた……。

覚めてしまった。

このまま、ずっと眠ったままなら良かった。

いや、この数日間の出来事が、全て夢であったならたとえ目が覚めても良かった。

だが、身体に巻かれた包帯が夢で無い事を如実に物語っていた。

辺りを見渡すと、見慣れた天井……見慣れた壁……乱雑に散らかった物々……。

そう、また俺の部屋だ。

今朝目覚めた時と全く変わっていない。

ただ一つだけ違う所があった。

今朝は閉め切られていた筈のカーテンが、全て開け放たれ太陽の光を部屋の中いっぱいに招き入れている。

俺は、ベッドから身体を起こし、無造作に散らかったテーブルの上から、残り僅かとなって“クシャッ”と潰れたセブンスターの箱を手に取った。

一本取り出して口に咥え、ＳＴデュポンのライターで火を点ける。

寝起きで“ボ～”とした頭をスッキリさせる為に、俺は煙を思い切り吸い込んだ。

煙が喉や肺を刺激して少し噎せる。

嫌な思いを吐き出す様に、俺は大きく煙を吐き出した。

そしてまた、再び大きく吸い込む。

今度は煙を肺に溜め、ゆっくりと吐き出した。

ボ～とした頭が次第にクリアーになって行く。

俺は、散らかったテーブルの上からエアコンのリモコンを拾い上げると、徐にスイッチを入れた。

“ゴオォッ”とエアコンから吹き出る風の音が部屋中に響く。

しばらく我慢すると、あの噎返る様な熱気が少し緩んだ気がした。

時刻は既に午後の四時を回っている。

俺は、まだ長いままの煙草をクシャクシャに揉み消し、身体や頭に巻かれた包帯を毟り取った。

先程までの暑さで、包帯はぐっしょりと汗で濡れている。

包帯を取り去った身体は、傷も打撲に因る痣も綺麗さっぱり消え去っていた。

これもヴァンパイアの再生復元能力ってヤツなのか！

普通であれば、望んでも得る事の出来ない素晴らしい能力の筈なのに、今はこの能力が忌々しく感じられた。

この能力が、再び嫌な現実を思い起こさせるからだ。

顔も知らなかった実の父親が、本当はヴァンパイアだった現実。

恐らく母親もヴァンパイアだったのだろう。

そしてまた、この俺もヴァンパイアだったと言う逃げ場の無い現実……。

爺の話によると、今はまだ完全に覚醒していないらしいが、いつかは俺も、あのショウや村田達の様に人を襲い、血を啜る化物になってしまうらしい。

シゲや晶子の顔が浮かんだ。

俺がヴァンパイアとして完全に覚醒してしまったら、爺や友達、それに陽子や陽子の家族ですら襲ってしまうのだろうか……？

俺は思い切り頭りを振った。

ーー熱いシャワーでこの嫌な思いを洗い流そう。

俺はベッドから立ち上がり、熱いシャワーを浴びる為風呂場へと向かった。

浴室に入り、シャワーの蛇口を目一杯捻る。

最初に、外気で温まった温い湯が全身を濡らす。

しかし湯はすぐにも熱くなった。

俺は温度の目盛を上げて、熱いシャワーを痛い程の水圧で頭から思い切り浴びた。

だが幾らシャワーを浴びても、心に重く澱んだしこりまでは流れて落ちてはくれなかった。

俺は、虚しい思いを引き摺りながら浴室を出ると、部屋の中はかなり涼しくなっていた。

濡れた身体をバスタオルで拭き、洗って干したままだった下着とTシャツを身に着ける。

今朝履いていたジーンズは、俺や爺の血で汚れボロボロになっていた為、部屋の壁に掛けてあった別のジーンズを引き摺り下ろし脚に通した。

喉が酷く渇いている。

俺はその足で廊下にある台所へと向かった。

ー確かミネラルウォーターの買い置きが残っていた筈だ。

俺は冷蔵庫の扉を徐に開いた。

その瞬間、冷蔵室の中に見覚えの無い物が入っている事に気付いた。

それは赤黒い液体の詰まったビニールパックだった。

パックは、全部で二袋入っている。

俺はその内の一袋を取り出し手に取った。

俺の心臓が“ギリリ”と音を立てる。

その透明なパックは、輸血用の血液パックだったのだ。

誰が入れたのか……まあ恐らくは爺だろうが、ヴァンパイアとして覚醒を始めた俺の為に、ご丁寧にも“餌”を用意しておいてくれたらしい。

だがそう思った瞬間、再び凄まじい程の苛立ちと嫌悪感が沸き起こった。

“血”

ヴァンパイアがヴァンパイアである為の象徴であり、またその永遠の命の源である血。

それは、俺自身がヴァンパイアである事の証でもあった。

そう、あのショウや村田と同じ様に……。

そう思った瞬間、やり場の無い怒りに頭の中がカァと熱くなった俺は、力任せに輸血パックを引き裂きステンレス製のシンクに中身を思い切りぶち巻けた。

更にもう一つの輸血パックも取り出し、同様に中身をぶち巻ける。

銀色のシンクを赤黒く染めた血液が、ゴボゴボと湿った音を立てながら排水口に流れ落ちていった。

シンクから生臭さと錆びた鉄の様な饐えた異臭が立ち昇る。

勢い良く引き裂いた為に、手や今着替えたばかりのTシャツにも血が飛び散っていた。

その時、いきなり玄関の扉が開いた。

見ると、そこには爺が立っていた。

爺は頭に白い包帯を幾重にも巻いている。

またいつもの様に甚平を纏ってはいるが、その下にも白い包帯が見て取れた。

「なんじゃ起きておったのか？」

呑気な声を掛けた瞬間、立ち込める血臭に気が付いたのか、爺の表情がたちまち険しくなった。

「恭也、お前何をしておる！」

爺は履いていた草履を脱ぐのももどかし気に、そのまま足速に駆け寄って来た。

“！”

俺は忌ま忌ましい自分への怒りをそのままに、爺を“ギリリッ”と睨んだ。

爺は、今だシンクの底を赤く染める血溜まりに目をやり、俺の顔を真っ直ぐに見上げた。

「恭也……これは……」

爺は呻く様に呟いた。

「な、何なんだコレは！　俺がヴァンパイアだか血でも飲んでろとでも言いたいのか！　こ、このクソ爺！」

俺は何と言って良いか分からず、咄嗟に怒鳴り散らした。

この輸血パックの血液は、ヴァンパイアとして覚醒を始めた俺が他人の血を吸わなくても良い様にと、爺が気を効かせてくれた物に違いないのだ。

分かってはいるのだが、今の俺にはその爺の厚意を素直に受け入れるだけの余裕が無かった。

ましてや爺に怒鳴るなど、ただの八つ当たりでしかない事も分か

っている。

だが爺は、そんな俺の気持ちを察してか、何も言わずシンクの底で流れ切らず澱み溜まった、赤黒い液体をただ見詰めていた。

「爺……すまねぇ……」

怒るわけでもなく、力無くただシンクの血を見詰める爺に対し、俺は声を搾り出すのが精一杯だった。

「いや、お前の気持ちは分かっておる。何も言わずこんな物を入れておいた儂も悪かったのじゃ。許せよ……」

爺が言った。

その言葉に、俺の胸は締め付けられた。

「それよりお前、“渇き”の症状は出ておらぬのか？」

爺は、俺の眼を探る様に言った。

「ああ、渇いてるよ。だから冷蔵庫に冷やしてあった水を飲もうとしたんだ。そうしたらコレが……」

そう言って、俺もシンクの中へと目をやった。

「違う。儂の言うておるのはその渇きではない。その……、ええい！　血が飲みたくなってはおらぬのか？　と聞いておるのじゃ！！」

爺は、溜まったしこりを吐き出す様に言った。

「いや、別に……。俺はただ喉が渇いて水が飲みたかっただけだ」

俺は頭を振った。

言った後で少し不安に刈られた俺は、今一度自分の気持ちを反芻した。

だがやはり本当に水が飲みたいだけだ。

間違っても血を飲みたいなど思ってはいない。

「ああ、やっぱ水が飲みたいだけだ。血を飲みたいなんてコレっぽっちも思っちゃいねえ」

俺は自分に確認するように言った。

「ふむ……。やはりまだ完全に覚醒してはおらぬと言う事か……？じゃが……」

そう言って爺は腕を組むと、思案を巡らす様に眼を閉じた。

「じゃが……、何だよ！　納得いかねえ面しやがって！　俺がヴァンパイアだから水を飲むのは変だとでも言うのかよ！」

「いやそうではない。いくら吸血鬼でも水ぐらいは飲む。確かに『屍鬼』は血液以外あまり口にしないらしいが、『貴族』であれば血を飲む事を除けば、殆ど人間と変わらぬよ。実際お前の父親とは良く酒を酌み交わしたものじゃ。儂が不思議に思ったのは、お前があれ程の傷を負い、あれ程の復元・再生を果たしておきながら、吸血

鬼としての“渇き”が全く出ておらぬ事じゃ」

「それは、俺がまだヴァンパイアとして完全じゃないからだろう」

「いや、今朝お前と仕合った時、確かにお前には“渇き”の症状が顕れておった。あの時お前が正気に戻っておらねば今頃儂は死ぬか餓鬼に成っておった事じゃろう……」

「餓鬼……、餓鬼って何だよっ？」

「餓鬼とは死してなお人の肉を喰らう屍の事よ」

「それってゾンビの事か？」

「うむ。世間ではそう呼んでおるようじゃな。吸血鬼に生き血を吸われ、死ぬ前に吸血鬼の血を飲まなんだ者は吸血鬼と成る事が出来ず、餓鬼と化してしまうのじゃ」

ーーそう言えば、ショウの奴がそんな事を言っていたな……。

俺は、あの時ショウが言っていた言葉を思い出した。

「じゃがお前は、儂と仕合った後も一切血を摂取しておらぬ。幾ら完全に覚醒しておらぬとは言え、一度“渇き”を覚えたらとても耐えられるものでも、その“渇き”が消えるものでもない。それがあれ以降未だ“渇き”を感じておらぬのが不思議でならんのじゃ」

爺は未だ腕を組みながら、首を傾げながら呟く様に言った。

「そう言われてもなあ……。確かに冷蔵庫にあった輸血パックを見

てつい“カッ”としちまったのは本当だが、実際に今も血を飲みたいなんて思わねぇんだ。そりゃ爺の心遣いには悪い事したと思ってるけどよ……。」

「ならば本当に“渇き”は出ておらぬのじゃな？　自分が吸血鬼だったと言う事で、自暴自棄になったり、怒りに任せて言うておるのではないのじゃな？」

「ったく煩ぇなあ！　血なんか飲みてぇと思わないって言ってるだろ！　そりゃ確かに俺が奴らと同じヴァンパイアだったって事はショックだったし、今でもどうしようもなくムカついてるよ。だから爺の厚意を無駄にしちまったんだろうが……。だが俺が今飲みたいのはコレなんだよ、コレ！」

そう言うと、俺は冷蔵庫の中から冷やしてあったペットボトルのミネラルウォーターを取り出し、そのままキャップを外すと、冷えたミネラルウォーターを“ゴクゴク”と喉を鳴らしながら飲んだ。

渇いた喉と身体に冷たい水が染み渡って行く。

余程喉が渇いていたのか、一口でペットボトルの中身は半分以下になっていた。

爺は、俺の飲みっぷりをただア然として見詰めていた。

「何故かは分からぬが、どうやら本当に“渇き”は出ておらぬ様じゃな。じゃがだからと言ってまだ安心は出来ぬ……。もしも“渇き”の兆候が現れたらすぐにでも儂に言うのじゃぞ」

「何だと！じゃあもしその“渇き”って奴が来たら、俺が他人を襲

うとでも言いてえのか！」

俺は、思わず怒鳴ってしまった。

「そうじゃ。吸血鬼の“渇き”とはそれ程凄まじいものなのじゃ。一度“渇き”が襲って来れば、最早理性だ何だとは言うてはおられぬ。もしそうなれば、お前は自分の意志とは関係なく人を襲うじゃろう……。さすれば儂は、お前を殺さねばならぬ。また儂が殺さなくとも、お前は死ぬ迄追われる身よ……」

「だからそうなる前に輸血パックの血を飲めって事かよ」

俺は吐き捨てる様に言った。

「そうじゃ……」

爺は、俺には無論、自分にも言い聞かせるかの様に神妙な面持ちで答えた。

「分かったよ、その時はパックの血を飲む事にするよ。せっかく用意しておいてくれたのに、無駄にして悪かったな」

「いや良い。今のお前の精神状態ならば仕方の無い事じゃて。また後で新しいのを用意しておくから、いざと言う時は躊躇せずそれを飲むのじゃぞ！」

「ああ、そうするよ」

俺は、そう答えざるを得なかった。

こうなっては爺の言う事を聞くしかねえ。

幾ら俺にヴァンパイアだと言う自覚が無いとしても、また幾らこの理不尽な現実に憤りを感じていたとしても、それが事実なら受け入れる他無えんだ。

そしてそれが現実なんだ……。

「で、本当は用件は何だったんだ?」

俺は尋ねた。

「いやお前の様子を見に来ただけじゃ。それに儂はこれからちと出掛けねばならん」

「出掛ける? 何処へだよ」

「昔からの知り合いと待ち合わせじゃ。先程電話があって今から会う事になったんじゃよ。輸血パックの方は、知り合いに会う前に調達しておくから心配はせずとも良いぞ」

「そんな事心配なんかしてねえよ。それより俺に黙ってショウの奴を殺りに行くんじゃねえだろうな! 奴は俺がこの手でキッチリとカタ付けてやるんだからな!」

“ドンッ!”

俺がそう怒鳴った瞬間、爺がいきなり廊下の壁を叩いた。

「バカ者! あれ程言ってもまだ分からぬのか!! 今お前が生き

ておるのは、儂が偶然にもあの場に居合わせたからじゃと今朝も言うたであろうが。そうでなければお前は当に死んでおったわ！　ちいとばかり喧嘩が強いくらいで良い気になるでない！　それに幾らお前が吸血鬼の『貴族』じゃったとしても、血も飲めぬ半端者なぞ奴にとれば赤子も同然よ！　せっかく拾った命ならもっと大切にせい！」

爺は声を荒げ、鬼の様な形相で怒鳴った。

「煩せえ！　奴は晶子や村田をヴァンパイアに変え、しかもシゲを殺したんだぞ！　全ての元凶は奴なんだ。奴さえ居なきゃ晶子もシゲも……村田だって死なずに済んだんだ！　奴は……奴だけはこの手で殺らなきゃ気が済まねえ！　そうだろうが、爺！！」

俺は全ての怒りや思いを吐き出す様に怒鳴った。

興奮して涙ぐんでさえいたかも知れねえ。

爺は、悲痛な表情で黙って聞いていた。

「お前の気持ちは良く分かる。じゃがあの夜お前が居た事は、儂と勇三殿のみが知るだけで『内調』も『C・V・U』にもお前の事は伏せてある。もしもお前がそのショウとか言う吸血鬼と殺り合うて、例えお前が勝てたとしても勝ったら勝ったで誰が殺ったと言う事になり、必ず捜査の手が入る。そうなれば、いつかはお前の存在もその正体も明らかにされる事じゃろう。それにショウとやらが殺されれば、吸血鬼どもも黙ってはおらぬ。また『内調』に知られれば吸血鬼どもにも確認の為お前の事を報告する。その時お前があの恭介の息子だと判れば、奴らは必ずお前を殺そうとするじゃろう。そうなればショウとやらに勝とうが負けようが、その先にあるのは死の

みぞ。ショウとやらもいずれは『C・V・U』か奴らに捕まり、犯した罪に相応しい裁きを受ける。貴様が悔しいのは分かるが、今回の一件は我慢するのじゃ」

爺の言葉には、有無を言わせぬ響きが込められていた。

ーー納得が行かねえ。

ーー行く訳けがねえ。

だが今は黙るしかなかった。

「納得しておらぬ様じゃな……」

爺は、黙っている俺の心を見透かしたかの様に言った。

「……分かったよ……」

俺は力無く頷いた。

今はそう言うしかない。

「良いな、馬鹿な事を考えるんじゃないぞ！」

“ぴしゃり”と言い放つと、爺は踵を返して部屋を出て行った。

部屋には、血が出る程唇を噛み締め、屈辱と怒りに身悶える俺が、一人ぽつんと取り残されていた。

5

5

「何とか生えてきた様だな……」

薄暗い闇の中で、薄い声が響いた。

ショウである。

ショウは廃墟となったビルの一室で、奥の壁に背中を預け床に足を投げ出した姿勢で座っていた。

先日、村田が恭也に電話をしていた時と同じビルの一室である。

相変わらず荒れ放題ではあるが、先日まで放置されたままになっていた机や書類棚が無くなっていた。

いや、無くなったのではない。

机や棚が、まるでバリケードの様に全て窓際の壁に高く積み上げられているのだ。

しかもただ積むだけでは無く、机の天板や棚が全ての窓を塞ぐ形で器用に積み重ねられているのである。

お陰でまだ夕方であるに拘わらず、日光の殆どが遮られ、部屋の中は薄暗い闇で満たされていた。

その薄暗い闇の中で、ショウは黒いシャツの袖口から覗く、先日

自ら捩切った手首の傷痕を見詰めていた。

本来なら、肉や骨が露出してとても見れたものでは無い筈の凄惨な傷痕は、既に腕の先の肉が瘤の様に盛り上がり、早くも再生を始めている。

しかも盛り上がった肉は、産まれたばかりの赤ん坊の手を思わせる形状で、指らしき突起も五つ確認出来た。

傷を負って僅か三日しか経っていないに拘わらず、何と言う再生・復元能力であろうか。

ショウは急速に再生が行われるむず痒さからか、しきりに肉の盛り上がった部分を掻いていた。

「あの老いぼれ……、この手が再生したらすぐにでも殺してやる……」

ショウから、“ざわり”と殺気が立ち昇った。

それに呼応するかの様に、周囲が急に騒がしくなった。

“ア゛ア゛ア゛……”

“グォォォ……”

“ドンドンドン……”

“グルルルル……”

“ガリガリガリ……”

“オオォォ……”

まるで地の底から響く、地獄の亡者達の怨嗟や呻き声、また餓えた猛獣が喉を鳴らす様な湿った音まで聞こえてきた。

更には、壁を叩く音や壁を爪で掻きむしる音、また“ズリッズリッ”と何かを引き擦る様な音まで聞こえてくる。

何かこの世ならぬ者達が、地獄から今まさに這い出そうともがく物音にも聞こえた。

正常な者であれば、聞くだけで背筋が凍り、本能的な恐怖に竦み上がる様な、不気味で嫌悪な響きである。

しかもその音は、ショウが今背を預けている壁の向こう側から響いてくるのだ。

“ドン！”

「煩いぞ、このゾンビども！」

ショウは、後ろの壁を激しく拳で叩くと、鋭い怒気で一喝した。

その瞬間、壁の後ろから聞こえていた不気味な呻き声や物音がぴたりと止んだ。

「全く喰う事しか能の無いゴミ共が……」

ショウは吐き捨てる様に言った。

ショウが背を預けている壁を一枚隔てた隣の部屋には、十数体のゾンビが蠢いているのだ。

無論、全てこの三日間の内にショウによって生き血を吸われ、憐れにも生きる屍（ゾンビ）と化した犠牲者達である。

あの晩、李によって手首を失い激しい“渇き”に襲われたショウが、この廃ビルに逃げ込んだ後、このビルを荒らしに来ていた不良達をその毒牙に掛け、自らの復活の生け贄としたのだ。

その後の二日間も夜な夜な街に出ては新たな獲物を探し、犠牲者の数を増やし続けて行ったのである。

全ては、自分の失った手首を再生する為だけであった。

ゾンビは、“喰う”と言う根源的な本能以外は殆ど知能を持たない。

それは全身の殆どの血液を吸われる事で死に至る為、吸血時にヴァンパイアウィルスに感染しても肉体が甦るだけで、死によって破壊された脳細胞が復元される事は無いからである。

そう、ただ“喰う”と言う一部の本能を除いては……。

ショウの周囲には、再び静寂が訪れていた。

「しかしあの御子神とか言うガキ、あいつは確かに『貴族』だった……。しかも“御子神”と言えば、俺がヴァンパイアに成り立ての

頃に、我が眷属を裏切り処刑された男と同じ苗字……」

ショウは、独り闇に吐き出す様に呟いた。

ーークククク……、これは面白い事になりそうだ。

ーー何故かは知らんが、奴はまだ完全な『貴族』には成り切っていない。

ーー今ならば奴を倒せる。

ーーそして奴の血を飲めば、恐らくこの俺は『貴族』に匹敵する能力を持てる筈だ。

ーーそうなれば、『C・V・U』だろうが何だろうが怖いものなど何も無い。

ーーそしていずれはあの偉そうな宇月光牙や闇御前を倒し、俺が夜の眷属の頂点に君臨してやる。

ショウは闇の中で薄く笑った。

“　！　”

その時、外で車が停まる音が聞こえた。

ショウに緊張が走る。

ーーンン、何だ？

ショウは塞いである窓際へ注意深く歩み寄ると、耳に全神経を集中させ聞き耳を立てた。

この部屋の中は窓を全て塞いである為に暗いままだが、外はまだ時間的にも夕方である。

今のこの時刻であれば外は西日が煌々と射している筈だ。

その証拠に、窓を塞ぐ形で積み上げられた机や棚の僅かな隙間から、室内にも外の光が差し込んで来ている。

『屍鬼』であるショウは陽光を浴びる事が出来ない。

その為、外の様子を見る事が出来ないのだ。

ー一車は全部で……一台、いや二台か？

ー一人数は……？

ショウは、外の状況を把握する事だけに神経を集中させた。

こんな場所へわざわざ車来るのは、まず一般の人間である筈がない。

車が停ってもエンジンはそのままで、乗っていた何人かが車から降りる気配があった。

ショウは、足音と気配から、降りた人数を確かめようと更に気を集中させた。

ーー足音からすると人数は七人……。

ーーだが何だ？　　気配は六人分しかない。一体どう言う事だ？

ショウは自分の耳を疑った。

しかしどう探っても足音と気配の人数が合わない。

ーーふっ、まあ良い。

ーー少しは出来る奴が居る様だが所詮は人間…。例え『C・V・U』の連中だろうが、こんな時の為にこちらにも手駒は揃えてある。

ーー逆にこの手の再生を早める為の贄にしてやるぜ。

ショウ先程まで背を預けていた壁に目をやり、ニヤリとほくそ笑んだ。

6

6

そこは、駅前通りや住宅街からも、さほど離れてない場所に建つ廃ビルであった。

周囲には住宅も建ち並んではいるが、比較的古い町並みを残すこの辺りには、様々な個人商店や町工場も数多く点在し、その内の幾つかは廃業に追い込まれシャッターを下ろしたままの状態になっており、時代の移り変わりの悲哀を投影していた。

そんな町の一角に建てられた三階建てのこのビルは、まるで無機質な箱と言った印象の建物ではあったが、外壁に描かれた様々な落書きや、外から割られた幾つかの窓ガラスが、廃墟の色を一層強めていた。

廃墟となったビルの前に、場違いな二台の黒い車が横付けする形で横に列んで停まった。

先頭はメルセデスベンツＥ３５０アバンギャルドだ。

後続の車もメルセデスベンツには違いないが、こちらはランクが上のＳ６５ロング・ＡＭＧである。

二台とも後部席やリアのウインドウだけではなく、助手席のウインドウまでが、車内を覆い隠す様に黒いスモークで目隠しされている。

どう見ても堅気の車には見えない。

停車直後エンジンはそのままで、まるで申し合わせた様に各車のドアが一斉に開き、中から数人の屈強そうな男達が降り立った。

人数は全部で六人だった。

男達は、全員合わせた様に黒のスーツで身を包み、全身から暴力的な雰囲気を滲み出させている。

その揃った服装と統一され淀みの無い動きには、厳しい訓練を受けた兵士を思わせた。

すると、後ろのベンツＳ６５Ｌ・ＡＭＧの助手席から降り立った男が、まだ閉まったままだった後部席のドアへ移動した。

「失礼します」

そう言って男は一礼すると、後部席のドアを丁寧に開けた。

“ガチャッ”と重いドアが開いたと同時に、車内から男がぬうっと顔を出した。

車から降りた男は、この蒸し暑い中、ひと昔前の日本帝國軍将校を彷彿させる白の詰襟の上下をきっちりと隙無く着込み、ピンと背筋を伸ばして目の前の廃ビルを見上げた。

短く刈り上げられた角刈りの髪に、下顎のしっかりとした武骨な顔。

少し太い眉毛の下には鋭い眼光を放つ奥二重の目が、この日差し

で眩しそうに細められている。

しかもその目は隻眼であった。

閉じられた片方の目には、黒い革製のアイパッチが当てられている。

少し浮き出た頬骨は、精悍と言うよりは武骨と言う言葉がしっくりくる顔立ちであった。

体格はさほど大柄ではなく、横に居並ぶ男達と見比べればむしろ小柄と言って良かった。

しかしガッシリと鍛え上げられた身体は、着衣の上からでもそうと判る程で、その意味では他の男達に決して見劣りするものではなかった。

むしろ、見る者を圧倒する威圧感にも似たものを有している。

年齢は、見た目には四十歳を少し回ったぐらいであろうか？

だが全体から滲み出る雰囲気は、もっと齢を重ねた者にしか出せぬ威厳や、風格の様なものが備わっていた。

しかもこの男は、右手に黒鞘の日本刀を下げており、全体の雰囲気や服装、更にはその武骨な風貌も相俟って、どこかこの時代にそぐわぬ古来の武人と言った印象を感じさせた。

「十兵衛様、大丈夫ですか？」

今しがたドアを開けた男が、耳打ちする様に話し掛けた。

「案ずるな、俺は『生成り』だ。この日差しを浴びたくらいで死ぬ事は無い。だがこれでは暑くて堪らんな」

十兵衛と呼ばれた隻眼の男も、ビルの中に居るであろう標的に聞かれぬ様、押し殺した声で答えた。

「しかし幾ら『生成り』とは言え、長時間強い日差しを浴びれば火傷は免れません。用心して頂かないと……」

「分かってはいるが、この暑さでは日差しによる火傷は免れても蒸し焼きになってしまうな。お前達こそまだ人間なのだから、もっと薄着をして来れば良いものを」

十兵衛は、居並ぶ男達を見渡して言った。

「いえ、私どもは十兵衛様の部下です。例え暑いからと言って私達だけ薄着と言う訳には参りません」

男はぴしゃりと言った。

「律義な事だな。俺は別にその様な事など気にはせぬものを」

十兵衛は少し笑った。

この十兵衛と言う男、笑うとなかなか愛嬌がある。

見た目の武骨さや威圧感とは別に、何処か飄々としたものを感じさせる男であった。

「ここの様だな……」

十兵衛は廃ビルの二階の一角を見上げ呟いた。

十兵衛の視線の先には、窓全体を机や書類棚でバリケードの様に封鎖した部屋が見て取れた。

「はい、下の者の報告通りです」

男は言った。

「ここからは俺一人で行く。事が済むまで誰も入れるでないぞ」

「はい。ですが警察や『C・V・U』が来た場合は如何致しますか？」

「警察ならば適当に追い返せ。それが無理なら引き上げるフリをしてやり過ごせば良い。それと『C・V・U』が来たら俺の名前を出して足止めしておくのだ。どうせ奴らも要らぬ犠牲は出したくないだろうし、奴らが来れば俺達も後始末の手間が省けて助かると言うもの……」

「畏まりました。どうかお気をつけ下さい」

「うむ」

そう言って頷くと、十兵衛はゆっくりと廃ビルの入口へ入って行った。

7

7

ショウは、近付く足音に耳を澄ませていた。

だが微かに足音はするが気配を全く感じない。

ショウの中で警報が鳴っていた。

最初は、『C・V・U』の実働部隊が来たのだとばかり思っていた。

だが微かに聞こえた会話の内容から察するに、来訪者が同族である事は明らかだった。

ー一相手が人間であれば何とでもなる。

そう腹を括っていた。

いざとなればゾンビと言う手駒もある。

銃に頼る戦闘しか出来ない人間にとって、狭い空間での戦闘は同士討ちの危険が生じる為に、どうしても攻撃方法に制限が生じる。

しかも相手は不死身のゾンビどもだ。

ゾンビは恐怖や戸惑いも一切無く、ただ“喰う”と言う本能のみで行動する為、諦めると言う事を知らない。

例え雨の様な銃弾を浴び、手足や心臓を吹き飛ばされようが、怯む事無く餌である人間に襲い掛かるだろう。

唯一頭を吹き飛ばされない限りは……。

更にゾンビに噛まれた者もゾンビと化してしまう為、自動的に手駒を殖やす事も可能だ。

そう言った意味でゾンビは、最も効率の良い“兵器”であると言えた。

したがって人間相手であれば、幾ら動きの鈍いゾンビだけでも十分勝算がある。

だが同族となれば話が別だ。

ヴァンパイアの反射神経やスピード、それに腕力や脚力などのパワーは人間のそれとは比べ物にならない。

しかもヴァンパイアは、例えゾンビに噛まれても死ぬ事もゾンビと化す事も無い。

圧倒的なパワーで暴風の様に荒れ狂い、一方的な殺戮でゾンビなど一瞬の内に殲滅される事は、火を見るより明らかだった。

更に悪い事に相手は恐らく『貴族』だ。

自分と同じ『屍鬼』であれば、この様な時間にのこのこ行動出来る筈がない。

しかも配下のファミリアどもを同行させているに関わらず、たった一人で来るとはかなり使い手であるに違いなかった。

ファミリア（使い魔）とは、この場合ヴァンパイアに絶対服従を誓った人間の事である。

李が先日使った『式神』も使い魔の一種ではあるが、ヴァンパイアにとってのファミリアとは、悪魔崇拝や吸血鬼信仰に傾倒した者達で、世紀末到来時に自らをヴァンパイアと化す事で、来たる災厄から逃れようとする考え方から特定のヴァンパイアと主従の契約を結び、主の為には死も厭わず働く事を誓った人間達の事である。

ショウは、必死で生き延びる方法を模索した。

しかし『貴族』が相手では、彼我の戦力差は歴然である。

逃亡するにしても、まだこの時間では屋外に出る事も適わない。

ショウは絶望感に捕われた。

そうこう考えている間にも、絶望の足音はこの部屋のすぐ側まで近付いていた。

ショウは、ゾンビ達の群れる後ろの部屋へと通じる扉の前に移動した。

こうなればゾンビどもを解き放つ事で少しでも時間を稼ぎ、隙あらばその『貴族』を殺すか、または逃亡の時間を稼ぐ。

それ以外、ショウの生き延びる手段は考えられなかった。

いよいよ追っ手の足音が近付いて来た。

次の瞬間、“バン！”とけたたましい音を立て、部屋のドアが開いた。

見ると、そこには武骨な顔立ちの隻眼の男が、黒鞘の日本刀を手に仁王立ちしていた。

十兵衛である。

十兵衛は鋭い眼光でショウを睨み付けると、鋭い眼差しのまま部屋の中を隅々まで見渡した。

「貴様、飯沼彰ニだな？」

十兵衛は、鋭い目でショウを見据えたまま言った。

ショウは、“ビクン”と身体を震わせた。

切れる様な瞳には怯えの色が浮かんでいる。

「飯沼彰ニだな……」

十兵衛が、念を押す様に問い掛ける。

「そ、そうだ……。あ、あんたの顔……み、見た事があるぞ……」

ショウは、震える唇で恐る恐る答えた。

「そうかも知れんなあ。俺は特務行動隊・隊長、柳生十兵衛三厳…」

「や、柳生……、柳生十兵衛だと……！　あんたがあの柳生十兵衛か……？」

ショウは驚きのあまり、呻く様に言葉を吐き出した。

だがそれも致し方ない事であった。

相手はショウがまだ人間だった頃から、教科書やテレビの時代劇で見聞きした、歴史上でも有名な剣豪の一人、柳生十兵衛本人なのである。

「ま、まさかあんたが俺達の眷属に加わっていたなんて……」

ショウは、信じられないと言った顔付きで、十兵衛の顔をまじまじと見詰めた。

「まあ俺達の部隊は、我が眷属の組織でも秘密とされているからな……。例え知らずとも仕方あるまいよ」

十兵衛はさらりと言って退けた。

そして更に言葉を続けた。

「飯沼彰ニ、今日俺が出向いて来た用件は分かっているな」

十兵衛の声には鉄の響きが込められていた。

ショウは、更に怯えた表情を見せた。

自分を殺しに来た相手が『貴族』で、しかもそれが超が付く程の有名な剣豪であれば、最早助かる術は何処にも無い。

「まっ、待ってくれ！　お、俺達は同族じゃないか！　たかが人間の生き血を飲んだところで何が悪いんだ？　奴らは俺達の餌じゃないか！」

ショウは必死で言い逃れをした。

「確かに我々は、人間の血を飲まねば生きて行けぬ……。だが人間は餌では無い。お前は御前が人間と交わした大切な約定を、ただ己の欲の為だけに違えた。その罪、万死に値する」

十兵衛は持っていた日本刀の柄に手を掛けた。

「な、何故だ？　俺は奴らの血を飲んだだけだぞ！　人間だって他の生き物を喰って生きているじゃないか！　そ、そんなのお互い様だろう……。それどころか人間どもは喰う為じゃなくても殺し合いをするんだぞ！　そんな下等な奴らを幾ら殺したからって、何で俺が殺されなきゃならないんだ？」

ショウは必死だった。

「お前は、我が眷属を危険に晒したのだ。確かにこの約定が、我々と人間の双方にとって全くの平等と言う訳ではない……。だが決まり事は決まり事。これを守らねば我が眷属は人間に滅ぼされる。お前にもそれは分かっている筈だ！」

十兵衛は苦渋に満ちた表情で言った。

そんな十兵衛を他所に、ショウはこの絶望的な状況の中で生き延びる為の術を全力で模索していた。

“！”

その時、ショウの頭に一筋の光明が閃いた。

「な、なあ。良い事を教えてやるよ……」

ショウは、下品た薄笑いを浮かべた。

「フッ、笑止な……。最早話す事など何も無い」

十兵衛はショウの話など意にも介さず、柄を握る手に力を込めた。

ショウは一歩後退り、後ろの壁に背中をぶつけた。

「まっ、待て！　待ってくれ！　俺はこの前とんでもない奴に出くわしたんだ。あ、あんただってきっと知ってる名前だ！」

ショウは、震える掌を十兵衛に向けて必死に叫んだ。

“？”

十兵衛は、ショウの言葉にぴくりと反応した。

「誰に……遭ったと言うのだ？」

十兵衛は柄を握った手をそのままに、怪訝そうな表情を作った。

ーー掛かった！

ショウは内心でほくそ笑んだ。

「あんたも聞いた事があるだろう。以前俺達を裏切って死んだ“御子神”って言う奴の名前を……」

「み、御子神だと！？」

十兵衛の顔に、一瞬動揺が走った。

だが次の瞬間、その表情は更に怪訝さを増した。

「その御子神がどうしたと言うのだ……？」

十兵衛の気の内圧が“ぐうん”と膨れ上がった。

「ひっ！」

十兵衛の気に気圧されたショウは更に怯えた。

「み、三日前の夜に、偶然“御子神”って言う名の『貴族』と遭ったんだ！」

ショウは、何とか気を取り直して言った！

「何だと！」

十兵衛は、思わず大声で叫んだ！

あまりの驚きに、唯一残った目を零れ落ちんばかりに見開いている。

持っていた刀すら落としそうになった程だ。

これを好機と感じたショウは、更に言葉を続けた。

「興味あるだろ……？　まさか知り合いか？」

ショウの唇が不敵な笑みを形造った。

「ば、馬鹿な……。アイツは、恭介は十八年前に死んだ筈だ……。それが今頃になって何故……」

十兵衛の狼狽振りは想像以上であった。

ショウには、この十兵衛と“御子神”と言う名の『貴族』の間にどの様な因縁があるのか知る由もないが、先程まで風前の灯であった筈の命の火が、徐々に強さを増して行くのを感じた。

「しかもこの話には続きがあるんだぜ！　聞きたいか？」

先程までとは打って変わって、立場は完全に逆転していた。

「話せ！　さもなくば斬る！」

十兵衛は、放しかけていた刀の柄を“ぎりっ”と握り直し、再び気の内圧を上げた。

しかし、今度はショウも怯えなかった。

「俺を斬れば話は聞けないぜ。さあどうする？」

立場が逆転したと感じたショウは、傲慢な態度で高飛車に言った。

「ぬうぅっ」

十兵衛は唇を噛んだ。

様々な思いが頭の中を去来する。

数瞬の後、十兵衛は意を決した。

「今の話、確かに興味深い話ではあるが、お前を斬るのは御前の勅命…。ならば致し方無い！」

そう言い放つと、十兵衛は握った鞘を捻り親指で鯉口を切った。

そのまま“すらり”と銀色に輝く刀身を抜き放つ！

身幅が広く、その豪壮な拵えは十兵衛の愛刀＝“三池典太”であった。

十兵衛は、刀身の抜かれた鞘を床に置くと、両の手で柄を握り“典太”をゆっくりと上段に構えた。

ショウは、つい先程までの優勢が脆くも一瞬で費えた事を悟った。

「出ろーっ！　ゾンビども！」

ショウは大声で叫び、隣の部屋に続く扉を一気に開け放った。

次の瞬間、それまで隣の部屋で蠢いていたゾンビ達が、雪崩を打って部屋の中に溢れ出た。

“ア゛ア゛ア゛”

“グォォォ……”

“オオォォ……”

皆一様に生気の抜けた青白い顔で、窪んだ眼窩から零れ落ちそうな程両目を見開き、大きく開かれた口からは、滝の様な涎れを垂れ流し唇の横には泡を溜めていた。

まさしく地獄の亡者である。

しかも、街の不良達やサラリーマン風の男、それに主婦やＯＬと言った女から、果ては年端も行かぬ子供までがゾンビに変えられていた。

ゾンビ達は、力無く両手を持ち上げた例の態勢で、緩慢な動きながら一斉に十兵衛目掛け襲い掛かった。

不気味な叫び声を上げながら迫り来る動く屍達は、既に十兵衛の間近まで迫っている。

「くっ、……これ程の人数を犠牲にしていたのか……。まだ年端も行かぬ子供まで……。赦せん！」

十兵衛は腰を落とし、上段に構えていた“典太”を肩に担ぐ様に構え直した。

「柳生十兵衛三厳……参る！」

十兵衛は思い切り床を蹴ると、そのままゾンビの群れに踊り掛かった。

彼我の距離が一気に詰まる。

十兵衛は、まず先頭のゾンビ目掛け、上段から一気に“典太”を振り下ろすと、頭蓋から胸元まで一刀の下に断ち割った。

頭を断ち割られたゾンビは“ドウッ”と床に突っ伏し、真っ二つに割れた頭蓋から、ドロリとした血と灰色の脳をどっぷりと零し絶命した。

次の瞬間、十兵衛は振り下ろした刀の向きを変え、横から迫るＯＬ風のゾンビの首を横一線に薙ぎ払った。

跳ね飛ばされたゾンビの首が、残り僅かとなり粘性を持った血の尾を引きながら、宙で弧を描く。

十兵衛は、首から先を無くし倒れ伏すゾンビの胴体には目もくれず、次なる獲物へと襲い掛かった。

ヴァンパイアである十兵衛にとって、ただでさえ動作の緩慢なゾンビ達は止まって見えるに等しい。

十兵衛は、群がるゾンビ達の間を摺り抜けると同時に、次々とゾンビ達をただの屍に変えて行った。

それは一方的な殺戮であった。

あるゾンビは胴を真っ二つに寸断され、どっぷりと内臓を床に垂らしながら上半身が滑り落ちた所を、更に頭部を踏み抜かれ絶命した。

またあるゾンビは、頭頂部から脇腹までを袈裟斬りで斬られ、その緩慢な動きを止めた。

こうしてゾンビ達は、全て一刀両断で頭蓋骨を断ち割られ、首を跳ね飛ばされ、次々とその数を減らして行った。

そして最後の一体を屠り終えると、十兵衛はショウと対峙した。

全てのゾンビを倒すのに、ものの一分も掛かってはいない。

ショウは驚愕していた。

幾ら動きの緩慢なゾンビでも、十八体もの数を一分も掛からず全滅させるのは、同じヴァンパイアのショウであっても不可能と言わざるを得なかった。

しかもその全てを、ほぼ一刀両断に切り伏せるとは……。

ショウはこの一分間、自分が逃げる事も忘れてただ十兵衛の剣技に魅入っていた。

「後は貴様だけだ！」

そう言うと、十兵衛はショウにその鋭い切っ先を向けた。

その瞬間、我に返ったショウも必死で逃れようと身を捻った。

だが十兵衛の踏み込みの方が早い！

十兵衛は、刃を上に向け、鋭い突きを放った。

凄まじい速さで突き出された切っ先は、滑る様にショウの肩を貫き、後ろの壁に突き刺さった。

「ギャーッ！」

ショウは鋭い牙を剥き出しにして、凄まじい悲鳴を上げた。

十兵衛の突きにより後ろの壁に縫い付けられた恰好のショウは、何とか刀を引き抜こうとあがくが、突き立てられた刃はぴくりとも動く気配が無い。

それどころか、刀身を素手で直接握った為に、ショウの手の平はズタズタに裂けた。

更に十兵衛は、突き立てた“典太”を片手に持ち替え、空いた左手で腰から鉄製の兜割りを取り出すと、もがくショウの右大腿部を一気に刺し貫いた。

「グアーッ！」

あまりの激痛に、ショウは背中をのけ反らせた！

必死に右手で兜割りを抜こうともがくが、手首から先を失っている為兜割りを握る事すら出来ない。

ショウの顔が苦痛に歪んだ。

「さあ小僧、話の続きを聞かせて貰おうか……」

十兵衛は、息が掛かる程ショウに顔を近付けて言った。

十兵衛の気が禍々しい程に膨れ上がる。

「……」

ショウは話す事を拒むと言うより、あまりの激痛に言葉が出ない様であった。

「小僧……、俺は時代劇に出て来る様な善人でも御人好しでもないんだぜ。これ以上苦しみたくなければさっさと続きを話せ！」

十兵衛は殊更凄んで見せた。

「は、話す……。話すから肩と脚の物を抜いてくれ……」

ショウは、息も絶え絶えに言葉を吐き出した。

十兵衛は、ショウの肩と大腿部をそれぞれ縫い止めていた“典太”と兜割りを引き抜いた。

支えが失くなったショウは、膝を折り傷付いた脚を投げ出す様に、そのまま床に崩れ落ちた。

十兵衛はショウの血で濡れた兜割りをひと振りして汚れを掃うと、そのまま腰のベルトへと挿し戻した。

「さあ、話して貰おうか……」

十兵衛は抜き身の“典太”を握ったまま、床にへたり込むショウを見下ろして言った。

ショウは顔面を蒼白にし、肩で喘ぐ様に息をしている。

「あれは五日前の夜だった……。あの夜俺は、二人の人間を我が眷属に加えた……」

ショウは苦痛に喘ぎながら、あの夜からの出来事を語り出した。

8

8

ショウは、これまでの話を全て十兵衛に語った。

「……これがその結果さ……」

失った右の手首を見せ付ける。

「ではお前の出会った『貴族』は、“御子神恭也”と言う名前だったのだな？」

十兵衛は、ショウの瞳の奥を覗き込み念を押した。

「そうだ、間違いない……」

ショウが言った。

まだ息遣いは多少荒いが、先程に比べれば随分落ち着いて来ている。

十兵衛によって貫かれた肩や太腿の傷も、決して痛みが引いた訳ではないが、出血は既に止まっていた。

やはり『屍鬼』とは言え、ヴァンパイアの再生能力には凄まじいものがある。

一方、十兵衛は困惑していた。

ーーショウの話に出て来た“御子神”と言う名の『貴族』は恭介ではなかった。

ーーだが苗字が同じな上、字は判らぬが、二人共名前に“キョウ”が付いている。

ーーどう考えても赤の他人とは考えにくい。

ーーならば恭介の子供か？

ーーしかも恭介は自分と同じ『生成り』で、条件さえ合えば子を成す事も可能だ。

ーー更にその“恭也”と言うヴァンパイアが『貴族』であったのなら、最早疑う余地が無い。

ーーだが、自分の知る限り恭介に子供が居たなど聞いた事も無い。

ーーしかし……。

十兵衛は思考の迷路に迷い込んでいた。

「何をそんなに悩む事があるんだ？　その恭也って奴は裏切り者の息子に決まってるぜ！」

困惑気味の十兵衛を傍で見ていたショウは、見るに見兼ねた様子で言った。

その言葉が、迷路に迷い込んでいた十兵衛を現実の世界に引き戻した。

「それになあ、その恭也って奴は、まだ完全に覚醒しちゃいないようだ。だいたい自分が『貴族』だって事にすら気付いちゃいない様子だったぜ！」

「何だと！」

十兵衛の眉がぴくりと跳ね上がった。

「間違い無いぜ。俺達がヴァンパイアだって事にすら驚いていたくらいだからな」

十兵衛は驚愕した。

ーー果たしてそんな事があるのか？

ーーあるとすれば今までどうやって生き延びて来たと言うのだ？

ーー人間として生きて来たとでも言うのか？

ーーならば血は？　どう摂取していたのだ？　いや、まだ覚醒していないなら血を飲まぬ事にも確かに説明がつく。

ーーだが、幾ら何でもその歳まで、覚醒せずにいられる訳がない。

再び十兵衛は困惑していた。

それを見たショウは、ニヤリと下品た笑みを浮かべた。

「だからな、二人でそいつの血を戴かねえか？」

ショウは下品た笑みを唇に貼付けながら、したたかに言った。

「何だと！今何と言った？」

十兵衛の顔に怪訝そうな表情が浮かんだ。

「だ～か～らぁ～、その“恭也”ってガキの血を二人で分け合わねぇか？　って言ってるんだよ」

「それはお前と手を組むって事か？」

「そうさ。幾らまだ完全に覚醒はしていなくても、奴は間違い無く『貴族』だ。恐らく奴の血液には、『貴族』としてのＤＮＡや魔族の強い因子がたっぷりと詰まってるに違いねえ。それを飲めば、俺達は今よりもずっと強くなる」

「強く……、か……」

ショウは更に続けた。

「あんたは『生成り』だろ？なら幾らあんたが強くても『貴族』の魔力には勝てない。だが奴の血を飲めば、少なくとも『貴族』と同じレベルの能力を得られる筈だ」

「俺が『貴族』に……」

十兵衛は、少し酔った様な表情をした。

ー掛かったな！

ショウは、心の中でほくそ笑んだ。

「あんたは今よりも更に強くなる。それに俺も　奴の血を飲めば、恐らくもう太陽を恐れずに済むし、パワーだって今よりもずっと増す筈だ！　そうしてパワーの増した俺とあんたが手を組めば、偉そうにしてる闇御前の爺やその息子の光牙を倒し、奴らの金や権力を手に入れる事が出来る。この国のヴァンパイアの王になれるんだ！　そうなりゃ人間共など問題にもならねえ。俺達は日本国の王になったも同然だ！　どうだ、悪い話じゃないだろう？」

ショウは酔った様に……いや、実際自分の話に酔っていた。

「この国の王か……。面白い」

十兵衛もニヤリと笑った。

「だろ？　もしも俺とあんたでこの国を取ったら、俺は大臣か何かで良い。だからあんたが王様だ！　国中のヴァンパイアや人間どもがあんたの足元に平伏すんだよ！」

ショウは、命が助かる為の策略を弄していた筈だったが、十兵衛の予想を超えた好反応に、いつしか自分自身が取り込まれてしまっていた。

「ふうん、確かに悪い話ではないな……。だが俺達がその“御子神”の小僧の血を飲んで強くなったからと言って、それだけじゃこの国は取れないぞ」

「俺達の社会は力が全てだ。そんな事はあんただって分かっている

だろう。あの闇御前の爺や光牙さえ殺っちまえば、残った『貴族』は皆あんたに従うさ。それに『貴族』の半数はまだ眠ったままだ。そんな奴らは赤子の手を捻るより簡単な事だぜ。それになあ、俺達『屍鬼』は『貴族』の奴らに虐げられいつも不満を抱えてる。おまけにやれ協定だの、人間の生き血は飲んじゃいけねえだの、俺達ヴァンパイアから見たら、人間なんて所詮ただの餌でしかないんだ！　だから俺達が蜂起すれば全ての『屍鬼』は俺達の側に付く。俺達がこの国の王になるのも夢じゃないぜ」

ショウは、興奮が押さえ切れず饒舌に語った。

「なるほどな、それはまんざら夢物語でもない様だな……」

十兵衛は、さも満足そうに下顎をつるりと撫で上げた。

「だがそれには一つ問題がある……」

十兵衛は、ショウの目前に屈み込み、息が掛かる程顔を近付けた。

ショウの心臓が“びくん”と跳ねた。

「な、何だ？　何が問題だと言うんだ？……」

ショウは、ドギマギしながら答えた。

「それは、お前が命欲しさに俺を謀ってはいないかと言う事だ」

十兵衛はニヤリと笑った。

いや、確かに口許は笑っているが、目の奥は笑っていない。

むしろ鋭い眼差しには、疑念の色が色濃く渦巻いている。

「そ、そんな事……。この期に及んであんたを騙そうなんてコレっぽっちも思っちゃいないぜ！」

ショウは慌てて首を振った。

「ならば証明して貰おうか……」

「しょ、証明だって？　何を一体……、どうやって証明すりゃあ良いんだ！」

「なあに簡単な事だ。その“御子神恭也”って小僧の居所さ。知ってるんだろう？」

十兵衛が、ショウの瞳の奥を覗き込む。

「ば、馬鹿な事を！　俺が奴の事を全て話した後、もしもあんたが俺を裏切ったらどうする？　奴の居所はその為の保険だ！」

ショウは、十兵衛に主導権を握られぬよう必死に抵抗した。

「お前の言う事も分からんじゃないが、俺とお前はパートナーになるんだろ？　それなら奴の居所ぐらい教えたって構わないんじゃないのか？　それとも今までの話は全部でっち上げだったのか？」

「う、嘘なんかじゃねえ！　だが俺が奴の居場所を喋った後に、あんたが俺を殺すかも知れないし、例え殺さなくったってあんたは『生成り』だ！　俺が身動きの取れない昼間に奴を襲う可能性だって

あるじゃないか！　そうしないって保証が何処にあるんだよ！」

「保証？　俺がお前と組むと言う事は、今お前を見逃すって事なんだぜ。もしお前を見逃した後にお前が俺を騙していたと分かれば、俺は良い面の皮だ。それに俺が御前の勅命を無視したとなれば、今度は俺の身が危険になる。俺だけが損をするって言うのは俺の主義に反するんでな……」

十兵衛は、ショウの反論など気にも止めぬと言った様子で言葉を続けた……。

「それとも今までの話は無かった事にして、今ここでお前を討つ事も出来るんだぜ」

十兵衛は“ぞろり”と言い放った。

そして屈んだ姿勢のままで“典太”を上段に振り被る！

「わ、分かった！　は、話す。話すよ！」

ショウは震えながら叫んだ。

「では話して貰おうか」

十兵衛は“典太”を振り被ったまま言った。

ショウは力無く頷いた。

「奴は……、“御子神恭也”は、この辺じゃ超が付く程の有名人で、駅前の飲み屋街でバウンサーのバイトをしているらしい」

「バウンサー？」

十兵衛は首を捻った。

「用心棒だよ。二年程前に横浜から引っ越して来たらしく、今じゃ学生やりながら裏では飲み屋やクラブの用心棒をしているらしい」

「学生で用心棒か。面白い男だな」

「ああ、中国拳法か何かやっているらしく、化け物みたいに喧嘩が強いらしい。ま、それは俺もこの目で見た事だが……」

「中国拳法を使うのか？」

「ああ。しかもかなりの腕前だ。さっきも言ったが、俺が眷属の一員に加えてやった村田って言う『屍鬼』と、まだ完全に覚醒し切ってもいないままで五分以上に渡り合っていたんだからな」

「ふうむ……。幾ら『貴族』とは言え、覚醒前に『屍鬼』と五分以上に渡り合えるとは恐ろしい小僧だな。それで今は何処に住んでいる？　通っている高校の名前は？」

十兵衛は矢継ぎ早に質問を浴びせた。

「おっと、ここまで話したんだ。今それ以上は言えないな……」

ショウは首を振って答えた。

「そうか……、まあ致し方あるまい。それにここまで聞けば十分だ」

そう言うと、十兵衛は“典太”を上段に構えた姿勢のままで、その場に“すっく”と立ち上がった。

ショウに怯えの色が走った。

「な、何だ！　何だってんだ？　あんたやっぱり俺を騙したのか！」

「騙した？　まあそう言われれば確かにそうだな……」

「汚えぞ！　俺を殺して奴の血を独り占めする気か！」

ショウは怒気に顔を紅らげ叫んだ。

ショウから凄まじい妖気が迸しる。

だが、十兵衛はその暴風の様な妖気を、まるでそよ風の如く軽く受け流した。

「お前は三つ間違いを犯した……」

「間違いだと？」

「そうだ。一つ目は、お前が人間を餌だと言った事だ。先程も言ったが、確かに俺達は人間の血を飲まねば生きて行けぬ。だが無差別に…あの様なまだ年端も行かぬ子供まで殺しても良いと言う事にはならない。それに人間は種族が違う他者であって餌などでは断じてない。その為の約定であり法なのだ。それをお前は破り、我が眷属を危険に晒したのだ。そして二つ目は、俺はただの兵法者で、権力なぞ望んでもいない。それに御前は我が主君。それを害そうとする

者は、俺が御前の剣となり切り伏せるのみ……。三つ目は、お前が裏切り者と罵っていた“御子神恭介”は、俺の最大の好敵手であり親友だった男だ！　その友を、お前はその汚い口で罵ったのだ。その罪、己の血で償え！」

言い終えた瞬間、裂帛の気合いと共に、十兵衛は、神速の速さで“典太”をショウの頭上に振り下ろした。

“ザグッ！”

ショウは、頭頂部から下顎まで一刀の下に断ち割られ絶命した。

即死であった。

顔を真っ二つに断ち割られ、灰色の脳と血まみれの脳漿をドロリと溢れさせたショウは、左右に離れた目で、恨めしげに十兵衛を見上げていた。

「そう恨めしそうな目で見なさんな。言ったろう、俺は時代劇で言われる様な善人でもお人好しでもないってな」

十兵衛は、無表情にショウの屍を見下ろしていた。

その後、十兵衛が床に置いたままだった鞘を拾いに戻ろうとした次の瞬間、激しい炸裂音と共に部屋の廊下側のドアが粉々に吹き飛んだ！

十兵衛は、千切れ飛んだドアの破片を横に跳んで躱すと、片膝を着いた中腰のままの体勢で“典太”を中段に構え、吹き飛んだドアの方を注視した。

そこには、まるで岩と見紛う様な大男が、ドアの入口を塞ぐ様に仁王立ちで十兵衛をじっと見詰めていた。

9

9

夕方に爺が出掛けた後、携帯がバッテリー切れを起こしていた事に気付いた俺は、急ぎ充電しながら復活した画面を見てぶっ飛んだ。

バッテリーは、昨日の昼から切れていたらしいが、それまでに受信した電話やメールでパンクしそうだった。

嫌な予感を覚えつつ、サーバーに残ってるメールリストを受信して更にぶっ飛んだ。

もう読むだけでも……、いや、削除するだけでもウンザリしそうな程の量である。

俺は、男からのメールは全て読まずに削除し、女からのメールにだけ目を通した。

忍耐と苦労の果てにやっと一通り読み終え、俺は着信履歴に残された順番に、これもまた男を避けて電話する事にした。

無論充電コードは挿しっ放しだ。

皆夜の店に勤めている為に、出勤前のこの時間は比較的連絡が取りやすいので助かった。

俺は、とにかく人数をこなす為手短に連絡の取れなかった事への言い訳と、明日からまたバイトに出る予定である事を告げ、そして“今度Hしようね”の一言を付け加えて電話を切った。

どうやら俺が寝てる間に、たまたま爺がバイト先である『ヘブンズ・ドア』のマスターからの電話に出たらしく、俺が病気で寝ていると告げた為か、皆俺が悪い病気か何かだと思っていた様だ。

中には、どうやって噂が廻ったのか知らないが、俺が性病に掛かったとか、チ○コを誰かに食い千切られて入院したとか、果ては腹上死した等々……、とんでもない噂まで流れていたらしい。

だがそのお陰で、答えに窮せずに済んだのだから、結果オーライって事かも知れねえな。

本当は俺がヴァンパイアで、ヴァンパイア絡みの事件に巻き込まれたお陰で死に掛けていたなんて、例えそれが事実であっても言える訳が無え。

そんな事がバレるくらいなら、性病や腹上死の方が余程マシだ。

まあそんなこんなで電話を掛け捲くり、気付いた時には、既に外は暗くなり始めていた。

後は鉄二だけか……。

鉄二から何本も着信が入っていた。

恐らくはシゲの事に違いない。

先日鉄二と話した時、その日シゲから何度か連絡があった事を話したから、その事で俺に連絡を取りたかったのだろう。

だがシゲは死んじまった……。

俺と村田の喧嘩に巻き込まれて……。

だが真実を話せない今、鉄二に何と言って良いのか全く思い浮かばなかった。

俺は、“黒田”と言う名前からただ逃げたい一心で、携帯の着信履歴を全て消去した。

そんな事をしても何の解決にもならないのに……。

今は逃げても、いつかは鉄二と会わなければならないし、その時はシゲの事を話さなければならない。

だが今は、“黒田”と言う文字が俺を責めている様に思えて、削除する事でしか現実逃避を図る事が出来なかった。

どんな不良やヤクザにもビビらねえ俺が、今は親友の鉄二の名前にビビってやがる……。

ーー何が“金色の悪魔”だ！

ーー何が“バウンサー”だ！

ーー自分のダチもロクに守れねえ癖に……。

ーー何がヴァンパイアだ！

ーーそんなクソったれな能力が何になる！

今にも狂って叫び出しそうだ！

やり場の無い怒りと苛立ちに、俺は手元にあったバカラのロックグラスを思い切り壁に投げ付けた。

グラスが壁に当たり、甲高い破砕音と共に、クリスタルの破片が床に散らばった。

何やってんだ、オレ……。

俺は、床に散乱した破片を拾う気にもなれなかった。

そうしてやり切れない思いを胸に、タバコとライター、そして財布と携帯を無理矢理ジーンズのポケットに押し込むと、黒い艶消しの半ヘルを手にそのまま部屋を出た。

暗くなり始めても、まだ外は茹だる様な暑さだった。

甲高い靴音を鳴らし、一気にアパートの階段を掛け下りる。

階段を下り、アパート駐輪所に止めてあった俺の愛車“ヤマハＶ－ＭＡＸを押して敷地から出ようとした瞬間、丁度学校から帰宅した陽子と、偶然にバッタリと出くわした。

“！”

「よ、陽子！」

「き、恭也！　あんた大丈夫なの？」

陽子は一瞬驚いたが、すぐにも心配そうに眉を寄せた。

伺う様に俺の顔を覗き込んでいる。

「あんた、お父さんや李のお爺ちゃんが人に感染する悪い病気だって言ってたけど、身体大丈夫なの？」

「あ、ああ……。もう大丈夫だ」

俺はしどろもどろに答えた。

陽子の瞳を直視する事が出来ない。

「私が様子を見に行こうとしたら、伝染力の強い病気だから行っちゃ駄目だって李のお爺ちゃんが……。それなのに出掛けたりして本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だって言ってるだろう。それに俺、ちょっと急いでるから……」

そう言って俺は、陽子の脇を通り過ぎようとした。

「急ぐって、あんたそんな身体で何処行くって言うのよ？」

陽子が、俺の行く手を遮った。

「ちょっと気晴らしに走ってくるだけだよ！」

「学校休んでた癖に何言ってんのよ！」

陽子が怒った顔で怒鳴る。

「それに、黒田君には連絡したの？　昨日会ったけど心配してたわよ。それに何か友達が行方不明だって……。私の友達も学校休んで連絡着かないし……」

“　！”

「……」

ー一晶子とシゲの事だ。

俺は、掛ける言葉が見付からず、俯いたまま押し黙る他無かった。

「ねえ、聞いてるの？　恭也も知ってるでしょ？　晶子の事。何度も会った事あるわよねえ？」

陽子は、胸の底に渦巻く不安を吐き出す様に言った。

「あ、ああ……」

俺はそう言うのが精一杯だった。

「何だろう……。何か凄く悪い予感がするの。黒田君の友達が行方不明になって、しかも晶子まで……。それに最近あっちこっちで何人か行方不明になってるって……。そこへあんたまで病気で会えないって聞かされて……私何だか不安で……」

陽子の表情が暗く沈んで行った。

あのいつも明るくて凶暴な陽子が、初めて見せる顔だった。

ーー原因は分かってる。

ーー全ては俺の……、いや、全ては俺とあのショウとか言う野郎のせいだ。

ーー今行方不明になってる奴らも、恐らく皆ショウに殺られたんだ。

ーーやはりショウだけは許せねえ。

ーー爺が何と言おうが、奴だけは俺の手でぶっ殺す。

ーー今の俺じゃあ勝ち目が無えかも知れねえ。

ーーだが例え相打ちになっても奴だけは、奴だけはこの手でケリを着けてやる。

俺の心に激しい憎悪が渦巻いた。

身体中の細胞と言う細胞に火が点いた様だ。

「ちょ、ちょっと、恭也！　一体どうしたの？」

俺の様子の変化に気付いた陽子は少し怯えた。

「陽子、最近あっちこっちで行方不明になってる奴らがいるって言ったが、シゲや晶子の他に誰か知り合いでもいるのか？」

俺は、思わず陽子の肩を掴み前後に揺すった。

「ちよ、な、何？　放してよ。い、痛いって！」

陽子は、肩の痛みに顔を歪めた。

「わ、ワリィ…」

俺は“ハッ”として陽子の肩から手を放した。

「もう、一体何なのよ！　晶子以外に知り合いはいないわ。でも学校の近所で奥さんと子供が急に居なくなったって友達が噂してたし、他の友達は彼氏と三日も連絡が取れないって心配してたわ」

「お前の学校……」

陽子の通っている高校は、駅からさほど遠くない古い住宅街にある。

しかもあの辺りには、潰れて廃墟になったビルや工場が幾つもあった筈だ。

爺の話からして、奴は腕に大怪我をしている。

その失血で“渇き”の症状も出始めていたらしい。

“渇きは”ヴァンパイアにとって命に関わる重大な事態だ。

ならば遠くに逃げれる筈がない。

オマケに理性までぶっ飛んでるなら、あのズル賢そうなショウでも後先考えず人を襲いまくっているに違いない。

ー間違いない。奴は……、ショウはそこに居る。

今の陽子の話以外には全く根拠は無いが、俺の勘が奴はそこだと言っていた。

行方不明の母子の話だって、実は旦那の浮気や借金が原因でのただの家出かも知れないし、陽子のツレの彼氏も、他の女と浮気でもしてヤリ捲くってるだけの話かも知れない。

だが、何故か俺には確信があった。

“奴”の仕業だと！

そして“奴”はそこに居ると！

「陽子サンキュ！」

俺はひと言礼を言うと、黒い半ヘルを頭に乗せおもむろにバイクにキーを差し込み、エンジンスターターを押した。

１２００ＣＣのＶ型４気筒、出力１４５ＰＳ／９０００の凶悪なエンジンの咆哮音が辺りに轟く。

俺は、不安気な表情の陽子をその場に残し走り出した。

「恭也、何処行くのよ！」

陽子の叫び声は凶悪なエンジン音に掻き消され、俺は振り返る事も無く暗くなりだした道を陽子の学校へと向かった。

空には満月が、静かに俺を見下ろしていた。

第五章１：人狼

第五章
『人狼』
１

李は、暮れ行く街の雑踏を一人歩いていた。

昼過ぎに連絡のあった、『内調』の佐々木との待ち合わせの為である。

かなり緊急の用向きだったらしく、先日の件で至急会いたいとの事であった。

李は、恭也の事を隠していた後ろめたさからか一瞬返事を躊躇ったが、佐々木との付き合いや今後の事を考えれば、会わない訳にも行かなかった。

出掛ける前に李は、全身に巻かれた包帯を全て外し、甚平の隙間から傷跡を見られないよう下にＴシャツを着込んだ。

無論頭に巻いた包帯も取り除き、髪も洗う事でこびり付いた血も綺麗に落としてある。

後は顔と手の甲の傷であったが、それくらいなら何処かで転んだとでも言い訳するしかない。

無論不安はあったが、拒めない以上行く他は無かった。

駅前を通り過ぎ、待ち合わせのファミレスの駐車場には後僅かの

所まで来ていた。

恭也のアパートから少し離れたファミレスを待ち合わせの場所に選んだのは、無意識に恭也の側から佐々木を離そうとする気持ちの現れかも知れなかった。

そんな愚にも付かぬ小細工をしてしまうのも、佐々木への後ろめたさからだったのかも知れない。

李は、不安と自己嫌悪のないまぜになった複雑な心境のまま、既に約束の時間を過ぎた待ち合わせの場所へと急いだ。

李がファミレスの駐車場に着くと、佐々木のニッサン・フーガが停まっているのが見えた。

フーガは佐々木の自家用車だ。

車内で待っていた佐々木は、李の姿を見付けると素早く車を降り一礼した。

「先日は本当にお世話になりました。その上本日もこのようなご無理を言って申し訳ありません」

佐々木は深々と頭を下げ、低いバリトンで挨拶をした。

「いやあ、儂の方こそ遅れて済まぬ」

李は、精一杯飄々とした態度で、白髪頭を掻きながら答えた。

「私も今しがた着いたばかりですのでお気になさらないで下さい。

それより本来なら店内でと言いたいところなのですが、話が話ですので車の中で勘弁して下さい」

佐々木は、そう言いながら助手席側に回り込むと、ドアを開き李を招いた。

「すまんのう……」

そう言って李は、傷付いた顔を隠す様に伏せながら、素早く車内に乗り込んだ。

佐々木は、特に何かに気付いた様子も無く、静かにドアを閉めた。

ーーどうやら傷には気付いていないらしい。

ーーしかも、今夜呼ばれた事と、恭也の事は無関係の様だ。

李は少し安堵した。

もし顔の傷に気付かれているのであれば、真っ先に何か聞かれるであろうし、更に今夜の話が恭也の事であるのなら、この堅物で不器用な佐々木がこの様な態度でいられる筈がない。

先日の件には違いないだろうが、少なくとも恭也の事が『内調』や『C・V・U』にバレていないのは間違いなさそうであった。

佐々木は、助手席のドアを閉めた後、再び運転席側へ回り自分も運転席に乗り込んだ。

エンジンが掛けたままだった為、車内はひんやりとエアコンが効

いており、外気と比べれば極上の天国であった。

「ここは少し目立つので場所を変えましょう」

そう言うと、佐々木は車を発進させた。

ゆるりと駐車場を滑り出ると、車の流れを確認して駅前通りに合流する。

夕方を過ぎた駅前通りは、通行する車の台数は多かったものの、意外と流れはスムーズであった。

「先日は本当にありがとうございました」

ハンドルを握りながら、佐々木は再び礼を言った。

「何の。それより儂が取り逃がした吸血鬼の居所は分かったかの？」

李は、佐々木の武骨な横顔を見詰めながら尋ねた。

「いえ、あれからローラーを掛けて捜索しているのですが、以前有力な情報は得られないままなのです……」

佐々木の横顔が苦渋に歪んだ。

「あの時儂があ奴を始末しておけば……。本当に済まなかったのう」

李は頭を下げた。

目には後悔の色が色濃く浮かんでいる。

「いえ、とんでもない！　結局老師にご迷惑をお掛けてしてしまったのですから、こちらこそ本当に申し訳ないです」

「あれから既に三日か……、心配じゃのう……」

李は、前方を左右に流れる街並みを眺めながら言った。

「同感です。ですがもっと別の問題が持ち上がりまして……」

「別の問題？」

ーー李の心臓が“ドキリ”と音を立てた。

「実はあの夜、あの場所で死亡した二匹の第三種ヴァンパイア、高木晶子・村田浩平二と同じく、第三種ヴァンパイアで逃亡中の飯沼彰二の他に、もう一匹居た事が確認されたのです」

“！！”

ーーやはりバレていたのか？

李は半ば覚悟した。

恭也の事がどうして分かったのかは分からないが、少なくとも今日呼ばれたのはこの話の為であるには違いない様だ。

李は、全身から汗がどっと噴き出るのを感じた。

「どうしてもう一匹居た事が分かったのじゃ？」

李は、動揺する自分を精一杯律した。

「あの現場から、高木晶子・村田浩平・飯沼彰二の三匹とは別の毛髪や血痕が確認されたからです」

“！”

ーーそうか、血痕か！

李は愕然とした。

恭也の覚醒で動揺していた為、地面に残された血痕の事まで考えが及ばなかったのだ。

しかも科学捜査に疎い事が、更に拍車を掛けていた。

残された毛髪や血痕から、その主が恭也と断定出来るものなのかどうか、李には分からない。

ただこの佐々木が、わざわざ自分を呼び出した事を考えると、全てバレている可能性も否定出来なかった。

李は自分から先に全てを告白し、逆に佐々木に助力を申し出るかどうか迷った。

ーーしかたあるまい……。

李は覚悟を決めた。

だが李が口を開こうとしかけた瞬間、佐々木の方が先んじて口を開いた。

李は、思わず口をつぐんだ。

「今朝入った『C・V・U』の科学検査班からの報告によると、その血液はヴァンパイアとは別の……、未知の生物の物らしいのです」

「な、何じゃとう！」

あまりの衝撃に李は助手席のシートから跳び上がった！

驚愕のあまり開いた口が塞がらない。

目一杯見開かれた目の瞳孔さえ、開き切ってしまった様だ。

「な……馬鹿な……」

李は、次に続く言葉が出て来なかった。

全身を硬直させ、ただ佐々木の横顔を見詰めるしかなかった。

「驚かれるのも無理はありません。私も最初報告を受けた時は信じられませんでした……。ですが事実の様です」

佐々木の表情は堅く真剣であった。

李にとって佐々木の話した内容は想定外であり、あまりにも衝撃的な内容だった。

「じゃが……そんな……」

「科学検査班からの報告によると、この血液の持ち主……、我々は『魔獣』と呼称していますが、『魔獣』の血液にはヴァンパイアと、この国では既に絶滅した筈の獣人双方の特徴が見られるとの事なのです」

「そんな……馬鹿な……。ならばキョ、いやその『魔獣』は、吸血鬼と人狼の混血だとでも言うのか？」

「はい。ここでは詳しい検査内容や具体的な専門用語は省略させて頂きますが、鑑定の結果『魔獣』の性別はオスで、ヴァンパイアと獣人の間に生まれた混血なのだそうです」

ーー知らなかった……。

いや、知る筈もなかった。

恭也の父親が恭介である事は間違いないだろうが、恭也を託された時に母親は既に死んだと聞かされていたのだ。

それがまさか人狼であったとは……。

「じゃが、今まで吸血鬼と人狼の混血など聞いた事も無い。現実にそんな事が可能なのか？」

「私も、ヴァンパイアと獣人の間に子供は出来ないと聞いていたので正直言って驚きました。確かにヴァンパイアは勿論の事、獣人も変身していなければ見た目は人間とほぼ同じなので、一見生殖は可能かとも思えますが、ヴァンパイアと獣人では全く別の生き物です。

当然染色体の数も違う為、今まで生殖は不可能だと思われていたのです。しかし……」

「……実際には双方の間に子が生まれた……。そう言う事じゃな」

「そう言う事です……。生物学的に不可能であっても、この『魔獣』は現実に存在します。科学検査班の鑑定に誤りが無い以上、今も何処かで棲息しているのです」

ーーいったい何と言う事じゃ……。

李は大きく溜息をついた。

だがこれが事実なら、恭也は恭介と人狼の間に生まれた子供だと言う事になる。

ーー信じられぬ。

ーーだがこれが事実なら、今まで疑問に思っていた幾つかの事に説明が付く。

ーーまず幼い頃に施した呪の効果が薄れている事はともかく、今朝闘った際にあれ程の呪術を駆使したにも関わらず、いとも簡単に打ち破った恭也の魔力……、あれは今まで闘ったどの吸血鬼よりも凄まじいものであった。

ーーしかもあの時使用した結界や禁呪は、かなり齢を重ね魔力の高まった『貴族』と言えど、そう簡単に破れる代物では無い。

ーーなのに『貴族』としてはまだ覚醒仕切れていない、言わば赤

児の様な状態であの様な魔力を発揮出来るとは、ただの『貴族』では考えられない事であった。

ーーそれが吸血鬼と人狼との混血であれば、その魔力が絶大である事も想像に難くない。

ーーそしてあれ程の魔力を使い、しかも尋常では無い再生を行っておきながら血を飲まなくとも“渇き”が起こらぬのは、ひとえに恭也が吸血鬼以上の、いや生物学的に吸血鬼とは別の魔物として突然変異したものだと考えれば納得が行く。

ーー恭介、お主は……。

李は深い溜息と共に、心の中で恭也の父恭介の名を呟いた。

助手席の窓ガラスには、あの夜の恭介の顔が浮かんでいた。

「……うし、老師！」

“！”

李は“びくん”と反応した。

自分の思考の世界に入り込んでいた李は、佐々木からの呼び掛けが、最初耳に入らなかったのだ。

「老師、どうされたのですか？」

佐々木は前方に注意を払いながらも、李の顔を心配そうに覗き込んでいた。

「ん、んん？　あ、いや済まぬ。ちと考え事をしておってのう」

李は慌てて答えた。

「どうなさったのですか？　顔色があまり優れませんが……」

「いや、その『魔獣』とやらがどんな化け物で、今頃何処で何をしておるのか気になってのう……」

「そうですか……。実は今日御呼び立てしたのもその事なのです」

“！”

再び李の心臓が“ドキリ”と鳴った。

「あの夜老師が現場に到着された時、あの三匹の他に何か不審な物とか人影とか見ませんでしたか？」

李は、緊張で身体が強張って行くのを感じた。

「何も見なんだが……何でじゃ？」

李は咄嗟に嘘を付いた。

「そうですか……。我々が老師に呼ばれ、現場検証を行った際には何もおっしゃられてなかったので、怪しい物は何も見ておられないとは思ったのですが、その『魔獣』に関する手掛かりとなる物が僅かでもあれば、どの様な情報でも欲しいのが今の我々の現状なのです」

佐々木は渋面を作って言った。

「……済まぬ、あの夜話した事以外には何も見ておらぬよ……。力になれなくて済まぬのう……」

李は痛む心を堪えた。

「そうですか……。いえこちらこそ申し訳ありません」

残念そうではあったが、佐々木は特に表情を変える事無く前方を見たまま答えた。

佐々木は、李の話を全く疑っていない様子だった。

「そう言えば喉が渇きましたね。難しい話も終わった事ですし、本部の方には遅れると報告も入れてあるので、何処かでお茶でも飲んで行きますか？」

そう言うと佐々木は、左前方に見える喫茶店に入ろうとウインカーを出した。

スムーズな車線変更の後、フーガは喫茶店の少し狭い駐車場へと入って行った。

狭い駐車場には車が三台しか止まっておらず、佐々木は一番奥の駐車枠へとバックで止めた。

「さあ着きました。お酒で無いのが残念ですが、私はまだこれから勤務なので、今夜はコーヒーで我慢して下さい」

佐々木はにっこりと笑った。

そしてエンジンを切りるとすぐさま車を降り、澱みない動きで助手席側に回り込んだ。

素早く助手席のドアを開く。

佐々木に促され、李は車を降りた。

既に辺りは暗くなっている。

やはりエアコンの効いた車内と違い、外はまだ噎せ返る様な暑さが続いていた。

だが、空には久し振りに月や星が煌めいていた。

「今年の梅雨は本当に雨ばかりで嫌になりましたが、さすがに今日は晴れたお陰で月や星が綺麗に見えますな。梅雨の晴れ間の何とかってやつですかな？」

佐々木は、雲が切れ久し振りに顔を出した月や星達を眺めて言った。

佐々木の言葉に誘われ、李も夜空を仰いだ。

「雨ばかりだったので忘れていましたが、今夜は満月だったのですねえ……」

佐々木は、何気ない表情でさらりと呟いた。

“！”

ーー今宵は満月か……。

ーーもしや……、イ、イカン！

李は、ある事に気付き動揺した。

「済まん、そう言えば急用を思い出した！　悪いが茶はまた今度にしてくれ！」

李は、今にも駆け出しそうな勢いで言った。

「ど、どうされたのですか急に？」

「いや用があったのを思い出しただけじゃ！」

李は、答えるのも煩わしそうに駆け出した。

「老師、そこまで送ります。乗っていって下さい！」

佐々木が、背中を見せる李を呼び止める！

「いや構わぬよ。幸いここからはすぐ近くじゃ！」

「しかし……」

「野暮は言いっこ無しじゃよ！」

李は声を掛ける佐々木に振り向きもせず、左手の小指を立てて後

ろ手に合図を送ると、今来た方角へ急ぎ走り去って行った。

置き去りにされた佐々木は、李の姿が見えなくなるまで見送っていた。

李の姿が建物の死角に入り見えなくなった時、佐々木はスーツの胸ポケットから携帯電話を取り出すと、慣れた手つきでボタンを操作しある番号を呼び出した。

視線を李の向かった方角に向けながら、相手が電話に出るのを待った。

すると間髪を置かず相手は電話に出た。

「はい、杉本です」

「佐々木だ。今何処に居る？」

先程までとは打って変わって、佐々木の表情は固く、低いバリトンにも鉄の固さが篭っていた。

『はい。現在車で対象を尾行中です』

電話の相手は何かに気を配りながら、押し殺した声で言った。

「不破はどうしている？」

『不破は徒歩で対象を追ってます』

「そうか……。相手は“武神”と呼ばれた御方だ。気を読む術は人

知を超えておられる。幾ら注意しても足らぬくらいだぞ！　気を緩めずくれぐれも慎重にな。私もすぐに合流する」

佐々木はぴしゃりと言った。

「はい、分かっています。しかし尾行の対象があの李老師だなんて、いったい何が目的なんですか？」

「今は俺にも言えん。正直尾行した先に何があるのか俺もしっかり分かってないんだ。だが責任は俺が取る。お前達は老師に気付かれぬ様、慎重に尾行しろ。分かったな！」

『分かりました。主任を信じます』

「すまん、頼んだぞ」

そう言って佐々木は電話を切ると、急ぎフーガに乗り込んだ。

再びエンジンを始動させる。

シートベルトを“カチリ”と締め、ポケットから取り出したロングピースを口に咥え火を点けた。

一息吸い込むと、紫煙を深くゆっくりと吐き出した。

「老師……」

佐々木は“ぽつり”と呟くと、遠い目で窓の外を眺めた。

望んでもいないのに、次々と湧き出てくる疑問や不安を打ち消す

様に、口の端にロングピースを咥えたまま、佐々木は喫茶店の駐車場を後にした。

2

2

「何やら楽しそうな事してるじゃねえか?」

巨岩が口を開いた。

野太い声である。

無論岩などでは決してないのだが、岩と見紛う程の大男であった。

身長は、優に二メートルを超えている。

体重も百キロは超えているに違いない。

白い無地のTシャツにブルージーンズと言った軽装な為、その下に隠された膨大な量の筋肉がありありと見て取れた。

Tシャツの、胸や二の腕の辺りが有り余る筋肉でパンパンに伸び、今にもはち切れそうである。

首の部分などは既に伸びて、襟首の形が円形を留めていない。

顔も、身体と同じく岩の様にゴツかった。

太く短い黒髪は、まるで洗ってそのまま乾かしただけで、何の手入れもしていない様に見える。

肉体労働者を想わせる日焼けした肌。

彫り深い顔には、造り物の様にゴツイ鉤鼻が居座っている。

頑丈そうな下顎はしゃくれ、先が二つに割れていた。

拳が楽に入りそうな程の大きな口に不敵な笑みを張り付かせ、太い眉毛の下には人懐こい瞳が、好奇心と凶暴な色の双方を滲ませていた。

とにかく全ての造りが大きく、まさしくデコボコとした岩の様な男であった。

その男は、扉が砕けた事でポッカリと口を開けた出入り口を、まるで塞ぐ様に仁王立ちしている。

足元には、長方形のまるでエレキギターのハードケースの様なスーツケースを置き、両腕を胸の前で組んでいた。

部屋の中をぐるりと見渡すと、男は再び十兵衛に視線を向けた。

全身からは、溢れる程の生気とも闘気とも呼べぬ、不思議な気を発している。

「誰だ?」

十兵衛は、片膝を着いた中腰の姿勢で“典太”を構えながら問い掛けた。

十兵衛の全身に強い緊張が張り詰めている。

幾らショウに気を取られていたとは言え、この男の接近を今まで気付けなかったのだ。

今はこれ程の気を放ってはいるが、ここに来るまでこの男は自分に己の気配を察知させなかったのである。

気配だけでは無い。

物音はおろか、足音すら立てずこの男はここま来たのだ。

容易ならぬ男であった。

しかも、この惨状を見て顔色一つ変えていない。

むしろ楽しんでいる様に見える。

歳は二十歳を少し回ったぐらいにしか見えないが、実際は年齢も正体も掴ませない、何処か不思議な男であった。

「誰だって言われてもなあ……。まあオメエの敵だな！　その匂い、オメエ、ヴァンパイアだろ？　それは仲間割れか？」

男は、高い鉤鼻を部屋の中の空気に潜り込ませ“ぞろり”と言った。

「貴様……」

十兵衛は、自分を敵だと言った男の言葉に“ギリリ”と緊張を高めた。

次の瞬間、十兵衛はふと疑問を感じた。

「貴様、下に居た者達をどうした？」

「あぁ、下に居たのはオメエの手下共か？　皆サボって仲良くおネンネしてるぜ」

男は、唇の端を“にいっ”と吊り上げた。

「貴様っ！　まさか殺したのか？」

十兵衛は激しい怒気と共に大声で怒鳴った。

「ヒューッ、怖いねえ～。まったく凄え気だぜ……。安心しな、今は誰も死んじゃいねえ。ただこのまま放っといたら死んじまう奴も出て来るだろうがな！」

男は楽しそうに言った。

その不敵な態度が、十兵衛の怒りに油を注いだ。

「貴様……、許さん！」

十兵衛は溜めた気を一気に解放すると、中腰の姿勢から男に向かって一気に跳んだ！

「でやーっ！」

裂帛の気合いと共に、十兵衛は必殺の突きを男の心臓目掛けて放った。

“典太”の切っ先が男の胸に吸い込まれるかと思った瞬間、十兵衛の突きは男のTシャツのみを切り裂いただけで、見事なまでに躱されていた。

男は、獣の様な反射神経と身体に似合わぬ俊敏な動きで、十兵衛の突きを紙一重で躱したのだ。

十兵衛は、突きを躱され床に着地すると、そのまま勢いを殺さず腰を回転させ“典太”を横一線に薙ぎ払った。

通常であれば、この一撃で胴を真っ二つにされてしまうところを、男は凄まじいバネで後方へ飛び退いた。

だが、男は驚愕していた。

今の二撃、完璧に躱したつもりだった。

しかしこの隻眼の男の攻撃は、自分の予測を裏切り何処までも伸びて来る。

その為に躱したつもりが躱し切れておらず、Tシャツの胸と腹の部分を切り裂かれたのだ。

斬られた部分には血が滲んでいた。

片目ではどうしても見切りが甘くなる。

それはヴァンパイアも人間も同じだ。

だが、この隻眼の男は、彼我の間合いを完璧に見切っていた。

しかも幾らヴァンパイアとは言え、剣を奮う速度が尋常ではない。

今まで屠り去ってきたヴァンパイアとは、桁違いの腕前であった。

ーーこのヴァンパイア、並ではない。

「やるなあ、オメエよ」

男は野太い笑みを浮かべた。

一方、十兵衛もまた驚愕していた。

ーーこの動き、この反射神経、人間のものではない。

幾ら崩れた体勢からの攻撃であっても、このヴァンパイアである十兵衛の攻撃、そうそう躱せるものではない。

なのにこの男は、一度ならず二度までも躱して退けたのだ。

人間であろう筈がない。

「貴様……、何者だ?」

十兵衛は、“ギロリ”と男を睨んだ。

そして、片手で“典太”を横に凪いだ体勢からすっくと立ち上がると、両手で柄を握り直し正眼に構えた。

「凄えな、オメエ。今まで何匹もヴァンパイアをぶっ殺して来たが、オメエみたいな奴に出会ったのは初めてだ」

男は、割れた下顎をポリポリと掻きながら言った。

「貴様……、もしやハンターか？」

十兵衛は、油断無く男の様子を伺いながら聞いた。

「ハンター？　何だそりゃ。オメエらは俺の事をそう呼んでるのか？　まあ確かにオメエらの仲間を何匹かぶっ殺してるからなあ。オメエが俺をハンターだって言うならそうなんだろうよ。だが俺がそのハンターならどうする？」

「斬る！」

十兵衛の気が“ぐうん”と膨らんだ。

触れたら火傷では済まない程の妖気だ。

“ゴゴゴゴゴゴゴ……”

建物全体が震えている様であった。

「こりゃスゲエ！　こんな妖気は初めてだ。オメエ、その隻眼からしてただの『屍鬼』か『生成り』かとも思ったが、これ程の妖気を操るとは、まさかオメエ……『貴族』か？」

男は、オドケているとも　ただ驚いているとも取れる態度で言った。

だが実際には、内心驚愕にその身を緊張させていた。

これ程の妖気は、『貴族』でなければ発する事が出来ぬ筈だ。

だが生来のヴァンパイアである『貴族』は、幾ら傷を負っても再生してしまう為に傷跡が残る事は無い。

相手が隻眼だと言う事は、ヴァンパイアに転身する前……、つまり人間であった頃に片目を失ったと言う証だ。

男は、警戒心から気の内圧を高めた。

「俺は『貴族』では無い。だが修業を積めばこれぐらいの事は出来る……」

十兵衛の気が更に膨れ上がった。

「むう……、これ程の気は……。なら俺も本気にならせて貰うぜ！」

そう言うと男は、内部に溜まった気を一気に解放した。

「こっ、これは……」

十兵衛は思わず顔をしかめた。

それは、十兵衛と同等の凄まじい気の暴風であった。

十兵衛の気と男の気がぶつかり唸りを上げる。

「つあぁっ！」

「うおぉぉお！」

互いの口から激しい気合いが迸しった。

十兵衛は、正眼に構えた“典太”を振り被り、男に向かって左上段から袈裟斬りに斬りつけた。

男が身体を右横に捻って体捌きで躱す。

「チイィィ！」

十兵衛の振るった一撃を躱し様、男は岩の様な拳を握り締め、十兵衛の顔を目掛けて鋭い右ストレートを放った。

「ぬおぉぉお！」

“！”

突きを放った男の背中に“ぞくり”と冷たいものが走った。

一度袈裟斬りに振り下ろされた切っ先が床に届く寸前に反転すると、そのまま下方から上方へと跳ね上がって来たのである。

男は、咄嗟に突きに行った腕を軸に、身体を右斜め前方へ捻り反転させる事で迫り上がって来る刀を躱すと、同時に宙に浮いた左脚で回転する勢いをそのままに十兵衛の顔を蹴りに行った。

信じられぬ反射神経と身体能力だ！

十兵衛は、振り上げた刀と同じスピードで迫り上がって来る蹴りを、顔を捻り上体を反らす事で何とか躱した。

紙一重で蹴りを躱した十兵衛の目前を、男の左脚が凄まじい勢いで吹き抜けて行く！

だが一瞬の攻防は、これで終わりではなかった。

「まだだ！」

男の蹴りを躱した十兵衛は、振り上げた刀の切っ先を下に向け、蹴りを躱され体勢の崩れた男に向けて、叫ぶと同時に鋭い突きを放った！

男に“典太”の切っ先が迫る！

躱せぬと瞬時に悟った男は、咄嗟に左腕で身体を庇った。

“典太”の切っ先が、男の左腕を刺し貫いた。

「ぐおっ！」

男が低い呻き声を上げる。

だが次の瞬間、十兵衛は驚愕に目を見開いた。

男の腕を貫通し胴に潜り込む筈だった刀が、胴に達する寸前で止められたのだ！

男の左腕の筋肉が異常な程盛り上がり、筋肉の束がまるで万力の様に締め付けて刀を絡め取ってしまったのである。

柳生新陰流にも白刃取りなる無刀の技があるが、これはもっと凄まじい。

十兵衛は突きに行った姿勢のまま、刀を抜く事も押す事も出来なくなっていた。

「くふぅ」

「くむうっ」

二人から呼気が洩れた。

男は、激痛に歪む顔で唇を吊り上げて無理に“にいっ”と笑うと、左足で十兵衛の腹を蹴った！

左腕に絡み取られた刀がすっぽりと抜け、十兵衛は“典太”を握ったまま、身体を“くの字”に曲げ後ろへと吹っ飛んだ！

十兵衛は、両足を床に踏ん張る事で何とか転倒するのを避けた。

男もその場に立ち上がった。

見ると、男のTシャツが先程の袈裟斬りで、丁度胸から腹に掛けて斜めに大きく切り裂かれ、赤く大きなシミを作っている。

完全には躱し切れなかった様だ。

しかし十兵衛もまた、男の蹴りを躱し切れず頬に鋭い裂傷を負っていた。

男は、彼我の間合いを取ると、左腕の傷をぺろりと舐めた。

出血の量が多い為、男の口元が赤く染まった。

「やるなあ……」

男が感嘆する様に言った。

「何の貴様こそ」

十兵衛も愉しくて堪らぬと言った様子だった。

「もう一度聞く。貴様何者だ？　その動き、まさか人間ではあるまい」

男はにやりと笑った。

「当ててみろよ」

男が言った。

「人間でも我が眷属でも無い。最初は強化人間かとも思ったが、強化人間が我らを襲う訳が無い……」

十兵衛は言葉を区切った。

男は、不敵な笑みを浮かべながら十兵衛の話しを聞いている。

「まさかとは思うが……、貴様獣人か？」

十兵衛は、相手に探る様に言った。

男の口元が更に吊り上がる。

「そうよ、そのまさかよ。俺は十八年前、貴様らヴァンパイアと、欲に目が眩んでヴァンパイアの言いなりになった馬鹿な人間共に滅ぼされた、獣人族唯一人の生き残りよ！」

男は、笑みから一転怒りに満ちた表情で、怒気を込めて叫んだ。

「やはり……。まさかとは思ったがやはり獣人か……。だが何故今になって我が眷属を襲う？」

「オメエ馬鹿か？　復讐に決まってるだろう。俺は、俺の一族を滅ぼした貴様らや人間共を決して許さねえ。貴様らをこの手で全員ぶち殺し、その後は貴様らに手を貸した政治家や強化人間共を血祭りに上げてやるんだ」

男は怒気に顔を赤らめながら言った。

「復讐か……。だが貴様一人で何が出来る！」

「やっぱり馬鹿だなオメエ……。出来る出来ねえじゃねえんだ。やるんだよ！　その為には命なんか惜しくもねえし、復讐の途中で死んだって構やしねえ。ただ俺は復讐したいからする。それだけよ」

「愚かな……。ならば我が眷属に仇なす貴様は、この柳生十兵衛三

厳が斬る！」

十兵衛は、左足を擦り足で前に運び、左右の足を前後一直線に揃えると、流れる動作で“典太”を脇に構えた。

「柳生十兵衛……？　オメエ、時代劇とかに出て来るあの柳生十兵衛か！？」

男は目を丸くして言った。

「ならば何だ？」

「驚いたぜ！　まさかオメエがあの有名な柳生十兵衛とはな。通りで強い筈だぜ！」

男は、さも愉快そうに言った。

「貴様……名は何と言う？」

十兵衛は、男を睨み付けながら尋ねた。

「俺か？　俺の名は当麻……、当麻獣吾だ」

「ふん、獣吾か……。如何にも獣人らしい名前よ」

十兵衛は鼻を鳴らした。

それを見た男＝獣吾もニヤリと笑った。

「相手が柳生十兵衛となれば、俺もいよいよ本気にならねえとな！」

そう言うと、獣吾は十兵衛の動きに細心の注意を払いながら、扉の側に置いたままであったケースへとにじり寄った。

そして立てたままのケースを持ち上げると、フックを外し中から大振りな斧を取り出した。

その斧は、長さ一メートル以上はある巨大な斧で、しかも左右両側に斧刃を備え、長く伸びた柄の先にある斧頭の尖端には、鋭く尖った槍穂が取り付けられていた。

日本の斧と言うよりは西洋の戦斧に近い。

しかもその斧は全て金属で出来ているらしく、全体が鈍い黄金色をしていた。

重量は、かなりの重さに違いない。

しかし獣吾は、そんな重さを微塵も感じさせぬかの様に片手で持っているのだ。

凄まじい腕力であった。

「これはなあ、俺達一族に代々伝わる『降魔の斧』よ！　実戦でこれを使うのはオメエが初めてだ。それに今夜は満月だしな、せっかく有名人と会えたんだが、これで終えだ！」

そう言うと、獣吾は腰を落とし、両手に斧を持ち替え腰溜めに構えた。

見ると先程受けた腕や胸の傷も既に出血が止まっている。

ヴァンパイア並、いやそれ以上の治癒能力だ。

十兵衛も『車』に構えたまま、体内で気を練っていた。

獣人族は、ヴァンパイアの『貴族』の様な超能力や魔力こそ持っていないが、こと身体能力に於いては『貴族』すら凌駕する程の高い戦闘力を有している。

しかも今宵は満月だ。

獣人族は、満月の下では最高の力を発揮出来る。

だがその不利な状況の中、この獣吾と互角に渡り合える十兵衛も、やはりただのヴァンパイアではなかった。

人間であった頃から今日まで絶やさず続けて来た修練こそが、十兵衛をただのヴァンパイア以上のものにしていた。

両者は互いに構え、体内の気を静かに練り上げた。

部屋の密度が変わり、風景さえ歪んで見える程の気が辺りに充満し、火を点ければ炎を伴って破裂しそうな程張り詰めていた。

「……」

「……」

張り詰めた空気の中、両者は自分の気が最高頂に高まるのを待っ

た。

まるで時間が止まっているかの様であった。

次の瞬間、ビルの外から猛々しいバイクのエンジン音が、張り詰めた緊張のガラスを打ち破った！

二人は、音に弾かれる様に動いた。

「キエェェェー！」

「うおぉぉぉ！」

静寂を裂き、二人の雄叫びが轟いた。

3

3

李は、タクシーに乗っていた。

佐々木と別れた後、途中で流しのタクシーを拾い、急ぎ恭也のアパートへと向かっているのだ。

李は、懐から携帯を取り出すと、すかさず恭也の携帯を呼び出した。

しかし何度コールしても、一向に恭也が電話に出る気配は無い。

李は焦りを感じていた。

何度目かのコールの後、李は苛立たしげに電話を切った。

「何をしとるんじゃ、あの馬鹿者……！」

李は、苛立ちを隠す事なくボヤいた。

足の貧乏揺すりが止まらない。

そんな李の様子を察知してか、運転手は仕切にルームミラーで李の様子を覗き込んでいる。

数瞬考えを巡らせた後、李は携帯のアドレスを括り目当ての番号を呼び出すと、おもむろに発信ボタンを押した。

三度目のコールが聞こえた時、相手が電話に出た。

『はい、森下です……』

電話に出た相手は若い女だった。

「もしもし、陽子ちゃんか？　勇三殿はおるかの？」

李は、もどかし気に早口で喋った。

『うん、居るけど……、そんな事より恭也が！』

陽子の様子がおかしい。

李は、とてつもなく悪い予感に駆られた。

「どうしたんじゃ！　恭也がどうした？　何があったのじゃ！」

李は、思わず電話口で叫んだ。

どんどん悪い予感が膨らんで行く！

『さっき学校から帰って来たら、アパートの前で恭也に会って……。私が大丈夫？　って聞いたら大丈夫だとは言ってたんだけど、ホントに恭也大丈夫なの？』

「それで恭也はどうした？」

李は、焦る気持ちから質問に質問で答えた。

『どうしたの？　やっぱり恭也の病気はヒドイの？』

「いや病気の事はともかく、恭也はどうしたのじゃ？　今もアパートにおるのか？」

焦るあまりに口調が強くなっている。

『ちょ、ちょっとお爺ちゃん、いったいどうしちゃったの？　何か変だよ』

ー理由は分からないが、何故か今夜の李はいつもと雰囲気が違う。

陽子の戸惑いが、携帯を通して李にも伝わった。

『ねえ、恭也がどうしたの？』

陽子はしつこく聞いた。

「あ、ああ……済まぬ……。つい言い方が荒くなってしまって悪かったのう。それで恭也がどうしたのじゃ？」

李は自分の言い方が荒っぽくなっていた事に気付き、焦る気持ちを捩伏せ何とか落ち着いた話し方に変えた。

『何か今日のお爺ちゃん変だよ。恭也もそうだったけど……』

「恭也が変とな？　もう少し詳しく教えてくれんかのう」

『ん、うん……。身体の調子は悪くなさそうだったんだけど、何かイラついてるって言うか、落ち込んでいるって言うか……。とにか

くいつものバカでワガママで自信過剰の恭也じゃないのよ。しかも、私の友達や学校の近所の人達が行方不明になってるって話をしたらいきなり血相変えちゃって……』

「何じゃと！」

李は大声で叫んだ！

前で運転していた運転手が“びくん”と身体を震わせた。

不安気にルームミラーで李の顔を覗き込んでいる。

『うんモーッ、急に大声出して驚くじゃない！』

陽子も驚いて不平を鳴らした。

「済まん、済まん。じゃあ恭也はアパートにはおらぬのか？」

『うん、居ないよ。何処行ったか分かんないけど……』

陽子の声が小さくなった。

「さっき学校の近所の人が居なくなると言うておったが、陽子ちゃんの学校は何と言う名前だったかのう？」

『聖華女子よ。ねえ、いったい何なの？　ホント変だよ、お爺ちゃんも恭也も』

「いや心配せずとも良い。で、恭也は陽子ちゃんの学校を知っておるのかの？」

『そりゃ知ってるわよ。だってそんなに遠くじゃないし……』

「分かった。ありがとうな陽子ちゃんよ！」

李は、簡単な礼を言いさっさと電話を切ろうとした。

『ちよ、ちょっと待ってよ！　今お父さんを呼んで来るから……、ちょっちょと……』

呼び止める陽子を無視して、李は一方的に電話を切ってしまった。

「運転手さんや、行き先変更じゃ。聖華女子高校とやらへ行ってくれ、大急ぎでのう！」

李は、慌てて運転手に行き先の変更を告げた。

運転手は後ろを振り向く事無く“はい”とだけ返事をした。

ーー陽子ちゃんの話を聞いた恭也は、行方不明の犯人をショウとか言う吸血鬼の仕業だと思ったに違いない。となれば、取り敢えず学校へ行く筈じゃ。

ーーじゃが学校へ行くのは良いが、行方不明の犯人がショウとか言う吸血鬼なら、恭也が奴の居所を捜し当てる前に何としてでも恭也を見付けねばならぬ……。

李は、押さえ切れぬ焦りと苛立ちで、拳が白くなる程強く握り締めた。

4

4

「いったい何処へ行くんでしょうねえ？」

惚けた顔の不破が尋ねた。

不破は『C・V・U』の現場捜査班の一人で、見た目と違い優秀な男である。

年齢は三十五歳、見た目はごく普通のサラリーマンと言った風貌だ。

際立った特徴も無く、似顔絵では一番描きにくいタイプだろう。

背も特別高い訳けでも無く、太っても痩せすぎてもいない。

特別美男子でも無ければ、嘆く程の不細工でもない。

安物の、吊しで買った紺色のシングルスーツを纏う姿は、どう見ても冴えない普通のサラリーマンである。

もっと言えば、営業成績が悪くいつも上司に怒鳴られていそうな営業マンと言った感じだった。

しかしこの不破と言う男、見掛けとは裏腹に『C・V・U』でも一・二を争う優秀な捜査官で、佐々木からの信頼も厚い人物である。

機動隊や警察官、または自衛隊からの引き抜きが多い『C・V・

U』の中で、この不破も例に洩れず警視庁から高い捜査能力を買われて『C・V・U』に移籍した一人だ。

佐々木達の前を行く杉本は、不破の先輩である。

今佐々木達は、李の乗るタクシーを二台の車で尾行している最中であった。

李のタクシーのすぐ後ろには、杉本の“トヨタ・マークX”が張り付き、その後ろから佐々木のフーガが追走しているのだ。

本来であれば、徒歩による尾行を不破と杉本の二人で行い、佐々木が車から指示とバックアップをする予定だったのだが、佐々木と別れた後李がタクシーに乗ってしまった為、車に乗っていた杉本がそのまま車でタクシーを尾行し、徒歩で尾行する予定だった不破を、佐々木が拾う形で二台による尾行となったのだ。

佐々木は、先程李と二人で見た街並を、今は逆の方向から見ている。

駅へ向かう車線は渋滞を始め、左右どちらの車線も思う様に走る事が出来ない。

お陰で尾行には楽だったが、違う苛立ちが募った。

駅までは後一キロ程の距離だ。

ー駅でタクシーを降り、電車に乗り換える事も考えなければな…。

佐々木は思った。

李の様に、人の気や気配を読める人間の尾行は想像以上に困難だ。

幾ら素振りは隠しても、尾行である限り当然マル対（被尾行者）の事を意識する事になる。

普通の人間なら問題無いのだが、李であればその意識すら確かな気配として察知する可能性が高い。

それが狭い電車の内であれば尚更だ。

佐々木は思案を巡らせた。

その時、不破の携帯から低いバイブの振動音が響いた。

いかなる状況にも対応する為、携帯は常にマナーモードに設定してある。

不破は、すかさずスーツの胸ポケットから携帯を取り出し、表示された発信者を確認した。

「杉本さんからです」

不破は、佐々木に相手の名前を告げ電話に出ると、佐々木も会話が出来るようスピーカーフォンにセットした。

「はい、不破です。スピーカーにしたので主任にも聞こえます」

不破は杉本に伝えた。

「杉本、どうした?」

佐々木はハンドルを握りながら、不破が手に持った携帯に目を配りながら言った。

『主任、先程から李老師が何処かへ連絡を入れている様です!』

お互いにスピーカーフォンにしてある為か、杉本の声が少し怒鳴り気味になっている。

佐々木と不破は互いに顔を見合わせた。

「誰と連絡を取っているのでしょう……?」

不破が聞いた。

「そんな事分かる訳ないだろう。だがやはり老師は何か隠しておられる様だ……」

佐々木は、思い詰めた様に呟いた。

『主任、このままでは駅に着いてしまいます。もしも老師が電車に乗り換える事になれば……』

どうやら杉本も同じ事を考えていた様だ。

「俺も今それを考えていた」

『幾ら尾行のプロの不破でも、老師相手に電車での尾行はキツイで

すよ……』

それを聞いた不破は肩を竦めた。

「それに道がこの状態では、俺達が車で電車を追うにも無理があるから不破へのサポートにも影響が出るしな……。とにかくだ、もしも老師が電車に乗り換えた場合、杉本も車を放棄して不破と合流を……」

その時、携帯のスピーカーから杉本の怒鳴る声が佐々木の言葉を遮った。

『ちょっと待って下さい！　主任、老師が電話を切った様です……。今タクシーが右にウインカーを出しました』

「右折……？　駅に向かうのではないのか……。分かった！　引き続き注意してくれ」

そう言うと、佐々木は電話を切るよう不破に指示した。

「不破、その交差点を右折すれば何処へ行く？」

佐々木が尋ねる。

不破は、急いで車載の純正ナビを操作した。

「特に何もありません。この道沿いや少し裏の辺りはオフィス街の筈ですが、それ以上行けば住宅街に入って行くだけです」

不破がナビに表示された地図を確認しながら答えた。

「そうか……」

佐々木は、そう呟いて目を細めた。

車内を沈黙が満たした。

エンジンの静寂性が高い分、音楽も掛けていない為ウインカーの規則的な音が妙に車内に響く。

信号が黄色から矢印に変わり、右折車線の車が順に右折を始めた。

李の乗ったタクシーが右折し、続いて杉本のマークX、そして佐々木も後に続いた。

その時、出し抜けに甲高い電子音が鳴り響いた。

今度は佐々木の携帯電話だ。

佐々木の携帯は、現在不破達のようにマナーモードにしてある訳ではない。

佐々木は、スーツのポケットから携帯電話を取り出し発信者を確認した。

サブディスプレイには『本部』の文字がある。

佐々木は、交通違反を承知でおもむろに電話に出た。

運転中の携帯電話使用は無論交通違反だが、幾ら部下とは言え『

C・V・U』の人間に、『内調』本部からの連絡をスピーカーフォンで聞かせる訳には行かなかったのだ。

「私だ……」

佐々木は憮然として応えた。

『主任、水野です。今何処にお出でですか?」

携帯から、神経質そうな男の声が尋ねた。

電話の相手は、副主任の水野であった。

「今外せない所用で運転中だが、どうした?」

『また単独行動ですな、困ったモノです』

水野は言葉の上では非難している様にも取れるが、その口ぶりには温かいものがあった。

それは佐々木への信頼の厚さでもあり、また佐々木の人柄に因るものも大きかった。

「スマン、スマン。だが今日は遅れると報告してあった筈だぞ!」

佐々木は言い訳にもならぬ釈明をした。

不破は、横で素知らぬふりで杉本の車を眺めている。

「で、どうした? 何かあったのか?」

気を取り直して佐々木が聞いた。

『はい。今所轄から連絡があり、どうやら最近行方不明者が多発している地域があるとの事なのです！』

「何だと！　それはいつ頃からだ！」

思わず佐々木は大声を出した。

不破が驚いて“びくん”と身体を震わす。

『この三日程の間です。あまり日にちも経っていない為、家族からの通報が今頃になって上がって来た様です』

「で、人数は？」

『届けが出ているだけで九名です』

「九人だと！　それで場所は何処だ？」

『はい。行方不明となっている何人かの住所から、おおよその場所が特定出来ました。先日事件のあった場所から北へ一・五キロ程行った住宅地の辺りです。その辺りは現在シャッターの下りた商店や今では廃墟となったビル、それに閉鎖された工場などが多数残っており、飯沼彰二の隠れ場所としては適しているかと思われます』

「確かにそうだが、その辺りは既に捜査官が調査済みの筈だろう？何故網に引っ掛からなかった？」

『確かにあの辺りは最初に捜査した場所ですが、恐らく奴は我々が聞き込みや捜査をしていた時はどこかに隠れ、わざと目立つ行動を控えていたのではないでしょうか。それに我々の割ける人数には限りがあります。所轄との連携も満足に行かない現状では、見落とした可能性も十分に考えられます……』

「そうだな……」

佐々木は溜め息混じりに呟いた。

実際、『内調』も『C・V・U』も事後処理的な性格が強い組織である。

ヴァンパイアの存在を世間に秘匿している以上、どうしても捜査には限界があり、他の部署や省庁との連携が困難な事からもそれは厳然たる事実であった。

だからこそヴァンパイア側からの情報提供が必要であり、その為に協定が設けられているのだ。

佐々木は、その事に常に忸怩たる思いがあった。

「分かった。直ちに『C・V・U』の現場捜査官を向かわせろ。実働部隊も三個分隊出動させるんだ！　現時点で確認出来ているだけで行方不明者が九人もいる以上、実際ゾンビが何体いるか分からん。実働部隊には完全装備を義務付けるんだ。良いな！！」

佐々木は、興奮気味に大声で怒鳴った。

『主任はどうされますか？』

水野が聞いた。

「偶然だが、俺は今その場所から近い場所に居る。部隊が到着したら、合流して俺が直接指示を出すから、君達は情報を集めサポートに当たってくれ！」

『相変わらず鼻が効きますな。了解しました。捜査班と実働部隊には、現場近くにある『聖華女子高校』から、三百メートル程北に行った『アラジン』と言う現在は潰れたパチンコ屋の駐車場に待機するよう指示します。主任もそちらへ向かって下さい』

「分かった。頼んだぞ」

佐々木は、そう言って電話を切った。

「飯沼彰二が見付かったのですか？」

不破が聞いた。

耳に届く佐々木達の会話から、ただならぬ状況である事は明らかだった。

「うむ、まだ見付かった訳ではないが、所轄からの情報でおおよその場所が特定された。今から俺達も現場捜査班と合流する」

「では老師の尾行はどうするのですか？」

「仕方ない。老師の尾行は杉本に一人に任せる。俺とお前は、合流する捜査官と共に飯沼彰二を追う」

佐々木がそう話した時、再び不破の携帯に杉本からの着信が入った。

不破は、先程と同じ様にスピーカーフォンにセットした。

「もしもし……」

不破が、手に持った携帯に話し掛ける。

『もしもし、今市ヶ谷の『C・V・U』本部から連絡が入りました。私と不破は、今から皆と合流し、主任の指揮の下、飯沼彰二の捜索に当たれとの事ですが……』

「今、俺にも本部の水野から連絡があった。そこで俺と不破は捜査班と合流して飯沼彰二の捜索に当たる。お前はこのまま老師を尾行してくれ！」

『分かりました……。ですが課長には何と報告すれば……？』

「高田には俺から言っておく」

高田とは『C・V・U』捜査課の課長の事である。

課長とは言え、『C・V・U』を統括する『内調』の主任である佐々木にとっては、言わば高田は支店の課長であり、本店のナンバー2の佐々木から見れば格下の存在だ。

『分かりました。ではお願いします。主任、どうかお気を付け下さい。不破、しっかりやるんだぞ！』

杉本が言った。

「私は大丈夫ですが、杉本さんこそ老師に見付かったり見失うようなヘマはしないで下さいよ！」

『馬鹿！　お前じゃあるまいし。では主任、飯沼彰二の方は宜しくお願いします』

そう言うと、杉本は電話を切った。

ー一今老師が向かわれている方角には、飯沼彰二が潜伏していると思われる場所がある。

ー一果たしてこれは偶然なのか？　それとも……。

佐々木の脳裏には、様々な疑問が渦巻いていた。

しかし現実に李を乗せたタクシーは、これから佐々木達が向かう現場に刻々と近付いていた。

ー一今夜は長くなりそうだな……。

佐々木はハンドルを握る手に力を込めた。

5

5

ーーったく、勢い余って飛び出しては来たのは良いものの、いったいどうすりゃ良いんだ？

俺は、薄暗くなった裏通りをさ迷っていた。

陽子から、聖華女子高校の周辺で行方不明になってる奴らがいると聞いて、ショウの奴をぶっ飛ばしたい一心でバイクを飛ばしては来たものの、良く考えてみりゃあどうやって捜せば良いんだ？

学校の周辺たって、どこまでが周辺かなんて括りがある訳じゃねえし、実際本当に奴がこの辺りに居るって保証がある訳でもねえ。

俺は途方に暮れていた。

だが、せっかくここまで来て諦めて帰るのもバカらしい。

俺は、ゆっくりとアクセルを開け、左右の建物を物色しながら走った。

通行人共が、俺に不審な眼差しを向ける。

建物だけじゃなく、通行人にも慎重に目を配ったが、ショウと思しき奴には出会わなかった。

既に陽子の学校からはかなり離れてしまっている。

俺は、バイクを道の脇に停車させた。

ジーンズからクシャクシャになったタバコとライターを取り出すと、一本口に咥え火を点けた。

深く煙を吸い込みゆっくりと吐き出す。

ーーもう一度学校へ戻って、違う道を流してみるか……。

俺は、やれやれと言った感じで空を仰いだ。

空には珍しく星や月が輝いている。

俺は、特に意識する事も無く丸く輝く月や星を見入った。

こうして俺は、夜空を見ながら一本吸い終えると、再びバイクを発進させた。

手近な道を左折し、今来た道とは別のルートで学校へと引き返す。

“ドクン……”

ーーうん？

“ドクン……”

ーー何だ？

“ドクン！”

ーーまただ。

何故か心臓の鼓動を強く感じる。

この感じにはどこか薄っすらと記憶がある。

遠い記憶では無い。

むしろ最近の記憶だ。

“ドクンドクン……”

ーーそうだ！あの夜村田と殺り合った時だ。

ーー晶子が村田に殺され、俺がもう駄目かと思った時だ。

だがあの夜感じた、禍々しくも凶暴な昂揚感とは微妙に違う。

実際に昂揚感は高まっているが、それとは別に五感が開いて行く様な感覚があった。

視覚・嗅覚・聴覚・触覚・味覚……。

この中で味覚だけはあまり実感が無いが、その他の感覚が徐々に研ぎ澄まされて行くのを感じる。

後方に流れ去る風景や、先に見える道路や町並みが次第に澄んで行く様だ。

明度そのものが増している様に思えた。

先程まで感じなかった様々な種類の匂いが、今では個々の識別が可能な程に感じる。

俺は、今まで感じなかった臭気に激しい嘔吐感を覚え噎せた。

聴覚も鋭さを増し、バイクのエンジン音が妙に煩くて仕方ない。

まるで、直に耳をエンジンに当てているみたいだ。

だがそれに混じって、遠くの車の音や通り過ぎる住宅の生活音までが聞こえて来るように感じた。

音と臭いの洪水に、頭が狂いそうであった。

音や振動が頭の中が鳴り響き、それに伴い激しい頭痛が襲ってくる。

更には、ハンドルの質感や足の裏のフットペダルの感触、流れる空気の触感までがリアルに感じられた。

俺は、狂って叫びそうになった。

しかしそれら五感が増しどんどん気が狂いそうになるに連れ、腹の底から禍々しくも凶暴な感情が徐々に迫り上がってくる。

ーーー駄目だ。

ーーこれでは身も心もヴァンパイアになってしまう。

俺は、ある種の恐怖に捕われ身震いした。

その間にも、感覚はどんどん研ぎ澄まされて行く。

細い十字路を横切ろうとした瞬間、微かではあるが異臭を感じた

俺は思わずバイクを停めた。

覚えのある匂い。

ーー血だ！

ーー血の匂いだ！

俺の心臓が“ドキリ”と鳴った。

ーーいや、血の匂いだけではない。

ーーもっと別の…嫌な臭いも混ざっている。

ーー死臭、そして肉が腐る腐敗臭だ。

俺の嘔吐反応は、更に激しさを増した。

俺は、涙目で込み上げた物を必死で飲み下した。

目が眩みそうな感覚を堪え、俺は異臭のする方角へとゆっくりバイクを走らせた。

横切ろうとした細い道を左折して百メートル程進むと、右手に廃墟となったビルが見えて来た。

三階建てのビルの前には、舗装された少し広めの駐車場が広がっている。

異臭はそのビルから漂っていた。

ビルの出入口の前には、如何にも如何がわしい黒塗りのベンツが二台、エンジンを掛けたまま停まっている。

しかも良く見ると、何人か人が倒れていた。

俺は心がザワ付くのを感じながら、慎重に駐車場へとバイクを乗り入れる。

その時、ビルの中から凄まじくも禍々しい妖気と殺気を感じた。

俺の中で抑えていた凶暴なモノが、それに反応し鎌首をもたげる。

それと同時に、あれ程強烈だった頭痛や吐き気が、目覚めつつある凶暴なモノに因って追いやられる様に消失して行く。

俺はエンジンを切りバイクを降りると、空かさずビルの中へと躍り込んだ。

何故か妖気は二つ感じる。

この先に、とんでもない化け物が二匹居る事は間違いなかった。

階段を駆け上がると更に異臭が増した。

激しい怒気と、金属同士が打ち合う音も聞こえて来る。

誰かが闘っているのだ。

恐らく、その内の一人はショウだろう。

もう一人は分からない……。

ただ爺じゃない事だけは確かだ。

「ショウー！」

俺は抑え切れない凶暴なモノを解き放ち、その部屋へと飛び込んで行った。

第六章１：修羅

第六章
『修羅』
1

ハザードランプを点滅させ、李を乗せたタクシーが停まった。

場所は聖華女子高校の正門前である。

車内灯が点り、数瞬の間があった後、李は急ぎタクシーを降りた。

李はタクシーが行くのを見送ると、用心深く辺りをキョロキョロと見回した。

そして辺りに人気が無い事を確認すると、正門脇の塀を飛び越え、学校の敷地内へと入って行った。

どうやら尾行を心配すると言うより、これから学校へ侵入するのに際して、通りに人気が無い事を確認した様だ。

李の尾行を続けていた杉本は、タクシーがハザードを出した時点で数十メートル手前に停車し、ヘッドライトを消して李の様子を伺っていた。

佐々木達の車は、駅前通りから右折してすぐの道を更に右折し、杉本とは違う道で捜査班と合流すべく、『アラジン』と言う潰れたパチンコ屋へと向かっている筈だ。

李の目的地がまさか聖華女子高校だとは思わなかったが、今にな

れば佐々木が用心の為別ルートにしたのは正解であった。

『アラジン』は、この先へ三百メートル程行った場所にあり、そのまま前後で追走していればニアミスしていたかも知れない。

李が学校の敷地内に入った事を視認した杉本は、素早くエンジンを切り静かに車を降りると、李の様子を探るべく学校へと近付いた。

正門に近付き、身体を塀の陰に隠しながら、門の隙間から中の様子を慎重に伺った。

高い武術の修練を積み、数多くの修羅場（実戦）をくぐり抜けて来た者は、不測の事態や実戦に備える為に緊張状態を常としている者が多く、周囲の気配や敵意に敏感な者が多い。

実際杉本も、その秀でた察知能力のお陰で今日まで生き延びて来れたと言っても過言ではない。

しかも相手が、伝説の“武神”と名高い仙道師李周礼ともなれば、迂闊な行動に出る訳にも行かなかった。

学校の敷地内は、まだグランドの照明が煌々と燈り、何人かの女子高生が部活動の後片付けに追われる姿が見て取れる。

他にも制服に着替えを済ませ下校する者や、帰宅する教師の姿もあった。

ー一老師の姿が見えない！

焦りを感じた杉本は、教師や生徒達に不審がられぬ様に注意して

学校の裏手へと廻り込むと、校舎の陰にそっと身を潜めた。

辺りを注意深く伺いながらポケットに仕舞った携帯を取り出すと、不破の携帯へと電話を入れた。

数度目のコールの後、不破の携帯に直接佐々木が出た。

『杉本か？　老師はどうした？　今どの辺りを走っている？』

佐々木は、矢継ぎ早に質問を浴びせた。

「主任、老師は今しがたタクシーを降りて聖華女子高校へと入って行きました」

『聖華女子だと？　ここから目と鼻の先じゃないか！』

「はい、早い時点で主任と別れて正解でした」

大声で話す佐々木とは違い、杉本は極力小声で話した。

『まさか老師の目的地が聖華女子高校だったとは……。それで老師は？』

「老師は塀を乗り越え学校の敷地内に入ったのですが、この時間はまだ生徒や教師達が残っていて……」

『見失ったのか？』

「申し訳ありません。ただ生徒や教師に見付かって騒ぎになっても困りますし、あまり接近して老師に気付かれる訳にも行かないので

……」

杉本は、電話越しに頭を下げた。

『女子高では自由に動き回る事が出来ないのも無理はないな。しかも老師の能力を考えれば迂闊に近付く訳にも行かぬ……か……』

佐々木の声が、思案気に細くなった。

「私はこれから老師を捜します。何らかの理由で老師がここに来られた事は確かでしょうが、こんな人気のある校内に老師の本当の目的があるとは思えません」

『確かにそうかも知れんな。それに飯沼彰二が潜伏している可能性の高いこの地域に、わざわざこのタイミングで来られたのにも引っ掛かる。当初の目的とは違ってかなり複雑な状況になって来たが、くれぐれも慎重に行動してくれ』

「分かりました。引き続き老師の捜索と尾行を続けます」

そう言って杉本は電話を切った。

電話している最中も周囲への注意は怠らなかったが、更に辺りを慎重に伺った。

ー老師は何処に居るのだろう。

杉本は、再び敷地内を探索すべく後ろを振り返った。

“　！”

その瞬間杉本の身体が“ビクン”と跳ねた。

「ろ！……」

杉本の声は、言葉にならなかった。

口を開き、驚愕に目を見開いたままその場に崩れ落ちた。

杉本は意識を失っていた。

「すまぬのう……」

失神した杉本の頭上で、李が申し訳なさそうにぼそりと呟いた。

杉本の尾行に気付いていた李は、敷地内に入ると同時に自らの気配を絶ち、姿を隠して杉本を巻くと、今度は逆に杉本の後を尾けたのである。

そして佐々木との電話が終わるのを待ち、姿を見せるのと同時に人差し指一本で杉本を失神させたのだ。

恐るべき技であった。

「どうやら儂の事は完璧に疑われておる様じゃのう。どうして佐々木君もやるものじゃて……」

李は、愉しそうに目を細めた。

「じゃがそうなれば、一刻も早くあの阿呆を見付けねばならぬな…

…」

次の瞬間にも真顔に戻してそう呟くと、李は甚平の懐から一枚の黄色い紙を取り出した。

先日、村田の行方を捜索するのに使用した符術に用いる紙である。

今取り出した紙にも、前回と同様に朱墨で呪が書き込まれていた。

ただし今取り出した紙には、朱墨で書かれた呪の他にも、赤黒い染みの様な汚れが付着している。

血であった。

今朝恭也と闘った後、何枚かの紙に恭也の血を染ませておいたのである。

李は、今後もしもの時が来た場合、すぐにでも恭也の居所が探れるよう準備をしておいたのだ。

李は、倒れている杉本の足元で、恭也の血を染み込ませた呪符を手に低く呪を唱えた。

すると村田の時と同様に、呪符は小さな烏へと姿を変え、李が手を上げると同時にバサリと翼を広げ空高く舞い上がった。

李は、急ぎ式神である烏の飛んで行く方角へと走り始めた。

烏は、何日かぶりに雲の切れた夜空を、宿主である恭也の元へと飛んで行った。

2

2

「ぬおぉぉーっ！」

「チェストーッ！」

二つの激しい雄叫びが室内に響き渡った。

“ギィィィン！”

激しい火花を散らし、鋭い金属音が鳴り響く。

十兵衛と獣吾だ。

十兵衛と獣吾は、切り結ぶ形で互いの体を入れ替えていた。

今は、十兵衛が壊れた扉を背に獣吾と対峙している。

「くふぅ……」

「くむぅ……」

互いに深く息を吐き出した。

十兵衛は、再び『車』に構えた。

身体の左側面を前に出し、両の手で“典太”を脇に構え切っ先を獣吾に向けている。

獣吾も、膝を曲げ腰を落とした態勢で、『降魔の斧』を肩に担ぎ十兵衛を睨め付けていた。

十兵衛は、前後一直線に揃えた足の左足を“じりり”と前に摺り出した。

獣吾も、左右に開いた左側の足を“じりり”と前へ躙り出す。

二人の間に緊張の糸が“ピン”と張り詰めた。

これまでのところ、二人の実力は全くの互角であった。

こと肉体を使った戦闘において、獣人はヴァンパイアを遥かに凌ぐ能力を有している。

だが十兵衛も並のヴァンパイアではない。

闘いにおいて、パワーやスピードの差は勝敗を分ける絶対条件には違いないが、技や技量も勝敗を分ける重要な要素の一つだ。

パワーやスピードは獣吾が優り、技や技量は十兵衛が優った。

柳生新陰流を極め、人間であった頃から修業に明け暮れて来た十兵衛の技と技量、そして幾度となく潜り抜けて来た修羅場の数は、幾らパワーとスピードに優る獣吾が相手だったとしても五分以上に渡り合えるだけの実力がある。

またそれとは別に、二人がこの闘いに全神経を集中し切れていなかった事が、結果二人の太刀筋を鈍らせ、この闘いの決着を遅らせ

る要因にもなっていた。

その要因とは、今まさに刻々とこの部屋に迫り来る禍々しい程の気だ。

最早妖気とも殺気とも知れぬ、凄まじい量の気であった。

その禍々しい気の持ち主が、間違いなく今この部屋に近付いているのだ。

十兵衛は、獣吾がこの禍々しい気の持ち主に気を取られ、隙が生じるのを待っているのだが、獣吾もまた、同様に十兵衛の隙を伺っていた。

その為互いに仕掛ける事が出来ないのである。

獣吾は、この尋常でない気の持ち主が自分の味方でない事を十分に承知していた。

常に一人で行動する獣吾には、味方と呼べる存在が一人も居ない。

一方十兵衛も、この気の持ち主が己の味方ではない事は分かっていた。

十兵衛と同行したファミリア達は全て人間であり、幾ら武術に秀でた優秀な部下であっても、この様なおどろおどろしい気を発する者など一人も居ない。

また、この様な気を放つ者が人間である筈がなかった。

“ドドド…”

足音がどんどん近付いて来る。

十兵衛は自分の不利を感じていた。

この気の持ち主が味方でない以上、敵である可能性が高い。

目の前で対峙する、獣吾の仲間かも知れなかった。

むしろそう考える事の方が自然だ。

ならば部屋の廊下側の扉を背にする事は、十兵衛にとって圧倒的に不利であった。

前後からの挟撃に合う可能性が高いからだ。

十兵衛は『車』に構えた後ろ側の右足を、右横へ“ズリッ”と摺り足でずらした。

獣吾は、十兵衛を見据えたまま動かない。

“ズリッ”

更にもう一歩十兵衛は右足をずらした。

“ドドドド……！”

けたたましい足音を響かせながら、禍々しい気の持ち主が、もうすぐそこまで近付いている。

「吩！」

意を決した十兵衛は、鋭い気合いと共に床を強く蹴った。

それに反応した獣吾も、斧を頭上へ振り被る！

彼我の間合いを一気に詰めると、勢いをそのままに“典太”の切っ先を獣吾の心臓目掛け突き立てた。

電撃の様な踏み込みは、最早“神速”の域に達していた。

だが十兵衛の動きを読んでいた獣吾は、身体を横に捻り躱した。

「ぬおっ！」

だが想像以上に十兵衛の踏み込みや突きが速かった分、完全に躱し切る事が出来ず再び胸を横一文字に切り裂かれた。

獣吾は痛みを堪え、振り上げた斧を十兵衛の頭上へ一気に振り下ろした。

「ショウー！」

その瞬間、背後の壊れた扉から大きな怒声が響いた。

“！”

その声に、十兵衛は思わず気を取られてしまった。

その零コンマ何秒の気の揺らぎが、獣吾に決定的な隙を与えてしまったのだ。

「チイィィィ！」

十兵衛は、咄嗟に“典太”を頭上で横に構えると、振り下ろされる獣吾の斧を受けに行った。

幾ら獣吾の筋力やスピードが凄まじくても、武器が斧である以上振り下ろす速度は刀より落ちる。

相手からの反撃が読めている上に、本来の十兵衛のスピードであれば決して躱せぬ速度ではなかった。

しかし背後からの怒声に気を取られた為、躱すだけの余裕が生まれなかったのだ。

“バキッ！”

鈍い金属音と火花を散らし、十兵衛の“典太”は真ん中から真っ二つに叩き折られた。

それにより頭部への攻撃は逃れたものの、十兵衛の胸は縦に大きく切り裂かれた！

「ぐあーっ！」

十兵衛は、胸を切り裂かれた衝撃と激痛に顔を歪め、後ろに大きくのけ反った。

ー勝機！

獣吾は後退する十兵衛に更に追い撃ちを掛けるべく“ずん”と前へ踏み込んだ。

十兵衛は、のけ反った態勢のまま後ろへ下がると、折れた“典太”を獣吾の顔目掛けて投げ付けた。

だが獣吾は、首を振ってそれを躱した。

再び『降魔の斧』を振り上げて、更に大きく踏み込んで来る！

しかし、投げ付けた刀を躱した際に生じた零コンマ何秒の隙を、今度は十兵衛が見逃さなかった。

十兵衛は、ヴァンパイアのパワーを総動員して背中から後ろへ跳ぶと、背後の壁を後ろ向きのまま体当たりで突き破った。

凄まじい破砕音と共に後ろにの壁が砕け、十兵衛は背中から廊下へと転がり出た。

夥しい量の埃と粉塵が宙に舞い上がる。

獣吾は踏み込んだ勢いを殺さず、壁に空いた穴へとそのまま突っ込んだ！

しかし、獣吾の巨体には十兵衛が空けた穴は小さ過ぎた。

“ドォーン”

再び激しい破砕音と共に穴の周りの壁が吹き飛び、更に夥しい量の埃と粉塵が舞い上がった。

二人の視界が遮られる。

廊下に出た瞬間、十兵衛は後ろへと転がりながらも、空いた両の手を後ろに廻し、腰のベルトから先程ショウに使った兜割りと飛苦無を数本抜き取っていた。

そして埃や粉塵により視界が遮られた瞬間を狙って、先程自分が空けた穴へと飛苦無を投げ放った。

獣吾の背中に、“ぞくり”と冷たいモノが走る。

獣吾は、思わず足を止めて『降魔の斧』を縦に持ち替えると、咄嗟に持ち上げた斧刃で顔を隠し、柄を握った腕で胸の辺りをガードした。

“ギィン！”

“ギィン！”

十兵衛の投げた三本の内、二本の飛苦無が左右の斧刃に当たって乾いた金属音を立てる！

残りの一本は、獣吾の左肘に深々と突き刺さった。

獣吾の顔が、一瞬苦痛に歪む。

十兵衛は、この隙に獣吾と彼我の間合いを取り、廊下の窓際へと

移動していた。

青ざめた顔で、肩で大きく息をしている。

先程胸に受けた傷に因るダメージが、思ったより大きいのだ。

だが、十兵衛であればこそ致命傷に至らずに済んだのである。

十兵衛は、“典太”を折られた際に上半身を後ろに反らす事で、間一髪致命傷になるのを避けたのだ。

幾らヴァンパイアだとは言え、驚異的な反射神経の持ち主と言えた。

十兵衛と獣吾は、彼我の間合いを保ちながら再び向き合っていた。

十兵衛は、苦痛に顔を歪めながら何とか笑みを作ると、廊下の腰高の窓に手を掛けた。

「獣吾とやら、“典太”の礼はいずれする。また会おうぞ！」

十兵衛はそう言い残すと、廊下の床を強く蹴り体当たりで窓を突き破った。

“ガシャーン”と派手な音を立て十兵衛は外へ飛び出すと、既に暗くなった宙空へと身を躍らせた。

獣吾は、あえて後を追わなかった。

「フン、やるじゃねえか！」

獣吾は、ぶ厚い唇に太い笑みを浮かべた。

そして、右の太腿に深々と突き刺さった兜割りの柄を握り、力任せに“ぐいっ”と一気に引き抜いた。

一瞬獣吾の顔が苦痛に歪む。

何と、十兵衛は三本の飛苦無を投げると同時に、もう一方の手で兜割りも投げていたのである。

夥しい埃と粉塵、そして三本の飛苦無すらフェイントに使い、見事兜割りで獣吾の動きを封じたのだ。

何と言う闘い、何と言う化け物達であろうか。

恭也は、この二匹の化け物の闘いを、ただ茫然と眺めていた。

この部屋に飛び込んだ時の荒れ狂う様な気も、今では完全に消え失せている。

「ところでオメエ、いったい何者だ?」

獣吾が、後ろを振り返り尋ねた。

思わず声を掛けられ、ふと恭也は我に返った。

「あの妖気、オメエ人間じゃねえだろう?」

獣吾は更に訊ねた。

「あ？　何だとテメエ！」

恭也が顔を顰めた。

「十兵衛の仲間かとも思ったが、どうやら違う様だな」

「十兵衛……？　ああ今の奴か。知らねえなぁ」

恭也は、惚けた様に頭を振った。

「じゃあオメエはアイツらの仲間か？」

そう言って、獣吾は顎をしゃくって室内を指した。

「何だと……？」

獣吾に言われ、恭也は改めて室内を見渡した。

“　！”

恭也は驚愕した。

既に真っ暗になった室内には、十数体のゾンビ達が動かぬ屍となり横たわっている。

そのどれもが頭や胴を鋭い刃物で断ち割られ、内臓や脳をどっぷりと床にぶち撒けていた。

このビルの外にまで漂う腐臭や異臭の原因は、正しくこれであっ

た。

“ゲエェェェ”

思わず恭也は吐いた。

この数日、まともに何も食べていない為に胃液しか出ない。

部屋の中の腐臭に混じり、饐えた臭いが立ち込めた。

ひとしきり吐いて涙目となった恭也の目に、見覚えのある顔と服装が飛び込んで来た。

それは横たわるゾンビ達の屍の中にあった。

「シゲ？　シゲー！」

恭也は、思わず大声で叫んだ。

恭也はシゲの遺体に駆け寄ると、その身体を両腕で抱き上げた。

手や服に赤黒く粘り気のある血がべったりと付着する。

しかし恭也はそんな事を気にも留めず、シゲの身体を強く揺すった。

「シゲ……シゲよ……。すまねえ、すまねえ……」

恭也は消え入りそうな声でシゲの名を呼び、懺悔の言葉を繰り返した。

無論シゲは何も答えない。

シゲの遺体を抱いたまま、何気なくもう一度室内を見渡した恭也は、部屋の一番奥の壁を見てそのまま固まった。

「ま、まさか……」

恭也の視線の先には、脳天から下顎までを一刀の元に断ち割られ、壁にもたれたまま死んでいるショウの姿があった。

もう一度目を凝らして見たが、黒いシャツに黒い皮のパンツ、間違いなくショウであった。

「テメエか……」

シゲの遺体を抱き抱え、俯いたまま恭也は“ぼそり”と呟いた。

だがその焦点は、シゲを捉えてはいなかった。

ただ床を見ている。

「あ？　誰に言ってんだ？」

先程来黙って恭也の行動を見ていた獣吾が、不快そうに声を上げた。

「ショウは……、ショウの奴だけは、俺がぶっ殺す筈だったんだ……。シゲは俺の…それに鉄二の大切なツレだった……。そのシゲを殺し……晶子や村……」

恭也は下を向いた姿勢のまま、“ぶつぶつ”と声にならない声で低く怨嗟を漏らした。

「おい、オメエ誰に言ってんだって聞いてるだろうが！　だいたいシゲだのショウだの訳が分かんねえぜ！」

「……ンパイアになって死んじまったんだぞ……。その原因を作ったショウを……、ショウだけは俺の手でカタを……」

獣吾の言葉を無視して、恭也の怨嗟はまだ続いていた。

その時、今まで消失していた筈のあの禍々しい殺気が、再び恭也の全身から溢れ出した。

「ん？」

獣吾の眉がぴくりと上がった。

「お、オメエ……」

思わず獣吾は声を掛けた。

だがその間にも、恭也の気はどんどん膨れ上がって行く。

割れたガラスや窓枠、床に散乱した扉や砕かれた壁の瓦礫などが、“ガタガタ”と音を立て始めた。

ついには、窓を塞ぐように積み上げられた机や棚までが、“ガタゴト”と震え出した。

“ゴゴゴゴゴゴ……”

建物全体が震えている。

「なっ、何だコイツは……？」

獣吾は、あまりの驚きに目を丸くした。

この様な凄まじい気に出会ったのは初めてだ。

「テメェが……、テメエがショウを殺ったのかー！」

恭也の気が爆発した！

最早これは暴風などではない。

まさしく爆風だ！

獣吾は、思わず両腕で顔を庇った。

紅蓮の炎を纏った爆風の様な殺気から、己の身を守ったのである。

実際髪の毛が“チリチリ”と音を立てた気がした。

恭也は、シゲの遺体を床にそっと置き、凄まじい気を全身に纏いながら、ゆっくりと立ち上がった。

恭也が獣吾を“ギロリ”と睨む。

普通の人間であれば、見ただけで恐怖に竦み、気を失う程の憎悪に満ちた目であった。

「オメエ、危ねえ奴だな……」

獣吾は“ぼそり”と呟き、腰を低く落とした。

「ガアァァァー！」

獣の咆哮を上げ、恭也は獣吾に躍り掛かった！

3

3

「不破、あれからお前の方にも、杉本からの連絡は無いか？」

佐々木は苛立ちを隠さず尋ねた。

『はい、あれからまだ何の連絡も入っていません』

耳に入れたイヤホンのスピーカーから、不破の声が響いた。

今佐々木達は、『C・V・U』の現場捜査官を手分けして、飯沼彰二の潜伏場所を探していた。

もうすっかり日が暮れて、辺りは完全に夜になっている。

一刻も早く探し出さねば、飯沼彰二が今宵の犠牲者を求めて行動を始めてしまう。

何としてでも今夜中にケリを着けなければならなかった。

だがそれとは別に、李を尾行中の杉本から連絡が途絶えている事が気掛かりだった。

無論、尾行中にそうそう電話など掛けられる筈もない。

そんな事は佐々木も重々承知している。

だが、李の力量を知る佐々木は、何か悪い予感に苛まれていた。

最後の電話の時、杉本は李を見失ったと言っていた。

やはり李に感づかれたのではないか……。

佐々木の胸を不安が吹き抜けた。

「で、そちらの状況はどうだ？」

佐々木は気を取り直して訊ねた。

『いえ、既に三ヶ所捜索しましたが、まだそれらしい場所は発見出来ていません。もう辺りは暗くなってしまいましたし、奴が狩りに出てしまえば捜しようがありませんよ』

不破が不安気な声を上げる。

「もしも奴が既に狩りに出たとすれば、捜査範囲を広げて駅周辺から捜査をするだけの事だ。だがどちらにせよ、奴の潜伏場所の特定だけは急がねばならん！　他の捜査員にもハッパを掛けるんだ、良いな！」

佐々木は、苛立ちを露に怒鳴った。

『分かりました。捜索を続けます。では！』

「頼む……」

そう言って佐々木は、携帯無線の通話スイッチを切った。

『C・V・U』の現場捜査官と合流した佐々木達は、その場で捜査員の捜査担当エリアを割り振り、飯沼彰二の潜伏場所を総力を挙げて捜査している最中なのだ。

指揮官である筈の佐々木も不破達と別れ、自ら町中を駆け回っていた。

その時、佐々木のスーツの内ポケットから、規則的な振動が伝わって来た。

携帯の着信バイブである。

先程までは通常設定にしてあったのだが、今は捜査中なので音を消してバイブのみの設定にしてあるのだ。

佐々木はポケットから携帯を取り出すと、サブディスプレイで相手の名前を確認した。

発信相手は、本部で佐々木の代わりに指揮を執っている副主任の水野からであった。

佐々木は急ぎ電話に出た。

『主任、水野です』

「何か分かったか？」

『たった今警視庁から報告が入りました』

水野はいつもの冷静な口調で言った。

「それで？」

『はい。警視庁からの報告では、上八代町四丁目にある元広告会社で、今は廃墟となっているビルなのですが、そこに黒いベンツが二台エンジンを掛けたままずっと停まっているらしく、しかも現在そこで激しい乱闘騒ぎが起きていると、住民から所轄へ通報があった様です』

「乱闘？　それが何の関係があるんだ？　どうせ何処かの不良かヤクザが喧嘩でもして騒いでるのだろう」

佐々木は訝しむ様に言った。

『いえ、そのビルは失踪事件の現場にも程近いですし、他にも最近近所の住民が不気味な声や物音を聞いたと通報があった様です。更にそこには、連日の様に不良達がたむろしていたらしいのですが、この三日間パッタリと姿を見せなくなったそうです。臭うと思いませんか？』

水野は探る様に言った。

「うむ、確かに臭うな。良し分かった！　今から捜査官を全員そのビルに向かわせる！」

『分かりました。ただ住民からの通報を受けた所轄が、近くの交番の警らに現場の見回りをしに行かせたみたいでして……』

「何だと！」

思わず佐々木は大声を張り上げた。

「すぐその警らを呼び戻すよう伝えろ！　もしそのビルに飯沼彰二が居るなら、その警官の命が危ない！　しかもその黒塗りのベンツも気になる……。もしかしたら奴らが飯沼彰二の始末に来ているのかも知れん」

『ですが、奴らからの報告は、まだ何も届いてはいませんよ』

「そんなのはいつもの事だろうが！　奴らはまた我々を出し抜いて、秘密裏に奴を始末する気かも知れん。そして秘密裏に事を運んでおいて、結局我々には奴らの都合の良い部分だけを事後報告をしてくるだけじゃないか！　とにかくその警らを引き上げさせろ！」

『はい、了解しました。所轄へは至急伝えます。主任達もくれぐれも用心して下さい』

「分かった、ありがとう。ではまた連絡する」

そう言って佐々木は電話を切った。

そして携帯無線の通話スイッチを押すと、

「こちら佐々木だ。捜索中の全捜査官に告げる。今本部から飯沼彰二の潜伏先と思われるビルが見付かったとの連絡が入った。至急捜査官はそのビルに急行しろ！　場所は……」

佐々木は、全員にビルの場所を説明した。

「なお、現場には黒塗りのベンツが二台停まっており、乱闘が起き

ているとの報告もある……。奴らの“処分屋”が来ている可能性も十分考慮して、全員銃の確認を怠るな！　いざとなれば発砲も許可する。全員用心して行け！　一人で先走ろうとせず、現場に着いたら俺が行くのを待て！　良いな。以上！」

佐々木は部下達に厳命した。

そして無意識に腰のベルト位置にある膨らみを確認すると、報告にあった廃ビルへと駆け出した。

4

4

“ハアッ、ハアッ……”

十兵衛は、何とか車へと辿り着いた。

まさしく満身創痍の状態である。

白かった詰襟の上下が紅く血に染まっていた。

獣吾に斬られた胸の傷は想像以上に深く、出血自体は徐々に治まりつつあるが、あまりの失血に既に“渇き”の症状も出始めていた。

十兵衛の震える口元からは、二本の鋭く伸びた犬歯が覗ている。

十兵衛は、車の周りで意識を失い倒れている部下達を他所に、転がり込む様に車へ乗り込むと、後部席の足元に置かれているクーラーボックスへと手を伸ばした。

震える手を捩伏せ、クーラーボックスの止め金を外す。

蓋を開けたそこには、赤黒い血液の入った輸血用のビニールパックが一袋入れられていた。

十兵衛は震える手でその血液パックを取り出すと、点滴の管を取り付ける為に細くなった底の部分を指で引き千切り、パックに直接口を付けてゴクゴクと喉を鳴らして飲んだ。

あっと言う間に血液パックは空になった。

「ふうっ」

十兵衛は、大きく肩で息を吐いた。

次第に手や唇の震えが治まっていく。

十兵衛は、まだ痛む胸を押さえながら車を降りた。

あまりにも出血が多かった為にまだ多少の“渇き”は残っているが、今はそんな事に構っている暇は無かった。

ふらつく足取りで車を降り、ビルの出入口や車の周辺で倒れている部下達の下へと歩み寄る。

足はまだ震えていた。

二階から飛び降り着地した瞬間、胸の裂傷の痛みから着地のバランスを崩し足を痛めたのだ。

夜の眷属の一員となってからこっち、闘いに於いてこれ程の苦戦を強いられた事も、これ程のダメージを受けたのも初めての事であった。

やはり、恐るべきは獣人であった。

しかもあの獣吾と言う男、ただ獣人であると言う以上に恐るべき男である。

十兵衛は、倒れている部下達に声を掛けて回った。

だが時既に遅く、最初六人いた部下の内二人が、既に死亡していた。

生き残った四人の内、二人も意識不明の重体で、放っておけば死亡するのは時間の問題である。

最早十兵衛の血を飲むだけの意識や体力も無く、『屍鬼』に転身させる術も無かった。

残りの二人は、幸い気を失っただけの軽傷で済んだらしく、十兵衛が声を掛けると直ぐさま意識を取り戻した。

二人は、満身創痍な十兵衛の姿に驚き、また仲間の死に無念の臍を噛んだ。

「急げ、全員を車に運び込むんだ！」

十兵衛が、蘇生した二人に声を掛ける。

十兵衛達三人は、協力して四人を二台のベンツに分けて乗せた。

死亡した二人はそれぞれを車のトランクに入れ、残る重体の二人も一台に一人ずつ車の後部席にゆっくりと寝かせた。

その時、蘇生した二人の内の一人が、車のトランクから一丁の銃を取り出した。

Ｍ３スーパー９０のショーティである。

暴徒鎮圧用のライアットガンではなく、アメリカの警察でも採用されている戦闘用のポンプ式ショットガンで、この男が今取り出したのは、狭い室内でも取り回しがしやすい様にストックを外し、バレルを短く切り詰めた物だ。

バレルが短い為に、散弾の初速が上がり威力を増している。

“ガシャッ”

男は怒りに滾る眼差しでビルを見上げると、左手でポンプを操作し初弾を装填した。

「安西、何を考えてる！」

十兵衛が怒鳴った。

「分かりきった事です！　田中や岡本の仇を討つんですよ。奴はまだビルの中に居るのでしょう？」

安西と呼ばれた男が、十兵衛に振り返り声を荒げた。

「馬鹿者！　奴はそんなオモチヤで倒せるような相手ではない！」

十兵衛は、更に声を荒げ怒鳴った。

凄まじい形相で安西を睨んでいる。

安西が“びくん”と震えた。

「し、しかし……」

「駄目だ！　田中と岡本を失って、更にお前まで失う訳にはいかん！　目的の飯沼彰二は俺が処分した。今は加藤と井上を病院へ運ぶ方が先だ！」

十兵衛は、反論を許さぬ強い口調で言った。

「くっそーっ！」

安西は、悔しさを露に銃を地面に叩き付けた。

それを見ていたもう一人の男が、安西の肩にそっと手を置いた。

安西は、握り絞めた拳をブルブルと震わせている。

次の瞬間、ビルの二階から凄まじい気が夜気に溢れ出した。

夜気が恐怖に脅え、震えている。

「むう、コレは……」

「じゅ、十兵衛様！　な、何ですかコレは？」

安西が慌てて聞いた。

これ程の気であれば、普通の人間でさえ悪寒以上の恐怖を感じる筈だ。

安西達のように武術を修行し、幾つもの修羅場を潜り抜けて来た

者であれば尚更である。

この凄まじい気に反応して、ビルや地面さえ鳴動している様に感じた。

「な、何者なのですか奴は？」

安西とは別の、もう一人の男が聞いた。

このビルに到着した時に、十兵衛にドアを開け言葉を交わしていた男だ。

ーーこの気は、あの獣吾とか言う獣人のものではない。

ーーあの男だ！

ーーあの時部屋に飛び込んで来た男の気だ！

ーーしかしあの男、いったい何者なのだ？

ーー飯沼彰二を知っていた様だが……。

ーーならば奴もヴァンパイアで、あの獣人の仲間ではないのか？

十兵衛が思いを巡らせている間に、重体で車の後部席に寝かされている井上の携帯が鳴っていた。

「もしもし、安西だ。井上は今電話に出られない」

井上が意識不明で電話に出る事が出来ない為、井上の代わりに安

西が出た。

電話に出る前に確認したサブディスプレイの発信者表示は、『M』となっていた。

『安西か？　私だ。知らせたい事がある……』

電話の相手は、安西が誰かすぐ分かった様だ。

どうやら安西にとっても知り合いだったらしい。

だがその相手は、自分の周囲を気にしているのか、話す声が妙に小さかった。

「何だ？」

安西が無愛想に尋ねた。

『今そこに『C・V・U』の現場捜査班が向かっている……』

「何？　どうしてここが奴らに分かった？」

安西が大声で怒鳴った。

『住民からの通報で、所轄署を通して警視庁から報告があったのだ』

「くそっ、こんな時に！」

安西は眉に皺を寄せた。

『一刻も早くそこから立ち去るんだ。十兵衛様にそうお伝えしろ！』

「分かった。十兵衛様にはそうお伝えする」

『それで首尾は？』

「飯沼彰二は、十兵衛様が処分された。だが後始末がまだ済んでいない。それに……」

そう言いかけて安西は、禍々しい気の溢れ出るビルの二階を見上げた。

『何だ？　どうかしたのか？』

相手が不安気に聞いた。

「何者かは分からんが、予想外の乱入者があって仲間の二人が殺された。加藤と井上は重体、十兵衛様も大怪我をされた」

『な、何だって！』

電話の相手が大声で叫ぶ。

『……』

その後大声を出したのが気まずかったのか、しばし沈黙があった。

『すまん、あまり大きな声が出せないのだ……。それで十兵衛様は大丈夫なのか？』

「少し“渇き”が出ておられる様だが、輸血パックの血を飲まれたので今は大丈夫だ」

『それで、その乱入者とはいったい誰なんだ？』

「それはまだ分からん。だがまだビルの中に居る事だけは確かだ。その他は何が起こっているのか俺にも分からん！」

安西は、苛立ちを露にした。

『分かった。もう時間が無い。とにかく早くその場を離れるんだ』

「分かった！十兵衛様にはそうお伝えする。後は頼んだぞ！」

そう言って安西は電話を切った。

電話している間にも、ビルの中の妖気はどんどん増していった。

しかもその妖気に反応するかの様に、突然別の気が膨れ上がる。

二つの禍々しい妖気が鬩ぎ合い、どんどん勢いを増している様だ。

「化け物が……」

十兵衛が忌ま忌まし気に低く呟いた。

そして電話を切った安西に視線を向ける。

「今の電話は何だ？」

十兵衛が聞いた。

「御前様が『内調』に放っておられる内通者からの報告で、今こちらに『C・V・U』の捜査官が多数向かっているそうです」

安西が答えた。

「そうか……、それは面倒だな……。分かった！　とにかく急ぎここを離れるぞ」

十兵衛は、二人に向き直り命じた。

その後、もう一度ビルの二階を見上げる。

その目には、滾る様な憤怒の色が満ちていた。

十兵衛は頭を振った。

そして十兵衛達三人は、二台のベンツに別れて乗り込んだ。

後ろに停めてあったメルセデスベンツＳ６５Ｌ・ＡＭＧの運転席には安西と、助手席には十兵衛が座った。

そして先頭メルセデスベンツＥ３５０アバンギャルドには、もう一人の男が運転席に着いた。

二台のベンツは、廃ビルの駐車場から滑る様に走り出した。

助手席で、十兵衛は遠ざかる廃ビルを眺め、無念と屈辱に唇を噛み絞めていた。

伸びた犬歯が下唇を噛み破り血が顎を伝う。

その頃、夜空に輝く満月の下、廃ビルの中では獣人と魔獣の闘いが今まさに始まろうとしていた。

5

5

「ガアァァァー！」

獰猛な猛獣の如く、恭也は獣吾に躍り掛かった！

最早完全に殺意の塊と化している。

恭也は、凄まじい殺気とも妖気とも知れぬ……、『魔気』とでも呼ぶべき禍々しい気を全身に纏い、悪鬼の形相で獣吾に迫った。

以前村田と闘った時や、今朝李と闘った時とは違い、意識そのものはある様だが、凶暴な感情に支配され獣吾を殺す事しか見えていないらしい。

大きく開いた恭也の口には、長く鋭く伸びた犬歯が覗いていた。

獣吾は口元に獰猛な笑みを浮かべ、恭也との闘いを楽しむかの様に、敢えて持っていた『降魔の斧』を捨てた。

「吩！」

恭也が鋭い右のパンチを繰り出す！

まるで空気を切り裂く様なパンチだ。

獣吾は、左腕を持ち上げガードした。

透かさず恭也の左フックが獣吾のボディーを襲う！

しかしこれも獣吾は右肘でガードした。

「ぐっ！」

ガードした獣吾の腕が痺れる。

だが恭也も止まらない。

「ハァァァッ！」

腰を捻り、ムチの様な右廻し蹴りを獣吾の頭部目掛けて放った！

しかし、これも左腕で頭部を庇い防いだ。

廻し蹴りを防いだ部分が、火脹れを起こしそうな蹴りである。

「このぉ！」

獣吾は、恭也が脚を引き戻すスピードに合わせ、今度は自分の左脚で上段の廻し蹴りを放った。

“ブン！”と低い唸りを上げて、丸太の様な太い脚が恭也の頭部を襲う！

恭也は、右腕で頭部を庇った。

恭也の腕に凄まじい衝撃が走る！

「グアッ！」

恭也の顔が苦痛に歪んだ。

恭也は、ガードした腕ごと横へ跳ね飛ばされた。

何と言う凄まじい脚力であろうか。

腕が折れなかっただけでも幸いである。

腕でガードしたに拘わらず、恭也の口元からは“スーッ”と紅い血が筋を引いた。

あまりの衝撃に口の中を切ったらしい。

だが、恭也もこれぐらいで怯んだりはしない。

口元の血を紅い舌でぺろりと舐め上げると、更に獰猛な笑みを浮かべて床を蹴り、真っ直ぐ獣吾へと襲い掛かった。

「死ね、この馬鹿！」

獣吾は突進して来る恭也へ、カウンターの右ストレートを放った。

だが、完璧なタイミングで繰り出された筈のパンチが、何故か空を切った。

獣吾のパンチが、恭也の顔面をカウンターで捉えようとした瞬間、目の前から恭也の姿が突如として消えたのだ。

「上か！」

獣吾が見上げた先には、宙に跳んだ恭也の姿があった。

恭也は、獣吾に迫る勢いをそのままに、獣吾の放ったカウンターが当たる寸前、上へ跳ぶ事で必殺のカウンターを躱したのだ。

一瞬、恭也の身体が天井に沈み込んだ様に見えた。

あまりの跳躍に、部屋の天井に激突するかと思われた恭也だったが、何と高く掲げた両の掌を天井に着け、肘のバネをクッション代わりにして衝撃を吸収したのである。

更に、撓んだバネが伸びるかの如く、反動を利用して両手で天井を蹴った。

恭也が鋭い飛び蹴りを放つ。

「チィィー！」

獣吾は、咄嗟に身を捻った。

恭也と獣吾の身体が交差する。

飛び蹴りを躱された恭也は、両手と両足を床に着け着地の衝撃を和らげた。

四つん這いで獣吾に背を向けた恭也へ、獣吾が右の踵を蹴り落とす。

“ぞくり”

恭也の背中に冷たいものが走った。

恭也は、横に転がって獣吾の踵を躱した。

“ボゴッ！”

獣吾の踵が、恭也の居た場所を踏み抜く。

床材が砕け、コンクリートに拳大の穴を穿った。

獣吾の動きは、先程までの十兵衛との闘いで受けたダメージを一切感じさせないものであった。

恭也は、床を転がると透かさず跳ね起きた。

跳ね起き様に床を蹴った恭也へ、獣吾の前蹴りが飛んだ。

恭也の目前に獣吾の蹴りが迫る。

恭也は下から迫り上がる獣吾の蹴りの速度に合わせ、両手を高く上げ頭から後ろへ跳んだ。

だが通常のバク転と違い、床を蹴って持ち上がる足で獣吾の顎を下から蹴りに行ったのである。

獣吾は、上体を後ろへ反らし何とか蹴りを躱した。

だが躱したと思った瞬間、もう一方の足が下から迫り上がって来

る。

獣吾の下顎を、恭也の蹴りが掠めた。

床に手を着き、一回転して着地した恭也は、床に足が着いた瞬間身体を左に捻った。

右足を回転させて獣吾の足を刈りに行く！

ローキックよりも低く、床すれすれの位置を恭也の足が弧を描いた！

前掃腿だ。

「くっ！」

だが獣吾は、獣の反射神経で後ろに下がりこれも躱す！

恭也は“ニヤリ”と笑った。

恭也は、足払いを躱された瞬間、回転の勢いを殺さず左足を大きく振り上げると、そのまま右足で床を蹴った

跳躍した瞬間身体を回転させ、腰を高く引き上げると、まず左足による擺脚が獣吾の顔面を襲った。

獣吾はこれも何とか躱したが、更に左足を追う様に弧を描きながら跳ね上がる右の里合腿が、獣吾の顔を目掛け跳ね上がって来た。

“旋風脚”だ。

だがこの場合、恭也の凄まじい身体能力により旋風と言うよりは竜巻に近い。

先程の前掃腿は、この“旋風脚”の為の布石だったのだ。

“ボグッ”

ついに恭也の右足が獣吾の顔面を捉えた。

「がっ！」

獣吾は首が捩切れる程の衝撃を受け、後ろへ吹き飛んだ。

背中から床に激突する。

「ぐはっ！」

獣吾は口の中を切ったらしく、折れた歯と共に大量の血を吐いた。

「このクソが！」

獣吾は毒気を吐くと、両脚を大きく回転させ跳ね起きた。

口元に着いた血を腕で拭う。

恭也は、未だ獰猛な笑みを口元に貼付けたまま、禍々しい眼差しで獣吾を見詰めていた。

「発狂しやがって、何者だ？　オメエ……」

獣吾が尋ねた。

「……」

だが恭也は答えない。

「シカトかよ……、仕方ねえ。オメエみてえな危ねえ奴は今ここでくたばんな！」

獣吾は“ぞろり”と言った。

次の瞬間、獣吾の気の質がガラリと変わった。

恭也に匹敵する様な、禍々しい妖気が全身から立ち上る。

恭也が、少し首を傾げた。

見る見る内に、獣吾の妖気が膨れ上がって行った。

それに伴い、獣吾の身体にも変化が起こっていた。

顔や全身の筋肉が、まるで別々の生き物の様にボコボコと蠢いている。

ただでさえ巨大な身体が、更に一回り大きくなった様だ。

岩の様な筋肉が更に盛り上がり、骨格そのものも変形している様に見える。

「ガヒュウ！」

獣の呼気を漏らし、獣吾の身体が大きくのけ反った。

胸の筋肉が異常に膨張し、Ｔシャツが裂けた。

腕には幾筋もの筋肉と血管が不気味な紋様を描き、爪が血肉を絡めながら異様な程長く伸びている。

更に全身の毛穴から、まるで虫が這い出て来るかの様に、灰色の長い獣毛がぞろりと生えて来た。

獣吾の全身から発せられる禍々しい妖気は、更に膨らみ続けている。

のけ反り天井を仰いでいた獣吾の顔が、いきなり正面を向いた！

既に人相が変わっている。

頬骨が浮き上がり、目は白目を剥いていた。

次の瞬間、両耳の先が“ニュ～ッ”と長く伸びる。

獣吾の身体が“ブルッ”と震えた。

すると、何と獣吾の上顎と下顎が同時に前へ迫り出して来た。

完全に顔の骨格が変形している。

上下の顎が迫り出切ったと思えた次の瞬間、獣吾が迫り出た口を

大きく開いた。

「ＷＡｏｏｏｏｎ！」

獣吾が、いや化物が高く吠えた。

だが獣吾の震えは止まらない。

耳元まで裂け、大きく開いた口の中でも変化が起こっていた。

顎が前へ伸びた分だけ隙間の空いた歯の間から、何と鋭く尖った歯が生え始めたのだ。

尖った歯は血と歯茎の肉を絡めながらどんどん伸びてくる。

すると身体と同じく、顔の毛穴からも灰色の獣毛がぞろりと生え出した。

幾ら化け物とは言え、僅かな時間の間に、生物の身体がこれ程変化出来るものなのだろうか？

まるで映画のＣＧでも見ているかの様だった。

そうしている間に、獣吾の変化は終わっていた。

剥いていた白目に黒目が戻り、恭也をギロリと睨む。

最早自分でも制御出来ない程の妖気が、全身から暴風の様に立ち上っていた。

「お、狼男か……」

恭也は“ぼそり”と呟いた。

顔が驚愕に歪んでいる。

だがそれも一瞬で、またすぐに獰猛な笑みに変わった。

「ふん、面白ぇ！」

恭也は鼻を鳴らした。

身体の奥から無限に湧き出る凶暴な感情が、恐怖感さえ麻痺させてしまっている様だ。

「グルルル……」

獣吾は喉を低く鳴らした。

背中を丸め前傾姿勢を取る。

それは、猛獣が獲物に襲い掛かる時のポーズに見えた。

「ガァーッ！」

獣吾がいきなり襲い掛かった。

今までとは桁外れのスピードだ！

躱せないと一瞬で判断した恭也は、両腕を顔前でクロスすると、

腹筋に力を込め両足を踏ん張る事で防御の構えをとった。

獣吾が、鋭い爪を奮う！

顔をガードした恭也の腕の肉を、獣吾の鋭い爪が刈った！

恭也の顔が激痛に歪む。

更に獣吾の蹴りが恭也を襲った！

「ぐっはっ！」

恭也の右脇腹に、獣吾の左廻し蹴りが入った。

あまりの獣吾のスピードに、恭也は全く反応する事が出来ない。

脇腹に凄まじい蹴りを喰らった恭也は、四メートル以上も吹っ飛んだ。

恭也は部屋の窓際まで吹っ飛ぶと、床に強く激突した。

受け身さえ取れない。

「ガハッ！」

恭也は夥しい量の鮮血を口から吐いた。

いったい何と言うパワーなのか。

変身した獣吾は、見た目だけで無く、そのスピードやパワーに於

いても先程までとは全く別の生物と化していた。

なるほど、並のヴァンパイアでは敵わぬ筈である。

恭也は脇腹を押さえ、フラつく足で何とか立ち上がった。

これ程のダメージを受け、歴然とした力の差を見せ付けられても、止め処無く湧き出る凶暴な感情が、闘う事を止めさせてはくれなかった。

「へっ、まだまだだ……」

恭也は、唇の端を“にいっ”と吊り上げた。

「ガアァァァッ！」

恭也の態度に怒ったのか、凄まじい雄叫びを上げ獣吾が突進した。

恭也の身体に獣吾が激突する。

“ぐっ！”

まるでトラックにでも跳ね飛ばされた様な衝撃で声も出ない！

身体中の骨と言う骨がバラバラになりそうであった。

獣吾のパワーに足が浮いた恭也は、そのまま机や棚が積み上げられた窓に激突した。

窓際に積み上げられていただけの机や棚が、恭也が激突した衝撃

で吹っ飛び、窓の下へと落ちて行く。

それと同時に、互いの身体が縺れ、重なり合ったたまま二人は二階の窓から地面に落下した。

“ドシャッ！”

“ズシン！”

鈍い音を立て、二人は折り重なって地面に激突した。

例え二階とは言え、ビルの二階からアスファルトの地面にまともに落ちたのだ、二人共無事で済む筈が無い。

だが獣吾は、何も無かったかの様に“すっく”と立ち上がった。

全くダメージを受けていないらしい。

下敷きとなった恭也の身体が、クッションの役目を果たしたのだ。

獣吾は、仰向けに倒れている恭也の様子を伺った。

獣人と化した獣吾の蹴りと体当たりをモロに喰らい、更に二階から地面に激突したのだ。

幸い首の骨を折っていなくとも、全身の骨が砕け死んでいても不思議ではなかった。

いや、幾らヴァンパイアであろうが、死ななかったまでも重傷である事には違いない。

だが、恭也の身体から溢れ出る気は、萎むどころか更に激しさを増していた。

顔が狼に変化している為その表情は読み辛いが、獣吾は驚きに身体を“ビクン”と震わせた。

次の瞬間、恭也の目が“カッ”と開いた。

両方の目が白く裏返っている。

すると、今度は全身から“ボキボキッ”と骨の鳴る音が聞こえた。

“ビキッ”

“ビチッ”

何か筋肉と骨が剥がされる様な、湿った音まで聞こえて来る。

「ガアァッ！」

恭也が低く吠えた。

“バキッ”

それと同時に胸の肋骨が大きく鳴り、“ボコッ”と左右の胸が大きく膨らんだ。

恭也は、仰向けのまま思い切りのけ反った。

全身が激しく痙攣する。

顔が次々と襲って来る激痛に激しく歪んでいた。

呼吸も満足に出来ないらしい。

獣吾は、恭也に攻撃を加えるのも忘れ、恭也の変貌に目も心もを奪われていた。

だが恭也の身体の変化は、それで終わりではなかった。

獣吾の時と同じ様に、顔や全身の筋肉が、まるで別々の生き物の様にボコボコと蠢いている。

更に全身の毛穴から長い獣毛がぞろりと生えて来た。

ただ獣吾の生えて来た獣毛は灰色だったが、恭也の身体から生えて来た獣毛は白色だ。

いや、白に限りなく近いが、良く見ると金色である。

仰向けに倒れていた恭也が、まるで幽鬼の様に“ゆらり”と立ち上がった。

禍々しい魔気を発しながらも、恭也の顔は生気を失ったかの様に表情が失くなっていた。

あまりの激痛に意識を失い、今は痛みさえ感じていない様だ。

無表情の顔の頬骨が、不気味に“ボコッ”と浮き上がった。

それと同時に耳の先が“にゅう”と長く伸びる。

すると、今度もやはり獣吾と同じ様に、上顎と下顎が同時に前へ迫り出して来た。

上下の顎が迫り出で来る中、既に伸びていた二本の犬歯が更に長く伸びた。

口を閉じている為見る事は出来ないが、口腔内では隙間の空いた歯の間から、尖った歯が次々と生えているに違いない。

閉じた口元から幾筋もの唾液と血が流れ落ち、耳元まで裂けた口の中で、何かがモゾモゾと蠢いていた。

顔の毛穴からも金色の獣毛がぞろりと生えてくる。

獣人であった。

恭也は、獣人へと変貌しているのだ。

獣吾は、まさに驚愕していた。

これではまったく自分と同じではないか……。

育てられた養父からは、同族は全てヴァンパイアと人間により、十八年前に滅ぼされたと聞かされていた。

だからこの国の中で、獣人は自分一人だと思って生きて来た。

たが今目の前に、紛う事無き獣人が、刻々とその変貌を遂げているのだ。

獣吾の戸惑いを他所に、恭也の変化は終わっていた。

剥いていた白目には黒目が戻り、意識を取り戻したかの様に獣吾を“ギロリ”と睨め付けた。

白に近い金色の獣毛が、月の光を浴びてキラキラと輝く。

それは、神々しいまでに全身を金色に染めた、まさに獣人そのものであった。

6

6

「グルルル……」

恭也は、獣の唸り声を上げた。

どうやら、意識はまだ完全に戻ってはいない様だ。

先程の獣吾と同じ前傾姿勢を取り、膝を軽く曲げて臨戦態勢を取っている。

獣吾は戸惑いの色を隠せなかったが、幾ら同族とは言え、今の時点でこの男は敵だ。

いや、見た目は獣人に違いないが、この男から感じた気の質や体臭は、同じ獣人の物とは言い難い物であった。

しかもあの獣毛の色、そしてヴァンパイアの様な牙。

ーーやはり何かが違う。

獣吾はそう思った。

そして、獣吾も同じく臨戦態勢を取った。

全ての物が息を潜めているかの様に、辺りが“しん”と静まり返っている。

限界まで張り詰めた緊張が、夜気までも凍らせた。

「ガアァァッ！」

「ゴオォォッ！」

その時、凍った夜気を切り裂いて、二匹の獣が同時に吠えた。

互いに凄まじいスピードで駆け寄ると、彼我の距離が一気に縮まった。

獣吾は、その鋭く伸びた長い爪を振るった。

恭也も鋭く尖った爪を振るう。

互いの爪が交錯し、互いの胸を切り裂いた。

「ガウッ」

「グウッ」

二匹が同時によろめいた。

互いの胸には、同じ様な四本の爪痕がくっきりと残されていた。

肉を爪でほじくられた傷痕から、夥しい量の血がドクドクと流れ出る。

獣吾が、更に爪を振るおうとした瞬間、既に恭也は次の攻撃の態勢に入っていた。

恭也は、振り上がった獣吾の右手首が振り下ろされる直前に自らの左手で掴み取ると、もう一方の手で獣吾の太い首を掴んだ。

獣吾の首に恭也の爪が食い込む！

恭也の手は、まるで万力の様な力で獣吾の首を絞め上げた。

「ググゥゥ……ッ」

獣吾が低く呻いた。

獣吾は、首の筋肉に渾身の力を込めた。

だがこのままでは、いずれ首の骨が折れる。

獣人の獣吾であればこそ、まだ首の骨が折れていないだけだ。

獣吾は、首を絞めている恭也の右手首を空いている左手で強く握ると、恭也の腕を引き剥がそうと力を込めた。

恭也の腕にも獣吾の鋭い爪が食い込む。

恭也の腕から五本の血の糸が滴った。

恭也にも激しい痛みが加わっている筈だ。

だが恭也は、口が狼の様に耳元まで裂けている為定かではないが、確かに“ニヤリ”と笑った。

獣吾の首を掴んだ手の力も、一向に衰える気配が無い。

獣吾は、口の端から血の混じった泡を“ブクブク”と吹いていた。

獣吾の意識が遠退く。

獣吾は、最後の意識をかき集めて後ろへ思い切りのけ反ると、獣吾の首に引っ張られて態勢の崩れた恭也の腹部へ、満身の力を込めた膝蹴りを放った。

獣吾の膝が恭也の腹に食い込む。

恭也の身体がくの字に折れた。

「グホッ！」

恭也の顔が、今度こそ苦痛に歪んだ。

恭也の腕の力が緩んだ一瞬の隙に、獣吾は力任せに恭也の腕を無理矢理首から引き剥がした。

“メリメリッ”と首の肉が剋れる嫌な音を立て、恭也の爪が獣吾の首から剥がれる。

“ガヒューッ”

獣吾は、堪らず大きく息を吸い込んだ！

首から大量の血が勢い良く迸る。

だが獣吾の右手首は、未だ恭也の左手に握り絞められていた。

獣吾は左手で拳を強く握ると、恭也の顔目掛けて思い切り拳を放った。

“ボゴッ”

獣吾の拳が、恭也の顔面をモロに捉えた。

獣吾の手首から恭也の爪が離れる。

恭也は、血反吐を撒き散らしながら後ろへ吹き飛んだ。

獣吾の握った拳の掌には、己の伸びた鋭い爪がしっかりと食い込んでいた。

“ドサッ”

恭也が音を立て、勢い良く地面に転がる。

アスファルトの粗い目に恭也の獣毛がへばり付いた。

獣吾は、血の吹き出る喉を押さえ大きく咳込んだ。

涙ぐむ目を何とか見開くと、地面に突っ伏した恭也がゆっくりと立ち上がるところであった。

恭也の双眸が獣吾を睨んでいる。

その目は焦点を結んでいた。

先程までとは違い、目に確かな意志を感じる。

どうやら今のパンチが気付け薬となり、飛んでいた意識が戻ったらしい。

だがその禍々しいまでの魔気は、些かも衰えていなかった。

むしろ意識を取り戻した事により、更に凶暴さを増している様にも感じる。

ーー……チッ、何て化け物だ。

獣吾は腹の中でそう呟いた。

ーーこのままじゃ奴には勝てねえ。

ーー今目の前にいる化け物は、やはり同族なんかじゃねえ。

獣吾は、恭也の中に眠っている、まだ覚醒し切れていない何か底知れぬ魔力の様な物を感じ取っていた。

それが何なのか、具体的には分からない。

ただ獣人としての勘が、この男は危険だと警告していた。

ーー今殺っておかねば……。

獣吾はそう思った。

だがこの化け物に勝つ術が見当たらない。

しかも『降魔の斧』は、二階の部屋に置いたままだ。

獣吾の額から冷たい汗が零れ頬を伝った。

恭也は、腕に残った傷痕から流れ出た血を、紅い舌でペロリと舐め取った。

何と、あれ程深かった腕の傷が、血を舐め取った後には一滴の血も零れて来ない。

それどころか、既に薄皮まで張り始めている。

胸の傷も既に治り掛けていた。

恭也が、禍々しい双眸で睨みながら、“シャーッ”と血生臭い息を吐き出す。

さすがに満月の夜だけの事はある。

獣吾もそうだが、獣人族にとって満月はただの象徴等ではなく、再生能力を含む全ての能力が最高潮に達する時なのである。

当然獣吾の傷も、恭也程ではないが既に治り始めていた。

“！”

その時、獣吾はある事に気が付いた。

今宵は満月である。

自分も幼かった頃、満月の夜にはいつも内に潜む凶暴な獣性に悩まされていた。

気持ちや身体が異常なまでに興奮し、自分でも押さえ切れない程の凶暴で凶悪な気持ちになってしまうのだ。

しかも自分の意識とは関係なく、無意識の内に獣人に変身してしまう事もあった。

今では内なる獣性をコントロールする術を学び、いつ如何なる時でも自分の意志で変身出来る様になり、満月の夜とは言え凶暴な感情に支配される事は無くなった。

だがそれらは全て厳しい修行による成果だ。

だが目の前のこの男は、自分の獣性をコントロールする術を知らないだけなのではないか……？

例え意識がハッキリとしている今となっても、その高ぶる凶暴な獣性を自分では押さえる事が出来ず、ただ獣性に感情を支配されてしまっているだけではないのか……？

だがそこまで考えて、獣吾は頭を振った。

ー一駄目だ。

それを今考えたところで、この男を満月の影響下から解き放つ術が見付からない。

ーーやはり殺すしかないのか。

獣吾は思った。

その時、何処からか飛来した一羽の小鳥が、恭也の肩に“ちょん”と止まった。

真っ黒の羽毛を生やした、烏そっくりの鳥だ。

だがその鳥は、烏にしてはあまりに小さ過ぎた。

“カァーッ！”

その小鳥が鳴いた。

鳴き声まで烏そっくりである。

恭也は、肩に止まったその小鳥を煩そうな表情で“チラッ”と見ると、素早い動き“さっ”と捕えた。

まさに一瞬の出来事であった。

恭也は、手の中で苦しそうにもがく小鳥を、残酷な笑みを浮かべながら“ギュッ”と一息に握り潰した。

だが次の瞬間、何と手の中で潰れて死ぬ筈だった小鳥は、恭也の手の中で一枚の呪符に姿を変えた。

その呪符は、元は短冊の様な形をしていた筈なのだが、今は破れ

てクシャクシャになっている。

所々赤い染みの様な物が付着していた。

恭也は不思議そうに首を捻った。

その時、ビルの駐車場の出入口に小さな人影が現れた。

「恭也ー！」

その人影が叫んだ。

恭也が、ゆっくりと後ろを振り返る。

満月に照らし出されたその人影は、紺色の甚平に身を包んだ老人であった。

獣吾は、その老人に見覚えがなかった。

後ろへ向き直った恭也が、その老人を“ギロリ”と睨み付ける。

満月の下で、李と恭也は再び対峙した。

7

7

「恭也ー！」

李が叫んだ。

すると、ビルの出入口付近で対峙していた二匹獣人の内、手前で背を向けていた方が李へとゆっくり振り向いた。

「グルルルル……」

恭也が喉を鳴らす。

「恭也……、お前か……？」

李は呻く様に漏らした。

最早、恭也の面影は何処にも無い。

髪は獅子の鬣の様に背中まで伸び、全身を長い獣毛がびっしりと覆っている。

あまり獣毛の生えていない顔でさえ、前に迫り出した上下の顎や耳元まで裂けた口が、獣人のそれを彷彿とさせた。

更に先の尖った耳や長く伸びた爪は確かに獣人そのものだが、獣毛の色は李の知る獣人とは少し違っていた。

しかもこの獣人には、吸血鬼と同じ牙が二本だけ長く伸びている。

やはり佐々木の言った事は本当だったのだ。

だが更に李を驚愕させたのは、恭也の他にもう一匹獣人が存在していた事だ。

佐々木との会話の中でも話した様に、十八年前獣人族は皆絶滅した筈であった。

しかし今恭也の後ろに見えるのは、紛う事なく獣人である。

李は戸惑った。

電話での陽子の話から想像するに、恭也はショウと言うヴァンパイアを捜しに来た筈だ。

しかし肝心のショウの姿は無く、何故か絶滅した筈の獣人と対峙している。

もう何がどうなっているのかさっぱり分からなかった。

だが恭也から禍々しい妖気が放たれ、今も李を獰猛な眼差しで睨め付けている事だけは紛れも無い事実だ。

「こいつはマズイのう……」

李は、他人事の様に呟いた。

今朝仕合った時の恭也とは、比べ物にならぬ程の妖気だ。

しかも今朝は未だ『貴族』としての覚醒が済んでいない状態であったが、今は『貴族』だけでなく、『人狼』としても殆ど完全に覚醒してしまっている。

いや、最早『貴族』だの『人狼』だのと言う別々の括りでは無く、二種類の魔族の因子を融合させた新種の『魔獣』としてそこに存在しているのだ。

しかも今夜は満月である。

見た目からして人狼の特徴を色濃く残している恭也の魔力は、今や最高潮に達しているに違いない。

これでは、幾ら伝説の武神・最強の仙道士と謳われる李であっても些か手に余る。

その時、ふと恭也の後ろにいる獣人が、李に視線を投げ掛けている事に気が付いた。

李の視線が一瞬獣吾に流れる。

だが恭也は、その一瞬を見逃さなかった。

恭也が凄まじいスピードで、李に向かって襲い掛かって来る。

李は、懐から針を数本抜き出すと、防御の態勢を取るのではなく、自らも恭也に向かって駆け出した。

彼我の距離が一気に縮まる。

李が、恭也の顔を目掛け、取り出した針を投げ付けた。

だが恭也は、左腕をひと振りする事で飛来する針を全て薙ぎ払った。

何と言う動態視力と反射神経であろうか！

そして両腕を伸ばし、鋭い爪と耳元まで裂けた大きな口で、李の喉笛目掛けて襲い掛かった。

だが恭也の爪は空を切り、噛み合わされた牙は空を噛んでいた。

何と李は、恭也の爪と牙が届く瞬間を見切り、高くジャンプする事で恭也の攻撃を躱すと同時に、恭也の頭に“トン”と手を着いて、まるで跳び箱でも跳ぶかの様に恭也の後方へと難無く降り立ったのだ。

今朝の闘いからも、覚醒を始めた恭也のスピードは、遥かに自分を凌駕している事を承知していた李は、フェイントで針を投げる事で恭也が躱す零コンマ何秒と言う時間を稼ぎ出し、その隙を突いて恭也の攻撃を躱し切ったのである。

やはりこの老人も化け物であった。

更に李は、その足で獣吾の元へ駆け寄った。

「コリャそこの人狼、お前もちょこっと力を貸せい！」

何と李は、事もあろうか、大胆にも初対面の、しかも獣人である

獣吾に悪びれる事無く助力を請うたのである。

これには流石に獣吾も呆気に取られた。

獣人に姿を変えている自分を恐れる所か、逆に加勢しろとこの老人は言っているのだ。

しかもどうやらこの老人とあの化け物は知り合いらしい。

獣吾は、少し戸惑った。

「何じゃ？　お前さん日本語が分からぬのか？」

李は、獣吾を見上げて言った。

李と獣吾では身長差が五十センチ以上ある。

まるで大人と子供だ。

「オデハ、ニッボンジンダ……」

獣吾が答えた。

だが耳元まで裂けた獣の口では、横から息が漏れる為上手く話す事が出来ない。

「そうか、この国の獣人族は絶滅したと聞かされておったが、まだ生き残りがおったようじゃの！　儂は何としてでもあ奴を止めねばならぬ。お前さんの力を貸してくれぬか？」

李は、まるで昔からの知己に話掛ける様に言った。

だが、視線は油断無く恭也へ向けたままだ。

――いったい何者だ？

――先程の技や身のこなしから見てタダ者でない事は一目瞭然だ。

――しかも獣人族の事情にも通じているようだし、全く得体が知れない。

――だが実際あの化け物は、今の自分の手に余るのも事実だ。

――いっそ今は、この老人にあの化け物の相手をさせておき、その間に先程の部屋へ『降魔の斧』を取りに戻るか。

一瞬獣吾は迷ったが、この老人の如何にも好々爺然とした顔を見ていると、そんな姑息な考えも吹き飛んでしまう。

「ワガッダ、ギョウリョグジヨウ……」

獣吾は話し難そうに、李の申し出を受諾した。

李は獣吾の顔を一瞬見上げると、堪らない笑みを見せた。

獣吾も釣られて破顔したが、何せ獣人の顔ではあまり表情が伝わらない。

「では行くぞ！　儂は奴に符術を掛ける。お前さんはその間の時間を稼いでくれ」

そう言うと、李は懐から漆塗りの小さな筆入れを取り出し、中から先が朱墨で紅くなった筆を一本取り出した。

獣吾は黙って頷いた。

ーーあの化け物をどの位抑えて置けるのか自信は無いが、今はこの不思議な老人に賭けるしかない。

獣吾は再び気を高めた。

内功を練り身体の隅々まで気を巡らす。

李が、獣吾を見上げ“ホウ……”と感嘆を漏らした。

恭也が、目標を獣吾に変更した様だ。

獣吾と同じ様に、恭也も“魔気”を練り始める。

「ガオォォォン！」

「グウォォォン！」

恭也と獣吾は、殆ど同時に地面を蹴った。

彼我の距離が一気に詰まる。

恭也が爪を振るった。

だが獣吾は、構う事無く右肩を前に思い切り恭也へと突っ込んだ。

恭也の爪が獣吾の右肩の肉を深く抉る。

鋭い痛みが肩に走るが、獣吾の勢いは止まらない。

獣吾はそのままの勢いで正面から恭也に突っ込んだ。

“ドガッ！”

肉と肉がぶつかり合う鈍い音が響いた！

獣吾の渾身の体当たりで、恭也が後ろへ吹っ飛ぶ。

だが、恭也は両足を踏ん張る事で、何とか転倒する事だけは避けた。

恭也の破れかけたスニーカーの裏が、アスファルトとの摩擦で白い煙りを上げる。

身長で約二十センチ、体重で三十キロもの体格差は、格闘に於いて物理的にも絶対的な差だ。

ましてや獣人である獣吾の体当たりは、トラックと正面衝突した程の衝撃があるに違いない。

本来なら骨がバラバラになり立ってなどいられる筈が無かった。

だが少し後ろへ下がっただけで堪え切るとは、恭也のパワーも凄まじい物がある。

少しフラつく恭也に、更に獣吾が襲い掛かった。

両腕を伸ばし、恭也の両肩を掴もうとするが、獣吾の爪は虚しく空を掴んだ。

恭也は上体を屈め、身体を横に振る事で獣吾の爪を躱すと、下から伸び上がる様に獣吾の首筋へ鋭い牙で噛み付いた。

「グァァァッ！」

獣吾が絶叫する。

獣吾の首から鮮血が迸った。

たがその瞬間、いつの間に懐へ入り込んでいたのか、李が恭也の腹部に手を当てた。

瞬時に恭也も気が付いたが、先に仕掛けた李の方が断然早い。

“ズン！”

李は激しく震脚を鳴らすと、手に気を集中させた。

「吩！」

李の口から激しい呼気が洩れる！

“発勁だ”

思わず牙を獣吾の首筋から離し、恭也は身体を“くの字”に折り曲げた。

その期を逃さず、獣吾が恭也の背中へ肘を打ち下ろす。

背中に肘を喰らった恭也は、そのまま地面に突っ伏した。

俯せに倒れた恭也の横腹を、獣吾が下から蹴り上げる。

恭也はそのひと蹴りで一瞬宙に浮くと、今度は仰向けにひっくり返された。

更に獣吾は攻撃を止める事なく、舒に恭也の上へ馬乗りに跨がると、今度は自分の牙を恭也の首筋に突き立てた。

「ガァ―ッ！」

夜気を裂く恭也の絶叫が轟き、激痛に手足をバタバタと動かすが、グレイシー柔術さながらの寝技で獣吾は恭也の自由を奪って行く。

恭也の首筋から激しく血が迸った。

だが先程の怪我で、獣吾も首筋から激しく出血している。

二匹の獣が、互いの血で紅く染まって行った。

その隙に、李は懐から取り出した針を、恭也の左右の肩や太腿に一本づつ刺して行く。

すると、あれ程激しくもがいていた恭也の手足が、まるで金縛りにでもあったかの様に“ぴくり”とも動かなくなった。

李は、恭也のツボに針を刺す事で、恭也の動きを封じたのである。

更に李は、持っていた筆を吹き出す恭也の血に浸した。

そして新たに取り出した黄色い呪符へ、恭也の血を朱墨代わりに何やら呪を書き始めたのだ。

しかもその呪符は、何と人の形をしていた。

呪を書き終えた李は、更に懐から何枚かの呪符を取り出して必要な物だけを選ぶと、口から血の泡を吹きもがく恭也の額にぴたりと貼り付けた。

「良いぞ、離れておれ」

李が獣吾に声を掛けた。

それを聞いた獣吾が恭也から離れる。

恭也は、手足が麻痺して動く事が出来ず、首だけを左右に激しく振っていた。

李は人型の呪符を手に持つと、もう片方の手で印を結び、目を閉じて呪を唱え始めた。

恭也が苦しそうに首を振ってもがく。

李も玉の様な汗をびっしりと掻いていた。

獣吾は黙って見守るしかなかった。

李が更に念を凝らす。

次の瞬間、李が握っていた呪符と恭也の額に貼り付けた呪符に変化が起こった。

それら二枚の呪符に黒い靄が掛かり、次第にその靄が大きさを増して行く。

いや、呪符だけでは無い。

黒い靄は恭也の全身から立ち上っていた。

呪を唱える李の声が更に大きくなる。

李自身もかなりの精神力と体力を使っている様だ。

その時、李が“カッ”と目を開いた。

それと同時に、恭也や呪符を取り巻いていた黒い靄が一瞬にして霧散した。

見ると、人型の呪符がまるで燃えカスの様に黒く変色し、李の手の中でボロボロと崩れて行く。

恭也の額に貼られた呪符も同様に黒く変色し、燃えカスの様に脆く崩れた。

すると、あれ程禍々しかった『魔気』が、跡形も無く消え去っていた。

と同時に、恭也の全身にびっしりと生えていた獣毛がずるりと抜け落ち、地面に小山を作った。

迫り出していた上下の顎も、徐々に元の形へと戻っていった。

しばらくすると、恭也は元の人間の姿に戻っていた。

「ふう、今度は上手く行った様じゃの」

李は、吹き出した玉の様な汗を拭いながら言った。

端で事の成り行きを見ていた獣吾は、驚きに目を丸くしていた。

「お前さんのお陰で本当に助かったわい。礼を言うぞ」

李はぺこりと頭を下げた。

それを見た獣吾は、大きく息を吸い込み気と共に体内に巡らすと、ゆっくりと大きく息を吐き出した。

すると恭也と同じ様に生えていた獣毛がずるりと抜け落ち、獣吾の足元に蟠った。

迫り出した顎も徐々に戻り、元の獣吾の顔に戻って行く。

ただ最初から迫り出していた厳つい下顎はそのままである。

一瞬、頭髪や眉も獣毛と共に抜け落ちた為、かなり不気味な顔になったが、すぐにも生え始め多少短くはあるが適度な長さに生え揃

った。

全身に負った夥しい傷痕も、既に治り初めている。

ただボロ切れとなったTシャツやジーンズは元に戻る筈もなく、惨めな姿と化していた。

「おい爺さん、あんた何者だ？　それに何がどうなったんだ？」

やっとまともに話せる様になった獣吾が、慌てて口を聞いた。

「儂はしがない仙道士じゃよ」

「せ、仙道士って爺さん……」

「本当の事じゃ。それに今のはあの阿呆を獣化から解く為に、奴の妖気をこの呪符に吸い取らせたのよ」

そう言って、李は手の中で燃えカスとなった呪符を見せた。

最も今ではそれも灰の様になってしまい、手を広げた瞬間にハラハラと吹き飛んで行った。

「じゃが儂一人ではこうも上手くは行かなんだじゃろう。お前さんとの闘いで、体力や魔力をかなり消費しておった上、お前さんが奴を押さえ込んでくれたお陰で呪を掛ける事が出来たのじゃ。本当に礼を言うぞ」

「いや、俺の方こそ爺さんが居なかったらあの化け物に殺されていたトコロだ。礼を言うのはコッチの方さ」

「なんのなんの。そんな事礼には及ばぬよ」

李は、そう言って首を横に振った。

「それよりよ、爺さんはあの化け物を知ってるみたいだったが、いったいアリャ何なんだ？」

獣吾は、倒れている恭也へ目をやった。

「ありゃ儂の孫じゃ」

「ま、孫だって！　じゃあ爺さんもあの化け物と同類なのか？」

獣吾は大声を上げた。

「いや儂は人間じゃよ。孫とは言うたが、アレは儂の養子じゃ」

その時、気を失っていた恭也が目を覚ました。

「オイ爺、身体が動かねえぞ！　早く針を抜きやがれ！」

恭也は動かぬ身体で、首だけ横を向き叫んだ。

「ほう、気が付いた様じゃの。まったく世話の焼ける阿呆じゃて。しばらくそこで反省でもしておれ！」

李が毒突いた。

「悪い、俺が悪かった！　頼むから何とかしてくれ！」

恭也は懇願した。

「仕方ないのう……」

そう言って、李は恭也の肩や脚に刺さった針を抜き取った。

手足が自由になった恭也は、すかさず起き上がった。

「爺、また迷惑掛ちまったみたいで、悪かったな……」

恭也は素直に謝った。

恭也の肩が落ちている。

「もう済んだ事じゃ。それよりお前、いったい何でこうなったのじゃ？」

李が尋ねた。

「陽子から、学校の近所で最近行方不明になってる奴が大勢いるって聞いて、間違いなくショウの奴の仕業だと思ったから、この近辺を回ってたんだ。そしたらこのビルからスゲエ気を感じて、ビルの中に入ったらアイツと片目の男が闘ってたんだ……」

恭也は、獣吾へ目を遣って言った。

獣吾は黙ったままこちらを見ている。

「それでどうなったのじゃ？」

「片目の方が逃げ出して、その後部屋の中を見たらシゲとショウが死んでいたんだ。それを見たらつい“カッ”となっちまって……、後の事は多少覚えちゃいるんだが、何かこの凶暴なモンが自分でも押さえられなくて、何か殺り合うのが楽しいって言うか、アイツを八つ裂きにしたいって言うか、とにかくシゲやショウの事とかも関係なくなっちまってよ……」

そこまで言って、恭也は言葉を詰まらせた。

黙って話しを聞いていた李は、いきなり恭也の頬を平手で殴った。

“パァン！”

乾いた音が夜の駐車場に響き渡り、恭也の顔が弾けた。

「あれ程ショウとか言う吸血鬼には手を出すなと言うてあったろうが！　何故お前は儂の言う事を聞かぬ！　今はあの人狼が手伝うてくれたから良かったものの、儂一人ではどうなっておったか分からぬのじゃぞ！」

李は激しく怒鳴った。

恭也は頬を押さえたまま、李の話しを黙って聞いていた。

「とにかくあの人狼に礼を言い、今までの事を全て詫びるのじゃ！」

李はぴしゃりと言った。

恭也は、うなだれたままとぼとぼと獣吾に歩み寄ると、獣吾に頭

を下げた。

「悪かったな。何か“カアッ”となっちまって、アンタにヒドイ事しちまった。本当に悪かったな」

恭也は、珍しい事に男に対して素直に謝った。

「まあ良いって事よ。それに俺があの部屋に着いた時には既にああなってたんだ。だから奴らを殺ったのは俺じゃねえ。恐らくは十兵衛が殺ったんだ」

「十兵……？」

恭也がそう言いかけた瞬間、駐車場の出入り口に殺到する大勢の人間の気配があった。

「そこまでだ！　全員そのまま手を上げてこちらを向け！」

やっと静寂を取り戻した夜気を裂き、低いバリトンが駐車場に響き渡った。

8

8

「そこまでだ！　全員そのまま手を上げてこちらを向け！」

低いバリトンが夜気を裂いた。

見ると、大勢のスーツ姿の男達がこちらにグロッグの銃口向けている。

次の瞬間、三台の特殊車輌が、まるで獲物に襲い掛かる猛獣の様に、雪崩を打ってビルの駐車場内に飛び込んで来た。

艶消しの黒色に塗り込められた『Ｃ・Ｖ・Ｕ』の部隊運搬用特殊車輌である。

三菱のトラック『キャンター４ＷＤ』の2トンシャーシを、隊員運搬用に改造した車輌だ。

警察庁の特殊強襲部隊（ＳＡＴ）が使用している特型警備車とほぼ同じ物だが、この車輌には天井部分に白字で『Ｃ・Ｖ・Ｕ』の文字が描かれていた。

これら三台の特殊車輌は、駐車場に入るや否や恭也達三人を取り囲む様に停まった。

同時に車輌の後部ハッチが開け放たれ、中から黒い服に身を包んだ一団が一斉に下車し、素早く恭也達を取り囲んだ。

良く訓練された者達だけが出来る、素早く的確な動きであった。

男達は、頭に黒いケプラー製のフリッツヘルメットを被り、顔は黒のフェイスマスクで覆われ人相の識別が出来ない。

更に黒のＢＤＵ（バトル・ドレス・ユニフォーム）の上下を纏い、黒のボディアーマーや各種パッドで要所をガードしている。

ケプラー繊維を使ったボディアーマーには、ベルクロで大小のポーチが取り付けられ、レッグ・ホルスターには武骨なグロッグ１８Ｃが収められていた。

グロッグ１８Ｃはグロック１７にフルオート機構を搭載させた銃で、動きの素早いヴァンパイアに対して高い制圧能力を有している為、日本ではこの『Ｃ・Ｖ・Ｕ』の全隊員や『内調』の職員のみに正式採用されている。

手に持ったメインアームはＨ＆ＫのＭＰ５だ。

９？パラベラム弾を使用するサブマシンガンで、銃身が短い為狭い空間での取り回しがし易く、建物内での戦闘に向いている。

全体に黒を基調とした、標準的なＳＷＡＴと同じ装備だ。

だが細かい点では幾つかの相違点が見受けられた。

全員が首にチタン製の繊維を細かく織り込んだネックガードを巻いており、他にもゲブラー繊維で出来たアームガードや、ショルダーパッド、それに先端にチタン製の板を埋め込んだコンバットブーツなどを身に着けている点だ。

これらは対ヴァンパイア、対ゾンビを目的とした『C・V・U』制圧部隊の専用装備なのだ。

『C・V・U』の制圧部隊の人数は、三個分隊・全十五人であった。

三人を取り囲む全員が、水銀弾を装填したMP5の銃口を、恭也達三人へ向けて構えている。

駐車場の出入り口で銃を構えていたスーツ姿の男達も、グロッグを構えながらゆっくりと近付いて来た。

三人は両手を上げた。

「おい爺さん、囲まれちまったぜ」

獣吾が人事の様に言った。

悲壮感や焦りなど全く見られない。

余程肝が据わっているのか、獣人である自分に自信があるのかどちらかであろう。

「まあすぐに殺される訳でもあるまい。大人しくしておれば良い事よ」

李にも全く緊張の色が見られない。

恭也に至っては、先程獣吾に殴られて出た鼻血の塊を、涼しい顔でホジっている。

この三人の実力であれば、こうなる前に逃亡する事は十分可能であった。

実際に、恭也や獣吾は逃げるそぶりを見せていた。

しかしそれを李が止めたのだ。

今ここに来ている佐々木や、『内調』の室長である久保とは旧知の仲だから、決して悪いようにはしないと獣吾を説得したのである。

だが獣吾が逃げるのを思い止まった本当の理由は、李に説得されたからではなく、この不思議な老人と惚けた顔で今鼻をホジっている“化け物”に興味を抱いたからだ。

いや、興味以上のモノをだ。

「白石の班と坂下の分隊はビルの中を見て来い！」

先程夜気を裂いた低いバリトンが、男達に命令した。

『内調』の佐々木である。

するとスーツを着た男達四人と、三人を取り囲んでいた黒ずくめの戦闘服の男達五人が、ビルの入口へと足早に移動した。

「おい、全員ライトと暗視ゴーグルを忘れるな！」

佐々木が声を掛ける。

その声に応じてスーツ姿の四人が、特殊車輌へハンドライトと暗視ゴーグルを取りに戻った。

戦闘服の男達は、ヘルメットに暗視ゴーグルが装備されている上に、ＭＰ５にもライトがマウントされている為、そのままビルの入口で待機している。

それぞれハンドライトと暗視ゴーグルを装備した四人が合流し、計九人の姿がビルの中に見えなくなると、佐々木は李達に歩み寄った。

「老師、これはどう言う事ですか？」

佐々木の口調は厳しかった。

「すまんかったのう。この通りじゃ」

李が“ぺこり”と頭を下げた。

「老師、残念です……」

佐々木のバリトンが、更に低く沈んだ。

「もう一つ申し訳ないついでに、杉本君じゃったかな？　儂を尾行しておったのは。彼は今聖華女子高校の校舎裏で寝ておる筈じゃ。悪いが起こしてやってくれんかのう」

「やはりそうでしたか……、分かりました。それでは老師、私達に同行し、これまでの経緯を本部でご説明頂けますか？　後の二人も我々に同行してくれ」

佐々木は、李と残る二人に目をやった。

「分かった……。じゃが儂の事はともかく、あの二人の安全だけはくれぐれも保証してくれぬか……。頼む……」

李の眼差しは真剣だった。

瞳の奥に一種の覚悟さえ見受けられる。

「承知しております。それで、肝心の飯沼彰二の姿が見えませんが……？」

「上で死んでるぜ！」

李とのやり取りを黙って聞いていた恭也が、親指で後ろのビルを指しながら答えた。

その時、佐々木のイヤホンマイクに、先程ビルの中へ入って行った白石からの連絡が入った。

『主任、ビルの内は生存者及び動く物は一切発見出来ません。その代わり、二階の一室が凄惨な状況となってます！』

白石の声は、殆ど怒鳴り声となっていた。

「もっと詳しく報告しろ！」

佐々木もマイクに向かって怒鳴り返す。

『二階の一室は、血塗れで凄惨な状況です。あ、ちょっと待って下さい！　ん？　……そうか！　今、飯沼彰二の遺体が発見されました。頭部を縦に割られて、既に絶命している様です。更に十数体のゾンビ共が床に倒れ、活動を停止しています。恐らくこの辺りで行方不明になっていた住民だと思われます！』

「分かった。今から本部に連絡して現場処理班と鑑識班を呼ぶ。お前達は他に活動可能なゾンビやヴァンパイアが居ないか、ビルの隅々まで捜索しろ！」

『分かりました』

そう言って白石は通信を切った。

「お前が言った通り、飯沼彰二は死亡していた。もしかしてお前が殺ったのか？」

佐々木が恭也を睨み付けて言った。

「ケッ、俺じゃねえよ。本当なら奴は、俺がぶち殺す予定だったんだがな！」

そう答えると、恭也はふて腐れて地面に唾を吐いた。

「ではお前か？」

次は獣吾を見て尋ねた。

「俺でもねえよ」

獣吾も素知らぬフリで答える。

「では老師が……？」

佐々木は、最後に李へと視線を移した。

「いや儂でもない」

李が答える。

佐々木は、埒が開かぬと言った表情で頭を振った。

「とにかく詳しい事は本部に着いてから伺います。老師達はその車に乗って下さい」

佐々木が言った。

李が頷く。

佐々木は、イヤホンマイクでビル内の白石を再び呼び出した。

「白石、俺は今から制圧部隊の一個分隊と共に老師達を連れて『内調』本部へ行く。お前は、残りの二個分隊や現場捜査官と共に現場処理班と鑑識班を待ち、このビルを完全に封鎖した上で、調査と事後処理を頼む」

『分かりました。くれぐれもお気を付け下さい』

白石が答えた。

「不破！」

佐々木が後ろで待機している不破に声を掛ける。

不破が佐々木に駆け寄った。

「何です？」

不破が尋ねる。

「杉本が今聖華女子高校の校舎の裏手で寝ているそうだ。今から行って奴を起こしてやってくれ」

佐々木が言った。

不破は“くすっ”と笑って李の顔を見た。

李は悪戯が見付かった子供の様に“ペロッ”と下を出した。

“オホン”

佐々木がわざと咳払いをする。

李と不破は肩を竦めた。

「では悪いが俺の車を使ってくれ。車はまだ『アラジン』の駐車場に置いたままだ。杉本を起こしたら、杉本と共に本部へ車を持って来てくれ。頼んだぞ！」

そう言って佐々木は、不破に向かって車のキーを投げて寄越した。

「分かりました。では後ほど」

空中でキーを受け取った不破は、そう言って佐々木と李に一礼すると、そのままビルの敷地から立ち去った。

「よし！　　では老師、ご同行お願いします」

佐々木は李達三人に向かって言った。

「車を廻せ。その“特車”で構わん。谷口、お前達の分隊は俺達と“特車”に同乗しろ！」

佐々木が叫んだ。

すると黒塗りの特殊車輌が移動し、佐々木や李達の前で停車した。

「さあ、乗り心地は良くないですが、この車にご乗車下さい」

佐々木が三人に促した。

「おい、ちょっと待てよ！　二階の部屋に忘れ物があるんだ！」

今まで黙っていた獣吾が、慌てて後ろから佐々木に声を掛けた。

「あっ、俺の携帯も無え！　どっかに落っことしたみてぇだ！」

恭也も、ボロボロになったジーンズのポケットを探り“ハッ”として叫んだ。

二人は、佐々木達を無視してビルに戻ろうと踵を返した。

「待ちたまえ。君達の忘れ物は後で我々が必ず届ける。今は我々と同行してくれ」

佐々木が二人を止めた。

「何言ってやがる。アレは俺の命の次に大切な物なんだ。オメエら人間なんかに託す訳には行かねえんだよ！」

獣吾は、顔を赤らげ怒鳴った。

「俺の携帯もだ！」

恭也も獣吾に同調した。

「何なら力ずくでも構わねえんだぜ…」

獣吾が凄んだ。

獣吾の身体から殺気がゆらりと立ち上る。

佐々木はさっと身構えた。

周りを取り囲む部隊の隊員達も、一斉にＭＰ５の銃口を獣吾に向ける。

獣吾や佐々木達の間に“ぐうん”と鋭い殺気がうねった！

「まあまあ、お前さんも凄むでない。お前さん達も銃を下ろせ！」

李が皆を宥める様に言った。

「だ、だがよう……」

獣吾が口篭った。

最初に出会った時から、獣吾はどうも李が苦手らしい。

いや、苦手と言うよりも、いつの間にか心を許してしまい思うように反抗出来ないのだ。

獣人族は、本来警戒心が強い種族である筈なのに、獣吾は自分の気持ちが不思議でならなかった。

知らず知らずの内に、人の心に自然に入り込んでくる。

誠に不思議な老人であった。

獣吾の殺気が鎮まった事で、佐々木や隊員達も一応に銃口を下げた。

「分かったよ。だが大切に扱ってくれよ！」

獣吾は不承不承言った。

「お前も良いな！」

李は、恭也に“ガン”として言った。

「あ、ああ。仕方ねえなあ」

恭也も仕方なく了承した。

「では、ご乗車下さい」

佐々木は、李達三人に再度乗車を促した。

「おっと、そこにあるＶ－ＭＡＸ俺のなんだが、そいつも運んでくれるのか？」

恭也が、ビルの入口付近に止めてあるバイクを指差して言った。

「分かった。運ばせよう」

佐々木が言った。

「じゃあ頼んだぜ。鍵は付いてるからな！　それとオイ、転かすんじゃねえぜ！」

恭也は佐々木に答えながら、側にいた隊員の一人に“ガン”を飛ばした。

顔がヘルメットに当たる程近付けている。

フェイスマスクに覆われた隊員の目が微かに怯えた。

「俺のビッグホーンが外に止めてあるんだが、そいつも頼めるかい？」

すると今度は、獣吾が佐々木に向かって言った。

「分かった、君のも運ばせる」

佐々木は、些か辟易した様子で言った。

「もう良いかな？　では老師……」

佐々木が李達に言った。

李達は、促されるままに、特殊車輌の後部の観音扉から中へ乗り込もうとした。

恭也が、佐々木の横を通り過ぎようとした時ふと足を止めた。

「あんたがここの一番偉いさんか？」

恭也は、佐々木の耳元でぼそりと言った。

「ああ、そうだが？」

「このビルの二階で死んでるゾンビ達の中に、派手なフレア柄の黒いTシャツにブラックジーンズを穿いて、頭割られて死んでるゾンビがいる。そいつは俺のダチだから、絶対粗末に扱うんじゃねえぞ！」

「名前は？」

「宮内茂……」

恭也の声が少し詰まった。

「分かった。丁重に扱おう」

「頼むぜ、奴は馬鹿だけど良い奴だったんだ。くれぐれも手厚く弔ってくれ…」

恭也は真剣な眼差しでそう言うと、再び歩みを始めた。

「なあ爺さん、あんた不思議な術は使うし、この警察みたいな奴らにも顔が利くみたいだが、あんたいったい何者なんだ?」

先頭を行く李の後ろに続いて、車輌のステップに足を乗せながら、獣吾はふと李に声を掛けた。

「儂か? さっきも言うたじゃろうが。儂はしがない仙道士じゃよ」

李が、後ろを見上げて答える。

「じゃあ爺さんは、中国人で“李周礼”って言う仙道士を知らねえか?」

獣吾は、更に尋ねた。

「おい、李周礼ならその化け物爺の事だぜ」

獣吾の更に後ろから恭也が答えた。

「何だって! あんたが李周礼なのか?」

獣吾は、驚いて目を丸くした。

「ああ、儂が李周礼じゃよ」

李が答えた。

獣吾は、その場に固まった。

その時、生暖かい風が吹き始め、あれ程晴れていた夜空がまた分厚い雨雲に覆われ様としていた。

8（後書き）

あとがき

こうしてあとがきを書くのは初めてですが、ついに『Ｔｈｅ　ｖａｍｐｉｒｅ　Ａｐｏｃａｌｙｐｓｅ』（ヴァンパイア黙示録）も第４２話、第六章８節をもって、単行本一冊程度（少し頁数が少ないですが）まで辿り着きました。ここまで読んで下さった皆様に心から御礼申し上げます。

実は、スマートフォンに書き貯めた分はまだかなりありますので、次の第七章２節からも今まで通り更にＵＰして行きます（第七章１節は、同時にＵＰしたので……）。

お話は、この後闇御前の狙いや真の三種の神器の秘密が次第に明らかになって行き、舞台を移しながら恭也達や『内調』のみでなく、高野山や政府、自衛隊の特殊部隊まで巻き込みながら、真の三種の神器争奪戦が激化して行きます。

またそれに従って、内容もハードな物になって行く予定です。

と言う訳で、今後ともどうかお付き合い頂けますよう、心よりお願い申し上げます。

第七章１：内調

第七章
『内調』
1

真新しい畳の青々しい匂いが、広い部屋中に漂っていた。

それはまるで、何処かの城の大広間を思わせる様な造りの部屋であった。

無論日本間である。

青々しい畳が部屋一面に敷き詰められ、上段の間と下段の間、更に奥にある二の間と、全部で三つの間に分けられている。

広さにして上段の間が三十四畳、下段の間と奥の二の間が各々四十四畳程あり、全部で約三百二十五平方メートルはあろうか、そして上段と下段の高低差は五寸八分（１７．６センチ）あった。

上段の間の奥には、虎と豹の描かれた豪華絢爛たる金碧障壁画が描かれている。

更には、格子で仕切られた天井や広間の三方向を囲む各襖にも、見事な金碧障壁画や襖絵が描かれていた。

欄間にも技巧の粋を凝らした彫刻が施されている。

しかし良く見ると、この広間には明かり取りの障子や窓等が全く見受けられなかった。

今は夜である為気にはならないが、これでは昼間であっても太陽の光りがこの部屋に差し込む事は一切無い。

つまりこの広間を使用する際には、いつ何時でも人工的な照明が必要だと言う事だ。

無論今も、雰囲気を壊さぬ様に、天井の随所に取り付けられた白熱灯のダウンライトが、広間全体を照らしていた。

今この広間には、大勢の黒いスーツ姿の男達が整然と並び正座している。

いや、見れば男だけではない。

黒いスーツを身に纏っている為判別し辛いが、全体の三分の一は女であるらしい。

年齢も性別も様々な男女が、皆一様に同じ黒のシングルスーツで整列している様は、異様としか言い様が無かった。

まるで通夜か葬儀の席の様だ。

だが例え通夜や葬儀であったとしても、女性まで皆同じ男物のシングルスーツを纏うと言うのは奇異そのものであった。

むしろ通夜や葬儀と言うより、時代や出立ちは違えど、武士の時代に各諸大名達が時の将軍に謁見する時の様子に似ていた。

下段の間には、左右両端の襖を背にして、片側に十名づつ、計二

十名程の男女が横に列んで座っている。

その者達に挟まれる形で、下段の間の中央に、これまた百人程の男女が整然と居並び正座していた。

続く二の間も同様だ。

また、下段の間の最前列には、後ろに座る百人以上の男女を代表するかの様に、年齢もまちまちな男女五人が、横一列に並び座っている。

五人の男女の内、男が三人で女は二人である。

男達は皆一様に胡座をかき、女達は二人共きちんと正座をしていた。

何処か無言の圧力の様なモノを感じさせる男女であった。

最も、誰ひとり口を聞かない為に、広間中を重苦しい程の静寂が包み込み、長く居続ければ窒息しそうな閉塞感を漂わせていた。

硬直した空気の中、上段の間に向かい右手の廊下へ続く襖が、音も無く“すうっ”と開いた。

下段の間でも一番上段に近い所の襖だ。

音も無く開いた襖から、黒留袖を着た女が入って来た。

黒留袖の女は、年齢がおよそ三十代半ば程であろうか。

贅を凝らした黒留袖は、手描き、手刺繍による金色の松竹梅や・鶴亀の絵柄が浮き出る様に描かれ、この広間の金碧障壁画や襖絵に劣らぬ艶やかさを写し出していた。

透き通る肌は血管が浮き出る程青白く、血を思わせる赤い紅が、この女の妖艶さを際立たせている。

細面で先の尖った顎に、眉墨で描かれた線の様に細く切れ上がった眉。

“すうっ”と切れる様に吊り上がった瞳と長い睫毛、筋の通った鼻梁は見ている者に寒さを感じさせる程に美しい。

アップに結い上げた黒髪のうなじ部分が僅かにほつれ、妖しいまでの美しさであった。

もしも女性経験の少ない男であれば、この女を見ただけで射精してしまいそうである。

いや、同性の女でさえ欲情し、しとどに濡らしてしまう程の妖艶さであった。

女は、下段の間の最前列中央に進むと、それまで最前列に並んでいた五人の更に前に一人座った。

女が最前列中央に座ると同時に、上段の間の襖が“すうっ”と開いた。

次の瞬間、下段の間と二の間に居並ぶ一堂が一斉に頭を下げる。

すると、漆黒の着物を纏った小柄で猿の様な老人と、黒いダブルのスーツを着た男が入って来た。

漆黒の着物を纏った老人は、彼を知る人々からは“闇御前”と呼ばれ恐れられる男で、この国のヴァンパイア社会の頂点に君臨している男だ。

日本最高齢の『貴族』であり、古くから時の権力者と深い関わりを持ち、現在においてもこの国の政財界や裏社会に強い影響力を持っていた。

天井からの照明が、闇御前の顔中に彫り込まれた深い皺を一層深く際立たせている。

闇御前と呼ばれるその老人の後ろから、付き添う様に入って来た男は宇月光牙であった。

この広間の中で一人だけダブルのスーツに身を包み、切れる様な冷酷な眼差しが、この広間に一堂に会した者達をぐるりと見渡した。

闇御前は、ゆっくりと上段の間の中央まで進み、老人とは思えぬ隙の無い動作でそこに座った。

背筋を“ぴん”と伸ばし、きっちりと正座している。

光牙は、闇御前の座った場所より少し斜め後ろの位置で“すっ”と腰を下ろした。

一連の動作にも全く隙が見られない。

能面の様な表情は、何を考えているのか底が知れなかった。

「良い、良い。皆面を上げなさい」

闇御前が言った。

年齢に似合わぬしっかりとした口調だ。

深い皺に埋もれた目に、柔和な光が漂っていた。

下段の間と二の間の全員が、一斉に顔を上げる。

「御前様、お久しゅうございます。夜叉以下、鬼道十八部衆の内六名、お召しにより目覚めましてございます」

下段の間最前列の女が三つ指を付いて言った。

「夜叉姫、それに皆の者……。長き眠りからの目覚め、大儀でした。また皆の顔を、生ある内に見る事が出来何よりです」

闇御前は、噛み締めるかの様に一言一言区切る様に話した。

下段の間に座す者達は、皆この老人を真っ直ぐに見据え話に聴き入っている。

「いえ、私どもこそ御前様がご健勝で何よりでございます」

夜叉姫と呼ばれた女が言った。

「嬉しい事を……。それで夜叉姫、久々の現世はどうですか?」

「はい。高く聳え建つ箱の様な建物、川を群れて泳ぐ魚の如き車の量、絵の動く箱、街を歩く人間共の衣装……、見る物全て目新しく、見知らぬ物ばかりで驚き戸惑っております」

「そうでしょうねえ。夜叉姫が眠りに着いてから、既に八十年は経っているのですからね。人も……、物も……、そして政も……、世の中はすっかり変わってしまいました。皆も後で“語り部”や起きていた者達から今の現世の事、詳しく教えて貰うと良いでしょう」

闇御前がそう話すと、下段の間の襖を背に座っている一番手前の老人が無言で頷いた。

恐らくは、この老人が“語り部”に違いない。

ここで言う“語り部”とは、『貴族』の特殊能力者の事で、夜叉姫のように長い眠りから覚めた者達が、今の時代でも生きて行けるようにそれまで見聞きした出来事や文化の推移、そしてこの時代の事を実際に言葉で語るのではなく、テレパシーや秘術により相手の脳に直接記憶として植え付ける事を生業とした者の事である。

したがって語り部は、与えられたその役目から長い時を眠る事が一切無く、他の『貴族』よりも一つ高い“大老”の位を戴き、確保出来る血液の量等の恩恵も受けていた。

「それで御前様、今はまだ約定に定められた“目覚め”の日では無いに関わらず、我等に“目覚め”をお召しになられたのは、如何なる理由からなのでしょうか？」

夜叉姫が尋ねた。

「そうですね……」

闇御前は、腕を組みしばし逡巡した。

閉じた目が皺にしか見えない。

少し間を置いて、闇御前は皺の裂け目の様な口を開いた。

「まだ“語り部”から今の社会情勢や、これまでの事の成り行きの記憶を写されていないお前達に全てを語るのは混乱を招くだけなので今は控えておきます。ただ……、お前達を目覚めさせたのは、ある物を探し出し手に入れるのにお前達の力が必要だったからです」

「ある物とはいったいどのような物なのでしょうか？」

「三種の神器です……」

闇御前がそう言った瞬間、広間が俄かにざわめいた。

「皆名前くらいは聞いた事があると思いますが、皆に探して貰いたい物とは三種の神器の事です」

闇御前はきっぱりと言い放った。

「御前様、それは天皇の皇位継承の際に使われるあの三種の神器の事でしょうか？」

夜叉姫のすぐ後ろに座る初老の男が言った。

「そうです。八咫鏡・八尺瓊勾玉・天叢雲剣と呼ばれる神宝の事です」

「ですがその様な物、幾ら名前に“神器”と付いていても、たかが人間の皇位継承で使うただの道具ではありませぬか。何故その様な物が、我々夜の眷属に必要なのですか？」

先程の初老の男が尋ねた。

「千方殿、それは違いますぞ。今皇居に奉られている物はご存知の通り確かに三種の神器の形代に過ぎませぬが、本物は真に神の力を宿す神器。いえ、神の力その物と呼んで良い物なのです」

闇御前の後ろに座る光牙が、闇御前と初老の男との会話に割り込んだ。

千方と呼ばれた初老の男は、露骨に不快な表情を作った。

「光牙、控えていなさい」

闇御前は僅かに後ろ見遣ると、ぴしゃりと光牙を戒めた。

「はっ……」

光牙が頭を下げた。

「千方、貴方も弁えなさい。御前様が私達に探せとおっしゃっておられるのです。ならば私達はその言い付けを守るだけの事、違いますか？」

夜叉姫が、不満顔の千方に言った。

「いえ、姫のおっしゃる通りです……」

千方も頭を下げた。

夜叉姫が闇御前へ向き直った。

「ですが御前様、ただ三種の神器を探せと言われましても、私はともかく、訳が分からぬのはこの千方のみならず他の者達も同様でしょう。ならば、何故に三種の神器が必要なのかお教え願えませんか？」

夜叉姫が言った。

「そうですねえ……。それは我が眷属が、この国を……、この国の人間全てを支配下に置く必要が出て来たからです」

広間のざわめきは更に増した。

「御前様、それは我等にとって真に喜ばしき話ではございますが、“人間は種族が違う他者であって餌にあらず”とおっしゃられ、あれ程までに人間共との共生や調和を求めておられた御前様のお言葉とも思えませぬ。いったい我等が眠りに着いている間に、何があったのです？」

千方の隣に座っている男が大声で叫んだ。

「弾正か……。何があったのかは、お前達の“写しの儀”が済んでから話すとしましょう。ただ、確かにお前の言う通り、私は人間と

約定を交わし、今日まで共生を望んで来ました。ですが、それでは済まぬ事態が起こったのです。我が眷属は、この国の政財界や裏社会にある程度の影響力を持っていますが、この国の表側の政はあくまで人間の物です。ですがこれからは、我が眷属が政を取り仕切る事が必要となったのです」

「分かりました。如何なる理由があるにせよ、いよいよ我が眷属がこの国の支配に乗り出すと言うのはこの松永久秀、この上無き喜びでござる。我々が目覚めた以上、三種の神器など最早手に入れたも同然！　御前様は大船に乗った気でおられませ！」

松永久秀＝俗に言う松永弾正は、自らの膝を叩き豪気に語った。

「弾正、その様な大言壮語、御前様に無礼であろうが！」

先程“語り部”と呼ばれた老人が“ぴしゃり”と言った。

「果心、良いのです。弾正、お前の力期待していますよ」

闇御前は、“語り部”と弾正の双方に目をやると穏やかな口調で言った。

「ははぁ」

弾正は深々と頭を下げた。

「果心、“語り部”のお前には面倒を掛けますが、“写しの儀”を頼みましたよ」

闇御前は“語り部”に向けて穏やかに言った。

「畏まりました。この果心にお任せ下さい」

“語り部”が頭を下げた。

「光牙、今はここまでにしておきましょうか」

闇御前は、後ろの光牙に声を掛けた。

光牙が頷く。

「拝謁の儀はこれまでとし、今宵は別の広間にて目覚めの宴の用意がしてある。皆『鳳凰の間』に移動なされよ」

光牙が大声で言った。

「では、皆今宵はゆるりと宴を楽しんで行きなさい」

そう言って、闇御前は立ち上がった。

一同が一斉に頭を下げる。

「夜叉姫、後で茶室に来なさい。久しぶりに茶でもしんぜましょう」

闇御前は、広間を後にする際夜叉姫に声を掛けた。

「はい、父上」

夜叉姫は一人頭を上げ答えた。

闇御前は深い皺に柔和な笑みを浮かべると、そのまま広間を後にした。

2

2

恭也・李・獣吾の三人は、『C・V・U』の特殊車輌に揺られていた。

無論佐々木も同乗している。

しかも恭也達三人の周りでは、H&K－MP5サブマシンガンを手にした『C・V・U』実働部隊の五人が、三人をぐるりと取り囲んでいた。

李はそうでもないが、獣吾は不満げな態度を露にしていた。

恭也に至っては、乗車してからずっと不平不満を連呼し、不機嫌な顔で足を踏み鳴らしている。

先程は、車内で佐々木に煙草を貰おうとして李に頭を殴られたばかりだ。

「全くガタガタ煩い奴じゃのう。ちょっとは静かに出来んのか！この猿が」

李は、不機嫌この上無い恭也に向かい、流石に苛立ちを露に言った。

「チェッ、煩えなあ。誰が猿だよ。猿はテメエだろうが……」

恭也がぼやいた。

「なんじゃと！」

李が、怒りで顔を赤く染め怒鳴った。

「まあまあ老師、もうすぐ着きますから……」

怒り心頭の李を、佐々木が見るに見兼ねて宥めた。

さっきからこの繰り返しである。

獣吾も流石に辟易した顔で天井を見上げた。

「時にお前さん、何故儂の名を知ってあんなに驚いたのじゃ？　いやそれよりも、何故儂の名を知っておる？」

佐々木に宥められ気を取り直した李が、天井を見上げる獣吾に向き直って尋ねた。

いきなり話し掛けられた獣吾が、驚いて李に顔を向けた。

「儂は人狼には知己がおらぬ筈じゃが、何処で儂の名を聞いた？」

更に李が尋ねる。

「ああ、あんたの名前を聞いたのは俺の爺さんからだ」

「お前さんの爺さんじゃと？」

「ああ、俺の爺さんと言っても血は繋がっちゃいねえ。爺さんは俺の養父なんだ」

「ほう……、して、名は何と言うんじゃ？」

「当麻以蔵だ」

「何じゃと！　当麻以蔵じゃとう！」

今度は李が驚いた。

あまりの驚きに口をパクパクさせている。

なかなか次の言葉が出て来ない様だ。

「まっ、まさか……。あの“防人”の以蔵が生きておったとは……」

李は、何とか声を搾り出した。

「ああ、でもちょっと前に死んじまったがな……」

獣吾の声が細くなった。

ここで言う防人とは、獣人族の動向を常に監視し、人間（朝廷）と獣人族の間を司るよう朝廷に任命された一族の事である。

その昔、獣人族は国津神の末として人々から恐れられ、各々の時代の朝廷（人間側）と血みどろの戦を幾度も繰り返して来た。

平安時代の後期、当時の武将・坂上田村麻呂の功により、遂に獣人族は時の朝廷と和睦し、それ以降岩手県にある遠野の山奥を隠れ里として暮らす様になったのだ。

その時、獣人族は和睦した朝廷との間に人間とは直接関わりを持たず独自の村落を築くとの約定を定め、それ以来当麻家の一族が“防人”としての任を担って来たのである。

「そうか……。それは悪い事を聞いた、すまなかったのう…」

李が申し訳なさそうにぼそりと言った。

「良いさ、気にしちゃいねえよ。それに俺の爺さんが言ってた李周礼にもこうして出会えたんだからな」

獣吾が言った。

「そうか……。奴め、何故生きておったなら一言知らせてくれなんだのか……。しかもまたしても黙ったまま逝ってしまうとは……」

李は肩を落とし、哀しげな瞳でぼそりと呟いた。

「爺さん……」

獣吾は、うなだれる李に声を掛けようとしたが、それ以上言葉が出てこなかった。

獣吾の心遣いを悟ってか、李は顔を上げた。

「……。じゃが以蔵は、儂に会ってどうせいと言うておったのじゃ？」

李は、気を取り直して尋ねた。

「それは、爺さんから最後に預かった手紙に書いてあるよ」

獣吾が答える。

「ではその手紙は？」

「さっきのビルの二階に置いて来ちまったケースの中に入ったままだ」

「そうじゃったのか……」

李は、先程の獣吾と佐々木のやり取りを思い出した。

佐々木や『C・V・U』の隊員は、黙って二人の会話を聴いている。

恭也も先程までとは打って変わり、二人の会話を黙って聴いていた。

しばしの間、車のエンジン音と路面を走るタイヤの音だけが車内に響いた。

「時に以蔵が何でお前さんの養父になったのじゃ？　いや、そもそも以蔵もお前さんも何で生きておるのじゃ？　獣人族は十八年前に絶滅した筈ではなかったのか？　それに以蔵は、お前さん達獣人族に喰い殺されたと聞いておったが……？」

車内の沈黙を破り、再び李が尋ねた。

「やっぱりあんたもそう思っていたのか……」

獣吾がぼつりと言った。

「何か儂らの知らぬ深い事情がある様じゃの」

「ああ、とんでも無えからくりがな！」

「からくりだと？」

それまで黙って二人の会話を聴いていた佐々木が、思わず身を乗り出して叫んだ。

「そうだ。からくりもからくり、大からくりよ」

「そのからくりとはいったい何じゃ？」

李が尋ねた。

「俺はまだ小さかったからあまり覚えちゃいねえが、爺さんの話によると俺達獣人族が滅ぼされたのは、忌ま忌ましいヴァンパイア共と人間の政治家共の策略だったって事さ！」

獣吾が吐き捨てる様に言った。

「何だと！」

「何じゃと？」

李と佐々木は、驚いて同時に声を上げた。

「そうさ、俺の本当の親父もお袋も、同族の仲間も皆、獣人族が爺さんや爺さんの家族を喰い殺したって言う罠に掛けられて、人間共に皆殺しにされたんだ！　本当に爺さんの家族を殺したのはヴァンパイアの仕業だったて言うのに……」

獣吾は、怒りを露にして握り絞めた拳をブルブルと震わせた。

「何と言う事じゃ……。まさか獣人族が絶滅したのが吸血鬼共の策謀じゃったとは…」

「それだけじゃねえ、そん時の政治家の奴らも、全てはヴァンパイアの策謀だと知っていながら、目先の金と自分達の保身の為に奴らに協力したんだ！　強化人間とか言う化け物を使ってな！」

「何？　強化人間だと！」

佐々木が叫んだ。

「何じゃ？　その強化人間と言うのは？」

李が、隣で固まっている佐々木に尋ねた。

「私も噂で聞いただけですが、以前自衛隊がアメリカの軍部と協力して開発を進めていたプロジェクトの事です。詳しくは知りませんが、癌細胞の急激な分裂及び増殖に関わる遺伝子のみを取り出し、それを人間の遺伝子に組み込む事でヴァンパイアや獣人並の再生復元能力を付加し、人工筋肉やドーピング等の薬物投与により飛躍的に筋力を増大させた一種の改造人間なのです。更に言えば、ロボトミー手術等で痛みを完全に除去し、痛みや恐怖を感じない、完璧な

兵士を作り上げるのがその目的だと聞いています。ですがその技術は倫理的に問題がある上に、技術的にもまだ完成の域には達していなかった為、開発途上で計画自体が頓挫したと聞かされていたのですが…、まさか十八年も前に実戦投入されていたとは信じられません」

「だが実際には完成していた……だろ？」

恭也がいきなり口を開いた。

「そうだ。爺さんの話では、俺達の仲間を皆殺しにしたのは、間違いなくその強化人間だと言っていた」

「じゃがそれなら政府が動いたと言う事じゃろう。ならば何故『内調』がその事実を掴んでおらんのじゃ？」

李が佐々木に尋ねた。

「我々『内調』や『C・V・U』は、内閣官房の一部局になっていますが、それはあくまで方便で実質はヴァンパイア専門の独立組織です。ですが獣人族は以前より法務省の公安調査庁の仕切りだったのです。ましてや強化人間は自衛隊とアメリカの極秘プロジェクトで、自衛隊や防衛省の人間でも一部の者しか知らされていないトップシークレットです。幾ら『内調』の下部組織である我々や市ヶ谷に本部を置く『C・V・U』でも、所詮は間借り人過ぎません……。部外者の私達が真実を知る事なんて出来る訳ありませんよ！」

佐々木にしては珍しく、苛立ちを吐き出す様に言った。

「分かった、分かった。悪かったのう、つまらぬ事を言って」

李は、宥める様に素直に詫びた。

「つい取り乱しました。申し訳ありません」

佐々木は気を取り直して頭を下げた。

「いや儂こそすまぬ。お前さん達が政治家や官僚の縦割り行政の中で四苦八苦しておるのを知りながら、本当につまらぬ事を言うてしもうた。この通りじゃ」

李も申し訳なさそうに頭を下げた。

「けどよう、まあ政治家の奴らはともかく、ヴァンパイア達がそこまでして獣人族を皆殺しにした訳はいったい何だったんだよ?」

恭也が獣吾に聞いた。

「そこまでは俺も詳しく聞いてねえよ。ただ爺さんは知っていたみたいだから、李の爺さんに宛てた手紙には、そこの所を詳しく書いてあるかも知れねえ……。ただ……」

「ただ何だよ」

「どうやら御子神恭介とか言うヴァンパイアがこの件に、深く関わっていたらしいんだ」

獣吾はぼそりと言った。

「何だと?」

「何じゃと！」

「ナニーッ！」

佐々木・李・恭也の三人は、あまりの驚きに椅子から腰を浮かし、奇しくも同時に叫び声を上げた。

3

3

窓一つ無い部屋を、二本の燭台が薄暗く照らしている。

闇御前と夜叉姫は、囲炉裏を挟み向かい合っていた。

囲炉裏に掛けられた南部鉄瓶からは、白い湯気が立ち上っている。

夜叉姫の前には、今しがた点てられた抹茶の表面には、こんもりとした細かな泡が緩やかな盛り上がりを見せていた。

夜叉姫は、先程と同じ黒留袖を纏い妖艶な色香を漂わせている。

「冷めぬ内にお上がりなさい」

闇御前は、穏やかな表情でゆるりと促した。

「こうして、父上の御点てになられた茶を頂戴するのも八十年振りですね……」

夜叉姫は、そう言ってゆっくり茶器を手に取った。

茶器を愛でる様に、ゆっくりとその質感を味わうと、夜叉姫は両の手で回し血の様に紅い唇をそっと付けた。

きっちり三口半で飲み干し、懐から取り出した半紙で茶器

に付いた口紅を拭うと、優雅な所作で再び茶器を回し少し前へ置いた。

「結構なお手前でした」

夜叉姫が畏まって言うと、闇御前は皺だらけの顔で優しく微笑んだ。

「世辞は結構です。それよりも、気分はどうですか？」

闇御前が穏やかに訊ねた。

「はい。“渇き”もありませんし、特に問題ありません」

「そうですか、それは何よりです。先程も聞きましたが、今の世を見てどの様に感じますか？」

闇御前は、好奇心で皺の様な目を見開き、夜叉姫の顔を見詰めた。

「何もかもすっかり変わり果て、見る物全てが新しく、街も人間も昔の面影はありません。以前眠りから覚めた時よりも、今の方が余程戸惑いを覚えております」

「そうかも知れませんね。本当に……、本当に何もかも変わってしまいました……。我々を取り巻く環境も……」

闇御前は、酷く落胆した様に声を落とした。

「父上、先程仰っておられた件ですが、この八十年の間に何があっ

たのですか？　　三種の神器の事も勿論ですが、この国を支配しようなどと、父上の御言葉とも思えません」

夜叉姫は、闇御前の顔を伺う様に言った。
その瞳は、まるで闇御前の心の奥を覗き込むかの様に、闇御前の顔をじっと見詰めている。

だが闇御前の表情に然したる変化は見られなかった。

「姫よ、私の心を覗かずとも、果心から“写し”を受ければ分かる事です。あまり他人の心を読むのは感心しませんよ」

闇御前は、夜叉姫を優しくたしなめた。

「申し訳ありません……」

夜叉姫は素直に侘びた。

「三種の神器や今後の事は、果心から“写し”を受けた後に改めて伺うと致しますが、“目覚めの儀”の席に、あの方のお姿がありませんでした。あの方は今どちらにお出でになるのですか？」

夜叉姫が訊いた。

すると、一瞬闇御前の表情が曇った。

闇御前は、何かを思案する様に深く目を瞑り、黙したまま腕を汲んだ。

「父上、どうされました？」

夜叉姫は、闇御前の表情の変化を見て取ると、怪訝な表情を浮かべ再び訊ねた。

「それは……」

闇御前が、重い口を開こうとした瞬間、

“ブーッ”

不粋な電子音が部屋に響いた。

闇御前は、夜叉姫の問いから逃げる様に、手を延ばしてスピーカーフォンのスイッチを押した。

『御前様、柳生様が御戻りになられました……』

女の声が、スピーカーフォンから届いた。

「通しなさい」

闇御前は、夜叉姫の問いをそのままに、女の声に応えた。

「父上！」

夜叉姫が、咎める様に声を上げた。

『畏まりました』

咎める夜叉姫の声が届かなかったのか、女は一言残してスイッチ

を切った。

「父上、何を隠しておられるのですか？」

夜叉姫は、僅かに狼狽した。

丁度その時、茶室の襖の向こう側に人の来る気配があった。

「御前様……。柳生様がお着きになられました……」

襖の向こうから先程の女の声が聞こえた。

「入りなさい」

闇御前は、狼狽え咎める夜叉姫を他所に、十兵衛を部屋に招き入れた。

「失礼します」

襖を開けた女の後ろには、方膝を立てて屈む十兵衛の姿があった。

「十兵衛、ご苦労でした。中へお入りなさい」

闇御前がそう言うと、女の後ろに控えていた十兵衛が、“ずいっ”と前に進み出た。

十兵衛の隻眼が、闇御前と夜叉姫の姿を捉えた。

「こ、これは夜叉姫様……」

十兵衛は、思わず後ろへと一歩退いた。

「気にする事はありません。十兵衛、中へ入りなさい」

闇御前は平然と言った。

「では、失礼つかまつる」

十兵衛は、闇御前へ一礼すると部屋の中へ入った。

「失礼します」

一礼すると、女は音を立てぬ様に襖をゆっくり閉めた。

十兵衛が夜叉姫に視線を走らせると、夜叉姫は十兵衛を睨め付けていた。

「十兵衛……、久しぶりだねえ。元気だったかい？」

夜叉姫は、苛立ちから十兵衛を睨んだまま声を掛けた。

「夜叉姫殿、いつお目覚めなされた！」

十兵衛は困惑した表情を浮かべた。

「今日の昼さね。そう言えばお前は、さっきの“目覚めの儀”には出ていなかった様だねえ」

夜叉姫は、粘っこい口調で咎める様に言った。

「これは失礼いたした。幾ら知らなかったにせよ、この度の非礼、

どうかご容赦下され」

十兵衛は素直に頭を下げた。

「これ夜叉姫、十兵衛は私の用で“目覚めの儀”に出れなかったのです。お前が咎める事は何もありません。控えていなさい」

闇御前はぴしゃりと言い放った。

すると夜叉姫は、苛立ちを顕に十兵衛と闇御前の双方に目を遣った。

十兵衛は、夜叉姫に向き直り背筋を正すと、その場で深々と頭を下げた。

「夜叉姫殿、“お目覚め”おめでとうございます」

十兵衛は、頭を下げ挨拶をし直した。

「ご丁寧な挨拶いたみ入る。これからもよろしゅうになあ」

夜叉姫は、わざと慇懃に答えた。

「十兵衛、挨拶はもう良いです。報告を聞きましょうか」

闇御前は、未だ夜叉姫の問いに答えぬまま十兵衛に言った。

「はい……。ですが、その前にお人払いをお願い致します」

十兵衛は畳に頭を伏したまま畏まって言った。

「私が居ては話せぬと言うのか？」

夜叉姫が憤慨した。

「十兵衛、仮にも夜叉姫は私の娘です。何も気に病む必要はありません」

「承知しておりまする。されど、非礼は承知の上で、今はお人払いをお願いつかまつる」

十兵衛は、更に強く額を畳に擦り付け、闇御前に嘆願した。

「分かりました。姫よ、下がっていなさい」

十兵衛のただならぬ雰囲気を察してか、少し逡巡した後、闇御前は夜叉姫に向かって言った。

「父上！」

夜叉姫が咎める様に声を上げた。

「他の者の前で父と呼ぶなと言ってある筈です。お前は宴の席へでも行っていなさい」

闇御前は、有無を言わさぬ口調で言った。

「畏まりました。御前様……」

そう言って夜叉姫は、不承不承に頭を下げた。

そして顔を上げ、伏せたままの十兵衛をひと睨みすると、そのまま部屋を後にした。

「十兵衛、もう良いです。面を上げなさい」

闇御前がそう言うと、

「まだ人払いが済んでおりませぬ」

そう言って、十兵衛は部屋の天井の一角を睨め付けた。

「おや才蔵ですか？　いけませんねえ。お前も下がりなさい」

闇御前も十兵衛と同じ箇所に目を向け、姿見えぬ相手に声を掛けた。

「ははっ、しかしさすがは柳生十兵衛。我が隠形の術、良くぞ見破ったな！」

天井裏から才蔵と呼ばれた男の声が聞こえた。

さも愉しそうな口ぶりである。

「何の、貴様の隠形の術も大した物よ。霧の才蔵……技前はまだまだ錆びておらぬ様だの！」

「それは十兵衛も同じ事よ。では御前様、十兵衛……、御免！」

天井裏からそう声がした途端、ふと霧の様に完全に気配が消失し

た。

十兵衛はしばらくの間その隻眼で天井を睨み付けていたが、完全に誰も居なくなった事を確認すると、“ほう”と大きく息を吐き、再び闇御前へと向き直った。

「用心が過ぎますね。何があったのです？」

闇御前は探る様に言った。

その時、囲炉裏に掛けられていた南部鉄瓶の蓋が“ことり”と音を立てた。

4

4

恭也達三人は、霞ヶ関の総理府ビル地下にある『内閣情報調査室対吸血鬼特務分室』通称『内調』の中にある一室に居た。

安物で折りたたみ式の簡素な会議用テーブルと、これまた簡素で何の変哲も無い折りたたみ式のパイプ椅子の他には、何の飾り気も無い無機質な部屋であった。

ただ分厚いコンクリートの壁と、厚さ何センチもある鋼鉄の扉、そしてミエミエでお決まりのマジックミラーが“でん”と壁に備え付けられた、見た目もそのまま、文字通りの尋問室だ。

その尋問室の中に、今恭也達三人だけが座らされている。

恭也と獣吾は、先程の闘いで着ていた服はボロボロとなり、この部屋に着いた時は殆ど半裸の状態であった。

その為今は、この『内調』の警備班が着る制服の上下を借りて身に纏っている。

制服と言っても、濃紺の襟付きのシャツと、同色のカーゴパンツだ。

恭也はともかく、図体のデカイ獣吾に至っては、用意されている中で一番大きいサイズを選んだにも関わらず、シャツの前は開け、シャツやパンツの裾も寸法が足らず不格好な事この上ない。

何の事は無い……。

要するに、三人は佐々木達に連行され、今この部屋に監禁されているのだ。

いきなり銃を突き付けられて、この様な場所へ連れて来られれば、どんなにふてぶてしい者でも多少は落ち込んだり、不安に駆られて焦ったりする筈なのだが、この三人は少し違っていた。

いや少しなどと生易しいモノではない。

常人とは大違いである。

恭也と獣吾の二人は、あの闘いの後で猛烈に腹が空いていたのか、部屋に入れられるや否や、そこが尋問室である事を逆手に取り、『取り調べをするならカツ丼ぐらい出すのが常識だ！』などと言って暴れ出したのである。

その為しかたなく二人の要求に応じるハメになったのだが、なにせ極秘の部署である為に出前を取る訳にもいかず、佐々木が部下に○野家の牛丼を買いに行かせたのだ。

二人が注文したのは、全部で牛丼特盛十二人前と味噌汁五人前で、その内の牛丼七人前と味噌汁二人前が獣吾の胃袋に消え、牛丼四人前と味噌汁二人前は恭也の胃袋に収まった。

獣化した後は余程腹が減るのであろうか、常人が一食で食べる量を遥かに超えている。

獣吾の食べた量は、大食い選手権の選手でも目を剥く程であった。

牛丼特盛十二人前と味噌汁五人前の内、残りの牛丼と味噌汁を一人前づつを李が食べる事になったのだが、さすがに佐々木への申し訳けなさからか、それとも恭也達の食べっぷりに辟易して食欲を無くしたのか、李は牛丼を半分しか食べる事が出来なかった。

隣のモニタールームからマジックミラーで覗いていた佐々木や水野達は、見ているだけで胸やけしそうだった。

「はぁ喰った喰った」

恭也は、使い終わった割り箸を空になった牛丼の入れ物に放り投げると、はち切れんばかりに膨らんだ腹をさも満足そうにポンポンと叩いた。

獣吾も最後の味噌汁を飲み干すと、山になった空の容器の上に、今空になったばかりの味噌汁のカップを更に高く積み上げた。

恭也は、先程佐々木に貰ったロングピースに、これまた佐々木から借り受けたジッポライターで火を点けた。

さも美味そうに大きく煙を吸い込むと、味わう様に口の中で煙を転がし“ふぅ”と大きく紫煙を吐き出した。

自分の飲んだ味噌汁のカップを灰皿代わりに、煙草の灰を指で落とす。

「へえ、煙草は絶対セッタだと思ってたけど、ロンピーも結構美味いモンだな」

手に持ったロングピースを眺めながら、恭也はのんびりとした口調で呟いた。

自分の立場や状況をやはり理解していないのか、全く呑気そのものである。

それを見ていた李が、大きく溜息をついた。

「あの二人、自分達の置かれている状況を理解しているんですかねえ」

尋問室の隣の部屋で、マジックミラー越しに恭也達を監視しながら、水野は呆れ顔で言った。

無論恭也達には聞こえていない。

厚さ数センチにも及ぶ分厚い壁と、あらゆる周波数帯に対して完璧な防音設備を整えた尋問室では、如何に獣人であっても室外の音を聞き取る事は出来ない。

ましてや、人間の声帯から発する音域などは完全にシャットアウトするシステムになっている。

だがセキュリティの面に於いてここは、市ヶ谷の『C・V・U』本部に遠く及ばなかった。

本来であれば、いざと言う時の為に『C・V・U』の実働部隊や他にも自衛隊員達が数多く滞在し、武器や兵器も豊富な市ヶ谷の本部に連行したかったのだが、何しろ自衛隊の駐屯地へ部外者の三人を連行する訳にも行かない。

更に李に対する信頼もあった。

今回の一件で、李が十八年間にも渡る歳月、ヴァンパイアであった亡き御子神恭介の一子“御子神恭也”を、自分達に隠して育てて来た事実は拭い様も無いが、これまで幾度となくヴァンパイアの捜査や戦闘に協力し、佐々木のみならず他の隊員達の命を幾度となく救って来た李の功績は、全幅の信頼を寄せるに足るものがある。

無論李の人柄に寄る信頼も厚いのだが、佐々木には依然李に対する尊崇の念を強く抱いていた。

それにこの当麻獣吾と名乗る獣人だが、生物学的に人間では無いと言う点以外は、年齢はまだ若いが何処か信頼に足る人物の様に思える。

確かにヴァンパイアや、十八年前の事件に関わった当時の政治家達には強い殺意を抱いている様だが、何の罪も無い家族や仲間を皆殺しにされたのだ。

復讐心に駆られて当然だし、自分であっても間違いなく復讐の鬼と化していたに違いない。

また無関係な人間に対しては極めて温厚そうな態度を見る限り、そう言った意味ではこの男より“危険”な“人間”は幾らでも居た。

問題は御子神恭也だ。

彼の父親である故御子神恭介は、例えヴァンパイアとは言え李同様全幅の信頼を寄せるに足る人物で、佐々木にとっては李と共に酒

を酌み交わした友人でもある。

だが幾ら父親が好人物で、育ての親がこの李周礼であったとしても、本人が好人物とは限らない。

好戦的で反抗的、しかも粗暴……。

どう見ても街の不良かチンピラだ。

しかもただの不良ではない。

彼はヴァンパイアと獣人の混血なのである。

危険と言えばこれ以上危険な男はいないだろう。

実際、人間としての御子神恭也の事を調べるのに全く時間を要しなかった。

彼の資料は、所轄に腐る程あったからだ。

本名＝李恭也

生まれたばかりで李周礼に引き取られ、李の養子となる。

ただ今では、理由は不明だが通称として実父の姓である“御子神”を名乗っていた。

本籍は神奈川県横浜市だが、現住所はあの事件のあった近所のアパートとなっている。

都立城北高校の三年で現在十八歳。

高校生でありながら深夜までＢＡＲのアルバイトをした挙げ句、更には様々な飲み屋の用心棒までしていた。

数々の事件を起こし、その殆どが暴力・傷害事件に関わる物だ。

鑑別所送りになっていないのが不思議なくらいである。

彼の関わった事件の原因は、相手から因縁を付けられ喧嘩を売られたとか、某かの暴力事件に巻き込まれたと言ったケースが多かった。

しかも喧嘩相手は、暴走族やギャング等の不良達か本職のヤクザであり、相手が大勢で武器を所持していたのに対し、御子神恭也はあくまで単独で素手による喧嘩であった。

その為幾ら勝者が御子神恭也で、相手が怪我を負って病院送りになっていたとしても、傷害事件の加害者として立件するには無理があった。

それらの理由から、結果的に仕方なく被害者として扱われる事が多く、家庭裁判所への送致には至らなかったのだ。

せいぜい補導と訓告止まりである。

かなり粗暴な人物の様だが、その一方仲間思いで義理人情にも厚いとの評価もあった。

先程垣間見たこの男の表情は、義理や友情に厚い極めて人間的な

ものであった。

『……このビルの二階で死んでるゾンビ達の中に、派手なフレア柄の黒いTシャツにブラックジーンズを穿いて頭割られて死んでるゾンビがいる……』

『……そいつは俺のダチだから、絶対粗末に扱うんじゃねえぞ！……』

『……頼むぜ、奴は馬鹿だけど良い奴だったんだ。くれぐれも手厚く弔ってくれ……』

特車に乗り込む際に、御子神恭也が言った言葉が思い起こされる。

あの時の真剣な眼差しは、決して偽りなどとは思えない。

粗暴で反抗的な態度の裏に、実はこの男の本当の優しさみたいなものが隠されているのかも知れなかった。

佐々木はそんな事を考えながら、恭也達三人を眺めていた。

その時、甲高い電子音を響かせ、佐々木達の居る部屋の電子ロックが解除された。

ドアが開き、室長の久保が入って来た。

その後ろに、先程まで佐々木と共に李を尾行していた杉本と不破の姿も見える。

不破は、両手で長方形のエレキギターのハードケースの様な代物

を持っていた。

獣吾のスーツケースである。

巨大な獣吾が持つとそれ程感じないが、不破が持つとそのギターケースが異様に大きく感じられた。

いや、感じるだけではない。

実際に大きいのだ。

通常のギターケース等では考えられない大きさの特注品であった。

ケースの中には、当然ながら『降魔の斧』が入っている。

かなりの重量があるのだろう、不破はヨロヨロとふらついていた。

不破は佐々木達と別れた後、聖華女子高校の校舎裏で気を失っていた杉本を起こし、その後二人で現場の廃ビルに戻った。

そして佐々木から電話で頼まれた獣吾のケースと恭也の携帯電話、更に恭也の財布とライターを、未だ現場に残り作業をしていた『C・V・U』の隊員から預かり、この『内調』の本部まで持って来たのだ。

「三人の様子はどうだ?」

佐々木の顔を見るなり、室長の久保が聞いた。

「はい。先程食事が終わり、今はご覧の通りです」

佐々木は、久保をマジックミラーへと促した。

久保は尋問室の三人へと視線を移した。

「だいぶリラックスしている様だな。では行こうか」

そう言うと、久保は尋問室へ向かうべくモニタールームを出ようと扉へ向かった。

佐々木がそれに続く。

実際、久保が尋問に参加する事は異例中の異例だが、今日に限っては事の重大性や、古くからの知己である李に対する礼を尽くしての事である。

「モニターと録画はちゃんとしておけ。あと俺達と同行して来た『C・V・U』の実働部隊と警備班を、尋問室の前で待機させておくんだ！　フル装備でな！」

佐々木は水野に命じた。

そして久保と佐々木がモニタールームを後にした時、扉の外で待機していた杉本と不破が佐々木に声を掛けた。

「主任、申し訳ありません。まんまと老師にしてやられました。」

杉本が頭を下げる。

「あの老師が相手では仕方ない。それより身体は大丈夫か？」

「はい。かなり手加減して貰った様で、どこにも異常はありません」

「そうか、ではお前は不破と共に市ヶ谷に戻れ、今日はご苦労だった」

「はい、分かりました」

そう言って、杉本は久保や佐々木に一礼した。

「主任、これが先程主任から頼まれて現場から運んで来た品です」

不破は、床に置いたケースとビニール袋に入れられた恭也の携帯、財布、ライターを佐々木に見せた。

「このケースの中身は？」

佐々木の横に居た久保が尋ねた。

「ハッ、中身は総金属性の戦斧と、老師宛ての手紙、後は恐らく戦斧を手入れする為の細々とした道具類でしょう」

「戦斧だと？　そんな物を尋問室に持ち込む訳には行かんぞ！」

久保は佐々木を見遣った。

「不破、そのケースの中から老師宛ての手紙だけを取り出してくれ。後は資料の保管室にでも入れておくんだ。それが済んだら杉本と共に市ヶ谷に戻ってくれ」

「分かりました。では主任、これをお願いします」

そう言って不破は、持っていたビニール袋と李宛ての手紙を佐々木に手渡した。

「今日は無理を言ってすまなかったな」

ビニール袋や手紙を受け取った佐々木が言った。

「いえ。それでは室長、主任失礼します」

不破は、再び重いスーツケースを両手で持ち、杉本と共に佐々木達に背を向けた。

「では室長……」

佐々木は久保に向き直った。

「うむっ」

久保が頷く。

空いている手でスーツのポケットをまさぐり、取り出したカードを尋問室の扉の脇にあるカードリーダーの長細い溝に通した。

更にカードリーダーの下に取り付けられた暗証番号用のテンキーに、予め登録された暗証番号を打ち込む。

すると尋問室の重い扉のロックが、鈍い金属音と共に解除された。

佐々木が先導して扉を開けると、恭也達三人の視線が一斉に佐々木へと集中した。

5

5

視線を浴びせられた佐々木は、特に気にする様子も無く久保に先を譲った。

久保が先に尋問室へ入る。

李と久保の目が合った。

「老師、お久しぶりですな。いつも佐々木やウチの者がお世話になっております」

久保はその場で頭を下げた。

「いやいや、儂の方こそこの度は迷惑を掛けた。本当にすまなかったのう」

李も恐縮して立ち上がると、深く頭を下げた。

「お掛け下さい老師」

そう言って久保は、李に座るよう促した。

そして自らも、李とテーブルを挟み対面する席に座った。

佐々木も、扉が閉まり自動ロックが掛かった音を確認すると、久保の隣の椅子に座った。

尋問する側が二人共着席するのは珍しい事だ。

これでは尋問と言うよりも、他から見れば何かの話し合いかちょっとしたミーティングの様にも見える。

「老師、本当にお久しぶりですな。お世話になりっぱなしでご挨拶にも伺わず、いや本当に申し訳ない」

「いやいや、それはお互い様じゃよ」

尋問？　　は、和やかなムードで始まった。

佐々木は、不破から預かった袋を恭也にそのまま差し出した。

「現場に残っていた君の私物だ。財布とライターも入っている。バイクはまだ運んでいないから、キーは後で渡す」

「ああ、悪かったな。このライターお気に入りだったんだ」

「それと君の私物は危険だから、今はこちらで預かっておく。老師宛ての手紙だけは取り出しておいたがな」

佐々木は獣吾に向かって言った。

「仕方ねえなあ。アレは俺の家に代々伝わる大切なモンだ。何でも天皇から貰った物らしいから、大切に保管しといてくれよ！　それと、俺が帰る時には必ず返してくれ」

獣吾が言った。

「悪いがそれは保証出来ない。何せアレは凶器だからな」

佐々木は、重い口調で“ガン”として言った。

「何だと！　アレは俺の大切な物だ。もし返さねえって言うならそん時は……」

獣吾は、“怖い”口調で佐々木を睨み付けた。

「待ちたまえ。我々は返さないと言ってる訳じゃあない。返すか返さないかはむしろ君次第と言う事だ」

横から久保がフォローに入った。

“フン”

獣吾は鼻を鳴らした。

「さて老師、この度の事、詳しくご説明頂きましょうか」

久保が、真顔で李に向き直った。

先程までの和やかな雰囲気は微塵にも無い。

久保は、公私の区別をしっかり付けるタイプらしい。

「そうじゃのう……。じゃがその前に、どうしてお前さん達に恭也の事が分かったのじゃ？」

「老師、質問しているのは私達ですよ。答えをはぐらかされては困

ります。……が、……まあ良いでしょう」

久保は、横に座る佐々木へ視線を送った。

佐々木は頷いた。

「最初に私がおかしいと思ったのは、今朝『C・V・U』の科検から報告を受けた時でした。実際それまでも、何故ヴァンパイア同士が仲間割れを起こしたのかと言う漠然とした疑問はあったのですが、今までもそう言う事が無かった訳ではありませんし、我々の知らない所で奴らの始末屋が動いたとも考えられるので、今朝の報告を待っていたのです」

佐々木は、ゆっくりと語り出した。

李や久保は黙って話を聴いている。

獣吾は、話の内容が見えない為ただ聴くフリをしているだけだ。

恭也は、自分に関する事なのだが長い話が苦手なのか、我関せずと言った面持ちで天井を眺めていた。

「……そこで今朝の報告を聞いた時、漠然と感じていた疑問が明確な謎に変わったのです。まず、殺害された高木晶子は心臓を手で突き抜かれて死んでいました。それはもう一人の、殺害された村田浩平の手に付着した血液からも確定されています。しかし村田を殺害した犯人を特定する証拠が何も発見出来なかったのです……」

晶子と村田の名前が上がった瞬間、恭也はギリリと奥歯を噛んだ。

佐々木はそれに気付いたが、あえてそのまま先を続けた。

「……最初は、逃亡した飯沼彰二の可能性も否定出来ませんでしたが、奴が残した手首からは、村田殺害を裏付ける物証が何も得られませんでした。そこで第三者の存在が浮上して来るのですが、まず老師の証言や村田の死体の状態から見て、犯人が老師でない事は明らかです。更に第三者の存在を裏付ける、問題の血痕が発見された事が決定的でした……」

佐々木が意識的に言葉を区切った。

恭也の喉が“ぐびり”と音を立てる。

恭也は、いつの間にか佐々木の話を真剣に聞き入っていた。

「……ですがこの第三者の残した血痕は、通常の血液とはかなり異なっていました。そこで我々は、その血液の持ち主が、最近ヴァンパイア達を襲っている“ハンター”と呼ばれる者の仕業ではないかと考えたのです……」

「オイ、オイ！　冗談じゃねえぜ！　最近ヴァンパイアの奴らを襲ってるハンターって言うのはどうやら俺の事らしいが、その件は俺には関係無いぜ！」

獣吾は、いきなりテーブルを叩いて怒鳴った。

「分かっている。最後まで話を聞け」

苛立つ獣吾を、佐々木は冷静に去した。

「……でももしハンターが犯人であれば、高木晶子が村田浩平に殺害された事への説明が付きません。更にはハンターが村田浩平を殺害した後、一緒に居た飯沼彰二を殺害せずに立ち去った点にも疑問が残ります。血痕が残っていた以上、第三者の存在は確実な筈なのですが、老師は死亡している二人と逃亡した飯沼彰二以外、第三者の存在について何もおっしゃっておられませんでした。したがって老師が誰か、もしくは何かを目撃されて、ワザと何も話されなかったのではないかと考えたのです……」

「むう……。さすがじゃのう。儂はそこまで頭が回らんかったわい」

李は自分の立場も忘れ、ただただ佐々木の推理に感心した。

「感心して頂かなくて結構です。こんな物は推理の内にも入りません」

佐々木の物言いに李は肩を竦めた。

「……そして、室長のお陰で所轄からの協力が得られ、取り敢えず私は高木晶子と村田浩平の線から第三者を割り出せないかと、所轄に二人の身元の照会を依頼したのです。すると直ぐに村田浩平の線から、村田浩平が消息を絶った当日に彼等と争った人物、つまり御子神恭也……。君の存在が明らかになったと言う訳だ……」

佐々木が鋭い目で恭也を見詰めた。

恭也は、佐々木の目の圧力に気圧され僅かに目を逸らせた。

「君の名前を所轄の刑事から聞かされた時には、その苗字にさすがに驚かされたよ。まさかあの恭介さんに息子がいて、しかもそれを

老師が養父となって今日まで育てておられたとは……」

「それで儂に連絡を取って来たのじゃな？」

「そうです。ただ私も半信半疑でしたし、恭也君が恭介さんの息子だと言う事に間違いないとしても、この事件での謎の第三者が恭也君であるとの確証にはなりません。何と言っても謎の第三者は特殊な存在なのですから……。だから老師に直接お伺いしようと思ったのです」

「じゃがお前さんの話しを聞いても儂が恭也の事を惚けたので、儂にカマを掛けたと言う訳じゃな……」

「申し訳ありませんでした。ですが飯沼彰二の行方、そして謎の第三者の正体、この二つを探る事が我々には急務だったのです」

「じゃから儂に例の話をした後、わざわざ満月の事を切り出したのじゃな？」

「はい。もしも私の推察通り、恭也君が謎の第三者であれば、老師が何らかの行動を起こされると思いましたので……」

「まんまと引っ掛かった訳じゃ……。じゃが恭也の事を知ってもなお直接恭也の所へは行かず、わざわざ儂の所へ来てくれたお前さんの心遣いを無駄にしてしまって本当に悪かったのう」

李は、本当に済まなそうに頭を下げた。

「いえ、恭也君の事を話せなかったお気持ちはお察しします。老師のお立場であれば、恭也君を守りたいのは当然です。何も謝られる

必要はありませんよ」

佐々木の目に柔和な色が戻っていた。

李は肩を落としていた。

その横で、恭也も黙ったまま俯いている。

今朝から李に言われて来た言葉が、恭也の頭を過ぎっていた。

「老師、我々は恭也君の事がまだ何も分かっていません。恭介氏の事や、恭也君の事について最初から話して頂けますか?」

それまで黙って話を聴いていた久保が、李に向かって言った。

「そうじゃのう、あれは十八年前、恭介が遺体で発見される前夜の事じゃった……」

李は、遠い眼差しで天井を見上げ、ぽつりと……そしてゆっくりと語り出した。

6

6

「あれは十八年前、恭介が遺体で発見される前夜の事じゃった……」

李は、遠い眼差しで天井を見上げ語り出した。

「最後に恭介に会うたあの夜、恭介はまだ生まれたばかりの赤子じゃった恭也を抱いておった。そして儂に、恭也の面倒を看るよう頼んだのじゃ」

「では恭介さんが亡くなる前日、老師は恭介さんとお会いになっていたのですか？」

佐々木が驚いて叫んだ。

「うむ……。あの時儂は、恭介と話したのが数日前だとお前さんに嘘を付いたが、本当に会うたのは恭介の遺体が発見された前日の夜よ」

「何故その様な嘘を……？」

久保が更に詰め寄った。

「恭也の事を隠そうとした後ろめたさからか、咄嗟に嘘が口を突いて出てしまったのじゃ……」

李は伏目がちに言った。

「むう……」

久保は、それ以上追及をせず閉口した。

「最も恭也の事以外は、あの時お前さんに話した通りじゃよ」

李が言った。

「老師、恭介氏はその時どんな話をされていたのですか？」

久保が尋ねた。

「あの時、恭介は何を急いでおったのか分からぬが……、いや、今思えば奴等に追われていた恭介は、儂や恭也に危険が及ばぬ様に先を急いでおったのやも知れぬ。実際あの時交わした会話と言えば、『……恭也の事を頼む、人間として育ててくれ……』と言う事と、後は『……今この国で何か途轍も無く大きな事が動き出そうとしている。だから自分はそれを阻止せねばならない……』と言う事だけじゃった」

「それだけ……、たったそれだけしか恭介さんは言わなかったのですか？」

佐々木が言った。

「うむ、本当に他には何も言うておらなんだ。何しろあの日の恭介は酷く疲れ、しかも着ている身なりも相当見窄らしい恰好じゃった。家に上がれと言うたのじゃが、ここで良いと言って庭先で話しただけじゃったからのう」

李は、あの夜の恭介の姿を脳裡に思い起こしていた。

「しかし結局のところ、その翌日恭介さんは遺体で発見され、その後の捜査でも結局は何も分からず終いだった……」

久保は、当時を思い出しながら呟いた。

「そうじゃ。恭介の遺体が見付かり、それが吸血鬼共に因る犯行だと分かった後、お前さん達と共に奴らの動きを探ったが何も出ては来なんだ……」

「その内に政府からの捜査中止の命令が出て……」

佐々木は、苦い思い出を噛み潰す様に言った。

「うむ。あれは明らかに捜査を打ち切らせる為に奴等が裏で政府に働き掛けたのじゃ。恭介が人間を襲い血を吸ったと冤罪を被せての！」

李は、吐き出す様に言った。

顔にはやり切れぬ怒りの色を浮かべている。

「待てよ、それじゃあ俺達の一族を皆殺しにした時と同じじゃねえか！」

それまで黙っていた獣吾が、いきなり声を荒げた。

「うむ。結局政治家にとって大切なのは金と自己保身だけですからな」

久保は、憎々しげに吐き捨てた。

「それからと言うもの、ヴァンパイアどもは犯罪を犯した仲間をすぐ我々に引き渡すか、自ら処分する様になりました。わざとらしいぐらいに……」

佐々木が言った。

「そうじゃ、奴らは裏で何かを密かに企んでおる。それを悟らせない為に、あれ以来表向きは真摯で協力的なそぶりをしておるのじゃ」

李は、憎々し気に言葉を吐き出した。

「老師、それは先日御山の阿闍梨様が言っておられた件と何か関係があるのでしょうか？」

ふと、佐々木が思い出した様に尋ねた。

「分からぬ……。既にあれから十八年もの歳月が経った今、恭介が言うておった件と慈海の言った件が繋がりのある事かどうかは、慈海から直接話を聞かねば分からぬよ。ただ慈海も、この国が揺らぐ程の何かを奴等が企てておると言うておったのじゃろう？」

「ですが、この国が揺らぐ程の企てとは、いったい何なのか想像も付きませんな……」

久保は、溜め息混じりに呟いた。

「老師、話を逸らせてしまい申し訳ありませんでした。話を戻しま

すが、恭也君を託された後はどうされたのですか？」

佐々木が聞いた。

李が“ちらり”と恭也の顔を伺う。

恭也は複雑な表情を見せた。

「まあ本人の前でおっしゃり難い事もあるでしょうが、今後の我々にとっても大切な事ですので全てをお話下さい」

久保は、一瞬恭也の方を見遣り、すぐに李に視線を戻して言った。

「恭介から恭也を預かった後、儂は恭介の遺言通り恭也を人の子として育てる為、以前から考えておった呪法を赤子の恭也に施した」

「呪法を……」

佐々木が呟いた。

「吸血鬼の内なる“魔”を封印する呪法じゃ。それにより『屍鬼』は元の屍に戻し、『貴族』は魔力を封印する事で、魔族としての存在その物を滅する呪法じゃよ」

「それは以前老師から伺った事があります……」

佐々木が答える。

「うむ。そこで儂が考えたのは、強い呪を直接身体に刻む事で、呪自体の効果を永続させる事が出来ぬか……、つまり本来魔族である

『貴族』から“魔”の因子を封じる事で、恭也を人間として生きさせる事が出来ぬかと言う事じゃった……」

久保も獣吾も、李の話に黙って耳を傾けていた。

恭也は、今朝この話を李から聞かされていた為か、腕を組みをして煙草を吹かしていた。

李は恭也の表情を確認し、再びゆっくりと説明を続けた。

「じゃが実際は、幾ら“魔”の因子を封じても、その身体のＤＮＡに書き込まれた吸血鬼としての本能まで押さえる事は出来ぬ。じゃが『貴族』は生まれた時は全て人間の赤子と同じで、その後個体差はあるが、ある時期が来ると吸血鬼としての因子が突然目覚め、吸血鬼として覚醒する。無論覚醒の引き金となるのは内なる“魔”その物なのじゃが、ならば“魔”を封じる事で吸血鬼として覚醒せねば、永久に人間のままでいられるのではないかと考えたのじゃ」

「……」

「……」

「……」

全員が押し黙ったまま、李の話に耳を傾けている。

「そして儂は、赤子の恭也の額と胸に“魔”を封じる禁呪を彫込んだのじゃ」

「呪を彫込んだぁ？　そ、それは、刺青と言う事かよ？」

思わず獣吾は声を上げた。

「うむ。実際は針に墨は付けておらぬから刺青とは言い難いが、細く禁呪の文字を直接肌に彫込んだのは事実じゃ。後は儂らが飲むのと同じ吸血鬼化を防ぐ仙薬を飲ませ、ヴァンパイアウィルスに対する抵抗力を付けさせたのじゃ。それにより、恭也は今まで人の血を吸う事も無く、身体能力もほぼ人間のままで生きて来られたのじゃ」

「むう……」

久保は、鼻から大きく息を吐いた。

「では恭也君は、自分が何者であるのかも知らず、今まで人として生活して来たのですか？」

佐々木は身を乗り出して尋ねた。

久保も獣吾も、黙ったまま腕組みをして聞いている。

恭也は吸っていたロングピースを、先程食べた味噌汁のカップに掘り込んだ。

少し残してあった味噌汁に、火の点いたままの煙草が入り“ジュッ”と湿った音を立てる。

「その通りじゃ。じゃからこれまでは、吸血鬼特有の吸血衝動に襲われる事も無く、人としての身体能力の許容範囲を超えるでも無く、普通の人間として生活して来られたのじゃよ。つまり吸血鬼としての覚醒を完全に押さえる事に成功しておったのじゃ。つい先日まで

はのう……」

李は、思わず視線を恭也に注いだ。

佐々木達三人も同時に恭也に視線を向ける。

恭也は、浴びる視線から逃れるように視線を上に逸らした。

「なる程、老師の話はだいたい分かりました。では恭也君、先日の夜の事を詳しく話してくれるかね？」

久保が恭也を見据えて言った。

恭也が久保に視線を戻す。

「分かったよ。何処から話せば良いんだ？」

「最初からだ。村田浩平との喧嘩の件は、所轄の岩田と言う少年課の刑事から話は聞いている。だが詳しい話を君の口から聞きたいんだ」

佐々木が久保の代わりに言った。

「岩か……」

「彼は君の事を良く知っている様だな。彼が君の事を心配していたぞ」

「そうか……。岩が……」

恭也はぼそりと呟いた。

「さあ話してくれ」

佐々木は恭也に促した。

「あれは五日前の夜だった……」

恭也は、今朝李に話したのと同じ事を、再び語り出した。

7

7

闇御前と十兵衛は、窓一つ無い茶室で囲炉裏を挟み向かい合ってた。

十兵衛が人払いを要望した為、今この茶室には闇御前と十兵衛の二人しか居ない。

風も無いのに微かに揺れる二本の灯明が、二人の影をゆらゆらと映し出していた。

「……実は御前に内密にお伝えしたき儀がございます」

十兵衛は、そろりと話を切り出した。

「内密に……ですか……。良いでしょう。話してみなさい」

「はい。ではその前に、御前から命じられいた者の始末……、先程着けて参りました」

「そうですか。ご苦労でした。始末を着けたと言う限り、お前のする事に不備は無いと思いますが、一応首尾良く行きましたか?」

「ハッ、実はそれが思わぬ邪魔が入りまして……」

「何ですって!? ではお前程の男が、飯沼彰二とか言う外道一匹仕損じたと言うのですか?」

「いえ、飯沼彰二なる者の始末は致しました。ですが先程も申し上げた様に、思わぬ邪魔が入りまして、奴や、奴が犠牲にした者共の遺体や現場の後始末をする事が出来なかったのです」

十兵衛は、深々と頭を下げ詫びた。

「そんな事ですか。それなら『内調』の久保に連絡を入れておけば済む事です。何も心配には及びません。ただその邪魔者とはいったい何者ですか？　お前程の者が梃摺るとは相当な相手だと思いますが」

「はい……」

「で、その相手とは何者なのですか？」

「獣人です……」

「何ですって！」

闇御前は、驚きのあまり思わず腰を浮かせた。

「しかし獣人族は十八年前に滅ぼした筈です。何かの間違いではないのですか……？」

「いえ。まだ若造でしたが、本人が間違いなく自分は獣人であると言っておりました。更に私がハンターかと尋ねましたところ、呼び名はともかく、これまでも我が眷属の者達を幾度かその手に掛けたとも申しておりました……」

「何と……！　十八年前に絶滅した獣人族の生き残りがハンターで

あったとは……」

「はい。確かにそう言っておりました」

「ふうむ……」

闇御前は、腕を組み大きく溜息を付くと、皺の様な目をゆっくりと閉じた。

「……なる程……、今宵は確か満月……。もしそやつが真に獣人であれば、お前程の男が遅れを取ったのも理解出来ます。何しろ満月の夜の獣人はほぼ無敵……。我々『貴族』すら凌駕する程の能力を発揮しますからね……。ましてや肉体や技による闘いで、満月の夜に立ち会い生きて帰れるのは、我が眷属の中でもお前ぐらいのものでしょう」

「ありがとうございます。ですがそのお陰で、私は長年の友、愛刀の“典太”を失いました……」

十兵衛は、屈辱に唇を噛んだ。

握り絞めた拳がワナワナと震える。

「そうですか……。“三池典太”……まさしく名刀であったものを……」

闇御前は、さも残念そうに哀悼を込めて呟いた。

「奴は『降魔の斧』と称する総金属製の斧を手足の如く自在に操り、その斧にて我が愛刀の“典太”は叩き折られたのです」

「何と！　今『降魔の斧』と言いましたか？」

闇御前が大声を上げた。

「ご存知なのですか？」

思わず十兵衛も大声を上げる。

「『降魔の斧』を使う獣人ですか……。ではその者の名前は聞きましたか？」

「確か……、当麻……獣吾だったかと……」

“当麻”と名乗ったのですか？　その者は！」

闇御前が皺の様な目を見開き、思わず身を乗り出す。

「何者なのですか、その当麻とは……」

「当麻とは“防人”です」

「防人……、あの“防人”ですか……？」

「恐らくお前の言っている“防人”とは多少違うと思いますが、私の言う“防人”とは、その昔、時の朝廷と獣人族が和解の約定を取り交わした折、朝廷側から獣人族を監視し、また朝廷や近隣の村人との間に、様々な橋渡しをする為任命された一族の事です。陰陽の術に通じ、以前は土御門家ともゆかりがあったと聞いています。しかし当麻の者はあくまでも人間……、もしもその獣人が当麻の名を

名乗っていたのであれば、恐らくはあの時、運良く襲撃から逃れた獣人が当麻の名を騙り、今になって我々に復讐しようとしているのかも知れませんね……」

「……」

十兵衛は、黙って闇御前の話を聴いている。

「そう言えば先程、お前はその獣人を若造だと言っていましたが、その者は何歳ぐらいだったのですか？」

ふと思い出したかの様に、闇御前が十兵衛に尋ねた。

「定かではありませんが、二十歳前後だったと思われます」

「二十歳前後ですか……。獣人族が滅んだのが今から十八年前…。年齢的には合いますが、どうにも若すぎますね……」

「確かに……」

「ですが、どうやってかは分かりませんが、たまたま難を逃れた当麻家の生き残りが、あの襲撃の際に獣人族の子供を連れて運よく生き延び、今まで誰にも知られる事無く密かに育てていたと言うのであれば説明も付きます……。しかし……」

「しかし？」

「その獣人は、『降魔の斧』を持っていたのですね……」

「はい、その獣人は、持っていた斧をそのように言っておりました」

「ならばその獣人は“守部”の一族の生き残りかも知れませんね……」

「“守部”……？」

「“守部”とは、獣人族の長を代々護る事のみを使命とした一族の事です」

「一族の長を護る……」

「そうです。獣人族の中でも特に優れた戦闘能力を持ち、守部の家のみに代々伝わる剛の技を使い、いつ如何なる時も長を護る為の盾となり鉾となる一族です。『降魔の斧』はその守部家に代々伝わる武器で、霊力では比ぶべきもありませんが、三種の神器の『天叢雲剣』と同じ性質を持つ伝説の金属……『ヒヒイロカネ』で出来ているそうです」

「ヒヒイロカネですか……」

「そうです。オリハルコンやミスリル、そう言った伝説の金属と同じで、この地上にある金属の中でも最強の硬度を持つ物の一つだと言われています。もしもその者の持っていた斧が本当に『降魔の斧』であるのなら、その者は間違い無く獣人族の生き残りで、しかも獣人族最強の一族“守部”の家の者でしょう……」

闇御前は一息に語った。

「十兵衛、本当に無事で何よりです。満月の夜に獣人族の……、しかも“守部”の生き残りと立ち合って生きて帰って来れたのは、こ

れまででお前一人だけです」

「ありがとうございます。ただ報告すべき儀は、これだけでは無いのです」

「何と！　まだ何かあるのですか？」

「むしろこれからご報告する事こそ、無礼にもお人払いをしてまでお話せねばならなかった事なのです……」

「むうっ」

「御前、実は……、御子神恭介の息子が生きているのです！」

十兵衛は“ぞろり”と言った。

“！”

闇御前は、あまりの驚きに声を出す事も忘れ、思わずその場に立ち上がった。

目と口を目一杯開き全身を硬直させている。

「み、御子神恭介の息子ですか……？」

闇御前は震える声で、何とか言葉を搾り出した。

「左様です……。始末した飯沼なる『屍鬼』が出会ったと、そう申しておりました」

「ですが九郎……、いや御子神恭介に息子が居たなど聞いた事がありません。何かの間違いないでは無いのですか……？」

「私もそう思いましたが、飯沼彰二が勝手に眷属に加えた男が、その御子神恭介の息子……御子神キョウヤと争っており、しかも飯沼彰二自身その場に居合わせたそうです」

「キョウヤ……、御子神キョウヤと言うのですか？」

「左様です。同じ御子神の姓を名乗り、しかも互いの名前には“キョウ”の部分が共通しております。更にはまだ完全に覚醒はしておらぬ様ですが、その者は間違いなく『貴族』だったそうです」

「同じ姓……、共通する名……、そして『貴族』……ですか……。どうやら間違いではない様ですね。ですがその者は、いったい今幾つなのですか？」

「奴の話ですと、人で言う高校三年生、即ち十八歳だそうです」

「十八歳ですか……。先程の獣人同様、確かに年齢のつじつまは合いますね。ですがその歳で完全に覚醒していないと言うのは解せません。それに御子神恭介が父親であれば、母親はいったい誰だと言うのです？」

「いえ、それ以上の事は私にも分かりかねます。実際飯沼彰二自身それ以上の事は知らなかったようですし、しかも御子神キョウヤと争っていた男も、その者の手に掛かり既に死亡しておりますれば皆目……」

「そうですか……。先程の獣人の件と言い、御子神恭介の息子の件

と言い、何か因縁めいた物を感じますね……」

闇御前は、そう言って皺の様な目を閉じた。

「因縁……ですか……？」

「そうです。人は……、いえ我々夜の眷属とて同じ事ですが、この世のありとあらゆる物は、因果に縛られて生きています」

「……」

「因果とは、原因があってこそ結果が生じる事を言うのですが、実際には、直接と間接の二つの要因が揃って初めて結果が生じるのです。そして人は、それを因縁……、運命……、宿命……、また仏教では業などと様々な呼び方で呼んでいますが、それらは全て因果律の中にあるものです」

「因果律……ですか……」

「そうです。因果律とは、例えるなら生き物の遺伝子が構成する螺旋の様な物です。一人ひとりに異なる因果の螺旋があり、それらが生きる者の数だけ無数の束となり、この世の全ての因果を構成しているのです。一つの命が誕生する度に新たな因果が生まれ、その者が死す時、その因果が消滅する……。無論、全ての因果の螺旋が重なり交わる訳では無く、交わらない……つまり一生出会う事も関わり合う事も無い螺旋もまた無数に存在します。しかし例え交わる事の無い螺旋同士であったとしても、時間と言う縦の流れと空間と言う横の広がりの中で、各々が間接的要因として互いに影響をし合っているのです……。これらの要因に因って生じているのがその者の因果であり、それらを予め定めた物が因果律なのです」

「……」

十兵衛は黙って闇御前の話に聴き入っている。

「そうした因果律の中で、その時々の人の思いや言動、そして為された選択は、その因果律の中では僅かな揺らぎに過ぎません。あの時こう選択していれば……、これはどちらを選択すべきなのか……。人はそうして過去を悔やみ、未来に不安を覚える中で現在の選択をして行きます。しかしその選択による揺らぎでさえ、人一人の人生と言う因果律の螺旋の中ではあらかじめ定められた事なのです。だから例え人と同じ様な状況で同じ様な選択をしようとも、人によりその生じる結果が違うのはその為です……」

闇御前は遠い未来を見るかの様に、宙に視線を置いていた。

「では御前は、獣人族に生き残りがいた事も、御子神恭介に息子がいた事も、全て因果律によって定められた事だと言われるのですか？」

「そうですねえ……。ただこの二つの出来事が、この些細な出来事を軸にしてほぼ同時に絡んで来たと言う事が、偶然と呼ぶにはあまりに出来過ぎの様な気もしましてねえ」

「確かに、私もそう思います」

「まあこれも決して偶然などでは無く、あらかじめ因果律によって定められていた……と言う事でしょうか。もしくは……」

「もしくは……？」

「三種の神器……、八尺瓊勾玉の影響かも知れませんねえ……」

闇御前は、宙を睨み“すう”っと目を細めた。

静寂に包まれた薄暗い茶室で、南部鉄瓶の湯の沸く音のみが響いていた。

8

8

恭也は、一連の出来事の始まりである村田達に絡まれた日の夜から、つい先程までの出来事を全て語り終えた。

無論意識を失い、記憶の欠落している部分に起きた出来事を、李に穴埋めをしてもらう形ではあったが……。

李には既に話した事ばかりだったが、初めて聞く佐々木や久保は、話の途中で事実関係の確認や、その時々における恭也の状態や心境、気分などを事細かに質問した。

辟易した表情の恭也ではあったが、質問された内容には意外と素直に答えた。

時折見せる悲哀や苦悩の表情が、恭也の心情を如実に物語ってはいたが、逆にどこか吹っ切れた様子も僅かだが垣間見る事が出来た。

最も、実際には開き直っているだけかも知れなかったが……。

「まあだいたいの話は分かった。それで今は血を飲みたい、もしくは生肉や内臓を食べたいと言った衝動はあるのかね？」

久保が、恭也の顔を覗き込む様に言った。

「ケッ、今こんだけ牛丼喰ったんだ、腹なんか減ってる訳ねえだろう」

さすがに恭也もこの質問には、辟易を通り越し怒りを露に吐き捨てる様に答えた。

「そうか？　だが老師の話では、まだ一度も血を飲んではいないのだろう？　本当に“渇き”は出ていないのかね？」

更に久保は執拗に食い下がった。

「何だとテメエ！　“渇き”は無えって言ってるだろうが！　嘗めた口聞いてると後悔するぜぇ」

恭也の『魔気』が“ぞわり”と湧き上がる。

「フン、今度は脅しかね。残念ながら私には通じんよ」

久保が鼻を鳴らす。

佐々木は、二人のやり取りを黙って見ていた。

獣吾は、ニヤニヤと事の成り行きを見守っている。

李も、佐々木と同じく黙したまま、二人の様子を見守っていた。

しかしその手には、いつの間に取り出したのか、両端の尖った長い針を思わせる、棒状の暗器を握っている。

恭也が暴れ出した時の為の準備だ。

凶猛な恭也の眼差しを、久保は正面から見据えていた。

「本当に“渇き”は出ていないのだな？」

久保は殊更に凄む訳けでも脅える訳けでも無く、平静を保ったまま念を押した。

凄まじい胆力の持ち主である。

久保も、伊達に『内調』の室長をしている訳ではない。

今でこそ腹が出て貫禄のあるただの中年男だが、室長のポストに収まる前は『C・V・U』の実働部隊から現場捜査官を経て『内調』に入った叩き上げで、実働部隊の頃は佐々木と並びヴァンパイア達にも少しは知られた、バリバリの武闘派だったのである。

しばし睨み合いが続いた後、恭也は根負けして頭を振った。

「ケッ、たいしたオッサンだぜ。……ああ本当に“渇き”なんざ出ちゃいねえよ」

恭也が唾棄する様に言った。

「そうか……。それなら良いんだ」

久保は平静を保ったまま頷いた。

“ハアー”

横にいる佐々木が大きく息を吐く。

李も同様にほっとした表情で、暗器を懐に仕舞った。

獣吾は、少しつまらなさそうに顎を掻いていた。

「これでだいたいの話は分かった。だが先程のビルで何が起きていたのかがいまひとつ不明だ。当麻君、話てくれないか？」

佐々木は、獣吾に向き直り尋ねた。

「良いけど、俺も良く分からねえぜ」

「分からない？　分からないとはどう言う事かね？」

久保が尋ねた。

「俺があそこに着いた時には、既にゾンビ共やそのショウとか言うヴァンパイアも皆殺しにされた後だったからよ」

「皆殺しに？　では飯沼彰二やゾンビ達は、先程恭也君の言ってた片目の男に殺されていたと言うのかね」

「ああそうだ。奴らを殺ったのは柳生十兵衛だよ」

獣吾が“ぞろり”と言った。

「何だと！」

「何？　柳生十兵衛だと！」

佐々木と久保が同時に声を上げた。

恭也や李も驚いて目を剥いている。

「そうか……。やはり奴らは飯沼彰二の情報を掴んでいたのか……」

佐々木が忌ま忌ましげに呟いた。

「オイ、あの時お前と殺りあってた奴は、ＴＶの時代劇なんかに出てくるあの柳生十兵衛だったのか？」

思わず恭也が聞いた。

「そうだ。俺も名前を聞いた時は驚いたが、奴が自分で名乗ったんだから間違いねえよ。それにあの身のこなしと技、ありゃ本物だぜ」

獣吾は、十兵衛との立ち合いを思い出していた。

「室長……」

「うむ、奴らまたこの件を闇に葬り去るつもりだった様だな。しかし柳生十兵衛のような大物を直接送り込んで来るとは……」

久保の表情が険しくなった。

「オメエら柳生十兵衛の事知ってたのか？」

獣吾が言った。

「勿論だ。我々は現在この国に住む全てのヴァンパイアのデーターを把握している。先程片目の男と聞いてもしやと思っていたんだが……。柳生十兵衛は奴らの特務部隊、つまり闇御前と呼ばれる奴らの

首領を護衛する部隊の長だ。そして恭介さん亡き後の“処分屋”でもある。最も奴は、ヴァンパイアの中でも大物で、そうそう姿を見せるような男ではないのだがな……」

「何と……」

李は感嘆を漏らした。

「それで十兵衛は、君との闘いで重傷を負い逃走したのだな」

佐々木が尋ねた。

「ああ、奴がコイツに気を取られたお陰でな。でなけりゃ俺が殺られてたぜ」

獣吾は親指で隣の恭也を指した。

「そうか……。では聞くが、そもそも君は何故あの場所に行ったのかね？」

久保がかねがね疑問に思っていた事を口にした。

「そりゃ単なる偶然さ。俺は爺さんが死んだ後、爺さんが最後に言っていたそこの李の爺さんに会う為に横浜へ向かった。で、李の爺さんの家を訪ねたら丁度留守で、そん時近所に住む黄とか言う婆さんに、李の爺さんは東京に住む養子の所へ行ったって教えて貰ったから、わざわざ東京まで出向いて来たって訳さ」

「何じゃ、儂の家まで行ったのか？」

「ああ、爺さんから教えて貰ってたからな」

「だが君はここに来るまでの間、各地で何人ものヴァンパイアを殺している。しかも今回も、すぐに老師の元へは向かわずあの場所に寄っている。それは何故かね」

佐々木が言った。

「別にすぐ向かわなかった訳じゃねえよ。黄って婆さんに聞いた住所が分からずあの辺りをうろうろしていたら、急にヴァンパイアの臭いがしたんでな、行ってみたらあの場所だったって事さ」

「臭い？」

久保が顔を顰めた。

「ああ、俺達獣人族は鼻が利くからな。ヴァンパイアの臭いは独特だから、田舎なら一キロ離れてたって分かるぜ。最もこの都会じゃせいぜい二・三百メートルが限界だがな」

「ふぅむ、それであの場所へ行ったのかね」

「そうさ。それに東京へ出て来るまでだってあちこちを車で走り回り、ヴァンパイアの臭いを嗅ぐ度にそいつらを捜し出してはぶち殺してやったんだ」

「一族の復讐の為か？」

「そうだ、復讐だ。俺にとって、爺さんから預かった手紙を、李の爺さんに手渡すのは事のついでだ。だから俺は東京へ来る道中も、

あちこちへ寄り道してはヴァンパイア共をぶち殺してやったんだ」

「うぅむ……、だがもうこれで君の存在は奴らに知られてしまった。今度は奴らが君を狙って来る事になるぞ」

久保は神妙な面持ちで言った。

「へん、構やしねえよ。それならそれで捜す手間が省けて結構な事じゃねえか」

獣吾は腕を組み、大袈裟に椅子に反り返った。

「のう、お前さんがさっき言うておった以蔵からの手紙を読ませてくれんかのう」

ふと李が佐々木に声を掛けた。

急に声を掛けられた佐々木は、李宛ての手紙をまだ持ったままであった事に気が付いた。

「申し訳ありません。今お読みになりますか？」

佐々木が尋ねた。

「うむ、今読ませて貰おう」

李が答える。

「ではどうぞ……」

佐々木は、李に手紙を渡した。

少し汚れて皺の付いた茶封筒の表には、『李周礼殿』と記されてあった。

李は、封筒の口を取り出した暗器で丁寧に破ると、中から数枚の便箋を取り出した。

李が便箋を広げて目を走らす。

読み進める内に、李の便箋を持つ手が震え出した。

9

9

「……それで人払いをされた訳ですか……」

光牙は、何か含む言い方で、目を“すうっ”と細めた。

「全く、何なんだい？　　たかが『生成り』のクセに！」

夜叉姫は、憤りを露に毒気を吐いた。

ただでさえ切れ長で吊り上がった目を、怒りで更に吊り上げている。

長くアップに結わえた髪が解れ、白いうなじにはらりと掛かっていた。

“ぞっ”とする程艶かしい。

青く見える程白く透き通ったきめ細やかな肌は魔性そのものである。

話す度に蠢く赤い舌が何ともエロチックである。

男ならば、直視すれば高ぶる理性を押さえ切れず、思わずむしゃぶり付いてしまうに違いない。

勃起しなくなって久しい老人のモノでさえ、天を向いて反り返る事は間違いなかった。

だが光牙は、冷静さを保ったまま涼しい顔で夜叉姫と向き合っている。

姉弟ならば当然とも言えるが、それでは済まさぬ魔性をこの夜叉姫は持っていた。

そう言った意味では、この光牙と言う男の胆力はなかなかの物と言えた。

「仕方ありませんよ姉上、十兵衛は父上のお気に入りなのですから……」

「全く気に入らないねえ……。そう言えば光牙、父上にも聞いたのだけど、あの方のお姿が見えないのはどうしてだい？」

夜叉姫が訊ねた。

「……」

光牙は答えるのを躊躇う様に、口を閉ざし目を背けた。

夜叉姫が腰を浮かす。

「何だい？　先程の父上の様子もおかしかったけど、あの方がどうかしたのかい？」

夜叉姫が、不安気に再び問い掛ける。

「姉上、お心を確かに聞かれませ」

光牙は正座したまま、下から睨む様に夜叉姫の顔を見詰めた。

「何だい？　あの方に何があったと言うんだい？　ああ、じれったい！　はっきりお言い！」

夜叉姫は、焦れる様に大声を上げた。

「姉上、御子神恭介は死にました……」

光牙は、氷の表情で冷徹な事実を伝えた。

「な……、何と……。今何と言った？」

「姉上、御子神恭介は死んだのです」

光牙はきっぱりと言った。

「う、嘘じゃ！　嘘じゃ嘘じゃ嘘じゃ。お前は私を謀っておるのじゃ！　そうであろう！」

夜叉姫は立ち上がり、狼狽し狂った様に叫んだ。

「姉上、お心をお鎮め下さい！」

「オオォーッ」

夜叉姫はあまりのショックにうろたえ、その美しい顔に爪を立てた。

爪が、白く透き通る肌の肉を抉る。

あの美しくも妖艶な顔に左右八本の醜い爪痕が刻まれ、夥しい量の血が流れ出た。

流れ落ちる血がか細い顎を伝い、高価な黒留袖に赤黒い染みを作って行く。

床の高価なペルシャ絨毯にも、赤い血が血溜まりを作っていた。

「光牙、光牙！　いつじゃ、いつあの方は亡くなられたのじゃ！」

「十八年前です……」

「じゅ、十八年前とな……。して、して何故じゃ。何故亡くなられたのじゃ！」

「私が……、私が手の者と共に」

「オォォゥ！　光牙、己があの方を殺めたのか！　私があの方にどれ程恋慕の情を抱いておったか知っていながら、弟の己があの方を殺めたのか！　何故……何故じゃあ！」

夜叉姫は烈火の如く怒り、嘆き、炎の怒気を吐き出した。

髪を振り乱し、羽織った黒留袖も完全に開け、全裸の肢体を隠す事無く光牙を睨め付けている。

凄まじい形相である。

鬼相と言って良かった。

「お鎮まり下さい姉上！　私の話をお聞きなさい！」

光牙が大声で叫ぶ！

狂い悶える夜叉姫の動きが、ぴたりと止まった。

乱れた黒髪が、溢れる涙と爪痕から流れ出る血で顔にべったりと張り付き、その張り付いた髪の間から光牙を睨め付ける目には、地獄の鬼火が宿っている。

まさしく鬼の様であった。

「言うてみよ……。言うてみよ光牙……。じゃが言葉には気を付けよ…。その言い訳けが腹に入らぬ時は、如何に我が弟でも我が嘆き、そなたの血で償うて貰うぞ……」

夜叉姫は禍々しい妖気をその身に纏い、光牙を睨め付けたまま“ぞろり”と言った。

「その前にお座り下さい……」

光牙がそう言うと、夜叉姫は鬼の形相のままその場にゆっくりと腰を下ろした。

「では……聞かせて貰おうか……」

夜叉姫はそろりと口火を切った。

「御子神恭介は、我が眷属を裏切ったのです……」

光牙は、少し間を空けてゆっくりと語り出した。

「裏切ったじゃと……、あの方が我が眷属を裏切ったと申すのか……？」

「そうです。今から十八年前……、奴は我々を裏切り、我が眷属の仇敵たる獣人族に内通していたのです……」

「何と！　獣人族とな！……」

「そうです。奴は人間共と交わした約定を遵守する為の“管理者”と言うお役目を賜りながらも人間に肩入れし、そればかりか獣人族と内通までしていたのです……」

「私が眠りに着いている間に、まさかあの方がその様な裏切りを……」

夜叉姫は、あまりの驚愕に出せなかった声をなんとか搾り出した。

「だから私が奴を処分しました……」

「それを、それを父上はお認めになられたのか？」

「無論です。これは父上の命令でした事です」

「じゃが、いったいどうしてその様な事になったのじゃ？」

「奴は、父上が進めておいでになる計画を阻害せんと企てたのです」

「計画……？　計画とは何んぞや？　もしや先程の“目覚めの儀”で父上が言うておられた、この国を支配すると言うアレか？」

「そうです。この国を支配する為の計画です。その為に必要な三種の神器の内の一つ、真の八尺瓊勾玉を手に入れるのを阻もうと、御子神恭介が邪魔立てをしたのです」

「光牙、いったい父上は何故今頃になってこの国を支配なさろうとしておられるのじゃ？　しかも真の三種の神器などと……」

夜叉姫の涙は既に止まっていた。

それと同じ様に、顔の両頬から溢れ出ていた血も既に止まっている。

「姉上はまだ“語り部”から“写し”を受けておられなかったのですね……。では私から全てを言葉にてお伝えするのは差し控えますが、簡単に説明だけしておきましょう。今からちょうど十八年前、我々は真の三種の神器の内の一つ、真の八尺瓊勾玉が岩手県の遠野、つまり獣人族の隠れ里に宝として密に奉られている事を突き止めました。しかし、その時“管理者”を務めていた御子神恭介が父上を裏切り、獣人族の里へこの事を知らせに行ったのです。そして我々の計画に抗うよう、獣人共を嗾けたのです」

「何と……。それでどうなったのじゃ？」

夜叉姫は先を焦って聞いた。

いつの間にか光牙の話に引き込まれている。

「私が策を練り、人間の政治家共を使って、昔からの仇敵であった獣人族を滅ぼしました。そして真の八尺瓊勾玉を手に入れた後、獣人の里から一人逃亡した御子神恭介を捜し出し、私が子飼いの部下と共に処分したのです……」

「何と……、私が眠っている間にあの獣人族までが滅んでいたとは……」

夜叉姫は漏らした。

「そうです。無論表向きには、獣人族がその昔、時の朝廷と交わした掟を破り、“防人”の者を喰い殺した為の処置と言う事になっています。一方御子神恭介も、人間共と交わしていた約定を破り、“管理者”と言う立場でありながら人間の生き血を吸った為の処分と言う事にしてあります」

光牙の冷徹な目が暗い影を写した。

「オォォォ。光牙、そなたの言うのが真に真実であるのならば、闇御前の娘としては幾ら苦しくとも受け入れねばならぬ……。じゃが……、じゃがこの胸に渦巻くあの方への想いは、いったいどうすれば良いのじゃ……」

夜叉姫はその場に崩れ落ちた。

再び涙が止めどなく溢れ、身体が小刻みに震えている。

「今は泣かれませ。涙枯れ果てるまで思う存分泣かれませ……」

光牙は、泣き崩れる姉に優しく声を掛けた。

しかしその瞳には、暗く青い氷の炎が映っていた。

第八章1：手紙

第八章
『手紙』
1

その便箋に綴られた文字は、書いた者の身体の状態を如実に物語っていた。

力無く弱々しい筆致が、消え行く命の灯に似て儚く揺らいでいる。

獣吾の養父、当麻以蔵が李に宛てた手紙である。

その手紙には、次の様な事がしたためられていた。

久しぶりだのう。

十八年もの間、お主にも生きている事を隠したまま顔を合わす事も出来ず、ついに儂も動けぬ身体となってしまった。

お主がこの手紙を読んでおる頃には、儂は最早生きてはおらぬやも知れぬ。

もともと十八年前に死んだ事になっておる身なれば、今更悲しむ必要もないだろうがな。

お主が十八年前の出来事をどの様に聞いておるかは知らぬが、恐らくは吸血鬼共や当時の政治家の阿呆共が描いた繰り言がまかり通っておる事だろう。

十八年前、奴らは儂の息子夫婦や孫を、いかにも村の者達の仕業に見せ掛けて殺した。

その時、儂は偶然にも所用で村を離れていた為に一人だけ殺されずに済んだのだ。

儂が所用を済ませ村に戻った時は、儂の愛する家族は皆ズタズタニ引き裂かれ、血の海の中でボロ雑巾の様に死んでいた。

そしてその後すぐ、奴らと裏で手を組んだ政府の阿呆共が差し向けた、強化人間とか言う化け物共が村を一斉に襲い、村長殿以下村の者達を全員皆殺しにしおったのだ。

その時何とか救い出せたのが、まだ幼子だった獣吾唯一人だったと言う訳だ。

それからの儂は、奴らから身を隠す為に岐阜に住む知り合いを頼り、密かに匿ってもらう事で今日まで生き延びて来た。

十八年前、吸血鬼の奴らが村を襲ったのは、あの村に真の三種の神器の一つである、本物の八尺瓊勾玉があったからだ。

現在宮中にある三種の神器は全て形代のみで、本物は各々別の場所で密かに保管されている。

本物の八尺瓊勾玉は、遥か昔より獣人族の村で密かに保管されていたのだ。

残る本物の八咫鏡や天叢雲剣も、世間では伊勢神宮や熱田神宮にご神体として奉られている事になっているが、実はそこにあるのも皆形代なのだ。

では本物が何処に隠されているのか、それはそれらを代々に護っている者にしか分からぬ。

奴らは真の三種の神器を集めて、何かをしようと企んでおるのだが、奴らが何を企て、また何故に真の三種の神器が必要なのか儂には分からぬ。

しかし奴らが何か途方もない事を企んでおる事だけは確かだ。

残る二つの真の三種の神器の隠し場所やその他の詳しい事は、御山の滋海殿か座主様に聞くと良いだろう。

それとこの手紙と共にそちらへ孫の獣吾を遣わす。

獣吾にも多少の事は話してある。

しかも獣吾は守部一族の生き残りだ。

儂では守部程の技は教えてやれなかったが、それでも儂の持つ技

の全ては、幼い頃より獣吾に教え込んである。
獣吾と共に吸血鬼の企てを阻止し、儂の息子夫婦や孫、そして村の者達の仇を取ってくれ。
あと、恭介殿が死んだ事は儂も知っている。
恭介殿はあの時儂と共に村を出たのだが、恭介殿は強化人間のみならず、あの場に来ていた吸血鬼共からも追われておった。
儂が獣吾を連れて逃げられたのも、恭介殿が自ら囮になって儂らを逃がしてくれたお陰なのだ。
その時、恭介殿は産まれたばかりの赤子を抱いていた。
その赤子は、恭介殿と村長の娘、沙耶様との間に出来たお子だ。
子が出来ぬ筈の獣人と生成りとの間に、何故子供が出来たのかは儂にも分からぬが、何か運命の様なものを儂は感じてならぬ。
村が襲われるおよそ一年半程前、吸血鬼共の企みを知り、仲間に追われながらも村に危機を知らせに来てくれた恭介殿は、村長の元に匿われて暮らす様になり、その内に一人娘の沙耶様と恋仲になられたのだ。
恭介殿のお子は、獣人族の長の血を継ぐ大切なお子だ。
儂は恭介殿と別れ岐阜に逃れた後、必死で恭介殿の行方を捜したが、吸血鬼共や政治家の奴らから隠れて暮らさねばならぬ身では、到底恭介殿の行方を捜し出す事は出来なかった。
儂が恭介殿の死を知ったのは、恭介殿が死んでから六年もの歳月を経てからの事よ。
儂はその後、あの時恭介殿が抱いていた赤子の行方が気になり、出来る限り捜してはみたのだが、遂には見付からぬままであった。
十八年も経っておれば生死も分からぬ上、消息の掴みようも無いだろうが、死に行く儂からの最後の頼みだ。
頼む、恭介殿のお子を捜し出してくれ。
もし生きているなら、そのお子は今十八歳になっておる。
名前は恭也、男の子だ。
十八年もの間、儂の勝手で音信不通のまま、しかも最後まで顔を

合わす事も出来ず心苦しいが、後の事宜しく頼む。
今一度、お主や滋海殿、それに恭介殿も交え共に酒を酌み交わしたかった。
それが今でも心残りでならぬ。
では後の事を頼む。
さらばだ

平成二十三年六月某日
当麻以蔵

手紙はここで終わっていた。

2

2

“くむう……”

手紙を読み終えた李は、大きく溜息をついた。

手に持っていた手紙をテーブルに置き、両腕を組み険しい表情で視線を手紙に注いでいる。

「オイ爺さん、手紙には何と書いてあったんだ?」

獣吾が焦れた様に李に尋ねた。

「のう……、お前さんはこの手紙を読んだのか?」

李は、視線を手紙に置いたまま獣吾の問いに問いで答えた。

「いや、読んでねえ」

獣吾は答えた。

「では読んでみてくれ」

そう言うと、李は獣吾に手紙を手渡した。

手紙を受け取った獣吾は、既にこの世には居ないたった一人の家族の懐かしい文字を、一文字づつ噛み締める様に手紙を読んだ。

そしてある一節に差し掛かった時、驚いた表情で隣に座る恭也に向き直った。

「ま、まさか……」

獣吾は驚愕に目を剥き、呻く様に言葉を漏らした。

恭也が訝しむ顔で獣吾を見返す。

訝しむ恭也の横から、李が獣吾を見詰め頷いた。

「オイオイ、テメエら！　何か言いたそうな面で俺をジロジロ見やがって、その手紙に何が書いてあるって言うんだ？」

両隣の二人を交互に見遣り、恭也は苛立ちを露に怒鳴った。

「お前も読むが良い」

李が言った。

それを聞いた獣吾が、苛立つ恭也へ手紙を差し出した。

恭也は獣吾から手紙を引ったくると、イライラした様子で手紙に目を走らせた。

“　！　”

一瞬、恭也は息を飲み李の顔を見詰めた。

「これが俺って事か……？」

恭也が声を搾り出した。

李は、恭也の目を見詰め黙って頷いた。

「いったい何が書いてあったのですか？」

李達の様子の変化を見た久保が、焦れる様に尋ねた。

李は、恭也の手から手紙を抜き取ると、テーブルを挟んで座る久保へと差し出した。

久保は急いで手紙に目を通し、隣の佐々木に手渡した。

佐々木も急ぎ目を通す。

“ふうむ……”

久保は腕を組み、鼻から大きく息を吐いた。

「何と……」

久保の溜息とほぼ同時に、佐々木も唸り声を上げた。

一瞬、室内を沈黙が覆った。

「こう言う事だったのですか……」

久保が嘆息混じりに漏らした。

「儂も知らんかった……。あの夜、恭介が言うておったのはこの事を指しておったのか……。しかも恭也の母親が、獣人族の長の娘であったとは……」

李も深い嘆息と共に言葉を吐き出した。

「しかしこれで全ての話がようやく一本に繋がりましたな」

久保が漏らした。

そしてスーツの内ポケットから高級そうなシガレットケースを取り出し、中から細巻きのシガリロを一本抜き取った。

普段はもっぱら葉巻専門なのだが、移動先で軽く吸いたい時の為に、持ち運びに便利で吸いやすいシガリロを常時携帯しているのだ。

久保はシガリロを口に咥えると、ダンヒルのライターで火を点けた。

それを横で見ていた佐々木は、恭也の前に積み重ねられた牛丼の容器の脇に無造作に置かれた、自分のロングピースとジッポーライターに手を伸ばした。

舒に一本取り出すと、すかさずジッポーで火を点ける。

「真の三種の神器ですか……。獣人族滅亡の裏にとんでもない物が隠されてましたね……」

佐々木は、煙りと共に溜息混じりで言葉を吐いた。

隣りの部屋に待機している水野が、マジックミラー越しに呆れ顔で首を横に振る姿が目に浮かぶ。

「儂は、日本の神話にはちと弱い故詳しくは知らぬが、いったい三種の神器に何があると言うのじゃ？」

李は、久保に尋ねた。

「私にも良く分かりません。ですが……」

「オイオイ、それより三種の神器って何だよ？」

恭也は、久保の話しの途中に割り込んで質問を浴びせた。

「何じゃお前、話の途中に割り込みおって。日本人の癖に三種の神器も知らぬのか？　いったい学校で何を習っておった？」

李が呆れ顔で言った。

「ウルセエ！　そんなもん学校で習ったかどうかも覚えちゃいねえよ！」

「そんな事偉そうに威張る事か！　全く情けない。何でこんな阿呆に育ってしもうたのか、育てた親の顔が見たいわい！」

「そりゃテメエだろうが！　自分の猿顔でも見て反省しやがれこのクソジジイ！」

「何じゃとう！」

「何だ！　殺るのかジジイ！」

二人が椅子から勢い良く同時に立ち上がった。

パイプ椅子が倒れけたたましい音を立てる。

「二人共止めなさい……。ええい、止めんか二人共ーっ！」

佐々木が大声で怒鳴った。

一瞬、壁やテーブルが振動したかと思える程の大声だ。

二人は、互いに殴り合う寸前の態勢で固まった。

「お止め下さい老師、恭也君も」

佐々木は、先程の大声とは打って変わって、殊更押し殺した様に言った。

「……」

「……」

二人は、兄弟喧嘩を親に叱られた子供の様にバツの悪そうな顔で、倒れたパイプ椅子を直すと同時にゆっくりと座った。

“ハアーッ”

佐々木が大きな溜息を付く。

それを見ていた獣吾は苦笑した。

「……三種の神器とは、天孫降臨の際、天照大御神より邇邇藝命に与えられた三つの神宝の事だ」

久保は恭也に説明をした。

恭也は、キョトンとした顔で久保を見詰めている。

「その顔では全く理解していない様だな……。つまりだ……、天皇陛下の御先祖様にあたる邇邇藝命と言う神様が、高天原……いわゆる神の国からこの地上を治める為降りて来られる際に、天照大御神と言う偉い神様が与えた宝物と言う事だ。ここまでは分かるな？」

久保は、見るからに理解していない顔の恭也の為に、恐ろしく噛み砕いた説明をした。

「ん？　ああ……」

恭也は、理解しているかどうか怪しい表情で取り敢えず頷いた。

「分からなくても先へ進むぞ……」

久保の口調は、出来の悪い生徒に教鞭を振るう教師の様であった。

「その後、三種の神器は新しい天皇の皇位継承の象徴として現代まで伝えられて来た。たが実際には、第十代の崇神天皇が、神器と共に寝起きするのは畏れ多いと言う事で、八咫鏡と天叢雲剣の形代…つまりコピーをそれぞれ作らせ、それを皇位継承の証としたのだ。そして第十一代の垂仁天皇の時に本物の八咫鏡が伊勢神宮に移され、

次の第十二代景行天皇の時に、本物の天叢雲剣が日本武尊命の手で熱田神宮に奉納されたと古事記には記されている。したがって今宮中にあるのは、八尺瓊勾玉を除く八咫鏡と天叢雲剣は神器を模した形代だと言われていたのだ。だが当麻君の亡くなられた養父の手紙によると、今も宮中にあり本物とされている八尺瓊勾玉さえ実は形代で、更に伊勢神宮や熱田神宮に奉られている八咫鏡や天叢雲剣と言った二つの神器も、実は形代だったと言う事らしいのだ」

「何か分かった様な分からねえ様な……。ようするに、今まで本物だと思われていた物が全てバッタ物で、その“何とかのキンタマ”とか言う物以外は未だに何処にあるのか分からねえって話だろ？」

「阿呆、キンタマではない、八尺瓊勾玉だ」

李が小声で言った。

佐々木と獣吾は苦笑した。

「まあ平たく言えばその通りだ。ただし形代はバッタ物では無いがね」

久保も苦笑しながら言った。

「ですが、宮中にある八尺瓊勾玉を含め、今まで本物とされていた伊勢神宮の八咫鏡や熱田神宮の天叢雲剣までが形代だったとは……。しかも本物の八尺瓊勾玉が、つい近年まで獣人族の隠れ里に隠されていたと言うのは本当に驚きです。いったいどう言った経緯で獣人族の手に渡ったのやら……」

佐々木はそう言って、獣吾の顔を見た。

「俺は、何も聞かされてねえぜ。だが肝心な事は、残りの二つの神器が今何処にあるのか分からねえ上に、ヴァンパイアの奴らも恐らくそれを狙ってるって事だろう」

獣吾が言った。

「そして既に八尺瓊勾玉は奴らの手元にあると言う事じゃ……」

李が、真剣な面持ちで言った。

「しかし、いくら政府がヴァンパイア達から政治資金や政治家個人への政治活動費などの援助を受けているとは言え、これ程直接的に協力していたとは、正直驚きです」

佐々木が渋面を作った。

「十八年前……、そうか！十八年前だ！」

李や佐々木達が話している間、やや俯き気味に何か思考を巡らしていた久保が思わず大声を上げた。

3

3

「いきなりどうしたんです？　十八年前だから……、何なのですか？」

佐々木が聞いた。

「十八年前と言えば、丁度、自由民生党が衆議院選挙で歴史的惨敗を期し、野党が連合して竹川連立内閣が発足した年だ！」

「そっ、そうか！……」

佐々木も思わず大声を上げた！

李や恭也達は、今久保や佐々木が何に気付いたのか理解出来ない。

「いったい何だと言うのじゃ？」

李が尋ねた。

「老師は覚えておられませんか？　丁度十八年前、五十五年体制と言われた自由民生党の政治が終止符を打った年ですよ。あの年、自由民生党の議員が多数離党し、他の野党と合併して新民生党を結党したでしょう。その時の解散総選挙で自由民生党が大敗したのをきっかけに、新民生党が中心となって野党が連合した。そして当時弱小ながらキャスティングボードを握っていた新日本民政党の竹川を首相に擁立して、戦後初めての野党による連立政権を樹立した時の事ですよ」

「うむ、確かにそんな事があったのう……。も、もしや！」

「そうです。あの時多数の議員を率いて自由民生党を離脱した小峰太郎の手腕や、数合わせとか野合などと呼ばれながらも、結成したばかりの新党とは思えぬマスコミ等を使ったＰＲ活動や選挙活動の手際の良さ。更には、それらを支える新党とも思えぬ潤沢な政治資金…。当時マスコミや政治評論家の間でも謎とされて来ましたが、これらが皆ヴァンパイア共が、竹川政権や今後政権を担う野党連合を自らの傀儡政権とする為の手段であったとしたら……」

「そうか……。自由民生党は、長く政権の座に着いていた驕りやプライドから簡単にはヴァンパイア達の傀儡政権と成り難い。しかも、良い意味でも悪い意味でも責任感に薄く、事無かれ主義でいつものらりくらりと腰の重い自由民生党よりは、野心に溢れ権力の奪取のみに執着する野党の方が、自らの傀儡政権にするには持ってこいだった筈だ！」

「その通りだ。だから奴らは野党連合にテコ入れし、新政権を樹立させたのだ」

「そしてその見返りとして、アメリカと共同開発で極秘裏に進めていた強化人間プロジェクトのテストも兼ねると言う意味も含めて……」

「俺の両親や同族の仲間達を皆殺しにしやがったのか……。本物の八尺瓊勾玉を手に入れる事だけの為に……」

獣吾が、忌ま忌まし気に言葉を吐いた。

目には憎悪の色が浮かんでいる。

「だが何で奴らはそんな手間の掛かる方法を取ったんだ？　そんな金も手間も掛かる事なんかしねえで、自分達で一気にケリを着けて、その何とかって勾玉を戴けば簡単な事だろう？」

先程から黙って話しを聞いていた恭也が、いきなり尋ねた。

「それは、獣人族と正面切って殺り合えば、如何にヴァンパイアと言えども多大な犠牲を払う事になる。それに奴らが直接手を下せば、我々『内調』や『C・V・U』が捜査に乗り出す事は間違いない。それよりもあくまで獣人族が昔交わした約定を破り、防人である当麻の人間を殺した為、自分達ではなく、政府が獣人族を討伐したと言う事実が欲しかったのだろう……。そしてそのチャンスが、たまたま竹川政権の誕生した十八年前だったと言う訳だ……」

久保は、そう言って目を伏せた。

「ふう……、しかしそうまでして真の三種の神器を手に入れようとする目的とは、いったい何なのじゃ……？」

李も腕を組み、軽く目を閉じた。

「奴らの目的が何なのか分からない以上、取り敢えず残る二つの神器を奴らより先に探し出す事が肝心ですな」

久保が言った。

「老師、早急に御山の慈海阿闍梨様とお会い頂けませんか？」

佐々木が急く様に言った。

「いやそれは構わぬが……」

少し詰まった言い方で、李は久保の顔を見た。

李と久保の視線が交錯する。

「水野、聞いているな。モニターのスイッチを全部切ってくれ！」

佐々木が、天井の一角に備え付けられたモニターに向かって叫んだ。

佐々木がじっと見詰めていると、監視モニターの赤いランプが“すうっ”と消えた。

他の箇所に設置された数台の監視モニターのランプも順に消灯して行く。

佐々木は、ぐるりと首を巡らして、全ての監視モニターが停止したのを確認した。

佐々木が隣に座る久保に向き直る。

「室長も退席して下さい」

佐々木は真剣な眼差しで言った。

その目には強い覚悟が見て取れる。

久保は、佐々木の視線から目を逸らすと、背後のマジックミラーに向かい天井を指差した。

久保の差した指の先には、たった今停止した監視モニターがある。

消灯したばかりの監視モニターに再びランプが点灯した。

それを確認した久保が、マジックミラーの向こう側を覗き込む様に視線を送った。

「水野君、今すぐ録画した監視モニターの映像データーを全て消去してくれ給え。そしてそれが終わったら、今点けたこの監視モニターもカットするんだ。あと、この部屋の外で待機している警備班と『C・V・U』の実働部隊も全て撤収させろ。それら今言った事が全て完了したら、君達もモニタールームを出て自分達のデスクに戻るんだ。分かったな！」

久保は、姿の見えぬ水野に向かって大声で話し掛けた。

「室長、それでは室長も同罪になりますよ……」

佐々木は困った表情で久保を見た。

「構わん。それに多分そうはならんよ」

久保は、当惑した表情の佐々木に向かい柔和な笑みを見せた。

佐々木が、更に当惑した表情を見せる。

李達三人は、これから何が起こるのか分からず、久保と佐々木の

やり取りを黙って眺めていた。

しばらくすると、先程点灯した監視モニターのランプが再び消灯した。

どうやら水野は、久保の命令に従った様だ。

久保は更に少しの間を置くと、襟を正す様に三人へ向き直った。

口を開こうとする佐々木を手で制する。

「老師、今ご覧になられた様に、全ての監視モニターを切りました。先程まで録画していたデーターも全て消去した筈です」

久保は、真剣な面持ちで切り出した。

「今夜は、荒っぽいやり方で無理矢理お連れして、本当に申し訳ありませんでした。これで尋問は終わりですのでお帰り頂いて結構です……」

「しかし……、儂は今まで恭也の事を隠しておったのじゃ、このまま無罪放免と言う訳にも行かぬじゃろうに……」

李は少し戸惑った表情を見せた。

「確かに恭也君の事を隠しておられた事実は残念ですが、老師がこれまで我々『内調』や『C・V・U』に対する御協力や貢献を鑑みれば、この尋問ですら非礼に当たります。どうかお許し下さい」

そう言って久保は頭を下げた。

「いやいや、頭を下げるのは儂の方じゃ。本当にすまなかったのう」

恐縮した李も思わず頭を下げた。

「老師、頭をお上げ下さい」

佐々木は、腰を上げ李に頭を上げるよう促した。

頭を上げた李は、真剣な眼差しで久保の目を見詰めている。

久保は、その真剣な眼差しから李の思いを察した。

「老師……、帰れる帰れないはこの二人次第です……」

そう言って久保は、恭也と獣吾の顔を、殊更険しい表情で交互に睨み付けた。

思わず二人が姿勢を正す。

「まず当麻君だ。君のご両親や一族の仲間達が、ヴァンパイアや当時の政府の策謀で虐殺された怨みは分かる。だがこれは既に高度な政治的問題であり、この国の将来を左右しかねない重大な問題だ。だから君が個人で復讐に走る事は、この国を危険に晒す可能性がある」

「だから何だってんだ?」

「君には申し訳ないとは思うが、ヴァンパイアや当時の政治家達への復讐は諦めてくれ」

久保はきっぱりと言い放った。

それを聞いた獣吾の顔が、たちまち怒りで紅く染まって行く。

「オメエ、俺が大人しく聞いていればイイ気になって。復讐を止めろだと？　そんな事言われて俺がハイそうですか、と言うとでも思ってやがるのか？」

獣吾の身体から凄まじい殺気が溢れ出した。

室内で月を見る事は出来ないが、満月の影響は部屋の内外を問わない。

『内調』の警備班や『C・V・U』の実働部隊を引き上げさせた今、この獣吾を怒らせる事はそのま久保や佐々木の死を意味した。

だが久保は、表情一つ変えず憎悪に燃える獣吾の双眸をただじっと見返している。

佐々木は、僅かに腰を浮かし、後ろに手を回した。

それを久保が手で制する。

「ならばこうする事は出来ないかな？　君は今後我々の管理下に入り、我々の捜査に協力する。無論君は部外者だし、しかも獣人だ。本来ならば捜査協力を仰ぐどころか、君をしかるべき場所に監禁せねばならぬ。しかし君は獣人としての獣性を完全にコントロール出来ている様だし、例え監禁しなくとも人間に危害は加えないものと判断する。しかも我々はあくまで『公安』ではなく『内調』だ。つ

まり我々は、対ヴァンパイア組織であり獣人は専門外なのだ。だから君を我々が直接管理するのではなく、勝手に復讐に走らないと約束出来るのであれば、君個人の自由を認めた上で、老師の監督の元我々に協力して貰いたい……。最もそれには老師の承諾と今後我々への協力が条件にはなるが……。いかがですかな老師……」

久保は李の顔を見遣った。

「監督などと大袈裟な事は出来ぬが、お前さん達への協力は惜しまぬつもりじゃ。この男がそれで良いと言うのであれば、儂は一向に構わぬよ」

李は、あっさりと承諾し獣吾の方を見た。

「じゃあ俺は自由なんだな。オメエらがヴァンパイアの企てとやらをぶっ潰すってんなら俺の復讐にも繋がるってもんだ。李の爺さんが良いなら俺は構わねえが、オメエらも所詮宮仕えの身だろう。オメエらが馬鹿な政府の命令でヴァンパイア側に付いた時は、俺は自由にやらせてもらうし、逆に俺がオメエらをぶっ潰す事になるかも知れねえ。それで良いんなら俺は別に構わねえよ」

「分かった。それは了解しよう。だがくれぐれも一人で暴走したり、ましてや人間を襲うなんてマネはしてくれるなよ。でなければ我々は君を狩らねばならん」

「分かってるよ。実際俺は今まで人間の肉なんて喰った事も無えし、生肉なんかより美味い物は幾らでもあるから安心しな」

獣吾は言った。

「では恭也君、次は君の番だ」

久保は何か覚悟を秘めた鋭い表情で、恭也をじいっと見詰めた。

4

4

まるで、凍てつく様な冷徹さを纏った久保の表情は、それを見詰める三人の体感温度を一・二度下げた気がした。

恭也は、僅かに息を飲んだ。

李も真剣な眼差しで恭也と久保の双方を見遣っている。

「君は、当麻君の場合とは少し勝手が違う。何と言っても君は我々にとって未知の存在だからだ」

「……」

恭也は敢えて黙っていた。

それを確認するかの様に恭也の顔を覗き込むと、久保は更に言葉を続けた。

「君自身が既に分かっている通り、君はヴァンパイアの故御子神恭介氏を父親に持ち、更に今当麻君から見せて貰った老師宛の手紙によれば、母親は絶滅した獣人族の長の娘で沙耶と言う女性らしい。つまり君は『生成り』の父と獣人族の長の娘の間に生まれた世界でも珍しいヴァンパイアと獣人の混血と言う事になる。間違いないね」

久保は、分かっている事実のみを並べ、わざと恭也に確認を取った。

「ああ、間違いも何も、俺自身も今日知った事ばかりだが、爺やその手紙にそうあるんなら、恐らくそうなんだろうぜ」

恭也は少しふて腐れた態度で言った。

恭也の表情が険しくなって来ている。

部屋の中の空気が次第に張り詰めて行った。

そんな中、久保は更に言葉を続ける。

「君は、君自身が思っているよりずっと危険な存在なのだ。或意味ヴァンパイアや隣に居る当麻君よりもずっとだ」

久保はわざと言葉を区切り、恭也の様子を伺った。

「老師や君自身の話によると、君は今まで三度覚醒をしている事になる。しかも先程は獣人の姿にさえ変身したと言うじゃないか。つまり君の覚醒は加速度的に早まりつつあり、この先どんな化け物に変化して行くのか予断を許さぬ状況だ……」

「ちょっと待てよ！　化け物ってのはちょっと言い過ぎじゃねえのか？」

久保の話に割り込む様に、隣に座る獣吾が思わず怒鳴った！

例え片親だけとは言え、同じ獣人族の血を引き、互いに同じ様な境遇を持つ者同士……。

そんな思いが、つい先程出会ったばかりで、しかも殺し合いまで

演じたこの恭也に対し、情の様な物を獣吾に抱かせていたのかも知れない。

だが意外な事に、本来なら後先も考えず真っ先に喰って掛かりそうな恭也が、何故か横で怒鳴る獣吾を制した。

「それで？……」

恭也は声を荒げるでもなく、極めて冷静過ぎる程の口調で聞き返した。

「君が幼い頃に老師が施した呪も、今ではどれ程の効果があるのか君自身は勿論、老師にさえ分からぬ状況だ。しかも過去の二回は、君自身覚醒した時に意識を無くし、一種の凶暴な化け物になってしまっていたと言うじゃないか……？　我々はその様な危険な人物を、街に野放しにしておく訳には行かない」

久保は、きっぱりと断言して退けた。

「だったらどうする？……」

恭也の態度はあまりに素っ気無い。

凄まじい怒りが込み上げている筈なのだが、その冷静さは不気味にさえ感じられた。

李もいつもと全く違う様子の恭也に、強い不安を感じていた。

「そこで、本来ならば君を生涯に渡り監禁、拘束するか……、もしくは君を処分しなければならない……」

久保はそう言い放った瞬時、いつの間にか取り出したグロッグ１８Ｃの銃口を、恭也の眉間にぴたりと照準した。

周りに抜いた事も気付かせない、恐るべき早業だ。

この久保と言う男、胆力も、銃を扱う技術も並ではない。

「ほう……、眉を一つ動かしただけで、怯えて許しを乞うわけでも、怒りで我を忘れるでも無く、微動だにすらしないとは大した胆力だ。私が撃たない、いや撃てないとでも思っているのかね。それとも自分はヴァンパイアや獣人を超える化け物だから、頭部を撃たれたくらいでは死なないとでも思っているのかね」

久保は少し嘲る様に言った。

「室長！　ちょっ、ちょっと待って下さい！　いったいどうしたんですか？」

佐々木が慌てて止めに入る。

獣吾も思わず腰を浮かした。

“むう……”

李も、息を飲み僅かに腰を浮かしている。

だが一人……、当の恭也だけは、腕組みをしたまま、険しい表情で久保の目を睨め付けていた。

数瞬の間、恭也と久保の睨み合いが続いた。

だが不思議な事に、顔は怒りに歪んではいるが、恭也の気に変化は見られなかった。

「で、俺を殺すのかい？　なら撃てよ。早く……」

恭也は淡々と言った。

しかし目は久保の瞳を睨め付けたままだ。

重たい沈黙が、部屋の空気を凍らせた。

「ふふ、本当に大した胆力だ。だが残念だな…。私はこの佐々木とは違い、この様な状況でも撃てる男だよ。それにこのグロッグ１８Ｃに使用されている弾は特殊な水銀弾頭だ。これならヴァンパイアであろうが獣人族であろうが確実に殺す事が出来る。しかも今狙っているのは頭だ。脳を吹き飛ばされれば、例え通常弾頭であっても助かる見込みは無い……」

久保のトリガーに掛かった指に力が篭る。

久保の全身から、氷の様な殺気がジワジワと滲み出ていた。

他の三人は、身動きすら取る事が出来ない。

それ程の緊張感が鎖となって、各々の身体を縛り付けていた。

「能書きの多いオッサンだな。撃つなら早く撃てよ。じゃねえと抵抗したくなるじゃねえか」

「ほう、この状況で何が出来るのか分からんが、抵抗出来るならしたらどうかね？」

久保は恭也の眉間に銃口を“ぐいっ”と押し付けた。

トリガーに掛けた指を、後０コンマ数ミリ後ろへ引けば、恭也の頭は確実に柘榴の様に血と脳漿を撒き散らしながら、グシャグシャ吹き飛ぶのは火を見るより明らかだった。

恭也と久保の激しい睨み合いが続く。

一瞬が永遠に思える程の緊張感が、この場を支配していた。

5

5

音も無く、まるで物質化した様に部屋全体を覆った緊張は、これ以上無いまでに膨れ上がり、僅かな空気の揺らぎでも、まるで薄い氷の様に粉々に砕けてしまいそうであった。

恭也と久保が、一触即発の緊張の中で、互いの目を睨み合っている。

その時、何故か恭也は“すうっ”と両の目を閉じた。

“ふうっ”

それを見た久保は、大きな溜息を付いた。

「試す様なマネをしてすまなかった。いや、その歳で大した物だ」

そう言って久保は、グロッグ１８Ｃをゆっくりと下ろした。

佐々木達は、安堵の息を吐いた。

部屋全体に張り詰めた空気が暖気を伴って緩み、各人の全身を縛っていた緊張が急速に弛緩して行く。

佐々木は、久保が撃つ筈が無いと分かってはいても、不安と緊張に刈られるだけの殺気を久保は放っていた。

李も久保を信じてはいたが、寧ろ逆に恭也がどう出るのかが恐か

った。

もしも恭也が抵抗した場合、最悪はこの場で恭也を殺さねばならない事態に発展していたかも知れないのだ。

「どうして抵抗しなかったのだ？」

久保は、平然とした態度を装い、少し興奮を押し殺す様に尋ねた。

「アンタが本気で俺を殺す気が無いと分かったからさ……」

恭也も平然と言った。

「ほう……。しかし私が一瞬殺意に刈られたのも事実だぞ」

「ああ、途中でアンタの“気”が変わったからな。だがそれならそれで良いとも思ったんだ……」

恭也の表情が僅かに沈んだ。

「それはどうしてかね？」

「俺のせいで……、俺の仲間が死んじまった……」

「それは殺された宮内茂の事かね……？」

「ああ、それに高木晶子もだ……。村田だって俺と喧嘩しなければ……、奴だってヴァンパイアに成らずに済んだのかも知れねえし、そうすりゃシゲだって殺されずに済んだんだ。それに俺が、もしもアンタの言うようなとんでもねえ化け物なら、この先他の人間を襲

うようになっちまうかも知れねえ……。それを思うとよ、ここでアンタに殺されるのもアリかな？　って思ったんだ……」

恭也の表情が曇った。

先程までのふてぶてしさが嘘の様である。

ー一幾ら強がってふざけておる様に見えても、結局こ奴は死んだ仲間への自責の念から逃れてはおらぬのじゃな……。まあそれも当然な事ではあるが……。

李は思った。

「恭也君、今君を撃とうとした私が言うのもおかしいがそれは違うぞ。宮内茂、高木晶子、村田浩平の三人の死と君が無関係だとは言わないが、全てが君の責任と言う訳けでも無い。彼らは飯沼彰二と言う一人のヴァンパイア……、いや犯罪者の犠牲者なのだ。しかも飯沼彰二は、奴らの仲間の手に掛かり死亡した。この世には、君が今まで映画やドラマの中でしか存在しないと思っていたヴァンパイアや獣人が現実に存在し、また彼らに対抗する為に我々のような組織も現に存在している。それに例えヴァンパイアが絡んでいなくとも、世間では殺人、窃盗、汚職、暴行、詐欺、そしてテロリズム……と、人間が犯す様々な犯罪や事件が連日のように起こっており、それらひとつひとつの事件にも犠牲者が必ず存在する。一見理不尽と思える事がこの世の中には数多くあり、非情な言い方ではあるが、それが現実であり正しい物の見方なのだ」

「……」

「良いかね。我々はたまたま人間として生まれ、当麻君はたまたま

獣人として生まれた。ならば君はたまたまヴァンパイアと獣人の間に生まれただけであり、これからどう生きるかは出生の問題では無く、君自身が決める事なのだ。飯沼彰二は犯罪を犯した。だがそれは彼がヴァンパイアだからでは無く、彼自身の弱さやモラルの低さが犯罪を犯させたのだ。先程も言ったが、人間でも犯罪を犯す者は犯すし、また君の実父である恭介氏のように、例えヴァンパイアであっても常に自らを厳しく戒め、人間を襲う事無く正しく生きた者もいる。そうではないかね？……」

先程までとは打って変わって、久保はひどく優しい口調で恭也に話し掛けた。

「もしも君が、先程の私の理不尽な行動に我を忘れ、後先の事も考えず私を殺そうとしたなら、例え私が殺されたとしても、君がこの建物から生きて出る事は出来なかっただろう。君を試した事は謝るが、本当の君を知りたかったのだ。許してくれ……」

そう言って久保は深々と頭を下げた。

「構わねえよ。アンタの言った事……良く分かったぜ。でも次はどうなるか知らねえけどな！」

恭也が笑った。

李が、久しぶりに東京に出て来て、今回初めて見る恭也の笑顔だったかも知れなかった。

その意味で、李は少し安堵に胸を撫で下ろした。

「あと君に知らせておく事がある」

久保が再び口を開いた。

「何だ？」

恭也が尋ねる。

「先程、君達がここへ来る少し前に『C・V・U』の科学検査班から報告があった……」

恭也達三人は、黙って久保の話しを聴き入っている。

佐々木にとっても、この『C・V・U』からの報告は初耳であった。

「先日君が残した血痕を更に詳しく検査した結果、遺伝子的に君は間違い無くヴァンパイアと獣人の混血だが、やはり極めて特殊な遺伝子を持っているらしい。その為ヴァンパイアの遺伝子を有しているに関わらず、血液中の赤血球及び白血球、それにヘモグロビン等の数値は生物として正常で、要するにヴァンパイアのように他の生き物の血液を摂取しなくとも、“渇き”が起こらないのではないかと言う結論が出たのだ。だから先程クドイくらいに“渇き”は出ていないかと質問したのだが、どうやら科学検査班の報告は正しかったようだな」

「だ、だがよう、今朝爺と殺り合った時、俺は爺の血を吸おうとしたんだぜ？」

「私は現場に居なかったし、科学検査班でもないから詳しくは分からないが、それは恐らく君が、父親の恭介さんから受け継いだヴァ

ンパイアとしての本能が君にその様な行動を取らせただけで、ヴァンパイア本来の“渇き”として血を吸おうとした訳じゃない筈だ。だからその後も、君は血液を摂取していないに関わらず、一度も“渇き”の兆候が現れていないはその為だろう」

「じゃあ血を吸おうとしたのは俺の身体の問題じゃなく、心の問題だと言うのか？」

「心の問題とは少し違うが……、とにかく君は血を飲まなくても生きて行けると言う事だよ」

「そうか……、そう言う事であったのか……。それならば確かに納得が行くわい……」

李が得心して漏らした。

「それに実際の狼は肉食だが、当麻君の例を見ても分かる様に、獣人は人間と同じ雑食だ。最も肉を好む傾向はあるが、これまでの記録からも獣人は決して肉だけを食べる訳では無い。そうだな？」

久保が獣吾に視線を向けた。

「ああ……。さっきも言ったが、獣人族が人肉を食べたのは遥か昔の話だ。それに俺も肉は好きだが別に生肉や内臓を食べる訳けじゃねえし、ちゃんと野菜や魚だって食べる。特に隣りに住んでた婆ちゃんの煮てくれた山菜や肉じゃがは大好物だったし、牛丼もラーメンも大好物だ」

獣吾が言った。

「ならば恭也君にとって一番大切な事は、君の中に眠る魔族としての因子や、凶暴な獣性をどうコントロールし、どう飼い馴らして行くかと言う事だ」

獣吾の言を引き継ぐ様に久保が言った。

「それならば儂に考えがある……」

李が思案に耽っていた顔を舒に上げた。

6

6

「どんな方法ですか？」

先程来ずっと黙っていた佐々木が、思わず声を上げた。

「うむ、そこの当麻君に会うた時から考えておったのじゃが……」

「当麻君なんて止してくれ。獣吾で良いぜ獣吾で」

獣吾が照れ臭そうに口を挟んだ。

「うむ、分かった。ならば……、獣吾君に会うた時から考えておったのじゃが、『阿字観』と言う修行法が密教にある……」

李がそう話した始めた時、獣吾が同調して口を挟んだ。

「俺も今その『阿字観』の事を考えてたんだ！」

「ほう、やはりお前さんも『阿字観』の事を考えておったか？」

「ああ、俺もガキの頃爺さんに散々やらされたからな。俺達獣人は物心が付くと全員、『阿字観』って修行をやらされるんだそうだ」

「うむ、儂も以前お前さんの養父から教わったのじゃ」

「爺さんから……？」

「そうじゃ。じゃからお前さんも必ず知っておると思うておったよ」

「老師、『阿字観』とはいったい何なのですか？」

佐々木が訊ねた。

「儂が以蔵から聞かされたのは、『阿字観』を修行する事で人狼本来の獣性や狩猟本能を押さえ、更には満月の有無を問わずいかなる時に於いても、意思の力のみで自在に人狼本来の姿に変身、または人間の姿へ戻る事を可能にする為の方法じゃ」

「では当麻……、いや獣吾君も昔その修行を行ったと言うのだな？」

久保が獣吾に聞いた。

「ああ、爺さんの話によると、俺達獣人族は遥か昔、人間の姿に戻る事も出来ず獣人の姿のまま暮らしていたんだそうだ。しかも凶暴で理性なんかコレっぽっちも無く、腹が減れば人間だろうが他の動物だろうが襲っては飢えを満たしていたって言う話だ。だがその内に人間としての理性を持つ様になり、平安の時代に空海って偉い坊さんから『阿字観』を学んだそうだ。そのお陰で月の支配から脱出し、今のように獣化する力や感情をコントロールする事が出来る様になったらしい」

「空海とは、あの高野山の弘法大師の事か？」

佐々木が驚いて聞いた。

「ああそうだ。とは言っても全て爺さんからの受け売りだがな」

「いや恐らくはその通りじゃろう。実際今でも『阿字観』は密教僧の修行の一つとして行われる一種の瞑想法で、それにより強固な集中力と想像力を養うのじゃ。儂の呪では恐らく恭也の内なる魔の因子をこれ以上抑え続けるのは難しいじゃろう。ならば恭也自身が内なる魔の因子を操る術を学ぶ他に手は無い。それには『阿字観』が最適じゃと思うのじゃが……。まあこの先は経験者の獣吾君に説明して貰った方が解りやすいじゃろう」

李は、そう言って獣吾に後を託した。

獣吾が頷く。

「俺がガキの頃やらされた『阿字観』てのは、爺さんの話だと実際密教の修行僧が行っている『阿字観』とは多少違っていて、俺達獣人族特有のやり方らしい。まずは直径二十五から三十センチ程の鏡の中心に、阿字……つまり梵字の『阿』が書いてある『阿字本尊』って言うのを用意するんだ。梵字の『阿』は太元帥明王を表す種字の『阿』と同じだ。その阿字本尊を壁に掛けて、毎日その前で『月輪観』を行う。『月輪観』てのは阿字本尊の前で結跏趺坐で座り、阿字本尊を眺めてその後月輪が心の中でしっかりと形を結ぶまで集中する練習を繰り返すんだ。そしてそれが出来る様になったら、次の段階の『広観』に移る。『広観』は月輪観で心に形を結んだ月輪を、本当に天空で光を放つ月に変化させて、その月を心の中でどんどん大きくして行き、それによって自己の意識を大きくなる月と共に極限まで広げて行く修法だ。だがこれが出来る頃になると、徐々に気が高まって異常な興奮を覚えたり、凶暴な気持ちを抑え切れ無くなっちまったり、時には獣人の姿に変身してしまう時がある。だからそう言った時は仙道で言うところの小周天とか言う技法で呼吸や気を整え、次の段階の『斂観』を行うんだ。『斂観』は一度極限まで広がった月輪と意識を、気の安定した状態で維持し、それが出

来る様になったら月輪を意識と共に徐々にゆっくりと小さくして行く。そして月輪が最初の大きさになったら目の前の阿字本尊にゆっくりと戻して行く。これを何度も繰り返す事で例え阿字本尊が無くても自在に月輪観が出来る様になり、ひいては満月だろうが、新月だろうがいつでも自在に獣人の姿に変身出来る様になる。しかも荒れ狂う獣性や凶暴な感情さえコントロール出来る様になるんだ」

獣吾は、一息に説明を終えた。

「要するにその『阿字観』で強靭な集中力と想像力を養う事で、心に描く月を自在に満月・新月の状態に操り、獣人特有の変身能力や、また獣性や凶暴な感情をコントロールする術を養うと言うのだな……」

久保が問い直した。

「まあそんなトコだ」

獣吾が答える。

獣吾達の話を聞いていた李が口を開いた。

「そもそもこれは、人狼がその内なる獣性を操る術じゃが、先程獣吾君と殺り合っておった時の恭也は、確かに満月の影響で獣化しておった。そうじゃな？」

李が恭也を見る。

「ああ……、良く分からねえが、あのビルに着く前にバイクでショウの居所を探してた時、ふと満月を見たら急に胸がドキドキしだし

て、周りの臭いや肌の感覚がえらく敏感になって来やがったんだ。それと同時に何かどうしようもなく暴れたくなってきて……」

恭也は、あの時感じた不思議な感覚を思い出していた。

「その感じは俺にも分かるぜ。今でも満月の夜はザワザワと凶暴な気持ちになるし、俺は生れつき獣人だから人間の感覚は分からねえが、満月の夜は特に臭いや感覚に敏感になっちまう」

獣吾が言った。

「なる程、ならば恭也君の魔族としての因子や獣性はコントロール可能だと言う事ですな」

佐々木は、安堵して久保の顔を見た。

だが久保は、佐々木の予想に反し再び厳しい表情をしていた。

「恭也君、君がちゃんと『阿字観』を行い、魔族としての因子や獣性を抑える事が出来るのであれば、君が家に帰る事を許可しよう。だがそれにはまだ幾つかの条件を飲んで貰わねばならない……」

「条件？　勘違いすんなよオッサン！　俺はいつだって自由だ。俺は俺の自由を奪おうとする奴は、例え何処の誰であろうが決して許さねえ。さっき俺がオッサンに殺されても良いかなって思ったのは、俺自身の選択であり俺の自由意思だ。だから俺がここを出てからも、俺は俺の自由にやらせて貰うぜ！」

「コラ、恭也！　いったい何を言い出すのじゃ！」

李が声を荒げた。

久保が李を制する。

「私の言い方が悪かったようだな。これは条件などではない。これから話す事は全て命令だ」

「何だと！」

恭也の身体に“ぎん”と殺気が走った。

「それだよ。君は魔族の因子や獣性とは関係なく短気で粗暴だ。これは幾ら老師の呪や『阿字観』の修法を持ってしてもどうしようもあるまい。だから君はまずその気性から治さねばならん。だがそれは今すぐにでも治す事が出来る筈だ。分かるな？」

「……」

恭也は黙るしか無かった。

「それとだ、君の夜のアルバイトは辞めて貰いたい」

「何故だ？」

「君のやっているアルバイトは違法だ。それに喧嘩をすれば嫌でも気が高まる筈だ。その時に魔の因子が活性化しないとも限らん。そうすれば君に幾らそのつもりが無くても、今度は君がその喧嘩相手を殺めてしまう可能性もある。そうなれば、我々は君を狩らねばならない」

「……」

久保の言葉に対し、恭也は反論する事が出来なかった。

久保は更に続けた。

「しかもそれだけじゃ無い。夜はヴァンパイアが最も活動する時間帯だ。ならば、いつまた君がヴァンパイアの争いに巻き込まれるとも限らない。君はあの御子神恭介の息子であり、獣人族の長の娘の血を引く混血だ。もしも奴らに君の事が知れたら、今後どの様な事態を招くとも知れんのだ。だから君は夜のアルバイトを辞め、普通の学生として勉学に励むのだ。それが守れないなら、我々はこのまま君を帰す訳には行かなくなる」

久保は“ガン”として言った。

「じゃあよう、奴らが企んでるとか言う企てはどうするんだよ！それからも俺に手を引けって言うのかよ！」

恭也が怒りを露に大声を張り上げた。

だが久保の固い表情は変わらない。

「その通りだ。君をこれからの闘いに巻き込むには、君はまだ不安定過ぎる。それでは君ばかりか、老師や獣吾君、それに私の大切な部下まで危険に晒す事になる。それに君はまだ未成年だ。幾ら君がヴァンパイアと獣人の混血であろうが、君が人間として生きて行く限りその事実を覆す事は出来ん。これは君の為でもあるんだ。だから分かってくれ……」

久保は真剣な眼差しで語った。

「……」

恭也は即答出来なかった。

「良いではないか恭也……。お前はこれまで人として生きて来たのじゃ。これからも人として生きて行けば良い。吸血鬼共の事は、儂や獣吾君が『内調』や『C・V・U』と協力して、何としてでも奴らの企てを阻止してみせる。それにお前が首を突っ込めば、いつかは勇三殿の家族やお前の知り合いを危険な目に会わす事になるやも知れぬ。そうならぬ為にも……分かってくれるな？」

李はこの上無く優しい口調で言った。

「オメエよ、気持ちは分からなくも無えがよ、この偉いオッサンや李の爺さんの言う通りだぜ。後は俺達に任せておきな……」

そう言って、獣吾は恭也の肩を“ポン”と叩いた。

「分かったよ……」

数瞬の間を置き、恭也は“ぼそり”と言葉を吐き出した。

「約束だぞ」

久保が念を押した。

「ああ、分かってるよ」

恭也は力無く答えた。

恭也の答えを聞いた久保は、佐々木に向かって頷いて見せた。

それを見た佐々木も頷いて返した。

「ではこれで今夜はお引き取り頂いて結構です。老師には御山の件で後ほどご連絡させて頂く事になると思うので宜しくお願いします。それとこの時間なら獣吾君の車や恭也君のバイクもこのビルの前に運んであると思うので、二人共気を付けて帰るように」

沈んだ雰囲気を打ち消す様に、佐々木は舒に立ち上がり言った。

それを期に、全員が椅子から立ち上がる。

李や久保はいつもの笑みを取り戻し、獣吾はせいせいとした表情で、髪の毛をボリボリと掻いていた。

だが恭也の表情だけは優れなかった。

李はそんな恭也に気付いたが、今はそっとしておく為にもわざと声は掛けなかった。

全員が尋問室を後にしようとしたその時、佐々木が急に足を止めた。

「そう言えば、今夜獣吾君は何処へ泊まるつもりなんだ?」

急に思い立った様に、佐々木が後ろから声を掛けた。

驚いて獣吾が振り向く。

「何処かに車を止めてそこで寝るよ」

獣吾が答える。

「ならば儂らと一緒に来ぬか？　雨露を凌ぐ程度の場所ならあるぞい」

李が獣吾を見上げて言った。

「そりゃ助かるが良いのか？」

「構わぬよ。どうせあの阿呆の部屋じゃ。ムサイのが二人、仲良く一つの布団で寝ると良いわ」

「何だって！」

「何勝手言ってんだ爺！」

「ほっほっほ、これで決まりじゃ」

怒る恭也達を尻目に李が高笑いした。

李の笑い声が廊下にこだまする。

こうして、長かった一日がようやく終わりを迎えようとしていた。

7

7

「大変お待たせしてしまったようですねぇ」

リビングに入るなり光牙が言った。

口許に笑みを浮かべてはいるが、涼しげな瞳の奥に笑みはない。

この男が入って来ただけで、冷房が程よく効いたこのリビングの温度が、更に一、二度下がった気がした。

ここは何処かの高級マンションの一室であるらしい。

豪奢なシャンデリアがリビング中央で煌めき、クリスタルな輝きがガラスの硬質さとは裏腹に、暖かい光を部屋中に降り注いでいる。

床には足が沈み込む程柔らかで、毛足の長い贅沢な絨毯が敷き詰められ、まるで雲の上に足を乗せているかのようだ。

染みや、タバコのヤニに因る黄ばみが一切無い真っ白な壁には、グスタフ・クリムトの『接吻』が掛けられ、観る者の官能を誘っている。

リビングの中央には、天板に大理石をあしらった贅沢なテーブルが“デン”と置かれ、光沢の良い艶やかな緋色の本皮を張った3人掛け用のソファーが、左右にテーブルを挟む形で置かれていた。

ソファーの脇では、男が立ち上がり光牙を出迎えていた。

「どうぞ楽にして下さい」

光牙は男に座るよう促すと、自らももう一方のソファーへ腰を下ろした。

光牙に促され、男は黙ったままソファーに座った。

まるで岩のような男であった。

年齢は四十代半ばと言ったところか。

男は、モスグリーンのTシャツに色の褪せたブルージンーズを履いている。

髪は短く刈られ、四角い顔をしていた。

目は細く、黒目が異様に小さい。

逞しい鼻は少し右に曲がっており、鋭い目付きと薄い唇が、どこか残忍で冷酷な爬虫類を思わせる顔付きであった。

実際、男が纏っている気は、禍々しく凶暴な物を含んでいた。

どう見ても堅気には見えない。

しかもモスグリーンのTシャツの胸部が、はち切れそうな程競り上がっていた。

分厚く獰猛な筋肉の束が、Tシャツの上からもありありと分かる

程だ。

ジーンズの太腿の辺りがパンパンに張っている。

身長は一六五センチ程であろうか。

光牙と比べれば随分と背が低い。

だが肉の量は圧倒的に光牙を上回っており、ずんぐりとしたその体躯は、まるで岩の様であった。

「約八十年ぶりだったので、つい姉上と話し込んでしまいました。かなり待ちましたか？」

光牙が言った。

「いや……」

男は、無表情のままぼそりと低く呟いた。

「相変わらず無愛想な方ですねぇ」

光牙は、呆れたような笑みを口許に浮かべ言った。

「……」

男は黙ったまま、ただ無表情に光牙を見据えている。

「まあ良いでしょう……。では早速ですが、先に急ぎの報告とやらを伺いましょうか」

光牙は、冷ややかな視線を男に向けたまま言った。

「つい四時間程前、高野山の照月から連絡が入った」

男が言った。

声が低くしゃがれている。

しかも話し方に抑揚が無く、朴訥とした話し方からは感情の起伏を感じ取れなかった。

「ほう……。それであの役立たずは何と言ってきたのですか？」

「八咫鏡は、高野山に在るらしい」

「何と！……、そうですか。やはり推測は当たっていましたか……」

光牙は一瞬驚きに目を輝かせたが、直ぐさま涼しい表情を取り戻し言った。

「……」

男は、相変わらず無表情のままだ。

「そうですか……。高野山に在るのは八咫鏡の方でしたか……。しかし、今頃になって何故それが分かったのですか？」

「今日の夕方、座主が、高野山の主立った坊主共に、真の三種の神器の一つである八咫鏡が、高野山に奉られている事実を告げたそうだ」

「なるほど、そう言う事でしたか……。それならば間違いない様ですね……」

光牙は、得心のいった表情を見せた。

「高野山の結界を、強化する事に決まったらしい……」

「どの位強力な物ですか？」

「はっきりとは分からないが、法力僧五十人から成る結界だそうだ」

それを聞いた光牙は、僅かに嘆息を漏らした。

「五十人ですか……。そうなると『屍鬼』ではひとたまりもありませんね。我ら『貴族』でも、かなりのダメージを負う事は避けられません。貴方も到底無事では済まないでしょう……」

「……」

男は僅かに頷いた。

「しかし面倒な事になりましたね……。貴方にも話した通り、本日眠っていた眷属の半数を目覚めさせたのですが、そのような結界を張られていては、我々には手の出し様がありません。それに最後の神器の隠し場所が未だ分からぬ現在に於いて、総力を上げて高野攻めをする訳にも行きませんからねぇ」

「……」

「この事は御前に報告しておきます。……またあの人形達を使う事

になりそうですねぇ。十八年前の時と同じ様に……ククク……」

光牙が含む様に笑った。

「……」

無表情だった男の目に、僅かに感情が揺らいだ様であった。

第九章1：別離

第九章
『別離』
1

「オウ恭也、久しぶりだな！」

同じクラスの大野だ。

「オイ、キョウ！　何か具合悪かったんだって？　ヤリ過ぎで性病でも伝染されたんじゃねえの？」

鉄二と同じ族で、Ａクラスの……アレ？

「恭也君元気だった～？」

同じクラスの美紀ちゃんと隣りのクラスの小沢茜ちゃんだ。

「恭也さん、おはようございます」

コイツは……誰だっけ？

ーーやはり男の顔は覚えられねえ。

久しぶりに学校へ来てみたが、何か昨日までの事が嘘みてぇに平和だ。

俺が気怠そうにトボトボと歩いていると、皆俺の横を挨拶しながら小走りで通り過ぎて行く。

当然だ。

もうこの時間では、今からダッシュでもしねえ限り絶対に遅刻だからな。

俺は、遅刻を免れようと急ぐ奴らの背中を何気なく眺めていた。

ーーコイツらは、実際にヴァンパイアや獣人がこの世に存在しているなんて考えもせずに生きてるんだよな。

そんな思いが頭を過ぎる。

だが俺も、ついこの前まではコイツらと同じで、ヴァンパイアや獣人なんてマンガや映画の中だけの話だと思っていたからな。

コイツらが何も知らなくても当然なんだ。

「知らねえ内に、何か面倒臭え事になっちまったな……」

そんな愚痴がふと口を突いて出た。

俺は、学校を目の前にして立ち止まった。

この辺りは住宅地で、この時間はゴミ出しをしたり、犬の散歩をしている主婦の姿が目立つ。

すぐ目の前には、派手な黄色に塗られて可愛い動物やキャラクターの絵が描かれた幼稚園の送迎バスが、園児の乗車を待っていた。

長閑で平和な風景だ。

空は薄曇りで雨は降っちゃいねえが、夕方か夜からはまた雨らしい。

お陰で朝っぱらから蒸し暑くて堪んねえ。

俺は、シャツの胸ポケットからセブンスターを取り出すと、人目も気にせずお気に入りのS・Tデュポンのギャッビーで火を点けた。

ー一後でフケるのも面倒臭せぇし、やっぱ今日は学校行くの止めようかな……。

そう思い掛けた時、俺の背後からけたたましいバイクの音が聞こえて来た。

俺の心臓が“ドキリ”と音を立てる。

ー一鉄二だ！

俺が今朝学校に来た目的の一つが、この黒田鉄二に会う事だった。

無論迷いはある。

だが俺は、この鉄二と言うハードルを越えない限り、先に一歩も進めない気がしていた。

ただ何をどう話すかだけだ。

そうこうしている間にも、鉄二のバイクがすぐ側まで近付いている。

奴のハーレダビドソンのＸＬＨ８８３カスタムが横に並んだ。

「恭也！　恭也じゃないか！」

鉄二が俺に声を掛けた。

「お、オウ！　鉄二か、久しぶりだな」

俺はわざと今気付いた振りで答えた。

ーーチッ、ワザとらしい。

俺は、心の中で自分に唾棄した。

「どうしたんだお前、この前会って以来学校もバイトも休んで。陽子ちゃんの話しだと、何か凄え悪い病気に掛かって寝てるって聞いてたし、もう大丈夫なのか？」

鉄二が大声で聞いた。

例えアイドリングの状態でも、エンジンの音が煩過ぎて、どうしても声が大きくなってしまうのだ。

「ああ、もう大丈夫だ！」

俺も大声で返した。

「なら良いんだけどな。皆結構心配してたんだぜ。ヤクザもな……」

「そうか……、悪かったな」

「それにこの前お前にも話したが、シゲの奴もあれから連絡が取れないんだ。アイツのお袋さんからも心配して連絡貰ったんだが、俺も他の奴らも奴が何処に居るのか全然分からねえし、携帯も繋がらねえんだ」

鉄二が心配そうな顔で語った。

声のトーンが下がっている。

「……」

俺は言葉に詰まった。

返す言葉が見付からない。

俺は、どう話すか考え込んでしまった。

「どうしたんだ？　俺の話し聞いてんのか？」

鉄二が苛立って声を掛けた。

「あ、ああ……。なあ、今からちょっと時間取れねえか？」

鉄二にどう説明するのかまだ決まってもいないのに、思わず俺は勢いで言ってしまった。

鉄二は、俺の曇った表情と予想外の答えに、少し戸惑う表情を見せた。

「良いけどよ……。お前学校はどうするんだよ？　ここまで来ておいてボサルつもりかよ？　それにこの前もヤクザの奴が、お前の単位が足りねえって嘆いてたぞ」

「ああ、分かってるよ。だがそんな事より大事な話があるんだ」

「……」

鉄二は、俺の真剣な顔を覗き込んだ。

「……分かったよ……。何処か静かで人気の無い場所へでも行こうか……」

鉄二も真面目な表情で答えた。

さすがは俺の唯一の男友達だ。

俺の表情から余程の事だとしっかり読んでいやがる。

「悪いな……」

そう言って俺は、持っていたタバコを踏み消すと、鉄二のバイクのダンデムシートに跨がった。

「オイ、お前用のメットは無いぞ！」

鉄二が、後ろを振り返って言った。

「俺は気にしねえぜ」

「馬鹿、俺が気にするんだよ！」

そう言った瞬間、鉄二がいきなりバイクを発進させた。

凄まじい爆音を立て猛スピードで加速して行く。

学校の前を通り過ぎる瞬間、校門の前で怒鳴る生徒指導の水崎と学年主任の林の姿が見えた。

俺は鉄二の背中を見ながら、シゲの事をどう話すか未だ迷っていた。

2

2

ＢＡＲ『ヘブンズ・ドア』は、希望通りの人気も無く静かな場所であった。

俺は、マスターから店の合鍵を預かってるから店の出入りは自由だ。

最も勝手に入るのはさすがに気が引けたが、話が話だけに仕方が無い。

店内に入った瞬間は、場所が地下と言う事もあって一瞬ひんやりと感じたが、それが思い過ごしだったと判った俺は、直ぐ様エアコンのスイッチを入れた。

型が古くなった業務用エアコンから、“ガタガタ”と言う異音と、“ゴォォォーッ”と言う今時のエアコンでは考えられないような騒々しい音が、静かな店内に響き渡った。

店内の掃除は、翌日の開店前に行う為に今は昨夜の閉店時そのままの状態だ。

最後の客が立ち上がったままの状態の椅子が乱雑に置かれ、カウンターの上にも飲みかけのグラスや氷が解けてが底に溜まったアイスペールが無造作に置かれている。

吸い殻の溜まった灰皿には、火事防止の為にグラスに残った水割りがぶっ掛けてある。

昨夜は結構忙しかったのか、はたまたマスターが酔っ払っていたのか、カウンターの内側に設けられたシンクにも、まだ洗ってないグラスが散乱していた。

ガタガタと煩えエアコンだが、次第に店内が涼しくなって来た。

「まあ座れよ」

俺は、そう言ってカウンターの椅子を鉄二へと差し出した。

「ああ、でも良いのかよ？　勝手に入ったりして……？」

鉄二が気を使って尋ねた。

「仕方ねえさ。他に静かな場所なんて思い付かねえし、ここなら誰にも邪魔されねえからな」

そう言いながら俺は、鉄二に差し出した椅子の隣りに腰を下ろした。

鉄二も差し出された椅子に腰を下ろす。

俺は、自分から話を切り出す事が出来ずしばしの間沈黙が流れた。

「で、大事な話って何だ？」

少し間を置いて、痺れを切らした鉄二が先に切り出した。

分かってはいても、俺の心臓が“ドキリ”と跳ねる。

「なあ……、お前ヴァンパイアって居ると思うか……？」

俺は、唐突な質問で鉄二の質問に答えた。

「ハア？　何言ってんだお前。急に何んなんだよ？」

鉄二は、呆れて開いた唇の端を歪めた。

「だよな……。いきなりこんな事聞かれたら、誰だって変に思うよな……」

「おいおい、どうしちまったんだお前？　病気で頭でもヤラれちまったんじゃねえのか？」

「ああ……そうかも知れねえな……」

俺は、一度言いかけた言葉をそのまま胸に飲み込んだ。

「なあ、お前……何かあったんじゃねえのか？」

鉄二が心配そうな顔で聞く。

「……」

ーーくっそう、いったいどう話しゃ良いんだ。

胸が苦しい……。

「恭也、話してくれ……。いったい何があった？　何を隠してるん

だ？……。シゲの事か？　シゲに何かあったのか？　話せよ恭也！」

鉄二は、浴びせる様に質問して来やがる。

「……」

俺は、更に数瞬迷った。

ーーやはりコイツだけには隠しておけねえ。

ーーだが話したからってどうなる事でもねえ。

ーー鉄二を逆に苦しませるだけかも知れねえ。

ーーだけど、だけど……シゲが死んだ事を知っていて、しかもそれが俺のせいで死んだのに、ここまでシゲを心配しているコイツにこれからも知らん顔ですっ惚けて生きるなんて、やっぱ俺には出来ねえ。

俺は迷いに迷った揚句、ついに話す決心をした。

「シゲは死んだよ……」

俺は、まるで宙にボールを投げるかの様に、“ぽん”と言葉を放り投げた。

「何？　今何て言ったんだ？」

鉄二が聞き返す。

「シゲは死んだ……。俺が……殺した……」

声に力が入らねえ。

ただ言葉を吐くだけで精一杯だった。

鉄二の顔が歪む。

「シゲが……死ん……だ？　　……、バッ、馬鹿な！」

鉄二は目を剥いたまま、詰まった声を無理矢理搾り出した。

「すまん……」

俺も何と言って良いか分からず、ただ謝罪の言葉を無理矢理搾り出す事しか出来なかった。

「どう言う事だ？　すまん……ってお前、本当にお前がシゲを殺ったって言うのかよ！」

鉄二は激しい怒気を吐き出した。

「……」

俺は言葉に詰まった。

「何とか言えよ恭也！」

鉄二が更に詰め寄る！

「そうだ……。シゲは俺が……殺した……」

“ドカッ！”

鉄二の右ストレートが俺の左頬を捉える。

“ガターン”

俺は脚の高いカウンター用の椅子ごと、激しい音を立てて床に倒れた。

「テメエ、自分が何言ってるのか分かってんのかよ！」

鉄二が大声で怒鳴った。

怒りで顔がどす黒くなっている。

「……」

口の中を激しく切ったらしく、唇の左端から赤い血が“すうっ”と流れ出た。

ーーアツッ、さすがに鉄二のパンチは効きやがる。

俺は左腕で唇の血を拭った。

だがその痛みが、シゲへの贖罪のような気がして、俺のやり場の無い苦しみを和らげてくれる。

昨夜、久保のオヤジに幾ら慰められても、俺にはその場限りの気

休めにしかならなかった。

椅子から立ち上がった鉄二が、拳を握り絞めたまま俺を見下ろしている。

「立て、恭也！」

鉄二が再び怒鳴る！

俺はゆっくりと立ち上がった。

そして鉄二の顔を見詰めた。

「殴れよ、殴れよ鉄二……」

俺は鉄二に言った。

だが、鉄二は殴ろうとはしなかった。

それどころか、怒りに奮えている筈の鉄二は、何故か悲しげな表情で俺を見詰めていた。

ーー何故だ？　何故そんな目で俺を見る？

俺は戸惑った。

「恭也、オメエがシゲを殺したなんて信じれる訳きゃねえだろう。だいたいオメエがシゲを殺ったなんて可笑し過ぎるぜ。いったい何があったんだ……？」

鉄二が問い直した。

「だからシゲは俺が……」

そう言い掛けた俺の言葉を、鉄二の言葉が遮った。

「俺をナメてんのか恭也！　シゲが居なくなってからコッチ、俺が何もしないでいたとでも思ってやがるのか？」

鉄二が怒鳴った。

「な……、どう言う事だ……？」

「お前と駅前で会ったあの日、オメエは昼間シゲから何度も携帯に電話があったと言っていただろう。シゲが居なくなったのはその前日からなんだぞ！」

“！”

ーーそう言えば……、あの日村田がシゲの携帯から俺に電話していて、その事を鉄二に話してたんだ……。

俺は、鉄二にそれを告げた事を思い出した。

「お前がシゲを殺ったって言うのなら、電話の話は何だったんだ？」

「いや、それは……」

俺は咄嗟に返す言葉が浮かばず、次の言葉に詰まった。

「それにシゲが居なくなってから、俺はウチのチーム全員に声を掛けてシゲの居場所を捜させたんだぞ」

ーーそうか……、鉄二の率いる『ブラッディ・クロス』の力を持ってすれば、その情報力はオマワリなんかとは比べ物にならねえ。

「そうしたらシゲが居なくなった夜、駅前のゲーセンで二人の男と一人の女が、シゲと共に店から出て行くのをウチのメンバーの後輩が目撃してたんだ。そしてその夜からシゲが行方不明になった……。だったら犯人はお前じゃねえ、その三人組が犯人って言う事になるんじゃねえのか？……」

ーーその三人組って、村田とショウ、それに晶子の事じゃねえか……。

「しかもその内の一人は、前にお前と喧嘩した成田西高の村田だって事は分かってるんだ。だが成田西の奴らに聞いたら、岩が言ってた様に村田はお前と喧嘩した夜から行方不明だって言うじゃねえか。いったい何がどうなってるんだ？　それで何でお前がシゲを殺した事になるんだよ。えっ、恭也！」

鉄二は全て掴んでいやがった。

「……」

俺は完全に答えに窮していた。

「じゃあ質問を変えるが、もしもお前が言う通りシゲが死んでいるとしたら、何故お前がそれを知ってる？　答えろ恭也！」

鉄二は、再び怒気を露に叫んだ。

浴びる質問に容赦が無え。

「……」

まるで詰め将棋の様に畳み掛ける鉄二の質問に、最早真実を話す以外奴を説得する事は不可能に思えた。

ーーコイツは『相棒』の“杉下右京”か……？

そしてそれに比べれば、俺は言い逃れの出来無い証拠を突き付けられたマヌケな犯人役だった。

「この野郎、まだ黙ってるつもりか？　『金色の悪魔』とこの界隈の不良やヤクザまでが恐れる“狂犬”御子神恭は何処へ行った？　いつからテメエはそんな腑抜けになったんだ？　ええ、何とか言ってみろよ恭也ーーっ！」

鉄二は、掛けていた椅子を蹴り飛ばし、凄まじい形相で叫んだ。

その言葉が俺を決心させた。

「分かった……。全部話すよ……」

俺は、力無く呟く様に言った。

「ああ、俺が納得行くように全部話してくれ」

そう言って鉄二は、蹴り飛ばした椅子を元に戻し腰を下ろした。

俺も、倒れた椅子を戻して腰を下ろす。

そしてシャツの胸のポケットからクシャクシャになったセブンスターを取り出すと、一本口に咥え火を点けた。

気を落ち着かせる為と、話を切り出す決心と切っ掛けを作るべく、一息に大きく煙を吸い込んだ。

そして迷いと共に大きく煙を吐き出す。

見ると隣りで鉄二もショッポに火を点けていた。

「さっきも聞いたがな……。お前、ヴァンパイアって信じるか？……」

先程と同じ様に、俺は言葉を宙に放り投げた。

3

3

「なあお前、さっきもそんな事聞いてたが、それがシゲとどう関係するんだよ」

鉄二は、明らかに不信に満ちた顔で言った。

「ああそうだな……。今から話す事はとても信じちゃ貰えないだろうが、全て事実だ」

「分かった……」

鉄二は、訝しむ表情ながら一応頷いて見せた。

俺は、最初から全てを話す事にした。

「全ては、村田と喧嘩したのが始まりなんだ……」

鉄二が“やはり”と言う表情をした。

「さっきお前のチームの後輩って奴が、シゲと居た三人組を見たって言ったろう、それは村田とショウって奴だ。女の名前は知らねえ……」

俺は、わざと晶子の名前を伏せた。

「ショウ？　　誰だソイツは？」

「本名は飯沼彰二と言うらしいんだが、詳しくは知らねえ。それでその三人組はどう言う方法かは知らねえが、その夜シゲを拉致したんだ」

「何故だ？　何故シゲが拉致された？」

「俺をおびき出す為だ。村田は俺の携帯の番号が知りたくて、俺を知っている奴なら誰でも良かったと言っていた。お前と会った日の夜、俺のバイト先に岩と捜査一課の刑事が来て、俺から事情聴取して行ったんだが、その後俺の携帯に村田から連絡があって、シゲを拉致してるから俺に駅前の高架下まで来いと言いやがったんだ……」

「……」

鉄二は黙って俺の話を聞いている。

「そして俺は高架下へ行き、そこで村田にボコボコにされた……」

「お前がヤラれたって？　そんな馬鹿な……。その村田って奴は、そんな化け物みたいに強え奴なのか？」

鉄二が、驚きのあまり大声を上げる。

「ああ、だがそん時の奴は、既に人間じゃなかったんだ……」

俺は“ぞろり”と言った。

「に、人間じゃなかったって……。じゃ、じゃあまさか……」

「そうだ。村田はヴァンパイアにされてたんだ……。しかもヴァン

パイアは、人間とは比べ物にならない程のスピードとパワーを持っていて、しかも脳か心臓を潰さない限り死なないんだ」

「ば、馬鹿な……」

鉄二は、あまりの驚愕に声も満足に出せなかった。

今は、目を剥いたまま固まっている。

「俺と最初に喧嘩した後、村田はシゲを拉致した三人組の中のショウって言うヴァンパイアに生き血を吸われ、その後ヴァンパイアに転身したらしい……」

『そうだ、俺は夜の眷属、ヴァンパイアになったんだ！』

そう言って、黒い顔に喜悦の色を浮かべ高笑いしていた、村田の勝ち誇った顔が思い起こされた。

「そして俺が村田に殺されそうになった時、奴らと一緒に居た女のヴァンパイアが、命掛けで俺を庇ってくれたんだ……」

「何故その女ヴァンパイアはお前を助けたんだ？」

「それは分からねえ……。多分仲間割れか何かだろう……」

ーーやはり晶子の事は言えねえ。

俺はそのまま先を続けた。

「その女ヴァンパイアが死ぬ直前に、既にシゲは、村田達に血を吸

われ死んだと聞かされたんだ……」

「じゃあ、シゲは本当にそいつらに殺されたのか？……」

「ああ、間違い無え……」

この後、明らかに重い沈黙が俺達を包み込んだ。

持っていたタバコが短くなり、俺は水割りが溜まった灰皿でタバコを揉み消した。

「じゃあ後の二人はどうなったんだ？　村田は今何処に居る？」

ショッポを持つ黒田の手が、ブルブルと怒りで震えていた。

「村田は死んだよ……」

俺は“ぼそり”と言った。

「死んだ？　村田は死んだのか。いったい誰が村田を……」

「俺だよ……。いや、どうやら俺らしい……」

「お前が？　だってお前は奴にボコボコにされたって言ったじゃねえか？　なのに何でお前が奴を殺せるんだ？　しかも奴はヴァンパイアだったんだろう？」

鉄二は、シゲを殺された怒りと、俺のつじつまの合わない話に苛立っていた。

「実は俺も覚えてないんだ……。途中までは覚えているんだが、奴に殺されそうになって、意識を失ってからの事は、三日後目が覚めてから初めて爺に聞かされたんだ……」

「ジジイ？　それって、横浜に住んでいるお前の爺さんの事か？　確かあの事件の時、お前を警察まで身柄の引き受けに来てくれた……」

「そうだ……。あの爺は昔からヴァンパイアの存在を知っていて、しかもこの国のヴァンパイアに対抗する為に創られたある組織ともつるんでやがったんだ」

「な、何だってえ！」

鉄二は大声を上げた。

「爺から聞いたんだが、この国……て言うか世界には、昔からヴァンパイアに対抗する為に政府が創った極秘組織があって、爺は元々仙道士でヴァンパイアと互角に闘り合えるような化け物だから、過去に何度も一緒に闘った事があるそうだ。この時も、村田を襲ったショウって言うヴァンパイアを追ってその場所に来たらしい」

「あの優しそうな爺さんが……」

過去一度爺に会った事のある鉄二は、尚更驚いている様だ。

あのクソジジイの顔が目に浮かぶ。

「優しく……無くはねえが、とにかく爺が言うには、爺が着いた時既に村田は死んでいて、しかも村田を殺したのは俺だったらしい」

「だがどうやって、意識の無いお前が村田を殺せるんだ？」

「その話は後でする……。とにかく爺が来た事で、ショウって言うヴァンパイアは逃げたらしいんだが、その時爺にヒドイ怪我を負わされたショウは、この町のとあるビルに逃げ込んだ。そしてショウは、自分の負った怪我を治す為に、ビルの近くに住む住人を手当たり次第襲っては血を吸っていたらしいんだ」

「そう言えばお前、『スケルトン』ってチーム名を覚えてるか？」

「スケルトン……？」

ーーダメだ。全く覚えが無え。

俺がキョトンとしているのを見て、鉄二は呆れて頭を振った。

「覚えて無えのか？　この界隈で悪さしている弱小チームなんだが、昔お前に喧嘩を売って、お前が一人で返り討ちにした連中だよ。全員ボコボコで病院送りにしただろうが！」

「……」

ーー全く覚えてねえ……。

完璧に忘れている俺を見て、鉄二は完全に呆れ返った。

「まあ忘れたなら良い……。それで俺達が村田の行方を追っている時、そいつらが数日前から全員行方不明だって噂を聞いた。もしかしたらそいつらも……」

「ああ、確かにそんな奴らも居たな……」

俺は、あのビルでシゲと同様に殺されていたゾンビ達の中に、何体も不良達の死体が転がってい事を思い出した。

「そんな奴らもって、お前そいつらを見たのか？」

「ああ、ショウが居たビルで、シゲと共に死んでたよ……」

俺は唇を噛んだ。

「シゲだと！」

「そうだ。ショウは襲った人間を次々とゾンビに変え、その中にゾンビとなったシゲも居たんだ……」

「シゲがゾンビに……。ヴァンパイアだけじゃなく、ゾンビまで実際に居るなんて……」

「昨日の夜、陽子からアイツの通ってる高校の近くで最近行方不明になってる人間が大勢いるって聞いて、ショウの仕業に違いないと思った俺は、シゲの仇を打つ為にそのビルへ行ったんだ」

「……」

「だが俺が着いた時には、ショウも……、ゾンビと化したシゲ達も、ショウの仲間に殺された後だった……」

「ショウの仲間だと？　ヴァンパイアはまだ居るのか！」

「ああ。ヴァンパイアは俺達が知らないだけで、以前から政府と協定を結び人間と共存してるんだ」

それを聞いた鉄二は大きく頭を振った。

「何て事だ……。確かにお前が付く嘘にしては話が出来過ぎだとは思うが、それでもまともに“ハイそうですか”と信じられる話じゃねえぜ……。まさかマンガや映画じゃあるまいし……」

鉄二は、溜息混じりに言った。

「だから俺は真実を話すのは嫌だったんだ。こんな話、誰だって信じろって方が無理に決まってんだからな。それに、例えお前が信じなかったとしても、知ってしまった限りはお前はもう昨日までと同じ様には生きて行けねえだろ？……」

そう言って俺は椅子から立ち上がった。

「さあ話は終わりだ。俺はしばらくここに居るから、お前はもう学校へ行け！」

俺は鉄二に背を向けた。

「じゃあシゲの事は、皆にどう説明すりゃあ良いんだ？　シゲはゾンビにされてヴァンパイアに殺されたとでも言えって言うのかテメエは！」

俺の背中に向けて鉄二が怒鳴った。

「だから最初に俺が殺ったと言ったんだ。シゲが死んだのは俺の責任だ。それで不満なら俺を殺れば良いだろう！」

俺の苛立ちは頂点に達していた。

「馬鹿、だから何でテメエを殺るなんて話になるんだ？　俺はシゲの事を心配している奴の家族や仲間に、何と言えば良いんだと言ってるんだ！」

鉄二が大声を張り上げた。

「何も言う必要は無え！　シゲは永遠に行方不明のままと言う事さ。真実が親や誰かに知らされる事も無え。所轄のお巡りにもだ！　つまり闇から闇ってやつだよ。それが現実なんだ！　それに今話した事は絶対に秘密だ。お前も、今俺が話した事は全て忘れろ！　もしもこれ以上首を突っ込んだら、お前も後に引き返せなくなるぞ！」

俺は、激しい口調で鉄二に釘を刺した。

「じゃあお前はどうなる？　いや、どうするんだ？」

鉄二が食い下がった。

ーーこの馬鹿野郎が。

「俺はもう引き返せない。だから学校も、このバイトも辞める……」

「何言ってんだ！　俺も聞いちまった以上俺もお前と一緒に行くぜ。それに俺は、シゲを殺ったヴァンパイア共も、俺達に真実を明かさず闇から闇へと事を葬り去ろうとする政治家共も許さねえ……」

俺が後ろを振り返ると、鉄二は怒りに震えていた。

鉄二から凄まじい怒気と殺気が立ち上っている。

ーー何も分からねえのにトチ狂いやがって、この馬鹿が。

だがこの時初めて、俺に手を引けと怒鳴った時の爺の気持ちが分かった様な気がした。

ーーこの馬鹿を巻き込む訳には行かねえ。

「鉄二、これを見ろ！」

そう言って俺は、カウンターの上のグラスを一つ手に取った。

鉄二が不思議そうな顔で見詰める。

俺はいきなりグラスを握った。

「オイ馬鹿、何を！」

俺が何をするのか察した鉄二が声を上げる。

だが俺は、鉄二の声を無視した。

“ガシャン！”

さほど力を込めたつもりも無いのだが、手の中でグラスが、甲高い音を立てて粉々に砕け散った。

ーーやはり力が強くなってやがる。

俺は、忌ま忌ましい自分自身の身体に苛立ち、唾棄したい気持ちになった。

グラスの破片が突き刺さった手からは、夥しい血がグラスに残っていた水割りと共に床に零れ落ちた。

俺は血塗れになった掌を、鉄二に向けて翳した。

掌にはグラスの破片が突き刺さり、他にも激しい裂傷を負っていた。

鉄二が慌てて叫んだ。

「オイ！　気でも狂ったんじゃねえのか？」

「黙って見てろ！」

俺は鉄二を一喝した。

鉄二は“びくん”として口をつぐんだ。

激しい痛みが手の平で脈打つ。

しかし、しばらくすると、痛みが嘘の様に引いて行った。

手に負った傷が、見る見る内に塞がって行く。

「おっ、お前……、まっ、まさか……」

鉄二は声を詰まらせた。

「見たか……。これがさっき話してた事の理由だ。俺はどうやら生れつきの化け物だったらしい。だからヴァンパイアに転身した村田にボコボコにされても助かったし、意識が飛んだままでも奴をぶっ殺す事が出来たんだ…。最も覚醒したのも、自分の素性を知ったのも全て昨日の事だがな……」

「……」

鉄二は、あまりの驚きに声も出ず、ただ口をパクパクさせるだけであった。

「俺は、村田と殺り合うまで自分が何者か知らずに、しかも俺が赤ん坊の頃に爺が掛けた呪術のお陰で、化け物に転身したり人を襲ったりする事も無くただの人間として生きて来れた。だが自分の正体や、ヴァンパイアの存在を知ってしまった限りはもう後戻りは出来ねえ……。分かったか！　俺はもう後には引けねえんだ！」

俺は自分へ言い聞かす様に、思いの全てを吐き出した。

「恭也……お前……。な、何て事だ……」

鉄二はようやく声を搾り出した。

「鉄二、お前は良い奴だ……。俺はお前を巻き込みたくねえ。だからもう俺とは関わるな。今話した事も全て忘れろ。シゲの事は俺も辛いし、残念だと思う……。だがこんな事は、他の誰に話しても信

じて貰える様な話じゃねえ。シゲの家族には本当に悪いと思うが、シゲはずっと行方不明のまま、俺達の心の中だけで弔ってやるしか無えんだ……」

「……」

鉄二は、込み上げる悔しさに拳を震わせ唇を噛んだ。

「さあ分かったら行け……。ここを出たらお前とは赤の他人だ。良いか、今度お前が俺やこの件と関わったら、次はお前が第二のシゲになるかも知れねえんだぞ。だから俺とは二度と関わるんじゃねえ！」

「……」

鉄二は、俯き黙ったままぴくりとも動こうとしなかった。

ー俺がこれだけ言ってるのに、この馬鹿はちっとも行こうとしやがらねえ。

「早く行け！　お前はただの人間なんだ。行かねえと、今この場でお前を殺す事になるぜ！」

俺はわざと凄んだ。

鉄二は、ようやく決心した様に、黙ったまま俺に背を向けた。

そして出入口の扉に向かいゆっくりと歩き出す。

だが鉄二は、出入口の扉の前でふと立ち止まった。

「恭也……、お前がどう言おうが、例えお前がヴァンパイアだろうが、俺はお前の事をいつまでも親友だと思ってるぜ……」

鉄二は、俺に背を向けたまま言った。

背中が僅かに震えている。

「鉄二……」

俺は呟く様に声を掛けた。

「恭也……、死ぬんじゃねえぞ。そしてもしも……、もしも俺で力になれる事があったらいつでも言ってくれ。俺は何処からでも駆け付けるし、どんな事でも力になる……」

「鉄二……、すまん……」

俺は、声を搾り出すのが精一杯だった。

鉄二は背を向けたまま片手を上げると、木製の古びた扉を押して店を出て行った。

俺は一人店に残った。

少しの間、俺は鉄二が出て行った店の扉を見詰めていた。

「さあ、一応開店の準備だけでもしとくか……」

俺は、カウンターに放置された飲みかけのグラスや灰皿を一カ所

に集め始めた。

しばらくすると、鉄二のバイクのけたたましいエンジン音が、地下にあるこの店まで響いて来た。

そして次第にバイクの音が遠ざかって行く。

俺は、バイクの音が聞こえなくなるまでその場に立ち尽くした。

「これでこの店ともお別れか……」

俺は誰に話す訳でも無く、一人ぽつりと呟いた。

その時、何かが頬を伝うのを感じた。

そっと手で拭う。

結局勢いで鉄二にヴァンパイアや自分の事を話す結果にはなったが、学校やバイトを辞める事は昨夜一晩考えて決めた事だ。

そして鉄二や他の奴らの下から去る事も……。

自分で決めた事なのに……、何なんだこの気持ちは……。

再び熱い物が頬を伝う。

「涙……か……」

そう呟いた瞬間、急に涙が止まらなくなっちまった。

俺は、迂闊にも嗚咽を漏らしてしまった。

4

4

李と獣吾の二人は、車の中に居た。

獣吾の愛車、いすゞのビッグホーンである。

黒とパールのツートンのボディで、エンジンはディーゼルではなくガソリンだ。

本当はディーゼルが良かったのだが、これも廃ガス規制法の為、将来を考えて仕方なくガソリン車を選んだのだ。

少し年式の古い型で、内・外装とも今時の車に比べれば武骨な印象を受ける。

要するに曲線が少ないのだ。

だが獣吾は、この武骨さがたまらなく好きであった。

多少の点検や修理なら常に自分でしている為、年式の割には良く走る車だ。

太く逞しいタイヤが、ゴリゴリとアスファルトの路面を踏み締めて行く。

運転席と助手席の窓が全開にしてある為に、車内には風が舞い込んでいた。

風が、李の束ねた長い髪や髭を撫でて行く。

平日と言う事もあって、道は意外に空いていた。

運送会社のトラックが、比較的目に付く程度だ。

獣吾の車は、それらトラックの間を縫う様に走っている。

時速は裕に百キロはオーバーしているだろう。

獣吾の後ろからは、佐々木のフーガが追走していた。

無論これは尾行などでは無く、これから三人で高野山の慈海に会いに行く途中なのだ。

別々の車で来たのは、もしも何か不測の事態が起こり、佐々木が急遽別行動を取らねばならなくなった時に、一台では不都合が生じる為二台で行く事になったのである。

二台の車は、一路東名高速道路を名古屋へと向かい、つい先程浜松のＳＡを通過した所だ。

カーステレオのスピーカーからは、Ｓｔｅｐｐｅｎｗｏｌｆ（ステッペン・ウルフ）の『ＢＯＲＮ　ＴＯ　ＢＥ　ＷＩＬＤ（ワイルドで行こう）』が大音量で流れている。

獣吾は、ハンドルを握る手の人差し指でリズムを取りながら、曲に合わせて鼻歌を歌っていた。

助手席に乗っているのが李でなければ、ちょっとしたドライブ気

分である。

「全く煩いのう……。もう少しボリュームを下げれんのか？」

李が顔を顰めて言った。

「ったく、しょうがねえなあ～」

そうぼやくと、獣吾はボリュームを落とした。

「お前さん人狼のクセに良くこんな大音量で平気じゃのう？」

「へっ、好きな曲は全然気にならねえんだよ」

獣吾は鼻を鳴らした。

「都合の良い耳じゃのう」

李が呆れ顔で言った。

「ところでよう、アイツ大丈夫かな……」

獣吾は“ぽつり”と漏らした。

「恭也の事か？……」

李も前を見たまま、漏らす様に言葉を吐いた。

「ああ、アイツを東京に一人残したまま来ちまってよ……。昨夜も殆ど寝てなかったみたいだし、上っ面は元気そうにしていたが、結

構参ってるみたいだったぜ……」

獣吾も前を向いたまま、重々しく言葉を吐いた。

先程までの陽気さは陰を潜め、今は真顔になっている。

「昨日は奴にとって色々あり過ぎたからのう……。たった一日で、人の何ヶ月……いや、幾年にも相当する出来事や事実が、まとめて一度に襲い掛かったのじゃ……。今の奴では全てを受け止める事は無理じゃろう……」

李は、遠くを見る目を薄く細めた。

「なあ、本当にアイツは昨日まで何も知らなかったのか？」

「うむ。吸血鬼の存在自体はその数日前に知る事となったが、その時はすぐ意識を失っておったから、実際には昨日まで自分の両親の事はおろか、吸血鬼や人狼の存在も、ましてや自分が何者なのかなど全く知らなんだよ……」

李の表情は暗く、そして苦渋に満ちていた。

「そうか……。確かに自分の友達がヴァンパイア共に殺され、しかも顔も知らない自分の父親がそいつらと同じヴァンパイアだったんだ。更にお袋さんは俺達獣人族の長の娘で、自分はヴァンパイアと獣人の混血だったなんていきなり知らされたら、そりゃ俺だって正直気が狂いそうになるぜ」

「……」

李は、言うべき言葉が見付からなかった。

「それにヴァンパイアは一匹だけじゃなく、しかもちゃんと組織化までされていて、それを政府の連中が知っていながら一般市民に隠してやがるんだからなあ。ましてや奴らから金まで貰って奴らに協力してたなんて、全く洒落にもなってねえ。世も末だぜ！」

獣吾は、忌ま忌ましげに唾棄する様に言った。

「その通りじゃな……。そして今密かに、この国を揺るがすような事を奴らは企んでおる……。その只中にいきなり放り出されたのじゃ。奴でなくとも頭が変になるわな……」

李は、やり切れぬ思いで助手席の窓から流れ行く景色を眺めた。

そんな李の気持ちを他所に、窓から吹き込む風が、茶化す様に李の白くなった髪や髭を嬲って行く。

「だけどよう、アイツが今一番戸惑い恐れているは、自分自身に対してだと思うぜ。俺が言うのも何だが、アイツの能力はまだまだあんな物じゃねえ。ありゃ俺達獣人やヴァンパイアを遥かに超えた化け物だ。アイツ自身、何となくそれに気付いてるみたいだしな……」

「そうじゃな……。儂もあ奴が完全に覚醒した時、いったいどれ程の能力を持っておるのか皆目見当が付かん。しかも完全に覚醒する時も、もうそんなに先の事ではあるまいよ……」

李は、思い詰めた様に窓の外を流れ行く景色を見詰めていた。

「アイツ、これからどうするんだ？　久保のオッサンはああ言って

たが、もう今のアイツに普通の暮らしなんて無理だぜ。それにアイツが本当に覚醒した時、昨夜言ってた『阿字観』程度ではどうにもならねえかも知れねえしな……」

獣吾も、李や恭也の今後を考えると自然に声のトーンが落ちた。

「じゃからこの機会に、御山の慈海に恭也の事を相談するつもりなのじゃ」

「だがよう、そんな事高野山の坊主に相談して大丈夫なのかよ？言ってみりゃ奴らは昔からの化け物退治の専門家だぜ。アイツの事がバレたらマズイんじゃねえのか？」

「慈海と儂は古い仲じゃし、実際恭也の父親である恭介とも酒飲み友達であった。心配には及ばぬよ……」

「なら良いけどよ。だが爺さんはいったい何者なんだよ？　俺の爺さんと知り合いだったのはともかく、後ろから付いて来ているあの佐々木のオッサン達とも古い付き合いみてえだし、今から行く高野山の坊主共とも仲が良いみたいだ。それにアイツの親父と言っても結局はヴァンパイアだろ？　いったいどんな人間関係してやがんだ？」

「儂は、見たまんまのただの爺じゃよ」

「馬鹿言ってんじゃねえよ！　こんな化け物みたいな爺さんが、ただのジジイであってたまるかよ！」

そう言われて李は破顔した。

「まあ儂の事は、機会があればまたその時にでも話すさ。まあそんな事より、今は吸血鬼共の企みを潰す事の方が先じゃよ」

「それにはまず高野山へ急げってか？」

「そう言う事じゃな」

李は軽く言った。

だが口調とは裏腹に、李は重く険しい表情で前方を見据えていた。

李の表情を“チラッ”と見た獣吾は、重くなる気持ちを振り払うべく、アクセルを力強く踏み込んだ。

ビッグホーンはどんどん加速して行く。

これから向かう西の空には、どんよりとした分厚い雨雲が広がり、獣吾達にこれから来る嵐を予感させた。

5

5

その老僧は、両手を組んだ脚の中央で組み、静かに目を閉じていた。

背筋を“ぴん”と伸ばし座っている。

“結跏趺坐”

見た目も普通の胡座とは脚の組み方が違う。

綺麗に剃髪された頭には幾筋もの深い横皺が刻まれており、長く伸びた眉毛は既に白くなっていた。

年齢は七十代半ばと言ったところであろうか。

笑えば如何にも好々爺と言った感じだ。

痩せた身体に紫の僧衣を纏い、金襴の七条袈裟を着用している事からもかなり高位の僧であるらしい。

老僧は、六十畳程もある広い和室の中央に、一人ぽつん座していた。

柱や剥き出しの梁などの木の風合いからしてかなり古い建物の様だ。

ここは高野山にある子院の一つである。

海抜九百メートルに位置する高野山は、八葉の峰（今来峰・宝珠峰・鉢伏山・弁天岳・姑射山・転軸山・楊柳山・摩尼山）と呼ばれる峰々に囲まれた盆地状の平地にあり、八つの峰々に囲まれているその地形は『蓮の花が開いたような』と形容され、仏教の聖地として一大宗教都市を築いていた。

高野山には、総本山である金剛峯寺の他に、山内にはおよそ百十七の寺院があり、その内の五十三ヶ所は一般客の為の宿坊として使用されている。

この老僧は、一般には公開されていない、山奥にひっそりと建てられた子院の一つに居た。

しかも、この子院自体は百十七の寺院には数えられていない。

実際に寺院と呼ぶには、少しばかり趣が違っていた。

奉られている筈の本尊も無く、調度品の類も何も無い。

寺院としての体を成していないのだ。

寺院の一室と言うよりは、空手や柔道等の道場と呼ぶ方がしっくりくる。

畳はあちこちがボロボロに擦り切れ、板木を張り巡らした壁にも所々に新しい板木で修繕された跡が見られた。

そのだだっ広い建物の中央で、老僧が一人瞑想をしていると、廊下から人の近付く気配が漂って来た。

足音は……無い。

気配も、余程気配を読む事に長けた者でなければ感じられぬ程である。

しかしこの老僧は、確かに近付く者の気配を感じ取っていた。

すると、いきなり廊下へ通じる障子が左右に開け放たれた。

開いた障子から、一人の若い僧が入って来る。

「慈海様、やはりこちらにおいででしたか！」

若い僧が声を掛けた。

その若い僧は、黒い僧衣の上にボロ布を縫い合わせた五条袈裟を纏っていた。

頭は綺麗に剃髪されており、キリリとした眉の下には二重瞼の優しげな瞳が見て取れる。

高い鼻梁とふっくらとした唇、そしてすっきりと尖った顎を見る限り、少し中性的な美男子であった。

身長は百七十五センチ程で、一見痩せて見えるがひ弱な印象は無い。

むしろその所作には隙や無駄が一切無く、しかも獣のしなやかさを秘めていた。

実際に廊下を歩く際にも音を立てず、殊更気配を隠した訳でもないが、自然と気配を隠す事が日常となっているらしい。

見た目の優男と言った印象とは別に、どこか底の知れぬ男であった。

慈海と呼ばれた老僧は、片方の目を薄く開いて声を掛けて来た若い僧を見遣った。

「円角……か」

のんびりとした口調で慈海が言った。

円角と呼ばれた若い僧は、わざと足音を立て“ズカズカ”と慈海に歩み寄った。

「捜しましたよ慈海様。またこの様な場所にお一人で……」

円角は咎める様に言った。

だが本気で怒っている訳では無く、顔はにこやかに笑っている。

「何となくここは落ち着くのでな」

慈海も柔和な笑顔で答えた。

「やれやれ……」

円角は半ば呆れ顔でぼやくと、慈海の正面に胡座を掻いて座った。

胡座ではあるが、背筋が見事なまでに伸びていた。

かなりの高僧である慈海と見比べても、風格と言う点において見劣りしていない。

「それより、先程慈海様宛てに電話がありました」

「電話？　珍しいのう……」

「横浜の李周礼老師からです」

「おう、それで！」

慈海の目が輝いた。

「老師は今東京におられるみたいで、これから『内調』の佐々木様と共に、車でこちらへおみえになるそうです」

「そうか……。ならば儂からの伝言を聞いたのだな。それでいつ頃に着くと言うておった？」

「いえ到着時間まではおっしゃられなかった様です」

「ふむ……。まあ今日中には来ると言う事だな……」

慈海は、何か含む様な物言いをした。

「ですが、思ったより早く来て頂ける事になって良かったですね」

「うむ……」

慈海は、厳しい表情で返事を濁した。

「どうかされましたか？」

「いや、先程座主様に呼ばれてな……」

円角も厳しい表情で頷いた。

「それで座主様は何と……？」

円角が尋ねる。

「うむ……。昨夜の話の続きでな……」

「真の三種の神器の事ですか？」

「うむ。昨夜座主様が言われた様に、やはり奴らの目的が、真の三種の神器にある事は疑い無い」

「はい……」

円角が眉を潜ませた。

「その為、これ以上奴らが入って来れぬよう、この御山の結界を強化する事となったのだが、この際残り二つの神器の行方も知っておくに越した事は無いと言う事になった」

「確かにそうですね……」

「それで座主様とも話し合うたのだが、やはり三儀天たるお主に、残りの二つの神器の保管されている場所を至急調べて貰う事となった」

「私がですか？　では大角と小角は如何が致します？」

「あ奴らは調査の仕事には向かぬ。従ってこの件はお主一人でやって貰いたい。それに今は例え僅かな期間であっても、高野三儀天の全員を山から降ろす訳けにも行かぬよ。三儀天が全員不在では、御山の護りが疎かになるのでな」

「分かりました。では早速！」

そう言うと円角は“すっく”と立ち上がった。

「各寺院や関係各所にも、お主の調査に協力するよう座主殿の名で要請を出しておく。頼んだぞ！」

慈海は円角を見上げ言った。

「はい。老師や佐々木様にくれぐれも宜しくお伝え下さい。では……」

円角は慈海に一礼すると、そう言い残して部屋を後にした。

慈海も、少し間を置いて立ち上がると、今しがた円角が出た障子を開け縁側へ歩み出た。

この建物を取り囲む木々が生温い風に揺れている。

「嵐が近い様だのう……」

慈海は、どんよりとした空を見上げ一人呟いた。

湿気を孕んだ生温い風が、慈海の言葉を飲み込みやがて彼方へと追いやって行った。

6

6

光牙は、昨夜と同じマンションのリビングに居た。

昨夜と同じ緋色のソファーに座っている。

ただ服装は昨夜と違い、グレーに細いストラップの入った3ピーススーツの上着だけを脱ぎ、ベストとスラックスの状態になっていた。

白いYシャツの襟元のボタンを一つ外し、派手過ぎない紫色のネクタイを少し緩めている。

現在時計の針は、正午を少し回っていた。

『貴族』である光牙は、太陽の光を浴びても平気な為、リビングの窓には薄いレースのカーテンが引かれているだけだ。

最も空は薄曇りの為に十分な太陽光は得られず、明かりを点ける程ではないが、部屋の中は薄暗さを感じた。

最も夜目が利くヴァンパイアにとっては、室内の明るさなどさほど気にならないのかも知れなかったが……。

光牙と対面する様に、向かい側のソファーには、神経質そうな男が座っていた。

年齢は三十代初めと言ったところか。

少しウェーブの掛かった髪を左右に分けている。

細面で尖った顎をしており、銀縁のスクエアタイプの眼鏡が、この男の知的で神経質な雰囲気を更に醸し出していた。

仕立ての良い濃紺のシングルスーツを細身の身体に纏い、同じく紺色のレジメンタルタイを絞めている。

光牙は、目の前の紅茶を一口啜った。

優雅な動作でカップをソーサーを戻すと、ゆっくりと脚を組み替えた。

能面のような顔には、いつもの涼しげな笑みが浮かんでいる。

「藤巻、保存血液の在庫はどの位あるのですか？」

光牙が聞いた。

「はい。現在『帝都グループ』傘下の血液銀行に保存されている保存用血液の量では、昨日お目覚めになられた方々の分も計算に入れますと、せいぜいもって半年だと思われます」

藤巻は、手にしたシステム手帳を括りてきぱきと答えた。

「そんなものでしょうね。御前が厚労省へ連絡を入れると言っていましたが、あちらからは何か言って来ましたか？」

「はい。今朝戸部から連絡があり、他の血液銀行からも出来るだけ

こちらに回して貰える事になりました。ですが……」

藤巻が言い澱んだ。

「それでは足らないと言う事ですね」

「はい。ここ数年献血の量も減少の一途を辿り、保存血液が不足がちなのです」

「すると、人工血液に頼らざるを得ないと言う事ですか……。アレはとても飲めた代物ではないのですがねぇ……」

光牙は、この男には珍しく露骨に顔を歪めた。

「こうなると、いよいよあの計画を進める必要が出てきたと思うのですが……」

「プラントですか……。ですがあれは、御前が強く反対してますからねぇ」

「はい」

「良いでしょう。御前には私の方で今一度説得してみます。貴方はプラントの設計を急がせなさい」

「分かりました。帝都建設にはそのように伝えておきます」

そう言って藤巻は、手にしていたシステム手帳をパタンと閉じた。

光牙が、再びティーカップを口に運ぶ。

それに合わせて、藤巻も紅茶を一口啜った。

「そう言えば、昨夜斎賀から報告があったのですが、八咫鏡は高野山に在るそうですよ……」

光牙が切り出した。

「やはりそうでしたか。御前様のご想像通りでしたね」

藤巻が言った。

「斎賀からの話では、奴らこちらの狙いに気付いた様です」

「奴らも馬鹿ではありません。高野山に八咫鏡が在るのでしたら、それも致し方ないでしょう」

「あちこちの神社や寺に『屍鬼』共を忍び込ませた事が、坊主共に警戒心を持たせる結果になってしまった様です」

「それで奴らは何と？」

「高野山に強力な結界を張った様です。我々には手が出せぬ程の……」

光牙が忌ま忌ましげに言った。

「そうですか……。それは由々しき事態ですね……。それで光牙様はどうされるおつもりですか？」

藤巻が訊ねた。

「既に南部と三人のファミリアに、高野山の各要所に爆弾を仕掛けるよう命令しておきました。夜にはあちらに到着するでしょう」

「南部にですか？　ですが高野山には既に結界が張られていると……」

藤巻が心配そうな面持ちで訪ねた。

「大丈夫です。斎賀も同行している事ですし、爆弾をセットするファミリアは、三名共皆その道のプロフェッショナルです」

「そうでしたか。流石光牙様、打つ手がお早い」

「ククク、世辞は結構です」

光牙は、含む様に笑った。

「ですが、爆弾をセットして、その後どうされるおつもりですか？」

更に藤巻が訪ねる。

「爆弾を仕掛けるのは、あくまで高野山攻め下準備に過ぎません。そして高野山攻めの際には、我々に手が出せない以上他の者にやらせる他ないでしょう」

光牙の目が、ギラリと妖しく光った。

「では例の者達を……」

藤巻の目も、光牙の言わんとする事を読み取り、含んだ様に妖しく光った。

「ええそうです。アレは今何体完成していますか？」

「十八年前に使用した者達は、まだまだ未完成だった為に今では殆どが使い物になりません。ですが現行タイプは、先程テストを終えた者を含め六体がロールアウトしています」

藤巻が澱み無く答えた。

「六体ですか。いかに訓練された法力僧とは言え所詮は人間……。六体も送り込めば十分でしょう」

光牙がニヤリと笑った。

「ですが、あちらには三儀天と称する凄腕がいると聞き及びますが」

「良く調べてありますね。流石私の第一秘書だけの事はあります」

光牙は、満足そうな笑みを浮かべて言った。

「ありがとうございます」

そう言って藤巻は頭を下げた。

自尊心を刺激され、藤巻は満足気に口元を綻ばせた。

それを見た光牙が、含む様に笑った。

「ですが気にする事はありません。幾ら三儀天とは言え、やはり奴らも人間です。夜の眷属である我々ならともかく、人間が修行程度で得られる能力などたかが知れています。心配には及びませんよ」

光牙が嘲る様に言った。

「……」

藤巻は黙っていた。

「ああそうでした。貴方も人間だったのですねぇ。悪い事を言いました。ですが貴方は、力を奮うだけの愚か者とは違い優秀な人間です。それに事が成就した暁には、貴方も我々の眷属の一員に名を連ねる者として支配する側となるのです。しかも『屍鬼』等と言う出来損ないと違い、『生成り』ではあっても、私達『貴族』と同じ完全なヴァンパイアと成れるのです」

「はい。今からその時が楽しみです」

藤巻は、その口元に下品た笑みを浮かべた。

「それと藤巻、高野山の件はそれで良いとして、残る天叢雲剣も早く見つけ出さねばなりませんよ」

光牙が険しい表情で言った。

「はい」

藤巻も表情を引き締めて応える。

「先日来、貴方が接触している阿倍と言う男、その後何か進展はありましたか？」

「いえ……。ですが、その筋に詳しい学者にも調べさせましたが、やはりあの阿倍と言う男の家系は、元々皇別氏族の流れを汲む豪族で、平安時代に名を馳せた希代の陰陽師、安倍晴明の祖に当たる阿倍氏である事が分かりました。しかも土御門家とも深い繋がりがあるそうです」

「そうですか……。ですが現在では、何か特殊な職業に就いている訳でも、神社や寺を営んでいる訳でもなく、本業はただの公務員だと言うではないですか。そのような者が、真の三種の神器を保管しているとは些か信じ難い話です」

光牙は、明ら様に藤巻の話を訝しんだ。

「確かにそうですが、もしも真の三種の神器の隠し場所を記した覚書なる物が存在するとしたら、如何思われますか？」

藤巻はニヤリと笑った。

「何ですって！」

光牙は思わず息を飲んだ。

「ですがそのような物が本当に存在するのですか？　実際、斎賀からも覚書の話など聞いた事がありません」

いつも冷静な光牙の声が、少し上擦っている。

「それは当然の事です。真の三種の神器を保管している者達は、自分達の他に誰が残りの二つを保管しているのか、互いの安全の為にも知らされてはいないのですから」

光牙とは逆に、藤巻は冷静そのものに答えた。

「無論それは斎賀から聞いて知っています。その内の一つでも保管している者やそれを欲する者達が、その秘められた能力を我が物にしようと企んでも、全ての保管場所を知らぬ限りその能力を手に入れる事が出来ぬようわざわざ幾つもの形代を作り、それらをわざと目立つ様に伊勢神宮や熱田神宮時に奉納する事で、他者の目を欺いて来たのです。しかし真の三種の神器は、時の朝廷が余人に知られぬよう秘そかに別々の者に保管を命じた筈。それなのに、何故覚書などと言う物が存在していると言えるのですか？」

光牙の声が、興奮で大きくなっている。

「しかし、光牙様達のような長生種の方々に比べれば、私達人間の寿命はあまりにも短い……。家も人も、時代と共に栄枯盛衰を繰り返し、絶対に不変と言う事はありません。それにもし何らかの理由でその一族が途中で途絶えてしまった場合、もしも覚書なる物が無ければ真の三種の神器が何処に保管されているのか誰にも分からなくなってしまいます」

「確かにそうですが、ならば貴方の言う阿倍なる男の家系が、その覚書を受け継ぐ一族だと言うのですか？」

「はい……」

藤巻が即答した。

目に自信が満ち溢れている。

「しかし、それなら尚更そのような物を、一個人の家系に委ねると言うのは、有り得ない事ではないですか？」

光牙が怪訝な表情で言った。

藤巻の自信に満ちた目を見ても、光牙の表情には疑心の色が浮かんでいる。

「八尺瓊勾玉が獣人族の下に在り、今また八咫鏡が高野山に在ると分かった以上、残る天叢雲剣もそれなりの場所に保管されている事は明らかです」

「それは、長い歴史を経ても変わらぬ安全な場所……と言う意味ですか？」

「はい。最もそれは場所に限らず、人であっても、集団であっても良いのです。少なくとも、国の手によって確実に管理、または保存される対象であれば……」

「ふうむ……。では政府は、昔から真の三種の神器の保管場所を知っていたと言う事になりますね」

「いえ、政府は何も知らなくて良いのです。それらが違う理由において管理・保存の対象であれば」

「なるほど、獣人族は時の朝廷との密約により、国の管理・保護の

対象だった。しかも防人によって絶えず監視が続けられていた。更には高野山も、空海の功績や朝廷との繋がりから、仏教の聖地として人間共の信仰を集め国からの手厚い保護を受けてきました。そう言った意味では、二つとも貴方の言う条件に当て嵌まりますね。ならば残る一つも国の管理下にあるか、保存・保護の対象となる場所または集団と言う事になりますか……」

「はい」

「でもそれでは、阿倍なる者の家系が、その覚書を保管する一族であると言う貴方の説からは掛け離れはいませんか？」

「そうではないのです。実際に獣人族はもとより、高野山もそれなりの実力を持った集団です。寧ろ国津神の末裔と言われる獣人族が、天津神の象徴とされる真の三種の神器の守人として撰ばれた事の方が、私には不思議でなりません。ですがそのような議論は別としても、高野山も獣人族も真の三種の神器を護る為の力としては有効であっても、逆にそれは両刃の剣だとも言えます。もしも奴らのどちらかが、残りの二つを手に入れようと企てた場合、その力は他の保管者や時の権力者にとって脅威にもなりかねません。そう考えた場合、全ての保管場所を記した覚書を保管するような者を、わざわざそれなりの実力を持った集団に任命する筈がありません」

藤巻は断言した。

「なるほど。だから実力を持った集団ではなく、敢えてただの一個人の家系に委ねたと言う訳ですか」

光牙は得心した様に頷いた。

「はい。最も阿倍の家系も、昔はそれなりの権力を持つ一族だったのでしょうが、恐らく時の朝廷の命により、覚書を護る一族として任命された時から阿倍の本流を外れ、時の流れと共に歴史の中に埋没して行ったものと考えられます」

「しかし、覚書の存在に気付いただけでなく、良く阿倍の家系まで辿り着く事が出来ましたね」

光牙は、藤巻の調査能力に感嘆していた。

「はい。実は先程も申し上げました大学の教授は、日本の神話の信憑性や古代の日本史についてかなり深く研究している学者で、三種の神器の事もかなり詳しく研究しており、独自の理論を構築し論文を書いている程です」

「ほう、面白い人物ですねぇ」

「しかもその論文にはもう一つの……、つまり真の三種の神器存在の可能性にも触れており、実際読みあさった数々の書物から、その存在の可能性を見い出したそうです」

「流石は学者ですねぇ。それでその男は、真の三種の神器の秘められた能力に気付いているのですか？」

「いえ、その点には全く気付いていない様でした。実際本人も、何故三種の神器の形代が幾つも作られたのかを疑問に思っている様でした」

「そうでしょうねぇ。実際学者と言う種類の人間には、想像もつかない代物ですからね。アレは……」

光牙は含み笑いをした。

「その教授以外にも、その他の大学の教授達や、考古学や古文書に詳しい民間の学者や研究家等に協力してもらい、宮内庁や様々な神社・寺院・個人宅に眠る古文書や書物を調べた結果、阿倍なる一族と覚書の存在に辿り着いたのです」

「よくもそこまで調べ上げたものです。では貴方の言う通り、阿倍の家系は、覚書を護る一族なのですね」

「はい。それで先日より阿倍家の人間と接触しております」

「それでその者は何と言っているのですか?」

「接触をしている男の名は阿倍満男……。阿倍家の次男です。公務員をしているのが兄の方で、満男の方は無職で独身だそうです。その男が言うには、そのような覚書も自分の一族の事も何も知らないとの事でした」

「惚けているだけではないのですか?」

「いえ、どうやらその男はかなりの放蕩者で、近所の者の話では、家族からも疎まれている様です。両親は既に他界していますので、恐らく父親はしっかりしている兄にだけ一族の秘密を明かし、弟の満男には秘密にしていたと思われます」

「なるほど……。ですがそれでは、その男と接触を果たしても意味が無いのではありませんか?」

「その阿倍の家系は、代々陰陽道を受け継ぐ一族で、本人も多少なら呪術を使えるそうです。しかも覚書の事は知らなくても、家の離れに地下室への入口のような物があると言っていました」

「地下室への入口ですか……。興味深い話ですね」

光牙の目が好奇に輝いた。

「その離れには、幼い頃から近付くのを父親に厳しく禁じられていたらしく、ただ一度幼い頃に離れに入った時、床に四角い地下への入口のような扉を見付けたそうです。その時は厳重に鍵が掛けられていて中を見る事は出来なかったのですが、それを父親に見付かり酷く怒られたそうです。それ以来離れに入った事は無く、この話を聞くまでその扉の事は忘れていた様です」

「それは確かに臭いますね。で、今後はどうするつもりですか？」

「阿倍満男は、どうもギャンブルに嵌まって多額の借金があるらしく、しかも行きつけのスナックのホステスにかなり貢いでいます。その為かなり金には不自由しており、報酬を支払う事を条件にその離れの地下室を探るよう指示してあります」

「流石に手際が良いですね。しかし我々の事は当然秘密にしてあるのでしょうね」

光牙が念を押す様に尋ねた。

「はい。奴には光牙様の事は勿論、『帝都グループ』の名前も出しておりません。私の事は、知り合いの編集者に頼まれて、由緒ある家の古文書や家系図を調べているフリーのジャーナリストと言う事

にしてあります」

「それを信じているのですか？　愚かな男ですねぇ」

「はい、それだけ金に困っていると言う事でしょう。ククク……」

藤巻は、阿倍と言う男の顔を思い出し、蔑む様に笑った。

「では、その阿倍と言う男から連絡があればすぐにでも報告して下さい。もしも覚書が本当に在ると言うのであれば、一度会ってみるのも良いでしょう」

「分かりました」

藤巻はゆっくりと頷いた。

「覚書ですか…。もしそれが本当なら、天叢雲剣を手に入れるのも時間の問題と言う事ですね。愉しみな事です……」

光牙は、遠くを見る様に目を細め、独り言の様に呟いた。

その目には、妖しい光が漂っていた。

第十章1：高野山

第十章
『高野山』
1

李・佐々木・慈海の三人と、もう一人の老僧を加えた四人は、大広間で向かい合い座っていた。

何十畳もある広い大広間だが、隅々まできちんと掃除が行き届いている様だ。

大広間の襖には、狩野法眼元信が描いたとされる、松と群鶴の襖絵が描かれている。

更に大広間の正面奥には、お大師様……つまり空海を奉った本尊が安置され、その両側には歴代天皇御尊儀の位牌や歴代座主の位牌が奉られていた。

ここは、高野山真言宗の総本山とも言うべき、金剛峯寺の寺内にある大広間だ。

金剛峯寺の主殿は東西に約六十メートル・南北に約七十メートルもある建物で、更に別殿・新別殿と分かれており、別殿では観光客に湯茶などを出している。

その他にも書院・新書院・経蔵・鐘楼・真然堂・護摩堂・阿字観道場・茶室等の建物を備え、境内の坪数は合わせて四万八千二百九五坪と広大な敷地を有していた。

元来金剛峯寺は、空海が『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』というお経より名付けたとされ、高野山全体を指す名称であった。

その後豊臣秀吉が紀州攻めをした際に、秀吉と直談判し仲介する事で御山を守った武士出身の僧・木食上人応其が建てた興山寺と、のちに応其に帰依するようになった秀吉が、亡き母の菩提を弔う為に建てた青巌寺を、明治の時代に入ってから合併・改号した物が金剛峯寺なのある。

青巌寺とは、文禄四年（一五九五年）に豊臣秀次が自害した場所としても有名で、現在でも山本探斉が描いたとされる襖絵の『柳鷺図』が描かれた柳の間は、『秀次自刃の間』とも呼ばれている。

その後、再三の火災により建物が焼失し、現在の本殿は文久沙汰年（一八六三年）に再建された物だ。

明治に入り、青巌寺を金剛峯寺と改めてからは新しく総宰庁なる物が置かれ、執政、副執政、参政、顧問、監司といった五役を設け、興山寺との合併後は、隣接していた興山寺を庁舎として使用している。

その高野山真言宗の総本山たる金剛峯寺の大広間に、李達四人は集っていた。

李達は、東京を昼前に出たのだが、高野山に到着した頃には既に夜となっていた。

辺りは暗く、大粒の雨が滝の様に降っている。

李を車に乗せて同行して来た獣吾は、金剛峯寺の前までは一緒に

来たのだが、高野山のあらゆる場所に張り巡らされた強力な結界により中へ入る事が出来ず、結局この金剛峯寺の前に設けられた駐車場に独り残ったのである。

獣人である獣吾は、その内に抱えた魔の因子に因り結界の中に入ると頭痛や目眩、それに吐き気や運動障害などの症状が出てしまうのだ。

だが獣人であるからこそその程度の症状で済むのであって、ヴァンパイアであれば全く立ち入る事が敵わぬ程の強力な結界が現在張られているのだ。

ヴァンパイアも獣人も、共に魔の因子を内包した化生には違いないのだが、ヴァンパイアは獣人よりも更に魔族に近い為、その内包した魔の因子も強く、高野山の法力僧が幾重にも張った結界に過敏な反応をしてしまうのである。

恐らくこれ程の結界であれば、『貴族』ならば死なないまでも結界の中では満足に動く事が出来ず、更に『屍鬼』ともなれば、結界の内側に入っただけで、ただの屍に戻ってしまうに違いない程の強力な物であった。

だいたい最初から、聖なる領域や僧侶なる者が嫌いだった獣吾は、車が二台必要だと言う理由で成り行き上同行したが、忌ま忌ましい結界のお陰で中まで入らずに済んだ事を内心ラッキーとさえ思っていた。

この様な緒事情により、現在この大広間の中には、李達四人しか居ないのである。

「遠路遥々ようお越しくだされた……」

まず慈海が李達に頭を下げた。

慈海は、昼間と同じ紫の僧衣に七条袈裟を着用している。

今はさすがに結跏趺坐では無く、普通に正座をしていた。

「なんのなんの、話はこの佐々木君から聞いておったのじゃが、色々と野暮用があって来るのが遅くなってしもうた。儂の方こそ申し訳けないと思うておるよ」

李はにこやかな笑顔で言った。

他の三人が正座しているのに対し、李一人だけが胡座を掻いて座っている。

だがそれが、何とも李らしかった。

「座主様、お久しぶりです。本日は急に参上した上、しかもこの様な夜分に本当に申し訳ありません。ですが、座主様がお元気そうで何よりです」

李の隣に座っていた佐々木が、目の前の老僧に挨拶をした。

「いえいえ、ご無礼していたのはこちらの方です。それより佐々木殿もお変わりなく安堵しました。時に久保殿はお元気ですか?」

座主と呼ばれた老僧が、如何にも好々爺と言った柔和な表情で佐々木に言った。

座主とは、この金剛峯寺の管長であり、ひいては高野山真言宗の、いや全国の真言宗の頂点に立つ人物なのだ。

紫の法衣の上に、緋色の平袈裟に『桐』と『三つ巴』の紋を遇った七条袈裟を纏い、首から胸元を覆う様に白く大きな帽子を巻いている。

慈海と同じく綺麗に剃髪しており、年齢は慈海よりも上の筈なのだが、痩せていない分顔全体の皺が少なく、慈海よりも若干若く見える。

白い眉の下には、目尻が優しげに下がった一重瞼の細い目に柔和な色を讃え、大きめの鼻が特徴的な顔立ちと言えた。

温厚な人柄である事が一目で分かる人相だ。

李や慈海が如何に好々爺然としているとは言え、この座主と比べれば、常に闘いに身を置いて来た者だけが持つ厳しさが、その顔付きや表情に表れていた。

「久保も元気にしております。先日阿闍梨様がお帰りになられた後、座主様にもお会いしたいと申しておりました」

佐々木も、その武骨な顔に笑みを讃え答えた。

「そうですか、思えば最後に久保殿とお会いしたのは、私が管長職に就任した時以来ですから、もう二年もお会いしていない事になるのですね……。久保殿に私もお会いしたがっていたとそうお伝え下さい」

「はい。必ずお伝えします」

佐々木が頭を下げた。

「座主殿、儂も二年振りなのじゃがな！」

李が悪態を付いた。

最も口調とは違い目が笑っている。

「これ、この罰当たりな爺めが！　座主様に向かって何たる言いようだ！」

李の前に座している慈海が、それこそ李を咎める様に言った。

自分の宗派の最高位に向かってタメ口を聞いたばかりか、咎める様な言い方をしたのだ。

怒って当然であった。

だが咎めている筈の、慈海の目の奥が笑っている。

「これこれ慈海、老師にその様な事を咎めても無駄な事は、貴方が一番分かっているでしょう。それにもう堅苦しいのは止めにしましょう」

座主は、笑みを堪えながら穏やかな口調で言った。

「まあそう言う事じゃよ、この生臭さ坊主が！」

今度は李が、慈海に向かって悪態を付いた。

「何だとう！　生臭さと言うたか、この老いぼれが！」

慈海が負けずに言い返す。

「何じゃとう！　儂の方が若いわい！」

「何だ、この助平爺！」

「何じゃ！」

「やるか！」

二人は子供の様に互いを罵り合った。

それを見て佐々木は、また始まったかと大きく溜め息をついた。

座主も二人を止めるでも無く、愉しそうに笑っている。

「さあ老師も阿闍梨様も、子供の様な喧嘩はお止め下さい。座主様の前ですぞ」

まるで子供の様に言い合う二人を、見るに見兼ねて佐々木が止めに入った。

「フン！」

「ヘン！」

李と慈海が、互いにそっぽを向いて鼻を鳴らす。

佐々木と座主は、互いに顔を合わせて苦笑した。

「ところで佐々木殿、元々お呼び立てしたのは私共の方ですが、それにしても本日の急なお越しは、如何なされたのですか？」

座主が佐々木に尋ねた。

「それは先日阿闍梨様がお話になられた件ともう一つ、火急にご相談しておかねばならない事態が発生しましたので、失礼とは思いましたが急ぎ参った次第です」

佐々木が答える。

「そうでしたか……。いえ私共もお話せねばならぬ事があり、明日にでもご連絡を差し上げた上で、今一度慈海に東京まで出向いて貰おうかと考えていた所だったのです」

座主は、先程までの柔和な表情から少し固い表情に変わっていた。

「そうですか。それでそのお話とは、いったいどの様な事なのでしょうか？」

佐々木が尋ねた。

「では私共の方からお話しましょう……。何からお話すれば良いのか迷いますが、実はこの御山のとある場所に、この国の行方を左右する大切な物が、密かに奉られているのです……」

座主が静かに語り出した。

だが話の触りを聞いただけで、李と佐々木の背中が“びくん”と跳ねた。

互いに顔を見合わせている。

「如何なされた?」

意味あり気な表情で顔を見合わせる二人に対し、不信な表情の慈海が尋ねた。

「座主殿、その物とはもしや、真の三種の神器の内の天叢雲剣か八咫鏡のどちらかではありませぬか?」

問われた李が、慌てて聞き返した。

「何?」

「何と!」

今度は座主と慈海が、驚きのあまりに声を揃えて叫んだ。

「お、お、お主ら……、お主らが何故そのような事をし、知っておるのだ……?」

あまりの驚きに慈海が声を詰まらせた。

「やはり……」

李が低く漏らす。

「老師……」

佐々木が李の表情を伺った。

「どう言う事なのですか？　今の話は、我が宗派の中でも秘中の秘とされ続け、管長職を賜った者だけに伝えられる最高機密に属する事ですぞ！　私も二年前管長に就任した時に、前任の座主様から内々に賜った話なのです。現在この事を知っているのは、私の他には限られた者だけの筈……。しかもその事を告げたのは、この慈海を除いてまだ昨日の事なのです。それをいったい何処で……」

座主は、困惑し眉を細めた。

好々爺然とした温和な顔が、今は険しくなっている。

慈海も李の話を訝しみ、険しい表情で李と佐々木の顔を交互に見遣っていた。

「いや何……、この御山に張り巡らされた結界が、以前来た時と比べあまりに強力な物であったのでな、着いた時から何かあるとは思うておったのじゃ」

そう言って李は、辺りに首を廻らせた。

「さすがは老師……。ですが、それではお答えになっておりません……」

座主が更に問うた。

「いやまだ続きがあるわい。実はここへはもう一人同行者がおったのじゃが、この強力な結界の為に中へ入る事が出来ず、今も金剛峯寺の前の駐車場に車を止めその中で待っておるのよ」

李の話に、座主と慈海の表情が更に険しくなった。

「我らが張った結界に入って来れぬとは、その者は、ま、まさか吸血鬼か！」

慈海は、思わず腰を浮かせて怒鳴った。

「まあ待て、全く坊主の癖に短気な奴じゃのう。吸血鬼では無いが、まあ似たような物じゃ」

「吸血鬼では無い？」

「そうよ、人狼よ……」

李は“ぞろり”と言って退けた。

「そ…そんな……」

「そのような馬鹿な事が……」

座主と慈海は、驚きに短く呻いた。

「じゃが本当の事じゃ。しかもそ奴は“守部”の一族の生き残りで、名は“当麻獣吾”と言う……」

「と、当麻だと！……」

「な、何と……」

慈海は、そう一言漏らし絶句した。

座主もあまりの驚きに声を失っている。

「じゃが驚くのはまだ早い。絶滅した獣人族は、古しえより真の三種の神器の内のひとつである、本物の八尺瓊勾玉を護っておった一族で、十八年前に獣人族が絶滅した際に、その八尺瓊勾玉が吸血鬼共の手に渡り、今でも奴らの下にあるらしいのじゃ……」

“！”

“！”

今度こそ座主達は、一言も声を発する事も出来ず石の様に固まった。

李の話した内容が、座主や慈海の想像を遥かに越えたものだったからである。

しばらく沈黙が続いた後、何かを考え込む様に顔を伏せていた座主が、ゆっくりと面を上げた。

「事態は私共が考えているより、遥かに悪い方向へ進んでいるみたいですね……」

「悪い方とは……？」

それまで黙っていた佐々木が尋ねた。

「ではお話し致しましょう。ですがまずはその前に、老師や佐々木殿がご存知の事をお話し頂けませんか？」

座主が言った。

佐々木と李は、顔を見合わせて頷くと、これまでの事を話し出した。

時折強く吹く風が不気味な咆哮を上げ、外の雨はどんどん激しさをましていく。

文字通りの嵐であった。

2

2

李は、恭也の事を伏せたまま、それ以外の事はほぼ事実通りに語った。

全てを知る佐々木が聞いても、恭也の事以外は事実と比べ殆ど遜色が無い。

佐々木も、恭也の事を隠す李の心情を慮ってか、敢えて口を挟まなかった。

李は、そんな佐々木の気遣いを心から感謝した。

「そうでしたか……。そのような事があったのですか……。では現在、八尺瓊勾玉は吸血鬼の下にあると言われるのですね……」

そう言って座主は、苦い表情を作った。

慈海も、険しい表情で眉間に深い皺を寄せている。

「慈海……、貴方はどう思いますか？」

座主は慈海に声を掛けた。

「これが真であれば由々しき事態ですぞ。ならば我らも、更なる手段を急がねばなりますまい」

慈海が険しい表情のまま答えた。

「座主様、今我らが知り得ている情報は、先程老師が述べられた通りです。次は座主様の方から、真の三種の神器に付いてお話しを伺いたいのですが……」

佐々木が座主に言った。

「そうですね……。今老師から伺ったお話しからも幾つか分かった事もありますので、その事も含め我が宗派に伝わる全てをお話し致しましょう」

座主がそろりと語り出した。

李も佐々木も、黙したまま座主の言葉に耳を傾けた。

「ご推察の通り、我が高野山には、代々真の三種の神器の一つである八咫鏡が、ある場所に秘蔵されております……」

そう言って座主は二人を見遣った。

李と佐々木は、ほぼ同時に頷いた。

「我が真言宗の開祖であられる御大師様は、時の朝廷の命により、真の三種の神器の一つである真の八咫鏡をお預かりする事となりました。ですが、我が宗派の言い伝えにおいても、何故三種の神器の形代が幾つも作られ、宮中に奉られている物だけでなく、本物とされている伊勢神宮や熱田神宮に奉納されている物までが、形代であるのかを記す書物や言い伝えは残っておりません……。ただ……、真の三種の神器が持つ恐るべき神力が何であるのかは、代々伝えられて来たのです……」

「恐るべき神力……」

佐々木が呻く様に言った。

そんな佐々木をチラっと見ると、座主はそのまま話を続けた。

「真の三種の神器には、この世のあらゆる因果を操る力があるのです……」

「何と、因果とな！」

思わず李が身を乗り出し大声を上げた。

そして目の前の慈海に視線を向ける。

慈海は、黙ったまま頷いた。

「真の三種の神器はこの世の因果…、つまり原因と結果に強い影響を及ぼします。そして三つの神器が揃った時、この世のあらゆる因果を、そして偶然さえも思うがままに操る事が出来るようになるのです……」

「そ、そんな馬鹿な……、そんな馬鹿な事が出来る筈が無い。しかも因果だけでは無く偶然までをも操るなど……。それではまるで、真の三種の神器を揃えた者は神となってしまうではないか！」

李は、座主の言う事を素直に受け入れる事が出来ず、抗う様に大声を上げた。

「その通りです。真の三種の神器を全て手に入れた者は、まさしく神と成れるのです」

座主はきっぱりと言い切った。

「しかしその様な力が真の三種の神器にあるとは、さすがに信じ難い話じゃ……。ならば例え一つの神器であっても、少なからず因果に影響を及ぼしておるのではないのか？」

「いえ、確証はありませんがそれは無いと思います……。しかし実際は、所有・保管している誰かの意思や意図が直接働いていないだけで、実際には遥か昔よりずっと、それぞれの神器はこの世のあらゆる因果に何らかの影響を及ぼしているのかも知れません。ただそれを、誰も気付く事も証明する事も出来ないだけで……」

座主は真剣な表情で、深い溜息と共に吐き出した。

「確かに神ならぬ身では、例え何人であろうとも、この世の因果の法則の全てを計り知る事は出来ませんからなあ……」

佐々木が呟いた。

「そうじゃのう……。確かにこの世には、ただの偶然や運命などと言う括りでは片付かぬ程に事象の偏りがあり、それは最早何か人知を超えた力が意図的に作用しておるとしか思えぬ程じゃからのう……」

李は、東京に残して来た恭也や駐車場で待つ獣吾、そして今は亡き恭也の父親にして親友だった恭介の顔を、順に回顧しながら感慨深げに言った。

佐々木は、李の表情からその心中を察した。

李や御子神恭也達にとって、この数日間に起こった出来事を考えれば、最早偶然や運命等と言った言葉では説明仕切れぬ程の出来事が一度に襲い掛かったのだ。

佐々木は、苦い表情で目を閉じている李の横顔を、気遣う様にじっと見詰めた。

「確かにこのインチキ仙道士の言う通りかもしれませぬな……」

慈海の付いた悪態に、李がチラリと睨んだ。

そんな李の視線を、慈海は惚けた表情で軽く受け流し、更に言葉を続けた。

「ですが八尺瓊勾玉が吸血鬼共の手中に在ると分かった今、残った真の三種の神器が奴らの手に渡る事だけは、断じて防がねばなりますせぬぞ！」

慈海は、厳しい表情で座主に向かって言った。

座主も厳しい視線を慈海に送ると、鉄の表情で頷く。

「その通りです。そして更に、全ての真の三種の神器を吸血鬼共が手に入れた場合、この国が……いえ、世界中の人間が奴らの餌として、ただの家畜や奴隷と化してしまうやも知れません」

「そうなれば人間は終わりぞ……」

李は、厳しい表情の中に苦汁の色を滲ませながら呻いた。

顔の皺が、より深くなった様に見える。

「では座主殿、ここに八咫鏡が保管されておるのは分かった。ならば残る天叢雲剣は、今何処に保管されておるのじゃ？」

李が尋ねた。

「分かりません……」

座主は、表情を曇らせながらもきっぱりと言った。

「何じゃとう！」

李は、予想外の答えに驚き、佐々木と顔を見合わせた。

佐々木も、戸惑いの色を浮かべている。

二人は、当麻以蔵の手紙の内容から、座主か慈海に聞けば、残る二つの保管場所が自ずと分かると安易に考えていたのだ。

「し、しかし……、以蔵の手紙には、残る二つの神器の事は座主殿か慈海に聞けと書いてあったのじゃぞ！」

李は、戸惑いを隠せぬまま咎める様に言った。

「ですが本当に知らないのです……」

座主は、申し訳なさそうに低く言った。

「以蔵が、何故儂らに聞けと手紙に書いたのか分からぬが、本当に知らぬのだ。実際、三儀天の円角に、残る二つの神器を探すよう、今日の昼に命じた程だ」

慈海は、座主の補足をした。

「実際に私達は、今の老師の話で八尺瓊勾玉が滅亡した獣人族の村に在った事も、それが吸血鬼の手に渡った事も初めて知ったくらいなのです」

「……」

「……」

李と佐々木は黙り込んだ。

落胆の色を隠せぬ二人を敢えて無視するかの様に、座主は先を続けた。

「先程も申しました通り、この真の三種の神器を手に入れた者は神にも等しい力を得る事が出来ます。したがって神器を保管する者の中に、いつの時代にか、もしも自らの欲に囚われ、残る二つの神器を手に入れようとする者が現れるやも知れません。その時、その者が他の神器の保管場所を知っていたら大変な事になります。その為に当時の朝廷は、保管を命じた者に敢えて他の神器の保管場所を教えなかったのでしょう……」

「ふうむ……」

佐々木は、目を閉じて深く息を吐き出した。

「先程座主殿は、儂らの話で初めて八尺瓊勾玉が獣人族の村に保管されていた事や、それが十八年前吸血鬼共の手に渡った事を知ったと言うておられたな。じゃが吸血鬼共の狙いが、真の三種の神器である事は既に知っておられた様じゃ。それはいったいどう言う事じゃな？」

ふと李が尋ねた。

「……近年、全国の主だった寺院や神社において、何件もの泥棒騒ぎが起きました。最初は金品や仏像等を狙った犯行かと思われていたのですが、警察が調べたところ、確かに不審者の侵入した形跡は見付かったものの特に盗まれた物も無く、警察も事件性が無いと判断してそれ以上捜査をしなかった為、新聞やマスコミも事件として取り上げませんでした。ですがひと月程前、以前からこの慈海が親しくしている者がその被害に遭い、事が事だけに、この慈海に相談して来たのです……」

「……」

「……」

李と佐々木は、黙って座主の話を聞いている。

「それで儂が、東京までそ奴の話を聞く為に出向いたのよ」

李達と同様に、黙って話を聞いていた慈海が座主の話を引き継いだ。

「では先日阿闍梨様が円角殿と本部にお見えになったのは、その件で東京に来られたからなのですね！」

佐々木が声を上げた。

「左様」

慈海が頷く。

「それでどうだったのじゃ？」

李が先を急かす様に言った。

「そ奴の話では、寺に不審者が忍び込み、それに気付き見に行ったところ急に意識が遠くなり、気付いたら寺の境内で意識を失っていたらしい。後で調べたら、寺に保管されている古文書や巻物の類いを物色した形跡があったのだが、金品等盗まれた物は無かったそうだ。しかしそ奴は、偶然にも気を失う直前の記憶が残っており、侵入した者の事をしっかり覚えておった。だから警察には届けず、儂に連絡をして来たのだ……。そしてその侵入者は、赤く光る目を持ち、口には二本の犬歯が長く伸びておったそうだ……」

「むう……」

「何と……」

李と佐々木は、殆ど同時に嘆息を漏らした。

「それを座主様に報告したところ、他にも同様の事件が無いか調べ

る様仰せになり、円角と共に全国の寺院や神社を調べたのだ」

「そうしたら同様の事件が幾つも見付かった……と言う訳ですね」

佐々木が険しい表情で言った。

「うむ。しかもその後良く調べてみたら、どうやらこの御山でも倉や書庫に収められている古文書や巻物の類いが、何者かに依って読まれた形跡が見付かったのだ」

「では、やはりそれもヴァンパイアの仕業だったのですか？」

佐々木が身を乗り出して尋ねた。

「それは分からぬ……。ただ一連の事件から考えても、吸血鬼共の仕業と考えるのが自然であろう。また、この御山におる者の仕業である可能性も否定出来ぬが、我が宗派の門徒や学生、更には町の者や観光客に至るまで調べるのは実際不可能だ。それに、儂の知り合いはたまたま吸血鬼が犯人である事を覚えておったが、それまで起こった事件では、殆どの者が記憶を消されており、それすら自覚しておらぬ者ばかりだった。しかも奴らの『誘眼』は、術に掛けた者を意のままに操る事が出来る。となれば、奴らに操られたとしても、その者自身に記憶が無ければ犯人が誰かを特定するのは不可能だ……」

慈海は無念そうに語った。

座主も表情を強張らせている。

「それで奴らの狙いが真の三種の神器ではないかと思うたのじゃな

？」

李は念を押す様に言った。

「その通りです。最も今でも確証がある訳ではありません。ですが、真の三種の神器の能力を考えれば、その可能性は十分に考えられます」

「その為の結界か……」

李はそう呟くと、辺りを見回す様に首を廻らせた。

「しかし我が宗派においても秘中の秘とされ、他の者では知りようも無い真の三種の神器の事を、吸血鬼はいったいどの様にして知る事が出来たのでしょうか。私はそれが不思議でなりません…」

座主は、そう言って顔を伏せ腕を組んだ。

「ふうむ……」

「……」

「……」

李や佐々木、そして慈海も、腕を組み考えを廻らせている。

「で、謎は謎として、今後はどうするつもりなのじゃ？」

李が、思い立った様に顔を上げ座主に尋ねた。

「はい……。当初は、老師に真の三種の神器と今起きている事の現状をお話し、吸血鬼にお詳しい老師のお考えを伺った上で、出来る事ならご助力を願おうと考えていたのですが、既にその様な事態になっているのであれば、早急に次の手段を講じねばなりません……」

「で、儂にどうしろと……？」

「先程も申しました通り、今円角に残りの神器の保管場所を探し出す様命じてあります。ですが我々は、この御山に保管されている八咫鏡を奴らから死守せねばなりません。ですから老師には、円角と共に残る真の天叢雲剣を探し出して頂きたいのです……」

「うむ。こうなった以上、残る天叢雲剣が何処で、誰の手によって護られているのかは分からぬが、奴らが見付け出す前に急ぎ保全する事が急務じゃろう。円角殿に強力しよう」

「ありがとうございます」

座主は頭を下げた。

「頼んだぞ……」

そう言って慈海は、李の瞳を真っ直ぐ見詰めた。

「うむ……」

それを見た李が頷く。

「では、私は急ぎ東京に戻り、この事を上司に伝え今後の対策を協議します。尽きましては、阿闍梨様にも協議にご参加頂きたいので

すが……」

そう言って佐々木は、座主と慈海の顔を交互に伺った。

「それが良いでしょう。慈海、頼みましたよ」

座主が言った。

「しかし座主様、円角も不在の今、私まで御山から離れる訳には参りません。この様な老いぼれでも座主様の盾ぐらいにはなれますぞ！」

慈海は、座主の身を案じて食い下がった。

「慈海、貴方の気持ちは嬉しいですが、私は座主です。この御山の為に死ぬ覚悟は出来ています。それに今は、この国を吸血鬼共の魔手から護る事こそ大事なのです」

座主は、きっぱりと言い放った。

「座主様……」

慈海は表情を曇らせ、漏らす様に言った。

「それでは『C・V・U』の実働部隊を御山に派遣し、警護に当たらせたら如何でしょうか？」

二人の会話を聞いていた佐々木が、即座に提案した。

だが座主は、首を縦に振らなかった。

「ありがとうございます。ですが我々にも吸血鬼や魔物を滅する為に幾多の厳しい修行を積んだ“退魔僧”と呼ばれる僧兵や、今もこの強力な結界を張っている法力僧達がおります。それに円角は不在ですが、まだ大角・小角と言う人並み外れた法力と体術を会得した高野三儀天の内の二人もおりますれば、御山の護りは十分です。それよりも『内調』や『C・V・U』のお力でどうか吸血鬼共の企てを阻んで下さい。我々も全力で協力させて頂きます」

座主の目に覚悟の色が浮かんでいた。

「分かりました。八咫鏡の事、どうか宜しくお願い致します」

佐々木は、座主の目を正面から見据え、その覚悟を受け止め重々しく頭を下げた。

広間にしばし沈黙が流れた。

「もう遅くなってしまいましたね……。今宵は宿坊を用意してありますので、お二人共ゆっくりとお休み下さい」

四人の沈黙を破る様に、座主は柔和な表情を取り戻し二人に言った。

「おおそれは申し訳な……」

そう言い掛けて、李はすっかり忘れていた事を思い出し“ハッ”とした。

「いやいやお心遣いは嬉しいが、大事な事をすっかり忘れておった

わい。儂は連れを車で待たせたままじゃし、奴は結界の内側には入れぬ身……。ならば儂らは、町で民宿でも探す事にしますわい」

李は、話に夢中ですっかり獣吾の事を忘れていた事に気が付き、気まずそうに頭を掻きながら座主の心遣いを断った。

「申し訳ありません。私も、明日の朝一番で上司にこの事を報告しますので、このまま東京へ引き上げます」

佐々木も、座主の申し出を辞退した。

「そうですか。では道中くれぐれお気をつけ下さい。老師も、その獣人の方に宜しくお伝え下さい」

柔和な笑顔のままそう言うと、座主は李達に深々と頭を下げた。

それに合わせ慈海や李、佐々木の三人も頭を下げる。

「では……」

そう言って李は立ち上がった。

残る三人もほぼ同時に立ち上がる。

「では座主様、これから私も佐々木殿と共に東京へ参ります」

立ち上がり様、慈海が座主に言った。

「宜しく頼みましたよ慈海……。では老師、佐々木殿、宜しくお願い致します」

座主は、今一度李達に深々と頭を下げると、李や慈海に気を遣い、わざと一足先に広間を後にした。

「慈海よ、お主に少し話があるのじゃが……」

李は、真剣な眼差しで言った。

外では、未だ嵐の様な風雨が荒れ狂っていた。

3

3

獣吾は眠っていた。

車のシートを深く倒し、往復鼾を掻いている。

高野山に張り巡らされた強力な結界により、金剛峯寺の中へ入る事が出来ない獣吾は、今車を停めている駐車場で独り李達が戻るのを待っているのだ。

ここに車を停めてから既に四時間を過ぎている。

始めの内はＣＤを聴いたり、ナビでＤＶＤを観たりして時間を潰していたのだが、さすがにそれらにも飽きてしまい、つい一時間程前から眠ってしまったのだ。

車の外は、大粒の雨が車のボンネットや屋根を叩き、まるでドラムを打ち鳴らしているかの様な騒々しさである。

そんな騒音の中にあっても、獣吾は平気で爆睡していた。

聴覚に優れている獣人とはとても思えぬ神経の太さだ。

薄手の白いＴシャツと、色褪せたブルージーンズと言った軽装ではあるが、些かも肌寒さを感じていないらしい。

標高九百メートルの高地で、しかもこの大雨である。

更に時刻も深夜ともなれば、常人ならば肌寒さを感じて当然の筈が、獣吾は一向に寒さを感じる様子も無く高鼾を掻いていた。

雨は更に激しさを増し、風も強くなって来ている。

最も高鼾を掻いている獣吾にとっては、それらの騒音も子守唄程度なのかも知れなかった。

そんな嵐の中、一台の車がそろりと駐車場に入って来た。

まるで車内を確認するかの様な慎重な速度で停めてある獣吾の車を側を通り過ぎると、かなり離れた場所で車が止まった。

エンジンはそのままで、ヘッドライトだけが消された。

車の年式までは不明だが、黒のフォード・エクスプローラー・エディバウアーの様だ。

すると、車から四人の人影が降りて来た。

全員、黒いコートの様な物を羽織っている。

恐らくはレインコートであろう。

コートの裾が、強風に煽られバタバタとはためいている。

どうやら獣吾の車を見て、何やら相談をしている様だ。

するとその内の二人が、ゆっくりと獣吾の車へと近付いて来た。

どうやらこんな時間に、しかもこの様な場所でエンジンを掛けた

まま停車している車を不審に思い、二人で様子を見に来たらしい。

二人は、足音を忍ばせる様に、ゆっくりと車に近付いて来た。

獣吾は不穏な気配に目を覚ました。

どうやら臭いは人間の物のようだ。

足音は二つ……。

ーフン、何処の誰だか知らねえが、バレバレなんだよ。

獣吾は、心の奥でほくそ笑みながら、わざと鼾を掻いて寝たふりを続けた。

二人は車の側まで辿り着くと、少し離れた位置から車内の様子を伺った。

すると、運転席で大口を開け寝たふりを続ける獣吾の姿が見える。

無論二人は獣吾の事を知らない。

しかも暗い車内は、窓を叩く激しい雨と滝の様に流れる雨水の為にそれ以上様子を探る事が出来なかった。

二人は更に近付き、こっそりと窓から車内を覗き込んだ。

その瞬間、二人に動揺が走った。

眠っていると思っていた男が、身体をシートに倒したまましっか

りと両目を開き、下から不敵な笑みを浮かべ窓の外の二人を逆に見上げているのだ。

獣吾は“ニィ”と唇の端を吊り上げた。

驚いた二人は、咄嗟に後ろへ跳び退いた。

体格から見て、二人共男のようだ。

男達は、フード付きの黒いレインコートを頭からすっぽりと被っていた。

二人共フードを目深に被っている為に、人相までは定かでない。

獣吾は、ゆっくりと身体を起こし窓を開けた。

雨が車内に降り込んで来る。

獣吾は、不敵な笑みを浮かべたまま二人を交互に見遣った。

「誰だ?」

一人の男が、顔を顰めたまま低く叫んだ。

かなり警戒をしている様だが、決して脅えた様子では無い。

もう一人の男も、懐にそっと手を忍ばせ、隙の無く獣吾の出方を伺っていた。

「何者だ?……」

男が油断無く尋ねる。

「いきなり誰だって聞かれてもなぁ…。そう言うオメエらこそ、こんな大雨の中で何やってんだ？」

獣吾は車に乗ったまま答えた。

「……」

「……」

二人共返事が無い。

ただ黙って獣吾を睨め付けていた。

返事が無いと悟った獣吾は、更に続けた。

「俺は怪しいモンじゃねえぜ。今ここの偉いさんに会いに来てる爺さんを待ってるんだ。だから放っといてくれるか？」

獣吾は、素っ気無く言った。

「何？」

先程の男が漏らした。

二人は互いに顔を見合わせている。

「貴様、ここの坊主の知り合いか！」

男が叫んだ。

その時、獣吾は違和感を感じた。

「馬鹿！」

それまで黙っていたもう一人の男が、咎める様に叫んだ。

その瞬間、先程の男の顔に、自らの失言に対する後悔の色が浮かんだ。

獣吾が唇の端を吊り上げ、獰猛な笑みを浮かべている。

「オイ、今“坊主”って言ったよなあ……」

そう言うと獣吾は、静かにドアを開けた。

のっそりと車からその巨体を現す。

二人は、車から降り立った獣吾の巨体に驚き僅かに後ろへと下がった。

獣吾の身体を激しい雨が叩く。

二人は、咄嗟に身構えた。

「オイ、オイ、いったい何だってんだ？　まさか俺と闘ろうってぇのか？」

獣吾は、ニヤニヤしながら二人を交互に見遣ると嬉々として言った。

毛程の緊張も見られない。

「止めるなら今の内だぜ」

獣吾は、のうのうと言った。

「……」

「……」

だが二人は答えない。

残りの仲間達もこちらの様子がおかしいと思ったのか、残った二人も小走りで駆け寄って来た。

これでは一対四だ。

だがこの状況でも獣吾は余裕だった。

両腕を横にだらりと垂らしたまま、自然体を保っている。

「どうやら本気で闘るつもりらしいな……。だがこんな所で喧嘩しちゃ、ちいとマズいんじゃねえのかい？」

「貴様は俺達を見た。だから死んで貰う……」

男が、鋭い眼差しで睨み付けながら言った。

しかもその手にはナイフを握っている。
大振りの、軍事用に作られたアーミーナイフだ。

もう一人の男は、懐に隠した鞘から長い刀の様な刃物を取り出した。

マチェットである。

マチェットは、ジャングルのサバイバルで枝を掃う時などに使用する刃物だ。

無論武器と言う側面も有している。

片刃で長く真っ直ぐな刀身は、ナイフと言うより大振りの鉈だ。

「へっ、オメエ等が誰だか知らねえが、そんな物騒なモン出して、逆にぶっ殺されても俺を恨むんじゃねえぜ！」

獣吾がふてぶてしく言い退けた瞬間、アーミーナイフを持った男が、獣吾の顔を目掛けてナイフを振るった。

凄まじいスピードだ。

しかも的確で、動きにも無駄が無い。

かなり訓練された者の動きだ。

だが獣の反射神経とスピードを持つ獣吾に取って、そんな事は問題にもならなかった。

凄まじい反射神経でナイフを紙一重でかわすと、上段へ右回し蹴りを放った。

男の顳で何かが爆発した様であった。

男は、凄まじい勢いで真横に吹っ飛んだ。

三メートル程吹っ飛ぶと、頭から地面に激突しそのまま動かなくなった。

生きているかどうか定かでは無い。

あまりの獣吾のパワーとスピードに驚いたのか、マチェットを握っていた男は攻撃のタイミングを逸していた。

だがその間にも、駆け付けた二人が獣吾を左右に挟み、マチェットを持った男と連携して三角形に取り囲んだ。

駆け付けた二人も、頭からフードを目深に被っている。

二人共、身長や体格から見て男の様だ。

「貴様、何者だ……？」

三人の内のリーダー格の男が、獣吾を睨め付けながら言った。

凄まじい殺気である。

しかも殺気と言うよりも妖気に近い。

その時、獣吾は異臭を感じた。

「オメエ、ヴァンパイアか？」

獣吾が“ぞろり”と言った。

「何だと！」

リーダー格の男に、明らかな動揺の色が浮かんだ。

「この雨や風で臭いを感じ難くなっちゃいるが、こんだけ近けりゃさすがに分かるぜ。その臭ぇ臭い、オメエ、ヴァンパイアだろ？」

再び獣吾が聞いた。

「臭いだと！　貴様、本当に何者だ？」

その男が叫んだ。

「そいつは、ここの坊主に会いに来ている奴の連れらしい」

獣吾の代わりに、マチェットを持った男が答えた。

「何！」

男が怪訝な表情を見せる。

「なるほど……。ならば我々を見た以上、死んで貰うしか無いようだな」

男が言った。

先程よりも妖気が膨れ上がっている。

ーーヴァンパイアはこの男一人。

ー後は人間だな。

獣吾は嗅覚に集中して、周りを囲む男達の臭いを嗅いだ。

「ケッ、こんな場所にヴァンパイアが何の用だ？　改心して頭でも丸めに来たか？」

獣吾は、小馬鹿にした態度で余裕の笑みを見せた。

口許から白く逞しい歯が零れた。

三人の男達は、凄まじい殺気を放ちながら、徐々に獣吾との間合いを狭めて来る。

「へっ、オメエらがヴァンパイアとその仲間だと分かった限りは、もう遠慮はしねえぜ」

獣吾も少し腰を落とした。

“じわり”と気の内圧を高める。

男達が間合いに入った瞬間、獣吾はいきなり目の前のマチェットを持った男へ襲い掛かった。

弾かれた様に、男がマチェットを袈裟斬りに振り下ろす。

この男も動きに無駄が無い。

しかも、人を斬る事への恐怖や戸惑いが微塵も感じられない。

腰の入った凄まじい斬撃だ。

だがマチェットは、唸りを上げて空を切り裂いたのみであった。

獣吾は、身体を横へ半身にする事でマチェットをかわした。

だがマチェットをかわした瞬間、男はすかさず振り下ろしたマチェットの軌道を変え、丁度Ｖの字を描く様に下から上へとマチェットを跳ね上げた。

かなりの反射神経と腕力の持ち主だ。

この男の動きも、良く訓練された者の動きであった。

だが、幾ら訓練を積んだ動きではあっても、所詮は人間のレベルである。

獣人である獣吾にとっては問題にもならない。

しかも今宵は十六夜だ。

ほぼ満月時と同じ最高の状態にある獣吾は、迫り上がって来るマチェットの刃を、上体を反らす事で難無くかわした。

獣吾が獰猛な笑みを浮かべる。

獣吾は、男の顔を目掛けて渾身の右ストレートを放った。

獣吾の放った右ストレートが、男の顔面を真正面から打ち抜いた。

それが男の見た最後の景色となった。

獣吾の拳で男の鼻は“ぐしゃり”と潰れ、二つの眼球が血と視神経の糸を引きながら前へ飛び出した。

しかも砕けた頭蓋骨が、後頭部の皮膚を突き破り、脳漿を後ろに撒き散らした。

顔をただの血肉の残骸と化した男は、勢い良く後ろに吹き飛ぶと二度と起き上がる事は無かった。

地面に撒き散らされた夥しい量の血肉と脳漿を、激しく降る大量の雨が一気に洗い流して行く。

あまりの惨劇に、ヴァンパイアともう一人の男が無意識に後退った。

獣吾のパワーに度胆を抜かれたのだ。

「貴様、人間ではないな」

リーダー格のヴァンパイアが、禍々しい程の妖気を放ちながら言った。

それに合わせ、もう一人の男が懐から拳銃を引き抜いた。

ＳＩＧ・ＳＡＵＥＲ・Ｐ２２０である。

ドイツ・スイスの連合銃器メーカーＳＩＧ　ＳＡＵＥＲ社の９ミリ軍用拳銃で、陸上自衛隊でも正式採用されている銃だ。

基本通りのコンバットシューティングスタイルで、形が様になっている。

しかしその顔は、驚愕と恐怖に歪んでいた。

銃を構える腕が微妙に震えている。

「馬鹿者、こんな場所で銃を抜くな！」

険しい表情で、リーダー格のヴァンパイアの男が叫んだ。

「何だぁ？　そんなオモチャなんか出してどうしようってんだ？」

獣吾が惚けた声を上げる。

「俺は、鉄砲にはあんまり詳しくねえんだが、オメエ……プロだな？」

獣吾は、不敵な笑みを口許に張り付かせて言った。

「……」

男は、黙ったまま銃口を獣吾に向けている。

ただリーダーであるヴァンパイアの許可も無く銃を抜いてしまった為、撃つ事も出来ずただ構える事しか出来なかった。

「ヴァンパイア共の犬っコロに成り下がった元警察官か自衛隊員ってトコか……」

獣吾が独り言の様に呟いた。

「だ、黙れ！」

それを聞いた男が、慌てた様に叫ぶ！

と同時に、男は獣吾目掛けて引き金を絞った。

“パン”

乾いた火薬の炸裂音が夜の駐車場に轟く。

しかしその音は、荒れ狂う風雨によって直ぐさま掻き消された。

4

4

「お主らしくもない神妙な顔付きで、話しとはいったい何だ?」

慈海が尋ねた。

座主と別れた後、李・慈海・佐々木の三人は、座主が用意した金剛峯寺の一室に移った。

無論寝る為などではなく、恭也の事を慈海に相談する為である。

そのまま広間で話しても良かったのだが、李の表情からしてかなり深刻で込み入った話であると察した慈海が、広々とした広間ではなく、この部屋の方が落ち着いて話せると気を効かして場所を移したのだ。

佐々木は、李達に気を遣い、隣りの部屋で独り待機していた。

したがって、今この部屋には李と慈海の二人だけだ。

二人は、畳に敷かれた座蒲団の上に、向き合う様に座っていた。

二人共胡座を掻いている。

窓の外の風雨が窓を叩き、嵐の様相を更に際立たせていた。

「今から話す事は、絶対に他言無用じゃ。良いな……」

李は、重々しい口調でそう言うと、真剣な眼差しで慈海の目を覗き込んだ。

「分かった……」

慈海も真剣な眼差しでそれに応える。

「驚くでないぞ。実は恭介の息子が生きておるのじゃ……」

李は、慈海の反応を探る様にゆっくりと話した。

「ちょっ、ちょっと待て……。き、恭介と言うのは、あの恭介の事か……？」

慈海は、あまりの事に自分の耳を疑った。

「そうよ……。あのキョ・ウ・ス・ケよ……」

李は、わざと一言づつ区切る様にハッキリと言った。

「な……っ、ば、馬鹿な……。そ、そんな事が……」

慈海は、驚愕のあまり喉が詰まったが、何とか声を絞り出した。

「本当じゃ……。儂が育てた……」

「な、何だとう！　お主が育てただとう！」

慈海は更に驚いて、腰を抜かしたかの様に思わず後ろに手を着いた。

「そうじゃ。今十八歳になる……」

李は、殊更低く言った。

「いい、いったいどう言う事なのだ……。どうやって……、いや何故お主が？……」

慈海は、あまりの事で頭がパニックになり、上手く言葉が出て来ない様だ。

「十八年前……、恭介の遺体が見付かった前日の夜、恭介が儂に赤子を託したのじゃ」

「お、お主、前の日に恭介に会っておったのか……」

「うむ。じゃが会うたと言っても、いきなり恭介の奴が儂の家を尋ねて来たのじゃ……」

そう言って、李はその時の事を回顧した。

「ふうむ……。何と言う事だ……。それでお主、今までそれを隠し通して来たのか？……」

少し気を取り直した慈海は、ゆっくりと息を吐きながら尋ねた。

「そうじゃ」

「それで、名は何と言う？」

「儂が預かった時には、既に恭介が名を付けておってな、恭介の恭

を取って恭也と言う」

「恭也……。御子神恭也か……」

慈海は、感慨深そうに呟くと、柔和に目を細めた。

だが次の瞬間、何かを思い出したかの様に、慈海の目が“カッ”と見開かれた。

「だ、だが、それが恭介の子であるのなら、その子も吸血鬼ではないか！」

慈海が、慌てた様に大声で叫んだ。

「う～む。似た様な物じゃが、完全な吸血鬼と言う訳でもないのじゃ……」

「何だ？　その完全な吸血鬼ではないとは、どう言う事だ？」

慈海が、怪訝な表情を見せる。

「ふうむ……。先程座主殿と話しておった時、恭也の事はわざと伏せて話したのじゃが、実は……」

そうして李は、今一度恭也に関する事の顛末を慈海に語った。

恭介から恭也を預かった日の事……。

恭也に施した呪の事……。

恭也が育って行く過程の事……。

恭也が、覚醒するきっかけとなったショウや村田達との一連の事件……。

その後恭也と闘った事……。

そして昨日、廃ビルで起こった事の顛末や、『内調』でのやり取りの一部始終……。

李は慈海に協力を仰ぐ為、全てを正直に話した。

無論それは、慈海への深い信頼の証でもあった。

当然慈海にとっても、李は全幅の信頼を寄せる友である。

李が語る話を慈海は、時に頷き、時に必要な事だけを質問するに留め、殆ど無言のままじっと話を聞いていた。

「……と、言う事じゃよ」

李が静かに語り終えた。

「何とまあ常識外れな……」

これが最初に漏らした慈海の感想であった。

驚くと言うより、寧ろ呆れているに近い。

顔にも、驚きと呆れがないまぜになった様な、複雑な表情が表れ

ている。

ただその一方では、李と共に酒飲み友達であった故御子神恭介に忘れ形見が存在した事への喜びと、この十八年もの間、誰にも真相を知られぬよう恭也の事を隠し通して来た李の苦労、そしていつ恭也が吸血鬼として覚醒するやも知れぬ畏れと苦悩の日々……。

慈海は、毎日身を削られる様な思いで過ごして来たであろう李の心中とこれまでの苦労を察し、深い感慨を受けていた。

「大変だったな……」

慈海が、この上なく優しげな眼差しで、ぽつりと漏らした。

李の瞳から、思わず涙が零れる。

二人の間に、しばし沈黙が訪れた。

それまで気を張り詰る事で押さえ込んで来た感情が、堰を切った様に一気に溢れ出し、涙となって李の身体を小刻みに揺らしていた。

外からは、荒れ狂う風雨の音が部屋の中まで響いて来る。

しばしの沈黙の後、李は気を取り直し、涙を甚平の袖で拭った。

「じゃが大変なのはこれからよ」

李が言った。

もう涙は止まっている。

「うむ……」

慈海はそう一言漏らすと、目を閉じ腕を組んだ。

しばし考えを廻らせた後、慈海は再び目を開いた。

「話を聞く限り、恭介の倅は、最早『阿字観』程度ではどうにもならぬかも知れぬぞ……」

慈海が言った。

「うむ、儂もそう思う……。実際、獣吾君もそう言うておった」

「以蔵が育てた獣人だな？」

「うむ。その者も言うておったが、恭也の能力はまだまだ計り知れぬ物がある。実際あれ程までに儂が強力な呪を施したに拘わらず、たった十八年しか……いや、そもそも呪を破られた事自体、儂としては信じられぬ事じゃ……」

李は、そう言って溜息を吐いた。

「希代の仙道士李周礼が、心血を注いで施した呪を打ち破る魔力か……。確かに凄まじい物があるな……」

「じゃからお主に相談しておるのじゃ」

「ならばお主は、どうしたいのだ？」

慈海は、李の顔を覗き込んだ。

「儂は……、儂はあ奴に人として普通の人生を送らせてやりたい……」

李が、思い詰めた表情で言った。

「お主……」

慈海は、李の胸中が痛い程分かった。

「お主の気持ちは痛い程分かる。だがそれが無理な事は、お主が一番良く分かっておろう……。確かに『阿字観』の修行を行えば、自らの獣性や魔力をコントロール出来る様になるやも知れぬ。または、再びお主が更なる呪を施せば、恭介の倅の覚醒を遅らせる事も可能だろう。だが、所詮はそれらも付け焼き刃に過ぎぬよ」

慈海がきっぱりと言い放った。

幾ら李の気持ちが理解出来ても、その場限りのおためごかしを言っても意味が無い。

それは李にも分かっていた。

だが李は、僅かな可能性にも縋りたかったのである。

「やはり全ては恭也次第と言う事か……」

李は深い溜息を吐いた。

暗澹たる思いが李の表情を曇らせる。

「さてどうしたものか……」

慈海も、悲痛な表情でぼそりと呟いた。

二人は、俯き押し黙った。

「……」

「……」

再び二人を沈黙が包んだ。

「もしかしたら……」

その時、慈海がふと漏らした。

「何じゃ？」

李が面を上げる。

「……三種の神器だ……」

慈海がぽつりと言った。

「何？」

李が、怪訝そうに眉間に皺を寄せる。

「真の三種の神器だ。この世の全ての因果を操る能力を持つ神器であれば、恭介の倅の因果を変える事が出来るやも知れぬ」

「おう……」

李の瞳が輝いた。

希望と言う名の力が湧いてくる。

「もし恭介の倅の因果を操る事が出来るならば、永遠に魔族として覚醒せぬ様に因果を変える事が出来るやも知れぬ。また仮に魔族として完全に覚醒してしまっていたとしても、その魔力や魔性を押さえ込む事も……」

李は、消えかけていた縋るべき藁を得た喜びに全身を震わせた。

「だがそれも机上の空論で、実際に真の三種の神器にどれ程の能力があり、どれ程の事が出来るのは全くの未知でしかない」

慈海は、過大な期待を持たせぬ様、敢えて苦言を呈した。

「分かっておる。それに、やはり事の本質は、恭也がどうの様に考え、どの様に生きるかと言う事もな。じゃがもしも、それであ奴が普通の人間として生きる事の出来る可能性に繋がるのであれば、儂は親として例え身命を捧げても、あ奴の力になってやりたいのじゃ……」

李がそう語った瞬間、遠くで微かな銃声が聞こえた。

嵐に掻き消されて微かではあるが、あの乾いた火薬の炸裂音は銃

声に違いない。

“！”

“！”

李と慈海は、弾かれた様にほぼ同時に立ち上がった。

次の瞬間、隣の部屋に待機していた佐々木が、慌てて部屋を飛び出す音が聞こえて来た。

李と慈海も、我先にと部屋を飛び出した。

「老師、阿闍梨様！」

李や慈海が部屋を飛び出したのに気付いた佐々木は、後ろを振り返り険しい表情で叫んだ。

「うむ、分かっておる！」

李も険しい表情で頷く。

「駐車場だ！」

慈海が叫んだ。

李と佐々木が視線を合わせる。

「獣吾か！」

そう叫ぶと、李は老人とは思えぬスピードで駆け出した。

佐々木と慈海もそれに続く。

三人は、雨具も持たず嵐の中へ飛び出して行った。

5

5

叩き付ける様な風雨の中、夜気をつんざいて銃声が響き渡った。

「痛て～じゃねえか、コノヤロウ……」

獣吾は、肩を押さえ唸る様に言った。

見ると、獣吾の左肩が血で紅く染まっている。

押さえ切れぬ血液が、獣吾の指の間からも溢れ出ていた。

しかし叩く様な激しい雨が、溢れ出る獣吾の血液を次々と洗い流して行く。

獣吾は、獣の本性を露呈させた様な凄まじい笑みを浮かべ、未だ銃を構える男を睨め付けた。

「馬鹿者、撃つなと言っただろう！」

ヴァンパイアでリーダー格の男が、険しい表情で怒鳴った。

「で、でも……。この野郎が……」

男が呻く様に言った。

仲間の死に様を見て、どうやら軽いパニックを起こしている様だ。

この状態で発砲して命中させるとは、なかなかの腕とも言えたが、今回ばかりはいかんせん相手が悪かった。

「そんなオモチャでこの俺を殺れるとでも思ったのか？」

獣吾は唇の端を“ニィ”と吊り上げた。

口許から、人間には長すぎる鋭い犬歯が覗いている。

「貴様……」

男が恐怖に顔を歪めた。

血の気が引いて白くなっている。

獣吾は、獰猛な笑みを貼付けたまま男に襲い掛かった。

両腕で顔面を庇っている。

男は恐怖に駆られ、弾かれた様に引き金を絞った。

再び銃声が轟く！

顔を庇った獣吾の両腕に、九ミリパラベラムの弾丸が突き刺さった。

一瞬、獣吾の顔が激痛に歪んだ。

だが、獣吾の突進を止める事は出来ない。

残弾数八発の内、男が発射出来たのは結局三発に終わった。

銃を構えた男の手が、グローブの様な獣吾の手にガッチリ掴まれている。

「ケッ、それで終わりか？」

そう言い放つと、獣吾は男の手を銃ごと一気に握り潰した。

「ぐあぁっ！」

男は、眼球が飛び出す程目を見開き、無様な悲鳴を上げた。

手から銃が零れ、アスファルトに当たり固い音を立てる。

男の指が有り得ない角度に折れ曲がり、手の甲から折れた骨が血肉を伴って外に突き出ていた。

「あがががが……」

男は口を思い切り開き、零れんばかりに目を見開いたまま、潰された手を凝視している。

獣吾は、男の手を握ったまま、空いている右腕を男の股間に差し入れると、男を頭上に高く持ち上げた。

男を持ち上げた勢いのまま、獣吾は全身のバネを使って跳び上がると、空宙で身体を捻り反り投げを打った。

それにより、空宙で体を入れ替え上下を逆にすると、獣吾は男の

喉に膝を押し当てそのまま地面に激突した。

男は、喉を獣吾の膝とアスファルトで挟まれ、悲鳴を上げる事も出来ず絶命した。

獣吾は、落とした膝を抜く様に上げると、そのままゆっくりと立ち上がった。

見ると男の首はぐしゃりと潰れ、しかも半分千切れ掛かっている。

開かれた口からは夥しい血と共に舌がだらりとはみ出し、恐怖に見開かれた目は、恨めしげに獣吾の顔を見上げていた。

獣吾は、死体の傍に転がっている銃を踏み付けると、ゆっくりと後ろへ振り返った。

ヴァンパイアの男は、ただ唖然と獣吾を見詰めている。

しかも、その視線は獣吾の顔ではなく、獣吾の腕に注がれていた。

「ああ、これか？」

視線を察した獣吾は、両腕を目線の位置まで持ち上げた。

獣吾の腕には三つの銃痕が付いていた。

だが、幾ら雨に流されたとは言え、流れ出る血液の量があまりにも少ない。

肩に負った銃痕は、完全に出血が止まっていた。

獣吾が、持ち上げた腕に力を込める。

すると穿たれた銃痕から、潰れた銃弾がもぞもぞと迫り出て来た。

獣吾の腕から三発の銃弾が零れ落ち、音を立てて地面に転がる。

獣吾は、腕の銃痕を赤い舌でぺろりと舐めた。

「き、貴様……、何者だ……？」

ヴァンパイアの男は、驚愕の表情で一歩、また一歩と後退った。

その時、凄まじい勢いで獣吾達に迫り来る二つの人影があった。

一方の人影は、子供程度の大きさしかない。

逆にもう一方の人影は、獣吾と変わらぬ程の巨体だ。

「貴様ら、何をしている！」

小さな人影が、身体に似合わぬ大人の声で叫んだ。

一瞬獣吾の気が、声のした方向へと流れた。

「チィィィッ！」

その隙を突いて、ヴァンパイアの男が渾身の力で跳び退る。

小さな人影も、その後を追う様に跳んだ。

互いに間合いを外した位置で、ヴァンパイアと小さな人影が対峙した。

両者の間に凄まじい殺気がうねる。

ヴァンパイアは、腰を落とし身構えた。

両手の爪が“にゅう”と長く伸びる。

目が血の色に充血し、口許からは二本の牙が覗いていた。

小さい人影は、その身に纏った僧衣の懐から、銀色に光る円形の金属盤を取り出した。

“戦輪（チャクラム）”だ。

戦輪は、二～四センチ幅の平たい金属盤で作られた投擲武器で、円盤の外側に刃が付けられている。

使い方は、円盤の輪に指を入れるか、または円盤を指で挟んで投げるのが普通だ。

だがこの僧が取り出した戦輪は、直径二十五センチ程の平たい金属盤で出来ており、刃は外側に向けて付いてはいるが、通常の戦輪とは違い、円盤の中心部が手に持つ為の握りになっていた。

恐らくこの僧のオリジナルで、これなら手に持って使う事も、投擲武器として投げる事も可能だ。

両者の間に緊張の糸が張り詰めた。

その一方で、もう一つの闘いが始まろうとしていた。

「でやあぁぁぁぁっ！」

大きい方の人影は、凄まじい雄叫びを上げながら獣吾に突っ込んだ！

「ぬおぉぉぉーっ！」

獣吾は、迫り来る巨体に向けて身体を開き、真正面から巨体の突進を受け止めた。

肉と肉がぶつかり、激しい音を立てる。

その巨体の突進は、獣吾の想像を遥かに超えたパワーを有していた。

獣吾の顔に一瞬驚愕の色が浮かぶ！

だが突進した男の顔も、同じ様に驚愕の色を浮かべていた。

互いに全身の力を振り絞り、一歩も譲らず組み合っている。

二人の人知を超えたパワーに因って、踏み締めた二人の足元のアスファルトが、音を立て脆くもひび割れた。

それ程までに二人のパワーが拮抗しているのだ。

「獣吾ーー！」

次の瞬間、二つの均衡を打ち破る様に、李の叫び声が響いた。

視線を向けると、李に続いて佐々木と見知らぬ老僧の二人が駆け寄って来るのが見える。

その時、ヴァンパイア達四人の男が乗って来た車のヘッドライトが、誰も乗っていない筈なのに、突然点灯した。

更にタイヤを鳴らし急発進をしたのだ。

その場に居た全員の意識と視線が車に流れる。

車は、猛獣の咆哮の様なエンジン音を轟かせ、対峙するヴァンパイアと小柄の僧侶に向けて猛然と突っ込んだ。

二人を轢き殺さんばかりの勢いである。

小柄の僧侶は、間一髪横っ飛び跳びに跳んでそれをかわした。

次の瞬間、車は急ブレーキと同時にハンドルを切り、後輪をドリフトしながら横様に急停車する。

「乗れ！」

停車した車の運転席から激しい怒声が飛んだ。

見ると、一人の男がハンドルを握っている。

先程降りた四人とは別に、もう一人男が乗っていたのだ。

しかもその男は、仲間の三人が獣吾に殺されるのを、ずっと車の中から黙って見ていたらしい。

身を翻したヴァンパイアの男は、迷わず車の助手席に飛び乗った。

“バタン”とドアが閉まる音がするやいなや、再び車はタイヤを鳴らし急発進した。

「チィィィッ！」

小柄の僧侶は悔しげに舌を打ち鳴らすと、持っていた戦輪を車目掛けて投げ付けた。

吹き付ける風雨と夜気を切り裂き、戦輪が滑る様に飛ぶ。

しかし戦輪は、車のボディに傷を付けたのみであった。

車は、その場に残った全身を嘲笑うかの様に、赤いテールランプを閃かせながら、暗い山道へと消えて行った。

6

6

山道を降る車の中で、助手席に座るヴァンパイアの男が、ずぶ濡れのレインコートを脱いでいた。

最も濡れたレインコートのままで車に乗り込んだ為、シートは勿論助手席の周りも雨水でべったりと濡れ、しかもレインコートの中もぐっしょりと濡れている為に脱いでもあまり意味が無かった。

「貴様、何故加勢しなかった！」

ヴァンパイアの男は、素知らぬ顔でハンドルを握る男の横顔を、憎悪を込めた禍々しい目で睨め付けて怒鳴った。

男は、その怒声を無視するかの様に、黙ったまま運転を続けている。

短く刈った髪に四角い顔。

冷酷な爬虫類を思わせる細く鋭い目。

その男は、昨夜宇月光牙のマンションで、光牙と話していた斎賀と言う男であった。

レインコートを脱ぎ終えたヴァンパイアの男は、ぐっしょりと濡れた髪を手櫛で後ろに撫で付けた。

その顔は、以前夜叉姫など眠りに着いていたヴァンパイア達を光

牙が目覚めさせた際に、光牙の後ろでボディーガードをしていた南部である。

「貴様、答えろ！」

南部は、烈火の如き怒りをぶつけた。

再びその瞳は充血し、牙が長く伸びている。

だが南部の怒りも当然と言えた。

南部達は、この酷い嵐の中で化け物の様な大男と闘い、大切なファミリアを三人も殺されたばかりか南部自身も危うい目に遭ったのだ。

それなのに、この斎賀は加勢に来ようともせず、一人だけ雨にも濡れず、ただ車の中で部下が死んで行くのを見ていただけなのである。

しかも今、何食わぬ顔で平然と運転している。

南部は、元々この斎賀が気に入らなかった。

だが、今はハッキリとした殺意すら抱いている。

自分が味わった恐怖と、ヴァンパイアとして敗北した事への屈辱が、南部の怒りに拍車を掛けていたのかも知れなかった。

「貴様っ！」

南部は、左手の指を揃えて手刀を作ると、斎賀の丸太の様な太い首筋へ突き立てた。

いつの間にか爪が長く伸びている。

南部の爪が、斎賀の喉を切り裂くかと思えた瞬間、南部の手が斎賀によって掴み捕られた。

「ぐっ！」

南部が低く呻いた。

南部の表情が苦痛に歪む。

まるで、万力の様な力が南部の手に加わっているのだ。

斎賀は、左手でハンドルを握りながら、空いた右手で南部の手を掴んでいた。

「は、離せ！　貴様！」

南部は、激痛から逃れようともがいた。

だが、斎賀の岩の様な手はビクともしない。

ヴァンパイアである南部がこうまで子供扱いされるとは、この斎賀と言う男、ただ者ではなかった。

「今は運転中だ。馬鹿なマネは止めろ」

斎賀は、そう言って掴んでいた手を離し、南部を“ギロリ”と睨み付けた。

南部の手には、くっきりとした指の痕が残っていた。

南部は、痕の付いた手を摩った。

「馬鹿力出しやがって……。ただ脅かそうとしただけだ。本気な訳けが無かろう……」

そうは言ったものの、実際に南部の瞳の奥には、禍々しい程の殺意が浮かんでいた。

「……」

斎賀は、南部の殺意をわざと受け流し、素知らぬ顔で運転を続けた。

「もう一度聞く。貴様何故助けに来なかった？」

南部は、再度同じ質問をぶつけた。

「俺は、昇月に渡りを付けた後で、実際高野山に張られている結界の強さを調べる事と、お前のファミリアが高野山を襲撃する際に必要な爆薬を仕掛けるのを確認するよう依頼されただけだ。それに、あの男が乗っていた車はエンジンが掛かったままだった。だから俺は、お前に作戦を中止するよう言った筈だ」

斎賀は、しゃがれた声で低く答えた。

その話し方は、台本を棒読みするかの様に何の抑揚も無く、顔には毛程の感情も浮かべてはいない。

「だが貴様が来れば、俺のファミリア達も死なずに済んだ筈だ。それにこれでは、光牙様の御命令を何一つとして果たしておらぬではないか！」

南部は、尚も食い下がった。

「そんな事は知らん。ただお前のせいで作戦が失敗したのは事実だ」

斎賀は、前方を見据えたまま無表情に答えた。

南部は、斎賀の言い分に納得が行かなかった。

「だが貴様が加勢していれば、あの男を始末する事も出来た筈だ！そうすれば、その後で任務を遂行する事が出来たかも知れぬものを！」

南部が更に詰め寄った。

「愚かな……。あれだけの騒ぎを起こした時点で作戦は失敗だ。それに俺は、あの男と闘う事まで依頼されていた訳じゃない……。それに……」

「それに？」

南部が怪訝な表情を浮かべる。

「……」

しかし斎賀は、何かを言い掛けたままそれ以上何も語らなかった。

斎賀達の車は、嵐の山道をただひたすら走り抜けて行った。

7

7

「止めよ、大角。その者は敵ではない」

慈海は、獣吾と組み合っている巨体の僧に向けて言った。

巨体の僧＝大角は、油断無い視線を獣吾に浴びせながらゆっくりと、そして慎重に獣吾から離れた。

獣吾も、大きく息を吐いた。

風雨は依然として強く、木々が強風に煽られ悲鳴を上げている。

獣吾だけでなく、その場に居る全員が、既にびしょ濡れの状態になっていた。

「いったい何があったのじゃ？」

李は、辺りを見渡しながら獣吾に尋ねた。

雨に濡れ、水溜まりとなった地面には、今三人の男が屍を晒している。

その内の一人は顔を粉砕され、もう一人は首が千切れ掛かっていた。

最初に蹴り飛ばされた男も、左目の眼球が僅かに飛び出し、耳からも血を流し死亡していた。

恐らくは、頭蓋骨が陥没しているに違いない。

「これは……」

佐々木は、この惨状を目にして思わず呟いた。

この時佐々木は、改めて獣人の戦闘力の凄まじさを思い知らされた気がした。

「いったい何が、どうしてこうなったのじゃ？」

再び、李が獣吾に尋ねる。

「それが、俺にも良く分からねえんだ……」

獣吾は、首を傾げながらぼそりと言った。

「何じゃと？」

「俺が車の中で爺さん達を待ってたら、いきなりさっきの車がやって来て、それで中からコイツらが降りて来たんだけどよ、その内の二人が俺の車を調べに来て、俺が爺さん達を待ってるって言ったら、いきなり襲って来やがったんだ……」

獣吾が、ぼそぼそと説明した。

どうやら要点をかい摘まんで説明するのが苦手らしい。

「何じゃ？　よう分からぬが、要するにあ奴らが車で乗りつけて来

て、いきなりお主を襲って来たと言う事じゃな？」

焦れる様に、李が要約した。

「う～ん、まあそんな事の様な、少し違う様な……」

獣吾は、困った様に口篭った。

「慈海様、この男は……？」

大角が、慈海の横に居並び尋ねた。

大角が横に立つと、小柄な慈海が更に小さく見える。

大角の身長は、獣吾と同じく二メールを上回り、体重も恐らくは百三十キロを裕に超えているであろう。

一見太っている様にも見えるが、黒い僧衣の襟元から覗いている浅黒い肌の下は、極限まで鍛え上げられた筋肉がぎっしり詰まっているであろう事は、先程の獣吾との組み合いから見ても容易に想像が付いた。

年齢は四十代とも五十代とも取れ、見た目だけでは判断が付かない。

剃髪した頭はごつごつとした岩の様で、所々に縫った様な傷跡が幾筋も残っていた。

四角く大きな顔には、長く太い眉毛と大きく鋭い目、そして胡座を掻いた大きな鷲鼻が居座っている。

分厚い唇を有した大きな口は、鼻の下から伸びた泥棒髭に覆われていた。

どう見ても、昔の悪役のプロレスラーにしか見えない。

「この者は……」

慈海が、大角の問いに答えようとした瞬間、別の人間が会話に割って入った。

「その男、ただの人間ではありませぬぞ！」

二人の会話に割って入ったのは、先程ヴァンパイアの南部と対峙していた小柄な僧であった。

逃走する車に投げ付けた戦輪を拾い、慈海達の下に戻って来たのである。

「これ小角、控えなさい！」

慈海は、厳しい表情でこの小柄な僧＝小角を一喝した。

「はい……」

小角は、納得の行かぬ顔で短く返事をすると、そのまま押し黙った。

小柄な体格や顔だけを見るとまるで子供の様にも見えるが、その表情は大人びた物であり、声は多少高めであるが、確かに声変わり

を終えた男の声であった。

大角同様、いやそれ以上に年齢不詳である。

綺麗に剃髪された頭部と色白で透き通る肌。

眉毛も薄く無毛に近い為、全体的に“つるん”とした茹卵を思わせる顔立ちだ。

だが低く小さな鼻や唇の薄い小さな口に比して、目だけが異様に大きい為えらくバランスを欠いた顔と言えた。

身長は一メートル四十センチを幾らか超えた程しかなく、体重も四十キロを切っている様に見える。

実際に、李や慈海よりも小柄だ。

だが先程の身のこなしや戦輪の扱い方を見れば、この小角がただ者でない事は一目瞭然であった。

実はこの小角と大角、そして昼間慈海と話していた円角を合わせた三人が、高野山で最強と謳われる高野三儀天なのである。

「久しぶりじゃのう大角殿、小角殿」

李がにこやかな笑みを浮かべ二人に声を掛けた。

「こちらこそご無沙汰しております」

「ご挨拶が遅くなり失礼致しました」

大角と小角は、各々李と佐々木に挨拶をし頭を下げた。

だが獣吾には、警戒するかの様に様子を伺っている。

それを見た獣吾は、わざと不敵な笑みを浮かべ二人を挑発した。

「これ、わざと挑発するでない！」

李は、獣吾が二人を挑発しているのを見て諌めた。

「へへ、分かってるよ」

獣吾は、悪戯っぽく笑った。

無論、李も獣吾が本気でない事は分かっている。

だが立場上、止めない訳にも行かない。

「困った奴じゃのう」

李がぼそりと呟いた。

佐々木も苦笑している。

「お主が“防人”の以蔵の養子だな？」

慈海が獣吾に尋ねた。

ひどく優しげなその目には、今は亡き友への哀愁が漂っている。

「あんた、俺の爺さんを知っているのか?」

「ああ無論だ。何せ儂と以蔵は古くからの飲み友達でな、昔はこのインチキ仙人と三人で酒を酌み交わしたものよ……」

慈海は、当時を回顧する様に、懐かしさと寂しさで目を細めた。

それに比べ、“インチキ仙人”と罵られた李は、口を尖らせブツブツと不平を鳴らしている。

「そうだったのか……。爺さんの昔の友達に会えて嬉しいよ。そう言えば自己紹介がまだだったな。俺の名は当麻獣吾。知っての通り獣人だ……」

獣吾が言った。

「な!」

「馬鹿な……」

大角と小角は絶句した。

二人共、あまりの驚きに目を見開いたまま固まっている。

大角も小角も、獣吾が普通の人間でない事は分かっていたが、まさか絶滅した筈の獣人族の生き残りとは想像もしていなかったのだ。

しかも小角に至っては、獣吾の事を組織を裏切ったヴァンパイアだと勘違いをしており、この件も何らかの理由で高野山に逃げて来

たヴァンパイアと、それを追って来たヴァンパイアとの仲間割れだと勝手に決め付けていたのである。

「良いか。この者は儂の知己である当麻以蔵の養子で、遠路遥々この御山まで来られた客人なのだ。分かったな」

慈海は、大角と小角の二人を厳しい口調で戒めた。

二人は“はい”と返事すると、再び獣吾に向き直った。

「当麻殿、失礼致しました」

「この度の非礼、どうかご容赦下され」

二人は、口々に詫びて頭を下げた。

「止せよ。もうそんな、イイって事よ。それに俺の事は獣吾と呼んでくれ！」

獣吾は、前に突き出た下顎を照れ臭そうにボリボリと掻いた。

「にしても……、昨日の今日にして、いきなりこの様な事になるとは……」

慈海は、転がる遺体に目を遣りながら呟いた。

慈海の言う昨日とは、昨日座主から主立った者のみに知らされた真の三種の神器の話と、それをヴァンパイア共の手から護る為に、昨夜から張り巡らせる事となった結界の事である。

つまりは昨日の出来事と、今のヴァンパイアの襲撃が、あまりにもタイミングが良すぎると言っているのだ。

「何かタイミングが良すぎますね……」

それまで黙っていた佐々木が低く漏らした。

「奴ら、いったい何をしに来たんでしょう?」

大角は、誰に聞くともなく呟いた。

「恐らくは偵察じゃろうが……。お主はどう思った?」

李は、隣の獣吾を見上げ問い掛けた。

「奴らが何かを始める前に殺り合っちまったから良く分からねえが、確かに偵察だったのかも知れねえなあ……」

獣吾は、事の成り行きを反芻しながら答えた。

「とにかく座主様に報告だ。小角、この事を座主様に報告して来なさい。それと、皆この雨でずぶ濡れだ。風邪を引かぬよう風呂と服の着替えを用意させなさい。あと、この獣吾殿は結界内に入れぬ。今宵はもう吸血鬼共の襲撃も無いだろうから、この辺り一帯と宿坊の結界を解いて頂くよう、座主様にお頼みするのだ。良いな」

「はい」

慈海がそう言うと、小角は李達に一礼し、直ぐさまその場を後にした。

瞬く間に姿が見えなくなる。

この雨で幾ら視界が悪いとは言え、やはり凄まじい身の軽さだ。

「大角！」

小角が走り去ったのを確認すると、慈海は大角に声を掛けた。

「はい」

大角が、その体格に見合った野太い声で応じる。

「お主は誰か手の空いてる者を呼び、この者達の遺体を手厚く弔ってやりなさい。例え吸血鬼に魂を売った者であっても、分け隔てる事無く弔い、その魂を救ってやる事こそ御仏の慈悲の心だ。分かったな」

そう言って、慈海は静かに目を閉じ合掌した。

「南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛……」

慈海が念仏を唱えると、大角もそれに倣った。

それに合わせ李や佐々木も手を合わせる。

「俺を怨んで化けて出るんじゃねえぜ……」

獣吾だけが、手を合わせる事なく独り呟いた。

依然雨は振り続き、強風が木々を揺らしている。

だが、その雨や強風でも流す事の出来ない現実が、重く全員を包んでいた。

8

8

東京は雨の中であった。

無論、高野山の様な嵐ではないが、強い雨が断続的に降り続いている。

黒田鉄二は、駅から少し離れたコンビニの軒下で、独りショートホープを吹かしながら雨宿りをしていた。

ひたすら雨の中をバイクで走った為、全身がずぶ濡れである。

黒いライダースの革ジャンと同じく黒の革パン、更には黒のライダースブーツを履いているに関わらず、中のＴシャツや下着までが雨と汗でぐっしょりと濡れていた。

全身がやけに重い……。

だがそれは、雨に濡れているからだけではなく、今朝恭也から聞かされた現実が、鉄二の心に重くのし掛かっているからであった。

時刻は、既に深夜零時を回っている。

鉄二は、恭也と別れた後愛馬のハーレダビドソンのＸＬＨ８８３カスタムを駆り、何かを振り切る様に走り続けた。

だが結局は、何も振り切る事は出来なかった。

一時的にでも現実から目を背ける為アクセルを開いたが、恭也から聞かされた現実はまるで岩の様に重く、バイクを幾ら飛ばしてもその程度で得られる風では、意識の外へ吹き飛ばす事は出来なかった。

鉄二が、短くなったタバコを入口に置いてある灰皿へ投げ込んだ時、革ジャンの内ポケットに仕舞い込んだ携帯が音を立てて鳴った。

別に電話に出る気も無く携帯を取り出すと、サブディスプレイに映し出された着信相手を確認した。

着信相手は、鉄二の率いる暴走族『ブラッディ・クロス』のメンバーの富川からであった。

鉄二は、着信相手の確認をしただけで無視しようとしたが、その電話は一向に切れる気配が無かった。

ふとシゲの事を思い出し悪い予感に駆られた鉄二は、ザワつく胸を押さえながら電話に出た。

『もしもし、鉄二さんですか！　良かった、やっと繋がった！』

電話の向こうで、富川の声が慌てている。

鉄二は、更に悪い予感に囚われた。

「どうした？　何があった！」

悪い予感が鉄二を焦らせ、自然に声が大きくなっている。

『今三上達と駅前に居るんスけど、ナンか変な野郎が、恭也さんの事アレコレ聞いて来やがったんスよ！』

「何、変な野郎だと？」

鉄二は、眉間に皺を寄せた。

悪い予感がどんどん膨らみ、心臓の鼓動が加速して行く。

「で、どんな奴だ？」

『片目で妙に迫力のあるオッサンです』

「片目だと……」

『はい。何て言うんスかアレ。眼帯じゃねえし、とにかく海賊が付けてるみてぇな……』

そう言って記憶を探ろうとする富川に、鉄二は苛立った。

「そんな眼帯の名前なんかどうでも言い！　で、そいつは何と言ってたんだ！」

鉄二は、苛立ちをあらわに大声で富川を怒鳴り付けた。

『は、はい！　そいつは恭也さんを知っているかって聞いて来たんスけど、俺は知らねえって答えたんです』

富川は、怯えた様に話した。

「良し！　お前は知らないって答えたんだな！」

『は、はい。でも……』

富川の声のトーンが急に鈍った。

「でも何だ？　ハッキリ言え！」

鉄二が、更に大声で怒鳴る。

『ス、スミマセン！　さっき三上達と合流したんスけど、三上達もその野郎に恭也さんの事を聞かれたみたいで……』

「何だとう！　三上はそこに居るんだな！　代われ、今すぐ代われ！」

鉄二の怒声がコンビニの中まで届いたらしく、店内の客や店員が、怯えた表情で鉄二の様子を伺っている。

『スンマセン！　黒田さんスンマセン！　スンマセン……』

電話の向こうでは、富川と代わった三上が必死で詫びている。

「バカ野郎！　テメエ、恭也を売るとはどう言うつもりだ！」

鉄二が、大声で三上を怒鳴りつける。

『スンマセン、本当にスンマセン。で、でも……、そいつに木下がヤラれちまって……』

三上の声は怯えて震えていた。

「木下が？　どう言う事だ！」

『俺達がゲーセンから出て来た時、そのオッサンが御子神さんを知らないか？　って声を掛けて来て……』

「それで！」

『で、そのオッサンの聞き方が生意気だったんで、木下の奴がオッサンをシメようとしたんです。そうしたら……』

三上が言い澱んだ。

「そうしたら、どうしたんだ！」

鉄二が先を急かす。

『木下が、オッサンの胸ぐらを掴もうとして、気付いたらもう木下がぶっ倒れていたんです』

「気付いたらって、どう言う事だ！」

『そん時は、俺達も何が起こったのか全然分からなかったんですけど、木下は倒れたまま気ぃ失っちまってて……、後で聞いたら、オッサンに掴み掛かろうとした瞬間腹に爆発したみてぇな衝撃があったって……』

「それで木下がヤラれたから、テメェ等ビビって恭也の事を喋ったのか！」

『ス、スンマセン！』

三上は、泣きそうな声で詫びた。

「それで、恭也の事を何て喋ったんだ？」

詫びる三上を無視して、鉄二は三上が話した内容を聞いた。

『その野郎、御子神さんが今何処に居るか知らないかとか、何処に住んでるかとか、色々としつこく聞きやがるんで、俺御子神さんが何処に住んでるかなんて知らないし……、今居る場所なんて全く分からないから、御子神さんがバイトしてる店を教えたんです……』

「バカ野郎ーーっ！」

鉄二が、再び大声で怒鳴った。

しかしその裏では、三上達がその男にビビった事に納得する自分もいた。

木下は、死んだシゲ程ではないが、鉄二とシゲを除けば、チームでも五本の指に入るイケイケだ。

その木下を一発で眠らされたとなれば、三上達がビビるのも無理はない。

そんなマネが出来るのは、鉄二の知る限り恭也だけだ。

断定は出来ないが、その片目の男はヴァンパイアに違いない。

そうであれば、今三上達が生きている事こそ僥倖であった。

『……しもし、もしもし、黒田さん、聞いてますか？』

鉄二が考えを廻らせていると、携帯から三上の呼ぶ声が聞こえた。

「あっ、ああ……。聞こえてるぞ」

鉄二は、慌てて答えた。

『良かった。急に黙るんで何かあったかと思いましたよ』

「ああ、ちょっと考え事をしててな……」

鉄二が言った。

先程までと比べて、だいぶ声のトーンが落ちている。

『だからそのふざけたオッサンをボコってやろうと思って、今富川や他の連中にも声掛けて、いつもの場所へ向かうところなんですよ！』

先程までの態度と打って変わり、三上が鼻息を荒くして言った。

木下の敵討ちの意味もあるだろうが、先程ビビた事で潰された己の面子を、必死で取り戻そうと躍起になっているのだろう。

「バカ野郎！　そいつには手を出すんじゃねえ！　バカな事考えずにとっとと解散しろ！」

鉄二は、慌てて怒鳴り声を上げた。

『エッ？　で、でも……』

三上が、戸惑った様に声を鈍らせる。

「良いか！　そいつだけは絶対手ぇ出すんじゃねえ！　木下の事は、相手の力も分からず最初に手ぇ出そうとしたアイツの自業自得だ。それに、恭也からそいつの事は聞いている。だから絶対手を出すんじゃねえぞ！　これは命令だ！」

鉄二は“ガン”として言い放った。

『……』

しばし沈黙の後、

『分かりました……』

三上は、小さく返答した。

声を聞く限り全く納得していない様子ではあったが、頭の命令は絶対であり、皆を従わせるだけのカリスマと実力を鉄二は有していた。

「じゃあ今すぐ解散しろ！　分かったな！」

鉄二はそう言って電話を切った。

そして、そのまま携帯のアドレスを括る。

鉄二は、アドレスのカ行を開いた。

そこには“恭也”の名前があった。

鉄二は“恭也”のアドレスを開くと、発信ボタンに指を掛けた。

しかし、ボタンを押す直前で、鉄二は携帯を閉じた。

ーーダメだ、ソイツを恭也に会わせる訳にはいかねえ。

鉄二は、強く拳を握り締めた。

胸には、ヴァンパイアに対する怒りが渦巻いている。

鉄二は、雨の中を急いでバイクに跨がると、おもむろにエンジンに火を入れた。

野太いトルクの音が、夜の街に響き渡る。

けたたましい爆音を轟かせ、鉄二は雨の中を走り出した。

9

9

男は、少し色が褪せ始めた木製の扉の前に立っていた。

かなり頑丈な造りの扉で、取っ手や上下二カ所に設置された鍵の部分は真鍮製だ。

家やアパートの玄関等に使われる捻るタイプのドアノブではなく、太い真鍮製のパイプをコの字に曲げて取り付けた、店舗等で良く見るタイプの取っ手である。

本来金色に近い筈の真鍮製の取っ手は、多くの人間の手垢や脂で汚れ、その輝きを失っていた。

特に凝った装飾が施されている訳でも無く、飲食店等で良く見る平均的な木製の扉だ。

男はその扉の前に立ち、扉の上に取り付けられた看板を眺めていた。

この雨で幾分涼しくなっているとは言え、この蒸し暑い中黒い詰め襟の上下でしっかりと身を固め、片方の目を黒い革製のアイパッチで覆っている。

男が手に下げた傘の先からは、雨の雫が滴り落ち床に小さな水溜まりを作っていた。

ここは古びた雑居ビルの地下だ。

今男が立っている店の他には、二軒のうらびれたスナックが入っている。

どちらの店も、まだ営業時間中であるに関わらず、中は“しん”と静まり返っていた。

どうやらあまり客は入っていない様だ。

男が立っている店からは、数人の男性客の笑い声が、扉の内側から聞こえてくる。

男は、鈍く光る真鍮製のドアノブに手を掛けた。

軋む音を立てながらゆっくり扉を開けると、男は店内へと足を踏み入れた。

男が潜った扉の上には、黒い長方形のアクリル板を箱型に組み、中に電球を施した看板が掲げられている。

そこには白抜きの文字で、『ＢＡＲ　ＨＥＡＶＥＮ，Ｓ　ＤＯＯＲ』と記されていた。

第十一章1：十兵衛

第十一章
『十兵衛』
1

鉄二は、雨の中を恭也がバイトしていた『ヘブンズ・ドア』へとバイクを飛ばしていた。

今朝行ったばかりではあるが、その時と今ではまるで状況が違う。

今朝の態度からして、恭也がバイトに出ているかどうか定かではない。

だが三上が、『ヘブンズ・ドア』の事を話してしまった以上、その男を恭也に会わせる訳にはいかないと言う思いが、今の鉄二を衝き動かしていた。

しかもそれだけではない。

ヴァンパイアは、シゲを殺した仇なのだ。

無論、例えその片目の男がヴァンパイアだったとしても、その男がシゲを殺した直接の犯人ではない事は恭也の話からも分かっている。

シゲの件でヴァンパイア全てを憎むと言うのは、殺人事件が起きたからと言って、その犯人だけでなく人類全体を憎むのと同じだ。

シゲを殺したヴァンパイアが憎いからと言って、ヴァンパイア全

てを憎むと言うのは筋が違う。

無論そんな事は分かっている。

分かってはいるのだが、シゲの無念を思うとヴァンパイアと言う“種”に対するどうしようもない怒りが、沸々と沸き起こってしまうのだ。

では片目の男に会えたとして、自分はどうしたいら良いのか？

実際その男がヴァンパイアであった場合、ヴァンパイアの能力が恭也の言う通りであれば、自分一人では何程の事が出来る筈も無い。

闘って勝てる保証は何処にも無い。

かと言って、恭也と会わない様に頼んでも、聞くような相手で無い事は重々承知している。

何も出来ない……。

何をどうすれば良いのかすら分からない。

だがそうは思っても、身体が……心が、鉄二の気持ちを煽る様に急かし立てているのだ。

鉄二は、追い立てられる様に更にバイクのアクセルを開いた。

依然雨は強く降り続き、飛礫の様な雨が激しく顔を叩く。

しかしそれさえも、滾る様な鉄二の衝動を抑える事は出来なかっ

た。

駅前の通りは既に車も少なく、歩道を歩く人影も疎らになっている。

そこの信号を右折すれば、『ヘブンズ・ドア』は目と鼻の先だ。

鉄二は、信号の右折の矢印が消えた交差点へと、強引に右折しようと突っ込んだ。

雨に濡れたアスファルトにタイヤを取られ、後輪が僅かに流れる。

だが巧みなハンドリングと絶妙なバランス感覚で何とか切り抜けた。

駅前通りの裏に入ると、『ヘブンズ・ドア』の入っている雑居ビルが見えてきた。

鉄二は、『ヘブンズ・ドア』のある雑居ビルに到着すると、ビルの入口の脇にバイクを止めた。

今朝来た時と同じ場所である。

バイクを止めた瞬間、今朝恭也が見せた、苦悩に満ちた表情が再び脳裏に浮かんだ。

いつも身勝手で、自信過剰で脳天気な恭也が、初めて見せた哀しげで寂しそうな顔……。

自らを責め、苦しみの只中にある恭也の境遇と心情を思い、思わ

ず鉄二は唇を噛んだ。

ヘルメットを脱いで辺りを慎重に見渡したが、富川の言う片目の男の姿は見えなかった。

目に付くのは、派手な衣装に身を包んだ女達と酔っ払った男ばかりだ。

丁度この時間は、スナックやクラブ等が店を閉める時間帯で、店を閉めて出て来たママやホステス達が通りに溢れていた。

酒が入っているせいか、皆話す声が妙に大きい。

更には閉店まで粘っていた客が、目当てのホステスを次の店へと仕切りに誘っていた。

普段であればいつもの情景と気にも止めない所だが、今の鉄二のとっては唾棄したくなる程の苛立ちや怒りを感じた。

鉄二は、ビルの出入口に置かれている電光の置き看板に蹴りを入れると、凄まじい表情でその一団を睨み付けた。

激しい破砕音に驚いた客や女達の一団が、一斉に鉄二へ視線を浴びせる。

しかし鉄二の凄まじい形相に怯え、誰もが直ぐさま目を逸らせた。

“ケッ”

それを見た鉄二は、苛立ちを顕に唾を吐いた。

怯える一団が足速に立ち去るのを見送ると、鉄二は『ヘブンズ・ドア』のある地下へと階段を降りて行った。

この期に及んでも、どうすれば良いのか何も方策が立っていない。

『ヘブンズ・ドア』の前に立った鉄二は、心を落ち着けようと大きく深呼吸をした。

そして色のくすんだ真鍮製の取っ手に手を掛け、意を決した様に手前に“グイッ”と引いた。

扉を引くと、“ギィィィッ”と軋む音を立てて扉が開く。

薄暗い店内には紫煙がもうもうと立ち込め、マイルス・デイビスの『ＲＯＵＮＤ　ＭＩＤＮＩＧＨＴ』が流れていた。

カウンターの中には見馴れたマスターの顔があったが、思った通り恭也の顔は何処にも無かった。

「いらっしゃいませ……」

鉄二の顔を見たマスターが、低いトーンで声を掛ける。

鉄二はこの店の常連だ。

いつもであれば、『よう、テッちゃんいらっしゃい！』とにこやかな笑顔で声を掛けて来るのだが、今夜はいつもと様子が違う。

まるで鉄二を、一見客でも見る様な目付きで見ている。

鉄二は、店内の異様な雰囲気を感じ取った。

扉を開けたままの状態でその場に立ち止まり、店内の様子を伺う。

カウンターには五人の客が座っていた。

その内の三人は、鉄二にも馴染みの常連客だ。

普段なら声を掛けて来る筈だが、今日は何処かよそよそしい態度で声を掛けて来ない。

鉄二は、後ろ手に扉を閉め正面のカウンターへと歩を進めた。

びしょ濡れの革ジャンやブーツから雨水が滴り、店の床に小さな水溜まりを作って行く。

ゆっくりとした足取りで鉄二がカウンターに近付くと、カウンターの端に座っている男の顔が目に入った。

その男は、黒い詰め襟の上着を纏い、揃いの黒いスラックスを穿いていた。

しかも片方の目には、富川が話していたように黒い革製のアイパッチをしている。

ーーこの男だ！

鉄二の心臓が“ドキリ”と跳ねた。

ーー間違いない！

富川や三上が話していた男が、間違いなくそこに居た。

やはり恭也のバイト先を三上から聞き出した後、この店へ恭也を尋ねて来たのだ。

ただそこに居るだけの筈なのに、片目の男の異様なまでの迫力が、マスターや他の客達にプレッシャーを与えていた。

片目の男＝即ち“柳生十兵衛三厳”である。

無論鉄二は、この男があの有名な柳生十兵衛である事を知らない。

十兵衛は、鉄二の視線に気付き僅かに振り返った。

殊更凄んだ訳でも無いのに、凄まじいまでの威圧感だ。

鉄二は、気力が萎えそうになるのを必死で堪えた。

その鉄二の精神作業を感じ取った十兵衛は、一瞬不思議そうな表情を作ったが、思い当たった様に“ニヤリ”と不敵な笑みを浮かべた。

鉄二の全身を血が駆け巡った。

「ちょっ、ちょっとお客さん……」

マスターは、鉄二がここに来た理由を知らない。

二人から不穏な空気を感じ取ったマスターは、わざと鉄二の名前を伏せて声を掛けた。

やはりマスターは、既に十兵衛から恭也の事を聞かれていたのだ。

他の客達も、同様に恭也の事を聞かれたに違いない。

そして十兵衛の只ならぬ雰囲気から、恭也に危険が迫っているのを察知したマスターは、鉄二に対してもわざと一見客の様に振る舞う事で十兵衛と鉄二の接触を避けようとしたのだ。

名前を呼ばなかったのもその為である。

だがマスターの気遣いを他所に、鉄二は十兵衛に近付いた。

マスターが、慌ててカウンターから飛び出そうとする。

カウンターに座っていた客達も、その只ならぬ様子に怯え、二人から離れるよう席を立ち上がった。

鉄二は、カウンターの脇から飛び出そうとするマスターを、無言のまま手を上げて制した。

十兵衛は、未だ座ったまま鉄二をじっと見詰めている。

「お前だな。恭也を捜してるって言う奴は……」

鉄二は、十兵衛を凄まじい形相で睨みながらドスの効いた声で言った。

さすがに暴走族の頭を張るだけの事はあって、凄まじい迫力と威圧感だ。

「ほう、なかなかの物だな」

十兵衛は、叩き付ける様な鉄二の気を、何食わぬ顔でさらりと受け流した。

「答えろ！」

鉄二が吠える。

「なる程、先程の小僧の仲間か。俺に仲間の敵討ちでもしようと言うのかな……？」

十兵衛が不敵に笑う。

「まあそんな所だ……」

鉄二は、自分を奮い立たせ言った。

幾ら鉄二でも、相手がヴァンパイアであれば恐怖に囚われるのも当然である。

だが恭也への友情と、シゲの事でのヴァンパイアに対する怒りが、萎えそうになる鉄二を踏み止まらせていた。

「止めろ！　その男と関わるんじゃない」

必死の形相でマスターが叫ぶ！

「すまないマスター。俺はこの野郎に用があるんだ……」

鉄二は、十兵衛を睨んだままわざとマスターの顔を見ずに応えた。

「お前……」

マスターが、呻く様に漏らした。

「面白い小僧だな。先程の言い方からして貴様……、御子神恭也の事を知っているな……？」

そう言って、十兵衛がゆっくりと立ち上がった。

十兵衛の尋常じゃない迫力に気圧され、鉄二が一歩後退る。

「後でマスターに詳しく聞こうと店が終わるのを待っていたが、丁度良い！　貴様から御子神恭也の事を聞かせて貰うとしようか……」

十兵衛は、鉄二へと一歩踏み出した。

「まっ、待ってくれ！　恭也が此処でバイトしていたのは確かだが、先程も言った様にもう店を辞めた。それに彼は、この店で恭也と知り合っただけで、恭也の事は何も知らないんだ！」

マスターは、二人の間に入り必死に鉄二を庇った。

「良いんだマスター。恭也の事は勿論、俺はこの男に用があるんだ」

鉄二は“ガン”として言い放った。

「ふっ、そう言う事らしいぞマスター。それで小僧、何処で話をするのだ？」

十兵衛が言った。

「此処では皆の迷惑になる。付いて来て貰おうか……」

鉄二は、背にした扉を親指で指した。

「ふふふ、良かろう……。マスター、飲み代と迷惑料だ」

そう言って、十兵衛は懐から黒い長財布を取り出し、その中から一万円札を五枚程抜き取ると、投げる様にカウンターに置いた。

「じゃあ行こうか」

十兵衛が鉄二の肩を叩く。

鉄二は、黙ったまま店の扉へと向かった。

十兵衛もその後に続く。

「テ、テッちゃん！」

マスターは、心配そうに鉄二の背中へ声を掛けた。

「悪かったな、また来るよ……」

鉄二は、振り向く事無く背中越しに応えた。

再び扉を押し開き店を出る。

続いて、十兵衛も店を後にした。

マスターと残った客達は、鉄二達の背中を為す術も無く見送る事しか出来なかった。

誰も口を開こうとしない。

沈黙が、店を支配していた。

既にＢＧＭは、二曲目の『ＡＨ－ＬＥＵ－ＣＨＡ』に変わっていた。

2

2

「恭也が、こんな時間部屋に居るなんて珍しいじゃない」

陽気な声で陽子が言った。

風呂上がりの為か、シャンプーの優しい香が漂って来る。

少し茶色いショートカットの髪はまだ完全に乾き切っておらず、スレンダーで引き締まった身体をゆったりとしたグレーのスエットの上下を纏っていた。

当然すっぴんなのだが、間近で見ていると、時々“ドキッ”とさせられる。

俺の愛しい夜の女達の様な色気こそ無いが、逆にアイツらには無い“何か”を持っている。

その“何か”って言うのが上手く説明出来ねえが、この陽子如きに“ドキッ”とさせられる自分が無性に悔しくてしょうがねえ。

だいたい俺は、この女が苦手なんだよな……。

苦手に感じる最大の要因は、自分は短気で凶暴なクセにいつも正論ぶって俺に説教する所と、とにかくお節介な所だ……。

この陽子の彼氏になる奴がいたら、ホント心から同情するぜ、まったく……。

そう言やあ、ちなみにここは俺の部屋だ。

爺とあの獣人野郎は、佐々木のオッサンと共に昼前から高野山へ行っている。

陽子は、どうやら今朝出掛ける前に爺に頼まれたらしく、俺の様子を見に来たのだ。

しかしこんな時間に、年頃の男女が一つの部屋にいる事に何の懸念も抱いていないのか、俺の様子を見に行くよう頼む爺も爺だが、それをあっさり引き受ける陽子も陽子だ。

しかも陽子の親父やお袋さんも、娘の事が気にならないのか様子を見に来る気配すら無い。

一応俺は、獣人とヴァンパイアの血を引く化け物なんだぞ！

陽子やお袋さんはともかく、陽子の親父は俺の正体を知っている。

幾ら爺に昨夜の『内調』での話を聞いて、俺が人間を襲わないと分かっていても、親としてもう少しは警戒したらどうなのかと俺の方が気になっちまう。

まあそれだけ爺や陽子の両親に、俺が陽子に弱いって事を見透かされてるんだろうがな……。

そこいらの不良共やヤクザ共にも恐れられ、飲み屋の女達からはモテモテのこの俺様が、この陽子だけにはどうにも手が出せねえなんだから、実際舐められても仕方ねえ。

ったく、忌ま忌ましいったらありゃしねえぜ。

俺は、苛立つ様にタバコを揉み消した。

「あんたねえ、タバコ吸うなら窓くらい開けたらどうなのよ！」

陽子が口を尖らせた。

「バカヤロウ！　こんな蒸し暑い夜に窓なんか開けたら余計暑いじゃねーか！　ったく何の為のエアコンだよ！」

「何言ってんの！　だいたい未成年のクセにタバコなんか吸って、いったいどう言うつもりなのよ！　オマケにお酒まで飲んで！　それに部屋でタバコ吸うと壁紙が汚れるでしょ。間借り人なんだからもう少し考えてよね！」

あ～あ、また陽子の説教が始まった……。

俺は、わざとらしく耳を塞いだ。

「あーー、あーー、何も聞こえねーー！」

「何子供みたいな事やってんのよ！　全くバカなんだから」

陽子が呆れた様に笑った。

ーーこれだ！

同い年のこの俺を、まるで子供扱いして説教ばかり垂れやがる。

だからコイツは苦手なんだよ……。

愚痴りたい気持ちを堪えてる俺を他所に、陽子の表情が少し曇った。

「でも恭也が病気だって聞いて心配したけど、無事でホントに良かったわ。それに昨日は昨日で、恐い顔して慌てて行っちゃうんだもん。ホント心配したんだから……」

陽子の語尾が少し小さくなった。

ーーな、な、何だ？　急に……。

ーー急にしおらしくなりやがって、調子が狂うじゃねえかまったく。

「悪かったな。もう大丈夫だ……」

俺は気を取り直し、精一杯強がってみせた。

ーーホントは全然大丈夫なんかじゃねえ。

ーーそれどころか、これからもっとヤバい事になるかも知れねえんだ。

俺は、心の中で歯噛みした。

「でも……、いったい晶子は今頃何処に居るんだろう……。昨日も言ったけど、学校の周りで行方不明になってる人達がいっぱいいるって話だし……」

陽子は、不安げな表情で俺を見詰めた。

俺の心臓が“ドキリ”と跳ねる。

俺の中では、この件に関しては犯人も結末も分かってる事なんだが、陽子や周りにいる一般の人間に取っては、未だ全てが謎のままであり、何も終わっちゃいないのだ。

俺は、再び苦い現実を思い知らされた。

「さあな……。何か気味の悪い話だが、警察に捜索願い出してあるのなら警察に任せるしか無えんじゃねえの？」

俺は、吐きそうになる程の自己嫌悪を抱きつつ、引き攣る顔を何とか堪え素知らぬふりで言った。

ー心が痛え。

人に嘘を付く事が、これ程辛いと思ったのは初めてだ。

女を口説く為の嘘は、自分でも信じられないくらいスラスラと言えるのだが、どうもこう言う嘘は苦手だ。

それに昨夜までの事はある意味確かに決着を見たが、本質的な事はまだ何も解決しちゃいねえ。

それどころかこれから始まるんだ。

その為に俺はバイトを辞めたのだから……。

今朝、鉄二と別れた後俺は店の掃除を終え、昼過ぎにマスターの携帯へと連絡を入れた。

まだマスターは寝ていたが、手短に用件だけを話し、鍵を返す段取りを取り付けた。

近くの喫茶店で会い話をしたが、マスターは俺の辞める理由が嘘だって事を何と無く感じ取っている様だった。

俺のもう一つのバイトで、何か余程のトラブルがあったんじゃないかと心配してくれたが、俺は病気の一点張りで通した。

だけどさすがマスターは、商売柄ちゃんと心得ていて、一度は辞めると言う俺を止めはしたが、俺の気持ちが変わらないと知るとそれ以上何も聞かず辞める事を認めてくれた。

こうして俺は、店の鍵を返しその場を後にした。

別に後悔なんかしちゃいねえ。

久保のオッサンに言われたから決めた事じゃなく、昨夜一晩考えて自分で決めた事だ。

これからの事を考えると、確かに俺と接する人間が多ければ多い程、その分リスクが増えるのは間違い無い。

もうシゲのような犠牲者を出すのは沢山だ。

それにこの件は、キッチリ自分でおとしまえを着ける。

誰の手も借りねえ。

俺を気遣う爺や久保のオッサン達には悪いが、自分のケリは自分で着ける。

今までもそうやって生きて来た。

これからもそうだ。

誰かとつるむのは俺の主義じゃねえ。

それに俺が、爺達の言う通り本当にヴァンパイアや獣人以上の化け物なら、奴らをぶっ潰す事も可能な筈だ。

まあ途中でおっ死んじまっても後悔は無えがな……。

だがそん時は、一人でも多くのヴァンパイアを道連れにしてやる！

そう決めた。

だからバイトも辞めた。

本当は、今朝学校も辞めるつもりだった。

朝は学校へ行く途中で鉄二と会っちまったから仕方ねえが、昼過ぎにマスターと別れた後、学校へ退学届けを出しに戻らなかったのは、ただ何となく学校へ行くのが面倒になって明日に延ばしただけの事だ。

結局空いた時間をパチンコ店で潰し、散々負ける結果にはなっちまったがな……。

お陰で極貧と化した俺は、コンビニでタバコと晩飯の菓子パンを一個だけ買い、先程部屋に戻って来たのだ。

「恭也、さっきからあんた、何一人で考え込んでるのよ？」

陽子の声に、俺は現実へと引き戻された。

「あ、ああ。まあ色々と……な」

俺は少し慌てて答を返した。

「ふうん、恭也でも考え事するんだ」

また陽子が憎まれ口を叩きやがる。

「馬鹿にすんじゃねえ。俺だって考え事ぐらいするさ」

「珍しい事もあるもんね……。珍しいと言えば、さっきも言ったけど、あんた今日はバイト休みなの？　それに李のお爺ちゃんが、あんたが帰ったら部屋へ様子を見に行ってくれだなんて、いったいどうかしたの？　まだ具合でも悪いの？」

陽子が、心配そうな目で覗き込む。

「バイトは辞めた……」

「辞めた？　学校休んでも、バイトだけはあんなに張り切って毎日

行ってたのに……」

「学校休んでは余分だ。でもバイトは結構楽しかったし、金にもなったからな……」

「じゃあ何で辞めたのよ？　やっぱり具合でも悪いの？」

「いやそうじゃねえ。身体は至って健康そのものよ！　まあバイトを辞めたのは、一身上の理由ってやつかな」

俺は少し惚けた。

「何よそれ！　でもまあ良いわ。あんたいつも夜中や明け方に帰って来て、学校も行かず昼間寝てばかりいるんだもの。これでこれからはちゃんと学校に行けるわね！」

陽子が皮肉った。

「いや、俺……学校も辞めようと思うんだ……。それで近い内にこの部屋も出ようかと……」

そう言い掛けた瞬間、陽子が俺の話を遮った。

「ちょ、ちょっと恭也！　あんたいきなり何言い出すのよ！　学校辞めるって、しかもこの部屋を出て行くだなんて、いったいこれから先あんたどうするつもりなのよ！」

陽子が大声で叫んだ！

「ど、どうするって……。それはまた後で考えるよ……」

俺は言葉に詰まった。

理由なんて言える訳が無えし、この先どうなるかなんて俺にも分かりゃしねえ。

ただ今は、陽子や陽子の家族……、それに学校の連中が、今後この件に巻き込まれないようにする為にも、皆の側から離れるしか無えんだ。

「ちょっと、後で考えるって何言ってるのよ！　ちゃんと訳ぐらい言いなさいよ！」

ーー陽子のヤロウ、激怒して食い下がりやがって。

ーーオメエに理由が言える訳ゃねえだろ！

ーー少しは人の身になって考えやがれ！

俺は、腹の中で陽子の性格を呪った。

無論、俺を心配してくれるのは有り難いが、人には言える事と言えない事……、言いたくないって事がある事に何で気付かねえんだ！

ーーったくこのバカ女だきゃあ。

ーーだからO型の女は苦手なんだよ！

「あっそう！　理由も言えないんだ！　こんなに心配して上げてるのに、もう良いわ！　勝手にすれば良いのよあんたなんか！」

黙っている俺を怒鳴るだけ怒鳴り散らしり、陽子はすくっと立ち上がった。

怒りで目が吊り上がってる。

「もう知らない、バカ！」

そう捨て台詞を残し、陽子は“ズカズカ”と足音を立て部屋を出て行った。

ーーったく、あの女だきゃあ俺より短気なんだから始末に負えねえぜ。

俺は、飲みかけのジムビームを一気に煽った。

口から喉、そして胃へと熱い液体が駆け巡る。

俺は大きく息を吐くと、再びタバコに火を点けた。

ゆっくりと紫煙を吐き出す。

その時、テーブルの上に置いてあった携帯の着信ランプが点滅している事に気が付いた。

今日は誰からの電話も受ける気がしなかった為、着信音もバイブも切ったままにしてあったのだ。

俺は携帯を手に取ると、サブディスプレイに浮かんだ発信者の名前を確認した。

そこには『マスター』の文字が浮かんでいる。

マスターとは、無論今日辞めたばかりの『ヘブンズ・ドア』のマスターの事だ。

俺は、無視しようと携帯をテーブルに戻しかけたが、何故か一向に切れる気配が無い。

俺は、嫌な予感がして怖ず怖ずと電話に出た。

『もしもし、恭也か？　俺だ！……』

電話の向こう側で、マスターが慌てた様子で叫んだ。

「もしもし、何かあったんスか！」

俺の動悸が速まって行く！

マスターの焦り方は尋常じゃない。

『恭也か！　テッちゃんがヤバイんだ！』

「鉄二が？」

『そうだ。ついさっきお前を訪ねて来た男がいたんだが、それがいかにもヤバそうな男で……』

「ヤバそう？　筋モンか？」

そう言いながらも俺の勘は、別の者だと告げている。

『いや、あれは筋者とは少し違う。だがとにかくヤバそうな男なんだ。それでテッちゃんが店に来て、そいつと二人で店を出て行ったんだ！』

「何だって！」

俺の心臓が“ドキリ”と跳ねた。

血液が逆流した様だ。

『店の外へ出てみたら、テッちゃんのバイクは置いたままで、テッちゃんもその男の姿も見えないんだ！』

ーーヤバイ、ヤバイぞ！

「それで、その男の特徴は！？」

『片目だ。片目の男だ！』

それを聞いた瞬間、ハンマーで頭を殴られた気がした。

ーーあの男だ！

ーー昨日ゾンビと化したシゲやショウを殺し、獣吾と闘っていたヴァンパイア……柳生十兵衛だ！

ーーアイツが、この俺を捜しに来たんだ！

ーーそれを知った鉄二が、シゲの仇を討つ為に十兵衛を連れ出したんだ。

ーーあの馬鹿！

俺は唇を噛んだ。

『恭也、聞いているのか！』

電話の向こう側でマスターが叫んでいる。

「とにかくすぐ行く！」

そう言って俺は携帯を切り、そのまま部屋を飛び出した。

外はまだ雨が降っている。

俺は愛車のＶ－ＭＡＸに飛び乗ると、メットを被るのも忘れ、雨の中へとバイクを走らせた。

3

3

俺は、『ヘブンズ・ドア』の前に到着した。

今日辞めたばかりなのにひどく哀愁を感じる。

しかも今朝来たばかりなのだ。

やはりマスターが電話で言った様に、鉄二のバイクが入口の脇に止められたままになっていた。

辺りに鉄二や十兵衛の姿は見当たらない。

俺は、慌てて地下に駆け降りると、勢い良く扉を開けた。

「マスター！」

店に入るや否や、俺はマスターを呼んだ。

驚いた客達が、一斉に振り返る。

見知った顔ばかりだ。

店を辞めたばかりで、どう挨拶すれば良いのか分からねえ。

それに今は、そんな事考えてる余裕も無え。

「チィッス」

俺は、取り敢えず軽く頭を下げた。

客達も事情は分かっている様で、俺に軽く挨拶を返すだけで誰も話し掛けて来ない。

すると俺を待っていたマスターが、カウンターの中から飛んで来た。

「恭也、テッちゃんが店を出たのはまだ１０分程前だ。お前も見ただろうが、バイクはまだビルの前に止めたままだからそう遠くへは行っていない筈だ！」

マスターが早口で言った。

「分かってます。で、奴ら何か言ってませんでしたか？」

「片目の男は、誰から聞いたのかお前がウチでバイトしていたのを知っていて、お前を訪ねて来たんだ。それでお前が辞めた事を伝えたら、お前の住んでいる場所や携帯番号を教えろと言ってきた。俺は教えられないと言ったんだが、そうしたらいきなりテッちゃんがやって来て……」

「それで、どうしたんスか？」

「テッちゃんは、そいつがお前を捜してる事を最初から知ってたみたいで、『恭也を捜してるのはお前か？』って言って、すぐにその男を連れ出したんだ！」

ーークッソーッ！　鉄二の馬鹿が！

俺は唇を噛んだ。

「で、その男は一人だったんスか？」

俺は慌てて尋ねた。

「一人だ。それは間違いない。お前、その男に心当たりがあるのか？」

マスターが、心配そうに言った。

「ある！」

俺は短く答えた。

「それで、他に何か気付いた事は無いんスか？」

「残念だがそれだけだ……」

マスターは申し訳無さそうに言った。

ーークッソーー、それじゃあ手掛かりが無さ過ぎる……。

考えに考えた末、俺は或事に閃いた。

「マスター、鉄二も一人でしたか？　それに、鉄二は何か“道具”とか持ってませんでしたか？」

ここで言う“道具”とは、無論“武器”の事だ。

「いや、一人だったし“道具”は持っていなかった筈だ」

“道具”の意味が分かるマスターは、鉄二の様子を思い出しながら答えた。

ーー鉄二は、明らかに片目の男＝十兵衛がヴァンパイアだと気付いている。

ーーだからこそ、仲間を巻き込まないよう一人で来た筈だ。

ーーしかし俺からヴァンパイアの話を聞いている以上、何の用意も無く十兵衛を連れ出したとは思えない。

ーーしかし腕に自信がある鉄二は、普段武器を持ち歩く事がない。

ーーならば、当然奴は武器を取りに行く筈だ。

“！”

そこまで考えて、俺は“ハッ”と気が付いた。

ーー鉄二達がいつもアジトにしているボウリング場だ！

ーーあそこならここからも近いし、誰の邪魔も入らない。それに喧嘩用の“道具”も豊富に隠してある。

ーーしかも今夜は雨が降ってるから、他のメンバーが居る心配も無い。

「サンキュー、マスター！」

「オ、オイ、恭也！」

俺は、マスターに一言礼を言うと、慌てて呼び止めるマスターを無視して、そのまま店を飛び出した。

店を出てバイクに飛び乗ると、潰れたボウリング場へとバイクを走らせた。

ー昨日の今日でまたコレか。いったいどうしてこうなるんだ！ったく！

俺は一人毒づくと、降りしきる雨の中、更にアクセルを全開に開いた。

4

4

鉄二と十兵衛は、降りしきる雨の中、彼我の間合いを取り対峙していた。

『ヘブンズ・ドア』から少し離れた場所にある、倒産したボウリング場の駐車場の脇だ。

ここは鉄二達『ブラッディ・クロス』の溜まり場になっている。

先程富川達が集合を掛けていた場所も此処だったが、今は誰の姿も残っていなかった。

実際何人集まったのかは分からないが、これだけ雨が降っていれば、鉄二が解散を命令した時点で即解散したか、或いは全員で他の場所に移動したに違いない。

少なくとも今は、鉄二と十兵衛の二人だけであった。

ボウリング場の壁は、『ブラッディ・クロス』のメンバー達の手で落書きが施されており、しかも殆どの窓ガラスは割られ廃墟の様相を呈している。

無論電気等は通っておらず、駐車場に面した道路の街灯が、二人を淡く照らし出していた。

手ぶらだった筈の鉄二が、今は右手に太い金属バットを握っている。

此処は『ブラッディ・クロス』の集合場所であると同時に、喧嘩の為の武器の隠し場所にもなっているのだ。

建物の中には、鉄パイプや木刀等の武器がまだ豊富に隠されている。

鉄二が、この場所へ十兵衛を連れて来た一番の理由がこれであった。

幾ら鉄二が強くても、武器も持たずヴァンパイアと闘う程愚かではない。

だから武器の隠してある自分達のアジトへと十兵衛をおびき出しのである。

しかしそのような事は、当然十兵衛も予測していた。

この鉄二が、先程『ヘブンズ・ドア』の事を聞き出した不良達の仲間ならば、鉄二の行く先に仲間の不良達が徒党を組んで待ち構えているであろう事は予測の範疇である。

だが十兵衛は、この状況を楽しんでいた。

最も十兵衛にとって、武器を持った不良達が何人居ようとも何ら問題ではない。

最初から事を荒立てるつもりは無いが、最悪の場合全員叩きのめした後、一人づつ順番に御子神恭也の事を聞き出せば良いのだ。

しかも、御子神恭也が仲間であるなら、その場に来ているかも知れない。

そうすれば捜す手間が省けると言うものだ。

十兵衛はそう踏んでいた。

だが、その意味で十兵衛の予測は大きく外れた。

十兵衛が着いた先には、御子神恭也は疎か、誰ひとり居なかったのである。

そう言った意味で、十兵衛は驚いていた。

十兵衛が只者でない事は、先程『ヘブンズ・ドア』の事を聞き出した仲間から聞いて知っている筈だ。

なのにこの鉄二独りだけとは、余程自分に自信が有るのか、または余程の愚か者としか言いようがない。

十兵衛は、値踏みする様な目で鉄二の顔をしげしげと見詰めた。

「他に仲間が居るのかと思ったら、貴様ひとりか？」

辺りを見渡し十兵衛が言った。

この時、十兵衛は既に傘を閉じている。

鉄二と同様ずぶ濡れだ。

「テメエ、ヴァンパイアだろ」

鉄二は、凄まじい形相で十兵衛を睨み付けながら“ぞろり”と言った。

一瞬、十兵衛は自分の耳を疑った。

この雨のせいで聞き間違えたかと思ったのだ。

「何！　貴様今何と言った？」

怪訝な表情で十兵衛が聞き直した。

「聞こえなかったのか？　テメエはヴァンパイアかと聞いたんだよ！」

鉄二が大声で怒鳴った。

十兵衛は、今度こそ本当に驚いて残った目を見開いた。

「貴様、何故それを？」

十兵衛が叫んだ。

「んな事はどうでも良いだろが！」

鉄二が怒鳴る！

「小僧、貴様それを知っていながら、俺を此処へ連れて来たのか？」

「テメエを恭也に会わせる訳には行かねえからな」

「ふうむ……。やはり御子神恭也の知り合いか……」

十兵衛は、今更ながらに納得した表情を浮かべた。

「だがそれにしても腑に落ちん。貴様は俺がヴァンパイアだと言う事を知っていて、それでも尚俺を此処へ連れて来た理由は何だ？御子神恭也に会わせぬようにするなら、他に幾らでも方法があるだろうに……」

「ケッ、まだ分からねえのか。テメエを殺る為だよ！」

鉄二が吠えた。

鉄二から凄まじい殺気がうねる。

「俺を殺るだと？　フン、笑止な。貴様如き小僧が俺を殺れるとでも思ったか。それに、貴様にとって御子神恭也は、命を懸ける程の大切な存在なのか？」

十兵衛は、鉄二の殺気をさらりと受け流し言った。

「ああ、大切なダチだ……。だがそれだけじゃ無え。テメエらヴァンパイアは、シゲの仇なんだよ！」

「シゲ？」

十兵衛は怪訝な表情を浮かべた。

「誰だ？　それは……」

十兵衛が訊ねる。

「シゲはなあ、テメエらの仲間に殺されて、ゾンビにされちまった俺のダチだ。何日か前に、恭也を呼び出す為に誘拐されたシゲは、そのままテメエらの仲間に生き血を吸われてゾンビにされちまった。ところが昨日、此処から少し離れた廃ビルで、他にもゾンビにされた連中や、シゲをゾンビに変えたヴァンパイアと共に、テメエらの仲間に殺されたんだよ。二度だぞ！　二度もシゲはテメエらヴァンパイアに殺されたんだ！」

鉄二の殺気が爆発した。

「そうか……。昨日のゾンビは貴様の仲間だったのか……」

「何！？」

鉄二の眉がピクリと跳ね上がった。

「昨日、あの廃ビルでその者達を斬ったのは俺だ」

十兵衛は、“ぞろり”と言った。

「テメエが……、テメエがシゲを殺ったのか！」

鉄二は、激しい怒気と共に、持っていた金属バットを振り被り十兵衛に襲い掛かった。

十兵衛が“ひらり”と身をかわす。

鉄二の金属バットが、唸りを上げて空を切った。

だがそこには、既に十兵衛の姿は無い。

「チィィッ！」

再び鉄二がバットを振り被る。

「この野郎ーーっ！」

鉄二は、更に十兵衛の頭頂部を目掛けて、バットを二度・三度と繰り返し振り下ろした。

だが、十兵衛にその様な攻撃が当たる筈が無い。

四度目にバットを振り落とした時、バットの先が地面を叩き激しい金属音を立てた。

“グアッ！”

地面を叩いた衝撃で手が痺れ、鉄二は思わず金属バットを放した。

鉄二も、この様な大振りの攻撃がヴァンパイアである十兵衛に当たるとは思っていない。

だが恭也から聞いていた、ヴァンパイアの弱点である頭部を狙う以外、勝ち目は無いと考えたのだ。

「ヘッ、やっぱ当たんねえか」

鉄二は、地面に唾を吐いた。

口の中にアドレナリンの味が広がる。

鉄二は、地面に転がったバットを拾う事なく、両腕を持ち上げて構えた。

両脇を締めた状態で、両腕の拳を目線の高さに上げ、爪先立ちになりながら片膝を曲げてリズムを取る。

それを見た十兵衛は、“ホウ”と声を上げた。

構えを見ただけで、鉄二の実力を読み切ったのである。

先程の攻撃も、あまりに大振りな攻撃ではあったが、振り落とされた金属バットのスピードたるや尋常なものではなかった。

しかも反応が早い。

ヴァンパイアである十兵衛にとってかわすのは造作もなかったが、当たれば頭蓋骨を粉砕される程の威力は秘めており、しかも十兵衛でなければ掠るぐらいはしていたかも知れない。

ーフッ、この小僧……、たかが不良と思っていたが……“ヤル！”

十兵衛は“ニヤリ”と不敵な笑みを浮かべた。

「面白い小僧だ」

十兵衛は、そう一言漏らすと、持っていた傘を手放した。

「何のマネだ、そりゃ？」

更に鉄二の表情が険しくなった。

「相手をしてやろうと言うのだよ。俺が夜の眷属である事を知っていながら向かって来るとは、小僧ながら見上げた度胸だ！」

十兵衛も、腰を落とし身構えた。

「行くぜ！」

鉄二はそう叫ぶと、十兵衛に躍り掛かった。

彼我の距離が一気に縮まる。

鉄二は、素早い左ジャブの連打を繰り出した。

しかし十兵衛が、頭を振って紙一重でかわす。

次の瞬間、鉄二が右のローキックを放った！

腰の入った素早い蹴りだ。

だが十兵衛は、僅かに左脚を上げ、難無くそれをガードする。

だが鉄二の右脚は、十兵衛にガードされた瞬間に軌道を変え、そのまま上段の回し蹴りへと変じた。

唸る様な蹴りが、十兵衛の側頭部を襲う。

直撃すれば、ヴァンパイアでさえ昏倒しかねない程の蹴りだ。

しかし十兵衛は、その蹴りすら完璧に見切り、打撃を喰らう寸前で頭を後ろへスェーしてかわした。

十兵衛の目前を、鉄二の右脚が吹き抜ける。

蹴りをかわされた鉄二は、一瞬十兵衛に背を向ける恰好になったが、そのまま勢いを殺さず、右足を地面に着けた瞬間身体を捻り、十兵衛の腹部へと後ろ蹴りを放った。

凄まじい連続技だ。

しかし十兵衛は、咄嗟に後ろへ跳んで蹴りをかわした。

再び彼我の距離が広がる。

ーー何でコイツは手を出さないんだ?

ーー俺を馬鹿にしてるのか?

鉄二は、悔しさに歯噛みする思いだった。

しかし、さすがはヴァンパイアだ。

鉄二の連続攻撃が掠りもしない。

鉄二は、実戦空手を標榜する『極武会空手』で二段まで行った程

の腕前だ。

最も空手自体は以前に辞めしまったが、最近はチームのＯＢの先輩が通っているキックボクシングのジムで、時々練習をさせて貰っている。

しかもジムのオーナーからは、プロデビューしないかと誘われる程の実力だ。

実際そのジムの中では、鉄二と互角に渡り合えられる選手は皆無だった。

「テメエ、俺から恭也の事を聞き出したいなら、俺を殺す気で来やがれ！」

鉄二が叫んだ！

明らかに十兵衛を挑発している。

「愚かな……。見所のある小僧だと思って手を出さずに来たが、貴様の口を割らせる方法なら幾らでもあるのだぞ」

そう言った瞬間、十兵衛の奥に潜む“恐い”モノが、“ぞわり”と顔を覗かせた。

鉄二は、“ゴクリ”と生唾を飲んだ。

十兵衛が、凄まじいスピードで鉄二に襲い掛かる。

「チィィィッ！」

鉄二は、咄嗟に右ストレートを放った！

鉄二の反射神経も並ではないが、十兵衛のスピードとは比べ物にならない。

十兵衛は、最小限の動きで鉄二の突きをかわした。

“ぞくり”

鉄二の背に冷たい物が走る。

鉄二が突き出した腕を戻すより速く十兵衛は大きく一歩踏み込むと、鉄二との間合いを０（ゼロ）にした。

十兵衛が、瞬時に鉄二の背後へと回り込む。

その瞬間、十兵衛は鉄二の左腕を後ろ手に極め、首に腕を回した。

鉄二の左肩に激痛が走る。

鉄二は、全く身動きが取れなかった。

圧倒的なまでのスピードとパワーの差だ。

「どうした？　仲間の敵討ちをするのじゃなかったのか？」

十兵衛が、鉄二の耳元で囁いた。

“グッ”

鉄二が苦痛に呻く。

「さあ、これで我が眷属とお前達人間との力の差が分かっただろう。観念して、御子神恭也の居場所を教えて貰おうか」

「だ……、誰が教えるものかよ！」

「言わねば腕が折れるぞ」

「腕なんて生易しい事言ってねえで殺したらどうだ！」

鉄二が、苦痛に喘ぎながら叫んだ。

「それ程、御子神恭也が大事か？　ならば致し方ない……」

そう言った瞬間、十兵衛の瞳が血の色に染まった。

『誘眼』だ。

だがその時、鉄二は、右足の踵で十兵衛の足の爪先を踏み抜いた。

“グアッ”

十兵衛が初めて苦痛を漏らす。

足の爪先は、人間の鍛えられない急所の一つであり、それはヴァンパイアとて同じだ。

更に鉄二は、自由な右手でズボンのポケットからナイフを取り出

すと、首を絞めている十兵衛の右腕へとナイフを突き立てようとした。

最初この場所に着いた時、武器の隠し場所から金属バットを持ち出した際に、ひそかにナイフも隠し持っておいたのである。

だが腕に刺さる筈のナイフは、十兵衛の手によって途中で握り止められていた。

「ふふふ、危ない小僧よ……」

十兵衛は不敵に笑った。

最早ナイフはピクリとも動かない。

ナイフの刃の部分を握った十兵衛の手から、少し黒みを帯びた血が滴り落ちていた。

「こんな物を隠し持っていたとはな……」

十兵衛は手の痛みも省みず、力づくで鉄二の手からナイフをもぎ取ると、“ぽい”と地面に投げ捨てた。

ナイフが地面に当たり固い金属音を立てる。

再び十兵衛は、鉄二の首に腕を回した。

雨が、十兵衛の掌の血を洗い流して行く。

だがその血液も、見る見る内に止まって行った。

ーーこれが、ヴァンパイアの能力か。

今朝恭也から見せられたばかりだが、改めて見ると凄まじい物がある。

十兵衛の反射神経、スピード、パワー、そのどれもが鉄二の想像を超えていた。

「さあどうする小僧。大人しく御子神恭也の居所を教えるか？」

十兵衛が言った。

その時、凄まじい勢いで近付くバイクのエンジン音が、夜気を切り裂き轟いた。

“　！”

“　！”

鉄二と十兵衛は、殆ど同時に通りの方へ目を遣った。

見ると、一台のバイクが鉄二達を目掛けて猛スピードで近付いて来るところであった。

そのバイクと乗っている人物を鉄二は良く知っている。

「恭也ーー、来るなーーっ！」

鉄二は、大声で叫んだ。

5

5

徐々にボウリング場の建物が見えて来た。

スピードの出し過ぎのせいもあるが、飛礫と化した雨のせいで、目は満足に開けてられねえし、肌を露出している部分が痛えったらありゃしねえ。

ーーったく鉄二の馬鹿タレが、今朝あれ程言ったのに、勝手に暴走しやがって！

ーーとにかく運良く無事だったら、ぜってぇぶん殴ってやる。

ーー運良く無事だったら……、

ーークソッ！

ーー絶対生きてろよ！

ーー俺の事なんか何も隠す事無え。

ーーそれで命が助かるんなら、女の好みでもチ○ポのサイズでも、ある事無い事みんな喋っちまえ！

そんな事を考えてる内に、ボウリング場の駐車場が視界に入った。

駐車場の隅に二つの人影が見て取れる。

どうやら二つの人影が揉み合っているらしい。

一方の黒い革ジャンを着た男を、もう一方の黒い詰め襟の上下を着た男が、後ろ手に肩の間接を極め、更に後ろから首に腕を廻しスリーパーホールドを掛けている様に見える。

やられてるのは、どうやら鉄二の方だ。

しかも鉄二にスリーパーを掛けているのは、やはり昨日獣吾と闘っていた柳生十兵衛の様である。

街灯のみの明るさで、しかも雨で視界が悪いに関わらず、この位置からそこまで見えるとは、やはり視力が増している様だ。

俺は、自分の能力に唾棄したくなる気持ちと同時に、鉄二が無事であった事に安堵を覚えた。

「鉄二ーーーっ！」

俺は大声で叫ぶと、更にアクセルを開いた。

けたたましいエンジン音に気付いたのか、二人の意識がほぼ同時にこちらへ向く。

「恭也ーー、来るなーーっ！」

鉄二が叫んだ。

ーー何が“来るな”だ！　このバカ野郎！

俺は、鉄二の制止を無視してボウリング場の駐車場へバイクを乗り入れると、そのまま鉄二達に目掛けて突っ込んだ。

二人を跳ね飛ばす勢いで突っ込んだ俺は、ハンドルを切りながら車体を目一杯倒し、前後のブレーキを思い切り掛けた。

この雨でバイクが滑るが、左足を地面に着けて何とか踏み止まる。

バイクは、二人のニメートル程手前で止まった。

「鉄二、大丈夫か？」

俺は叫んだ。

「恭也……」

力の無い声で鉄二が呼ぶ。

「お、お前は昨日の……」

十兵衛が、驚きに満ちた眼で呻く様に漏らした。

俺は、バイクを立て直してギアをニュートラルに入れると、スタンドを下ろしバイクから降りた。

「お前が御子神恭也だったとは……」

そう言って十兵衛は、しげしげと俺の顔を見詰めた。

そして何を思ったのか、鉄二の首に廻していた腕を解き、後ろ手

に極めていた左腕も放し鉄二を解放した。

鉄二の身体が自由になる。

「さあ行け」

十兵衛は、鉄二の背中を軽く押した。

「テメエ……」

鉄二は、よろめきながら前へ出ると、後ろを振り返り十兵衛の顔を見た。

十兵衛が頷く。

「こうして御子神恭也に会えた以上、もう貴様には用が無い」

十兵衛が言った。

それを聞いた鉄二が、バツの悪そうな顔で俺に歩み寄った。

俺は、鉄二が無事だった事への安堵感からか、鉄二に対する怒りが、無性に込み上げて来た。

“バゴッ！”

鉄二の左頬に、俺は拳をぶち込んだ。

鉄二が、濡れた地面に音を立てて転がる。

「このバカヤローが！　　もうこの件にも、俺にも関わるなと今朝言ったばかりだろうが！」

俺は声の限りに怒鳴った。

“ペッ”

倒れた鉄二が、地面に唾を吐いた。

血に染まった赤い唾に白い歯が混じっている。

鉄二は、手の甲で唇の血を拭った。

能力が増している為にわざと手加減したつもりだったが、やはりパワーが上がってる様だ。

だが無理に手加減したせいで、全然スッキリしねえ。

「立て鉄二！」

俺は、鉄二を立たせようと胸倉を掴んだ。

「その男を責めるな」

十兵衛が言った。

「ああっ？」

俺は、十兵衛の方へ目を遣った。

「その男を責めるなと言ったんだ」

「何だとう！」

「その男は、俺がヴァンパイアだと知っていながら、お前を守る為に命懸けで俺に向かって来たのだぞ」

「んな事は、テメエに言われなくても分かってんだよ！」

ーー分かってる。

ーーそんな事は最初から分かってるんだ。

ーーただ俺は、俺に何も言わず十兵衛を闘った鉄二の迂闊さと、鉄二までも巻き込んじまった俺自身の不甲斐無さに腹を立てているんだよ！

ーー関係無えシゲを巻き込み、そのシゲを救う事さえ出来なかった俺を命懸けで守ろうとした鉄二が、憎い訳無えだろうが！

俺は、再び鉄二を見た。

鉄二は黙っている。

「殴ったりして悪かったな……」

俺は、鉄二の胸倉から手を離すと、その手を鉄二に差し出した。

鉄二が、俺の顔を見ながら差し出した手を握り返す。

俺は、そのまま鉄二を引き上げた。

「鉄二……」

鉄二が真っ直ぐ俺の目を見詰めている。

「恭也……、すまない……」

鉄二は、そう漏らすと伏し目がちに俯いた。

「だが無事で何よりだぜ。テメエにまで死なれたら堪ったもんじゃねえからな」

俺は、湿っぽい雰囲気を少しでも紛らわそうとふざけた口調で言った。

「済まない……」

一言そう漏らすと、鉄二が、厳しい表情で十兵衛へと視線を移す。

「テメエ、何故俺に手を出さなかった?」

鉄二が聞いた。

「俺は、その男の居場所を知るのが目的だっただけだ」

十兵衛が俺を指差した。

「俺が恭也を売るとでも思ったのか? それに、前にテメエらの仲間がやった様に、俺を人質に取って恭也をおびき出すって手もあっ

た筈だ！」

尚も鉄二が食い下がる。

「人質？　愚かな事を……。俺は貴様の仲間を人質に取るような薄汚い外道とは違う。決してその様な卑怯なマネはせん。それに俺は、最初からその男の居場所さえ聞き出せれば、貴様や他の人間に危害を加えるつもりは無かったのだ。だいたい今も、貴様が手を出して来なければ争う必要も無かったのだぞ」

十兵衛が言った。

「じゃ、じゃあ何が目的で、テメエは恭也を捜してたんだ？　恭也を殺る為じゃねえのか？」

「俺はただ、ある御方の命令でその男を捜していただけだ」

ーーある御方だ？

俺は十兵衛の言葉に引っ掛かった。

「誰だそれは？」

俺は十兵衛に尋ねた。

「それはまだ言えぬ。それに、その御方に命じられた事も確かだが、俺自身恭介殿の息子に会ってみたかったのよ」

ーー何？

「テメエ、俺の親父と知り合いなのか……？」

十兵衛の意外な言葉に、俺は驚きを隠せなかった。

「無論だ。お前の父親の恭介殿とは、旧くからの知り合いだった……。良く見れば恭介殿の面影がある……。まさかその恭介殿の息子が、昨日ビルに飛び込んで来た小僧だったとは、正直驚いたぞ」

十兵衛は、どこか懐かしむ様な表情で言った。

「テメエがシゲやショウを殺ったんだな？」

「ああそうだ。可哀相だが、一度生き血を吸われゾンビと化した者を救う手立ては何にも無い。しかもゾンビと化した者の魂は、骸に捕われたまま永遠に成仏する事が出来ず、激しい飢えと苦しみの中で生者の肉を求めながら、自らの身体が腐り朽ち果てるまでさ迷い続ける生きた屍なのだ。ならば、一刻も早く成仏させてやる事こそ、その者にとっての救いなのだ。それに、あの飯沼昭二とか言う外道は、我々の掟を破り罪も無い人間の生き血を吸った……。当然許す事は出来ぬ。だから俺が斬り捨てたのよ」

十兵衛が吐き捨てる様に言った。

話してる最中で、どうやら昨日の事を思い出したらしい。

「じゃあテメエは、ゾンビとなっちまったシゲを救う為ばかりか、シゲの仇まで討ってくれたって言うのか……？」

鉄二が、俺達の会話に割り込んだ。

「敵討ちをした訳ではないが、まあ結果的にはそう言う事になるかな？」

十兵衛が言った。

「別に頼んだ訳じゃねえ。それに、ショウの奴は俺がブッ殺すつもりだったんだ。それを余計なマネしやがって」

俺は忌ま忌ましげに言った。

「それは済まなかった。だがこれも仕事の内でな」

十兵衛がさらりと言いやがった。

「ケッ、ムカつく野郎だぜ」

俺は地面に唾を吐いた。

「それより先程の話だが、さる場所にお前に会いたがっておられる御方が居る。今からそこへ同行しては貰えぬか？」

「もし嫌だと言ったら？」

「別に危害を加えると言うのではない。その御方はお前に是非会いたいと言っておられるのだ。それに俺も、お前とゆっくり話をしたいのでな……」

「……」

俺はしばし考えた。

ーー俺に会いたいだと？

ーー会いたいなら自分から来いってんだ。

ーーそれに、危害を加えるつもりは無えなんて言ってやがるが、ハイそうですかと信じる程俺はマヌケじゃねえ。

ーー……。

ーーだが行けば、コイツらの親玉に会えるかも知れねえし、考えようによっては、これはコイツらのアジトを知るチャンスかも知れねえ。

ーーコイツらが約束を破ってちょっかいを出して来やがったら、コイツらの親玉をブッ殺せば済む事だ。

ーーどうせ何時かはそうするつもりでいた事だし、この際誘いに乗ってやるか……。

そう考えた時、十兵衛が声を掛けて来やがった。

「馬鹿な事は考えぬ方が身の為だぞ」

ーーゲッ、見抜かれてやがる。

「馬鹿な事？　べ、別に何も考えちゃいねえよ……。まあ俺も暇だし、仕方ねえから暇潰しに行ってやるよ……」

それを聞いた十兵衛が笑った。

それまで黙っていた鉄二が、恭也の胸倉を掴んだ。

「馬鹿なマネは止せ！　行っても無事に帰れる保証は無えんだぞ！」

鉄二が慌てて止める。

「心配するな。それにいつかはこう言う時が来とハナから分かってた事だ……。それがたまたま今日になっただけだよ」

俺は鉄二に諭す様に言った。

「恭也……」

「それが俺の宿命なんだよ」

俺は、鉄二の顔をじっと見詰めた。

「なら俺も行く。そんな危ねえ場所へ、オメエ独り行かせる訳には行かねえからな！」

鉄二が言った。

「馬鹿かテメエは！　あれ程言ってもまだ分からねえのか」

俺は怒鳴った。

「駄目だ！俺も一緒に行くぞ！」

ーーこの馬鹿が！

俺は、鉄二の腹へパンチを喰らわせた。

“グェッ”

鉄二は低く呻くと、その場に崩れ落ちた。

気を失い、腹を抱えたまま地面に横たわっている。

「悪く思うなよ。これ以上テメエを危険に曝す訳にゃあ行かねえんだ」

気を失った鉄二をそのままに、俺は十兵衛へと視線を戻した。

「さあ行こうか」

俺は、黙って俺達のやり取りを見ていた十兵衛に声を掛けた。

「良いのか？」

十兵衛が応える。

「ああ。だがその前に電話を掛けさせてくれ。このままにしといたら、コイツが風邪を引いちまうからな」

そう言って、俺はジーンズのポケットから携帯を取り出した。

携帯はびっしょりと濡れていたが、運良く最近機種変更したばかりの防水携帯だった為に、どうやら支障は無い様だ。

俺は、アドレスから『ヘブンズ・ドア』のマスターの電話番号を呼び出すと、おもむろに発信ボタンを押した。

ーー今夜も長い夜になりそうだな……。

俺は、マスターが電話に出る迄の間、呼び出し音を聞きながら空を仰ぎ呟いた。

一面深い雲が覆った夜空からは、未だ大粒の雨が降り注いでいた。

第十二章1：魔城

第十二章
『魔城』
1

闇が強調された部屋であった。

二本の燭台に燈された明かりのみが、部屋の中を薄暗く照らし出している。

その為に部屋の隅に蟠った闇が、色濃く沈着している様だ。

闇御前の茶室である。

床に設けられた囲炉裏には、いつもの様に南部鉄瓶が下から火で炙られ白い湯気を立てていた。

蝋燭の火が、三人の男を不気味に映し出している。

一人は闇御前だ。

深い皺に影が溜まり、その表情を窺い知る事が出来ない。

闇御前は、きっちりと正座して上座に座っていた。

闇御前と対峙する様に、二人の男が座っている。

二人とも、六十代半ばを幾らか過ぎた初老の男だ。

二人とも恰幅が良く、頬の肉が弛んでいる。

顔の表面に浮いた脂が、蝋燭の炎でてらてらと照らされ、鈍い光沢を放っていた。

二人共、テレビや新聞等で良く見る顔だ。

一人は、現役の第九十三代内閣総理大臣、梶浦征太郎である。

もう一人は、梶浦の盟友で現法務大臣の大八木寛だ。

梶浦政権は、現在支持率が１０％を割り込み最悪の状態となっていた。

更にアメリカに単を発した世界同時不況の煽りを受け、目立った打開策も打ち出せない為に株価や土地価格の下落、失業者や自殺者の増大を止める事が出来ず、支持率の低下に拍車を掛けていた。

そこへ閣僚の不祥事や政治と金の問題が浮上し、噂されている総理大臣の辞任と内閣の解散及び総選挙の話題が現実味を帯びて来ている。

ただ今の支持率では、与党が再び政権を取るのは難しく、その為に総選挙を先延ばしている事は、誰の目にも明らかであった。

法務大臣の大八木も、この度施行される裁判員制度の見直しや、警察官の不祥事、更には政治献金の捜査での検察の取り組み方が問題として取り沙汰され、世間の衆目を集めている真っ最中である。

二人は、脂ぎった顔に冷汗を浮かべ、困惑した表情で闇御前の顔

を凝視していた。

「そのような事を申されましても、高野山は世界遺産にも登録されている重要文化財で、人口四千人以上の宗教都市ですぞ。僧侶の数だけでも千人を越します。そのような場所を襲撃される事など、幾ら御前様のご命令であっても承服致しかねますぞ」

梶浦は、額の汗をハンカチで拭いながら言った。

驚きと恐怖がないまぜになった表情で、仕切りに汗を拭っている。

それもその筈だ。

闇御前は、高野山を襲撃するから黙認するだけでなく、自分達の存在が表に出ないよう警察やマスコミを含め隠蔽工作をしろと言っているのだ。

幾ら闇御前の権力が絶大であっても、これはあまりに無理な申し出である。

暴挙などと言う生易しいものではない。

「勘違いをしては困ります。私はお前達に承諾を求めているのではありません。これは命令なのですよ」

闇御前は、このとんでもない申し出を、至極当然と言った口調でさらりと言って退けた。

「しかしそうは言われましても……」

梶浦は、承服する事が出来ず言い澱んだ。

「それに何も、お前にやれと言っているのではありません。ただ事が終わった際に、宿泊客の失火が原因で高野山全体が山火事となり、僧侶や宿泊客、並びに関係者や町人数千人程度死亡したと言う事にしてくれれば良いのです。それに必要な資金や人員はこちらで用意します。お前達は、それが正式な見解であるとして公式発表をし、警察の統制やマスコミを誘導してくれれば良いのです」

「そうは申されましても、我が国は法治国家で言論の自由も認められております。それに先程も申し上げました通り、高野山は世界遺産にも指定された重要文化財でありますれば、世界からの注目も高く、全てを隠蔽するのは大変困難かと……」

梶浦は恐る恐る言った。

「黙りなさい」

闇御前はぴしゃりと言った。

“ひぃっ”

梶浦は小さく悲鳴を上げて怯えた。

「隠蔽の方法など、そのような事はお前達が考えれば良い事です。その為の資金や人員は提供すると言っているのですよ。それで出来ぬと言うのであれば、我々はお前達を政権の座から引きずり落ろし、新民生党を政権の座に就けるだけの事です。丁度十八年前と同じ様に……」

「御前！」

「御前様！」

梶浦と大八木は、慌ててほぼ同時に声を上げた。

「それに、この話を聞いて断ると言うのであれば、お前達をこのまま捨て置く訳にも行きませんね……」

闇御前は、殊更押し殺した声で“ぞろり”と言い放った。

“！？”

“！？”

最早二人共、恐怖で声も出ない様だ。

ただただ顔を恐怖に引き攣らせ、滝の様な冷汗をだらだらと流し続けている。

小心者の大八木は、呼吸すら満足に出来ない様であった。

「さあどうしますか？　お前達の内閣は既に死に体ですが、私に力を貸して与党の座に居座り続けるのか、それとも政権も政治家としての生命も投げ出し、我々の餌となって醜い屍と化すか、お前達の良い方を選択しなさい」

闇御前がきっぱりと言った。

闇御前の殺気に反応したのか、蝋燭の炎がゆらゆらと揺らめき、

闇御前の顔を更に不気味に映し出している。

「分かりました。仰せの通りに致します」

そう言って、二人は頭を下げた。

茶室を沈黙が包んだ。

鉄瓶の湯の沸く音だけが響いている。

その時、静寂を破り突然電子音が鳴り響いた。

梶浦と大八木は、あまりの驚きに身体を“ビクン”と震わせた。

闇御前が、平然とした態度で電話のスピーカーフォンのボタンを押す。

『御前様、お話中申し訳ありません。柳生様からお電話が入っております』

スピーカーフォン越しに、いつもの若い女性の声が響いた。

「繋ぎなさい」

闇御前はそう言うと、受話器を取りスピーカーフォンのスイッチを切った。

『もしもし、ご命令通り御子神恭介の息子を見付けました。今から御前様の下へ連れて参ります』

十兵衛は手短に用件だけを伝えた。

「そうですか、思ったより早かったですねぇ。さすがは十兵衛と言った所ですか」

『本日は、総理大臣の梶浦と法務大臣の大八木にお会いになるとの事でしたが、宜しかったでしょうか？』

十兵衛が尋ねた。

「いえ、もう話は済みました。今すぐ来られるのですか？」

『はい。今から同行し御前様の下へ連れて参ります』

「分かりました。楽しみにしていますよ」

そう言うと、闇御前は受話器を戻した。

「ふぉふぉふぉ、楽しみですねえ……」

闇御前は、遠くを見据えるかの様に、鰐の様な目を更に細め含む様に笑った。

2

2

俺と十兵衛を乗せた車は、雨の中を都心部へ向けて走っていた。

十兵衛に俺を捜させていた“ある御方”とか言う奴に会う為である。

俺達は、車の後部席に並んで座っていた。

あの後『ヘブンズ・ドア』のマスターに鉄二の事を頼み、気を失っている鉄二が風邪を引かない様に建物の軒下へ運ぶと、十兵衛が呼んだ車に乗り込んだのである。

どうやら車を何処かに待機させていたらしく、十兵衛が呼ぶと5分も経たない内にやって来た。

昨日あの廃ビルの前に止まっていた、黒塗りのメルセデスベンツＳ６５Ｌ・ＡＭＧだ。

俺と十兵衛は、びしょ濡れのままベンツの後部席に乗り込んだ。

服が濡れているせいで、上質な皮張りのシートが妙にすべりやがる。

俺は、窓の外を流れる夜景を見詰めていた。

すると……、

「まさか昨日の男が、偶然にも御子神恭介の息子だったとは、正直

驚いたぞ」

ふと十兵衛が言った。

「へえ、そうかい」

俺は窓の外に目を遣ったまま、ふて腐れた様に答えた。

「そう腹を立てるな。俺は、最初からお前の仲間や知り合いに危害など加えるつもりは無かったのだからな」

宥める様に十兵衛が言った。

「だが実際は、鉄二と殺り合ってただろうが！　それに幾らゾンビにされていたとは言え、俺のツレのシゲを斬り、しかも俺がブチ殺すつもりだったショウまでも殺りやがって！」

俺は、十兵衛の顔を睨み付け声を荒げた。

「先程のあれは、あの男がお前を守る為に先に仕掛けて来たのだ。それに昨日の件も、あれが俺の仕事なのだ」

“ケッ”

ーー気に入らねえ。

ーーコイツの言ってる事は確かにその通りなんだろうが、とにかく気に入らねえ。

「まあ幾ら言い訳をしたところで、俺がお前の仲間や仲間の仇を斬

った事は事実だ。許せよ……」

十兵衛が素直に詫びた。

「そう言えば、自己紹介がまだだったな。俺の名は柳生十兵衛三厳……。最もテレビの時代劇や何かで、名前ぐらいは知っているかも知れぬがな……」

十兵衛が言った。

「ああそうかい……」

俺は生返事で返した。

昨夜、獣吾や久保のオッサン達に聞かされていたから今更驚く事でもねえ。

「ほう……。俺の名を聞いて驚かぬとは、お前……、俺が最初から柳生十兵衛だと知っていたな？」

十兵衛は、俺を“ギロリ”と睨んだ。

“！”

ーーしまった！

俺は、自分自身の迂闊さを後悔した。

恐らく昨夜の俺がそうだった様に、時代劇に出て来る有名人がヴァンパイアとして現代に生きていたとなれば、時代劇に興味の無い

者でも驚くに決まっている。

しかも隣に座っている男が、その柳生十兵衛本人ならばもっと驚いて当然だ。

だが俺の反応はあつさりし過ぎていた。

最初から柳生十兵衛と知っていた者の反応だ。

「俺の事を誰から聞いた？」

十兵衛は、怪訝な表情を浮かべ聞いた。

「あ、ああ……。俺は時代劇には興味無いからよ……」

俺は惚けた。

「昨日の獣人にでも聞いたか？」

十兵衛が探る様に言う。

「別に誰からも聞いちゃいねえよ。確かにオメエの名前は何かで聞いた事あるが、俺は歴史や時代劇には興味無いんでな」

「そうか……。ではそう言う事にしておこうか……」

十兵衛は、一瞬俺を探る様な目で見詰めたが、すぐに表情を取り直した。

「ならば質問を変えよう。昨日、あの後お前達はどうしたんだ？」

「どうしたも何も、オメエと殺り合ってたあの野郎は、オメエが居なくなった後少し殺り合ったが、すぐにどっかへ行っちまったよ」

俺は、あくまでシラを切った。

「果たしてそうかな？」

再び十兵衛が、探る様な視線を俺に浴びせる。

「な、何だよ。俺が嘘を付いてるとでも言いたいのかよ……」

俺はしどろもどろに答えた。

ーークソ、そんな目で見るんじゃねえよ！

ビビってる訳じゃねえが、頭が悪いせいか嘘を付くのはどうも苦手だ。

「お前は、俺が柳生十兵衛だと聞いても驚かなかった。それにあの男が獣人だと聞いた時も表情すら変えなかった。それは、お前があの男が獣人である事を知っていたからだ。それに昨日、俺はあの獣人に自分の名を名乗った。ならば俺の名は、あの獣人から聞いていたと考えるのが自然だ……。違うかな？」

「……」

俺は黙るしかなかった。

「まあ喋りたくないのであればそれでも良い。ただ一つだけ聞かせ

てくれ。あの獣人はお前の知り合いか？」

「別に知り合いでも何でもねえよ。俺が、シゲを殺ったショウとか言うヴァンパイアをブッ殺す為にあのビルに行ったら、たまたまそこでオメエらが殺り合っていて、そこで初めてあの野郎を見ただけの事だ」

「そうか……。ではもう一度聞くが、あの後どうなったのだ？」

「さっきも言っただろうが！　あの後少し殺り合ったが、直ぐに奴はオメエを追い掛ける様に何処かへ行っちまったってよ！」

俺は、あくまでシラを切り通した。

今は何も喋らない方が良い……。

俺は、取り敢えず十兵衛が逃げた後に起きた事の顛末を話さない事に決めた。

どんなカードでも、最後まで伏せておくに越した事は無え。

「そうか……」

十兵衛は府に落ちぬ様子だったが、この件についてそれ以上は聞かなかった。

しばらく沈黙が続いた。

未だ降り続いている雨が、車の窓を激しく叩く。

その向こうでは、煌々と灯る街灯が、勢い良く後方へと流れて行った。

「しかしお前は良い友人を持ったな」

突然、十兵衛が独り言の様に、ぽつりと口を開いた。

「ああ……」

俺は何気無く答えた。

鉄二の顔が浮かぶ……。

ーー鉄二、済まねえ。

俺は、心の中で鉄二に詫びた。

「あの男は、俺とお前を会わせぬように、命を賭けて俺に挑んで来たのだ……。俺がヴァンパイアと知っていながらな……」

十兵衛の口調は、あくまでも穏やかだ。

「ああ……。分かってるよ……」

俺もぼそりと返した。

「今時珍しい男だ。お前、あの男に我々ヴァンパイアの事を話したのか？」

「……ああ……、それも今朝な……」

俺は答えを一瞬躊躇ったが、本当の事を答えた。

「今朝？」

十兵衛が聞き返す。

「さっきも言ったが、昨日テメエが斬り殺したゾンビの中に、シゲって言う俺のツレが居た……」

「うむ、それはあの男からも聞いた」

「シゲは、アイツにとっても仲の良いツレでな、奴がシゲの行方を心配してたから、仕方なく奴にだけは真実を話たんだ……」

俺の脳裏に、再び今朝の鉄二との会話が過ぎった。

「そうだったのか……。ではあの男は、お前がヴァンパイアだと言う事も知っているのか？」

「知っている。俺が話したからな……」

ーーまた嫌な事を思い出しちまった。

「ところでよ、オメエと俺の親父が知り合いだったって言うのは本当か？」

俺は、先程の十兵衛の話を思い出し、話を変える意味も含めて聞き直した。

十兵衛が、ふと遠い眼差しになる。

「知り合いどころか、恭介殿と俺は、共に酒を酌み交わし、技を競い合った仲だ」

「そうだったのか……。で、どっちが強かったんだ？」

「無論恭介殿だ」

十兵衛はきっぱりと言った。

「へえぇ、伝説の剣豪“柳生十兵衛”よりも強かったなんて、何か信じられねえな」

「いや本当だ。お前の親父は、我等夜の眷属の中でも一番の強者だった」

十兵衛は断言した。

「顔を見た事も無え親父だが、そう言われると何かこう……、少しは嬉しいモンだな」

「お前、父親の事は何も知らないのか？　昨日飯沼昭二が言っていたが、お前自身、自分がヴァンパイアだと言う事も知らなかったそうじゃないか？」

「ああ、俺がヴァンパイアだと言う事も、実の父親がヴァンパイアだったと言う事も、昨日知ったばかりだ」

俺がそう答えた瞬間、車がスッと停まった。

そこは、ある建物の前であった。

「着いた様だ。この事は、お前を待っている御方も必ずお尋ねになられる事だろうから、この続きはその時に聞くとしよう」

そう言うと十兵衛は、車から降りるべく身構えた。

運転していた男が素早く車を降りると、恭しい態度で後部席のドアを開けた。

開いたのは十兵衛側のドアだ。

「降りるぞ」

そう言うと十兵衛は、降りしきる雨の中へと車を降りた。

俺も後に続く。

そこは、テレビや雑誌にも取り上げられる有名なビルの前であった。

見上げれば、空の遥か彼方まで聳え立つビルの先に、禍々しいまでにどんよりとした雨雲が、分厚い層となって夜空を厚く覆っていた。

3

3

そこは、新宿のど真ん中にあった。

東京都庁の側に聳え立つそのビルは、眼下に都庁を見下ろしている。

それもその筈で、このビルの持ち主は、東京都知事など問題にもならぬ程の地位と権力を持ち、古から日本の闇の頂点に君臨している人物なのだ。

高さ約三百メートル、地上五十八階・地下六階のビルには、地上の低層階を売り場面積日本一の『帝都百貨店』が占め、中層階には『帝都グループ』のオフィス、高層階にも『帝都グループ』傘下のホテルが入り、完全に『帝都グループ』のみで占有されたビルである。

このビルに来た事は無かったが、良くＴＶで取り上げられる有名なビルだ。

まさかこんな都会のど真ん中の超高層ビルの中に、奴らのアジトがあるなんて想像もしていなかった。

ーーったくこの国はどうなってやがんだ？

さすがに俺は呆れた。

そうして俺達は、車を降りてビルの中へ入ると、俺と会いたがっ

ていると言う奴がいる最上階へと向かう為エレベーターに乗った。

実際ホテルとしては五十階までで、その上の階へ一般人は上がれない構造になっている。

五十一階以上へ上がる為には、通常のエレベーターで一度地下五階まで降りて、その後警備員が脇を固める扉の向こう側にある直通のエレベーターに乗り換えるか、五十階にあるホテルのＶＩＰルームに入り、部屋の奥に隠された秘密の扉から上に上がる為のエレベーターに乗り換える必要があった。

しかもそれらのエレベーターに乗る為には、警備員の厳重なチェックや、カードと暗証番号の入力を必要とする電子ロックを解除しなければならない。

俺達は、ホテルの客用エレベーターに乗り込み、フロントのある階を通り越して五十階で降りた。

エレベーターを出ると、通路の一番奥にあるＶＩＰルームへと入り、雨に濡れた服や下着等を十兵衛の部下が用意した物に着替えた。

濡れた服は、どうやら俺が帰るまでにクリーニングしておいてくれるらしい。

十兵衛の部下が用意したのは、長袖の白いＹシャツと黒のスラックスであった。

下着が白いブリーフってのが戴けないが、まあノーパンよりはマシだろう。

ついでに濡れた靴や靴下も履き替えさせられた。

至れり尽くせりだが、如何せん趣味が悪過ぎる。

だが、何時までも雨に濡れた服を着たままでいるよりはマシだ。

俺達は、用意された服に着替え終わると、部屋の奥に隠された秘密の扉から、上の階に上がるエレベーターに乗った。

「ここから上は、我々が占有している階だ」

十兵衛は、五十八階のボタンを押しながら言った。

「じゃあここから先はヴァンパイア共の“巣”と言う訳か？」

「“巣”とはご挨拶だな。確かに此処は、我々夜の眷属者達が住む居住区も一部存在するが、殆どは我々の為の施設や広間、それに様々な組織のオフィス等に使われている」

「施設？　それにオフィスだぁ？」

「そうだ。我々にも我々独自の社会が存在する以上、その社会を円滑に運営する為の様々な組織があるのは当然の事で、ここにはそれぞれの組織を運営する為のオフィスが入っているのだ。言わば我らの中枢よ」

「中枢ねぇ……。じゃあテメエらのお仲間は何処に住んでるんだ？」

「ここにもそれなりの部屋や施設は用意されているが、主だった貴族達は、自らの配下の屍鬼達と共に都内だけではなく各所に建てら

れた『帝都グループ』所有のマンションやビル等に暮らしている」

「な……」

俺は絶句した。

ーー何てこった。

ーー想像と全然違うじゃねえか。

テレビや映画に出て来るヴァンパイアと言えば、だいたい古い城に召し使いと二人で隠れ住んでいて、昼間は棺で眠り夜になれば町に出て人間を襲うってのが相場だ。

最も最近では、ヴァンパイア達が集団で出て来る話も多々あるが、それでも廃屋や地下の太陽の当たらない場所に人目を忍んで隠れ住んでいるイメージが強い。

そう言ったシチュエーションが、ヴァンパイアの不気味なイメージ作りに一役買っていて、子供心にビビってたモンだ。

だがつい最近の映画では、ヴァンパイアが人間の様な社会を営み、近代的なビルに集団で暮らしている話が多く、あまりに昔映画で見たヴァンパイアのイメージから掛け離れていて、内容がすげえ面白かった割には不気味さや怖さが減って何処か興ざめしたのを覚えている。

だが此処には、あの映画と同じ世界が現実に存在していた。

しかも、日本最大のグループ企業を裏から支配してやがるのだ。

確かに爺や久保のオッサン達から、ヴァンパイアにも組織があるって話は聞かされていたが、これは流石に想像を超えていた。

「いったい何人くらい居るんだヴァンパイアは……？」

「実際何人かと問われても俺は正確な人数を知らぬ。ただ『貴族』と呼ばれる者は四十名にも満たず、しかもその殆どが俺やお前の父親の様な『生成り』と呼ばれる者達だ。その他にお前も知っている飯沼昭二の様な『屍鬼』と呼ばれる者達が居るが、その者達は数が多い為正確な人数は分からぬ。だが二百や三百でない事は確かだ」

十兵衛は平然と答えた。

ーーチッ、以外と多いじゃねえか。

俺は舌を鳴らした。

もっと少ないかと思っていたが、想像したより数が多い。

そう考えた瞬間、静かにエレベーターが五十八階で停止し、軽い電子音がエレベーター内に響いた。

「着いたぞ」

十兵衛が言った。

扉が“スーッ”と開く。

十兵衛は俺を先に促すと、俺の後に続いてエレベーターを降りた。

ーーな、何だ？　庭があるじゃねえか！？
俺は一瞬目を疑った。

エレベーターを出たそこは、何と日本庭園に改造されていたのだ。

八メートルはある高い天井は、全体の三分の一程がガラス張りになっていて、残りの三分の二には幾つものダウンライトが灯されフロア全体を薄暗く照らしていた。

三方向を囲む壁にも巨大なガラスが何枚も嵌め込まれ、外の夜景が見える様になっている。

これらの窓は、この庭に植えられた樹木の為の明かり取りの窓なのだろう。

最も今は、その半分近くがシャッターで覆われていた。

とにかく広いフロアで、横幅三十メートル、奥行きで五十メートル程もあるフロアの床には、多量の土がこんもりと盛られ、表面がしっかりと苔むしている。

しかもどうやって根を下ろしているのか定かではないが、松や四季折々の樹木等が何本も植えられていた。

しかもそれらの木々は、最小限人の手を加えただけでまるで最初からそこに生えていたかの様に植えられている。

十兵衛の話によると、こう言った茶室の庭は“露地”と言って、樹木は出来るだけ自然のまま山の趣を残すのが良いらしい。

だが、流石に此処はビルの中なので、人が管理をしない事には大変な事になってしまう。

その為に人の手を加えているのだが、それも最小限枝を刈る程度に留め、自然の趣を大切にしているらしい。

庭の入口には、二人の男が行く手を遮る様に立ち並んでいた。

見渡せば、庭のあちこちにも同じ様な男達が何人も立っている。

皆黒いスーツを着込み、黒いサングラスを掛けていた。

どいつもこいつも背が高い上に体格が良い。

目の前に立ちはだかる二人の男達は、少し足を開いて後ろに腕を組んだまま、直立不動の姿勢で立っていた。

どうせ此処の門番だろうが、人間かどうか定かではない。

十兵衛は、何も言わず男達に近付いた。

「お帰りなさいませ十兵衛様。先程から御前様がお待ちです」

そう言って男達は左右に分かれ道を譲ると、深々と頭を下げ俺達を中へと誘った。

「ご苦労」

十兵衛は男達に一言声を掛けると、俺に先立って簡素な門を潜っ

た。

俺も後に続く。

「なあ十兵衛、あいつらもヴァンパイアなのか？」

俺は周りに立つ男達に目配せをしながら、前を行く十兵衛の背中に声を掛けた。

「ああそうだ。夜はあの者達が御前様のボディガードをしている」

十兵衛が答えた。

露地は、フロアの奥にある茶室へと続いていて、大きく平たい石が規則正しく埋められている。

これは飛石と言うらしい。

俺は、十兵衛に先導され飛石の上を歩いて行った。

道の脇には、石で出来た灯籠があり中には火が燈されている。

露地の先には、一軒の小さな茶室が建てられていた。

桧皮葺とか言うらしい屋根を張った四角い木造の建物だが、俺に言わせればただのボロい掘っ建て小屋にしか見えねえ。

「しっかしこれが、ビルの中だとは信じられねえなあ……」

俺は、辺りを見回して“ぼそり”と漏らした。

「ここは、御前様が以前お住みだったお屋敷の茶室を、このビルが建てられる際にそのまま移築したものだ」

十兵衛が言った。

「だがこのビルの構造はどうなってんだ？　このフロアに掛かる重量は相当なモンだろう。良く床が抜けねえな」

「俺も詳しい事は知らぬが、この階の床や壁はかなりの重量や衝撃に耐えられる様に設計されているらしい」

「しかしまあ新宿のど真ん中の、しかもわざわざ最上階のフロアにこんな物を造るとは、金持ちのする事は訳が分かんねえぜ……」

俺はぼやく様に言った。

十兵衛は、このフロア全体で四百五十坪以上はあると言ってやがったが、地上三百メートルのビルの最上階に庭だの茶室だのを移築するなんてバッカじゃねえのか？

だいたいこんな見晴らしの良い場所なら、夜景の見えるゴージャスな部屋に改装して、広いジャクジーや豪華なベッドを置いた方がよっぽど良いに決まってるじゃねえか。

新宿の夜景を見下ろし、毎晩違うイイ女とドンペリのロゼでも飲みながらジャクジーに浸かり、広いベッドの上でヤリまくる。

最高じゃねえか！

相手は……まず『キャンディ』の明美に『ラバルブル』のミドリちゃん……。

それにラウンジ『桜』の舞ちゃんに、他には……。

もう想像するだけで、誰とどんなシチュエーションで、どんな体位で“ヤル”か幾らでも妄想が浮かんで来る。

俺は、迂闊にも妄想を膨らませ“ニンマリ”と笑っちまった。

「さあ此処だ」

十兵衛の野郎が、俺の楽しい妄想タイムを邪魔しやがった。

“チッ”

俺は舌を打った。

「ん、どうした？」

十兵衛が、俺の舌打ちを耳にして尋ねる。

「ケッ、何でも無えよ」

俺は吐き捨てる様に言った。

「そうか、では入るぞ」

そう言って十兵衛は、木々を格子に組んだ簡素な作りの門を押し開けて中に入った。

茶室の入口の前には、一人の若いイイ女が俺達を出迎えていた。

「お待ちしておりました十兵衛様。先程から御前様がお待ちです」

そう言って女は頭を下げた。

しかしイイ女だ。

歳は二十五～六歳と言ったところか。

身体のラインが分かる程にピッチリとした黒いスーツを身に纏い、膝までのタイトスカートの下には、スラリと伸びた長く細い脚が見て取れる。

如何にも、大企業の有能な美人秘書と言った感じだ。

黒く長い髪は頭頂部でアップに束ね、ほっそりとした色白な顔には赤く細いフレームの眼鏡を掛け、奥に覗く切れ長の瞳には知的な色が浮かんでいる。

高く通った鼻筋と相俟って一見冷たそうにも見えるが、“ぽってり”としたむしゃぶりつきたくなる様な紅い唇が、この女に愛嬌を与えていた。

とにかく俺の知っている女達とは、また違うタイプのイイ女だ。

ーークソッ、ヤリて～！

俺様のやんごとない代物に、身体中の血液が一気に流れ込むのを感じた。

女は、俺のエッチな視線に気が付いたのか、俺を見てニコリと笑った。

ーーク～ッ、御前とか言う野郎、こんなイイ女を侍らせてやがって！

俺は、妬みと羨ましさで頭に血が昇った。

「ではこちらへどうぞ」

女は、涼しい顔で俺達を誘った。

俺と十兵衛も女に続く。

女は茶室へ上がると、襖の前で膝を揃えて座った。

十兵衛も、女の後ろで片膝を着いて屈んだ。

「御前様、十兵衛様がお見えになりました」

女が先んじて中に声掛ける。

「入りなさい」

すると、襖の向こうから嗄れた老人の声が聞こえた。

嗄れてはいるが、はっきりとした口調で撥音にも濁りが無い。

「失礼します」

そう言うと、女は両手を添えて静かに襖を開けた。

そこは、ひどく暗く狭い部屋であった。

明かりは、畳の上に置かれた二本の燭台に灯る蝋燭の明かりのみで、部屋の奥には濃い闇が蟠っている。

その燭台の明かりに、小柄な老人の姿が浮かび上がっていた。

漆黒の着物を纏い、歳の割りには背筋を“ぴん”と伸ばしきちんと正座している。

禿げ上がった頭には深い皺が何本も刻まれ、燭台の明かりが皺を更に濃い物にしていた。

ーーこの爺が俺を呼び付けたのか？

ーー十兵衛達に“御前様”などとたいそうな呼び名で呼ばれ、しかもヴァンパイア共の親玉だと言うからどんなにスゲエ化け物じみた奴が出て来るのかと思って期待していたら、こんな枯木の様な爺だとは些かガッカリだぜ。

俺は腹の中で笑った。

「早かったですねえ。その者が、御子神恭介の息子ですか？」

皺の様な爺の目が、俺を見て薄く開いた。

「左様です。この者が御子神恭也です……」

片膝を着いたまま十兵衛が答えた。

「なかなか良い面構えですね。さあ、こちらに来なさい」

御前とか言う爺が、穏やかな口調で俺達を招いた。

「ははっ　」

十兵衛は畏まった様子で頭を下げると、後ろで立っている俺に振り返った。

「あの御方が、お前に会いたがっておられた御前様だ」

十兵衛は俺を見上げながら言った。

「あ、ああ……」

俺は曖昧に頷き、前に屈む十兵衛や女の脇を通って部屋の中に入った。

「そこに座るが良い」

爺が俺に言った。

囲炉裏を挟み、俺は爺の前に胡座を掻いて座った。

「十兵衛、お前も入りなさい」

爺が十兵衛に声を掛ける。

「ははっ。では失礼つかまつる」

十兵衛は、部屋に入り俺の横に座った。

十兵衛も俺と同じ様に胡座を掻いている。

「他にご用はございませんか？」

女が爺に声を掛けた。

「良い。下がっていなさい」

爺は、女に目を遣って答えた。

「では、失礼致します」

そう言って女は一礼すると、静かに襖を閉めた。

そうして部屋の中は、俺と十兵衛、そして御前と呼ばれる爺の三人だけとなった。

俺は爺を見詰めた。

身体は小さく、まるで枯木の様な爺だが、間近に見ると異様に迫力がある。

「このお方が、この国に住む全ての夜の眷属を束ねておられる“闇御前”様だ」

十兵衛が、俺に目の前の爺を紹介した。

爺……、いや“闇御前”は、その深い皺だらけの顔に薄い笑みを浮かべ笑った。

4

4

李と獣吾、そして佐々木の三人は、当てがわれた宿坊で一息付いていた。

雨に降られて冷えた身体をまず風呂で温め、ずぶ濡れになった服を用意された浴衣に着替えたのだ。

ただし、獣吾程の体格に合った浴衣が無かった為、獣吾だけは大角の作務衣を纏っていた。

今頃金剛峯寺の駐車場では、先程獣吾が闘った者達の遺体の回収や後始末が行われている筈である。

獣吾はやけにそわそわと落ち着かぬ様子で、胡座を掻いた足で貧乏揺すりをしていた。

「何じゃさっきからガタガタと。落ち着きの無い奴じゃのうまったく」

李が、獣吾に目を遣り不平を漏らした。

「仕方ねえだろう。どうにも居心地が悪いんだからよ」

獣吾が口を尖らせた。

それもその筈である。

幾ら獣吾の為に結界が解いてあるとは言え、高野山は仏教の聖地なのだ。

魔族の因子を持つ獣吾にとって、居心地の良い筈が無い。

「仕方ないのう……」

李は、そう言って持って来た袋の中から黄色い呪符を三枚取り出すと、同時に取り出した筆を朱墨に浸し、何やら呪文を書き出した。

三枚全てに呪文を書き終えると、獣吾を中心に三角形を象る様に呪符配し、それらを次々と針で畳に刺し止めていく。

呪符を全て刺し終え、右手の人差し指と中指の二本を立てて口元に持って行くと、目を閉じて低く呪を唱え始めた。

すると、それまで険しかった獣吾の顔が急に落ち着きを取り戻した。

「な、何だ?」

思わず獣吾は声を上げた。

あれ程落ち着き無く揺すっていた貧乏揺すりが止まっている。

「ふう……、これで少しは落ち着いたじゃろう」

李が深く息を吐きながら言った。

「オイオイ爺さん、いったい何をしたんだ?」

獣吾が驚いた表情で尋ねた。

「今お主の周りに結界を張ったのよ」

李はさらりと言った。

「結界だあ？」

「そうじゃ。あんまりお主の貧乏揺すりが煩いのでな、お主に御山の聖なる波動が及ばぬ様、お主の周りに結界を張ったのじゃ。これで少しは楽になったであろうが」

「あ、ああ……、全然楽になったよ。しかし凄えなあ爺さんは……」

獣吾は、つくづく感心した様に嘆息を漏らした。

「流石は老師ですね。幾ら結界が張られていないとは言え、この聖域でそれを打ち消す程の結界を張るなど、並の術士では到底出来ない事です」

佐々木も感心した様子で言った。

「フン、この聖なる地でその様な結界を張るなど、この罰当たりな爺めが」

いきなり襖が開いたかと思うと、慈海が悪態を付きながら部屋に入って来た。

慈海の後ろには、先程の大角と小角の姿も見える。

「フン、何が罰当たりじゃ。お主こそ生臭の癖しおって！」

李は、慈海を見上げ鼻を鳴らした。

「生臭と言うたか、この助平爺が！」

慈海も負けてはいない。

「何じゃと！」

「何だ！」

「やるか！」

「応よ！」

李も立ち上がり、二人は鼻が付く程の距離で睨み合った。

「まあまあ阿闍梨様、それに老師もお止め下さい」

「そうですよお二人共、その様な子供じみた喧嘩はお止め下さい」

慌てて大角と小角が止めに入った。

「フン！」

「ヘン！」

李と慈海は、鼻を鳴らし互いにそっぽを向いた。

「何なんだ、この二人は……」

獣吾が、呆れた様に言った。

「いつもの事だ。このお二人は本当は仲が良いのだが、何故か顔を合わす度にこうして口喧嘩をなさるのだ。だから気にする事は無い」

佐々木は、苦笑しながら獣吾に説明した。

大角と小角も、互いに目を合わせ苦笑いを浮かべている。

「相変わらず口の悪い爺じゃ」

憎々しげにそう言うと、李はそっぽを向いたまま座り直した。

「フン、それはこちらの台詞よ」

そうぼやくと、慈海もその場に腰を下ろした。

大角と小角もそれに倣う。

「もう後始末の方は済んだのですか？」

佐々木は、この雰囲気を少しでも紛らわそうと大角達に話を振った。

「先程済んだところです」

大角は、佐々木の意図を察し応じた。

「それで遺体はどうされたのですか？」

「遺体は全て収容し、今は霊安所で枕教を上げている最中です」

「そうですか……。で、座主様はこの一件をどう処理されるおつもりなのでしょう？」

更に佐々木が尋ねる。

「警察には通報せず、このまま御山で弔うそうだ」

大角に代わり慈海が答えた。

既に機嫌は治っている様だ。

「やはりそうなりますか。それで彼らの身元は？」

「分からぬ……。調べたが、身元を確認出来る様な物は何一つ身に着けておらなんだ」

「まあそうでしょうね……。では久保にはその様に報告しておきます。ですが、先程『C・V・U京都支部』の科学検査班に、今夜中に遺体の検死や指紋の採取をしに来るよう指示を出しておきましたので、それが終わるまで遺体はそのままにしておいて下さい」

佐々木が言った。

「分かりました。では小角、悪いが座主様にその旨お伝えして来てくれ」

「分かりました」

小角はそう言うと、急ぎ部屋を出て行った。

「ところで獣吾殿、傷の具合は如何かな？」

慈海は、ふと獣吾に目を遣り声を掛けた。

いきなり話を振られ驚いた獣吾が、身体を“びくり”と震わせる。

「あ、ああ……、もう平気だ」

そう答えると獣吾は、おもむろに作務衣の右袖を捲くり上げた。

剥き出しになったこん棒の様な太い腕には、先程受けた筈の銃弾の痕が、まるで嘘のように失くなっている。

恐らく左腕や肩に受けた傷も、同じ様に完治しているに違いない。

「ほう、流石に獣人の治癒能力は凄まじいな」

慈海は感心した。

「あんな銃弾なんて豆鉄砲喰らった様なモンさ」

獣吾は自慢げな表情を浮かべ、殊更鼻息を荒くして言った。

「しかし奴ら、結局何が目的だったんじゃろうな？」

皆の会話を黙って聞いていた李が、ふと深刻な表情で漏らした。

「……」

次の瞬間、誰も李の問いに答える事が出来ず、皆一様に黙り込んだ。

皆深刻な表情を浮かべ思案を巡らせている中、しばらくして小角が部屋に戻って来た。

「座主様にお伝えして参りました」

小角が告げる。

「そうか、ご苦労だった」

慈海は小角を労った。

その時ふと、大角が顔を上げた。

「実は以前から思っていたのですが……」

何かを言おうとして、大角は言い澱んだ。

「何だ大角、言ってみなさい」

慈海が言った。

「はい……。誠に言いにくい事ですが、実はこの御山に内通者がいるのではないでしょうか？」

大角は、いかにも言いにくそうに怖ず怖ずと口を開いた。

「何！」

「何じゃとう？」

李と佐々木が同時に声を上げた。

獣吾も驚いた表情で大角の顔を見詰めている。

慈海は、何か思い当たる節でもあるのか、険しい表情で大角を見詰めていた。

戻ったばかりで話の内容が見えない小角は、大角や慈海達の顔を眺めている。

「どう言う事だ大角。何か心当たりでもあるのか？」

慈海は、険しい表情のまま大角に尋ねた。

「いえ、心当たりと言う程の事でもないのですが、座主様が、皆に真の三種の神器の事をお話しになられ、御山に結界を張るよう指示されたのはまだ昨日の事です。なのに昨日の今日でこの様な事件が起きたとなれば、偶然にしては些かタイミングが良すぎるのではないかと思いまして……」

大角が神妙な面持ちで答えた。

「私も大角と同意見です。実は、最近御山に起こっている一連の騒

動は、侵入者の仕業などでは無く内通者によるものではないかと、先日もこの大角や円角とも話していた所なのです」

やっと話の内容を把握した小角が、大角の推理に賛同して付け加えた。

「騒動とはいったい何じゃ？」

李が訊ねる。

「先程座主様との話し合いの場でも言った通り、最近この御山で倉や書庫に収められている古文書や巻物の類いが何者かによって読まれたと言うアレだ」

慈海が、小角の話を引き継ぎ、険しい表情で答えた。

「むう……、先程お主らが言うておった件じゃな」

「そうだ……。確かにその可能性も否定出来ぬが、それは一つの可能性に過ぎぬ。まさかこの御山に奴らの内通者がおるなど儂には信じられぬ。いや信じたくも無い……」

そう言って慈海は唇を噛んだ。

そう言いながらも、慈海は心に渦巻く疑念を払拭出来ないでいるのも事実だった。

実際、最初に内通者の存在を疑ったのは他ならぬ慈海であり、座主に進言したのも、円角に話したのも慈海であった。

幾ら外部からの訪問者や観光客が連日この高野山に訪れているとは言え、それら来訪者が公開されていない倉や書庫に立ち入るなど現実には考え難い事だ。

確かに、吸血鬼や奴らの手先と思しき不審者の目撃報告は後を絶たないが、奴らが警備の厳重な倉や書庫に忍び込むのは決して容易な事ではない。

ましてや、常時結界を張り巡らせた倉や書庫に忍び込むなど吸血鬼には不可能だ。

奴らの『使い魔』である人間ならば結界の中に入る事も出来るが、『誘眼』や高い身体能力を持つ吸血鬼ならともかく、たかが人間では警備している者の目を盗んで倉や書庫に忍び込むなど尚更不可能に近い。

そう考えると、内通者の存在が高い可能性を帯びて来るのだが、座主は慈海の進言を拒んだ。

いや拒みたかったのだ。

そしてそれは、慈海も同じ気持ちだった。

慈海や座主にとって高野山は人生の全てであり、また犯人捜しをする事で互いに疑心暗鬼が生まれ、この時期に皆の結束が乱れるのを怖れたのである。

彼らを疑う事は自らの家族を疑う事であり、門徒は全て自分達の家族のようなものだ。

その為、敢えて内通者を捜すのではなく、あくまで外部からの侵入者を防ぎ真の三種の神器を護ると言う結論に達したのだ。

その結果、主立った者のみに真の三種の神器の存在を明かす事で、法力が高く信頼の厚い僧を選び出しこの高野山全体に強い結界を張ったのである。

したがって、今大角や小角が指摘した事は、慈海が以前より感じていた疑念でもあった。

「しかしこの御山に奴らの内通者が居るとは、流石に信じがたい話です……」

佐々木が低く漏らした。

「じゃが以蔵の手紙からも、奴らの狙いが真の三種の神器である事は間違いないようじゃし、既に奴らが十八年前には真の三種の神器の存在を知っておったのは明らかじゃ。しかも獣吾君の話や、奴らが獣人族の村へ襲撃した手口から見ても、信じがたい話ではあるが獣人族の中に奴らの内通者がおった可能性は否定出来ぬ。ならば……」

「我が門徒の中にも内通者がおると言いたいのかお主は！」

李が語り終えぬ内に、厳しい表情の慈海が李の言葉を遮った。

「そうじゃ……」

李は、敢えてきっぱりと言い放つと、厳しい表情で慈海を見返した。

李と慈海の視線が、火花を伴って交錯する。

大角と小角は“ゴクリ”と息を呑んだ。

獣吾は、特に表情を変える事なく李と慈海の様子を眺めていた。

佐々木だけが、何やら難しい表情で思案を巡らせている。

「先程から考えていたのですが……」

思案を巡らせていた佐々木が、何を思い付いたのかふと声を上げた。

「何じゃ？」

李が、佐々木へと首を廻らせる。

「さっきの者達の事ですが、もしかしたら彼等はプロかも知れません」

佐々木は、何やら押し殺す言った。

「プロじゃと？」

李が怪訝な表情を見せる。

その瞬間、獣吾にも何か思い当たる節があったのか、興味深い視線を佐々木に送った。

「そうです。後で『C・V・U』の科学検査班が採取した遺体の指紋を、『内調』のデーターベースで照合すれば直ぐに分かる事と思いますが、彼等は陸上自衛隊の隊員かも知れません」

佐々木が言った。

「何じゃとう！」

「何と……！」

李と慈海は、ほぼ同時に声を上げた。

5

5

李と慈海は、驚きのあまり大きく目を見開き、佐々木の顔を見詰めていた。

大角と小角も驚いた表情で、互いの顔を見合わせている。

「やはりな……。殺り合った時、奴らの動きや銃の扱い方が素人じゃねえと思っていたんだ」

獣吾は、佐々木の推測に賛同した。

「じゃがその根拠は何じゃ？」

李が、細い目を見開いたまま尋ねた。

「奴らの持っていた装備です」

「装備？」

「はい。奴らが持っていた銃は、ＳＩＧ・ＳＡＵＥＲ・Ｐ２２０と言う銃で、陸上自衛隊でも正式採用されている銃なのです」

「だが奴らなら銃など幾らでも手に入るだろうし、それが自衛隊で正式採用されている銃だからとて、奴らが自衛隊の隊員だと言う確証にはなるまい」

佐々木達の会話に、慈海が横から口を挟んだ。

「無論その可能性も否定出来ませんが、奴らの内の一人を、以前市ヶ谷で見た記憶があるのです」

「な……」

「……」

「なに…」

「何と……」

「……」

李達五人は絶句した。

「見間違いではないのか？」

李が尋ねた。

「いえ、私の旧くからの知り合いで、現在陸自で組織された極秘部隊の隊長をしている男がいるのですが、以前私が『C・V・U』の新隊員スカウトの為彼に相談していた時、彼と共に居た男がその男に似ているのです」

「ふむ……」

溜息と共に慈海は腕を組んだ。

「極秘部隊だと？」

獣吾が怪訝な表情で佐々木に見た。

自衛隊の極秘部隊と聞いて、獣人族の村を襲撃した強化人間の部隊の事を思い出したのだ。

「極秘部隊とは言っても、以前君達獣人族の村を襲撃した強化人間の部隊とは違い、隊員は全員普通の人間だ。主立った任務は、この国の有事や敵対する組織からのテロ行為が行われた際、報復や対抗処置としての破壊工作や首謀者の暗殺と言った、極秘で非合法な作戦を秘密裏に実行する部隊だ。表向きには全員死亡した事になっていて、通称“ゾンビ部隊”等と呼ばれている。まあ実際のゾンビとは全くの別物だがな……」

佐々木は、獣吾の視線の意味を察して補足説明をした。

「もしそれが本当なら、自衛隊ってトコは本当に目茶苦茶で何でもアリな所だな。まあそれだけこの国の政治自体がデタラメって事なんだろうが」

獣吾が辟易する様に言った。

「だがな、実はこの部隊は、以前アメリカと合同で進めていた強化人間の部隊が未完成のまま中断する羽目になった為、それに代わる部隊として陸自独自で極秘に組織された部隊なのだ。最も現実には、裏で強化人間の部隊も秘密裏に組織されいたのだがな……」

「じゃあさっき俺がブッ殺した奴は、その極秘部隊の一員だったと言う事か？」

「まだ確証は無いがな……」

そう答えながら、佐々木は旧くからの知人が、ヴァンパイアと関わっているのでは無いかとの疑念に刈られ、落ち着いてはいられなかった。

「じゃがその者が、もしその極秘部隊の隊員だとしたら、現在自衛隊の中に吸血鬼共の息の掛かった者がおると言う事になるぞ」

李が呻く様に言った。

「それだけでは無い……。残る二人もその部隊の隊員であれば、その極秘部隊そのものが吸血鬼共の手先と言う事にもなりかねん……」

慈海も、深刻な表情を浮かべている。

「じゃあ、オメエの知り合いとか言う奴もまさか……」

獣吾は、佐々木が抱いている疑念を思わず口にした。

「信じたくは無い事ですが、もしも先程の者達がその部隊の現隊員であれば、組織ぐるみでヴァンパイアの『使い魔』と化している可能性もあります。そうなれば、私の知人も恐らくは……」

佐々木は、悲痛な表情を浮かべた。

「ふうむ……。これは確かに深刻な事態だが、それと我が門徒の中に奴らの内通者がおる可能性と、どのような関係があると言うのだ？　まさか自衛隊の中に内通者がおるからと言って、この御山にも内通者がおると言う事にはなるまい」

慈海が話を引き戻した。

「いえ、私が言いたいのはそう言う事ではありません。最も、こうなるとあらゆる組織の中に奴らの『使い魔』が居る可能性も出て来ますが、今私が言いたいのは、ただの偵察ならば彼ら程の者を寄越さなくとも、普通の『使い魔』を寄越せば済むと言う事です。確かに鑑定はまだですが、もしも彼らがその極秘部隊の一員であれば、先程も申し上げた通り彼らの得意分野は破壊工作や暗殺です。ならば今夜の事も、御山への攻撃か、その為の下準備。もしくは……」

「要人の暗殺か！」

李が大声を上げた。

「そうです。その何れにせよ、これは奴らの明確な攻撃の意思の現れであり、ならば奴らは、既に真の三種の神器がこの高野山に保管されているのを知っていると言う事です。更に来たのがヴァンパイアだけではなく、彼らの様な特殊なスキルを持った“人間”が来たと言う事は、奴らが今張られている結界の事を知っていたと言う事になります……」

佐々木は、“人間”の部分を殊更強調して言った。

「……座主様に命じられ、結界をこの御山全体に張り巡らせたのは昨夜からの事……。それに真の三種の神器の事を聞かされたのも昨日……。流石に昨日の今日と言う事であれば、内通者の存在が無ければ説明が尽きません！」

それまで黙っていた大角が思わず叫んだ。

「阿闍梨様、大角や佐々木殿が言われる通り、やはり御山には内通者が……」

小角も、大角や佐々木の意見に賛同し身を乗り出す様に言った。

「ふうむ……、確かにな……」

慈海は呟く様に言った。

実際、慈海は納得しているのだ。

ただ信じたくないだけである。

論理と気持ちが乖離して、小角への返答を鈍らせただけなのだ。

慈海は、しばし目を閉じ逡巡した。

「これは、やはり内通者の仕業と見るべきであろうな。しかも信じ難い事に、内通者は昨日我らと共に座主様の話を聞いた阿闍梨の位にある者達か、結界を張る為に選ばれた法力僧達の中におるようだ」

慈海は、自分の気持ちに決着を付けた。

「慈海、お主……」

李は、慈海の瞳を見詰め低く漏らした。

「大角、小角！　最早一刻の猶予も無い。奴らが仕掛けて来る前に、一刻も早く内通者を見付け出して捕らえるのだ。恐らく内通者は、

昨日呼ばれた者達の中におる。阿闍梨の位にある全ての者と、結界を張る為に選ばれた法力僧を全て洗うのだ。しかも奴らがその極秘部隊を送り込んで来るのであれば、今張っている結界など何の役に立たぬ。儂は至急この事を座主様に報告し、御山の防御体制の強化と座主様の身の安全、それに真の八咫鏡を護る為の方策を協議する。分かったな！」

慈海は、先程までの態度とは一変して、大角や小角に戟を飛ばした。

「ははっ！」

「直ちに！」

大角と小角は慈海に頭を下げると、おもむろに立ち上がった。

「では老師、それに佐々木殿、獣吾殿。我らはこれにて失礼致します」

二人は再度李達に頭を下げると、勢い良く部屋を飛び出して行った。

「阿闍梨様、この様な事態となった限りは、我が『C・V・U』の実働部隊を、至急御山へ派遣するよう久保に進言しましょう」

「確かに……。結界がある限り吸血鬼相手なら何とかなるでしょうが、もしも佐々木殿の推察通りであれば、我々の力だけでは戦力不足は否めません。敵が銃や火器を使用してくるのであれば、やはり銃火器や爆弾等にも詳しい『C・V・U』の部隊の方が頼りになりましょう。申し訳ありませぬがよろしくお願いします」

慈海は、神妙な面持ちで頭を下げた。

「分かりました。では久保には電話で報告するとして、私は此処に残り部隊の指揮を執ります」

佐々木が勇んで応える。

「老師、申し訳ありませんがそう言う事ですので、東京へはお二人でお戻り下さい」

佐々木がそう言うと、獣吾は身を乗り出した。

「馬鹿言ってんじゃねえぜ。そんな奴ら俺一人で十分だ！　俺も残るぜ」

獣吾が鼻息を荒げて言った。

「ダメだ。私の推察通り攻めて来るのがその部隊だったとしても、ヴァンパイアが共に攻めて来る可能性は捨てきれん！」

佐々木はきっぱりと拒んだ。

「だったら尚更！……」

獣吾が食い下がる。

「いやそうじゃない。君の能力は認めるが、その部隊と共にヴァンパイアが攻めて来た場合、やはり結界は奴らに対して有効な武器となる。その場合、強力な結界が張られていては、君は戦うどころで

は無くなってしまうだろう。それに我々も戦闘のプロだ。戦力的に考えても敵部隊に後れを取る事など決して無い。それに対ヴァンパイアの戦闘においては、御山の法力僧の戦闘力は我々『C・V・U』の部隊をも凌ぐ程だ。だから大丈夫だ」

佐々木は胸を張って言った。

「チッ、分かったよ」

獣吾は渋々承諾した。

「それに真の三種の神器は八咫鏡だけでは無い。儂らは一度東京へ戻り、残りの三種の神器の一つである天叢雲剣を探す事が急務じゃ！」

李は、獣吾を諭す様に言った。

「分かった。なら急いで東京に帰るとしよう」

獣吾は、思い立った様に立ち上がった。

その時、四人は部屋の外に人の気配を感じた。

「誰だ？」

部屋に近付いて来た者が声を掛けるより早く、慈海はその者に声を掛けた。

襖の向こう側で、その者が“びくん”と驚く気配があった。

「失礼します。お話中申し訳ありません。只今李老師に東京から電話が入っております」

一言断りを入れ、若い僧が襖を開け李に声を掛けた。

「東京から？　して電話掛けて来た相手は誰じゃ？」

李が若い僧に問い掛ける。

「はい、森下様と言う男性からです」

若い僧が答えた。

「何じゃと？」

李は、怪訝そうに白い眉を上げる。

「分かった。で、どうすれば良いのじゃ？」

「回線をお繋ぎしますので、お部屋の電話でお取り下さい」

若い僧がスラスラと答えた。

「分かった」

李はそう答えると、部屋に設置されている電話の受話器を取った。

「もしもし……」

李が電話に出る。

『もしもし、森下です。老師の携帯に電話したのですが、お出にならなかったのでそちらに直接電話しました』

電話の相手は、陽子の父親＝森下勇三だった。

「勇三殿か、何かあったのか？」

李は、嫌な予感に捕われた。

『それが、今仕方黒田君と言う恭也君の友人が老師に会いにやって来て、私が代わりに応対した所、どうやら恭也君が奴らの下へ連れ去られたと言うのです！』

「何じゃとう！」

李は、思わず大声で叫んだ。

慈海や佐々木、それに獣吾の視線が一斉に李へと向けられた。

受話器を持った李の手がブルブルと震えている。

いや手だけではない。

李の全身が、ガクガクと震えていた。

『……ろうし、老師！』

受話器の向こう側で勇三が叫んでいる。

「お、おお……、済まぬ……」

李は、慌てて返事を返した。

『それで、恭也君の事はどうしますか？』

勇三も興奮で声が大きくなっている。

勇三は、李に今後の指示を仰いだ。

「どうするかと言われても……、儂はまだ高野山じゃし……」

李は、返答に困り声を詰まらせた。

「連れ去られたと言っておったが、どう言う状況だったのじゃ？」

『いえ、実際は連れ去られたと言うより、奴らに同行を求められた恭也君が、自らの意思で付いて行ったようです……』

「あの阿呆が……」

李はぼそりと呟いた。

『私が行きましょうか？』

勇三が言った。

「いや、それには及ばぬ。幾ら勇三殿でも、奴らの下へ赴けば絶対に生きては帰れぬ。それに、奴らもすぐ殺したりはすまい。殺すつもりなら、わざわざあの阿呆に同行を求める様な間怠っこしマネなどせず、直ぐにその場で殺しておろう」

『しかし……』

「何故奴らがあの阿呆に会いたがったのかは分からぬが、あの阿呆ももう子供ではない。自らの意思で奴らの下へ赴いたのであれば、自分の身は自分で護るじゃろう」

そうは言いながらも、李の胸中は、直ぐにでもヴァンパイアの下へ赴き、恭也を救出したい気持ちで一杯だった。

『……』

李の心情を察したのか、勇三は掛ける言葉を失っていた。

「とにかく儂も急ぎ東京へ戻る。勇三殿は、家で恭也が帰るのを待っておってくれい」

『……分かりました。では気を付けてお戻り下さい』

勇三は、懸命に言葉を絞り出した。

「勇三殿にまで心配を掛けて済まぬ。じゃが良く知らせてくれた。では頼んだぞ」

李は、そう言って電話を切った。

「老師、まさか恭也君が！」

佐々木が声を掛けた。

獣吾や慈海も心配そうな目で李を見詰めている。

「あの阿呆が、どうやら自分からノコノコと奴らに着いて行ったらしい……」

「そんな、馬鹿な……」

佐々木は言葉を失った。

「お主、恭也と言うのはあの恭介の息子の事か？」

慈海が尋ねた。

「そうよ。あの阿呆、いったい何を考えておるのやら……」

「では私が奴らに連絡して、直ちに恭也君を解放するよう奴らに言いましょう」

佐々木が進言した。

「いや、そんな事をしても無駄じゃし、お主から連絡すれば、恭也と『内調』の関係が奴らにバレてしまう事になる。そうなれば、この大事な時に恭也が人質として利用される恐れも出て来る……」

「確かに……」

佐々木は唸った。

「それに、恭也を呼んだのは恐らく闇御前じゃ。どうやってバレたのかは分からぬが、恭也が恭介の息子だと知ってただ顔を見てみた

くなったと言う事かも知れん。ならば恭也が殺される心配は殆ど無い。じゃが……」

そこまで言って、李は声を詰まらせた。

「心配は、アイツがどう出るか……。だろ？」

獣吾が含む様に言った。

「あの阿呆、友達の仇だとか言って短気を起こさねば良いが……」

「だがアイツは俺やヴァンパイアを超えた化け物だ。しかも今夜はまだ満月から一日経っただけで、アイツの能力は今最高潮の筈だ。今のアイツを殺れる奴なんてまず居やしないだろうぜ」

獣吾は、李を元気付けようと、努めて明るく言った。

「そうじゃな。あの阿呆は殺されても死ぬようなタマではないしのう」

李も努めて明るく振る舞った。

「ですが、森下さんに恭也君の事を告げたその友人は、何故ヴァンパイアの事を知っていたのでしょうか？」

佐々木は首を傾げた。

「奴らの方から自分達の事を吸血鬼と名乗る筈も無い。恐らくあの阿呆が教えたのじゃろう」

「では、これ以上機密が漏れるのを防ぐ為、『内調』に報告してその友人を確保しなければなりません」

佐々木が“ガン”として言った。

「それは待ってくれんか？　黒田と言う男の名に聞き覚えがある。確か以前恭也が事件を起こし、儂が警察へあ奴の身柄を引き取りに行った時に一度会うた事がある筈じゃ」

「しかしこれは、『内調』の憲章第十六条の三項に抵触する事態です」

佐々木は食い下がった。

「お主らの取り決めは知らぬが、ここは儂に任せてはくれぬか？」

李は、神妙な面持ちで頼んだ。

「……」

佐々木は、しばらく黙って逡巡した後に、ゆっくりと瞳を開いた。

「分かりました。この件は全て老師にお任せします」

佐々木は静かに語った。

「済まぬのう。では儂らは今から急ぎ東京へ戻る。良いな！」

そう言って李は、獣吾の顔を見遣った。

「ああ、全力で飛ばすぜ」

獣吾は、心得たとばかりに胸を張った。

「では老師、獣吾君も、気を付けてお帰り下さい」

佐々木は、その場に立ち李達に声を掛けた。

「何から何まで済まぬのう」

李は、申し訳なさそうに佐々木の目を見詰めた。

「いえ。ですがくれぐれも早まった行動はお控え下さい。何かあれば、すぐ久保にご連絡下さい。『内調』や『C・V・U』が力になります」

「うむ。その気持ち、有り難く受けておくよ。それよりも御山の事、くれぐれも頼んだぞ」

「心得ております。阿闍梨様や座主様、それに真の八咫鏡は命に代えても必ずお護り致します」

佐々木は、覚悟を決めた眼差しで答えた。

「じゃが命だけは大切にな」

李は、佐々木の身を気遣った。

「有難う御座います。老師もお気を付けて……。恭也君の事を頼みます」

佐々木は手を伸ばした。

李と佐々木は、堅い握手を交わした。

李との挨拶を終え、佐々木は獣吾にも手を差し出した。

「獣吾君、老師や恭也君の事頼んだぞ」

獣吾が、差し出された手を力強く握り返す。

「ああ、分かってるよ。オッサンも命だけは大事にしろよ。何たってオッサンはただの人間なんだからよ」

「ああ、そうするよ。だが君も不死身と言う訳では無いのだから、命だけは粗末にするんじゃないぞ」

そう言って二人は挨拶を交わすと、互いにニヤリと笑った。

「慈海、御山の事頼んだぞ……」

李は、慈海に向き直って言った。

「任せておけい。儂もまだまだ現役よ。儂の実力を知らぬ訳ではあるまい。座主様と真の八咫鏡は、儂がしっかりとお護りするわい」

慈海はそう言って胸を叩いた。

「お主との決着がまだ着いておらぬ。それが着くまでは、決してくたばるでないぞ」

「応よ！　お主に勝って、お主の奢りで溺れ死ぬまで酒を飲んでやらねばならぬからな。それまでは死なんよ。それに儂は、悟りを開く為にはまだまだやり残した事や欲が多過ぎてな、それらを全て叶えてからでないと悟りを開く事が出来ぬ。だから今は死ぬにも死に切れぬのよ」

慈海が笑って言った。

「ふん、お主の様な生臭は、永遠に悟りなど開く事は出来ぬわ」

李がいつもの悪態を付く。

「へっ、お主こそただの助平爺の癖に良く言うわい。その老い先短い命を、無駄な事で擦り減らすでないぞ」

慈海も、笑って言い返した。

「ふん！」

「へん！」

二人は互いに鼻を鳴らした。

互いの目が笑っている。

だが、その笑顔の奥には、覚悟を決めた者の厳しさと、それを知りながら敢えて顔には出さぬ者の悲哀が微かに浮かんでいた。

6

6

それは、嵐の様な記憶と情報の波であった。

まるで怒涛の如く押し寄せる情報の津波である。

如何にこの数十年間の歳月が激動の時代であったか、その情報量が如実に物語っていた。

社会情勢・政治・経済・科学技術は劇的な発展と変貌を遂げ、それに伴い人間の倫理・道徳・価値観・流行の全てが大きく変容していた。

もしも人間が、これ程の情報や他者の記憶を一度に植え込まれたら、脳細胞が異常をきたし、確実に精神が崩壊してしまうであろう。

異常な復元・再生能力を持つヴァンパイアでさえ、この急激な情報の移植は、脳を崩壊寸前まで追い込み、堪え難い苦痛を被移植者に与えた。

実際に、“語り部”による情報と記憶の移植を初めて体験する『屍鬼』の中には、脳や精神及び肉体がその負荷に耐える事が出来ず、精神が崩壊し処分される者も少なからず存在した。

またその負荷に耐えた者達の中にも、自らのアイデンティティを見失い、心のバランスを崩す者が続出した。

「オオォォォ……」

夜叉姫は、畳の床に顔を伏せ、身体を小刻みに震わせながら低く嗚咽を漏らしていた。

本来であれば昨夜の内に、しかも一番最初に“写し”を受けてしかるべき身分ではあったが、昨夜光牙から御子神恭介の裏切りと既に死亡した事実を聞かされ、あまりにショックを受けたのと同時に、“写し”によりその事実を自分の記憶として認識するのを頑なに拒んだ為、他の者に順番を廻し一日おいた今夜“写しの儀”行う事になったのである。

しかし、昨夜に比べ多少の落ち着きは取り戻していたものの、“語り部”からの情報の移植による精神及び肉体的な負荷は予想外に大きく、何より自分が永き眠りに着いている間に、最愛の男である御子神恭介が我が眷属を裏切り、その罪により弟の手に掛かって死亡していた事実、そしてそれが、父である闇御前の命令であったと言う事実を、自らの記憶として改めて認識した事が、夜叉姫の更なる激情を招きパニックを引き起こしていた。

つい先程まで父を呪い、弟を怨み、更には何も知らず眠っていた自分への憎しみから、全てを呪い、怨嗟の言葉を吐きながら長く伸びた爪で自らの肌を毟り、肉を刻り、伸びた牙で唇を噛み破り、夥しい量の血を撒き散らしながら、まるで暴風の様に荒れ狂っていたのだ。

実際、夜叉姫の乱心を諫めようとした子飼いの『屍鬼』達は、皆ボロ布の様に引き裂かれ、実に八人もの犠牲を出していた。

そして今少し落ち着きを取り戻したものの、悲しみに暮れ、未だ咽び泣き続けているのである。

身に纏っていた着物はズタズタに裂け、切り裂かれた着物の間から覗く白い肌には、凄まじい傷痕が見て取れた。

出血は止まり、既に治癒し始めている傷痕もあるが、赤く盛り上がった肉がミミズ腫れの様に痛々しい痕跡を留めている。

周囲では、夜叉姫によって切り裂かれた『屍鬼』達が、傷の手当の為に輸血用の血をグラスに注ぎ飲んでいた。

しかし切り裂かれた八名の内、一人は喉を深く切り裂かれ、また別の者は心臓を突き抜かれ、更にもう一人は胴を真っ二つにされて内臓をどっぷりと畳に撒き散らしながら、実に三名もの『屍鬼』が死亡した。

まだ張り替えたばかりであろう真新しく青々しい畳が、今では夥しい量の血と内臓によって凄惨な場と化している。

数人の男女が、慌ただしく遺体の後始末に追われていた。

この和室は、昨夜“謁見の儀”に使用された広間と同じ階に設けられた一室である。

まさか時を同じくして、この上の階にある茶室にて、闇御前と亡き御子神恭介の忘れ形見である恭也が会っている事など、夜叉姫は勿論、他の誰も知る由が無かった。

「姫様……、お気を確かに持たれませ……」

嗚咽を漏らす夜叉姫の背後から、弱々しく皺枯れた老人の声が聞

こえた。

見ると、部屋の隅で白衣を纏った中年の医師が、老人に何やら注射をしている。

夜叉姫に声を掛けたのは、どうやらこの老人の方であるらしい。

老人は、骨と皮だけになったシミだらけの細い腕に、細い注射器で透明な薬液を注射されていた。

中年の医師は、注射が終わると馴れた動作で“すっと”注射針を抜き、老人に声を掛けた。

「これでもう既に五本目です。幾ら『貴族』でも、一晩に続けて五本も覚醒剤をお打ちになられてはお身体が持ちません。くれぐれも御無理だけはなさりませぬよう……」

中年の医師は、心配そうな表情で老人を気遣った。

「分かっておる。後もう五人程終えたら、残りは明日に廻すとするわい」

老人はそう答えると、手を振って中年の医師を下がらせた。

そして、もう一方の手に持っていたグラスを口に運ぶ。

グラスの中には、一目でそれと分かる赤黒くドロリとした液体が入っていた。

老人は、さも美味そうにその液体を嚥下した。

その老人は、昨夜“謁見の儀”で闇御前に“果心”と呼ばれた“語り部”の男である。

果心は、グラスの中身を飲み干すと、憐れむ様な眼差しを夜叉姫に向けた。

長く伸びた蓬髪は完全な白髪と化し、痩せてシミの浮いた皺だらけの顔は、鼻から下を全て白い髭で覆われている。

普段は、“ギロリ”と剥いた様な鋭く大きな目をしているが、今は優しげに細められ憐憫の色を漂わせていた。

小柄で骨張った細い身体に漆黒の着物を纏い、敷かれた座布団の上で胡座を掻いて座っている。

つい先程までは、本来浅黒い筈の顔が血の気が引いた様に白く青ざめ、喘ぐ様に肩で息をしていたのだが、覚醒剤の投与と血液の補給により幾らか顔に生気が戻りつつあった。

“写し”と呼ばれる情報や記憶の移植は、移植する側に取ってもまさに命を削る程の作業であるらしい。

この“写し”とは、強力なテレパシーにより“語り部”の持つ記憶や情報を対象となる者の脳へ直接移植する作業なのだが、膨大な量の情報や記憶を正確に移植する為に、単にテレパシーだけでは無く、術者である“語り部”の血と呪術を用いた秘術を同時に行う必要がある。

しかも情報伝達の正確さを保つ為に、一人づつしか行う事が出来

なかった。

果心は、『貴族』として生来強いテレパシーを持つだけでは無く、陰陽術などの呪術にも特異な才能を有していた。

それにより闇御前から“語り部”としての任を与えられ、闇御前と共に生ある限り“眠り”に着く事も無く、こうして“眠り”から醒めた同朋達にそれまでの経緯と、これからの時代を生きる為の情報を与える事を責務としているのだ。

「少しは落ち着かれましたかな？」

果心は、再び夜叉姫に声を掛けた。

「果心……、取り乱して済まぬ……。見苦しい所を見せてしもうたな……」

夜叉姫は、顔を伏せたまま力無い声で詫びた。

「いえ、姫様のお気持ちはお察し致します。死んだ者達は憐れな事をしましたが、それも致し方ない事……。ただ……、お気を強くお持ちなされ」

果心は、これ以上咎めるでもなく、静かに、そして強く夜叉姫を諫めた。

「果心……、あの方の事は光牙から聞いておったが、これでだいたいの事は分かった。じゃが……、じゃが私にはあの方の心変わりが今一つ解せぬ。何故にあの方は父上を……、我が眷属を裏切ったのじゃ？」

夜叉姫は、伏せていた顔を上げ、後ろに座す果心へ縋る様に問うた。

「それは私にも分かりませぬ……。私は、これまでに起こった事実のみを語る“語り部”……。奴が我ら眷属を裏切った事は事実なれど、奴の心情を当て推量でお伝えする事は、決して許されぬ事です……。……ただ……」

そう言って果心は言葉を濁した。

「ただ!?　ただ何じゃ？　言うてみよ果心!」

夜叉姫が、髪を振り乱しながら詰め寄る。

「ただ……、ただ奴は、我が眷属の内でも御前様の信頼が一番厚かった者であり、奴自身も義に厚き武人でした。“語り部”の私が私心を語るなどあってはならぬ事ですが、今でも奴が我が眷属を裏切ったなど信じられませぬ」

果心は首を振った。

「じゃが現実は、あの方は我が眷属を裏切った!　それが事実であろう!」

「確かにそうです。真の八尺瓊勾玉を手に入れる際、奴が獣人共の側に付いたのは紛れも無い事実……。ですがそれは、本当に我が眷属を裏切っての事だったのでしょうか?」

「何じゃと?」

夜叉姫が眉間に皺を寄せた。

既に涙は止まっている。

「この度、御前様が真の三種の神器を手に入れようとなさる理由は、“写し”によって姫様にもお伝えした通りです。無論それを阻もうとするは、この国に生きる我らへの裏切りに他なりませぬ。しかし奴が“管理者”の任を賜り、幾ら人間共と親しい関係にあったとしても、奴が人間や獣人ごときの為に我らを……、いや、御前様を裏切ったなど、どうにも納得いきませぬ。この裏には、私などでは考えも及ばぬ途方もない何かが隠されておるやも知れませぬな……」

果心は声を潜めた。

「隠されておる事とは何じゃ？　“語り部”であるそなたすら知らぬ事があると申すか！？」

夜叉姫は声を荒げた。

「無論です。私は起こった事実のみを記憶し、それを相手の記憶として伝え写す事を生業とした“語り部”に過ぎませぬ。目の前の事象として現れぬ事に関しては、如何な私でも知らぬ事はありましょうぞ」

「確かにそうじゃな……。じゃが幾らそなたから写された記憶を辿ってみても、こたびの件はこの国に暮らす我らにとって命運を分ける一大事……。それを阻もうとしたとなれば、如何にあの方と言えど万死に当たる重罪である事は間違いない……。それでもそなたは、この件の裏に何かあると言うのかや？」

「はぁ……“！？”」

果心は、何かを言い掛けた瞬間、微かな気配を感じ、今居る部屋と壁で隔てたられた隣の部屋へ一瞬目を走らせた。

夜叉姫も、果心の視線を追う様に壁へ目を走らせる。

「……いえ、私も確たる疑念がある訳では無いのです。ただ生前の奴の性格からして、ぼんやりと奴の死に疑念を抱いておっただけです。それに今となっては、奴が本当に裏切ったのかどうか確かめる術も無く、実際奴が獣人の側に付いて我らの目的を阻もうとしたのは事実……。ならば御前様の忠臣たる私にとってはそれで十分……。この事で、私の御前様に対する忠心が揺らぐ訳ではございませぬ」

果心は、含みのある眼差しで夜叉姫へ視線を戻すと、本来言おうとした事と違う内容に言葉をすり替えた。

「ふむ……。そなたの申したき事は良く分かった。今そなたが話した事は、ここだけの話にしておく。良いな……」

夜叉姫は、果心の意図を察して話を合わせた。

「はい。ですが姫様、今はこの国に生きる我が眷属にとって存亡の危機。奴の事で御前様と姫様の間にヒビが入りましては、それこそ奴らの思う壺です……。姫様の奴への恋慕の情はお察し致しますが、事実は事実としてお受け止めなされませ。私も自分の推量を軽々しく口にし、“語り部”としての分を超えた事を申しました。どうか姫様も御自重下され……」

そう言って、果心が頭を下げる。

自分が抱いている疑念を隠しての発言ではあったが、これはこれで果心の本音でもあった。

「分かっておる。確かに今は大事の前、そなたも大老”としてのお役目、頼みましたぞ」

夜叉姫は、果心の思いを察してか、凛とした表情を取り戻しすくっと立ち上がった。

「はい……」

果心は、両方の拳を畳に着けて畏まると、恭しく深く頭下げた。

しかし、伏せた面の下では、隣の部屋とを隔てた壁を鋭い眼差しで凝視していた。

その果心の気配を察したのか、壁を隔てた隣の部屋では、一人の男が何やら含む様な表情で立ち上がると、音も立てずその部屋を後にした。

ーーやはり監視がおったかよ……。

果心は、胸中に渦巻く疑念の炎を更に強めていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0594z/

『The vampire Apocalypse』(ヴァンパイア黙示録)

2011年12月24日10時51分発行